
東方大精霊

ティーレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方大精霊

【Nコード】

N0360S

【作者名】

ティーレ

【あらすじ】

気付いた時、空を見上げて空中遊泳してました。

気付いた時、妖精でした。

気付いた時、友人ができました。

気付いた時、失いました。

気付いた時、現実って悲しい。

それでもきつと、生きていくんだろう。

この終わりになき、残酷で美しい理想郷を

妖精と再誕（前書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんわ。

本日は本作品をクリックいただき、誠にありがとうございます。

鼯と白雪に感化された結果です。

目に毒にならない程度にお楽しみください。

初めの方は随分文字数が少なく、読み応えが無いかもしれません、耐えろ！ とは言いませぬ故。むしろ呼んでくれてありがとうございます。お前ら愛してる！ と叫ぶ人種です。

質問等は聞きたいことがあったらバンバン寄せてください。

妖精と再誕

目を覚ましたその時、広く、青い空を見上げていた。

ぷかぷかと、自分にかかる重力を感じないままそれを見上げていたことだった。

その時はまだ寝ぼけ眼で目を擦っていた。しかし、ふと気付いて寝転がるように下を見たとき、絶句した。

真下にあったのは湖。それもただの湖ではない。異常なまでに澄み切っており、尚且つ海と勘違いするほど広大な湖だ。口を開いたまま何も言えずにいたが、やがて現状に気付いて心から沸き立つ思いを抑え切れなかった。

「はぎゃあああああああああ！！ なんじゃこりゃあああああ
あああああああ！！」

……はて、俺の声はこんなにも高かっただろうか？

「 訳わかんねえ」

そう、どうしようもないまま言葉を一つ漏らした。

こうして目を覚まし、いくつか気付いた事がある。

まず一つ、自分の背中に人ならざる羽が生えていたこと。翼ではない、羽だ。鳥が持つようなものではなく、むしろ虫か何かに近いものが生えていたのだ。

だからと言って自分が虫かと聞かれれば断的に首を振る。ちゃんと手足は二本ずつ、人間のものがあり、自分が虫になってしまったのではないと断定できる。

次に気付いたのはその手足、と言うより体全体の変化だった。前、と言つべきか……目覚める前の自分 と言ついい方は些か変かも

しれないが　に比べて幼子のように若々しく、小さくなっているのだ。それに叫び声も合わせて若返っていると言ふ事に気づいた。ついでに一糸纏わず、と言ふか何も着ておらず、全裸で浮かんでいるのに気付कि、羞恥心から叫びそうになった。寒さで息子は縮こまっている。

「……いやいやいやいや。ない。まじないから」

さて、先程から自分の現状を分析してみるが、何故こうなったか、と言ふ事を考えようにも皆目検討がつかなかった。

覚えているのは自分が19年、日本男子として生きてきたその記憶。母は自分を産んですぐに死んだ。父に関しては聞いたこともない。どうにも駆け落ちして両親はどちらも縁を切られたらしく、更に父と別れた母には身寄りが誰もいなかった。

そうして孤児になったらしく、自分はお世辞にも普通とは言えない人生を歩んでいたはずだった。

「……あ、大学のレポートの提出明日だった」

ふと思い出したのはここに来るまでに通っていた大学の事、半ば無理に体験入部させられたオカルトサークルの部員として昨日は妙に掃除もされていないボロけた神社に行ったのだ。名前だけはどうしても思い出せないが、もしかしたらそこで好き勝手に写真を取りま

くった罰、なのかもしれない。

「んなあほな……とも言えないのか？」

やはり考えても確証は得られず、現状を打破することが最優先なようだった。

今はぶかぶかと浮かんでいられるがいつぼっちゃん湖に落ちてしまつか分かったものではない。早い内に何とかする必要がある。

作戦その1、手足をじたばたしてみる。

……変化はなかった。ちょっと惨めな気分になる。

作戦その2、空を泳いでみる。クロールで。

……あんまり変化なし。

作戦その3、背中の羽に頼ってみる。

これが一番なのだろう。それに慣れていたのならば、だが。生憎羽人種第一日目。それどころかまだ数分。なのだ、羽の扱い方など知ったことではない。

こうなってしまうって感覚に頼るしかない。あの空を翔る鳥を思い……だ……せ？

「よく見るといつぱいいるーっ！！」

見上げてみればいつの間にもやら空を埋め尽くすかのように沢山の羽人が空を舞っているのだ。あるものは蝶のように。あるものは鳥のように。あるものはアクロバティックな動きを。っってお前らは天才児か。

だがそいつらを見ていて勇気が出たのは確かだ。と言うより悠々過ぎて自分でも出来るような気がしてくる。手足を放り出し、羽に意識を集中する。言うなれば背中にも腕が二本あるような状態だ。どんな状態だ怖いわ。

とにかく羽を使用すれば飛ぶことが出来るはずなのだ。

具体的には手をグーパーする要領で。だが中々上手くいかず、それからもしばらくの間空を漂っていた。心なしか高度は下がってきている気がする。

「……よし、オーケー？ 俺は飛べる。I can fly・Yes・I can fly！！」

全身に力を込める。一工程を行う動作ではなく、言うなれば怒りを堪えるかのような感覚。

しかし、内心では飛べーっ！！ 飛べーっ！！ と引き絞る思いで目を硬く閉じている。若干知恵熱も湧いてきたかもしれない。そうしていて不思議と羽の感覚が冴えていく。

何と無くだが今なら飛べそうな気がする。さあ、羽を動かせ！！
……いや腕じゃなくて。

ようやく羽ばたく小さな羽。涼しげな風が頬を撫でるのを感じた。
見た目は大分弱弱しいその羽は万有引力もなんのそのと言った感じ
に俺の体を天に押し上げていく。

空を縦横無尽に飛び回っている童達すら追いついて。次々と視線が
俺に集中していく。

これは恥ずかしいぞ。これからの集団活動に影響を及ぼしたりした
らどうする。

そんな事を考えながらもだんだんと登っていく。そろそろ降りよう
かなと思ったとき、眩しさを感じた。それを感じる方向へと目を向
ける。

たった今、日が没するその瞬間だった。

高い高いその場所からは果てしない自然が広がっていた。森があり、
山があり、海があった。

美しい、不覚にも、そして馬鹿らしくもそう思った。

ここは何処で、自分はどうなってしまったのか。全く検討もつかな
かった。

だがあの時、あの神社でした唯一の願い事を思い出した。

出来るならば、可能ならば

全てをやり直したい、と

今この現状がああのお寺の神様のおかげなのか、それとも胡蝶の夢なのか。

どちらにしても、今この瞬間だけは、自らが『生きている』事を実感できた。

自分の友人達、孤児院の人たちがどうなってしまったのか。今となつては知る由はない。こうなってしまうては仕方ないと、言い訳じみて聞こえるのかもしれないが、少しばかり早い二度目の人生、生きていってみよう。

そう、心に刻み込んだ。

「……それにしても、どろちゃって降りたらいいんだ？」

妖精と再誕（後書き）

第1話の閲覧ありがとうございました。妙に短いかもしれませんが、始まりはいつも突然に、まあそれとなく始まりの雰囲気を作ってみました。

分かる人なら主人公の前世の立ち位置がなんとなくわかるんじゃないかと思います。

ともかく主人公にギャグ風味を付け加えたかった。反省はしていない。

ハーレムはないな。ある意味ハーレムって選ばれた人以外はBAD ENDですものね。

最終的には主人公が超チートキャラになる可能性大です。注意してください。

追伸、20110421

妖精は基本的に群れないらしい。でもここは時代の違いで群れるようになってる。

……ええ、矛盾の理由付けです。もっと早くwikiを見ればよかったです。

妖精と妖怪（前書き）

改めて自分の文才のなさに泣けた。

と言うか今更ながら思うが原始じゃ原作知識なんかあつてないもんじゃん。

妖精と妖怪

あれから早くも一週間が経過した。

たったの七日では現状に慣れ親しむことなど出来るわけもなく、俺はその日もまた群れを離れて一人特訓に勤しんでいた。群れ、と言う物言いは自虐に近い物を感じるときはあるが、まあそも通りなのである。

今の自分の姿となんら変わりない姿をした妖精　いつまでも羽人と言う呼び方もどうかと思つて　達とは別行動をとつているのだ。先も述べたが自分も妖精達とほぼ同じ背格好をしている。

しかし、差がいくつが存在した。特に秀でた特徴の差は髪と目の色である。妖精達は皆緑、もしくは青い髪をしていた。だが自分は違う。髪は白　と言うよりは白銀かもしれない　く、目は茶だった。その差の理由は分からなかったが、自分が前世に近い記憶を持つていることが少なからず関係しているのだろう。

あと他の妖精は皆衣服のような物を纏っているのに自分だけ全裸なのだ。こればかりはどうしようもなく、羞恥心を招いた。

この七日で妖精達に何度か近づいてみたが、特になんと言うこともなく受け入れられた。その変わりに光りの弾のような物を飛ばされたり追い掛け回されたりした。どうにもそれは日常茶飯事の事らしくなんび　何人が撃墜されるのを見た。だが数分後にはケロリとして飛んでいるのを見てびっくりした。別にそっくりさんと言う訳

ではないようだった。

それを通してもしかしたら余り痛くないんじゃないかと思って試しに当たってみたがこれがもの凄く痛くて片腕が飛んでいった。いや、比喩表現ではない。実際左腕がもげて激痛から気絶したのだ。二度目の人生はやくも終わりかと泣く泣くブラックアウトしたが、目を覚ますと再び青空を見ながら四肢が無事な状態でぶかぶかしていた。おいこら、コンティニューか。

以下のことからどうにも死んでも 実際死ぬ程の怪我はしてないが 再生できるようだった。だがそれでも痛いだけはごめんなので一発も当たらないようになってからそのうち混ざりたいと思う。

さて、この短い期間でやはりこれが夢ではないと実感しながらも自分は飛行練習に励んでいた。人生を生きてきて羽など初めて生やしたのでいかんせん勝手が分からない。どう羽ばたけばどう飛ぶのか分からないのだ。こう言うところは本能に期待したかったのだが、然もあらん。

何とか形にしていき、無理な軌道も試してみたが宙返りの後に湖に in した。気付いたら湖の上に浮かんでいた。おい、スペランカーか。頼むから最弱の存在として再誕したなどと言う事は勘弁して欲しいものだ。ともかく無理な軌道を描かなければそれなりに早く飛ぶことができるようになった。

しかしどうにも自分が他の妖精と個体としての差があるような気がしてならなかった。

他の妖精に話しかけたりなんてことは何度もしてみた。しかし帰ってくるのは全て理解ができない言葉だった。自分は日本語で話して

いるのだから向こうは妖精語でも話しているのか。身振り手振りで
はさっぱり話が分からない。

飛行を一通り終えた俺は次にあの光の弾の出し方を練習してみた。
とりあえず今はこれを妖力弾　妖精の力の弾　と呼ぶことにし
た。この妖力弾は偉く苦労した。出る出ると思ってみせてもうんと
もすんとも言わず、困難を極めたと言ってもいい。何時間もそれ一
つを求めて特訓した。そして、疲労が限界に達し、最後にもう一回
と思ったとき、自分の中にある何かが湧き出したのだ。

目には見えないが空気が揺らぐ感覚。今の今まで感じていた疲労が
嘘のように消え去った。言うならば、そう。自分の中の秘められた
力が……

考えた瞬間顔を覆い隠し厨二病乙と叫びながら俺は空を駆け巡った。
痛い。痛すぎる。

とにかく俺はこれを妖力と仮称し、訓練に用いることにした。これ
を身に纏ったりしている間は身体能力的なものが増強されるのだ。
界王拳と叫んだ俺を誰が咎められよう。

妖精達には少し冷たい目で見られたけど。

そうして訓練訓練と時間を食いつぶしてみると腹が減らないことに
気付いた。眠気もない。どうも人間の欲はカットされてしまってい
るようだ。しかし疲労はある。然もあらん。

だが状況の変化にストレスを感じるのが人間である。一度心のまま

泣き叫んで暴れまわってみたがなんと言うことが。小山が一つ丸裸になってしまった。住んでいた小動物の皆さんすいません。

そうして一週間と言う一つの区切りを迎えたとき、それは唐突に現れた。

それはいつも通り、寝覚めの体操をしていた時のことである。体が柔らかくなっており、柔軟がやりやすくなった、と言うのは簡単な余談だ。

「？ なんだ？」

聞こえたのは妖精達のざわめきである。自分も一つの妖精コミュニケーションとして所属しているからか他の妖精の状態をなんとなく理解できる。余程の事が無い限り気付かないようカットしてあるが。

だがそれはほぼ同時に感じられた。同時に複数の妖精達が撃墜されていった。目を向けてみるとそこには人並みの大きさの鳥がいた。いや、鳥ではない。自分達と同じように背より翼を生やした物。容赦ない攻撃を妖精達にばら撒き、楽しそうに笑っていた。

はてさて、自分はこの時どのような行動をとれば正しかったのか。

いくら再生するからと言ってあれほどまで容赦のない攻撃をする理由はない。アレは娯楽で妖精達に攻撃を仕掛けているのだ。コミュニケーションとしての繋がりから悲鳴が届く。

痛い。痛い。怖い。怖い。イタイ。コワイ。イタイ。コワイ。

気付いた時、自分はその場へと急行し、横槍をいれていた。正確には小さな妖力弾をソレに向かって撃ち放ったのだ。何故かと聞かれて正義心と答えることは無い。延々校長のありがたい話を聞かされるよりうっとうしいそれを遮断したかったから、としか言いようが無い。一応他人事とも言えない訳だし。

まさか予想を越えた反撃をもらうとは思わなかったのか、不意を突かれたように間一髪で避けていた。そしてこちらを見たとき、一瞬

驚きからか目を剥いたが、すぐに怒りを滾らせたものへと変化した。

「……妖精風情が私に攻撃を仕掛けてくるの？」

「こりゃ失礼。手が滑りましたよっ」と

こちらを鋭い眼光で睨んでくるその者の姿形は女性だった。背中に黒い翼を生やしており、言うならば昔話の天狗、が一番それに近いかもしれない。鼻は長くないが。

こんな状況じゃなければ紳士的に話しかけてよい関係を築きたいとも思ったけれども今となっては仕方ない。

そして、なんとなくだが分かった。向こうの潜在的な力量はこちらとは比べものにならない。元々こっちはちっぽけな妖精だ。言うては悪いが腐るほどいる。

「失礼ながら、俺達に攻撃を仕掛けてきた理由は？」

「理由？ 弱者を圧倒し、屈服する。その工程に理由なんてあるの？」

明らかにこちらを見下した言動。どうにも奴やつさんは自分が一番じゃなけりやおさまらない気質らしい。

そう言うことならば選択肢は絞られる。元々対話は得意分野じゃないし、まあ喧嘩が得意と言うわけではないがガチンコで勝負したほうが今は助かる。

「そうですか。んじゃ、試してみますかい？ 窮鼠が猫を噛む瞬間
つてものをさ」

「ほざけ妖精！ お前程度のちっぽけなものが妖あやしに挑むなど。身
の程を知りなさい！！」

それが始まりの合図であるかのように女は手から妖力弾を放出する。
それも一つや二つの話ではない。数え切れないほど無数の弾だ。

いきなりのことに驚きながらも妖力全開で光の弾をかわし、逸らし
ていく。一つ一つはそれほど早い訳でもなく、ギリギリながらも回
避することができた。

「おのれ、ちよこまかと！！」

「……これしか能がないもんでっ！！」

「小賢しいぞ妖精風情が！！」

「おうおう。天下の妖さんはたった一匹の妖精も打倒できないんで
？」

「っ、きつさまああああ！！」

弾を撃つのを止めてこちらに殴りかかってくる。流石に手をパンパ
ンと叩きながら挑発したのは拙かったかもしれない。しかし逃げ場
所トが広い限りは攻撃に当たる気がしない。殴り合いに慣れているわ
けではないが、恐らく当たらないだろう。ほぼ紙一重と言える差で
避けていく。危ない橋過ぎて今からでも渡るのを止めにした。今
顔掠った。怖い。

「さっさと落ちなさい！」

「痛いのはご遠慮でござんす」

「落ちろ！！」

「だが断る！」

「死ね！！」

「何故に飛躍されたし」

我ながら無駄に口が回る。おかげで何を言っても敵さんは止めてくれる様子はない。余計なことを口走りすぎたかもしれない。これを終わらせるには疲れるのを待つか、それとも勝つかの二択しかないだろう。前者や逃げるなどと言う選択肢は自分が先にスタミナが切れるのが落ちだろう。我ながら推奨できない。

そう来ると反撃以外の手が残されていないが、自分には攻撃方法も一択しかない。即ち、妖力弾。威力は保障済みだ。なんせこれ一つで木をへし折るほどの力があるのだから。

チャンスは一度。二度目以降は相手に避けられるだろう。となればカウンター気味な攻撃になる。博打もいいところだ。あまり俺は好きじゃない。

「落ちなさいって、言ってるじゃない！！」

「But, refuse!!」

敵が殴りかかってきた瞬間に妖力を集中し、女の視界の外へと脱す

る。

そして手に溜めた力をそのままから空きな頭に叩き込む。まるで石と石がぶつかったような音が響いた。

ぐらぐらと揺れるその女性の体はやがて落下を始めた。俺がハツとしたのは大きな音を立てて湖に落ちた瞬間で、俺は慌てて湖に突っ込んだ。

だんだんと沈んでいく女性を抱え込んで浮上し、一番近い陸地に下ろすが、目を閉じたままピクリともせず死んでしまったのではないかと思った。しかし、正常に上下する胸に安堵の息をもらした。よく見ると女性は美人だ。見た目は二十歳に届かぬだろう黒い髪に整った容姿。よくいる黙っていれば綺麗な人に違いないと思った。

目を覚ましてすぐさま殴られた。痛い。

彼女曰く鬱憤が溜まっていてそれを妖精で晴らしたかったのだと言う。まあ妖精死なないみたいだしね。でも痛いから勘弁してあげて、と言うことだけはそれとなく伝えた。流石に頭が冷えたのか黙って話をしていた。

「それにしても、アンタホントに妖精なの？ アンタみたいなのは初めて見たよ」

「どうにも妖精みたいです。他の皆より若干恵まれてそれが幸か不幸かを左右してますが」

「ふうん。あたしは烏天狗の真可^{まか}」

その問いに答えようとして浮かんだのが人としての名だった。よくよく考えてみれば第二の人生（？）など言いながら名前の一つも考えてはいなかった。まあ今まで必要なかったと言う理由もあるが。

「どうしたの？ まさか名前がないのかい？」

「……お恥ずかしながら」

「仕方ないね。じゃああたしが考えてあげるよ」

「ご遠慮します。と言いたかったがまた殴られそうだなかなか言えな

かった。変な名前だったら嫌過ぎる。しかしこの女性も話してみれば中々気さくなものだ。最初は貴様！　　つとか妖精風情が！　　つとか言われたのに。

「よし、アンタは舞風^{まいかぜ}だ。風みたいに舞うように攻撃を避けてたから」

「そんな安易な……いやいやいやいや。文句なんてないです。全然ないです」

よし！　　笑う女性は年齢不相応に幼く見えた。

こうして妖精である俺、舞風に始めて妖精以外の知り合い、真可ができたのであった。

妖精と妖怪（後書き）

よく他の東方SSで何千年生きたりする作品があるけど、人間の頃の記憶残して置けるとか無理ではないだろうか？

まあ妖怪だから頭の中身がとんでもなくなってるという解釈もとれるのだけれども。

今回、主人公は妖精です。妖精ってなんだかんだですぐ攻撃してきたりするのであまり頭がよくなかったり、もしくは記憶力がかなり悪かったりするんだろうなあと思いました。

文中のコミュニティーですが、妖精が死なないのは湖のなにかの加護を受けているからだと言うことで自己完結しました。

これからも能力なりなんなりで自己設定飛び出しますが、温かい目で見てやってください。

因みに「But, refuse」の意味については適当にググってみてください。

妖精と能力（前書き）

再編。元々2話あった部分を繋げ直したただけなので、面倒な方は読み直す必要ありません。

さて、こうして前のを振り返ってみるとそれなりに違和感を感じる
と言っ……

妖精と能力

「ま〜い〜か〜ぜ〜っ!!」

「はいはい。今行きますよ」

改めまして、舞風です。早いことに、自分が生まれてもう一ヶ月が経とうとしている。

味方をやっつける妖怪を追い返して俺ってば人気者!! と言
う展開をあわよくば予想していたのだが、実はそうでもない。むし
ろ受け入れがたくなってしまったようだ。

自分以外の話なので本当は何とも言えないが、妖精は記憶力が悪い。
それも格段にだ。昨日あったことを覚えていなければいいほうで。妖怪
をやっつけたのが自分とは覚えてもらえなかったのだ。お前ら頭の
中は年中お花畑ですか？ それは俺か。

オプシオンに痛みがあるせいか、真可を覚えている者の方が多く。
妖精達にしてみれば俺は「自分達を攻撃した妖怪と一緒にいる奴」
と言う立ち位置らしい。だからといって真可との付き合いをやめな
かったせいか、どうにも嫌われてしまったようだ。コミュニティー
に帰ろうにも一人覚えてればそれがだんだんと広がり、追い出され
る。出来れば妖力弾は止めて欲しかった。

そうなってしまうと今までどおり湖で一緒にぶかぶかと浮かんで寝ることも出来なくなり、しぶしぶ山の上で一人孤独に寝ることになったのだが、それをよしとしなかったのが真可で、俺はほぼ強制的に真可のねぐらに連れて行かれた。

どうにも俺は真可の中でも上位に位置する面白い奴らしい。高評価を受けるのはありがたいが、遊びの一巻として決闘が追加されたのは中々に忍びない。そろそろ妖精の人権を持ち出してみようと思う。妖精だからダメなんて言われたら黙って枕を濡らすしかない。

だが、初めてそれらしく語り合うことができる友人ができたのは非常に喜ばしい事であった。前の世界での部員と同じくらい気さくで、時に姉のよう（体格差的な意味で）に、時に妹のよう（知識的な意味で）に接していた。

「準備できたぞ」

「よし！ なら行こう！ すぐ行こう！」

こうして同居に近いことをしておいて、文句はない。しかし、お互い男と女なのがいいのか？ と質問した時、「舞風なら大丈夫！」とお言葉をいただいで嬉しいような悲しいような気がした。そもそも異性だと思われてないのかもしれない。妖精だし。今では服も貸してもらっている（布を直接体に巻きつけるようなものだが）

真可と共に過ごすようになり、山では沢山の知り合いができた。真可と同じ天狗だったり、熊や猫の妖怪 一般的に妖獣と呼ばれるものらしい だったり、最上に居座る鬼と呼ばれるものだ。俺以外の妖精はいない。これなんて疎外感？

当然ながら初めは様々な目で見られた。奇異の目、見下す目、更には敵視の目もあった。しかし、真可が俺を友人だと宣言してくれたお陰でそう言った目は随分と減った。たまに岩が飛んでくるくらいだ。せめて石にしてください。

一週間、二週間と時間が経てば経つほど嫌な目は減っていった。これは大変喜ばしいことだ。皆俺がただの妖精でないことをなんとなく理解したのかもしれない。今度高笑いしながら敬え下郎と言ってみようと思う。

しかし一ヶ月。されど一ヶ月。この一ヶ月で俺の周りの状況は随分と変わっていくのである。

「真可。天正様てんしょうさまが呼んでるぜ？」

そう言ったのは何処からともなくやってきた烏天狗。この山の住人の一人である。名前は知らない。基本的に真可以外は名も知らぬ知

り合いだ。

「天正様が？ なんの用だろ？」

「真可。またなんかしたのか？」

「し、してない！ もう天正様の寝床を吹っ飛ばしたりなんかしてないよ！？」

「……そんなことしたのか」

天正、と言うのはこの山の頂点の鬼のことだ。最初に真可に鬼だと聞かされていたからどんな人かと思っていたが普通に気さくなお兄さんでした。なんでも「皆の力を集める程度の能力」と言う個人に起こりうる特殊能力らしきものを持っているらしい。それなんて元氣玉？

この山で俺に好意的に接してくれるのは天正と真可を含めて片手で数えられるほどだ。皆妖精という格下の存在を好きにはなれないらしい。まあペットのような目で見られるのも嫌だが。

閑話休題。

俺と真可は雑談しながら天正のところへ向かった。彼とはたまに会った時に話をするが、呼び出されるのは始めてである。天正は山の天辺に小屋を構えており、そこに行くまでは飛んでいった方が非常に楽だ。実は入るのは初めてで、真可もそうなのか妙に緊張している。何故か真可を含めるほとんどの妖怪は天正をまるで神さまのように見ている。いや、確かに尊敬できるのは分かる。しかし、ああも恭しく対応するのはやりすぎと言うものだ。

真可が天正の小屋の戸を叩き、中に入る。俺もそれについて行くところには地べたに座り込んだ天正がいた。

「おはよう天正」

「ああ、おはよう舞風くん」

さわやかなスマイルを振りまきながら挨拶を返してくれた。その頭には唯一鬼と呼べるべき角が耳の上辺りから一本ずつ生えており、弧を描いてもう少しでくっつきそうだ。因みに俺が嫌われる理由の一つに失礼だからと言うものがある。天正が気にしてないんだからいいじゃないか。でも髪が白かったから前に白髪って笑ったら凄まじい形相で睨まれた。今後は自重しようと思った。

「て、天正さま。おはようございます。私達を呼んだ理由は如何に？」

「うん。それを今から話すから、そこに座ってくれ」

気性は穏やか。笑顔は爽やか。歩く姿は一流ホスト。これなんて主人公補正？ そんな彼はやはりこの山の天辺なだけあって一番強い。それこそ山の妖怪全てが束になっても勝てないほどにだ。滲み出る妖気は隠し切れず、彼の周りに漂う。真可もそれに圧倒されているのか、それともやはり緊張か。「ひゃい！」、と返事をする。天正の前に座った。因みに俺は怖くない。短い付き合いながらこの天正の人柄を理解しているから。

「さて、話の内容は君達自身のことだ。君達は己の中にある力の大きさに気付いているかな？」

「力……ですか？」

いきなり何を言い出すのかと思ったが真可はまるで心当たりがあるように表情を曇らせた。俺の場合は前世の記憶がある以外は結構普通だと思っただけだ。

「ちよつといきなり過ぎたね。君達は自分が他の皆と違うと思った事はないかい？」

「……はい」

「まあ……たしかに」

「君達は特別に力を持っているんだ。僕と同じような、ね」

「天正様と同じ、ですか？」

今度こそ本気で何を言い出すのかと思った。確かに俺は他の妖精とあらゆる面で異なっているが、力は普通の妖精と差がないことを知っている。

「真可はともかく俺は勘違いじゃない？俺はただの妖精だぜ？」

「そうは言うが、普通の妖精は君ほど頭は回らないよ。言っちゃ悪いが普通じゃない」

オーマイガッ！！何気に普通じゃない発言をいただいでしまった。意外とシヨック。確かに自覚はあるけども。

それにしても天正と同じってことは能力と言うものを持っていると言ふことだろうか？ それを考えると自分にどんな能力が備わっているのか気になったりしている。そこで俺は真可が黙っていることに気付き目を向けた。

「……………真可？」

「っ！！ なんでもないよ舞風」

いや、どう見てもなんでもなくなかった。俯いたまま歯を食いしばり、何らかの感情に震えているようだった。多分怒りではないと思う。

「天正。それは確かなのか？」

「……………絶対、とは言えないと思う。だが少なくともこの山の他の妖怪よりは可能性が高い」

「それで。もしそつだとして俺らに何をさせたいんだ？」

真可が驚いたように俺を見る。天正は驚いた様子はなく、俺を射抜くように真っ直ぐ見た。えっ？ それそんなに驚くこと？

「……………どうして、僕が何かをさせようとしていると思っただい？」

「天正。俺だって短い付き合いながらアンタが戦いをあまり好まない妖怪であることは知ってる。そんなアンタが俺達に力の素養があることを教えるなんて、普通はない。」

それこそ、一人ではどうしようもない敵が現れたりもしない限りは」

その場を沈黙が支配する。天正はその笑みを消したりはしなかった。だがその沈黙がどれほど続いたか分からなくなってから一つ息をついた。

「君は、本当に妖精とは思えないね。意外と僕より年上だったりしないかい？」

「生憎俺は生まれてからおよそ一月のピチピチだ。この山で一番若いぞ」

「それこそ信じられないよ。まあいい。君の言うとおりだ」

天正は嘆息すると諦めたように、語り始めた。

この山からそう遠くない、山を更に二つほど越えた山に俺達とはまた別の妖怪の団体がいるらしい。そこは昔はよく交流を行っていたが、最近は疎遠になっていたらしい。しかし、つい最近そこから使者が来た。

既にその山は他の妖怪に乗っ取られていたのだ。その乗っ取った妖怪の頭領はとんでもない戦闘狂で、使者に、「次はお前達だ。月が満月を描くとき、それを命日だと思え」的な伝言がきた。つまり、そう遠くない未来に敵がやってくるのだ。どうも相手方の頭領も天正と同じ鬼らしい。

逃げるにはその先がない。迎え撃つには戦力が足りない。どうしたらいいかと頭を悩ませ苦渋の決断ながらこれを選択したらしい。

「一応聞くけど、勝算は？」

「……ほとんど、ない」

天正の無表情に近い表情を見て、俺はため息をついた。

彼はいい鬼だ。いや、優しい奴だ。だからどちらかと言ったら多分人の上に立つ器じゃないんだろう。誰だこいつを鬼なんて言った奴は。まあ確かに鬼だけでも、こいつはいい奴だから。背負ってしまう。この山のリーダーとしての責任を。

「ま、どちらにせよ。何もしないわけにはいかないか」

「舞風くん……」

「だけど、あんまり過度な期待はするなよ。俺はある意味限界値が低いんだからさ」

「私も、私もやります！ 舞風がやるなら、私にできることがあるのなら」

俺達の答えに天正は笑顔で頷いた。今日この日より、逃げ回るためではない、戦うための特訓が始まったん。

痛く無い程度に頑張ろうと思った俺は悪くないと思いたい。

○ ○

アレから数日後、訓練が想像以上に激しくて二回くらい死んだかと思いました。まあ妖精だから死なないんだけど。

あれから侵略者の話は山中に広がった。俺が口を滑らせた訳じゃありません。天正が公言したんです。

次の満月の時、近隣の山の侵略者が攻め込んでくる。各々で準備を怠るなどのことだ。それからは山はいつも以上に活発になる。まるで山中お祭騒ぎだ。やってるのは訓練だけでも。

あれから訓練の賜物があつた。とうとう能力が発現したのだ。真可のだけだ。

彼女曰く、「譲渡と譲受けいじゆとけいじゆを操る程度の能力」だそうだ。これもまた天正のものより質が悪い。

天正の能力、「皆の力を集める程度の能力」には発動条件がある。それは力を収集する相手に信頼的な感情を抱いていることだ。この条件から敵や天正が会ったばかりの者からは力を集めることができない。

しかし、真可の能力は違う。これはある意味無感情なビジネス的なものに近い。信頼などの感情は必要あらず、肯定の有無さえ伝えてくれれば誰でも対象にできる。譲渡もまたしかり、自分が相手に譲り渡したいものを自己完結で譲渡できるのだ。だが、この能力の一

体何が質が悪いのか？

それは天正のものとは違い、力以外を対象に出来るからだ。つい最近実験を称して真可の能力の訓練を手伝った時、彼女はなんと自分の足の怪我を譲渡しやがったのだ。すぐに再生する俺だからよかったものを。だがこれが戦闘に役立つのもまた確かである。なんと言っただけで自分の怪我を治し、尚且つ相手に怪我を負わせるのだから一撃で昏倒でもさせない限り、彼女に勝つことはできない。

そう思っていた時期も、まああったっちゃーありました。

「ほらほらほらー！ー！」
「待つ！ ちょっと待った！ー！」

朝早くから俺達は戦闘訓練 を称した遊びに夢中になっていた。

皆訓練に勤しんでいるのか、前みたいに見かけることが少なくなつた。今では毎日真可と一緒に訓練漬けだ。真可も寂しいのかたまに

そんな感じの顔になる。

真可は能力が発現して以来、俺に負けなしの戦績を誇っている。全く、感服でござる。はてさて、そんな俺は能力の発現する予兆すらない。とは言っても真可に予兆があった訳でもないのだが。

天正の話を聞いてみるとそもそも能力はふと頭に浮かぶものであり、発現自体いつになるか分かったものではないらしい。しかし、天正はそれを滝に打たれて瞑想した結果によって現れたと言っている。アンタは一体何者だ。

そういう訳でハードな特訓さえすればそれに近いものを得られるかもしれないとのことと結局は毎日訓練だ。筋肉痛がないのだけは救いである。そう言えば筋肉痛がなきゃ筋肉が発達しないんじゃないやあ

……

まあそんなどうしようもない事を考えながらも真可の視界を埋め尽くすほどの妖力弾が迫ってくる。最近彼女は俺に恨みでも抱いているんじゃないかと最近思い始めてきた。それでもなきゃこの弾幕はハード過ぎる。痛いものは痛いんです。ハッ！もしかしたらこれは巷で噂のヤンデレか！？ そうだったのか！ 謎は全て解けた！！

「舞風、次で終わりにするよ！」

「って、んなわけねえですよね〜」

真可の宣言の直後、俺の体が一気に重くなる。真可の能力で疲労などをモロモロプレゼントされたのだ。俺はDM気質じゃないのでぶっちゃけいらぬ。そして、動きが鈍ったその瞬間に一気に畳み掛

ける。それが真可の仕留め手だった。

くどいようだが、当たっても痛いだけだ。まあかなり至上のごとき（嫌な意味で）痛みなのだが。最近は再生するのが早くなっていた。しかも湖の上に浮かぶのではなく、倒された場所で寝そべるようになった。

俺はとうとうあの湖から追い出されたのかもしれない。なんだこの自分だけ授業参観で親がいない気持ち。馬鹿なの？ 死ぬの？ 現在進行形で死にそうです。主に俺が。ああ、またか。また服を着失うのか。いくら見た目10歳以下の子供の体だからと言って俺の裸体を直視するのだけはもう止めてもらいたい。

嗚呼、目の前が真っ白に

「だから痛いのはいやだって言っただろっがーっ！ー！」

”封を操る程度ふうの能力”

気付いた時、やはり俺は寝そべっているのかと思いきや、先程の風景がそのままあった。真可が驚いたようにこっちを見ていた。

あん？　もしかしてもしかしなくても今のつて……

「こうして俺の能力、「封を操る程度の能力」は発現したのであった。



「封を操る程度の能力」、それは真可や天正の能力とは全く違った。例えとするならば天正や真可の能力を行動としよう。俺の能力はそれを止める。その為の能力だ。与えることができず、止めることしかできない。

言葉の一つとして、封印と言うものがある。それを意識してもらえばいい。俺の能力とはありとあらゆる行動を妨害できるのだ。指先一本止めることから飛んでくる弾丸を止めることまで。

ぶつちやけ俺も一応は喜んだ。真可に関しては狂喜乱舞するほど喜んだ。いやはや、こつも喜んでもらえたならば痛めつけられた甲斐が……あるわけでもないか。

因みにさっき真可の攻撃を防いだのは一時的に俺と言う存在と外の空間との間を封じたから。ようするに簡易結界と思ってってくれて構わない。なんとと言う素敵パワー。これからも俺を守ってください。

「やった！ これからはもっと本気で攻撃しても大丈夫だね」

能力と引き換えに氷河期並みに厳しい世界に突入だ。現実って厳しい。

幕間（前書き）

最近ネタに走りすぎな気がする。後悔と反省はしている

自動車教習の路上でエンストは軽く焦る。

幕間

能力が開花し、一躍山の中で五本に入った俺は超有名人に……
なんてことはなかった。

と言う訳でいつも通り、激鬱な舞風です。誰か俺に苗字をください、
となんとなく世界の中心で愛の変わりに叫んでみたくなった。でも
止めておこう。能力発現以来酷くなった俺を見る目をこれ以上増や
さないためにも。

うん。なんとなく嫉妬からこんなことになるんじゃないかと思っ
たりはしてました。でもまあそんなに酷くないだろ、と樂觀視してま
した。

今、五人くらいの妖怪に囲まれています。因みに俺は全裸です。服を
着忘れしました。ナチュラルに服を着ることを忘れるようになった自
分に絶望しながらこうなった回想を試してみようと思います。

……ごめん。やっぱり無理っす。だって俺今起きたばかりですもん。起きて、真可がいなくて、仕方ないから散歩してたらこうなったとしか俺は言えません。

俺の周りからは妖精のくせに生意気だ、とかあの湖の妖精が能力なんか使えるわけがない、なんて何処か聞き覚えのあるフレーズの会話を繰り返しています。ああ、分かった。要約すると『ちょww妖精のくせに生意気なんですけどww』ってことだな。うん、よく分かった。

「ところで俺はいつになったら散歩を再開できますか？」

「黙ってる妖精風情が!!」

交渉は三秒で終わりました。ネゴシエーターを要求します。メカデウスはいらないから急行してください。自分で言うのもアレだが確かに自分はただの妖精なので妖力的な意味で圧倒的に劣る。でも常時リレイズ状態です。

それはさておき、俺はこんな男共に囲まれて喜ぶような男色家はありません。早々とんずらこきたいと思いません。

「彼奴らの体の動きを封ず」

「あん？ なに」

と、喋りかけのまま言い争っていた男達は停止しました。俺の能力、「封を操る程度の能力」ならこれくらいは晩飯前です。朝飯じゃありません。晩飯です。ここ重要。一人なら朝飯なんだけど。

そんな訳で停止したままのお兄さん方を放って散歩を再開しようと思います。ああ、本日も実にいい天気だ。

「言ってるん……あ？」

おっといけない。能力が解けてしまったようだ。さっさとスタコラサッサするんだぜ。

「どうしてこうなった」

「行くよ、舞風君」

俺の対面に向かい合っているのは口調もとい呼び方で解かるだろうが天正だ。散歩を続行、もとい暴漢から逃げていたところでたまたま出くわして助けてもらった。さすが天正！ 分かってる！ そこにシビれる！ あこがれるう！！

なんて思ったのも束の間、追われていた理由を話すとあら不思議。

おにのてんしょうが現れた。

おにのてんしょうはほほえんでいる。

まいかぜはにげだした！

しかし、まわりこまれた。

微塵も勝てる気がしない。微塵も勝てる気がしない。重要だから二回言った。これから俺に残された選択肢は撲殺、絞殺、滅殺だ。最後が分からない？ 察してください。

今俺の目の前では天正がニコニコと微笑んでいる。しかしそれに騙されてはいけない。よく見る。あの目は心から楽しそうだ。まるで得物を狙う猛獣のようだ。天正！ 信じてたのに！ アンタだけは戦いを好まないいい妖怪だと信じていたのに！！ 裏切ったな！ 僕の気持ちを裏切ったな！！

天正が一步を踏み出した。心なしか山そのものが震えた気がした。とんでもないプレッシャー。いまそれが俺の肩にのしかかっている。なんでポケモンののしかかりはマヒ効果を催すんだろうと非常にどうでもいいことを考えた俺を許してくれ。

二歩目を踏んだ。その瞬間俺は全意識を天正に集中させた。

「動きを封ず！」

しかし、MPが足りない。

燃費の悪さに全俺が泣いた。

「じゃ、じゃあ足だけを封ず！！」

俺の願いが届いたのか天正の足は止まった。なにやらもの珍しそうに自分の足を確認している天正を見て今こそ逃げるチャンスだと心の底から理解した。強張る足を叱咤し、踵を返して走り始める。しかし、すぐに前のめりに倒れた。背中から何かの衝撃を受けたからだ。恐怖を感じながら振り向く。

そこには足は二歩目を踏み出したままの天正が中に浮かび、手をこちらに向けておられました。

知らなかったのか？ 大魔王からは逃げられない。

天正の目がそう語っていた気がしました。それからどうなったのか、私はいまいち覚えていませんでした。

「天正。俺記憶がないんだけど。何で裸でこんなところに寝そべってるか理由だけは聞かせてくれないか？」

「本当に聞くのかい？ 後悔するかもしれない」

「いえいえいえいえいえいえいえいえいえ。やっぱりいいです」

山は今日も平和です。

幕間（後書き）

既に今から主人公のスペルカードを考えている自分に絶望した。
—
体何話先だと思っているんだ俺。

嗚呼、中二病的妄想が頭を駆け巡っていく。

とりあえずレーザーは欲しいよね。

妖精と作戦（前書き）

最近一ページ一ページが少なくなっていく……

もう少し一ページに時間をかけるべきかな……

特に今回の話は短くなっています。

妖精と作戦

おはよう。こんにちは。こんばんは。舞風です。

突然だが俺はそれなりに我慢強い人間、もとい妖精である事を自負しています。何故ならばと聞かれれば朝起きれば真可と訓練に励み、その後散歩に行けば怖いお兄さん達に絡まれ、その後たまたま散歩中の天正と模擬戦し、帰ると再び真可と訓練し、その後能力の活用法やら道端の山菜を真可と一緒に模索する。そんな感じで成り立っています。

一日の約五分の四が体を痛めつける作業ってのは我ながら素直に凄いなと思っています。おかげで妖力とかは当初の数倍と言っているほどになりました。訓練すれば増えるんだね。俺妖精なのに。でも最近胃薬が欲しくなって来ました。とりあえずこのことから俺が我慢強いことが証明されます。

ですが……

「では、これから話し合いを始めたいと思います。真可くん、舞風くん。頼むよ」

「は、はい……」

「……」

でも全部同時は流石に予想外でした。天正を挟むようにして俺と真可が立ち、山の妖怪たちに対して作戦の模索を呼びかけようとのこと。でもあたかも俺が幹部であるかのように前に出ていること大して絶望中。

この山に住むほぼ全ての妖怪が俺の前に集結しています。そして過半数以上が俺を睨んでいます。胃がきりきりと痛んできました。天正、後生だから俺を下げてはくれないだろうか。

と、思ったら天正は俺を見てニコニコ笑っている。なんだか嵌められた感を否めない。

真可は……うん。いいと思う。でも俺が代表って明らかにおかしいでしょ。確かに一対一で能力ありならもう天正と真可以外に負けないけど……あ、この山では、ね。

しかし、作戦なんて言われても所詮一般ピープルだった俺に戦略など分かる訳がない。そもそも敵の情報が全くないし作戦の立てようがない気がする。

それはやはり他の妖怪たちも同じようだ。今まで山で気楽に生きてきたがためにそもそも戦いの経験がないのだろう。あそこにいる奴なんか作戦ってなに？　っとか言ってるし。もう帰っていいと思うよ。

そこで天正が一步踏み出した。全員話し合いをやめ、天正へと視線を向ける。さながら学校で先生が教室に入ってきた瞬間のようにも感じられた。

「僕達はこれが初めての集団戦だ。皆勝手など分かりはしないだろう。だから一つ勝利条件を決める。これが成功したら勝ちだと思え」

なるほど、そうやって狙いを絞ることで決定力を出そうと言っただけな。さすが長をやっているだけあって考えが出てくる。

「勝利目標は 敵総大将の撃破だ」

無茶だと思いながらも納得したことに俺は涙と敗北感を禁じえなかった。

全員突撃猪突猛進収束攻撃一点突破。めっちゃくちゃすぎる。

出てくるのはそんな意見ばかり。どいつもこいつも我が強い奴ばかりなので俺はもう頭がおかしくなりそうです。あーでもないこーでもないと煩さだけならお祭り騒ぎ。勘弁してください。

「舞風君。君は何かないのかな?」

「策なんて言える物俺は知らないよ。天正の能力で一気に殲滅とできないの?」

「僕的能力じゃ全力で五十体屠るのが限界だよ。こっちがバてちゃうね」

なんて恐ろしいこと苦笑いで言ってくれるこのお方が味方で本当によかったですと思います。しかし、作戦がもなくなつただ突つ込めば勝てる気がしない。

「それじゃあさ、例えばだけど真可から力もらった俺が封じて天正がトドメ、って感じでいいんじゃないの?」

「え?」

「だって総大将倒せばいいんですよ？ 俺達三人だけで攻め込んで総大将を倒せばいいんじゃない？」

「舞風くん……」

「まあ穴だらけな案だからおススメしないけど。三人のうち誰かが欠けたら終わりだし、対空攻撃もらったら拙いし」

「その案もらうよ」

「あと敵の数とか……今なんて言った？」

「だからその案もらうよ」

「え……？」

なんとビックリ。僕の穴だらけな策が採用されちゃいました。自分の事ながらサーッと血の気が引いていくのが聞こえます。

「ちよつ、無理だって！！ 俺はともかく天正と真可は攻撃もらうたらやばいんだぞ！！」

「無論、真可君が無理と言っなら中止しよう」

「そ、そう？ 真可、まさかやるなんて言わないよな」

「……やるっ！」

「うえええ！？ 無茶だって！ そりゃ三対一なら勝機あるかもしれないけど敵はもつといっぱいなんだろう？ 背中から撃たれるぞ！」

「舞風くん。三人でできないならそれ以上でやればいい。そうだろうっ？」

天正は俺ではなく、精一杯引きとめようとしている俺の後ろに向かって声をかけた。それが一体誰にむけて言われた言葉なのか、考えるまでもなかった。

沢山の、まるで雄たけびのように、大地を揺るがすほどの喚叫かんきょうが響き渡る。ああ、もうダメだ。俺が敵本陣に突っ込むことが決定したようです。

……俺、生きて帰ってこれるかな？ 妖精だから死なないか。

へへ、俺、この戦いが終わったら夢のぐーたら生活に身を投じるんだ

妖精と作戦（後書き）

うん。どうしても無理矢理感がある。

でも次はそれなりに長くなるのでそれで勘弁して欲しいかな、と思います。

外伝（前書き）

外伝的なもの。

珍しく真面目な内容ですが、挟ませていただきます。

外伝

〜天狗と妖精と〜

私の名は真可。鬼の天正様が治める山に住む烏天狗だ。

自慢に聞こえるかもしれないが、私は強い。他の烏天狗達とは一線を引いた妖力に身体能力。扱いも仲間達の中では一番上手く、生まれてすぐに私は皆の注目の的となった。

その時のわたしは子供っぽいところもあったのだろう。他者からほめられることがとても嬉しくて、更に実力に磨きをかけようと思った。

だが、そう時間も経たずに気付く。いつの間にか私を見つめる羨望は嫉妬へと変わってしまった。私はそれに戸惑いながらも自分の力に磨きをかけようとした。一緒に仲間と遊んだりはしていた。でも何処か一線を置いた、まるで腫れ物のような扱いに何処か侘し

さを感じながら。

しかし、唯一天正様だけは何事も変わらずに接してくれた。だがそれが単に天正様の方が私より遙かに格上だから気にしないのだと知っていた。だから、心の中に生まれた孤独が埋まるようなことはなかった。

ある日のことだ。私はいつも通り、仲間達の元へ向かっていた。いや、今言うならば仲間だと思っていた者達、の方が確かだ。

この時ほど自分の優れていた物のうちの一つである聴覚を呪ったことはなかった。

今日もアイツ来るのかな？

来ないうちに始めようぜ

そうすりゃ諦めるよ

『アイツ』が誰で、そうしようと思きあっているのが誰かなんて考えなくてもわかった。冷静に頭が処理しようにもガンガンと内側から殴られているような衝撃のせいで上手く作用しない。そんな頭で私が理解したことは一つだった。

私は、必要とされていない。

思ってしまったことを否定したくて、でもどうしようもなく疼く頭が嫌で、私は飛翔した。

高い高い空だったならこの焼けるように熱い頭を冷やしてくれると思っただから。

でもどうしようもないほどに私は苦しかった。もう頭は熱くない。変わりにどうしようもなく空虚な感覚が私の胸を締め付けるだけだった。

だから私はなんでもいいからこれをぶつけたかった。だから、視界の端に映った妖精の群れに手を向けたのだ。

弱い。弱すぎる。

私は逃げ惑いながらこちらに健気にも反撃してくる妖精達を冷めた目で見ていた。こんなにもちっぽけで、弱弱しく、見えていて情けなくなるような最弱の存在。

それでも、群れて存在できるこいつらが羨ましくて。それを思うと

また更に腹が立った。

妖精程度が羨ましい？　こんなにも弱くて脆い存在を一瞬でもそう思った自分に反吐が出る。

私は無数に飛んでくる妖力弾を掻い潜り、一匹の妖精に手を伸ばす。体つきは子供そのもの。小さい腕を私は腕力で引きちぎった。すると悲鳴のような声を上げながら肩辺りを押さえて妖精は落ちていった。

楽しいとは思えなかった。ただくだらないと思った。どうしようもなく熱いこの体は止まることを知らない。

目前の出来事をまるで他人事のように、何をしているのだろうと思う自分がいた。自分で自分が分からなくなる。いつの間にか自分そのものを蔑むように、自嘲の笑みを浮かべていた。

その時である。突如真横から接近してきた妖力弾を間一髪で回避した。妖精は適当にばら撒くようにしか妖力弾を撃てない。もともとの知能が低いのだ。教えたところで一日で忘れるだろう。

つまり、妖精に為せることではない。そうなると妖怪、しかも空を飛べる奴だ。瞬間的にそう判断し、文句を言おうと妖力弾の飛来した方を向き、啞然とした。何故ならそこにいたのは只の妖精だったのだから。

いや、只のと言う言い方は少しおかしい。普通の妖精の髪の色が水色や緑色だったりするのは違い、そこにいる妖精の髪は白銀と言ってもおかしくないほど美しい色をしていたのだから。あと何

故かは知らないが服も着ていなかった。

唖然としたのも一瞬、攻撃してきたのが格下の妖精だと気付いた私は憤怒に表情を歪めていた。

「妖精風情が私に攻撃を仕掛けてくるの？」

「こりゃ失礼。手が滑りましたよ」と

何を馬鹿なことを、と私は心の中で吐き捨てた。だがその直後に一介の妖精が私の言葉に言葉で返したことに内心驚く。もしかしたら突然変異なのかもしれない。

「失礼ながら、俺達に攻撃を仕掛けてきた理由は？」

「理由？ 弱者を圧倒し、屈服する。その工程に理由なんてあるの？」

嘘だった。本当はそんなこと考えてはいない。だがただ八つ当たりだと言ってしまったのは余りにもちっぽけだ。幸い、相手はただ言葉を解すだけの妖精だ。さっさと片付けてしまうに限る。

「そうですか。んじゃ、試してみますかい？ 窮鼠が猫を噛む瞬間ってものをさ」

「ほざけ妖精！！ お前程度のちっぽけなものが妖に挑むなど。身の程を知りなさい！！」

その言葉を期にし、私は両手から妖力弾を発射する。妖精どころか並みの妖怪でも沈める私の攻撃を掻い潜るように避けていく。なるほど、口が達者なだけはある。

それからも距離を取られ、私の攻撃は一度として当たらない。それがだんだんとイラついてきた。妖力弾では埒が空かない。しかもわざわざこちらの神経を逆なでするようなことばかりを口にする。特にこちらをイラつかせるのはまるで必要ないとも言つように攻撃の一つもしてこないことだ。

何故？ 自らが疎むこの力は肝心なときに役に立ってはくれない。先程冷やしたばかりの頭がまた熱くなつて行く。

認めたくない認めたくない！！ こんな妖精ごとき、私が勝てない訳がない。

こんな、たった一匹のちっぽけな

そこで私は気付いた。この妖精はたったの一人で私と戦っていることに。今更だと言われかねない。だがこれは明らかにおかしいことなのだ。妖精は基本的に単独だけで行動することはない。それは今までの例を見ても明らかだった。だが、目の前の妖精はただ一人。先程まで私が追いかけていた妖精の群れはもう塵ほどにしか見えないう距離まで逃げている。

孤独。その言葉が私の頭を過ぎった。

目の前の妖精はちっぽけだ。妖力も普通の妖精となんら変わらない。

なのに、何故今の私と被る ！！

私は体の奥底が熱くなるのを感じた。ダメだ、もう止まれない。自分の事なのに随分客観的に物事を考えているものだと自分ながら思った。まるで体が何かに操られたかのようだ。いや、『怒り』と言う感情に振り回されていることを考えればその考え方もあながち間違いないかもしれない。

大振りの拳を振るったが、しかしそれは避けられた。そして妖精が私の視界から消えたかと思った瞬間、頭に強い衝撃を感じた。やられたのだと何と無く認識したときには私の体は真下の湖に落下を始めていた。

まさか自分の生がこんなところで終わりを告げてしまうものとは思ってもしなかった。だが、怒りの炎が静かに消えていくように感じた。変わりに心の中に残った安堵感。

嗚呼、そうか。そうだったんだ。

私は、ただ寂しかったんだ。一人が怖かったんだ。

再び目を覚ましたとき、目の前にあったのはあの妖精の顔だった。まず私は反射的にそいつの顔を殴っていた。実を言うとそいつの心配げな顔が妙に恥ずかしかったのだ。後悔はしていない。

だが目の前の妖精に何故助けたとは聞けなかった。どうせ聞いたところで私の望んだ答えは返ってこないだろう。そんなことより、話してみるとこいつは中々話のわかる奴だ。それに喜怒哀楽がはっきりと表情に出て面白い。裏表がない、と言うより裏と表がほぼ同じなんだろうと思う。だから常に自分の考えを選択できる。

なんにしても、私はこの妖精を好きに、本当の仲間になれるような気がしていた。

彼が困ったような笑みを浮かべながらも、その目にはこちらを拒否する感情が見られなかったから。

「それにしても、アンタホントに妖精なの？ アンタみたいなのは初めて見たよ」

「どうにも妖精みたいですね。他の皆より若干恵まれてそれが幸か

不幸かを左右してますが」

「ふうん。あたしは烏天狗の真可」

暗にお前の名前を教えろと言っているような言い方だが、彼はなにやら困ったように口ごもった。もしかしたらと思いつながら尋ねた。

思ったとおり、彼は名前がないと言った。だから私がつけてあげようと思った。他でもない私が、この子と末永く共にいれるように。

舞風まいかせ

あの大空の風のように舞い、烏天狗わたしを押し上げてくれる心強い親友ともの名前を

く鬼と妖精とく

名は天正。姓は無い。とある山の長として君臨するしがない鬼だ。

こんな言い方をすると大体がご謙遜をなと口にする。だが、実際はそうではないのだ。

僕が強いのは僕だからではなく、鬼だからなのだ。

元々鬼という種族は戦いに長けており、特に人間に恐れられている。その枠にはみ出ることもなく、自分は鬼としての実力を持って生まれてきた。しかし、自分は他の皆とは違っていた。見た目でも実力でもない、考え方が違っていったのだ。

普通、鬼は戦いに対して強い意欲を持つらしい。僕の周りでは戦いが絶えなかったのはよく覚えている。戦いなどと言ってもほとんどが身内同士のものだ。他種族との戦いになればこちらの無敗は決まっているようなものだったのであからさまに攻撃を仕掛けてくるような妖怪たちはいなかった。

でも、唯一僕は戦いを好まなかった。いや、多分鬼としては戦うことは好きだったのかもしれない。だが同時に相手を傷つけることを嫌い、戦いのない平穏な温かい日々を求めた。

だから僕は生まれ育った場所を出た。逃げ出したといってもいい。見聞を広げるためと言う理由付けで、もう戻るつもりはなかった。そしてありとあらゆる場所を放浪した。時に滝に打たれ、時に妖怪に奇襲され、時には迷子の人間の子を助けたりもした。最後のはちよつとした気まぐれである。こんな日々をすごしているといつの間にか能力などと言うものを得てしまっていた。

そうしてたどり着いた山は烏天狗が支配する山だった。別に誰が治めようが知ったことはなく、さつさと素通りするつもりだった。しかし、その烏天狗が鬼に対して底知れぬ恨みを持っており、たまたま通りかかった僕に襲い掛かった。どれだけ痛めつけても諦めない。そいつに僕は手加減を間違え、死に至らしめてしまった。

山の妖怪は揃いも揃って怯え、僕を新しい長にと祭り上げた。最初は断ってはいたが、押しと罪悪感に負け、引き受けてしまった。

アレは今から何年前のことだったろうか。

そうして山の頂点に立ってしまい、今ではあの時の選択を嫌悪するに至った。妖怪たちの怯えに怯えた表情も、媚を売ってくる弱小妖怪も。最近唯一興味を持ったのは普通の烏天狗より強い力を持って生まれた少女だった。一目見てこの子は前のこの山の主より強くなれると分かった。しかし、どれほど力が強くとも僕に対する態度は他の妖怪と変わらない。

興味もない彼らの名前は忘れてしまった。そう言えばあの少女の名はなんだったろう？

嗚呼、もう最近ではあの時の罪悪感などすっかり消え去っていた。当たり前だ。元々襲ってきたのは向こうなのだから。平穏な日々こそ手に入れたがこれは消して温かなものではない。僕はこの山に対する興味を全て失った。だから出て行くつもりだった。

しかし、一つの噂を聞いた。

なんでもあの烏天狗の少女が妖精を仲間に迎え入れたらしい。興味

は沸かなかった。でも何故が行かなくてはいけない気がした。

僕はその妖精に会いに行った。だが、半ば嫌々だった。自分から行かなくてはなどと言っておきながら無茶苦茶かもしれないかが、妖精はそもそも知識がない。それにイタズラ好きだし、旅の途中は僕の妖気に当てられて錯乱して襲い掛かってきたりもした。妖精は脆く、弱く、害だとその時点で思い込んでいたから。

初めて会ったとき、はじめしてみる白銀のような髪のはあの烏天狗の少女と一緒に山菜を拾っていた。妖精は食物を必要としないから恐らく少女のだろう。

なんだ、ただの召使のような者なのかと半ば幻滅したとき、驚いたことに妖精が少女に今掴んでいる山菜が食せるか尋ねたのだ。長年生きて言語を扱う妖精は始めて見た。そしてあるうことか喧嘩まで始めたのだ。いや。アレは多分少女がからかったのだろう。少女は笑っていた。

それを見た僕は今までにないほど心を奪われた。あんなにも楽しそうに笑っている。妖精とともに笑っている。今までに見たことが無い光景で、だから僕は自然と足をそちらに向けていた。

近づいてくる僕に気付いたのか少女は驚いて礼をした。それが少し残念で悲しくなった。隣の妖精は戸惑ったような表情を浮かべていた。

僕を知らないからだ。僕は高鳴る胸を押さえながら妖精に笑いかけた。言葉を紡いだら裏返ってしまいそうになったからだ。

そして少年は

「くんには！」

悪意も、恐れも、卑しい思いも何一つない。少年の声は耳に届いた。満面の笑みを僕に向けている。胸が高鳴った。幼い頃に、悪意も何もない世界に聞いていた声。それが今再び僕の耳に届いたのだ。

心の底から望んでいた。僕の普通をあるがまま受け入れられる者。

嗚呼、そうか。僕がこの子に会いに来たのは、興味なんかなかったのに会いに来たのは、

期待していたからだ。次こそは、もしかしたら、僕が望んだ真のものを、と。

「どうかしたのか？」

「っ！ なんでも、ないよ」

考えに夢中になり、僕は口ごもりながらも返した。少年は心配げに僕を見上げていた。こんな表情を向けられるのは一体何年ぶりだろう？ いや、もしかしたら初めてかもしれない。だって僕は鬼だから

ら。強い、強い鬼だったから。

「こら！ 天正様には敬語を使いなさいって言ったでしょう！？」
「ええっ！？ この人だったの天正って。普通に気のいいお兄さんかと……」

そんな少女と少年の会話が耳に届く。それについクスリと笑みがこぼれてしまった。笑みを零さなければ感極まって涙を零してしまいたいそうだったから。

「敬語なんか使わなくて構わないよ。元々誰にも強制なんかさせてないんだ」
「だってよ。よろしくな！ 天正！」

嗚呼、温かい笑みだ。冷めていた心がどんどん温かくなっていくのを感じる。僕が求めていたものはここにあったんだ。

「君の、君の名前を聞かせてくれるかな」

ありとあらゆるものに興味をなくしてしまったはずだった。名前などどつでもいいものであったはずだった。でも、彼の、この妖精の名だけは

「舞風^{まいかぜ}。妖精の舞風だ」

心に、刻み込みみたいと思う。

我が友、舞風よ。

確かに、平穏な日々だった。でも、温かくはなかった。

鬼である僕にとってないものねだりと諦めかけていた存在、鬼である天正ではなく、ただ天正を受け入れてくれる存在を、僕はとうとう手に入れたのだ。

舞風と真可を戦いに巻き込んだ。本当なら叫びたいほど嫌だった。でも彼らの助力なくばこの山は存続できない。でも、舞風は笑顔で引き受けてくれた。それどころか思慮深い面をも見せ付けてくれた。普通の存在とは一線を記した二人だからこそ能力に目覚めると信じていた。

二人が能力に目覚め、制御ができるようになり、作戦も決まった。まさか早くもこうして背中を合わせて戦うようになるとは思わなかった。いや、舞風は反対していた。可能性の一つとして口走った策を僕が認証したから。彼が必死に止めようとしたのはただ危険だからではない。僕と真可が危険だからだ。

その優しさには嬉しくなる。だが、大丈夫だ。だって彼がいるのだから、負ける気などしないのだから

外伝（後書き）

上は2話の真可が妖精を襲っていた大まかな理由ですね。

どっかの話でも言うとおおり、変わり者は好かれないんでしょうね。同じ変わり者ではない限り。

だから同じ穴の貉とか類は友を呼ぶとかそれらしい言葉が生まれるんだと思います。

下は天正もお話。彼に考えていたのはこれ。「価値観の違い」ですね。鬼でありながら戦うことを好めない者。無条件で優しいわけじゃないんですね。

主人公がザコだと仲間が異常に強くなるのは何気にお約束。

まあそこらの妖怪には負けないんですけどね。

妖精と鬼姫（前書き）

20111014改訂版up

妖精と鬼姫

夜の世界を満月が薄く照らしていた。

俺は現在進行形で緊張していると言っても過言ではない。そしてそれは他の妖怪たちも隣で俺の手を握る真可も同じだろう。少し前まではどいつもこいつもこれからくるであろう敵の妖怪たちに対して各々の思いをぶちまけていたと言っのに。

そんな中、天正だけが黙って遠い山のほうを一心に見つめていた。

敵が来るのは山を二つ越えた先、と聞いていたしあの山の方から敵が来るのだろう。

およそ一ヶ月、俺は、俺達はそれなりに特訓を重ねたと思う。毎日のように真可と打ち合い、能力のコントロールにだって勤めた。それは真可にしろ、他の妖怪たちにしろ同じだ。

作戦だつて……まあ立てるには立てた。些か無理があるのは承知で戦うしかないだろう。

だが、唯一足りてなかった重要な情報のせいで勝負は思わぬ形へと変化した。

足りていなかったのは敵の戦力の情報。この日、俺達は本当の『暴力』を目にすることになった

妖怪たちが一気にざわめき立つ、怯えるように、竦むように。そう
なったものは一様にある方向を指差していた。俺がそちらを見よう
としたとき、握られていた手がの力がより強くなった。真可の表情
をうかがうとその顔は真っ青になっていた。

俺は今度こそそちらを見た。何もいない。

否、いた。点が一つ。空を飛び、こちらに真っ直ぐ向かってく
る。

なるほど、と俺は震える手を押さえながらも理解する。自分に最近
少なからず欠如が見られた感情が強く呼び起こされる。それは恐怖
ナイフをのど元に当てられるような、そんな感覚。

妖精は死なない、いくら怪我を負っても勝手に治ってくれる。そん
な事を抜きにしても心底戦いたくないと思う存在。それがそこに
いる。

後ろにいた妖怪達が腰を引かせて次々と逃げ出していた。しかし、
それを笑う気にも責める気にもなれはしなかった。寧ろ羨ましさま
で感じた。だんだんと近づいてくる存在に心が警報を鳴らしている。

アレは拙いアレは拙いアレは拙いアレは拙いアレは拙い拙い拙い拙
い拙い拙い拙い拙い拙い拙い拙い拙い拙い拙い……

戦うことを、否、同じ空間に存在することを本能が拒否している。
禍々しいとかそんな感情など抱けない。ただ怖い。

しかし、天正は逃げない。ただ真っ直ぐに敵を見ている。だから俺
も逃げたくない。今だけは痛みや怪我に慣れ親しんだ日々に感謝し
たい。少しながら恐怖が薄れた。

「……奴さんのご登場、か」

ふわり、と一人の女性が舞い降りた。

「さて、名前を聞こうかしら」

妖艶とも言える笑みを浮かべて女性はそう言った。その顔はこんなにも恐ろしいとは思えないほど美人だ。いや、綺麗なバラにはとげがあるなんて格言もあるし、否定しがたいことかもしれない。白い胴着のような服を身にまとい、金色の髪の中から一本の角が覗いていた。背にはそれぞれ宝剣とも言える剣が三本重なるように携えられている。

女性が尋ねた相手が天正だったのは考えずとも解かった。いや、女

性の目が天正しか見ていない時点で嫌でも気付く。さしずめ俺と真可は道端の石ころと言ったところか。

「この山の主、天正だ。お前の名は？」

天正らしからぬ、穏やかではない声。それが唯一彼の心情を示しているように感じた。表情も動きも何もかも変わらないのに。

女性はくすくすとワラウ。背伸びする子供を見るように。玩具を見るように。弱者を見るかのように。

「愉快。実に愉快ね。そんな波立つ妖気では動揺を顔で表現しているようなものよ童^{わいら}」

天正の表情が固まる。完全に見透かされている。その様はまるで弱者と強者のようだ。

「いいわ。名乗ってあげる。私の名は蓮姫^{れんき}。八斗蓮姫^{やとれんき}よ」

自信満々に微笑を浮かべながら背の剣を一本引き抜いた。そして隙だらけとも言える戦闘体勢をとる。そうして初めて蓮姫の目は俺達を見た。

「その塵共。さつさと退きなさい。邪魔よ」

しかし、その目には何の期待などありはしない。俺達などいないのが当たり前、そんな目をこちらに向けている。勿論、勝てる気がしない。それは今までの会話然り、相手の力然りで心の底まで理解している。しかし、ただでは聞いてやれないのだ。

「なに？ その目は。まさか私とやりあう気？ ただの妖精如きが？ 笑えないわよ」

「……随分とおしゃべりなんですネ。蓮姫さんは「妖精が。私の名を気安く呼ぶな」

今までがまだマシだと思われるほどのプレッシャーがのしかかる。口を聞くことが出来ただけでも自分を賞賛したい。歯がガチガチとなりそうになる。でも今は退けない。

「何か言ったら？ 謝罪の言葉なら聞いてやっても」
「^{げん}言を封ず」

蓮姫の言葉が止まる。否、消える。口を開きながらも言葉を発せないことに気付き、鋭くこちらを睨む。どうも今ので逆鱗にでも触れてしまったようだ。

「面白くないわね。いいわ、まとめてかかってらっしゃい。そ

の程度、造作もないことだから」

その言葉に返答は返せない。我ながらけっこう限界だ。天正が、真可が、そして俺が同時に戦闘態勢に入る。あつたのは絶望感、そして淡い期待のようなものだった。

我ながらバカらしい。戦う前から勝ちを運に任せようとしている。情けないことだ。

願わくば誰一人かけず勝利を描くことを

「 砕けなさい」

蓮姫が感慨もないように俺に大剣を振り下ろしてくる。凄まじい迫力、圧倒的違和感。何処の麗しき女性が大剣なんぞ振り回すんだ。俺は最大出力でそこから退避。そして能力でその場に固定する。しかし、ほぼ無意味だったようだ。若干顔を歪めている以外はなににも変わらない。しかし、その顔をゆがめている隙に天正と真可が妖力弾で攻撃をする。余すことなく被弾し、少しは効いたかと思いきや顔色一つ変えずにそこに立ち尽くしている。

『無傷』だ。

「やっぱり、能力……腹立たしいわね」

「バれる……か、やっぱり」

「お前みたいな妖精が戦おうとした理由がわかっただけよ」

最初に声を封じた時点でなにか思われてはいたはずだ。だがこれはあくまで『布石』。俺の存在感を強くするための。

「でも、それだけでしょ？」

「!?!?」

気付いた時、再び蓮姫は俺に肉薄していた。ここまで攻撃する価値があるのか能力持ちは。

いや、多分俺の能力だから攻撃してきているんだ。不可解で、少なくとも妨害が可能な能力だから。

俺は再び先程と同じように退避する。しかし、逃げ切る前に髪の毛を掴まれた。頭からぶちぶちと髪の毛が抜ける音がする。痛いがいつものに比べれば全然

次の瞬間、大地に叩きつけられていた。全身の骨が砕けたかのような痛みが走る。すぐに再生、俺の体の骨をつなげていく。しかし、それを見越した上で蓮姫は追撃をかけてくる。再生する骨と言つ骨を次々と踏み砕いていく。痛みで叫びそうになる。おもいきり歯を食いしばって耐えた。このままでは歯を噛み砕いてしまいそうだ。

しかし正に隙だらけな背中をあの二人が見逃すわけがない。脇から邪魔をするように入ってきた妖力弾を感慨もないように飛び跳ねて避けた。俺の再生がようやく再開される。完全な再生が終わるまで蓮姫は黙ってこちらを見ていた。

そして、明らかにおかしいことに気付き。

何故、天正と真可を見ない。蓮姫とて元々天正と戦うのだと自分から言っただけでいい。しかし、今は俺から視線を離さない。そしてその目にある感情は一つ。『怒り』だけだった。

そんなにも妖精に口を利かされたことが腹立たしいのか。それとも能力を食らわされたことが悔しいのか。どちらにせよ、今は俺自身を困らせた戦いが一番好ましい。痛みへの恐怖に震える足に叱咤し、再び俺は能力をかける。

今回封じたのは力。腕力、筋力、妖力などもろもろの力を封じた。

明らかかな違和感を隠せていないようだ。忌々しげに顔が歪む。再び俺に狙いを定めてくる。俺は天正に目配せし、頷いた。

怒りのまま振りかぶる蓮姫の剣を苦しげに回避していく。腕が一本飛び、血の変わりに光が溢れる。しかし痛みに悶える暇もなく、時には能力を行使してまで避けていく。脇から来る真可の援護の邪魔にならないようにもする。羽が捕まった。力のまま引きちぎられる。地面に背中から叩きつけられ、振り下ろされた大剣に串刺しにされた。それを突き刺したままもう一本を抜き、俺の胸を貫いた。

しまったと思つたときには大地に磔はりつけにされて既に身動きはとれず、痛みにもがいた。それで関心が薄れたのか俺から視線をはずし、未だ攻撃を続ける真可を見た。拙い。真可の能力で相手に攻撃を返すことは一つの作戦としてあがっている。しかしあんな怪物を正面から受け止めたりしたら、使う間もなく殺される。

俺は胸に突き刺された剣の刀身を掴んだ。恐らく、名剣と言っても相違ない装飾剣は切れ味も一線を脱しており、抜こうにも逆に俺の手が切れる。仕方がない、と諦めに似た想いをし、俺は能力を使って『痛覚』を封印する。

体をずらし、自分の胸から下が開くように真つ二つになったことで途轍もない違和感が体にかかるが今だけはそれから目を逸らす。突き刺さっていた剣を一本拝借し、蓮姫に向かってぶん投げる。質量ゆえに速度こそ出なかったが、それは回避が遅れた右腕を深く切りつけ、地面に再び突き刺さった。俺ではなく剣のおかげだろう。しかし、蓮姫はこちらをギラついた目で睨み、威圧してくる。

そうして初めて自分に余裕が出来、思考が出来た。

なんだこの怪物は。

存在自体が暴力その物なのではないかと思うほどの強さ。妖気も、能力も、何一つ使わない。それだけに恐ろしい。数メートル離れた場所から狙い撃ちされるのではなく、目の前で剣を突きつけられるような原始的な恐怖。それだけに抗いがたい。こちらの攻撃は全く効いた様子も見せず、ただ暴虐を尽くす敵。

「妖精如きがああ

!!!」

「!?!」

怒号を上げながら蓮姫はこちらに肉薄する。傍に刺さったもう一本を支えにいて立っていたが、これも有効活用させてもらう。地面から抜き、近寄せないようになぎ払った。だがそれを全く意に返した様子もないように指で止め、俺に向かって殴りかかってくる。

次の瞬間には視界がぐるぐると駆け回り、再び激しく地面に叩きつけられていた。次に見えたのは俺の顔に向かって真つ直ぐ拳を振り下ろしてくる蓮姫。

嫌な音と共に視界が真つ黒に塗りつぶされた。何も感じない。何も見えない。ただ深淵。耳鳴りのような物だけが響いて聞こえた。

それを抜けたとき、俺はおぼろげな視線のまま地面を見ていた。視

点がゆらゆらと揺れている。頭にある違和感、そうして俺は悟った。今、俺は蓮姫に頭を鷲づかみにされて宙ぶらりんな状態になっている。足が痛んだ。視線を向けてみると若干膝上辺りから再生が止まっていることに気付いた。

限界……か。

思えば無限に再生なんて虫のよすぎる話だ。生き返るのに何一つエネルギーを消費しないなんてありえない。恐らくとある理由で足の修復にまわす余裕がないのだ。視線をやや上に向けてみると焦燥している真可が見えた。何か言っているようにも見えたが今の俺の耳には届かなかった。

恐らく今の蓮姫の形相は正に鬼と呼んでいいほど凄まじいもののではないかと推測する。頭が大きく揺れる。蓮姫が真可に殴りかかったのだ。よりにもよって俺を掴んだまま、そこらへんに投げた。見たらまだよかったのに。ゆらゆらと視線が暗転する今はもうどこを見ているかも解からない。

そうして次に見えたのは真可の絶望の表情だった。どうも俺は真可の前に差し出されているようだ。頭がきりきりと痛んでいく。このやろう、見せしめのつもりか。思考が頭に巡っても実際に顔には何も出ない。唐突に俺の体が投げ出された。ごろごろと地面を転がり、皮肉にも蓮姫の顔が見える位置で止まった。こちらを一瞥した。つまらなそうに、くだらなそうに、壊れた玩具を見るように。全く、腹立たしい顔だ。イケメンにむかっても美人の顔にむかつく日が来るなんて思いもしなかった。

見下してんじゃねえ。

心が吼えた。でも体は投げ出されたままだ。もう体が頭の言うことを利かない。全身の神経が切れたのかもしれない。

見下してんじゃねえ！

再び吼えた。五月蠅い。まるで自分が二人いるようだ。茫然自失の自分と怒り狂う自分と。

見下してんじゃねえ！！

五月蠅い。嗚呼、でも仕方ない。だって俺だもの。この世界に唯一無二の俺だもの。

一番近くに落ちていた大剣を掴み、握り締める。

「妖精なめんじゃねえぞおおおお！！ このクソ鬼がああああああああ！！」

その剣に今の自分が用いる全ての力をつぎ込み、投擲する。所詮二番煎じかと言ってくれるな。いつまでも妖精なめんな、烏天狗なめ

んな。先程よりはずっと早く回避行動を取ろうとした蓮姫は突如表情を歪ませる。

その体には身に覚えのない無数の傷が刻まれていた。それが俺の所業と勘違いでもしたのだろう。だが残念。それは俺じゃない。元の作戦とは色々異なるけどこれならば。蓮姫は怒りに顔を歪ませ、俺が投げた剣は彼女の腹に突き刺さる。口から血を吐き出しながらたたらを踏んだ。そして直後、彼女を重圧が襲う。剣につき込んだのは妖力だけではない。俺の能力の力もついでに貼付しておいた。それも相まって、今蓮姫には最大の隙が出来ていると言っても過言ではない。そして、それを見逃す我らが長じゃあない。

「待たせたね。舞風くん。真可くん」

天正。彼の頭上には巨大な妖力の弾が中空している。俺が再生に力をさけなかったのはこれが原因だ。今の今まで俺から力を流していたのだ。俺の力は最大こそ微弱だが、減らない。いや、肉体と同時に再生すると言った方がいいだろう。俺が死ぬほどのダメージを受けるたび、俺の体を形成している力を天正が蓄え、そして。

「今こそ、力を解き放つ」

今最後の仕上げを終え、光球が肥大化する。蓮姫の表情は引きつっていた。ざまあみろと思った。こちらら人間で言うなら軽く三十回程度虐殺されたようなものなのだ。一発くらいもらえ。

「うおおおおおおおおおおおお！」

猛々しい声を上げながら天正がそれを振り下ろす。蓮姫は動かない。いや、動けない。俺の能力全開だ。如何に鬼といえど動けてたまるか。

そして、光球が蓮姫を飲み込んでいった。

「くなった戦いは久方ぶり」

そう言つて蓮姫は俺のほうに歩み寄ってくる。俺はギョツとしながら何とかしようとしたがどこも動かないので諦めた。何をされるのかと思つたが、俺を抱え上げ、あるうことが微笑みかけたのだ。予想だにしない行動で俺は固まるしかない。

「この勝負は貴方の存在があつての勝利ね。貴方みたいな妖精、初めて見たわ」

「……ほめ言葉として、いただいております」

ほぼ限界と言つても差し支えない満身創痍な俺は為されるがままだ。しかし、体に流れ込んでくる力を感じ、俺は驚きを隠せないまま蓮姫を見た。相変わらず微笑を浮かべている。

「私の妖力をいくらか流したわ。すぐに再生が始まるはずよ」

なんて言つておられるが待て待て待て待て！！俺の体の許容範囲を越える！一体どれだけ妖力が有り余ってるんだ。そこが知れないにも程があるだろ。あああああああ！ 破裂……す……る。

俺の意識は途絶えた。

と、ふと気付けば俺は見慣れた小屋の中で眠っていた。治らなかつた傷は流石に治癒を開始したのになくなっていった。

……で、済んでればまだよかつたんだが、立ち上がってみると一ヶ月ながら慣れ親しんだ体に違和感を感じた。昨日に比べて視点の高さが明らかにおかしい。明らかに高くなっている。近くにあった水瓶を覗き込んでギョツとする。

俺の体が急成長していた。成長期にしては成長しすぎだろ！ と言うほどに。前の体を十歳程度平均として、今は十四歳程度。まあ中学生半ばくらいの身長まで育っているわけである。

なんで？ と言う疑問にはすぐに心当たりが生まれた。蓮姫に送られた妖力である。俺の体の許容量を軽く突破し、余った分が俺の成長に当てはまつたんじゃないかと思われる。結局は推測だが、今の俺は前とは比べ物にならないほどの力が溢れている。嬉しいような悲しいような……

そんなことを考えていると家の（真可の家です）戸が勢いよく開き、真可が顔を出した。その表情には焦りが見えまる。俺の妖力が増量したことに驚いてきたのかもしれない。

「舞風!」

「あ、おはよう」

「おはようじゃないよ!」

早くも怒られました。勢いよく俺の肩に掴みかかり、がくがくと揺らしてきます。頭の中身が凄い勢いでシェイクされています。しかしそうして揺れる視線の中で確かに光るものを見ました。

「真可、泣いてるのか?」

「泣いてなんか……泣いてなんかあ……」

俺を揺さぶるのをやめ、両手で顔を押さえると真可は崩れ落ちてしまった。肩が震え、嗚咽が混じっている。いつもの手より早い口はこんなときに限って機能せず、真っ白になりそうな頭の中、俺は真可の頭を撫でていた。今の真可はまるで子供のようで、子供にはいつもこうしていたから、としか言えない。

「ッ……死んじゃったかと……思ったんだからッ! 体も、冷たかったし……息、してなかったからあ!」

「大丈夫。大丈夫だぞ。ここにいるから、な」

「いなくなっちゃうのかもって! 怖かった……怖かったよあ……」

どうにも心配をかけてしまったみたいだ。いつもの強気ながら健気

な態度は今ここにはない。あの時はアレが最善だと信じて疑わなかった。あの二人がいくら俺より強くてもアイツ相手じゃ勝てないと思っただから。そしてそれは今も変わらない。だってこうして同じ空間にいるんだから。

命を捨てる気は毛頭ない。でも、ちっぽけな俺で代替わりが出来る犠牲の代わりになれるのなら、痛いぐらい我慢して盾になってやるんだ。その想いだけは、変わらない。

「あら。起きたの、妖精」

……前言撤回しても、いいですか？

なんでこの鬼姫が我が家（真可の家）の前に立っておられるのですか？　そして何故その隣に微笑ましい物を見るような顔の天正さんまで居られるのですか？

「ああ〜……えっと、はえ？」

「まあまあそう混乱しないの。説明なら今からしてあげるから」

「蓮姫さん。彼はまだ病み上がりなんですから余り無理はさせてあげないでください」

「大丈夫よ。心配性ね天正は……いや、この子だから心配なのか。納得納得」

先日（時間間隔がはつきりしないので実際は不明）戦ったときに比べて全然違いすぎだろ。誰だよこの爽やかスマイルのお姉さんは。あの剣振りかぶってきたときの形相は何処に行った。そして背中剣は一本何処に行った。

「アレから協定結んだのよ。この山と私のほうの山でね」

「協定……ですか？」

「そ。お互いに喧嘩はせずに仲良くしましょうね〜って」

「それはまた……」

随分急な話だ、と思った。元々こちらを攻め落としに来たのに何がどうなつて協定を結ぶ羽目になったんだ？ それに関しては恐らく長同士の話があったんだろうし、俺が介入できる余地もないだろう。それに別に悪い話な訳じゃない。

「まあ……うん。分かった。よろしく蓮姫」

「……ホント、天正の言う通りね」

「天正が？　なんて？」

「貴方は私が怖くないの？」

俺の質問には答えず、しかし間髪いれずに問いかけた。確かにあの剣振りかぶった様は今でもトラウマレベルで頭に残っちゃいるけど、今は寧ろ気のいい人として好意的に接することができそうな気がしている。

「まあアレはアレ、これはこれって事で折り合いはつくでしょ。これから仲良くしてくれるんなら大丈夫だって。それに妖力くれたでしょ？　だから今はこんな感じ」

「ホント、貴方って子は……」

蓮姫は少し眉を持ち上げただけで呆れたように肩をすくめたが、すぐに笑顔になり、こちらに手を出していた。

「改めて、八斗蓮姫よ。よろしくね妖精」

「舞風。妖精の舞風。だけどこんな妖力持って妖精ってのもな……」

俺は首を捻らせた。俺の力は既に一般的な妖怪より上であり、未だ妖精と名乗ることについて我ながら考えさせられる。それに妖精と名乗るたびに白い目で見られるのは気のせいじゃないはずだ。少しはただの妖精と違うんだぞって思われないとこれからも変わらない。

……なんて言っておきながら真可には負けるのだが。

「なら『大妖精』、とでも名乗ればいいんじゃない？ 今の貴方ならお似合いよ」

「おお、それは名案だ。改めまして、大妖精……中々いい響きだ！」

「大妖精舞風。うん。カッコいいじゃない」

「似合ってるよ。舞風くん」

「お、なんだか珍しく好意的な評価。燃えて来た。今なら真可にも勝てる気がする」

「無理無理」

「なんの！ うおおおおおおおー！！」

40秒で振り返ちにされました。

「えっ！？ その剣って人間が作ったのか！？」

「ええ。生意気にもこんな裝飾剣を振りかぶってくるものだからね。奪って私の物にしたの」

「人の物を取るのは犯罪です」

「難しいと言わないの。元々はなまくらだったのを私が妖力を流して斬れるようにしてあげたんだから。使われて幸せのはずよ」

「……それ妖刀だったりしないよね？」

「さあ？ 私は知らないわ」

「俺はそんな危なっかしい物を振り回してたのか……」

蓮姫の話聞いてビックリだ。そもそもこの世界に人間がいることにすらビックリした。まあ何と無くだが居るような気もしていたが……はて？ 疑問だ。山の周りを見るとそれほど開拓されているようにも見えない。なのに剣の出来はまるで中世のようだ。技術に差がありすぎではないだろうか？

元人間として僅かながら気にはなるが……今度旅行を兼ねて行ってみてもいいかもしれない。

「そう言えば一本見えないけど。どうしたの？」

「アレ？ 使おうにも貴方の妖力が混じって斬れなくなっちゃったのよね。多分貴方次第では斬れるんだろうけど……私が持っているかもしれないから天正の家に置いてきたわ」

「そんな厄介なものを押し付けないでよ……」

「貴方なら使えるはずよ。だから置いていくの」

「それは贈り物ととっても」

「私はそのつもりよ」

きょうつていのあかしにまいかぜは『ようとう』をもらった。

わー、ぱちぱちぱち。

……うん。ぶつちゃけ怖い。なんてものくれるんだこの人は。もしかしたら持った途端に体を乗っ取られるんじゃないかこの人に。人じゃない。鬼だ。そもそも協定に武器送るなよ。殺す気か？ 元々はそのつもりでしたね。忘れてました。

全く、和平の使者は槍を持たないって……誰が言ったっけ？ まあいいや。

今はこうして二人きりながら仲良く話が出来ることを喜ぶ場面だろうしね。

「舞風……」

「なんだ？」

「ふふ。その言葉を返されたのは長い生を生きて久しぶりよ。やはり、中々悪くないわ」

「？ 良く分からんけど、悪くないならいいか」

「」

「ん？ 今なんか言った？」

「なんでもないわ。お酒、飲む？」

「私はまだ未成年でござい」

「私の酒が飲めないと？」

「美味しくただかさせていただきます」

「ふふ、やっぱり。私は間違ってたなかつた」

蓮姫はそれっきり黙ってしまったが、その口には笑みが浮かんで
いた。

いつだってなんだか疎外感。でも、笑っているならいいか

妖精と鬼姫（後書き）

蓮姫の口調が固定できない……怒ってるときは厳格、普段は気のいいお姉さんのなのが理想。

元々の作戦が真可 舞風 天正の連携攻撃だったけど予定とは少し異なった。

最後、蓮姫が舞風に妖力を流した部分ですが、「こんなのあるなら天正の能力って無意味じゃね？」とか思った方もいらっしゃると思います。実際それで済めばいいんですが、一応利点はあるんですね。これについてはまた後日。

友人ができない……

あばばばばばばばばばば！

どうか私に友達の作り方を教えてください。

昼休み隅っこで一人寂しくうどんを啜る日々を終わりにしたい。

嗚呼、今日の日替わり定食はドライカレーライス……

あ、大妖精の名前お借りしました。やっぱりこれしか表せないと思うんですよね。

ええ、大ちゃん大好きですよ？ いいじゃないか。可愛いじゃない

か
⋮
⋮
⋮

幕間（前書き）

更新が少し遅れた件について。

今日練習もかねてハイパートルネード土下座を畳で試してみました。背中と頭が痛いです。いつかアクロバティックな動きが出来るようになればいいな（笑）

今回の話は幕間、言うならば一章を終えて次に繋がる途中って感じですね。

ギャグが足りないからって最近ネタに走りすぎ、反省と自重で自分を省みるべき。

幕間

よくいる正義のヒーローなんかは土壇場でむちゃくちゃ強くなった
り仲間がやられそうな瞬間なんか「俺の仲間に手を出すな!」、
的なイベントで強くなったりする。俺は実際にそんな場面を見た
き笑ったりしないだろう。まるでな事だがそれがカッコいいのも確
かなのだから。

だが、他人に力をもらって強くなる俺って一体……

「って感じなこと悩んでるんだけど」

「バカじゃない?」

開口一番バカじゃないの一言いただきました。本当にありがとうござ
います。最近だんだんと真可の口調が辛辣になっている気がして
これからが怖い。

さて、最近『妖精』から見事『大妖精』にグレードアップした俺だ
が、この姿はなんとすばらしい。他の妖精のように妖力で服を形成
できるようになったのだ!! ででーん。

……ええ、分かっています。普通の妖精に出来ることが俺にはパワー
アップしなきゃ出来ないんです。俺が特別落ちこぼれだったりする
ならマジ泣ける。

だが泣いてばかりでもない。実際出来ることは増えたのだから。形成した服は普通に脱ぐことも出来る。妖力を物質化したような感じであり、妖力さえ使えばいくらでも作れるのだ。ゆったりとした余裕のある服をイメージしながらも和風と洋風を兼ね合わせ、両肩に片方ずつ白と黒のマント垂れ下げている。破れても身につけている間は妖力で再生することができる。これでもう戦ってるときのポロリを心配する必要がなくなっただんだ！ 不遇すぎてやっぱり泣ける。

更に言うならば背中に背負った剣。蓮姫が帰る際に（本当に）残していった剣だ。俺の能力、『封を操る程度の能力』が未だついたままであり、これで斬り付けようものなら下級妖怪を軽く滅すること出来る。封印じゃないのかよ！ っと思っただ方もいるだろうがいや違う。実際に妖怪の生命活動そのものを封ずるのだ。それに気付いた時はかなりびびった。自分の意思じゃない限りそんな事はないのだが。

兎にも角にもすばらしいパワーアップを遂げた俺。これが人によってもたらされたんじゃないやなかったらもつとよかつただけど……

うう、蓮姫のバカヤロー！ 俺は大器晩成型だからほっとけば強くなれたはずなんだ！ ナメック長みたいな他人の協力で得られる力なんかホントの力じゃねー！

と、思ったり思わなかったり。それを言ったら天正の能力全否定だし。

「と、言う訳で俺は思ったんだ。強くなりたいってね」

「言ってることはカッコいいけど動機がいまいち不純だね」

「ほつとけ。去り際の蓮姫にあんなこと言われたら意地でも強くなるしかないじゃないか」

そう。近くの妖怪の集団の主、八斗蓮姫は協定を結んで数日後に帰ってしまった。本人は泣く泣く帰って　そういう割には笑みが浮かんでいたが　いったが彼女との去り際がこれだ。

『舞風。貴方は弱いわ』

『直球ですね。俺の心に10ダメージ』

『そもそも能力はね。臆気なのよ。あるようでなく。ないようである。なのに貴方の能力には自分で決めた限界がある』

『そうなんですか。俺の心に20ダメージ』

『貴方の限界を取っ払いなさい。そうすることで貴方は強くなれるはずよ。次に会うときはその力を見てあげる』

『は？　なんです。あと再戦するの？　嘘でしょ？　俺の心に50ダメージ』

『じゃあ。頑張りなさい。楽しみにしてるわ。大妖精舞風』

『……俺の心に100ダメージ。舞風は死んでしまった。おお、死んでしまうとは情けない。誰か俺を助けてください』

「　　みたいな感じ？　俺はどうすればいいと思う？」

「死ねばいいと思うよ」

「お前のあの時の涙はなんだったのか俺は今激しく疑問に思っ」

閑話休題

俺にもまだ成長の余地があるのだ（って言うか生まれて一ヶ月で成長ストップなんてことも嫌だが）と言う事は分かった。俺は大妖精を越える超妖精になるのだ。自分で言っただけ嫌になつた鬱だ死のう。

ダメだ。これじゃ全然話が進まない。俺は限界を越えるんだ。そのための特訓をするんだ。

「じゃあ舞風。こうしない？」

「お？ なんだなんだ？」

「今から勝負して、勝った方がこれからと明日の予定を決めるの。」

それを毎日この時間に、勝負の方法は勝った人が決めるの。今日は最初だから舞風が勝負の方法を決めていいよ」

「聞き逃した。とりあえず勝った方が明日の予定を決める感じ？」

「うん。そうだよ」

それならばと俺は意気込んで勝負を受けた。

さて、真可の言っていることをもう一度よく見直して欲しい。そして、その結果が……

毎日ぶっ続けて真可の勝負
羽目になった。

と言つ名目の遊びに付き合わされる

-
-

「なんてことがあったんだ。酷いと思わない？」

「話をよく聞かなかった君が悪い」

「今俺は俺に全く優しくない周りに絶望した」

天正さんが実にいい顔で笑いかけてきました。胃に穴が開く思いです。誰か俺を助けてください。

はてさて、今俺は天正と今後の方針について話し合っている。それに真可の話が出たことについては……まあ世間話的なものだとも思ってくればいい。それだけに今回の話は中々に胃にもたれる。

「……で、本当にやったのは人間なのか？」

「うん。間違いない。一緒にいた妖怪からも証言は得てる。間違いない、人間だ」

そうか、と短く呟き、俺はため息をついた。つい先日、この山のそう離れていない場所でこの山の妖怪が攻撃を受けた。二人で行動していた時に突如不意打ちを受け、片方は即死、もう片方はなんとか撃退させることができたが、その身の傷は浅くはないらしい。元人間としては心の痛む話だ。同情とかじゃないことは分かるが、なんとも言えない感情が心に巡る。

しかし、おかしいものだ。何故人間が不意打ちとはいえ、妖怪を即死させることができるのか。この世界のことはまだ分からないが文化レベルがそれほど高くないように見られる。高いところまで飛び、

あたり一面見回しても町は勿論村一つ見つからない。日本では陰陽師と呼ばれる霊媒師が妖怪退治、なんて話を聞いたりはした。勿論半信半疑であるが。だがこの世界に陰陽師がいるなら俺は否定のしようもなく納得するだろう。それは俺を含む妖が存在しているだけで納得できてしまう。

だが、まだ早い。俺の世界でも陰陽師が確認されたのは6、7世紀くらいだったはずだ。文化レベルがずれている。それは妖怪に対抗するためある力なのかは分からないが……推測だけではやはり何とも言えない。

「……実際に調査する必要があるな」

「やはり君もその結論に達するか。でも相手は下級妖怪とは言えないで即死に追い込む何かを持っている。迂闊には出られないんだ」
「だから俺、か。確かに今の俺なら湖を離れて活動することもできるし」

俺はあの湖の妖精だ。それは大妖精となっても変わらない。あの湖から離れれば離れるほど俺の力は小さくなり、やがて消える。だが、今の大妖精の力ならばそれなりに遠くまで出ても存在することが出来る。人間の里が何処にあるのか分からないが、探すくらいなら出来る。能力で力を封じれば俺はただの子供になってしまうから潜入も可能だろう。

「面倒ごとを任せてしまって、すまないね」

「山の為。ひいては真可やお前のため。やれるだけやってみるさ」

本当ならここで軽口を挟もうと思った。だが思案するべきことがそれを邪魔する。

妖怪は人を食らい、人は妖怪を恐れる。

『妖精舞風』はそれが本来の形であることはなんとなくだが理解していた。

しかし、元人間としての舞風は共に生きたいと思ってしまっている。

どうしようもないのだ。ならば今は自分に出来ることをやるしかないのかもしれない。

幕間（後書き）

人間はいる。けどここが過去だと気付かない。まあ普通東方って知らなきゃ異世界としか思えませんよね。

さて、『妖精』舞風は晴れて『大妖精』舞風になったわけですが……

次から題は大妖精にするべきか……それとも今のまま通すべきか。

誰か意見をくださる方居られないでしょうか？

そうそう。まさかの東方 project 関連で大学初の友人が出来ました。いつか文化祭で一緒にケロ？とか踊ったりするのかとドキドキします。

そんなことありえないって？

夢が見たいじゃないか？

外伝 鬼姫と妖精（前書き）

外伝三件目。たぶんこれで一段落ですね。

タイトルから分かるように、今回は彼女の話です。

外伝 鬼姫と妖精

私の名は蓮姫。八斗蓮姫と言う。

いくつの年月を生きたかも分からない。所謂大妖怪と言う奴だ。

誕生したその時より鬼として強大な力を持っていた。それを別段特別だと思った事はなく、私はただ自らの力を研磨することに勤めていた。

だが、いつの間にか里一番と呼ばれていた大鬼ですらあっさりと打倒できるようになり、それなりに歳を重ねたときには片手一本で里の鬼を全滅させることができるようになっていた。したがって、里の者は私をこう呼んだ。

『化け物』、と。

そんなこと、鬼として生まれたときから知っている。私は化け物。強者を求め、そして打倒することだけを目的に生きる者。

私は生まれた地を後にした。弱者しかいない場所に、私がいる意味はない。

言ってしまうなら強敵を探す旅。笑ってしまう内容で、井の中の蛙に過ぎない自分ならば簡単に見つかるだろうと思われた。

しかし、それは長く、果てないものとなったことを今この場で語っておこう。

大天狗と呼ばれるものを指一本で倒し、最強の幼獣とやらを妖力だけで圧倒した。群れを成し無力な力を振るってくる人間など論外だ。気付いたら何百と言う時を浪費していた。メキメキと強くなっていた。肉体に反し、私の心は時が経つほど乾いていった。自ら名乗るでもなく、私は最強の鬼姫の名を欲しいままにしていた。

私は何で生きている？ 嗚呼、こんなことならばもつと弱く生まれてくれればよかったのに。

そんな考えを馬鹿らしいと思いつつも禁じえなくなっていたある時だ。私は私と同じように山から降り、妖怪の住まう山を統治する鬼の話を聞いた。

それを聞き、私は乾いていた心が僅かながら沸き立った様に感じた。私はその山の近くの妖怪の軍を強襲し、伝言を運ばせた。こんなことをしたのは初めてだった。戦うのは次の満月の日。戦いの時を先延ばしにしたかったのはこの熱い心を少しでも長引かせたかったからだ。

そして、戦いするとき。私は单身その山に乗り込んだ。待ち構えるようにして陣を構えていた妖怪たちは私の姿を見た途端に逃げ出した。所詮弱小妖怪、それらにはさほど興味を抱かず、私は白い髪の鬼を見た。それは私に比べると大分若く、力も大分劣っているように見

えた。それでもまだ戦う気ができたのはその者の目だ。圧倒的力の差を感じ取りながらも決して退く様子を見せない。その姿勢は感心できた。

ふと気付いてみるとその天正と名乗る鬼の後ろには一匹の妖精と天狗がいた。余りにも妖気が微弱すぎて気がつかなかった。私は沸き立つ思いを汚されたように思い、不快な表情を隠すことすらせずにそこからいなくなるように言った。

しかし、あろうことか妖精は私に反抗した。たかが妖精がだ。憎らしい。妖精は所詮邪魔者。存在自体害しか及ぼさないようなものなのだ。もしかしたらこの鬼の意図なのだろうか？ だとしたら対する態度を変えなければいけないかもしれないと思った。妖精は生意気な口を開き、私をイラつかせる。そして私が口を開いたとき、ふと口を開きながらも声が響いていないことに気付く。

妖精が冷や汗をかきながら口に笑みを作った。それで私が感じたのは怒りだった。能力持ちの妖精。考えるだけで腹立たしい。私は旅の途中何度か能力持ちの妖怪と戦ったことがあった。中にはそれを駆使し、私に傷を負わせた者もいた。だが、中には気に食わない者もいた。周りを煙に巻き、自分だけそそくさと逃げ出す下賤な者。よく見てみるとこの妖精はそれに似ているような気がしてならない。私は怒りを心に覚えた。

戦いが始まった直後、私は妖精に切りかかった。今は他などどうでもいい。ただこの目の前に存在する煩わしい存在を徹底的に排除する。

そうして、私はその妖精の体を何度も何度も砕いた。体の骨を踏み

砕き、剣で何度も切りつけ、頭を殴り粉碎した。髪の毛を引きちぎり、羽をもぎ、頭を万力のように締めつけた。ただの妖怪ならば痛みだけで精神が崩壊するだろう苦しみ。

しかし、そいつは諦めることなく、あるうことが私に反撃まで食らわせてきた。屈辱なのは私の剣を使われたと言え、体に傷をつけられたこと。私はもう再生もしなくなった妖精を天狗に見せつけ、晒した。そうすればこの天狗の恐怖に歪む顔が見れると思ったから。

だが、違った。所々ボロボロの圧倒的弱者はその顔をこの上ないほど怒りに歪ませていた。宝物を壊された子供のようなその顔を見てまた不快になり、妖精を投げ捨てた。ごろごろと転がり、虚ろな目がこちらを捉えたとき、私は見下すように笑っていた。

そうして私は目の前の弱者に目を戻した。さつさとこいつを　してしまおう。そうすればこの不快な気持ちは消える。そうに違いない。私は未だ不思議と高揚感に近いものとそれを嫌悪する板ばさみな感情を抱きながら天狗に向き直った。

その時、私は爆発的な妖力の増大を感じた。それほど強大ではない。しかし異質。根底の見えない深淵のようなものを感じ、振り返る。体だけを起こし、こちらに怒号を上げながら妖精は私の剣を投擲していた。

何故立てる。回避よりも何よりも私はそれを考えた。おかげで回避が遅れることになったが十分に間に合う。これなら問題はない。そう確信を得ながらも、私は体に突如降りかかった鈍い痛みを歪めていた。持ち上げようとした足は動かさず、私はその場に縫い付けられた。自分の腹に吸い込まれていく剣をまるで人事のように見ていた。衝撃は体全体に通る、私はたたらを踏んだ。体が異常なまで

にだるい。

そして、再び感じた力。異質さは感じない。しかし先の物に比べればとんでもなく大きな力。それを感じた先には今まで何処に居たのか、鬼が私の体を軽く飲み込むほどの妖力の塊をその頭上に掲げていた。その顔は不気味に微笑み、その目は憎悪に近い感情を秘めていた。これは拙い。しかし体は動けなかった。相殺することも出来ず、私はそれに飲み込まれた。

○
○

ほんの数秒。しかし確かに私は気を失った。

剣から感じる力は弱くなっている。恐らくあの妖精が弱まっているからだろう。立ち上がるうと思えば立ち上がれる。そうすれば残りの力だけで十分あの『三人』を殺すことは出来るだろう。だが、それをする気にはなれなかった。

ここまで叩きのめされたのは初めてだった。悔しさなどの感情を感じない。それらを思う前に自分でも分からない疑問が頭を駆け巡っていた。

『強さ』とは、一体なんだったのだろうか？

強大な妖力？ それもそうだ。ありとあらゆるものを砕く拳？ これもそう。

私はその両方を持つ、自他共に認める最強の鬼。ならば、何故私はこんなところで寝転がっているのだろう。何故、強さで劣る者達に私が『負かされている？』

そうして私は自らの矛盾を悟るのだ。

思えば私は長い時を『弱者』を打倒して生きてきた。ありとあらゆる

る妖怪と戦おうと、その前に気付いていた。その妖怪が弱く、脆く、私の足元にも及ばない存在であることなど。

いつから『強者を打倒する旅』は『弱者を痛めつける旅』にすり替わっていた？

情けなさと、悲しさと、笑いがこみ上げた。自分は今まで何をやってきたのだろう。何故わざわざ強いものを求めたのだろう。自分が鬼だから？ 違う。最強を証明するため？ 違う。

ただ、それ以外に目的がなかったからだ。戦いによってしか自分を表す方法が知らず、その為に生きてきた。どれだけ視野の狭い生だったか、今となっては振り返ることも出来ない。私は恐れていただけだ。力を以って他者を蹂躪し、破壊する以外に自分に道がないと思ひ込み、それ以外ありえないと逃げていただけだ。

今からでも、取り戻せるだろうか？
今からでも、間に合うだろうか？

フツ、と自虐の笑みがこぼれた。

体を起こし、剣を抜く。痛みが走るがそれもすぐに消える。

何を悩む必要がある。私は鬼だ。

何を恐れる必要がある。私は鬼姫だ。

誰にも私は阻めない。いままで目の前の壁をぶち壊してきた。だが、壊す以外の方法もあるはずだ。

新しいことを恐れるな。変化は誰にでも訪れるだろう。
自分の目的なんてこれから作ればいい。

あの妖精は立ち上がるたびにどれほどの苦痛を味わった。体中の骨と言つ骨を砕かれても叫び声一つ上げずにこちらに立ち向かってくるあの妖精の目はどんな輝きをしていた。勇ましく、私に立ち向かってきたあの子供はどれだけあがいて見せた？ そしてそのあがきの結果、見事この私を打倒してみせた。

出来ない事など、無い。出来ないと決め付ける者が出来ないだけだ。

嗚呼、見下すだけではなく、自分から近寄って、手を差し出してやることくらいできない訳がない

「友好協定、ですか」

「そう。不服？」

「……戦わないで済むなら。それに越したことはありませんが……」
「なんで突然そんなことを言い出したのか不思議、と言いたそうね
……その烏天狗。そんなに睨まないで頂戴」

私が妖精にいくらか妖力を流してやると、目を回して気絶してしま
った。恐らく今までにないほど妖力を供給したせいで気を失ったの
だろう。未だ腕の中に抱えていると烏天狗の射殺すような目がこち
らを睨んでいた。この子があの天狗にとってこの上ないほど大切な
存在である、と言うことだろう。微笑を浮かべながらもさらさらと
触り心地のよい白銀の髪を撫でた。

「簡単よ。この子に、魅せられちゃったもの。このちっぴけなのに
猛々しい妖精に」

その言葉を聞くと天狗はギョツとした顔になり、天正は何処となく納得したような表情を見せた。どうやらこの二人も同じようだ。本当に、罪作りな妖精だこと。

「……分かりました。協定を結びましょう」

「天正様！？　しかし！！」

「真可。どうあってもこの方に勝てないのは分かっているでしょう。それに、恐らくソレはこの子にとっても都合がよい」

「……それがどういう意味か。聞いても？」

「妖精を毛嫌いするのは皆一緒なんですよ。ひとくくりにしたがりではない。彼を最初見たときの貴方の様に」

「なるほど、いじめられっこなのね。利用されるようで癪だけど、仕方がないわね。ほら、返すわ」

私が妖精を手渡そうとするとぶんどるようにして私の手から持っていった。足早に去っていく少女を見て腕の中から消えていくぬくもりを残念に思いながらも私は話を続けるために天正を見た。

「本当に、あの子は何者なのかしらね。妖精にしては智能も、諦めの悪さまで桁違いなんだから」

「……何者でも構いませんよ。彼のおかげで今僕や彼女はこのままで居れるんです。彼がいたから僕は……」

「そうね。私もここまで生きてきて今更妖精に考えを変えられるなんて思いもしなかった。彼がいたから私もまた新しく歩み始めることが出来る……皮肉ね。弱者などいなくなればいいなんて思ってたのに」

「彼は強いですよ。僕らなどとは比べ物にもならないほどに」
「ふふっ。そうね」

少し見る角度を変えただけで様々な物がまったく違って見える。不思議だ。今まで見てきたものをどうしてこう言った視点で見ることができなかつたのか。

これからどんなことが待っているんだろう。野に咲く花が美しく見える。いつもなら踏み潰そうなども考えてしまうのに、実に滑稽だ。

嗚呼、楽しみだ。

これからが、真に私の『生きる道』だ。

外伝 鬼姫と妖精（後書き）

彼女の場合は真可と天正の両方を兼ねている感じですね。

強すぎる力と特異さによる孤立。一見真可と何も変わらなくなっ
って感じですけど、まあ実際そうなんですよね。

唯一言うなら真可は子供で蓮姫は大人だったこと。

何もかも知った気になり、いつの間にか視野が狭くなってしまっ
た。

因みに彼女は今現在最強です。今で妖力等は幻想郷の大妖怪と五分
なぐらいを想像します。

妖精と出発（前書き）

結局題には『大』を付けない。付けたら「あ、この辺りから大妖精が登場するんだ」みたいな勘違いを防ぐため。

やっぱり大妖精じゃなくて超妖精にでもすればよかったかもしれない。なんか？っぽいからやっぱりパス。

妖精と出発

蓮姫との戦いがまるで嘘のように。あれからそれなりに時間は経ち、山には平和が戻ったかと思いきや一難去ってまた一難。どこぞのものならいざ知らず、俺達の山の妖怪が攻撃を受けたなら動かないわけにはいかない。

「本日は晴天だ〜」

と、言う訳で旅だ。何言ってるか分からない、と言う方は察してくれ。

それでも分からない方には説明しよう。察してくれとか言った意味。ぶっちゃけ雰囲気作りだ。

天正からの報告を受けた後に支度を整え、その二日後の今日、俺はこうして旅に出るわけだ。本当なら真可も連れて行きたかったんだけど俺は羽をしまつて人間に偽装するので、妖気を隠すことに慣れていない真可を連れて行くことはそもそも出来ないのだ。

彼女は泣く泣くお土産に期待してると言い残して去っていった。それは今より数分前の出来事だったりする。見送りが天正だけって寂しすぎる。

さて、今の俺は先程述べた通りに服装こそ変わらないが羽を隠して

いる。人に偽装するのに羽を出しては本末転倒だ。妖力のほうは能力で隔離し、俺が存在するただけの力にだけ回されている。要するに今の俺は人間となんら変わりないわけだ。更に言うなら姿も一番最初、特に子供だった頃に帰ってしまい、空も飛べなきゃ妖力弾も撃てやしないし振れない剣を持っていく必要もない。

しかも、未だ人一人すら見つからず、俺は正しく草を掻き分けてでも人里を探さなければならぬ。

……手がかりが妖怪が襲われた場所だけってのはどうよ。

それでも仕方なしに俺はその場所に向かうわけだ。

○ ○

俺はこの世界に神様なんていないと思う。万が一いたとしてもそれは恐らく見た目だけ美人の性悪女神だ。そうに違いない。もしも男なら居ない方がマシだ。って言うか死ね。

まあ実際にいるかいないかなんてどうでもいい。ただ、今日この日の運の悪さと嫌な偶然についてだけは恨み言を申したい。

「神様なんか死ね！ 死ね！ 死んじまえ！！」

「G y a a a a a ! !」

今現在妖怪と激しい鬼ごっこを繰り広げている。脇目も振らずに失踪している。言語を解さず、姿形も虫　ムカデのような　なので、恐らく低級妖怪でも特に力の無いものと見受ける。

なんてことはない。いざ妖怪が襲われた場所に行ってみればそこは殺された妖怪の妖力が充満しており、妖怪にとっては非常に心地よい空間に様変わり。とは言っても妖精な俺には腐臭漂う殺人現場のようにしか見えない。死んでるのは妖怪だけ。

今限定で力が皆無な俺はそそくさと退散しようとしたが、一匹に見つかり、今に至る。元は獣道だったのに今は森の中。逃げることに夢中でそんなこと気にしてられない。この柔肌が後々かぶれないか心配。

封印を解放してもこいつは俺を襲うことをやめないだろう。こいつは妖怪は捕食対象と思えば実際には食うまで止まらない。食われてやる趣味もないが、こんな状況では自分に深く刻んだ封印処理を解くには時間がかかりすぎる。誰だ万が一の為強く封印なんて言った奴。俺だった。

紙一重で攻撃を避けるようにはしているが攻撃は無駄に俺の服を掠り、ポロポロにしていく。ここでも来たかポロリフラグ。誰も男のポロリなんか望んでねーよ。誰か助けてください。今なら純粹無垢で清らかな微笑を見せてやるから。

なんて、何処の妖怪が人間 に偽装した妖精だけど を助けるんだっつーの。人間を助けるなんて

「G y e a a a a ! ?」

人間以外……ありえないですよ〜。

振り向いてみれば妖怪のちょうど頭部の部分に突き立った一本の矢。よくよく見るとただの矢ではなく、お札が括りつけられている。神社でよく見る、破魔矢とでも言うのだろうか。

視線を横にずらしてみるとそこには四人ほどの成人男性、人間が弓を番えていた。苦しむ妖怪を他所にそれは放たれ、その妖怪の体に吸い込まれるように飛んでいく。だがそれでは仕留めるには足りないだろう。苦しみながらのた打ち回る妖怪を哀れには思いながらも人間に視線を戻し、ギョツとした。

熊のような巨体な人間の肩に担がれたゴツイ銀色に光る筒。それがどういった類の物かはなんとなく心が理解した。

眩しい光が辺りを覆い、俺は目を硬く瞑った。それはすぐに晴れ、俺の目はゆっくりと開いていく。

あったのは死体。頭と胴体の幾分かが消滅し、力なく横たわる妖怪の姿だった。

目を疑う。いやそんなレベルじゃない。今あったことを何かと理由をつけて幻だと決め付けようとしている自分がいる。それほどまでに衝撃的な光景。だが納得。妖怪を一撃で消滅させられる理由もこれならばと思ってしまう。

こちらに静かに近づいてくる男性達の服装は言うなれば和服。しかし、ポケットやその肩の銀の筒が日本と言う故郷のイメージを削いでいく。

「君！ 大丈夫かい!？」

「え……あ……」

話しかけられているのが俺だと気付くには時間はかからなかったが、戸惑ってしまったのは確かだった。まさかこう簡単に接触できてしまうとは思えなかった。

なんと応えていいのかも分からず、うろたえる俺は特に不審げな目で見ることはしなかった。後々考えてみれば俺の姿形は子供。妖怪

に襲われて恐怖から声が出なくなるのも仕方ないことに思えるだろう。

「ふむ。誰の子かは分からないがひとまず連れて行こう。妖怪退治は終わりだ。撤収するぞ！」

リーダーっぽい男性の声に頷き、各々の武器を抱えて撤収を始める。ぼんやりしながらそれを見ていると男性が俺の体を持ち上げ、肩に座らせるようにして抱え上げた。いきなりのことに驚きながらも暴れたりはしない。言うならば今の俺は借りてきた猫のような状態なのだろう。

ラッキー、いや、アンラッキーとも言うのだろう。確かにこうして人間に間違えられて人里に連れて行かれるのなら当初の目的は達せられる。だが身元の特定なりされたら流石にばれる。俺の体は妖力を失いながらも人らしさが無い。真可ほどの妖怪には俺の偽装はすぐに剥げる。って言うか勘のいい人間には多分ばれる。

一抹の不安を抱えながらも俺はやはり大人しく肩に乗せられていた。途中名前やらそうしてあそこにいたやら聞かれたが、名前以外は暈した。正直に言えることではないのでいまいち覚えてないを連呼した。普通なら疑惑の目で見られるだろうが混乱してると思われているのだろうか。深くは聞かれなかった。

と、唐突に男が歩みを止めた。先導していた人間も足を止めている。そこには何もなく、先程と同じように森が続いているように見えた。が、よくよく見ると違う。目の前の森からは『自然』が全く感じられない。俺は妖精だ。自然の結晶のようなもの。僅かながら大地の

力なり湖の力を感じられる。木も然り。だが目の前の物からはそういつたものが感じられない。

俺がうんうんと唸っていると戦闘の男が鈴のような物を取り出し、鳴らした。おいおい、妖怪でも呼び寄せる気か？ そう思った次の瞬間、目の前の森は幻のように消えた。

見えたのは機械の街。機械の家。電子機器の存在する都市。恐らく俺の世界から見ても高い技術力。

啞然としながら俺は頭をフル回転させた。

何故ここまで発展している？ 弓も使うほどののに何故だ？ 言うなればオーバーテクノロジー、俺の世界でもここまでの文化はない。思えば最初からおかしかった。何故日本語だ。何故妖怪だ。まるで幻想のようなものが実在する世界。どう考えてもおかしいじゃないか。

気付いたら妖精？ おかしいだろ。何故そんなことが起きうる。オカルトを全否定するわけじゃないがどうしてそう道理も何もかもをぶっ飛ばせる。

俺は気付いたら妖精になったのではなく、未曾有の大災害みたいなものが起きて、寝ているうちに死んでしまって、妖精に生まれ変わったのではないか？

もしそうだと言つなら。近代的な技術を持ちながらも開拓を出来な
かった理由も納得できる。

そう、もしかしたら。

……俺は、とんでもない『未来』に生まれ変わったのかもしれない。

妖精と出発（後書き）

勘違い乙。

と、思った方、甘い！ 甘いぞお！！

そもそもこの舞風の推測が間違つてると誰が言ったあ！！
誰が太古であると証明したあ！！

……なんて、タグにしっかり書いてますが。

大学で初めてのレポートを出されました。下げるを提げるって書いたらびりびりにされました。マジ鬼畜です。

生きていける自信がない。心が折れてしまいそうだ。

妖精と薬師（前書き）

執筆が遅れた。ああ、レポートなんか、死ねばいいのに。

さて、今回の話は題のとおり、あのお方が出てきます。

俺だけは……俺だけは他と違う出し方にしようって決めてたのに……
…何も浮かばなかった！！？

妖精と薬師

舞風です。なんと私は衝撃的な事実気付きました。

なんとここは異世界ではなく、未来だったのです！！　でーん！

と、思い込んだ私でございますが、いざ考えると矛盾が出るわ出るわ。あくまで最も有力、と言うのが正しいですかね。

さて、抱えられて妙に発達した街に連れてこられた俺ですが、物珍しそつに見ているとまた妙な目で見られてしまったので今は無関心を装ってます。たまにチラ見はするよ。家の外装とか。

どれもこれも和風を取り入れ洋風を足したような家になっております。言うならば屋敷にエアコン取り付けたような感覚。分かりにくいか。

そこかしこから出てくる街の人に戦績を自慢しております。その反応は暖温かな賞賛。妖怪殺してほめられるって今の俺には違和感でしかない。

やがて進んでいくと大きな屋敷がいくつか並んでいる場所に着いた。少なくとも五つくらいはあるだろうか。恐らく街の長みたいなのがいるのだろう。俺は緊張の趣で入り口を潜った。

「おお、戻ったか。ん？　その子供は？」

迎え入れたのは初老の男性。顔色が少しばかり悪いように見えたが、それを思わせないためか笑顔で迎えた。だが俺を見ると銀色の眉を持ち上げて尋ねた。早くに俺に目が行くのは、まあ服がボロボロで元の形状すら分からない状態なのだから仕方ないだろう。

「この子は妖怪に襲われていた子です。恐らくこの里の子かと思っ
て連れ帰ったのですが……」

「ふむ。しかし見たことがないな。別の里の子ではないか？」

別の里なんてあるのか？ いや、だが今はそういうことにしなきゃ
やばそうかもしれない。

「どうも恐慌状態のようでした。名前くらいしか情報はありません
でした。虫の妖怪に追い回されているところを保護しました」

「その割にはかすり傷一つないようだが……」

男性は銀の髭を撫でるようにして訝しげに俺を見た。俺のスーパー
回避スキルが仇になった瞬間。こんなことなら切り傷の一つでもも
らっておけばよかった。でも痛いかな。うん、悩む。

「……まあ人間であることに間違いはないだろう。その子はわたし
の娘に預けて報告を聞こう」

「呼びましたかお父様」

ふすまを開き、現れたのはその父と呼んだ男性と同じ銀の髪的美少女がいた。年齢は俺の今の体よりいくつか上に見える。

「おお、ちょうどいい。その子と少しばかり遊んでいてくれないか？ 報告を聞き終わるまでの間でいい」

「……はい。分かりました。おいで」

大柄の男性の肩から下ろされ、手招きされるままその少女の方に向かった。その瞬間感じられる怖気。

少女の目が射抜くようにこちらを見ていた。顔は満面の笑みなのに、目が笑っていないとはこういうものなのだろうか？

若干躊躇ったが、少女の手が俺の腕を掴み、やや強引に俺を引っ張っていった。入り組んだ屋敷の中を左に右に、やがてたどり着いた場所はまるで研究所、のように思えた。現代科学　とは言っても今はもうないが　に似た雰囲気を感じた。

それに目を囚われ、手を引かれるでもなくその部屋に入った俺は後ろから聞こえたドアの閉まる音に気付き、振り返った。少女がこちらを見ている。今度はその顔に笑顔はなく。その目は訝しげに、細められていた。

「　私は永琳。八意永琳」
やじこるえいりん

少女は名乗り、そして俺を見た。

その目は得体の知れない物を見るようであり。
その目はこちらの価値を見るようであり。
その目はモルモットを見ているようにも見えた。

「貴方は『何』？」

少女、永琳がそう言った時、俺は今日か緊張がよく分からないもので体がビクリと震えた。

バれている、少なくとも人間ではないことは。

打開策はない。全くを以ってない。ここは密室。逃げ場はない。出ようにも恐らくあの良く分からない結界のような物が邪魔するだろう。

俺は観念し、息を一つ吐いた。

「俺は舞風。大妖精舞風だ。しかし、それを暴いてどうする人間？」

「大妖精……？ そんなの聞いた事がないわ」

「俺が初だ。そう名乗るのは、だがな」

永琳が考え込むようにして顎に手を置いた、だがその目線は相変わ

らず俺から外れていない。やがて何か疑問に思ったのかその口を開いた。

「貴方から妖の気配を感じないのは何故？」

「……何故そんなことを聞く？」

「貴方に口答えをする権利はないわ」

「こちらも命令される筋合いはない」

「この状況でよく言えた物ね」

確かに。普通ならそれもそうだろう。閉じ込められた者と閉じ込めた者、どちらの立場が上かなんて普通考えるまでもない。そう、普通なら。

「侮るなよ永琳。今ここで力を使えばお前を殺すくらい出来る。確かにさっきの奴らは来るかもしれないけどな」

「そうだったら貴方は終わりよ。それでもそうするの？」

「そう簡単には死なないさ。そのくらいの力はある」

俺はそこで言葉を切り、向こうの出方を見る。我ながら口だけは回る、と呆れながら思った。封鎖されたここでは俺は再生に力を回せない。つまりはったりだ。もしも戦闘になったら俺が圧倒的に不利になってしまう。だがそれは思わせないように。

やがて永琳は顎に置いた手を下ろし、息を一つついた。

「そう。ならお願いにしようかしら」

「……？」

「命令ではなくお願い。それなら貴方は答えてくれるでしょう？」

何をバカな。そう思ったが永林の目は本気だった。その顔は笑っていたが。相手の意図を察して俺はフツと笑った。

「ならば俺もお願いするか。俺の聞きたいことを貴女は教えてくれるだろうか？」

「お願いなら仕方ないわね」

言葉遊びに見えて交渉。やられたことはやりかえせる。お互いの立場が同じなら。お互い殺し殺される立場にある。思いもしない考えをするものだと驚いた。

149

「お前は俺に殺されないか心配じゃないのか？」

「貴方、口では殺すとか言っても殺気がないんだもの。今まで人を殺したこともないんでしょう？」

バレてた。俺の精神を子供だと知って引っ掛けた言葉。正しく俺は未だ人一人妖怪一匹殺してない。頭の出来ではこの永琳と言う少女に叶いそうにない。

○
○

「『封を操る程度の能力』。そう、それで貴方は力を封印しているのね」

「如何にも。本当なら下級妖怪など相手じゃないが施した封印が思いのほか強くてな。手間取った」

「貴方、結構馬鹿でしょ？」

いきなりだな、と俺は肩を竦めた。妖怪に追われていた事から話したが、我ながら大失敗だったから否定の仕様がな。話し始めてようやくお互いの警戒は薄れてきた気がする。だが俺の様子を見て口

元に笑みを作った永琳を見て眉をひそめた。

「？ 何がおかしい」

「貴方、その口調似合っていないわよ。気にしないからいつも通りに戻しなさいな」

「……貴女には叶わないよ永琳。じゃあいつも通りいかせてもらおうか」

幾分か口調を戻し、俺は永琳を見た。先程までの居心地の悪い目は少しマシになっている。

「じゃあ俺も聞かせてもらおうか。この部屋はなんだ？」

「それこそ貴方が聞いてもどうしようもないでしょうに……ここは私の研究室よ」

「永琳の研究室？ 何を作っているんだ？」

「クスリ、よ。『あらゆる薬を作る程度の能力』と言うのが私の能力。この街の医療の大半はわたしが受け持っているわ」

「それはまた複雑な能力だな」

『あらゆる薬を作る程度の能力』。聞くだけ聞くと正にとんでもない物に聞こえる。言ってしまうえば治せない病はないと言っているものだし、異例極まりない能力だろう。自分の能力をしょぼくれた物とは思った事はないがそれでもまだ出来ることに限界が見える。これを言ったら限界がないと言った蓮姫は怒るかもしれないが。

しかしなるほど。少女が見た目の割りに大人びている理由が何と無

く分かった。歳若くも他人とビジネス的に触れ合う経験が多くなればこつもなるだろう。俺を人間じゃないと見破ったのもこの観察眼があればのことか。

「じゃあ次、貴方はなんでわざわざ自分に封印を施して人間を偽装したの？」

「……特に理由はない、かな。あわよくば入れればと思ったただけだ」

我ながら苦しい言い訳だ。だがそもそも俺にメリットがないと思うのが当然だ。妖精は嫌われ者だし、俺が唯一の会話が出来る個体だから徒党を組んでの攻撃はありえない。普通なら妖怪と組むなんて考えは除外するだろうが、いかんせん永琳は頭がいい。可能性の一つとして頭に浮かべているかもしれない。

これだから頭のいい奴との腹の探りあいは苦手なんだ、と泣き言を零しそうになったが神妙な顔をして考えている永琳にする質問を考えなければならぬ。

と、今の今まで閉められていた戸が開く。入ってきたのは先程永琳がお父様と呼んだ男性であり、やはり顔色の悪いながらも笑みを浮かべていた。

「話は終わったよ。彼らはその子の親を探しに行くそうさ。君、お父さんの名前を覚えてくれるかな」

「……えと」

なんて間の悪い。それは永琳も思っていたようでやや残念そうに嘆息した。俺はこの状況をなんとかしてもらえるように永琳に視線を送る。数秒見つめ合っていたがやがて一つ小さなため息を自分で自分の父親を見上げた。

「父さん。彼、両親がいないみたいよ」

「……そうだったのか。悪いことを聞いたね」

「それで、彼を私の助手として住まわせたいのだけど、いいかしら？」

なにやら色々とツツコミどころのあるような事を言ってくれている。確かに嘘は言っていない。それ以上に必要な事も言っていないが。だがその辺りは俺のためだろう。申し訳なさそうに瞳を伏せるこの人に内心謝りながら頷いた。

八意永琳がそうしたいなら、と彼はそれだけ言って部屋から出て行った。何故父親なのにフルネームで呼んだのだろうか。だがその辺りは家庭の事情だろうし深くは入らないようにした。

「じゃあ早速、その薬剤を持ってきてくれないかしら」

「……口実じゃなかったの？」

「誰がそんなこと言ったかしら？」

きたない流石永琳きたない。俺の予想の二手三手先に行く。

仕方ないから雑用に励もうと思う。ごめん真可、おみやげは持って帰れそうにない

妖精と薬師（後書き）

と、これで初の原作キャラ登場になります。

それにしても、永琳が地上にいたのって現代と比べて何年くらい差があるんでしょうね。そもそもそこらへんがはっきりしてないからオリジナルでやるしかない。

次から執筆速度が遅くなるお知らせ。とは言っても大学の勉強次第で変化するので結局は不明。

妖精と約束（前書き）

いくつか矛盾を発見してしまった！

東方wikiだけじゃなくて東方でwikiつてみるべきだったと反省している。いくつか辻褃合わせで編集するかもしれないが悪しからず。

あゝ、課題とか死ねばいいのに〜！！

妖精と約束

永琳の仕事の手伝い（と書いて雑用と読む）を受け持つようになり、早くも一週間が経過しようとしている。仕事にはそれなりに慣れたが、この環境に慣れたかと言われるればそれほどでもない。基本的に人と慣れ親しむわけにもいかない俺は屋敷内に引きこもり、もっぱら永琳と一緒にいる。ニートとか言うな。ちゃんと働いてる。

仕事は勿論、だが元々の目的は情報の交換だ。何気ない話から武器に関する話まで。因みにここが未来であるという根拠になりそうな情報はなかった。残念ながら。

薬師を名乗るだけあり、永琳は様々な薬の知識を持っている。恐らく俺の時代の物より進んでいるんじゃないかと半ばショックを受けた。風邪薬一つにしても次の日には問題がなくなるような代物だ。

俺もそれなりに里の外の話をした。だが俺は一体何をやって過ごしていたのかと聞かれ、答えに戸惑った挙句、友達の妖怪と遊んでいたことをうっかり零してしまった。あの時の永琳の睨むような顔は今も忘れられない。

そう、たまたま今は情報を交換し合う関係なだけで、本来の立場は敵同士なのだ。舞風としてはやはり人間と仲良くしていきたいので何とかしなければならぬ。

幸運にもその時はそれで済んだが、次ボ口を出したりしたら意外と危ないかもしれない。

また、永琳の話聞いてみると、彼女の父が言っていた他の里は確かに存在しており、この里と同じく結界で隠されているらしい。よく薬師として親子で行くそう。あのお父さんも薬師だったんですね。

各里に自分の生徒を持っているらしい。薬師って人気あるの？ っ
て聞いたらそうじゃなく、普通に先生みたいなことをこなしているらしい。豊姫や依姫やら名前が凄い生徒らしいがそれなりに真面目で自分の教えをよく吸収してくれると嬉しそうに語っていた。それを見ておばさんな担任を思いたしたが、すぐに変なことを考えていると見破られた。永琳怖い。

あの武器やらについては永琳にも詳しいことは分からないらしいが、唯一縮小化に成功した試作品などと語っており、別に巨大で持ち運びが出来ないものもあるらしい。威力は更に上だと言う。人類の英知が武器にだけ注ぎ込まれたらこうなるのだろうか……

そうして一週間にもなると俺はともかく永琳が俺に聞くことがなくなってしまう。そりゃそうだ。基本的に俺は遊んで暮らしているのだから。答えられることなどそもそもない。永琳も半ば予想はしていたのか、少しだけ呆れたように「密度がない人生ね」と言った。泣いた。

○
○

「そろそろ潮時かしらね……」

「ん？ 何が？」

それは一週間、ようするに七日目のことだった。いつものように薬品の調査やら運搬やらの雑用を手伝いがてら話をしていた時だった。突然永琳がいつものように考え込む様子を見せながら一言呟いたのだ。

「そろそろ出て行ってもらおうかしら？」

「ひどい！いきなり出て行けなんて！用済みになったらすぐにポイなの！？」

「……………」

「と、言う冗談は置いて、何で？」

冷やかな目に耐えられず、逸らした話を元の軌道へと戻すと永琳は考えるまでもなく、ニコリと笑って口を開く。

「もう用済み」

その瞬間全俺が泣いた。この一週間でそれなりに築けたと思っていた友情は儚い幻想に過ぎなかったようだ。そうか、ならいい。実家に帰らせてもらいます。

「まあ確かに俺が永琳に聞くことがあっても永琳が俺に聞くことはないもんな」

「これまで置いてあげただけでも感謝して欲しいわね。貴方、四日目から全部遊びの話かはぐらかしてばかりだったじゃない」

「バレたか。しかし嘘はそんなに言っていない自信はある」

「『そんなに』ってことはあるのね、嘘が」

「それは永琳も同じだろ？」

騙し合いと言うか、上げ足取りと言うか。会話に緊張感を持ったのは…………アレ？よく考えたら最近俺ろくな会話交わしてなくね？

主に蓮姫とか永琳とか蓮姫とか永琳とか。ほとんど胃に穴がレベルだよ。オウシット！！

永琳はやや驚いた　　って言うてもほとんど変わった様には見えな
い　　様子で俺をジツと見た。それは初めて会ったときの観察する
目に似てはいたが少し違って見えた。

「……ふふ」

「ははは」

不気味に笑いだけがこぼれる。しかもそれがどっちも子供って第三者から見たら絶対シニールだろ。

永琳の微笑の意味は分からない。どう言った感情を持って俺を見ていたのか分からなかったが、少なくとも嫌悪等のマイナス感情じゃない、と思いたい。

「貴方の力ならこの街の封印くらい簡単に破れるわよね。なら私の協力は必要ない、ここでさよならね」

「だな。でも分かるか？　入るのも多分自在だぜ？」

「……それで、貴方はどうしようと言うのかしら？」

「だからさよならじゃなくて、友達に対するまたねってことで」

永琳の目が少し、ほんの少しだけ大きく見開かれた。口元を抑えている。笑いでも堪えているのかもしれない。なんとなく馬鹿にされている気がしてムカつく。

「いつから私と貴方は友達になったのかしら」

「ってオイ！ 出端を挫くなよ！ ってかそれ何気に傷つく一言！」
「そう。貴方がそう言うならそうなのね」

永琳の目はやや穏やかになった気がする。今度こそあの嫌な目は消え去り、優しい目が俺の姿を映した。

「いつでもいらっしやい。今度は監視じゃなく、遊びにね」

「……気付いてたんだ」

「妖怪と友人って時点でおかしいと思うわ。普通はね。私からもなんとか知性のある妖怪の退治だけでも自粛させるように言ってみる」
「……ありがとう。俺の方も、俺が信頼できる奴だけだけど、永琳の事話してみる。きつと、なんとかなるよな？」

「次会う時も。敵でないことを祈るわ」

「そうならないように頑張るんだ。お互い。約束だ」

『妖精』舞風は割り切った。でも、割り切らずに済んだ部分がこれを喜んだ。それが何故なのか、分かった気がする。

そう、結局俺はまだ人間だったということだ。

永琳の家を飛び出し、人がいないのを見計らって結界を俺が通れるほどの隙間を開く。

勢いよく飛び出し、俺は封印を全て解放する。そうして、高く高く
羽ばたいた。

嗚呼、今、俺は嬉しいんだ

○
○

研究室の中は一気に静まり返ってしまった。何故か、簡単だ。あの騒がしい妖精を追い出してしまったから。

「……友達、か」

不思議と口元に笑みが浮かんでいた。今の義父に八意の家にごうして連れられてきた時にはそんなものは全く縁のないものだと思いついでいた。肉体は老化を遅延を促す薬を飲んでいるので見た目よりはずっと年齢は上だ。里の人に言えば気味悪がれるのは明白なので伏せているが。

そう、生きた年月だけを数えれば私は生まれてからまだ一年も経っていないらしいあの子より遙かに大人だ。

『友人』なんて存在は必要ないと、割り切っていたはずだ。割り切っているはずなのに

「……喜んでいるの？ 私が？」

拾われ、期待に添えられるよう努力して、そして私は里のために全ての知識を捧げてきた。

だが、彼といるのは、不思議と悪くない。

彼は妖怪とも友達だと言っていた。妖精がだ。普通なら並のことではない筈だ。だが、彼なら納得できる。

一週間、たったの一週間一緒にいただけだが、彼の人となりは理解できた。彼は誰に対しても同じように接することができるのだ。最初の演技だって、解いたらまるで長年の友人のようになっていた。

彼は、信用できるかもしれない。

人全てが善でないように、妖怪や妖精も同じなのだ。だから、私は彼との約束を果たす理由と義務がある。

そうなると月夜見つきよみを説得する必要があるかもしれない。だが、理由を明かさなのままの説得、できるだろうか……

私はいなくなつてまで頭を悩ませる妖精に対して僅かながら苛立ちを禁じえなかった。

妖精と約束（後書き）

矛盾その一、と言うか明かされてなかったからセーフなんだけども、実は永琳は月に移り住むプロジェクトを立ち上げた人物の中で最長齢ならしい。

その割には永琳って見た目若いよね、と思った結果の妥協案です。

蓬莱の薬は輝夜の能力を参考にして作ったらしいので、地上にいる内に作ったものではないでしょう。永琳の方が遥かに年上って話だし。

長々と言いつつ訳を並べてすみません。

あと更新が遅れてすみません。

合計PV60000突破記念(前書き)

本当は語呂よく50000のつもりだったけど放置している間に60000突破していた。

反省している。

今回の話は本編に……関係あるかもしれないね!!

合計PV60000突破記念

今の時期は世間一般的に言う夏と言う季節だった。

だがそれは自分が思っているより暑くはなかった。それが何故なのか考えるなど今の自分には不毛だ。意味がない。考えるならばこれを利用してどのように遊ぶかの方がずっといい。

「水浴びい？ なにそれ？」

とりあえずは湖でも入って涼むべきかと思って真可に言ってみた。その顔は疑問と言うより言葉を半ば理解している故の否定にしか見えない。

「烏天狗の私が入ってどうすんのさ。舞風は私を殺す気かい」

それでお前が殺せるなら苦労はないよ、と零してみたらボコられた。口は災いの元とはよく言ったものである。

結局、俺は一人で湖の浸かっていたが、上から襲い掛かってきた弾幕にブラックアウトした。

彼女曰く暇だったらしい。

俺の待遇のアップを再案した瞬間だった。

○ 「妖精達と日々」 ○

「花見よ」

「そこに何故に俺ですか？」

秋である。まごうことなく秋である。紅葉はその色がやや薄いような気がしながらも我が山の木もその一色に染まっていた。

珍しく来た蓮姫が何事かと思いきや酒の樽を両手に山まで来たのだ。そして何故か天正ではなく俺をチョイスし、二人で花見をする事になっていた。

自慢じゃないが日本酒は飲めない。ギリギリビールが限界だった俺に酒だなんて物を進めるには早過ぎないだろうか？ そもそも俺は飲食を必要としないのだ。何故か味覚はあるので物を口に運ぶことはあるのだが。

と言うか花見って物は桜を見るものだという考えは偏見だろうか？

紅葉なら紅葉狩りと言う表現の方がしくり来るが狩る気はないらしく、やはり花見なのだろう。

両手に持っていた酒樽を下ろし、紅葉に囲まれた場所に蓮姫は腰を下ろした。そしてこいこいと手で誘い、その隣に俺を座らせる。元々の身長差から俺の頭は蓮姫の肩にも届かない。

「ほら、飲みなさい」

ドン、と俺の傍に酒樽を置いた。これを飲めと？

疑問を言葉にする前に蓮姫は酒樽を片手に持ってかたがていた。こ

くぐくとのどを鳴らして飲んでいゝ。どこにこれほどの力があるかなんて、今更思つことでもないだろう。

俺はそんなもの持ち上げられないのでともかくそこに置いておく。恐らく、蓮姫は俺がこの酒樽を持ってないと言つ事に気付いてない。

ぶはあ！ とまるで仕事帰りの一杯を思わせる姿に気付けば口元を隠していた。

彼女は何かおかしいのかと不思議そうに俺を見たが俺が何も言わないことに諦めたのか再び酒樽を傾けた。

静かに、本当に静かに。紅葉を見上げ、時に蓮姫が酒を飲む様を見ているだけの時間。時間の流れが遅くなったかのようにも感じられたが、俺はほとんど口を開かずに紅葉を見ていた。

「ねえ。舞風」

うん？ と俺は首だけを動かして蓮姫を見た。その頬は酒気を帯びてほんのり赤くなっていたが、それ以外は正に真面目一色に染めて俺を見ていた。

なにか重要な話なのだろうか？ 俺は少し体が緊張で硬くなるのを感じた。

「アンタは、何で生きるんだい？」

拍子抜け、と言ったら彼女には悪いだろうが、俺が感じたのは正にそれだった。

なんで生きるのか。確かに一度は考えそうな事だが、普通は気にしない。考える頃にはそれなりに目標ができていたりするからだ。ましてや俺は生まれてまだそれほど時間も経っていない。普通なら問うだけ無駄な質問ではないだろうか？

それに気付いたのか彼女には珍しく焦ったような顔になり、手をぶんぶん振った。

「やや、そんな深い意味はないの。ちょっと気になったから」

俺は少しばかり疑問に思いながらも一つもしかしたらと思った。聞く限り、彼女は長い時を生きていると聞いた。天正に比べたら数倍の域だそうだ。

そんな彼女が、生きることには強い疑問を抱くのはそれほどおかしいことではないのでは？と。

「そうだな……例えばだけど、俺はさこの世界がどんな形をしているのか知りたい」

「……へ？」

「あと、いつか真可や天正の子供とかも見てみたい。人間と妖怪の関係がおれからどうなっていくのか知りたい。自分の存在がどれだけの変化を及ぼすのか知りたい」

俺は蓮姫を見た。何を言っているか分からないと言いた気にパチクリと開いた目を見つめる。

「見たいことと、知りたいことと、やりたいことがある。生きる理由なんて、それで十分じゃないのか？」

蓮姫の目が見開いた。俺を見る目が若干変わったようにも見えた。だがそれは決して悪いものではない。言うなれば量り間違えた、と言った感覚。

「やりたい事の為に生きる。そう、それでよかったの。おかしな話、なんで私は見失っていたのかしら？」

蓮姫はやがて紅葉　否、空を見上げ、遠い目をした。

人間ならば、生きる理由を見失うのはそれほど珍しいことなのかもしれない。無駄に大人びた子供が世界に理不尽さに気付くように。

だが、彼女は何百年、何千年と言う余りにも長い時を生きてきたのだろう。時には信じたものに裏切られたり、大事な物を失ったりしたのかもしれない。

「生きる理由なんて、沢山あるよ。思ったよりもね。これから探すのも悪くないんじゃない？」

もしも俺がこの世界に生まれなかったとしても、いつかは自分の大事な物を見つけ、その為に生きていくようになっただろう。

きつと、生きるってそういうことだ。

「そうね。まだまだ、私の生も終わらないものね。ありがとう考えてみるわ」

「うんうん。そうじゃなきゃこっちが調子狂うよ。じゃ、引き続き紅葉を見ますか」

「そうね。ところで貴方、全然お酒に口を付けないようだけど……」

ギクリ、と体を硬直させた。ギギギと首を捻る。蓮姫が怪しげに笑い、こちらを見つめていた。

「いや、ほら、俺って子供じゃん？ お酒とかにはちょっと抵抗があったりする訳で、分かりル？」

「さっぱり分かりらないわ。貴方、私のお酒が飲めないの？」

翌朝、首から上だけを生やして土に埋まった舞風が発見されることになる。

-
-

「寒いね〜」

「だな〜」

僅かながら赤く染まった頬を撫でながらこちらを見た天正に子供み
たいだなと思いつながら言葉を返した。口には出さない絶対に。

世間的に言ったら恐らく今の季節は冬なのだろう。今まで過ごした
どの季節よりも寒さを感じる。だが雪を見ることはなかった。その
辺りは分からないが、地域的な問題なのかもしれない。

だが何故俺はそんな寒い中天正と湖の傍で語り合っているのかと聞
かれたら俺はこう答えるしか出来ない。

俺も知らない（笑）

目が覚めたら寒い中家の外に放り出されて傍に天正が座っていた。
とんでもなく恐ろしいものを垣間見た気がする。

そうして俺達は何をするでもなく、黙って辺りの景色を見ていた。
俺は妖精だから寒さに弱いんだけど、嫌がらせ？ 湖の妖精達は今
日も元気に飛びまわってるけど。

ずーっと黙ってる。さっきの会話だって久しぶりに交わした言葉

だ。別に言葉を交わすのが嫌なわけじゃない。ただ寝起きで寒くて頭がぼーっとするだけだ。嘘じゃない。

「なあ、舞風くん」

「……………んあ？」

天正が鬼気迫ったような顔でこちらを見つめていた。鬼だけに。つて言うかアレ？　なんだかデジャブを感じるんですが。

「君はこれから、何処に行く？」

はて？　と頭を傾げる。何処へ行く、と言われても本日は何処にも行く予定はないのだが……………まさか！　とうとう追い出されるのか！？　家賃も出さずに働かないお山警備員だから？　いやちゃんと働いてんジャーン。それとも用済みか？　永琳にも用済みと言われてお山にも用済みなのか！？　いやいや、ここ離れたら消滅しますから俺。

「深い意味はないんだ。きつと、君はいつかここを出て行くときがくる。今まで何体もの妖怪がこの山を出たように。その時、君は何処に行く？」

いや、多分出ませんよ俺。妖精だし。って言うか地理知らないし、ここ出たら即迷子だから。あ、でも何処まで行けるかは試してみた

いかも！ 免許取立ての青年かあほ。

しかし、そうだな……

「旅、って事で右に左に気の向くままってのが楽しそうだ」

「そうか……君らしいね」

「おう！ その時は天正と真可と、ついでに蓮姫も連れて行こう！
きつと楽しいぞ！」

「！！……そうだね。きつと、いや絶対楽しい」

天正の目が悲しげなものから嬉しそうなものに変わった。本当に、俺の言うことじゃないがたまに天正が子供に見えるときがある。その時の天正の目は決まって俺に何かを期待しているように見えた。

それにしても、旅か。本当に、行けたらいいな。

合計PV60000突破記念（後書き）

何気ない日々と彼らの抱えるものへの答え。それが今話の最もな題です。

舞風と言う平凡ながら非凡になってしまったものはこういう展開でどのような答えを出すのか。元々の境遇も完全には平凡とは言い切れませんが。

もしかしたら、話が増えるかもしれないがあしからず。

幕間（前書き）

更新が大分遅れてしまつてすみません。思いのほかGWが休めない事に絶望した。今日も学校です。休みくれよ。

幕間

時代の変化は唐突に。終わりが来るなら潔く。始まるならば心機一
転。

逃れられるほど運命は弱い物ではなく、簡単に得られるほど永遠は
安くない。

いつしか死の概念が自分を迎えに来るまで、自分と言う存在はまた
明日を迎える。

終わりが始まり、始まりが終わる瞬間は正に一瞬。意味はあってな
く、それ故に強く、弱い。

明日が必ず来ると錯覚し、胡蝶の夢の可能性を削除する。

それは逃げか、はたまた目を逸らしているだけか。どちらにしても
大差はない。

幾年を越えてようやく気付く。自分と言う存在の役に。

その意味が主人公なのか、脇役なのか、それとも存在の意味すらな
い影なのか。

それは気付いた物だけが独自に答えを出し、それを信じて生きてい
く。

気付いた瞬間に始まり、そして始まりが終わる。

ささやかな始まりの音を聞き逃さないですむように、彼はまた今日もいつもと変わらない日々を歩むのかもしれない……

○
○

さて、永琳のお手伝いイベントが終了し……随分。しかしどれくらい経ったかは分からなくなってしまった。最近では時間の経過が分かりづらくてしょうがない。日々同じようなことをして過ごしている弊害だろう。

帰って早速長い間不在で心配かけたこととおみやげを忘れたことで制裁をもらい、二日ほど再起不能になった。主に精神的な意味で。

この頃は暇なのか四日に一度ほどで蓮姫が遊びに来るようになり、俺としてはその日に限って非常に苦々しい一日を過ごしている。何故ならば、蓮姫がその度に再戦を申し込んでくるからだ。そして俺はその度に逃げる。全力疾走する。

詰まる話、来る度全力鬼ごっこだ。最近では本気で死ぬんじゃないかと思ってる。そしてその次の日の朝には山の中腹で寝転がっている。何があった。

永琳のところにも出来るだけ足を運ぶようにしている。行く度に「また来たの?」、等冷たい言葉を投げかけてくるがその口元には微笑があるので喜んでるんだと思う。もしかしたら雑用が来て喜んでるのかもしれないが……なんて事は口が裂けても言えない。

真可と天正とも相変わらずだ。今も当然真可の寢床で寝泊りしてるし、山菜やら魚を釣るのも毎日のことだ。ただ蓮姫や永琳の話をしている時はいきなり特訓を申し込んでくる。そして完膚なきまで俺を叩きのめしてニコニコする。何が原因なのか要因が分からない。

これが所謂ヤンデレか? と思ったときは寒気に殺されるかと思っ

天正とは本当にいつも通り、たまに山の中を散歩しているところにあつて話をしたり、天正の小屋に行つて話をしたり、真可の家にきて話を……アレ？ 話ばかり？ 戦いを挑んでこない天正さんに感動した。

協定やらを結んで以来、俺に対する山の妖怪の目は少しくらいなら改善されたのかもしれない。少なくとも前のように岩が飛んでくるようなことはなくなった。たまに石は飛んでくるけど。そりゃあ岩よりはマシだとは言つたけども……

閑話休題

今のところ、山は前と同じ平穏を保っている。なんだか平和すぎるって事もある気がするが、それもまた、いい傾向なのだろう。

○ ○

「……平和だね」

「平和だね」

「平和ですね」

湖のすぐ傍に腰を下ろし、俺達はのどかな一時を過ごしていた。前触れもなにもなく、天正が誘ってきたのだ。今日は一緒にのんびりしないか？ と。用事も何もなく、俺と真可はそれに頷いた。天正からこうして誘われるのは珍しいことだ。

湖の遙か上を沢山の妖精が舞っている。今なら戻っても追い出されたりはしないだろうと思っただが、そうする気にはれなかった。今は隣に二人がいるのだから。それはまた今度試してみればいい。

季節は一巡りした。とは言ってもそんなに暑くない夏とほとんど雪が降らない冬は大して変わったと思えなかったが。しかし、もう一年か

「どうかしたの？」

「ん。真可と会ってからも随分と経つなって」

「ああ……あの時。その時は私も子供だったからね」

一年しか経っていませんが、と心の中でツッコミを入れるのは忘れない。

しかし、真可も随分昔を思い出すかのような目をしている。よくよく考えれば真可も初めて会った時に比べればかなり変わったのかもしれない。

「僕が舞風君に会ったのもちょうど季節が一巡りする頃か」

「全員、全然変わってないよな」

「変わったよ。って言うか舞風が一番変わったよ」

言われてみれば、と俺は納得する。非常に地道だが俺の背は伸びつつある。恐らく妖力を少しずつ蓄えている影響なのだろうが、これも一つの成長、なのかもしれない。

「よく食べよく寝てよく遊んでるからな」

「多分それ関係ないと思うんだけど……」

「そのうち、舞風くんに追い抜かれるかもしれないね」

やだな、と真可が足をばたつかせながら零した。おい、それって

どういうことだ。

俺はジト目の視線を送りながらため息をついた。せめて生前、最悪でも真可より大きくなりたいと言う切なる願い。届け。

それはそれとして、平和だ。本当に平和だ。

「これからも、こんな生活が続いてくんだろうな」

「ふふ。そうだね。今、こうして入れるように、これからも一緒にいるんだろうね」

一生一緒か。なにやら聞き覚えのあるフレーズだと思いつつも俺は笑って空を見上げた。

青い空、白い雲。舞い上がる風。

これからもこんな何気ない日々が続いていつて。こうして二人と笑い合って生きていくんだろう。いつ消えるか分からないこの命。そうして消費していくのも悪くない。

今なら胸を張って言える。あの時、やり直したいと思って、本当によかった。

だって、俺は今、間違いなく幸せなのだから

幕間（後書き）

はい、破滅フラグが立ちました。

でも更新が出来ない。時間がないよ。

自動車学校が終わりました。後は免許会得の試験にいければいいんですが、平日が休めない……

何で土日やらないんだ！ どうしてだ！！

そのうち学校を休んでもいくしかないと思ってます。

四回休んだら単位落とすけど。

次の更新も恐らく大分遅れる事になります。

って言うかパソコンに触れることすらできないかもしれません。

へへっ、俺、GWが終わったら、執筆再開するんだ……

妖精と急変（前書き）

久しぶりの更新。そして急展開。

急ぐ余りこのページだけ違和感を感じる部分があるかもしれませんが、その時はお知らせ願います。

尚、更新は急ぐ限り頑張ります。

妖精と急変

人の夢と書いて『儂い』なんて、一体誰が言ったのだろうか？

今なら分かる。俺は妖精だ。だが人だ。所詮人だったのだ。

それに気付いたのは、余りにも遅すぎたのかもしれない。

冷たくも降り頻る雨に、小さな体は打たれていた。

突き刺すような痛みは俺に今の現状を知らしめている。

その日、俺は久し振りに永琳の元に向かっていた。

会いに行くのは実に一週間ぶり。この一週間は個人的な理由で通う事が出来なかったのだ。

やや申し訳なく、しかし久し振りに会えるという事が楽しみで、上気分だった事には我ながら気付いていた。

しかし、辺りへの警戒は忘れない。最近人間がこの辺りに現れる事が増え、多くの妖怪が仕留められているらしい。

俺は撃たれても再生できるから別に危険という訳でもない。

ただ真可が危険だから行くなと渋っていた事が記憶に残っている。

しばらくして里のある森まで来てみると違和感に感じた。結界を感

じることが出来ないのだ。元々封じることが能力な俺は直感的なものでそれを感じることが出来た。しかし、今はそれを感じられない。嫌な予感が過ぎった。羽を隠すことも忘れ、俺は里の方向へ急いだ。たどりついたそこにはやはり結界が張られておらず、小妖怪が徘徊していた。だが人間の姿は見えない。俺は焦る気持ちを抑えながらも永琳の家へと向かった。

里の中には人の気配が皆無だった。欠片も感じる事が出来なかった。妖怪にやられたという訳でもないだろう。それならば流された血がこびりついていてもおかしくないはずだ。

乱暴に破壊された様子は見られても、争いあった様子は見られなかった。

やがて、永琳の家についた俺は早々に飛び込み、屋内を見て回った。誰もいない。果てにはいつも永琳といた研究室までできてしまう。

そこで再び確認する。物が無いのだ。アレだけあった薬剤や標本は何一つ余すことなくなくなっている。

一体何故？

そう考えていると、机の上に唯一残されている物に気付く。手の平大の小さな機械。永琳が教えてくれた。いつもは留守を知らせるのに使うボイスレコーダーだった。

見るとなにやら音声が残されていることが分かり、俺は恐る恐る再生ボタンを押した。

『……………』

声は聞こえなかった。変わりに小さくザーザーと雑音だけが聞こえている。だが、僅かながら聞こえる息遣いがそこに誰かがいることを知らせている。

『これを聞いてる貴方は舞風かしら？ 違うなら、早々に再生を止めてこれを廃棄することを願うわ』

聞こえてきた音声。そして直後に沈黙。出来れば無関係な者には聞かれたくないと言うことなのだろう。俺は再び声が聞こえ始めるまで固唾を吞んで待った。

『舞風、なのね。まずは貴方に謝らなくてはならないわ。本当に、ごめんなさい。貴方との約束は守れそうにない。今日これを置くのは前回貴方が来てからちょうど四日目よ。出来ればこれを聞いて、判断して欲しい』

つまり、今日から三日前の出来事と言うことになる。しかし、約束を守れないって？

『話を戻すわ。三日前、私の父が急死し、この里での最高権力が他

の者に渡ったことである計画が可決されたわ。それが月への移住計画……馬鹿馬鹿しいことかもしれないけど、それほどまでに妖怪の存在が月夜見には気に入らないみたい。妖気を穢れと呼んで忌み嫌っているわ。生憎、私達には月まで行く技術とそこで生きていく技術を持っている。恐らく、三日、遅くとも四日には私も月に行くわ。貴方には悪いと思ってるけど、私もこの里の人たちを放つてはおけないもの』

今日、もしくは明日にはもう行ってしまう。永琳のお父さんがそこまで酷い状態だとは全然気付けなかった。そもそも会うこともなかったから。月、そこで人類が生きることができると言うのか……だが永琳が嘘を言うとは思えない。多分本当なんだろう。

『そして、力のある者、この地に残るものは、妖怪に最後の戦いを挑むわ。数じゃ勝る事は出来ても、小妖怪じゃ太刀打ちはできないわ。結果的に妖怪の軍勢が勝ったとしても、恐らく被害は免れない……』

これを聞いている貴方は、私を恨むかしら』

恨むものか。

『私を、憎むかしら？』

憎むものか。

『貴方がどう思うか分からないけど。私は、貴方がいてくれて本当によかったと思うっているわ。ありがとう舞風』

音声はそこで途絶えた。雑音すら聞こえなくなり、沈黙が部屋を支配した。

人間が攻めてくる。

ただそれだけのことが頭にぐるぐると巡っていた。永琳は不必要な嘘をつかない。誰のためにもならない嘘をつかない。

月に移住する人間と、残された人間。その人間が妖怪を殺しに来るのだ。とんでもない、未曾有の災害レベルの事が起きる。

逃げる、と言う選択肢が頭を過ぎったが、それは無理な事だ。俺は湖から生まれた妖精。あの湖から離れることは出来ない。

どうするべきか、と考えた直後、里の中に轟音が響いた。爆発音に近い気がした。だがそんな音は小妖怪に出せるものではない。まさか、と俺は部屋を、そして屋敷を飛び出し目を剥いた。

人と妖怪が戦いを繰り広げていた。お互いに血を流し合っていた。妖怪の爪が人体を抉り、鮮血を撒き散らす。人の兵器が火を噴き、妖怪の体が爆散する。

地獄絵図、一瞬それが過ぎつたが違う。これが戦争だ。

俺は不快感がぶちまけそうになるのを感じた。嘔吐するときの感覚に似ている。生憎吐き出すものがないが。

今はこれに構っている暇はない。目の端でまた一人妖怪がバラバラになるのを視界に捉えながらも俺は飛翔した。雲行きが怪しくなっていた。今にも雨が降り出しそうだ。

高く高く、そして俺は気付いた視界の広がる範囲で、それを捉えていた。

戦争だった。殺し殺された人類の忌むべき歴史。何度も何度でも繰り返される。

見えるそこでは息のない妖獣に縋りつくこたせ獣たちがいた。

死んだ人間の臓物を食らう妖怪がいた。

泣きながら戦うものがいた。

憎悪に身を任せて暴力を振るものがいた。

思わず奥歯を噛み締めた。今自分の目の前で理不尽が起きている。

搾取る側から抜け出そうと戦い続けている人間と生きるために戦う妖怪がいる。

どちらも悪くない。生きるために戦う両方を自分勝手に白黒付けることができない。

ただ、ただ今は歯がゆかった。

遠回りをしている暇はない。俺は真っ直ぐ自分の山への帰路につく。たとえその道が戦場の真上だとしても。

襲い掛かる流れ弾を避け、ただ真っ直ぐ。山は見えていた。それに隣接する湖だっけ見えていた。

しかし、一瞬の油断、流れ弾は羽を？ぎ、俺を戦場に叩き落していた。体に激しい痛みが走ったがすぐに体は修復を開始する。

痛みに顔をしかめているうちに、すぐ傍で何者かの断末魔が響いた。思わずそちらへ視線を向けるとすぐ傍に一人の男が横たわっていた。いや、違う。横たわっているんじゃない。だって、腰から下がんだから。

「
ッ！！！！？」
」

声にならない悲鳴が口からもれた。足が震えた。歯がガチガチとなつている。死に慣れていない。これが死だ。これが死だ。

この身の奥の奥深くから沸き立つこれはなんだ？

そうか『恐怖』か。

「
」

すぐ近くで首がはねられ、崩れ落ちる妖怪。頭からかぶりつかれ、身を痙攣させる人間。

これが死だ。これが死だ。

「　　ウワアアアアアアアアアアアア　　」

逃げた。走って逃げた。そこでは真つ二つになる妖怪がいて、そこには両腕を失い悶え苦しむ人間がいた。

怖かった。恐ろしかった。

俺は死なないのに。死ぬことが出来ないのに。今俺は死を恐れている。死を撒き散らす戦争を恐れている。

気付いた時には回りには何もいなかった。何もいない場所まで逃げてきてしまった。

疲労。いや、心労によい、俺の体は前のめりに倒れた。薄暗い雲が光を発し、どしゃ降り雨が降り始めた。俺の体はただそれを打ち付けられるだけだ。

所詮、妖怪と人が共に生きるなんて、夢に過ぎなかったのだろ
うか？

天正が、真可が、蓮姫が好きだった。心が人間の俺は人間と争うと
いう選択肢を拒んだ。

だが、アレを見て、俺の心が諦め始めている。

所詮、夢は儂いものなのだろうか？

人の夢と書いて『儂い』なんて、一体誰が言ったのだろうか？

幸せでいたかった。二度目の生を楽しく生きたいと思った。生きることが楽しいことばかりじゃない事くらい知っていた。でも、俺にはこれは苦しすぎる。

そうだ。天正達は？

今はここで寝そべり、自分に問いかけている場合ではない。一刻も早く、皆の元に戻らないと。

足の震えはまだ止まっていない。だが今はそんなことを気にはしていられない。俺は羽を羽ばたかせ、再び空を飛翔した。

と、身に覚えのある妖気を感じた。慣れ親しんだもの。こちらに近づいてくるそれは天正の妖気だった。

見ればこちらに近づいてくる彼の姿が見えた。心のどこかで安心した。目の前に飛んできた天正が息を切らし、ただ事ではないような表情でありながらも、俺は。

そして、言葉は紡がれる。

「真可君が人間に襲撃された!!」

雨はまた、強くなり始めていた

妖精と戦争（前書き）

7/27 修正版投稿しました。とは言っても二話を一羽に繋げた
だけなのでお気になさらず。

妖精と戦争

偶然だった。

嫌な偶然が何度も重なり合ってしまった結果だった。

最近人間の妙な動きが目立つということ为天正から聞いていた真可はそれでも一人の人間に会いに行く舞風を純粹に心配していた。

上機嫌で飛んでいく舞風から身を隠し、ひたすら尾行した。

しかし、森の中に入り、見失ってしまった。その森に来るのは初めてだったのだ。

最初のうちは迷いながらも探し続けた。だがやがて諦めて空から探そうとして、異変に気付いた。

遠くから聞こえる轟音。響いてくる声。それは人間と妖怪のものが交じり合ったものであることはすぐに分かった。

遙か遠くで次々と消滅していく妖気。それには少なからず恐怖を隠せなかった。次々と消えていく、その規模が、今までとは比べ物にならないのだ。

おもむろに舞風が心配になった。恐怖などより、舞風の安否の方が

ずっと真可には大事だった。

湖から離れている場所で怪我をするとそのまま消滅してしまう可能性がある、と言うのは天正の見解だった。舞風自身は気付いていないが、彼の体は実に不安定で、いつ分解してもおかしくないらしい。本来なら死ぬほどのダメージを受けたら一度自然に還り、その後には再形成されるはずが、彼には高速復元と言った形で現れている。

今までにない例、と言うのは何が起きてもおかしくないとやっているのとほぼ同じだ。

森の上を飛ばたとき、舞風を搜索した。

もしかしたら先に戻っているのかもしれない。

真可はふとそう思った。いや、思ったかったただけなのかもしれない。普段紛らわしくも妖力を隠している舞風を探知するのは至難だ。感じれても普段の力は普通の妖精と差異ない彼を探し出すことは不可能だった。

淡い期待だと気付いていながらも、彼女は山への道を辿った。

そんな彼女が真下にいた人間から不意打ちを受け、攻撃に晒されながらも山に戻ったのはそれからしばらくのことだった。

○
○

最初、何を言われているのか分からなかった。

数秒してそれが頭に染み渡る様に入って行き、俺はただただ山へと急いだ。天正も俺のすぐ傍を飛行し、先導する。

数分数秒が、今だけ途方もない時間に感じられた。

時間がどれだけ経過したかは分からないまま山に着き、見慣れた家に飛び込む。

「……………舞風？」

そこにいた彼女を、今朝も見た。だが今はまるで別人のように感じられた。

敷かれた布の上に横たわり、大きく胸を上下させている彼女は所々ボロボロであった。綺麗な黒い髪と翼はくすんでしまっていた。

だがそれよりも、それよりも痛々しい場所があった。

「ごめんね舞風。もう、一緒に、特訓もできないや」

彼女は右腕を失っていた。時に自分の頭を撫で、時に自分と手を繋ぎ、時に自分を抱きしめた腕を。

「つ！！」

俺は近寄り、抱きしめた。俺より大きいはずの彼女の体はとても小さくなってしまったように感じられた。いつも軽快な彼女の明るい顔は青白く染まっていた。

守れなかった　　ツ！！

彼女を抱きしめることは他所に俺は奥歯を噛み砕きそうなほどに噛み締めていた。

しばらく抱きしめているとやがて疲労でいっぱいになったのか、そのまま彼女は小さな寝息をもらしていた。

彼女を元の場所に寝かせ、俺は後ろにいた天正に向き直った。その目は未だ厳しく彼女を見ていた。やがてその視線を俺に変え、重々しくその口を開いた。

「恐らく、彼女の腕はもう元には戻らない」

それは聞きたくない言葉だった。ああ、何となくだが分かっていた。妖怪には生物として並外れた再生力がある。蓮姫がすぐに傷を治せるように。蓮姫だったら例え腕がなくなっても自力で再生させたかもしれない。

だが真可、烏天狗は鬼に比べてしまえば妖力も再生力も劣ってしまふ。彼女の再生力は失った四肢を取り戻すには至れない。

「真可の、能力を使っても？」

天正は頷き、悲しげに表情を歪めた。

「彼女の能力は実際に目に見えて分かるものほど効果がなくなっていく。怪我を相手に渡したとしても、傷が塞がるだけだ。だからといって腕を他人からもらっても定着しないだろう」
「そう……なのか」

俺は自分を殴ってやりたくなかった。人間の兵器の事を知っていたのに。烏天狗としての力が強くても、実際の彼女の打たれ弱さは知っていたはずなのに。

「彼女のことは確かに残念だけど、今は現状をなんとかしなければならぬ」

「……人間と、戦うのか？」
「戦わなければ、この山も湖も、奪われてしまう」

グツと俺は拳を作った。つまり、そういうことだ。天正が戦うのはこの山と湖を守るため。だがそれは俺を守ることと大して差がない。湖の妖精である俺はその湖が破壊されたり、酷く汚されたりした場合は最悪消える、と言うことは天正から聞いていた。もし人間がこの湖を汚したりしたら、俺を含む湖の妖精は全滅するだろう。

「天正、逃げよう！ 真可を連れて行こう！ 戦うのは戦いたい奴に任せればいいだろ……！」

妖怪は好戦的な奴らが非常に多い。恐らくこの山の妖怪がいないのも皆戦いに行ったからだ。わざわざ戦うのが嫌いな天正が行く必要なんか何処にもない。

俺の今の姿は多分駄々っ子にしか見えないだろう。だが、たとえ幻滅されるのだとしても、嫌だった。

「舞風君。君は優しい」

天正は微笑んでいた。軽蔑も呆れも、そんなものはなにもなく、微笑んでいた。

俺は心の中で叫んだ。違う、と。

「……怖いんだ。目の前で人や妖怪が死んでいくのを見るのも、大事な『家族』が傷つくところも」

収まっただけの震えは再び自分と言う存在を揺らしていた。二度目の生として楽しく、幸せに暮らせれば俺はそれでよかった。それだけの自分が戦争なんてものを見てしまったから。

と、頭の上に天正の手が乗せられた。大きく、温かい。まるで父親を思わせるような掌。おかしな話だ。父親に頭を撫でてもらった記憶すらないと言うのに。

「僕も怖い。君や真可君、この山の皆が傷つくところを見たくない。だから戦うんだ」

「でも！ それで天正がいなくなったら、意味ないじゃないか！！」

天正は強い。俺なんかより遥かに強い。でも、あの人間の兵器に晒されて、それでも無事にいられる保障なんかどこにもないのだ。

しかし、天正は笑っていた。その表情はやや困っている様子を思わせた。

「失いたくない物がある。だから戦う。それが『守る』ってことなのさ」

天正の手が離れ、呼び止める間もなく天正は小屋を飛び出していった。

理解はしても納得はできない。分かっているのだ。

追いかけてようにも足が竦んだ。

怖いのだ。殺すことも、人間に殺されそうになるのも。死なないからいいなんてものじゃない。恐ろしいのだ。人に嫌悪の、軽蔑の目で見られることが。

-
-

多くのことを望んだつもりはなかった。だって必要なかったから。

天正がいて、真可がいて、蓮姫がいて、永琳がいて、そして自分がいる。

そう、それで十分だった。

それで十分だったのに、その幸せを望むことすらおこがましかったのだろうか？

戦えない。壁に立ててある剣を振るうことすらもつ出来そうにない。先程までの戦場の様子が蘇って、今でも体が震える。

自分は誰かを殺したいとは思わないし、また死にたいとも思わない。戦場に行く、と言うのは誰かを殺し、そして殺されるような場所に行くと言うことだ。

人間だった。所詮臆病な人間だったのだ。

辛そうに表情を歪めた真可の隣に膝をつき、せめて傷みだけでも和らげようと能力を行使した。しかし、その顔色は全く良くならない。当然だ。彼女は腕の痛みだけに苦しんでいるのではない。腕が既に失われたと言う現実にも苛まれているのだから。

それを見て、また奥歯を噛み締めた。

自分は、大事な皆の為に何をする事も出来ない。

分かってる。所詮は一介の妖精、ちっぽけな存在。どうしようもなく儂く、弱弱しい存在。

それから見れば妖怪と言う存在は遙かに上に位置している。

分かってはいたはずだった。だが再び現実を叩きつけられ、無性に悔しくなった。

自分に出来ることはあるだろう。そんなことは考えずにも分かる。

だが、それをするには恐怖心が邪魔をする。

『それが守るってことなのさ』

先程の天正の言葉が頭の中で再生される。

天正は守ろうとしているのだ。守るために戦おうとしている。嗚呼、守るとはなんなのだろう？

俺達を生かすこと？ それともこの山や湖を人間に奪われないこと？

そんなとんでもないことをやろうとしているのだ天正は、一人で。

一人で？ たったの一人で？

あの戦場の中を一人で飛び回っているのに、俺は何をやっているんだ？ 何をうじうじと馬鹿みたいなことをしているんだ？

決めたはずだ。誓っただろう、あの時に。殺す必要なんてない。でも、俺みたいな奴でも盾くらいにはなれる。一度、決めたはずだろうが。

恐怖は消えない。簡単には拭えない。足はまだ馬鹿みたいに震えていた。多分一人殺せない。

だが、ここで黙っていてなんになる。天正が戦い、真可が苦しむたつた今を、無意味に浪費することなど俺が俺を許さない。

気付けば心は決まっていた。行くのを嫌だと体は言っている。心は行かないことを嫌がっている。ならばどうする？ 行くしかないだろう。

壁に立てかけられた剣を背負い、俺はそれを強く握り締めた。なんてことはない。ただ、そうすれば少し勇気が湧いてくるような気がしたから。

出口に、すぐそこに立ち、俺は振り向く。

彼女を一人残していくのは心苦しい。でも、何もしないでいるほうがずっとずっと苦しいから。

「真可、俺も守る。大事な物を、全部まとめて」

こんなにもちっぽけな存在。日本人口が一億二千万人、そしてそのうちの二億二千万分の一が妖精に転生なんて、あまりにも分不相応過ぎる俺だけど、

こんな俺にも、きっと、出来ることはあると、信じてる。

俺は妖精だ。

でも、大妖精だから。

○ ○

「蓮姫さんとは完全に分断されてしまったか……」

遙か高く、戦場を見下ろせる場所まで飛び上がり、集団行動をしている人間に妖力弾を撃ち込んでいく。

こうして見ると妖怪側は酷く劣勢だ。数と武器が劣っているこちらは分断されて各個撃破されている。

蓮姫さん達とも分断されてしまった。あの人の事だから心配はないだろうが、問題はこっちだろう。

人間の軍勢はだんだんとこちらに進軍してきている。このままではそう遠くないうちに山にたどり着いてしまだろう。

どうするかを考えながら人間が撃ってきた弾幕を回避していく。恐らく当たっても大したことはないだろうが、奥に潜んだ敵の本命が見えない。

一人一人潰しては時間が足りない。だがまとめてやってしまえば見逃しがあるかもしれない。

時間はないのに巡り巡る考えは一向に纏まらない。せめてもう一人手があれば……

「……何を期待しているんだ僕は」

もしもを期待しては始まらない。今はなんとか行動に移すべき時だ。急降下し、比較的固まっている人間を叩いていく。特に劣勢を強いられている妖怪を助けるように。

正直助けようと思ったわけじゃないが、そいつらが人間を殺すならそれはそれで都合がいい。

そんな事を考え、そしてふと思った。

舞風君は、僕がこんな奴だと知ったら幻滅するだろうか？

ふっ、と自嘲の笑みを浮かべた。あの子の前では出来るだけ嫌われないようにしようと思った。いや、心優しい鬼でいようとした。実際は違う。彼だから優しくなれたのだ。

なんて事をこんな状況に考えているのだろう。まるで懺悔するような事を。嗚呼、これではまるで、

もう会えないみたいではないか。

考えに浸ったその瞬間、茂みに隠れた人間を見逃した（……）。携えられていたのは明らかに雑兵が持っていたものとは違う、巨大な砲身。それを抱えた大男はこちらを憎憎しげに睨み。呪詛のような言葉を呟いていたような気がする。

砲口が眩く輝きだし、そして

「天正！！」

「っ！！？」

唐突に押し出された体。光は僕の後ろを通過し、空の彼方に消えていく。

そこにいたのは胸に風穴のレベルを越え、強大な力により肩から上と腰から下以外を消滅させられた彼。痛みに体を歪めていたが、やがて傷は復元された。

彼はチラリと僕の顔を見たが、その視線が茂みの人間に向けられたとき、悲し気に歪んだ。

その人間は信じられない物を見るかのように彼を見、やがてその目は憎悪を秘めた目へと変わっていた。

「お前……妖怪共のスパイだったのか！ 小僧！」

直後、彼の目が申し訳なさそうに伏せられる。顔見知り、よく行く人里にいた人間。もしくは会いに行っていた本人なのだろうか。

「……俺は、大妖精舞風だ！！ 人間が、俺達を侵略するんなら、戦うさ。俺は、俺にだって守りたいものがあるんだ！」

答えは問いに対するものではなかった。だが、それが人間に対する敵対宣言であることは分かる。

大男の視線は変わらない。いや、酷くなっているような気もしなくない。

もう、この人間の存在は彼を苦しめるものでしかない。

僕はせめて苦しめよう いや、少しでも彼が悲しまずに済むように、一瞬で心臓を一突きした。

崩れ落ちる人間を見る彼の目はやはり悲しげで、そして寂しげだった。

「……この人が、妖怪に襲われているときの俺を助けてくれたんだ」

もう動かない人間を見ながら、呟くように言葉を紡いだ。

「俺が妖精って分かってたら助けなかったんだろうけど、それでも、辛いなあ」

何も言えなかった。そもそも人間に対して何かしらの感情を抱くことなどなかった。

しかし、この人間に対してだけは、少しだけ感謝した。

○
○

永琳の家に遊びに行くとき、よく門前に立っていたりしたから見かけることは何度も会った。その度挨拶して、たまに短いながら会話した。

多分、永琳と永琳のお父さんの次に沢山会話した人間。

憎まれている。

仕方ないと思う。敵なのだから、騙してたのだから。

でも、やりきれない。

「仕方のないこと、なのかなあ」

だとしたら、とても悲しいことだなと思った。

でも、悲しんでいる暇はないから。俺は天正に向き直る。

「……君は、戦わなくていいんだよ？」

俺の心情を察してか、天正はそう言った。彼は俺を優しいと言ったがどう考えてもそっちの方が優しいだろ。

「それは逃げだ。そしてこれが逃げちゃダメな時だつてことは分か
つてるから。戦えなくていい。でも、俺もなにかしたい。なにかし
なきゃいけないんだ。」

こんな俺にも、出来ることがあると、思ってしまったから

天正は何も言わず、頷いた。

それから俺達は小さな集団を潰すように行動した。俺の力を天正に
流し、補給を取らせながら。それくらいしか俺には出来そうに無か
ったから。

妖精と戦争（後書き）

舞風さんの立ち直りがとんでもなく速く感じる。それも仕方ない。実際に立ち直ったわけではないから。

人間として妥協しただけ、とも言える。

妖精と覚悟（前書き）

車の免許が取得できた。ワイワイ。

……我ながら素直に喜べない。

妖精と覚悟

『戦争』は人の中にある醜い歴史の一つである。

ありとあらゆる生物が同じ生物と戦い合うことはある。縄張り争いなり雌の獲得であったり。

だが唯一、人間だけが感情を以って戦う。そういう意味だけで言えば戦争をするのは人間だけなのだ。

感情が存在し、互いに望む物が、認められないものがあるから白黒をつけなければならない。

しかし、この舞台に立つ者は人間だけではない。人と同じく、感情を持つ存在である妖怪がいる。もしも、妖怪に感情なんてものがなかったのなら戦争なんて結果は出なかつただろう。変わりに虐殺と
言う答えが出ていたかもしれないが。

皮肉にも幸せが不幸に変わり、希望が絶望に変わるその時、人間は一番人間らしくいられるのかもしれない。

彼は妖精。大妖精舞風。

人の心と妖気で出来た体を持つ唯一の存在。

人として弱く、人として強く。
妖として弱く、妖としてまた強い。

彼は答えを求めた。戦争と言う理不尽に巻き込まれず、皆が幸せな
んで馬鹿馬鹿しい夢物語を懇願した。

だって彼は人だから。

でもその答えが決して出ない物であることを知っている。例えどれ
だけ求めても、どうしようもないことを知っている。

力なき理想が、理不尽な暴力に勝てないことを知っているから。

それでも悶え、苦しみながらも彼は前へと進もうとする無駄と半ば
理解しながらも彼は夢を見ることを止めない。

それは彼が人だから。

今この瞬間も苦しむ大事な家族を知っているから。
自分の心を犠牲に戦い続ける者を知っているから。

そして、こんな弱い自分にも出来ることがきつとあるんだと、信じ
たかったから。

彼は妖精。大妖精舞風。

ただひたすらにあがき続ける者

○
○

雨は、もう止みかけていた。

「あらかた片付いたみたいだね」
「……………」

天正の一仕事を終えたような様子である反面、素直に喜べない俺が

いた。今の今まで掃討していた物が人間じゃなかったら、きっともう少しは心は晴れていたんだろうけど。

そんな俺の様子に気付いたのか、天正はやや残念そうな顔をした。申し訳ないと思ってくれたのだろうか。だとしたら全然気にする必要なんてないのに。

「割り切れてない俺が悪い。気にしないでくれ」

「……うん。これから負傷した山の妖怪を回収して一旦山に戻ろう。人間達が何をしてくるにも皆まとまってなければまた各個で撃破されてしまうからね」

俺はそれを承諾し、妖力を感じられる場所を分かれて搜索した。

残念ながら、山の妖怪は恐らく半数も生き残っていないだろう。見た顔があまり見かけられなくなっていた。

妖力を感じられる場所を回る、と言うのは力を感じる場所を手当たり次第探すということ。だがそのほとんどが既に絶命しており、俺が助けたものは30にも満たない。山にいた妖怪の10分の1以下だ。

そのほとんどがあの光線のような兵器にやられたのだろう。体の一部が削げ落ち、抉られた死骸がほとんどであった。それを見て人同士の戦争もこんなものなのだろうかと思っただけ悲しくなった。

残り少ない生き残りを山に集め終わり、俺はふと妖精達が騒がしい

事に気付いた。いつもなら湖の上空より出ることは滅多にないのに、今は良く分からない甲高い奇声のような物を上げながら飛び回っている。

繊細な妖精が妖気に影響されて興奮しているのかもしれない、と勝手に結論付けて俺は自分の出来ることを模索し始めていた。思えば何故俺はあれから一度として妖精達の元に戻るうとしなかったのか。もう既に一年前のことなど忘れているだろうに。

なんて、言うまでもない。俺がそれを忘れてしまうほど、山での生活が楽しかったからだ。

それに気付くのは、少し遅かったかもしれないが。

結局今するべきことは思い浮かばず、俺は真可の元に戻る事を決めた。

その時だった。

世界を劈く轟音、聞こえてくるのは果ての果て。山からは全然遠い場所。

考える前に飛翔し、俺は音が聞こえてきた方を見た。

見たのは白い煙を噴射し昇っていくいくつもの船。それが人間達の乗って行く船なのだと気付いたのはすぐだった。

ふと永琳もあの中のどれかにいるのだろうかと思っただが、考えても仕方ないことだと首を振った。見回してみれば飛行が可能な妖怪たちが俺に習うようにそれを見上げていた。溢れんばかりの罵声を浴びせている。

まあ仕方ないだろう、と俺は同じく俺と同じような顔をしている天正を見つけ、苦笑いをした。天正もそれに応える。

だが、思ってみれば、人間達の攻撃がアレで済むはずがないと、気付いていながらまた危惧しない事を、俺は心から呪いたくなった。

数ある船から発射される何か。ばら撒くように大地に落とされ、

そして、

轟音を上げ、大爆発を起こしていく。

見境など欠片もなく、大地に数え切れない爆弾ばくだんをばら撒いていく。その光景を見て俺は人間達の正気を疑った。自分達が生きた大地を破壊し尽くすつもりなのか。

そしてそれは船が上昇を続けるほど広範囲に及び、だんだんこちらに近づいてくるのが分かった。

ああ、すぐに分かった。

アレはここにも落ちてくる。それもギリギリの位置で。

そう気付いてからの行動は早かった。逃げ出す生き残りの妖怪たちを他所に俺はそれを睨みつけた。今あれを止めれるのは、多分俺だけだ。

天正であろうと、恐らくアレは止められない。

足が震えた。恐怖だ。でもそれは自分の死に対する恐怖ではない。

あの、死を振り撒く怪物に対する恐怖。あれはたった今、俺から全てを奪い去ろうとしている。止めなければ、全てが奪われる。

一步も退こうとしない俺に気付いたのだ。流石の天正も焦ったようにこちらに何かを呼びかけている。

だが退かない。逃げてはダメだ。

これが俺にしか出来ないことだ。こんな俺にも出来ることだ。

やるかやらないかなどの問答は在って無いものだ。やらねば全てを失うのだから。

制止の声を聞き流し、俺は今よりもっともっと高く飛翔する。こちらに手を伸ばす天正が見えた。

心配をかけることを申し訳ないと思いつつながら俺はすぐそこまで迫り
きつたそれを睨みつけ、唯一の武器である剣を抱きしめた。

「……終わらせない」

ちっばけな存在だけ。

極小な存在だけ。

人一人殺せない俺だけ。

でも、出来ることはあるんだと、信じてる。

「この世界は、人間おまえたちだけの物じゃない！！ 隔絶しろ、『封鎖大結
界』 ツツ……！」

山を覆うように、かつて無い規模の結界は発動される。

言葉では表現できないぶつかり合い。気を抜いたそこから俺の体は
崩れ、そして修復されていく。

それは人間の怒りに思えた。人間の妖怪に対する思いの丈に感じる
ことができた。彼らだって、何の理由もなく妖怪を嫌ったわけじゃ
ない。

妖怪が人を食らうと言う連鎖が出来てしまっているから、そして感
情と言う不安定なものを持ってしまっているから、だから人間は妖
怪を恐れ、憎まずにはいられない。故に妖怪は人間の敵だ。

敵を嫌わなければ、心は維持できなくなる。

でも、妖怪にしてみたらそれは理不尽な物だ。人間だって魚を、肉
を、植物を食して生きている。生命の上に成り立っているのに、い
ざその対象が自分達になったら怒り狂うのだ。

しかし、妖怪もまた理解できてしまう。不安定な、人間と同じ感情
を持ってしまっているから。だから感情を持つものは覚悟を持って
人を食らう。

それこそが成り立ち。今まで、そうして人と妖怪はこの世界に生き
てきた。

なのに、こうなってしまったのだ。

体は悲鳴なんてものを通り越し、奇声を上げるかのようにボロボロ
と崩れていく。俺は妖精だから、弱い弱い妖精だから。

でも！！

諦めるわけにはいかない。例え永遠に体をすり減らすことになろうとも、

例え、この身が、魂が滅ぶのだとしても　　ッ！！

ちっぽけで、極小で、人一人殺せない臆病なんだとしても、

こんな妖精おれにも、守りたいものがある！！

山一つ全てを包み込むかのような守っていた結界はやがてその形を端から反らしていく。やがてそれは反作用するかのように爆弾を包み込み、

やがて、爆ぜた。

頬に雫が落ちた。おかしいな、と思った。だって雨はさっき止んだはずなのに。

目を開いた。だが全身に力が入らない。自分の体が自分の物でない様だ。だから開けたのはほんの少し。

涙を流す、一人の鬼がいた。誰だろう、と一瞬困惑する。でもそれが誰かなんて事はすぐに分かった。分からないはずなかった。

大丈夫だ、と口を開こうとした。しかし声は出ず、ただ口がパクパクと開くだけだった。

気付いてみればありとあらゆる感覚がない事に気付く。

温もりがない。

何も聞こえない。

そして、何も見えなくなる。

今までの事が次々と浮かび上がってくる。これは走馬灯と言つものなのだろうか。

初めて生まれたときに見た日が落ちていく瞬間。

真可との初めての戦い。そして和解。

天正と初めて会って、何気ない話をして。

蓮姫と戦ったときの、とんでもない光景。

永琳とした子供みたいなやりとりも。

天正と真可と、三人で語り合ったときと

……おかしなことだ。見える全てがこの世界のことばかり。それも
そうかと納得する。

だって、俺はこの世界に生きた『妖精』舞風なのだから

彼だった。

数百年もの年月を生きた、だが今思い起こされるのは彼と過ごした
たったの一年間。たった一年だけの彼と生きた時間は僕の全てに勝
っていた。

そう違和感なく思えた、自分がいた。

「
」

その彼は、今僕の目の前で儚い命を散らそうとしていた。

彼は正しく全力を持ってあの兵器を止めた。そう、真の全力を以つ
て。

彼は妖精。自然の権化。彼の力の全てはその元となる湖から来ている。彼はそれを無理矢理引き出し、この山を防衛したのだ。

……そう、湖を犠牲にして。

あの湖にはもう力が残っていない。むしろ彼の力が湖の再生の為に吸い取られていると言うことは消えていくその体を見れば明確だった。

更にあの兵器の余波によって汚染されてしまった湖は、もう死んだも同然だ。

虫の息の、どうあっても助からない命を、彼が今その身で贖うような状況に陥ってしまったている。

そんな彼に対し、何とか自分の妖力を流して消滅までの時間を先延ばしすることしか出来ない。

あまりにも無力。ベースの体が消滅しようとしている今、妖力は流した分だけ湖に吸われるだけだ。もしもこのまま彼が消えてしまえば、いつか再び彼が生まれ変わる？ そんなことはありえない。

汚し尽くされた湖は全ての妖精の力と言う力を吸い尽くした上で再生する。今消えれば、彼と言う存在は消えてなくなる。

妖精舞風は死ぬのだ。

ダメだダメだダメだダメだ！！ それだけは認められない。彼無し
の生などもう考えられない。鬼の天正は死ぬまで妖精舞風の共にあ
り続けるのだ。

やがて、自分の妖力が限界に近づいてきている事に気付く。戦いに
力を使いすぎた。なんたる失態。なんたる様だ。能力が及ぶのは自
分が認めたものだけ、なんて欠陥な能力。

認めない。そんなの絶対認めない！！

そんな力なら変えてしまえばいい。彼を救えない力など、いらない
！！

”力を奪う程度の能

力”

そうだ。彼のためなら限界くらい越えてみせる。そうでなければ存在の価値などない。

体に漲ってくる力、それは自分が認めた者達を除外し、ありとあらゆる存在からありとあらゆる力を集める能力^{ちから}。

だが、たとえこれでも彼を生かすことは出来ない。滅びかけている湖を救うことなど出来はしない。

ああ、全く。もしもこの世に全知全能の神と言うものが存在するならば、あんまりじゃないか。

どうしてこんな少年が死に至り、自分のような罪深い存在にだけ何事もなく生き残る道を与えるのだ。僕が思ってることは間違っているだろうか？

否ッ！！ 断じて否だ！！

静かな足音がこちらに近づいてくるのに気付く。
縫る物が欲しかった僕はまるで救世主でも求めるかのように、その顔を上げた。

片腕を失った少女が、悲しげにそこに立ち尽くしていた。

妖精と烏天狗と優鬼と
(前書き)

タイトルはそれぞれの人物名を当てて呼んでください。

妖精と烏天狗と優鬼と

夢を見ていた。

ぽかぽかと暖かく、木漏れ日から差し込む日差しのように優しい夢。

その中での私は　と一緒にいる。　は実に百面相とでも言うかのように表情を変え、いつまで経っても見ていることを飽きさせることはなかった。

そんな　と共に過ごし、共に戦い、共に遊び、共に眠り、共に笑い、共に喧嘩する。

嗚呼、数え切れない。　との思い出の中には数え切れない物がたくさんある。共に生きたその一日一日が私の宝物だと胸を張って言える。

依存していると指摘されたら私は自信を持って否定することは出来ないだろう。今となってはいいないことの方が考えられない。

おかしな話だ。つい最近までは沢山の烏天狗に囲まれ過ごしていた私がいつの間にか　と一緒にいることに疑問すら抱かなくなっていたのだから。

だから、もしも私に彼が救うことができると言うのなら、私はどんな手をも厭わないだろう。それが私の、精一杯の　に対する想い。思うように開かない口がもどかしいと思うことはあったけど、それ

でも、私は私の望むことをするんだろう。

それで、彼が悲しんでしまったのだとしても。

-
-

「真可くん……?」

気付いたらそこに立っていた。そこに至るまでの道なりは何故かぼやけて思い出すことが出来ない。今は、そんな事はどうでもいいだろう。

らしくない、諦めたような目をした天正様と、彼に抱きかかえられながら静かに目を閉じた彼、大妖精舞風がいた。

頭はぼやっとして思考が上手く働かない。たぶん熱があるんだ。ただそれだけなのだ。私は自分を納得させる。

ふらふらと揺れる視界のまま私は一人に歩み寄り、膝をつくと安らかな寝顔を撫でた。眠る彼の顔からだんだんと熱が失われていくのが分かった。

ああ、と私は何処か意味もなく悲しい気持ちになるのを感じた。心が急激に冷めていくのに気付いた。

「舞風は、助からないんですか?」

弱弱しいであろう声で、目を伏せる天正様に問いかけた。その声の小ささに我ながららしくないとまで思ってしまう。彼は小さく首頷き、遠くを指差した。

そこに在ったのは美しい湖だった。彼と共に水遊びをした、思い出

の場所だった。

地獄だった。

空を飛んでいた沢山の妖精達が悲鳴のような物を上げながらぼろぼろと崩れ、消え、湖に落ちていく。

嗚呼、湖が死んでいく

漠然と、私はそんなことを思った。私達の生きた場所が汚され、そしてまた彼も消えていくのに。

私は、そのことに対して悲しみを覚えていない。

そこでようやく分かった。彼の顔を触れたときに、悲しくなったその意味を。

寂しくなったから。そして、知っていたから。

「……………真可くん？」

漠然と、悲しいようで悲しくなく、辛いようで辛くなく。フッ、と口元に笑みさえ浮かべていた。

そう、知っていたから。

私が、私だけが彼を救うことができるというのを。

「ッ！？ 何を！？」

天正様が驚くような声を上げていることに気付いた。嗚呼、そうか。私に彼に対して力を、放つために力を集めているから、驚いてしまったんだろう。

だけど、そう、それが私の選択。彼を唯一を生かすための、唯一の方法。

「……私の、『存在そのもの』を、舞風に譲渡します」

天正様の息を呑む音が聞こえた。当然だ。それ自体が通常では考えられない荒業。私の能力、『譲渡と譲受を操る程度の能力』で私と言う『物』を他人に譲渡するのだ。

私が彼の物になるなんてどこの話ではない。一つの体に乗る妖力、肉体、そして魂まで、髪の毛一本余すことなく、私を彼の物にする。ある意味一つになる事と同義だ。

その結果が、どのようなものになるかは、悔しいが分からない。だが少なくとも、基盤となった彼の魂だけは残る。

他ならぬ私、私の『魂』は、どうなるのか。共存するのか、吸収されるのか、それとも上書きされて消滅するのか。最悪でも彼だけは助かる、それが私の答え。

彼は恨むだろうか？ いや、きっと彼は私を恨まない。きっと怒る。怒って怒って、その先に悲しむ。こんな私のためであろうとを悲しんでくれる事を知っている。だって、他ならぬ私が一番彼と共に過ごしたのだから。

天正様も、なんとなくだが私の見解を分かってくれているのかも知れない。そんな感じの、難しそうな表情をしている。

悲しいのは、私と言う存在が形を失うこと。大体の確率でもう彼と会話すらできなくなってしまうと言う事実。それだけが、とてもとても辛い。

「……それが、君の答えなのかい？」

「はい、それなら私は、この命をかけられる。彼の為なら、消えられる。なんとなく、なんとなくですけど、こうなるような気がしてたんだと、私は思うんです」

そうでなければああも漠然と考えることが出来るだろうか？ いや、何処かでこうなることを覚悟していたから私はこうしていられているのだ。

天正様は視線を舞風に移し、その髪を撫でた。それは、その様はまるで

「君一人ではいかせない。僕も、共にいく」

今、この人が何と言ったか分からなかった。

それを噛み砕き、理解し、ようやく私は感情を表した。

「それは、それがどういうことかつ、分かっているんですかッ!!」

憤怒。私が彼に感じたのは怒りだった。私がいなくなり、この人ま
でいなくなれば彼は今度こそ一人になる。優しく、寂しがり屋な妖
精が、本当の意味で孤独になるのだ。それがどんなことを意味して
いるか、分からない訳がないはずなのに。

それに彼はフツと笑い、舞風のおでこに手を載せたままその口を開
いた。

「蓮姫さんがいるさ」

「彼女は、違う山の鬼です!!」

「そうだね、でも彼女もまた彼をよく思っている存在だ」

だから、だから自分も消えると、彼はそう言っているのだろうか？

だとしたら本当に馬鹿だ……ッ！

嗚呼、分かっている。この人が本当に消える、舞風の中にいきたい理由は、

彼が、本当の意味でそれを望んでいるからだ。

それで彼が悲しむことなど分かっているのだろう。そしてその選択自体が誤っている事など、とっくに分かっているのだろう。

彼は、妖精舞風と共にいることを、本当の意味で共に在ることを望んでいる。

最悪で愚かで、そして、最も我侷な選択だ。

「……ここに来て、初めて貴方のことが分かった気がします」
「そう、か。嬉しいな」

彼は不器用な笑みを浮かべ、舞風の頭を撫でていた。消えていくその体は天正様の妖力で繰り返し修復している。

ああ、その姿はやはりアレを思い浮かばせる。

「前に、舞風が言ってました。私達はまるで一つの家族のようだと」

「家族、と言うのはあの人間の家屋に住む共存体の事かい？ 僕達は誰一人血はつながっていないはずだけど？」

その返しに私は思わず笑い声を零した。そう、私も彼の問いにそうやって返したのだ。何故わざわざ人間の間柄で例えてそう言ったのか。彼は私にこう返した。

「『天正がお父さんで真可はお姉さん兼妹、俺はやんちゃな末っ子だ』、彼は、笑ってそう言っていました」

そう、私達には同じ山で住む他、目に見えた関係など存在しない、私自身も表面上はそう思っていた。だからこそ、私は関係を望んでいた。繋ぎとめておけるような、目に見えるような関係が欲しかった。

最初こそ戸惑いはしたが、彼のしどろもどろな説明を聞き終え、理解したとき。

嬉しかった。

彼は私や天正様を必要な存在だと、欠かせないものだ、言ったのだ。嬉しくないわけがなかった。

私の表情を見、少しは意味を理解したのか、彼はクツクツと笑うと珍しく意地が悪そうな顔をした。

「そうか。それなら君と僕が番つがい、と言うのもありかもしれないね」
「ありえませんが。あっても舞風と、ですね」

間髪なく私が返すと彼はその必要が無いかのように笑った。いつもなら笑いなど隠すようなこの人がだ。つられて私も笑い出す。そうしなければいけない気がした。

そんな、日常的な会話。この人とは初めて心をさらけ出して話す事が出来た気がした。

そして、二つは『わたし』となった。

そこにいた三人が二人になった事に気付いた者はいない。『わたし』自身、違和感もなく、何かが体に入ったことを受け入れていた。

私は彼を抱きかかえていた。寂しいと思っている。それは『わたし』か、それとも『ぼく』か。多分両方なんだろう。

眠りこける彼の姿は小屋で寝る姿となんら変わりなく見えると言うのに、それでもどうにかしなければ、彼は消えてしまうのだろう。

腹を括ることなど無い。何故なら覚悟など既に決まっているから。

体の奥からふつふつと湧き上がる何か。それは悲しみに平行して私の中を駆け巡る。これは『歓喜』だ。この上ない歓喜だ。

一つになることを望む私『ぼく』がいる。そしてそれを悲しむ『わたし』がいる。

ままならないものだ、とふと思った。それも仕方ないことなんだろう。二つの選択の中に様々な答えがあるのは当然のことなのだから。

「舞風」

『わたし』 いや、私はギュッと彼の体を優しく抱きしめた。その体は冷たい。でも心配など要らない。

私の意識が沈んでいくのを感じる。それは虚無だ。何もかもがどう

しよつもなくなくなるような、そんな感覚。だがそれをあるがまま受け入れようとしている。

そこに喜びがあったから。その選択が間違いじゃないと、後悔しない、胸を張って言えるほどの自信があったから

彼の名を呼ぶ、そしてそれに言葉を重ね、

『わたし』は消えた。

『舞風はさ、どうしてそんなに強いのか？』

『俺え？ ついさっき勝負して俺を叩きのめしたやつ、の台詞とは思えないぞ？』

『その強さじゃなくて、ほら、蓮姫と戦ってたときとかさ』

あー、と目線を逃げるように逸らしながら彼はうんうんと唸り始める。質問の意味は分かったが答えは自分でもいまいち分かってない。とでも言うかのように。確かに力その物は彼はそれほど強くない。でも彼は諦めなかった。彼はその心が強い。

『強いて言うなら、うん。俺がそうしたかったから？』

『聞き返さないでよ』

『ごめんごめん。でもやっぱりそうだ。俺がそうしたいと思ったから、立ち上がるうと思っただけ』

彼は湖に両足を突っ込み、ばしゃばしゃと音を鳴らして遊びながら、そう答えた。子供みただ、と一瞬思い直後に子供かと認識しなおして彼に再び尋ねた。

『それは痛いことをどれだけ我慢しても？』

彼は足の動きを止め、さも当然のように頷いた。澄み切った湖に立ち、こちらに微笑んでいるその空間は全く別の世界に感じた。

『そりゃあ痛いことも苦しいことも嫌いだけど、でも俺、守りたいって思ったから。大好きな真可や天正と一緒に居たいって思ったから』

随分と恥ずかしいことを簡単に言える、そう思いながらも顔の火照りは隠せない。今の自分の顔は真っ赤なのだろう。でも、それと同様に嬉しいと思う自分がいた。

返答はいらない、いや、言えない。こういうときは恥ずかしい台詞を事も無げに言える彼を素直に尊敬し、自分の動かない口がもどかしく思った。それを彼は気にした様子もなく、意地が悪そうな嫌な笑みを浮かべていた。

……ただ眺めているだけではもつたいたい。下ろしていた腰を持ち上げ、ほんのり浮かんだ怒りのままに水遊びをする舞風に飛び掛かった。わかりやすいような悲鳴を上げる彼と共に遊べる今に感謝しよう。

彼は妖精。寿命は無い。たぶん私達の別れは私の死によって訪れるだろう。それまでにどれだけの時間があるかは分からない。だから

こそ、こうしてこの瞬間でさえ大切に生きていこう。

……いつかはこの『想い』を口にしよう。もしかしたら恥ずかしくて、噛み噛みで、上手く言葉に出来ないかもしれないけど、きっと彼はそんなことなど気にはしないだろう。私の全てで、私と言う存在に欠かすことが出来ない彼と言う存在に、言葉を贈ろう。言っても言っても足りないだろうけど、それでも、彼を真っ直ぐ見て、一番の笑みと共に。

そう、それはこんな風な

「ありがとう。私も、大好き」

○

○

視界を覆ったのは雲の間から覗いた日の光。

静かだった。限りなく静かだった。

自分が座り込んでいた地面には先程まで降りしきっていたのである
う、雨によっていくつも水溜りが出来ていた。

ふと、水溜りを覗いて、気付いた。

この頭にある『角』は、いったい誰の物だっただろうか？

この綺麗な『黒い髪と翼』は、誰の物だっただろうか？

困惑

周りに人影がないのは、何故だろうか？

あの二人がいないのは、何故だろうか？

そして、周りから一切の妖力を感じることができないのは、何故なのだろうか？

記憶が蘇る。誰のものか分からない記憶が再生される。

抱きかかえられた舞風^{おれ}、舞風を抱きかかえた天正^{ぼく}。そして、腕を失いながら舞風を優しげに見る真可^{わたし}。

自分で自分が分からない。

自分とは誰だ？

自分とはなんだ？

「
」

果ての無いような慟哭^{たうこく}が、空の下に響き渡った

鬼であつた青年は形を失い、一と二は二になった。

烏天狗だつた少女は二となり、また一に内包された。

そこにいるのは烏天狗でも、鬼でも、大妖精でもない。

ただ、『彼等』であったと言う事実のみが、そこに残されていた。

妖精と烏天狗と優鬼と (後書き)

二人の能力はこの為の布石だったのさ!!

……馬鹿馬鹿しい事に、自作したキャラが消えた事に落ち込んでいる自分がいる。

次話もなるだけ早く出す予定です。

そして、その先にある未来と

ちつぽけな山。それが私の住まう場所だった。大きくは無いものの、この山は様々な物が豊富だった。湧き水、山菜、動物。生きていくには十分すぎる。たった一年ながらそれなりの愛着を抱き、だからこそ私はそこを守ることを決めた。

あの鬼の天正や烏天狗の真可とやらが人間に遅れを取るとは思わなかった。捻っただけで腕が捻じ切れる様な貧弱な存在に劣るとは決して思わなかった。唯一の心配は舞風だったが、彼だって死にはしないはずだ。

自分が守るべき山に立ち、向かってくる人間達を蹴散らした。共に戦った山の妖怪たちはいくらかその命を散らした、僅かながら共に過ごした事で少しは感情を抱けていたと言っことが嬉しく、また悲しいとも思った。

人間達の拠点を壊滅にまで追い込み、生き残りを一掃した私はアレが落ちてくる瞬間、彼らの山とは全く逆方向の場所にいた。

焦った。そして少し前まであんなにも樂觀視していた自分を殺したいほど憎みたくなった。

走った。己の心と力が感じる方向に、思うがまま走った。

たどり着いたそこにいたのは、天正でも、真可でも、舞風でも

なかった。

ただ、ただ悲しげに咆哮する存在が佇んでいた。

そしてそれが発する妖気から分かっってしまう。それが誰でなんだったのか分かっってしまう。

『いない……何処にもいない。真可わたしがいない。天正ほくがいない。舞風おれが……』
『おれ』ってなんだ？ なんなんだよおおおおおおおお
おお！……！』

その心は折れていた。目に見えるほどまでに壊れていた。

現実も、現状も、そして己の実情までも、何もかもを理解しようとしながらも理解できない。

それは『彼』ではない、『彼ら』であった者。

黒い髪と翼を生やし、頭から一本の角が突き出ていた女性……そう、その体付きは女性なんだろう。しかし、心は入り混じり、固定されていない。

ず……ず……ずれている。

私に出来ることはただ強く抱きしめて、それが暴れようとも抑え付け、泣き疲れて眠るまで抱きしめ続けることだけだった。

齒がゆい。そして唯一彼に己を託した二人に恨み言を零した。

あの二人だって、こうなることくらい分かっていただろうに。なのに一人残して……

眠り疲れたその大きな子供を私が住む山に連れ帰った。彼らの山は形こそ残していれどそこに住まう妖怪は全滅、何より今更思い出だけが残された場所に連れて行かれても、虚しいだけだろう。

連れ帰っても彼、いや、『舞風』はしばらくの間目を覚ます事はなかった。しかし偶にうなされるように叫びだすことがあった。その度に何とか寝かしつけてはいたが、その時の悲鳴は聞くに堪えない

ものだった。

目覚めてからもまるで気が触れてしまったかのようだった。一日中虚空を睨みつけたままボーっとして、何も考えていないように見えた。だが実際はその逆、その頭の中では様々な感情や思考が渦巻いていたのだ。

それに気付いたのはそれから更に数日、以前のように食事をしない訳にもいかなくなってしまった舞風は、しかし出された物に一切手を着けなかった。

その時点で意識は既に覚醒しており、話にも耳を傾けることができようになった舞風に食事を取るように促した。しかしどれだけ言っても一口も食べない舞風に対し、私は思わず溜まっていた怒りをぶつけてしまったのだ。

それへの返答は　　嗚咽と罵声によって返された。

何が分かるんだ、そんなことは自分の勝手じゃないか。まるで子供のように怒鳴り散らした

否、舞風の魂は恐らく未だ子供、しかも二人分の魂と合わさった弊害により更に退行してしまっていた。

妖精にとっては食事すら今まで無縁だった。なのに今更それが必要とするようになるなんて、きっと彼本人にとってはとても悲しいことだったのだ。

怒鳴り散らした後、その思いの丈をぶちまけていた。

なんで自分だけ生きている。なんで守れなかったんだ。守りたかったのに。その為に山を守って、守れたと思ったのに。

皮肉、守りたくて己を犠牲にした舞風はその行動によって全てを失うことになってしまった。友人も、湖も、たったの二人の大事な存在さえも。

そして得たのは力。鬼と烏天狗の持っていた力を内包しながらも妖精としての性質を残してしまった存在。もう彼は妖精ではない。絶えず吐き出された言葉を聞きながら、抱きしめ続けることしか出来なかった。

最強の鬼姫と呼ばれた私に出来る事はそれしかなかった。

○ ○

「本当に、行くの？」

朝靄も晴れぬ山、舞風は、いや『舞風であった存在』は旅立とうと
していた。

アレからそれほどの時間も経っていない。その心は未だに傷を負っ
たままだ。だが彼は思い止まらない。

『いつか話したんだ。皆で旅に行こうって』

彼はそう言って笑顔を、その見飽きてしまった『作り笑顔』で私に
笑いかけた。それでも私はそれに気付かないふりをした。そうしな
ければならなかった。

断言する。彼は舞風だ。いくつかの記憶と、力と、そしてらしさを

受け継いでしまったが、それは紛れも無いあの妖精だった。角と翼を生やしてしまおうが、その目だけは変わらずにあった。

私も同行すると頼み込んだ。彼を一人にするのが心配だった。昨夜ですら魔されていた彼が心配でならなかった。

しかし、断られた。彼は笑ってこういうのだ。

『俺達の山を、守っていてほしい』

その俺達の中に『私』は含まれているのだろうか、とふと考えてしまった。それについては問いを口に出すことも出来なかった。恐らく、怖かったのだろう。きっと彼はそうだと言つが、それが本当か分からないから。

そして、彼は旅立つ。その際の言葉は上手く口から出なかった。言いたいことはたくさんあったが、いざとなって蓋でもされたかのように口は開かない。

しかし、それでも一つだけ、これだけは絶対に伝えなければならぬことがある。

だから、開け。

「行ってらっしゃい」

ポカンとして目を瞬かせた彼は作り笑顔を崩し、その瞳に雫を溜める。

溜まり溜まった雫が頬を伝い、顎まで行くとき、彼はようやく言葉を返した。

「うん。行って、きます」

ぼたり、と雫が零れ落ちた。

全てを失ってしまった。

全てを守りたかったはずなのに、その結果がこれだった。

あの二人を恨みたくもなかった。でも、恨めるわけも無い。恨みたいわけが無い。

感じる、真可の妖力、天正の力、身に滾る溢れんばかりの力。全てが脈打ち、体全体に流れていくのを感じることが出来る。

一人じゃない。俺の中には二人がいる、しかし、何故だろう？

こんなにも、寂しい

理屈では分かるうとしても心が理解しない。だって温もりを感じないんだから、真可と手を繋ぐことも天正に頭を撫でてもらうことももうないんだから。

「でもまあ、仕方ない、か」

試しに言葉を零してみる。それでも胸は苦しい。まるでぽっかりと穴が開いてしまったかのように空虚だ。どうしようもなく一人が怖い。ああ、子供みたいなのは自覚している。だが、それでもあの温もりが恋しい。

どうしようもなく、辛い。でも、生きなきゃならない。あの二人は俺を生かすために消えた。だから、俺はこれからもこの世界を生きなきゃならない。

もしも生きることには義務があるんだとしたら、俺はその三倍責任を負わなければならない。それが選択の結果、後悔はしても足りないけれど。

なんて、そうでも思わなければこの弱弱しく震える足が一步目で止まってしまいそうだから。

気付いたら大事な物を得て、気付いたら大事な物を失ってしまった。

それでも俺は、生きていくんだろう

何も無い、しかし朝日が昇る方へと向かい、その足を進めた。

雨が止むことが当然のように、心地よい日の光もまた閉じた。

一寸先も闇である旅路、彼はまた光を求めて歩き出した。

彼は大妖精、であったもの。

光はまだ見えない。しかし、いつかきつと見つかり、ただ信じ続

> i 2 4 3 9 9 | 9 3 2 0 5
<

ける。

そして、その先にある未来と (後書き)

さて、これが真の始まりだ!!

と、勝手に書いてみたり。

上の画像は一応自作ですが、英文の方が心配。俺の英語の評価は2だ。テストが赤点でも課題だけ出せばいいのさ!!

東方projectにおける精霊の意味合い、妖精以下の存在すらあやふやなものであることをご存知でしょうか？

てっきり妖精より上位の物を想像なさっていたら、残念ながらそれは間違いです。では何故「東方大精霊」なのか？

それに関しては追々……

これからも「東方大精霊」含め、『東方大精霊 - The Existed In Ancient -』（仮）をよろしくお願いします。

……ところで、英文間違ってますよね？ もしも間違ってたら締まらな過ぎる。

隙間と封印

遙か昔から存在する一つの物語、それらの主人公は鬼だったり、妖獣だったり、烏天狗だったり、はたまた人間だったりすることがある。

登場人物は主人公、そしてわらわらと沸いてくる悪党達。そして主人公と共に戦う心強い戦友、『舞う風』である。

この『舞う風』は主人公は違えど唯一固定された登場者であった。元々この物語は『舞う風』が仲間の手助けをする様を語るようなよく分からない物語だ。

何故かと言うと、主人公は曖昧であるのに、その戦友の存在だけが絶対的に重要なのだ。これほどまでに主人公の存在が曖昧な物語もないだろう。

ある時は敵に囲まれた主人公を助け、
またある時は膝をつきそうになる主人公を励まし、
そのまたある時は肩を並べて悪党を倒す。

やがて本当の主人公がどれなのか分からなくなってしまいがらも、『舞う風』だけは在り続けた。

しかし、古き物語はいつか風化し、その存在は曖昧になった。

『舞う風』が妖怪だったのか、それとも別の何かなのか、そもそも

架空の存在なのではないかと言う説まで現れだした。

何故この物語が生まれたのか、それを実際に知るものは存在しなかった。いや、作ったのが誰かも分からなかった。

残された情報は数少ない、存在すら最早曖昧な『舞う風』は烏天狗と鬼を盟友とし、悪の人間を憎んだこと。その姿は美しい髪と純白の衣に包まれていたこと。

その『舞う風』と言う名が若干間違った伝わり方をしていると言うことを知っているのは両手の指で数えるほどしかない。

彼の物語が風化してしまった理由はある時を境に消息が途絶えた事が主な理由と言われている。

やがて、数えるのが馬鹿らしくなるほどの時が流れ

とある人里の近くには不思議な山があった。

なんでもその山はそれなりに大きい山で、人里に隣接していたが、驚くことに妖が嫌がつて寄り付かなかったそうだ。しかしそこで取れる木材や山菜、流れる湧き水は非常によい物で、人に非常に重宝されていた。

その山の天辺には樹齡何千年とも言われる大樹が立ち、その傍には小さな縦穴状の祠があった。一体いつから存在するかすら分からないそれを村民はこれは神様の物に違いないと言い、年に一度その小山の神に供えをし、信仰した。

やがてその山は隔絶された意味合いを強く持ち、「結界の山」と呼ばれるようになった。

○
○

闇夜に佇むモノ。巷では見かけない帽子を乗せ、纏う衣服はおよそ和風とは呼べないもの。全体的に紫色で統一されているそれは私のお気に入りだ。

私の名は八雲紫。隙間妖怪と呼ばれている大妖怪だ。もっとも、名前ばかりが先を歩き、私の姿を知る者などほとんどいないだろうが。

私には夢がある。それは人と妖が共に生きる理想郷を築くこと。言うのは非常に簡単だが、実現が何より難しいことを私自身がよく知っている。だからと言うこともあるのだ。長い時を生き、大妖怪と呼ばれるようになるまでの非常に長い時間。私は自分の夢を探し続

けた。求め続けたのだ。それがこれだったに過ぎない。

理想郷はまだまだ完成には程遠い、しかし誰に困難だと言われようが、私は絶対にやり遂げる。その為にはまだ力と協力者が足りない。私は自らの力を利用し、世界中を渡り歩いた。幾人もの妖怪に声をかけ、助力を頼んだ。首を縦に振る者は少なかったが、酔狂な妖怪や志を共にする妖怪は力を貸してくれた。

そんなある夜のことである。一人の妖怪が協力をしない代わりに一つの当てを教えてくれた。

何でも結界の山と言うご大層な名で呼ばれる山の天辺には不思議な力を持つものが封印されているらしい。それが妖怪なのか、それとも神様なのか。封印を解放したものはいないらしく、なによりその山は妖怪を拒むらしい。無理矢理入ろうとした小妖怪がものの数秒で消滅したのを見たと言った。

なんだかんだ言っても実際に開放どころか山に登った妖怪すらいないらしく、とんでもない眉唾物に思えた。半ば暇つぶしのつもりでそこに向かった。どうにも胡散臭い。少なくともそんなとんでもない存在がいるなど私は聞いたことはない。山に入ろうとした妖怪が消滅した話だつてどこまで本当なのか。陰陽師が封印の解放を恐れて結界を施したのか。それともその封印された何者かの力によるものか。

「これが、その山ね……」

山を見下ろし、なるほど思いながらも私は驚いていた。その山には複雑なからくりの結界が張ってあったのだ。一定以下の妖力しか持たない妖怪が進入するとももの数秒で死に至る。しかし、その一定を越える妖力を持つものには何も起こらない。まるで強い妖怪を求めているかのように。

面白い。まさかこんな物を見つけるとは思いもしなかった。一定以上の範疇に軽く達していた私は気兼ねなく山の天辺に降り立った。言われていた通り、天辺には大樹があり、その隣には洞窟がある。その奥が祠なのだろう。私はここに何が封印されているか楽しみになってきていた。

「……土臭い場所」

開拓など欠片もされていない山、唯一大樹と洞窟の周りだけは整えられてはいたが、やはり古ぼけている。洞窟の入り口を潜り、少し行くだけで行き止まりになっていた。あったのは人の丈ほどの石版。石版は緑色に点滅しており、そこには何か字のようなものが書かれているようだった。しかし、風化が進んでいるのかそれを読み取ることは出来なかった。

いる。この石版の中に何かか封印されている。私は口の端が吊り上げるのが抑えられなかった。

もしも強大な妖力を持つ妖怪なのだとしたら、私の計画の助力を頼もう。封印を解いたのだからそれくらい構わないはずだ。ダメだとは言わせない。そんなことを言おう物ならこの力を以って屈服させ

る。

そう。私は大妖怪、八雲紫なのだから。

怪しく光る石版に手をかざし、力をこめる。ぴきぴきと輝が入っていく。まるで雛が羽化する瞬間のようだと思いながら、私は更に力を加える。

そして、石版は砕け散る。眩い緑色の光が洞窟の外までに届く。

その光が晴れた瞬間、私は啞然とした。石版の中にあつたのは私の身の丈ほどの無骨な剣だったのだ。そんな馬鹿なと思いながら私は大地に突き刺さった剣を引っ張った。するとあっさりとその剣は抜けてしまう。

その剣には確かに結界のような術式が組まれていた。だがどちらかと言うとこれは何かを封じ込める力を備えている。封印のための剣を封印していたのだとも言うのだろうか。形こそ確かに珍しいものではあるが、そんなこと私には非常にどうでもいい。心から落胆した。

そこにはそれ以外の変化も無いらしく、もう用はないと私は私の能力である「境界を操る程度の能力」の応用であるスキマを開こうとした。それを利用して私はいつも思うがままに移動できたのだ。

しかし、スキマは開かなかった。能力が使えなかったのだ。私は疑

間に思いながらもこの結界の弊害かもしれないと嫌々ながらこの洞窟を歩いて出ることにしたのだ。後々考えると封印を解いたのに、未だに結界が続いていることに何の疑問も抱かなかつたその時の自分には愚かとしか言いようがない。

そして私は洞窟から出たとき、あれに出会ったのだ。

空に浮かぶ月を呆然と見上げながら立ち尽くす少女か少年かも判別がつかない子供に。

初めは近くの人里の子供がいるのかと思った。だがわざわざ一人でこんな時間にここまで来て月を見上げる理由とはなんだろう？

見れば見るほどその身に着けているものもらしくない。着物とは思えない、素材がいまいち特定できない純白の衣服、手首に巻かれた無骨な腕輪はまるで似合っていない。髪の色が黒いことを除いてしまえばこの地の人間とは思えない。

妖力を感じない時点で妖怪と言う線は薄い。いや、少しして気付く何も感じないのだ。霊力も神力も魔力も、そして気配さえも。私は目に見えてながらもそこに本当に存在しているのか疑問の思った。そんなにも目の前の存在は空虚で、今にも消えてしまいそうに見えた。

まるでそれがいる場所だけ世界から隔離されてしまっているよ
うな、そんな風にも思えた。

そこでようやく私は顔に冷や汗をかいていることに気付いた。何故かは分からなかった。心が高揚しているのを感じる。何者かの目がこちらに向き、すぐに私の手元へと移った。

目の前にいるのはただの無力な子供だ。妖怪でも神でも陰陽師でもない。力一つ持たないただの人間のはずだ。そう思った、いや、そう思おうとしていた。

まるで逃げるかのように、そして私にそう思わせるこの存在に耐えない興味を抱かせた。

「貴女が抜いたのか？ 楔となっていた俺の剣を」

「……貴方の剣？」

ふと私は握り締めていた大きな剣へと視線を向けた。その手には手汗が滲んでいる。だがその言葉を聞いて疑問に思った。

「これは貴方の剣なの？」

「ああ。俺自身を封じていた剣。ご丁寧に外壁まで砕いてくれたのだらう？」

「あなたが、ここに封印されていた者？」

そんな馬鹿なと思いつながらそうなのかもしれないと言う正反対な考えが浮かんだ。もしそれが本当ならば……

「まあそういうことになるな。剣を媒介にこの大樹に心を封印し、剣は山を隔絶する。そんなところかな、仕組みは」

「そう、だとするならば、貴方は 何？」

「何、なんて言い方はないのでは？しかし、解放してくれた者だ。大目にみよう」

態度は非常に尊大だった。しかしそんな事が今はどうでもよく思える。

そして、目の前の存在そのものが理解できないモノが笑う。そして何処か嬉しそうに口を開くのだ。

「 舞風。舞う風と書いて舞風。しがない妖怪さ」

聳え立つ山の天辺に強い風が吹き始めていた。

隙間と封印（後書き）

舞風の旅が始まるかと思っただ方、残念でした！

あくまで空白の時間、そしてその間すら曖昧にし、舞風は今再び目覚めます。

言いたい事は沢山あるでしょう。ぶっちゃけ自分も無理矢理感あるなあ、とか思ったりしてます。

太古を負え、旧暦へ。

そして出会った隙間と封印されし者。

どんな道を辿るのか。

舞風と隙間（前書き）

サブタイが『妖精』から『舞風』に変化。だってもう妖精じゃあらへんもん！！

インチキゆかりん登場。未だに妖々夢のファンタズムどころかEXすら行けない作者が書き上げます。参考は他の作者と永夜だけ。

思ったりはやく投稿。しかし次からは本当に遅くなるであろう。

舞風と隙間

寝惚け、だろうか。いまいち頭が上手く働いていないように感じる。目覚めた時、ただぼんやりと綺麗な月を見上げていた。僅かに覚醒した時はあそこは月人の文明が蔓延る場所であることを思い出して顔をしかめたが。

さて、未だに抜けきっていないようだがわがままも言えないだろう。あの封印から一体どれだけの時間が経過したのか。確認する必要がある。

どうするかと考えるがらふと横を見てみれば一人の少女がぽかんとしてこちらを見ていた。その手には自分が愛用していた剣が握られており、封印が解けたのは彼女のおかげだと言うことに気付く。

それとなく感謝の言葉を伝えると、その少女が妖怪、しかも大妖であることに気付く。その事には素直に驚いた。あの剣にはそれ単体で作用を起こす結界術式が刻まれており、並大抵の妖怪では進入すられないと言っている。

名を、いや、存在を問われ、俺は答えを返す。未だ語れるのは名くらしいものなのだから仕方が無い。妖怪としては何かと断言できる存在でも無いので曖昧にしか返せない。

別に、自分が何者かなど大して重要でも無いだろう。

「舞風……？ そんな妖怪……いえ、そもそも貴方は本当に妖怪なの？ 妖力なんて感じられないのだけれど？」

「能力だ。使い勝手はともかく便利な能力が……ああ、すまん。少し待て」

不思議そうに頭を傾げられたが、流石にこれは気持ちが悪い。寝惚けると意識が混濁したようになって口調が定まらない。昔からの癖なので断念しているが、このままでは何を口走るか分かったものではない。

「あ、あ、あ、うん、うん。よし、待たせた。これは俺の能力さ。

言うなれば外と自分を遮断している状態。かと言っても元々妖力はそんなに大きくないけどね」

「……それが貴方の本当の喋り方かしら。良く分からない妖怪ね。貴方はなぜ封印されたの？」

「ん。それに関しては秘密って事で。別に悪いこととして封印されたわけじゃないから無問題」

「無害な妖怪が封印……まあ無いわけじゃないけれど、この結界の規模は異常よ。山一つを覆うほどの結界なんて人間に作れる者でもない……貴方、一体何に封印されたの？」

「……封印を解いてもらったからには答えるのが道理かもしれないけれど、ごめん、言えないわ」

少女の指すような視線が突き刺さる。しかし言うものか、と意地でもや顔をしたら更に抉られるかのように睨まれた。

「……確かに今更ね。それが人間ならばもう生きてはいないだろうし、今は貴方のことが聞きたいわ」

「守秘義務」

「却下、よ。貴方は封印を解いてくれた恩人に仇だけを返すの？」

「あいやや。それを言われると痛い。しかし、答えられぬこともあるということとは、ご存知でな」

不満そうなその顔だけは見なかった事にさせてもらおう。

「……まずは私も自己紹介をするべきね。私の名は八雲紫。境界の妖怪よ」

「教会の妖怪？ 洋風？ 十字架とか持ってるの？」

「どうしてそんな間違いが犯せるのか不思議ね。貴方博識そうに見えるてあんまりなのかしら？」

「いやいやはやはや、軽い冗談にございます。しかし境界の妖怪……聞いたことが無いね」

「言っておくけど私しかいなくてよ。そういう力を持って存在しているのだから」

「……成る程。能力か。さしずめ『境界を操る程度の能力』、とでもいったところかな？」

「ええ。それで、貴方の力は何かしら？」

「守秘義務……冗談にございます」

流石にこうも睨まれてばかりでは辛い。そう言うのはキツイ目線が好きな奴にだけやってほしい。因みに俺はそんな性癖は無い。

「『封を操る程度の能力』、それがこの舞風の能力さ」

「？ 名前を聞く限り結界を操るように聞こえるけど、貴方封印されてたのよね？」

「あい。ソレが？」

「……いえ、なんでもないわ。なんだか貴方と話していると調子が狂わされる」

失礼な。とは心の中で呟くだけにしておく。言ったところでまた冷たい目線に晒されるだけだろう。

「時に、俺も聞きたいことがあるのですが？」

「それは構わないけど、貴方、さきほどから口調が固定されて無いわよ？」

「これに関しては癖でして、お構いなく。さて、今のお歳……おおつと、暦を、教えていたいただけかな？ お嬢さん？」

「貴方、わざとでしょ？」

言うまでも無く愚問だ。

「……7世紀、だったかしら」

「なんだよー、分かんねーのかよー。使えねーなー」

「この剣で封印し直してあげようかしら？」

「スイマセン」

そうか、7世紀か……7世紀？ 7世紀とはもしかや日本の旧暦の時

代のことか？ いやいや、それはややおかしいのではないか？ その計算をすると俺は過去を遡った事に……いや、待てよ？ そもそも今までが過去だったのか？ 俺は過去に生まれ直していたのか？

「ちよつと、いきなり黙らないでもらえるかしら？」

「んあ？ ああごめんごめん。そういえば八雲はなんでこんな辺境の山に？ 用もなく立ち寄るとも思えないんだけど」

「暇つぶし、のつもりだったわ。私はね、叶えたい夢があり、その為に関いているのよ」

「……聞かないって言っても言うんだらう？」

「勿論。私の夢はね。人と妖怪が生きる理想郷を築くことよ」

「……それはまた」

昔の俺のようなことを、なんて思ってしまった。

「その完成には協力者が足りないわ。その為に私は各地を回って実力者達に協力を申し込んでいるのよ」

「成る程。一人で出来なきゃ皆で渡ろうってことか」

「そう。そして舞風、貴方にも協力を申し込むわ」

「は？ 俺？ 俺ですかい？ ただのしがない妖怪って言ったじゃないですかい」

俺は嘆息する。それも見るからに呆れるように。しかし八雲はそんな事を気にも留めず、歩み寄り、剣を差し出した。

「貴方ほどの異分子を放置するのもそれなりに危険なのよ。能力持ちは貴重であるし、嫌だと言うならこの剣は貴方の胸に吸い込まれていくかもしれないわね」

「……アンタ、よく性格が悪いって言われるだろ？」

「あら、そんなことはないわよ？」

あるよバカたれ。と言う悪態を吐きたくもなつたがまあ自分の異様さは残念ながら自分が最も理解している。つまりおかしいとは思いつつも納得する気持ちもあるのだ。

「で、協力と言って実際に何をやらせるつもりだ？」

「そうね……ちょうど手伝いが欲しかったし、式にでもなつてもらおうかしら」

「……式？」

式とはもしかや式神のことだろうか？ 聞いたことがある（と言ってもかなりうる覚えだが）、陰陽師が使役する神、もしくは妖怪だっただろうか？ どちらにせよただの雑用ではないか。

「八雲、確かにお前に恩はあるがそこまで俺を好き勝手させるわけにもいかないんだよ。なんだ？ 俺はお手伝いさんか？」

「なら、実力行使がいいかしら？ 戦って無理矢理することも出来るのよ？」

「どうか。俺の体の耐久度はぶっちゃけ人間並みだ。お前が触れるだけで碎けるぞ」

「……この上ない自虐ね。ならさっさと式に」

「しかし、ここは俺の独壇場^{フィールド}。境界の妖怪よ。魂の力が封じられるこの場で、俺に勝てるかな？」

「ッー!!」

突如その場の空気が変化する。だがそれは強者による圧力などと言うものではない。俺の封印術を駆使した擬似的な結界。出ることは自由。変わりに入ることは不可能な不可思議な結界。その意味合いは略すなら「今なら見逃してやる」といったところだ。

「……しがない妖怪なんて法螺など良く吹けたものね」

「自分で言うのは自由さ。他人になんと言われようが、ね。」

……さて八雲紫よ、ホントにやりあうつもりかい？」

俺の擬似的圧力発動結界（仮称）で咄嗟に身構えた八雲は俺の事を数秒ジツと見つめていたがやがて構えを解いた。

「……確かに、こちらは能力を封じられた場所で戦うなんてこちらが不利ね。貴方、最初の結界もそのつもりで張っていたの？」

「いんや、アレはずっと前にこの山に組み込んだ物だ。魂の力と妖力だけを封印する結界さ。この山を妖怪に荒らされたくなくてね」

「さつきも言ったけど、なに？ 魂の力って」

「『能力と霊力は魂に内包される』。俺の持論さ。この山にいる限り能力と霊力、そして妖力は封印される。俺と言う術者だけを残してね」

さて、随分喋ってしまったが、まだ八雲のその口から答えを聞いていない。別に俺は協力しないとは言っていない。縛り付けられるのと雑用同然に使われるのが嫌なだけだ。

「……貴方は今自分が術者だと言ったわね」

「それが？ 当然だろう。張ったのは俺」

「いえ。先程調べた時確かにこの山の結界を無効にする例外が記されていたわ。でもそこにあつたのは妖怪ではなかった。貴方は」

「それまでだ。それ以上は踏み込んでいいことと悪いことの分別をつける」

成る程。境界の妖怪と名乗るだけあつて結界には詳しいらしい。だがそれを外に漏らすわけにはいかない。主に俺の平穏な暮らしのため。

「お前の式は断る。だがたまにお前の手伝いをするくらいなら構わない。変わりに、それを漏らすな。決してだ」

「……いいでしょう。別に誰に話すことでも無いわ。貴方の正体なんて。契約は、それで成立ね」

そうして真夜中の会談は終わりを告げた。

○
○

おかしな存在だった。少なくともそれだけは言えた。

既に封印されていた山から去って行ってしまった舞風。アレはあま
りにも不透明すぎるモノだった。

封を、ようするに封印を操る能力を持っているのに封印されるなん

てまるでおかしな話だ。

自らの持つ力を全て遮断し、体内に閉じこめているのは勿論のこと、加えてあの両腕のものは枷としての術式がこめられていた。

妖怪としての能力を持っていることは間違っても無いだろう。でなければハツタリにもならない。しかし、彼は妖怪ではない。それは結界に記述された暗号から読み取れた。

普通なら術者によって暗号、所謂術式であるが、それに記述された例外対象、そこにはこう書かれていた。

曰く『大精霊』、と。

そんなものは今までにも聞いた事は無い。そもそも精霊の上位種は妖精だ。大精霊など、一体どんな存在なのか理解が出来ない。彼が妖精に及ばない存在には見えない。そして精霊程度にも見えない。

大精霊、そして、舞風。これは少しばかり調べてみる必要があるかもしれない。彼が例外のうちに入ると言うことはそれに該当することを示しているのだから。

「……また面倒なことになりそうね」

誰にとでも言うわけでもなく呟いた。呟かなければこの思考はどこまでも終わらない気がしたからだ。

「全く八雲め。変なもの付けやがって」

○
○

山を飛び出て未だ数分、服の端に貼り付けられた妙な紙切れをつまみながら俺は悪態をついていた。

式の仮契約、要するに式のお試し期間みたいな感じなんだろう。だが気が変わって式になるうなんて思ったわけでは決して無い。

八雲曰く、これは印であるとの事だ。俺の存在は稀薄で探し出すのが非常に困難だということではほぼ無理矢理つけられたのだ。勝手に式にしたら許さない等言つとそんなはずないとにやにや。アレは言わなかったら付けていたに違いない。

これがあればとりあえず場所の把握は容易になるとのことで、俺は渋々（付けられた後に）承諾したのだ。なんだかマーケティングされた気分。

さて、それはさておき、これからどうするかも問題であるだろう。

せつかく封印から目覚めたのだ。やりたいことは沢山ある。それに、ここが俺の前世、前に生きた世のおおよそ1300年前だと言つたら、行ってみたいところも沢山ある。

数えるのが馬鹿馬鹿しいほど昔から、今こうして居れるというのはそれだけで幸運なんだろう。

「さて、まずは久しぶりに旨い物が食いたいな」

日は昇り始めていた。うん、やはり始まりは日が昇る方向。これば
っかりは譲れない。

これから自分は何処に行くんだろう？ 何処に向かっているんだろ
う？

しかし不安はない。むしろ期待だけで埋められている。

だって、もう立ち止まる必要などないのだから

舞風と隙間（後書き）

「私の式になってくれないかしら？」

「だがことわる！！」

そんなのになつたら働かなきゃいけないじゃないか。働いたら負けだと思つてる。

しかし例え能力を封じられようとゆかりんなら即殺できると思いません。

さてさて、古代から旧暦へ。再び旅立ち。

おっと、ゆかりんはとんでもない過ちを犯していきました。

舞風と少女（前書き）

ようやく次話アップ。

ところで、俺がどうやって大学を辞めればいいか案をくれる人はいませんか？

高校との差がありすぎてゆとりの俺では乗り切れない……

舞風と少女

父上が最近『なよ竹のかぐや姫』と言う女の話ばかりしてくる。

なんでも大層美しい姫で、帝からも求愛を受けるほどらしい。自分も行ったが、蓬萊の玉の枝とやらを持ってくることを要求されたらしい。それさえあれば求婚を受け入れてくれるとのことだ。

只でさえかぐや姫に首つ丈だった父上は蓬萊の玉の枝を職人に作らせることに必死になり、私は勿論家族に構う時間は削られていった。

当てが外れているとは気付いていたが、私はかぐや姫に嫉妬していた。

その女さえいなければ父上は父上のままいてくれただろうに。お門違いなことは常々理解していたが、そうすることしか怒りを保つ方法を知らなかった。

ある日、私は父上が珍しく在宅しているときにこっそりと家を抜け出した。そうすれば家臣を使ってでも探しに来てくれる、そう思ったからだ。

一人で好き勝手に周る市場、それはなんと心躍るものであった。思わぬことに喜びがこみ上げたが、元々の目的は父の気を引くこと。遊び惚けることではない。

分かっては、いた。

「ッ……その……すいませ」

「何処見て歩いてんだよ小娘！！ おかげで服が汚れたじゃなねえか、どうしてくれる！？」

ああ、初めてでこんな目に会うなんて私は相当運が悪いのだろうか？

「えっと、あの」

「どうしたんですかい？」

「こいつがぶつかってきたせいで服が汚れちゃった。こりゃあ中々落ちねえ汚れだぜ」

よく言う、と私は心の中で呟いた。汚れなどそれこそ気にならない程度も無いだろうに。

こんなときに限って身なりを用人のものに変えてきたことは拙かったかもしれない。今や男達は私をどうするか、算段を話し始めている。

周りに助けてもらおうと視線を向けたが、皆が皆視線を逸らす。ああ、誰も助けてくれるつもりは無いらしい。

仕方も無いだろう。誰が身一つでこんな柄の悪そうな二人組みの相手しようと言うのだ。何処か自分を客観的に思い、諦めに似た感情を抱きながらも私はそんな事を考えていた。

こんなにも開けた場所で逃げたところですぐに捕まる。隙を見て行動を起こさない限り、私の結末は同じだ。

恐怖で震える身を案じながらも私は辺りを見回した。と、

「おい、そこのお前ら」

「ああ？　なんだ小僧」

私と目が合った一人の少年が無謀にも男達に横槍を入れたのだ。あまりにも無謀な所業。私は逃げるように促したかったが、この状況でどうしろと言っただ。

少年はなにやら身なりのよさそうな白い衣を纏い、その背には不釣り合いな剣を差していた。しかし歳の程は私と差して、いや下手をしたら私よりも下かもしれない。

そんな子供が男達を指差し、こう言ったのだ。

「お前らのせいで穢れ無く清廉で純白な俺の心が汚れてしまった。どうしてくれる？」

「え？」

「え？」

「え？」

「お前は違うだろうー！！」

「なにそれ怖い」

……今日は変な人にばかり会う。厄日だろうかと考えてしまった。

○
○

時は8世紀、西暦で言うなれば705年。俺は長い旅を続けていた。個人的のほほん気まま夢気分な旅を謳歌したかったが、たびたび八雲に手伝いを要請され、隙間に落とされる。

仕事は主に強大な妖怪の説得の協力、後は基本的に雑用まがいなことばかり。ついでの頼みとして八雲の式探しまで頼まれた。

そしてそれが終わり次第落とされる場所はいつも結界山。こちらの要望に聞く耳すら持たずに毎度同じ場所に落とすのだから勘弁してもらいたい。

それでもめげずに旅を続けた。ゲームでデータ消滅後初期からやり直すような絶望感には負けない。負けるものか。

それなりの年月を経て、俺は様々な出会いを模索した。実際に会ってみたい妖怪は3足す1。寧ろそれしか覚えていない。残念なことにそれらと会うことは叶わなかったが。

それにしても、人間に偽装しているとよく襲われるものだ。野良妖怪は勿論、野伏のぶせりやら人間の世であることを実感させられるようなものまで、全く良く出てくるものだと思う。

そして、決死の思いでとうとう都に着いた。そして早々絡まれている女の子を発見。いつの世も同じだなあなんて思いながらもその様を見ていたら唐突に女の子と目が合う。これは助けなきゃダメだろう、と行動開始。さすが、俺。やつさしい。

「小僧、お前にゃ用なんてねえからさっさとどっかに行きな」

「いやいや、用なら俺がある」

「なんだ？」

「お金をください」

「誰がやるか」

「ケチ」

「ケチでいい」

「守銭奴」

「守銭奴でいい」

「ぼんぽこぼん」

「ぼんぽこぼんで……いやよくない。なんだそれ」

中々面白い青年だと思う。女の子にいちやもん付けたけど。暇があったら拳を交わしてみたいと思う。ロリコンみたいだけど。

「しかし、めげない負けなない倒れない！　ということでここで一句」

「おいこんなガキほつといてとつと」

「会話に水差す阿呆は馬に蹴られて地獄に落ちろ」

「ぐはっ」

顎への一発でノックダウン。伊達に長生きしてないぜ。そして間を作らず目を見張るもう一人の懐に潜り込む。

「お前よくも……けぺっ」

「フィニッシュブローー！！」

拳は吸い込まれるように相手の鳩尾へ。そうして昏倒した二人の男達に対し中指を押し立てる。なんだか集まる視線に呆れが混じって気がしなくも無い。

さて、とその場から立ち去ろうとする俺。見返りを要求したいところだが服を見る限りそれほど裕福にも見えないし、さっさと去らせてもらおう。噂になるのも避けたい。

「ま、待ってください」

「？ 礼はいつか天にお供えしてくれればいいよ？」

「いや……それ貴方へのお礼になってませんよね」

いくら俺でも話しかけてきた女の子を無視したりはしない。と言う訳で女の子に向き直る。と、その少女は身なりこそそれほどでもないものを着ているが、雰囲気や髪の色がやや高貴なものに見えなくも無い。

「あの、何で助けってくれたんですか？」

「目が合ったから？」

「聞き返されても……ホントにそれだけなんですか？」

「強いて上げるなら絡まれてたのが女の子だからとかやることなくて暇だったからとかとりあえず暴りたいなとか思ったり思わなかったり」

「……やっぱり厄日だ」

少女がガツクリとした顔で呟いた言葉に失礼な、と顔を歪ませる。前にも言った気がするのは気のせい？ うん気のせいだ。

「えっと、とりあえず助けられてありがとうございます。あまり

こういつた場所になれてなくて、本当に助かりました」

「大丈夫。俺も初めて来たから。ってかついさつき、いや今さつき？」

こういう場合は何と言つんだらうと首を傾げた。今さつきでいいか。うん。

「え……家出？」

「せめて旅と言つて欲しかった。俺が勢いで家を飛び出す悪ガキに見えるか？」

「じゃあホントに旅人？」

「人を見た目で判断しちゃいけないぞ」

「いや、でも普通は子供が旅をしないと思つんですけど」

「可愛い子には旅をさせるといふではないか」

「……自分で言つんですね。それ」

先程のように視線が集中することもなく、大通りはだんだんと活気を取り戻していった。

俺としてはこれ以上話していても仕方ないと思つのでそろそろ話を切ろうとしたが、少女の一言で考えを改めざることを得なくなつた。

「あの……これからお時間いただけませんか？」

一応紳士を名乗る俺にはこれを断るわけにはいかなかった。

……実際は？ どうせ来たばかりで当てがなかっただけさ。

「……そう言えば、お前の名前は？ 因みに俺は舞風ね」
「それ本名ですか？」

酷いと思う。確かに一般的ではない気がするけども。

当たり前だと言わんばかりにムスツとすると少女は慌てて手を振り、弁解する。それが終わってようやくその名を名乗るのだ。

「私は藤原妹紅と言います」

○
○

「おい、そりゃあお前の方が家出だろ」

「……そうでした」

近くにあった茶屋に入り、団子を頬張りながら事情を聞いてみると、なんと複雑な家庭事情が顔を出した。

彼女、妹紅の父である藤原不比等とやらが最近一人の女に夢中となり、自分の相手をしてくれないのだと言う。子供っぽいとは思いますが、実際妹紅は子供だし、寂しがるのも当然か。

「しかし、かぐや姫、ねえ」

「なんでも絶世の美女らしいですね。そのせいで私はこんななんですけど……」

「ええい、いちいち暗くなるな。団子でも食ってる」

無理矢理一本だけ残していた団子を妹紅の口に突っ込む。「うむう！？」と声を上げると目を白黒させてなにやら言っているが、そんなことは知ったことではない。今の興味は別に移っている。

かぐや姫。それは現代日本において最も知られている昔話と言っても過言では無いだろう。小学校の教材にでも使われるくらいだし。思えば何故今までこれを思い出さなかったのか不思議なまでだ。

話の中では、かぐや姫は罪を犯し、月から地上に落とされた。その後あらゆる過程を経て月へと帰る。この月が問題なのだ。恐らく誰一人として月に人がいるなどと言うことを信じないだろうが、実際にいるのだ。

つまり、かぐや姫は月人である確率が非常に高い。そうなるというか、月からの迎えが来るであろう。

藤原不比等、確かそれは竹取物語にて登城する車持皇子くるまぢのみみのモデルの名だ。そもそもかぐや姫が実話かどうかすら定かで無い未来の情報だが、今だからこそ分かる。

かぐや姫は実際にいて、車持皇子もまたいる。そして妹紅から聞いた「蓬萊の玉の枝」も話も同様である。

史実がある以上、世界はそれにそって動いていくのだろう。

「ぶはっ、いきなり何するんですか!」

「ああ、気にするな……ところで、何で敬語なんだ?」

「え……さつき見た目で判断するとか言っただからってつきり童顔なのかと」

「……いや。まあ確かに年齢的には絶対お前より上だけど、童顔だからって言い方はどうかと思う」

少なくとも万年は生きてると思うし、年上かと聞かれれば絶対的に年上なんだろうけども。判断理由が童顔だからって、そんなのないよ。

「さて、そろそろ行くかな」

「? 何処にですか?」

「今夜の宿探し。久々にまともな場所でねれるんだ。今のうちに確保しておきたいのさ」

「あ、それなら家に来ませんか?」

「なん……だと?」

「なんでそこまで驚くのか分かりませんね。先程も言いましたけど私は大貴族の娘なんですよ?」

……まあ、それもまた珍しいことなのだろう。

断る理由もなく。俺は二つ返事を返した、なにやら騒ぎとか起きてそうだが、その辺大丈夫なんだろうか?

結論からして、全く大丈夫じゃなかったことをここに記させてもらおう。

家出した妹紅を家来総出、とまではいかずとも目を血走らせる程度には探していたようで、少女の屋敷の前に立った時は曲者とか言われてビックリした。もう少し年寄りを労わってほしいものと思う。まあそんな風には見えないんだろうが。

その場の妹紅の説得により何とか即お縄頂戴は免れたが、結果は恐らく変わらなかっただろう。

藤原不比等、その様相は確かに貴族っぽい。貴族とかいるんだったらこんななんだろうなあと思う男だった。そしてそれに相對するように正座をしている俺は、見ようによっては親子に見える？ かもしれない。

「妹紅、末の娘を助けてくれたらしいな」

「まあ、一応は。困ってる娘は助けるべきと判断したので」

「うむ。見上げた少年だ。妹紅がお前が滞在する許可が欲しいと進言してきた。私は別に構わぬが、余計なこととはしでかすなよ」

「はは、ありがたき幸せ」

なんてまるで茶番のような会話を終えた。変に凝った言葉を使って興味持たれるのも敵視されるのも困るし、あくまで普通の子供を装った。

「お前の父ちゃんと部屋で二人つきりになるのはもう嫌だ」

「私からしたら羨ましいんだけどなあ」

そりやお前だからだろ、と言う言葉を出すのも嫌なほど疲れたので、俺は言葉に思いつきり甘えて惰眠をむさぼることにした。

舞風と少女（後書き）

モコたんinnしたお！ 一度言ってみたかった。

と言う訳で登場です。史実と東方の設定を見比べながら書くのは難しい。

かつて二時創作だから自分の思うとおりにはやればいいと意見をいただきました。全くそのとおりだと思います。しかし、諦めは早くせに無駄に頑固な作者なので出来るだけこだわりたいと思います。

今回こだわったところは意外とまめなところ。藤原不比等の家族構成を調べたりその時期にあったことを調べたり。藤原不比等の末の娘は名前が不明なんだそうです

。そしてその母の名も不明。この辺りから出てきたのかな、と思います。

特に自分が悩んだのは妹紅の名前そのもの。普通に考えて妹紅なんて名が浮かぶでしょうか？ ZUN氏はこれに意味を込めていましたが、実際この名は妹紅が人間でなくなったことを切っ掛けに改名したのではないか？ と思いました。

しかし、ならどうするか？ と言う案が浮かばず結局マンマ。だってモコたんだものいいじゃない。

次に続くのは予想するまでもないと思いますが、やはり遅れると思われれます。課題とかテストとかレポートとかマジ死ねばいいのに。

いやはや、鼯の真似をしてみたいと思って始めましたが、過去の文
献漁りも意外と楽しいですね。

舞風と月姫（前書き）

おおよそ一週間ぶりの更新。大学から除籍されたい。

題どおり、ニート姫登場。口調等については悪しからず。

数学で39点取ったぜ！！ さて、どうしよう。

舞風と月姫

「春……はーるをいーろーどーいーる」

妹紅の家に滞在を始め、早一週間。何事もなく過ぎていった時間はやはり俺から見れば一瞬、いや刹那で、もう気付いたらと言った感じである。

さて、この一週間何をしていたかと聞かれたら、ぶっちゃけ何もしていないと答えよう。細かく説明するとしたら、妹紅に付き合っていたらいつの間にか時間が経っていた、としか言えない。とんでもなく恐ろしいものの片鱗を味わったぜ、は数時間前の俺の談。因みに今季は夏である。歌に意味は無い。

「てーるうーやーまーもーみーじいー」

このままではいけない。このままではノートになっってしまう。そう考えた俺は妹紅が目覚めない朝早くに屋敷を後にした。別に家出じゃないよ？ 帰ってくるよ？

何はともあれ、珍しく八雲からの収集も無い、安らかな日々は満喫した。そろそろ次に移るべきだ。

「……いもうーすーいーもー、つとお。ここかな？」

そう、かぐや姫の元にそろそろ行くべきだ。因みに今の時刻は既に夜である。その屋敷を探し出すのに時間をかけすぎた。

つい先程に何もしていなかったと語ったばかりだが、当然一日中屋敷に籠ってだらけていたわけでもない。俺だって仕事するときはやんとするのだ。

……なんて、使用人の噂が嫌々ながら耳に入っただけなのだが。

聞くだけすると藤原不比等のかぐや姫に対する心酔のしよは半端じゃないようだ。こそそと一流の職人を集め、蓬萊の玉の枝（の偽者）を作らせようと必死になっているらしい。

そうなるとやはり史実通り事実ががばれてダウトになってしまうの
だろう。

まあそれは俺にとっても半ばどうでもいい話だ。妹紅のような人間
ならともかく、自分に対して関わりの無い人間に助けの手を差し出
す理由も無い。

して、今はかぐや姫だ。月人であることは勿論、帝を魅了するその
美貌とやらも見てみたい。それに聞いておくこともいくらがある。

「でも、これは嚴重過ぎだろ……」

かぐや姫の住む屋敷は藤原の屋敷より一回り、二周り小さい。元が竹取を生業にしていただけあって屋敷を大きくする必要を感じなかったのかもしれない。だがそれにしても警備の人数の多いこと多いこと。だが俺にとって問題なのは警備の数なんぞではない。

屋敷を囲む柵。そこから立ち上る結界が問題なのだ。さぞ高名な陰陽師でも呼んだのか。それは恐らく中級でも破れない。八雲なら指先一本で粉碎しそうだが、興味なんて欠片も無いだろう。

無論、今の俺がそれに飛び込んだところで一瞬で消滅。ピチューンが関の山だ。

が、わざわざ結界に対し無策で突っ込むような妖怪ではない。

「ここをちょいちょいとして、開いた開いた」

封、すなわち結界を操る能力を持つ俺に対し、結界は無意味だ。これに関してだけは専売特許と言っても過言ではない。

やすやすと開いた小さな穴をくぐり、俺は敷地内へと侵入すると自分の気配やらなにやらを含める『存在感』を封印した。

これさえあれば俺に潜入出来ないところは無い。正しくこれは俺の存在感を皆無にする。

……寂しくなんか、ないんだから　　ッ！！

「お、団子もーらい」

廊下に積み重ねられた月見団子を摘み取り、口に運ぶ。うむ、美味だ。もう一ついただこうかと思いきや侍女らしき女性が団子を乗せた三方を持って行ってしまった。

残念に思ったが、あれに着いていけばかぐや姫の元に行けるのではないかと思い、その後ろをひたひたと歩き出した。

たどり着くまでに約数分。ひたすら暗い廊下を歩き続けた。先程小さい屋敷と言ったことを今すぐ訂正したい。ここも十分でかつた。たどり着いたそこは障子の前、団子を一旦下ろし、正座をしてから「失礼します」と礼儀正しそうに会釈する。隙ありッ!! 俺の手が団子へ伸びる。

女性は三方を再び持ち、室内へと入る。閉められる前にそそくさの中へ入った。

そこにいたのは一人の女性。腰までもある髪は見るからに艶があり、月の光に照らされながら縁側に腰掛けて足をばたつかせていた。その様はなんと面白い絵になることか。

侍女が入ってきたことに気付くと嬉しそうに笑った。その顔は確かに美人と言ってもいいだろう。

「私のお団子、ようやく来たの。待ちくたびれたじゃない」
「も、申し訳ございません」

そこにいた女性は恐らくかぐや姫だろう。だが彼女は美人と言うより美少女の方が正しいかもしれない。なるほど、容姿端麗とは彼女のためにこそある言葉、と言っても過言では無いだろう。

侍女をからかい、そして急かす。行動もやや子供に見えないことも無い。そして、傍に置かれた三方の上の団子に手を伸ばそうとして止まる。

「これはどういうことかしら。頼んだより数が少なく見えるのだけど？」

「い、いえ。そんなはずは……」

「昨夜は十五夜だったから今宵はそれよりも多く怖いと私は言ったわ。しかしどうみてもこれは昨日より少ない……貴女、侍女の身分で勝手に手を出したのかしら？」

「め、滅相もございません」

……あれ。なんか罪悪感が沸いてきたぞ。でも今この場で封印を解いて謝罪をするわけにもいかないし。と怒られる侍女さんを横目に俺は思っていた。

「……次に私のお団子に手を出した場合、どうなるか分かるわよね？」

「は、はい！ 失礼しました！！」

侍女さんは回れ右をしてそそくさと部屋から出て行く。かぐや姫はそれを見て「まったく……」と呟き、団子に手を伸ばした。

と、俺もついでに手を伸ばす。かぐや姫の傍に座ったのは言うまでも無い。

「……はあ」

なにやら憂鬱そうにため息をついたかぐや姫。屋敷暮らしは思ったよりストレスが溜まっているのかもしれないと同情した。思うだけ思っただけその目は月に向けられていたけど。

割とどうでもいい話だが、俺は華より団子な人間である。かぐや姫がどれだけ美人であろうと、彼女に見惚れるよりは団子に手を伸ばす。

しばし黙って団子を取り、咀嚼を繰り返していたが、やがての結末は、決まっている。

月を見上げながら団子に手を伸ばしたが、手は空を切る。団子がなくなっただけだ。そしてそこで、同じタイミングで手を伸ばしたかぐや姫。

今だから言うが、俺のこの存在感を封印することには欠点があ

る。それは視覚、聴覚、嗅覚をごまかすことが出来る。しかし、触覚や味覚だけは対応していない。後者には対応する必要性を感じなかったから。前者にはそこまで高度になると無駄に神経を使って気を抜くと全てが解除されるから。

俺が何を言いたいのか。もうお分かりだろう。

「……………」

「……………おろ?」

触れ合う手。見つめる目。やや眠たげ　と言つより胡散臭げ?

な表情は俺の顔に真っ直ぐ触れられている。

「……………あなた、誰?」

呆けたように吐き出された声。俺は胸を張り、腰に手を当てこう言つた。

「　団子の妖精ですッ!!」

直後、俺の頭が揺れた。初回でアップーってどういふこと?

○

○

一体なんだというのだろうか？

月見をしながらまったりと団子を食べていて、気付いたら隣には一人の子供。気付けなかったとか、そんなレベルではない。感じることも出来なかった

身なりはそれなりに綺麗に見える。汚れ一つ無い純白の衣を身に纏い、黒く透き通るような髪色をしている。ただその手の枷のような無骨な腕輪が気になったが。

「それで、実際のところ貴方はなんなのかしら？」

「だから団子のようにせげフンゴフンやっぱりなんでもないです。ただの旅人です」

「そう」

これ以上話すのも面倒くさくなり、話をそこで切って団子に手を……

「……そういえばもうないのよね」

「ん？ どうした？ そんなガツクリして」

「貴方のせいでしょ……」

まるで他人事のよう……いや、実際他人事か。ただ月を見上げるだけには味気ない今宵。こうなったならこの子供にでも付き合ってもらおう。

「貴方、名は？」

「人に名を尋ねるときは自分から名乗れって言われなかった？」

「残念ね、言われなかったわ」

「失望した。かぐや姫の教養方法に失望した」

知ってるじゃない。と頭をゴツンと叩く。なにやら痛そうにさすっているが、そこまですらないだろう……

「実録、かぐや姫は暴力的だった。これは売れる」

「そんなこと言ったところで誰も信じないわよ。どうでもいいからさつさと名乗りなさい」

「あいやや、これは失礼申した。自分、旅たびする夢ゆめみ見るただある只歩く、齡はそこそこの旅人舞風でさい」

「長いわ。簡略的に」

「旅人の舞風でえす」

「よろしい」

ふざけた子供、だが自分をかぐや姫と知ってこんな態度をとる人間など一人もいなかった。その点だけでは暇つぶしの対象になるといつてもいいだろう。

「知ってるみたいだけど、私は輝夜よ」

「こんな小市民相手に名乗ってくれるなど光栄の極み、寛大なお心に感謝いたします」

「……貴方、目上の者に対してそういうことを言うときはもっと顔

と言葉を協調させなさい。馬鹿にされているようにしか感じられないわ」

「それは失礼。性分です」

ペロリと舌を出し、悪びれもせずとその口の回ること回ること。まるで悪戯好きの大人を相手にしているかのよう。

しかし、そこまでの嫌らしい笑みがまるで嘘のように消え、その表情はとも子供のものとは思えない真剣味を帯びた。

「時に、貴方は何故月を見上げるのか」

「？別に不思議なことでも無いでしょう？明かり一つ無い暗闇の世界でたった一つの光を見上げるくらい」

「あい、それだけではありません。ただ」

「ただ、なに？」

「貴方は月を見上げて何を思うのか。それが気になりましたね」
「ッ！！」

……まさか、この少年は。そういえばこれの服装は全くと言って見たことの無いようなもの。少なくとも、人が着ているところは見たことが無い。

「貴方、まさか月の……」

「否、とだけ答えさせていただきました。多少因縁ありなだけです」

「……貴方の目的は何？」

「何も……いえ、一つだけ聞きたいことがあります。貴方がやがて月に帰るのは、いつになりますか？」

そこまで知っているのか……違うとは言ったが、何の関係も無いようには思えない。しかし、いつか帰ることは知っていると言つのに肝心の帰る時を知らないなんて、妙なことだ。

元月人？ いや、それはないか……？

「……恐らく、五年、いや三年程度後かしらね」

「結構。それさえ聞ければ来た甲斐があったというもの。さて、辛気臭い話はここまでにしておきましょうか」

「何を」

少年の顔が再び先程の悪戯小僧のものに戻り、縁側から跳ね降りて庭に舞った。

一見無様な舞は身に纏う純白の衣により不思議な独壇場と化した。

『風』の様に『舞』う。なるほど、舞風と言つのもただの偽名でもないらしい。

スポットライト
月の光に照らされた小さな舞台。幻想的なその姿は言葉で語るよりもその正体を曝け出した。

「貴女は、この地上が好きですか？」

「……ええ。たった数年しか過ごしていないけど、大好きよ。いえ、月が嫌いだったのかもしれない」

「月が寿命を奪うから？」

「正反对ね。私は地上の穢れが物から永遠を奪い、生物には寿命を与えると聞いたわ。まあ、意味は同じだからいいのだけど」

踊る。踊る。歌を歌うかのように言葉を紡ぐ。その表情の楽しげなことは至上の喜びにも感じられた。

「俺達は地上に生まれ、地上で生きてきた。月人の祖先もまた然り」

「生憎私は月生まれよ。地上に来るのだからこれが初めて」

「そう。だから『俺』は貴女を受け入れる。受け入れられる。例えば月人だろうと。邪な感情を、抱かない限りは」

「もしも、月人が貴方に牙を剥いたら？」

ピタリと舞は止まる。表情は悪戯小僧から三日月のようになにやけ顔へ。背筋が冷えた。

「無論。美しく残酷に、塵一つ残さずに消滅させましょう。骸など、絶対に残させはしない」

視界がだんだん暗くなっていく。最後に三日月のように避けた口元が過ぎり、意識は途絶えた。

○
○

「……俺らしくも無いことを」

まるで脅すかのような、狂言のようなことばかり口走り、最後に能力で彼女の意識を閉じた。

あそこまでするつもりはなかった。彼女が地上を好いていると言った時点で暗雲は晴れた。されど身に染みた後悔はそれに終わりを与えなかった。

「……アホらし」

からんころん、えっちらほっちらと帰路へつく。嗚呼、三年。もしくは五年。とても長いような気がする。遙か昔を生きた自分にとってはほんの一時だろうに。

月明かり、ほぼ満月と変わらない月の光が纏った衣に反射して無駄に眩しい。

嗚呼、俺は何処に向かっているのだろうか？

あと、帰宅直後寝ずに待っていた妹紅にエルボーを食らわせられたのは、意外と余談である。

舞風と月姫（後書き）

完成度は微妙。伝えたいことだけ伝えて終わり感が否めない。区切り方って難しいね。

かぐや姫が登場する竹取物語の成立年は不明。700年代は江戸時代の学者による推測。その論が一番強いと言ったこともあり、普通年代の変更はないです。

正確な年はどうしても分からない為、708〜710を目安にして考えてます。

と言うことではっちゃける舞風さん。団子の精霊なんです。これに関してでは前々からなんとなく考えてました。

妹紅のエルボー、完全に余談ですね。少しがさつになってきた……？

実は団子を乗せる三方を調べるのに要した二時間。なんでもっと早く見つからなかったし。更に言うなら縁側をド忘れして無駄にした3時間。その時の俺爆発しろ。

そのうちオリキャラの設定集でも出してみようかなあ？ なんて考えてます。勿論オリキャラはまだまだ出できません。

最後になりますが、執筆遅れて申し訳ございません。これからも思うとおりにいかないことが多々あると思いますが、これからも東方大精霊、よろしくお願いいいたします。

追伸

スイカを食べているとふと萃香を思い出して……結果病んでるなあ
と思うこのごろの作者でした。

舞風と月人（前書き）

大分遅れながらも執筆。英語の点数が死んだ。34点。

でもめげない。頑張つて執筆する。

アクセラレーションをく一方的にく>と訳した俺が書きましたよつと。

舞風と月人

過ぎてしまえばあつという間。なるほど、それも確かなことだろう。

三年などまるで寝て覚めたかの様にも思えた。勿論 $60 \times 60 \times 2$
 $4 \times 365 \times 3$ 、つまり九千四百六十万八千秒が経過するまでそれ
なりの出来事は勿論あつた。答えを忘れて計算をし、こうして暗記
に至るまでの過程もあるわけだが。

その年月、どうしたかと聞かれるといつも通りに過ごしたとしか言
えないだろう。元々八雲との契約もある訳だし、妹紅にはよろしく
言つて旅に出る。初めこそ寂しがってはいたが、一ヶ月もすれば帰
つてくるのだからそんな気持ちもなくなるだろう。

かぐや姫にも帰ってきたら出来るだけ顔を見せるようにした。最初
こそ警戒を解かなかつたが、時間が経つほどそれは薄れた。完全な
信頼を得るまでには至らなかつたようだが、それも仕方の無いこと
だ。

八雲の頼みは説得から荒事に偏るようになった。相手は妖怪、そし
て神。どいつもこいつも八雲の指先一本でダウンするのがほとんど
だったと言つておこつ。俺いらんじゃね？

ついでに、八雲が俺を観察的な目で見るが多くなつた。理由に
関しては大よそ予想がつく。恐らく俺の正体からみだろうが、言わ
ない限り気付くことは無いだろう。そして言う必要もつもりも無い。

さて、ようやく三年に至ろうとした時、都からのお触れが出回った。

『かぐや姫を迎えから守る人材を募る』、まあそんな感じだ。

急ぎ、俺は都に戻ることにした。これで間に合わないものならこの三年が無駄になると言っても過言ではないのだから。

○ ○

「で、なにやってるの？」

「しゃちほこつ!！」

私は珍しくも一月立たないうちに戻ってきた舞風を迎えた。最近この藤原家を仮宿のように思われているような気がしてならない。別に金銭的な問題はないけど、なんか嫌だ。

そして早々に変なことを始める子供　そう、子供。うつ伏せになるといきなり体を逸らせて頭と足の先を付けようと躍起になっているこの子供は、会った時に比べて更に退化しているような気がしてならない。体も全く成長しておらず、いつのまにか私の背が追い抜いてしまっている。そしてそれについて何も言わない侍女たちも気になる。

「まあ、それはどうでもいいんだけど……」

「どうした？　そんな如何にも憂鬱ですって顔して、幸せが逃げるぞ？　いや、寿命が縮むんだっけ？」

「どっちにしても自分のせいって言う自覚くらいは持って欲しいよ」

必死の形相で体を逸らせながら言葉を投げる舞風。怖いよ。せめて顔をこちらに向けないで欲しい。

先程も言ったが、こいつは会うたびに子供っぽくなる。と言うよりその片鱗を見せ付けている、と言った方が正しいかもしれない。その人との付き合いが長いほどその人を知ることが出来る、とは言いがこちらからすれば見せ付けられているようにも思えてくる。

「まあまあ、そんな怒るなよ。一緒にしゃちほこっこやらないか？」

「やるかっ!! そんな乙女の尊厳を捨て去るような真似を!!」

「大丈夫。既に捨ててるから」

「捨ててない!!」

へ? と言わんばかりにポカンと口を開いてこちらを見た。だが数秒経って理解したのか手をポンと叩き、頷いた。その一連の作業をその体勢のままでもやるのを止めると言うのに。

「ああ、そうかそうか。そう言えば言っただもんな」

「? 何を？」

「別に知らなくてもいいこと。まあ当然の帰結か」

一人で会話を勝手に完結に持っていく。そこがまた子供らしくなくて。こういった時は大概問い詰めても答えないので諦めるようにしていた。

妙な体勢をようやく止め、胡坐をかくと近くにあった三方の上の団子に手を伸ばす。と、その手は空を切る。ぼんやりとした様子で団子を見つめていた。

「……どうかしたの？」

「いや、うん。大したことじゃない」

「ふーん……そう言えば聞いた? かぐや姫にもうすぐ迎えが来るって話」

「ああ……小耳に挟んだ」

「それで帝様も父上も必死になってるみたい。私は帰ってくれんならそれでいいんだけどね」

一度話し出すと止まらない。いつものように愚痴を零す時間がやってきた。舞風はそれについてとやかく言うわけではないが、相槌をうって聞いてくれる。話すことが重要なのだ。

ただ、その日の舞風は相槌の数すら少なかったことに、私は後に気付く。

○
○

欠けない月。満ちた月。

真夜中の割には騒がしい屋敷。それが耳に障って鬱陶しくも感じられた。

とうとう迎えが来る。分かっていたことだ。だから私はここに落とされたとき、無駄な感情を抱かないようにした。しかし、そんな想いはすぐに崩れた。

元々自分が好奇心旺盛な人間であることを知っていた。分かっていたから、私は想いを振り切り世界を見たいと思った。

心優しいおじいさんとおばあさん。拾ってくれたのがあの二人で本当に良かったと思う。あの二人だけが私を私として、自分達の子供として見てくれた。金などに執着せず、私を一番に考えてくれた。

迎えが来ると分かったとき、帝に進言したのも二人だった。それも全て自分を思つてのこと。

しかし、それは全て無駄だ。月人の技術力の前には地を歩く人など

蟻のように蹴散らされてしまっただろう。そして、私はそれが見たくなかった。だから無駄だと分かっていたいながらそれらを拒絶した。結局、こうして傭兵達は集まってしまった。

いつものように縁側から月を見上げる。いつもの共の団子はない。今日ばかりは手をつける気にはなれなかった。ただ、ただ黙って満ちてしまった月を見上げるのみ。

「……帰りたく、ない」

ふと零れたその言葉は胸中に渦巻くただ一つの想い。諦めようにも諦めきれず。世界に願う私の言葉。

思えば何故私はこんなにも、この地上にいたいのだろうか？ 確かに月は嫌いだった。しかし、暮らせない訳ではない。自分を第一に考えてくれる従者もいればここよりもずっと豪勢な暮らしだって出来る。

なのに、何故？

ふと頭に再生されるのは一つの映像。学びを嫌だ嫌だとだれる自分にその時はまだ教育係だった従者が語ってくれた地上の話。

怖い場所よ。痛いことも、苦しいことも、汚いこともある。

彼女は思い出しながら語り始める。時には食糧危機だの妖怪の襲撃だのとエピソードを混じえて地上の話、もとい当時の嫌な話を聞かせてくれた。それだけ聞けば逆に嫌になりそうだが、彼女は付け加えるように、一つの話をした。

友達がいたの。妖精の友達。今じゃ名前も思い出せないし背格好も臃気だけど、彼が居たと言うことだけは確実に覚えてる。妖力を持つ者は里に入れないのに、その子だけが結界を操って侵入してきたの。それもただ私と話をするだけのために。おかしいでしょう？ でも……そんなあの子が嫌いじゃなかった……

それが彼女の一番言いたかった事だと言うのは何と無く分かった。珍しく瞳を潤ませて、その遠い日の思い出とやらを語った。あの彼女がだ。多分、そのときだ。私が本当の意味で地上に興味を持ったのは。

いいこともあり、嫌なこともある。そんなことは生きる過程において当たり前。当たり前であるはずなのに、私にはソレがなかった。姫としてまるで軟禁されるように屋敷に置かれ、ただ毎日を惰性と共に過ごす毎日。だから私は飲んだんだ。不老不死の薬を。その結果が、これ。

帰りたく、ない。

「 帰りたく、ないよお ツ!！」

ほろほろと零れる涙。頬を伝うしよっぱい水。見る者など誰一人いないのに、私は隠すようにその顔を覆った。

「 なら、抗えばいい」

「 え?」

そこにいたのは何度も見たその存在。姿形は子供の癖に、妙にませたよつな言動ばかりする。

「 それは罪じゃないんだから」

「舞、風」

大精霊、舞風。

もう二度と、この地に訪れる事はないと思っていた。

-
-

私は近づいてくる世界を見下ろしていた。それは遙か昔となんら変わっている様子は無い。蒼と白と緑の美しい世界。

少なくともあの遠い日に、罪を忘れないと誓った時はもう地上を踏むことはないと思っていた。

私達の所業により、あつかせのあの子の湖が枯れる姿を見下ろした、あの時は。

悔やんでも悔やめない。懺悔する相手がいない。妖怪は悪だ、穢れだと吐く連中に何度言葉を叩きつけてやりたいと思っただろう？

妖怪は悪ではない。ただ、私達にとっての肉や魚が、妖怪たちにとってのそれであったに過ぎない。妖怪に食われる人を惨いと言う。確かにそうだろう。だがそれに対し、憎しみを抱くのは本当に正しいことなのか？

言っただけでよかった。私達にとって無害な妖精がいることを。そしてそれと戯れる妖怪が居たと言う事を。

言っただけで信じないだろう。例え信じたとしても月の都市では穢れを忌むべきものと決め付けられている。

せめて、一人でもいいから知っておいて欲しいと言う私の欲が教え子を地上へ落とした。不老不死になる蓬莱の薬を呑むと言う罪。それを私は犯させた。ほんの一時、目を離れた時に起きたこと。

こんなことなら、地上の話などするべきではなかった。そう後悔する私はあの子を叱ることが出来なかった。

そして今、地上に墮とされたあの子を連れ帰るために、私は隊を率いて月を離れた。私以外にも二十人近い月人。一撃で妖怪を葬る銃を装備しどこぞに戦争にでも行く気なのだろうか？

いや、私は気付いている。これらは私に当てられた見張りだ。前々から裏で動いている私を危惧しての行動なのだろう、が私は何の行動も起こすつもりは無い。

今更起こしたところで、意味など無い。

雲を割り、地上に舞い降りる引く物のいない大きな籠。その全ては月の科学で出来ている。真下を照らす光にさえ意欲を削る催眠効果がある。

嗚呼、とんだ紛い物だ。月人は地上の人々を毛嫌いしている。ただ穢れに触れているだけで。だが私に言わせればそんなことで毛嫌いでできる月人の方が穢れているように見える。その証拠がこれ、紛い物の光で地上の人を操ろうと言う魂胆。

弓を構えた屈強な男達は光に照らされた直後にそれを下げ、啞然としてこちらを見上げている。

一人の月人が雲に擬態した乗り物を駆り、屋敷へ降りていく。嫌々と言う心中が手に取るように分かった。

かぐや姫を出せ、と月人は言う。それを拒否する老爺。そうして何
度か問答が続く内、屋敷の奥から着物を引きずり歩いてくる。

蓬莱山 輝夜　それが彼女の名前。月人の中でも秀でて美しく、
それ故に大罪を犯したにも関わらずこうして月からの迎えが来る。

必死に止めようとする老爺に小さな小袋のようなものを渡す。それ
は月人が彼女に渡した物。恐らく、蓬莱の薬。世話になったお礼に、
と。

そして誰もが呆けて見上げ中、月人と輝夜が帰還する。第一に私
を見つげ、胸に飛び込んでくる。

「会いたかったわ、輝夜」

「私もよ……永琳」

それを聞けて今更ながら目頭が熱くなる。輝夜は顔を私の胸に埋め
ているため、その顔を見ることは出来なかった。前よりいくらか甘
えん坊になったようだ。

と、唐突に籠が浮上する。ガタンと揺れて反動からか輝夜の顔が耳
元に来る。

「永琳。」

「……え？　輝夜。今、貴女」

沈黙の中、籠はだんだんと月へ昇っていく。もう屋敷は遠くて見えないような位置まで差し掛かったところで事は起きた。

ボン！　　と言う小さな爆発音がしたかと思うと籠が下降を始めたのだ。

「何事だ！！」

「重力を操るシステムの一部が破損しました！　浮上できません！！」

「なんだと！？」

月人の慌てふためく声。そんな中私は輝夜の顔をただ見つめていた。

浮かべていた表情は、笑顔。

「まさか、貴女　　ッ！！」

先程耳打ちされた言葉。あまりにも短い。そしてあまりにも分かりやすいその想い。

『永琳。私、月には帰りたくない』

下降を続ける籠。なんとか修復しようとする月人を放り、私達はそれから飛び出した。

少し遅れて、轟音。籠が山中に落ちた。

受身も取れず、私は輝夜を腕の中で庇いながら山中に落ちた。背中を強く打ち付け、鋭い痛みが走ったがそれも瞬時の事。倒れ、纏れ込んだまま赤く燃える山を見た。

あまりにも咄嗟でつい身を任せる形で飛び出したが、事を性急に運びすぎた。

「……輝夜。貴女がやったの」

「違うわ。頼んだのよ。心強い知り合いに」

「知り合い……？」

輝夜は嬉しそうに燃える山を見ていた。一応一通りの訓練はこなしているし、あれくらいで月の兵が死ぬとも思えない。

だとするならば、今すぐ決断するべきだ。

「輝夜。貴女本気なの？　今ここで逃げれば一生月人に追いまわされる事になるのよ」

「分かっているわ。そのくらい。これからは今までみたい裕福な暮らしは出来ないだろうってことくらい」

「なら」

「でも、それはきっと私の望まない世界だわ。永遠に変わらず、退屈な世界を永遠に生きるなんてまっぴらごめんよ！！」

まだ間に合う。その言葉を飲み込んで私は彼女の想いを聞いた。ああ、きつとそうだろう。月に帰るなどと言って、彼女を再び屋敷に閉じ込めるのが月の方針。私は彼女の選択を間違いだと言うことは出来ない。

ならば

「いたぞ！　八意様と輝夜姫だ！！」

武装した月人がこちらを発見し、近づいてくる。目と口以外が隠された防護ヘルムによりその顔は見えない。少し、気が楽になった。

「…………え？」

信じられないと言っかのように目を剥く月の兵。その左胸に突き立っているのは一本の矢。

私が射った。

崩れ落ちるその体。私は手の中の小弓を下ろし、再び輝夜に向き直る。

「……仕方ないわね。付き合っただけあげるわ」

「それでこそ永琳よ！」

嬉しそうに綻ぶ輝夜。私はそれを見ながらも気持ちを切り替える。すぐに追っ手が来るのだから。

「ようやく尻尾を出したか」

「ッ!？」

気付いた時には既に囲まれていた。いや、この隊形はあらかじめ配置されていた……？

こちらの、輝夜の意図を読んでいたのか……

「月の裏切り者、八意永琳。貴方にはスパイ容疑がかけられている。そして姫と結託しての逃亡声明、しかと聞かせてもらった」

「……やはり初めから」

「そういつことだ。捕える。抵抗するなら発砲するのも辞さん」

その言葉と共にじりじりと近づいてくる。自分のせいで出端からこうなってしまうとは、輝夜に申し訳ない。

と、輝様がこちらに顔を寄せ、小さく耳打ちをした。

「大丈夫よ」

何が、と聞く前に私達を結界が囲った。それはまるでガラスのように薄い、感じられる力の密度はとんでもない量が込められている。

月人達の？ いや、ならば向こうが焦る理由などは無い。その答えは、頭上にあった。

光り輝く、神々しい白い衣。

その姿には見覚えがあった。忘れようにも忘れられなかったから。

その背にくるくると回る五芒星の術式を貼り付けて、舞い降りる。

その姿は前に見たときとなんら変わり無いように思える。

ふわり、と結界の天辺に立ち、見下ろす。

ああ、彼の名はなんだったろう？ 磨耗した時のせいでそれが思い出せない。

「 舞風」

舞風、そう舞風。それが彼の名前。私が見捨てた彼の名前。

大妖精、舞風

○
○

皮肉。それは言うなれば嬉しい誤算。かぐや姫と交わした約束。それは彼女の逃亡の手助けをすること。だがそれは俺一人で実行するには荷が重い。そう言った俺に彼女は自慢の従者がいると言った。それが遠い日の知り合い、あまりにも皮肉だろう。

再開を喜ぶ自分があるのに気づく。それを素直に嬉しく思う。

「久しいね。永琳」
「舞、風？」

信じられないと言う様にこちらを見る。それはまるで幽霊を見ているかのようにも感じられた。まあ当然だろう。ただの妖精だった自分がこうして生き残っている事実、到底受け入れられるものではない。

そして驚いたのはこちらも同じ。ただの人間だった永琳が生きていることなどありえないと脳内から考えた。蓬莱の薬を作ったのは誰かと言う考えを完全に除外して。迂闊だったとしか言い様の無い。

……まあ、今は再開を懐かしむ他にするべきことがあるだろう。暗くてよく見えないが、囲まれている。十、いや二十近く。

「……転移結界作動」
「待つ」

ひゅん、と風切音のようなものが鳴ったかと思うと俺の真下の結界が消滅する。そこにいた二人はもういない。転移結界、隔絶された二つの空間の中身を入れ替える術式。勿論封の力だけでは実行は出来ないが、その術式を模索する時間はあった。これが始めての実践。恐らく成功だろう。

辺りの気配がどよめく。自分達の捕縛対象が一瞬のうちに消えたの

だから当然か。

「何者だ……」

「ませてるガキです」

「ふざけるなっ！」

こちらに向かつて銃を一齐に構える。俺は後方の術式を固定化し、大地を踏む。これだけはどうあっても譲れない。

あの時の想い。何億何千万と言う時が流れ、この精神さえも磨耗してしまいかもしれないと思いつつも心に残り続けた一つの感情。言うなれば透き通る水の中に黒ずんだビー玉を投げ込んだかのような覆しよりの無い違和感。

その正体は憎悪。幾万もの時を経て、ここに蘇るもの。不確かな自分に残された確かなもの。

「ふざけてたのは……多分アンタ等だったのさ。いいじゃないか。俺が何者かなんて。人間だろうと神様だろうと妖怪だろうと。ただどなあ、アンタ等が月人で、俺が俺なら、理由はあるんだ」

「訳の分からぬことを」

「五月蠅いよ。蠅虫」

自分の心が透き通っていくのを感じる。純粹に埋め尽くされていく。だがそれは純粹な悪意と狂意。

息を呑む音が聞こえる。だがそんな事はどうでもいい。ずっと困っていたんだ。このやり場のない感情の矛先を。

「お前らはただ、消えてくれればそれでいい。世界を疎み、そして世界に疎まれた者達。世界を受け入れない者達。今こうしてこの大地を踏むだけで、大地は、怒^{いか}ってる!!」
「ッ!? かかれええー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

それは一つの暴力。一つの世界。相手にするのは極小な存在。

抗うことなどない。ただ、消すだけ、徹底的に。

圧倒的。と人は言うだろうか？

そう圧倒的。圧倒的な数の暴力に押されるように舞風は月人の放つ閃光を避けることしか出来ない。端から見ればそれは舞風が不利なようにしか見えない。

しかし、彼のその口元はまるで裂けていると言っても過言で無いほど歪んでいる。

空中にて停止、手足が貫かれるのも構わず後方の五芒星は回転をしながら発光を始め、そして。

「破あつ！！」

即座に分裂、地上に光を降らせる。大地を浅く傷つけるそれは月

人に対しては優しくない。一人の月人がそれに当たった直後、痕跡も残さず消えた。きえた

驚愕、そして恐れを抱く。むやみやたらに乱発される閃光は彼の頭部を穿った。光を零しながら落ちていく。誰もが安堵に胸を撫で下ろした。

しかし、光が集まったかと思うと即座に復元。再び狂った笑いをその顔に張り付かせた。

元々月人では内乱以外の戦いは無い。そしてその際玉兔 月の妖獣が前線に立たされる。月人自らが戦場に立つことは稀と言ってもいい。

故に、錯乱する。今までにない恐怖。これはかぐや姫を連れ戻すだけの簡単な任務だったはずなのに。目前で起きるのは正に生きるか死ぬかの瀬戸際。

唯一密命を受けていた男はただ無様に落ちてくる光を転げ逃げるしかなかった。目の前にいた兵士が閃光に当たり、消える。髪一本残さずに。

アレはなんだ？ 人間？ そんなはずがない。妖怪？ そんな生温い物ではない。神？ そう、言うなればそれが一番しつくり来た。だが違う。神々しさを感じることもできたとしても、その後に来るのは逃れられない畏怖。

気付けば残っているのは自分だけになっていることに男は気付く。見上げればアレがいた。満月にて照らされた影。目は見えなかった。まるで三日月のような笑みだけがそこにあった。

光が降り注ぐ。逃げる場所など何処にも、無い。抗い様もなく、男はその場から消えた。

視界は移り、次の瞬間自分は似たような景色の場所に落とされた。見ればそこには消されたと思っただ兵達がいた。

だが、それは個室。まるで荷物のように結界と言う箱に詰められ、そして今定員を迎えた。彼らは消えたのではない。この密室に閉じ込められたのだ。

「死体なんて、残さない」

見上げる。神々しい光。やはり、狂気に歪んだ笑み。そして、

「圧縮されて、滅しろ」

憎悪に染まった、目。

自分達を閉じ込める結界が狭まってくる。どんどん近づいてくる限界。その結末がどんなものか全員気付いている。泣き叫び、悲鳴を

上げる。家族の名をただ狂ったように叫ぶ者、月の指導者に助けを乞う者、黙って神に祈り、己の運命を受け入れようとするもの。

男は、何もしなかった。このままいけば魂すら残さず消滅するであることは間違いないのに、その目は空中の何かを捉えていた。

見定めるような目、己の命を既に諦め、それに意味を見出そうとする行動。やがてそれ自体を無意味と悟り、静かに目前を闇に落とした。

結界によって囲われたそこには内からの声は外に聞こえない。狭まり、小さくなっていく結界は中のモノを押し潰す。

やがて全てを赤く染め、塵一つだけ残し、消滅した。

「
ださっ
」

残った一つの声。だがそれはいなくなった者への侮蔑の言葉ではない。

「 カッコ悪」

自虐に歪んだ笑み。先程までの狂気は存在を潜め、その目は寂しさだけを残していた。

○
○

「永琳、貴女舞風の事知ってたの？」
「ええ、話したでしょう？ 妖精の友達の話。それが彼よ」

場所は変わり、景色こそ変わらないがそこにいるのはたった二人。
永琳と輝夜だけだ。

「……でもそれって変じゃない。ずっと昔の事なんでしょう？」
「でも私の事を知っていたみたいだし、他人の空似じゃないのは確かよ。『久しい』なんてことも言っていたし」
「訳が分からないわ。こうなったら本人に直接問い詰めた方が」
「黙秘、させてもらおうよ」

声が降ってくる。バツと上を見上げると先程別れたばかりの舞風が
ふわふわと浮いていた。

力学的な事象を完全に無視したそれを行わせているのは背後の術式
だろうことはすぐに分かった。

「……久しぶりね。生きていてくれて嬉しいわ」
「そっちもご存命だとは思わなかった。硬いこと抜きで喜ばせても

らうよ」

「ええ、でもどうして？ 確かに貴方の源である湖が汚染されるのを見たのに」

「……色々あったんだ。気が遠くなるようなことが」

彼は遠い目で過去を懐かしんでいるように見える。だがすぐにそれを他所にやり、腕を組みながら尋ねた。

「それで、これからどうする気だ？」

「私は、輝夜に着いて行くわ。元はと言えばこの子の案なのだし」「勿論旅に出るわ。見たいこともしたいことも沢山あるから」

そっか、と寂しそうに笑うと彼はふわりと大地に降り立った。

「ま、縁があればまた会えるだろう。お互い寿命は長い訳だし。しかし、女の二人旅で大丈夫か？」

「私達は不老不死よ？ それに戦う力ならある。心配なら貴方も着いてくる」

「それは勘弁。今は一人気ままな旅を謳歌したいんでね」

お互い、クスリと笑みが零れた。長い長い時を経て、こうして話せることが嬉しいのだ。

「じゃあな。八意永琳。また会おう」

「貴方もね。舞風。楽しみにしてるわ」

再び交わった二人の存在。意図すらない再会に、『彼』は懐かしさを感じることができた。

月の姫はこうして自由を得、その従者は彼に感謝を告げる。

誰も知らない。誰も気付けない一端の物語である

舞風と月人（後書き）

長い。俺にしては長すぎると言っても過言ではない。そして読みにくい。ほとんどの人がそう思ったに違いない。グダグダ感さん初めまして。え？ 初めてじゃない？

舞風個人の初戦闘。後方では魔法陣クルクル。憧れるね。星ってなんだか憧れる。魔理沙と被ってしまっるのはご愛嬌。気付けば書いてる小説の主人公が全員少年（15歳未満）だったことに気付いて絶望した。

当然、かぐや姫関連のも物語はこれで終わりじゃありません。大切な一人を忘れるわけが無い。次回はそこですね。

さて、長くなりましたが、悪い点、おかしい点、変な点見つけ次第言ってくださると助かります。Mじゃないよ？ M……じゃないよね？

いい点もどしどし書いて下さい。どっちにせよ励みになります。誰かコラボとか書いてくれないかな？

舞風と少女と（前書き）

完成。即掲載！！

中間試験が五問問題。うち二つしか答えられず。60とらなあかんのに！！俺ワロタ！！

非常にどうでもいい話だが最近の口癖がワロタになりかけている。

20110630。題変更。理由は名前だけで登場人物丸分かりすぎるから。

と、思って変更したら「舞風と少女」はダブってた。更に変更。

舞風と少女と

舞風と永琳たちが別れを告げた後、藤原家。

「……………何処行つたんだろ？」

私は唐突にいなくなった舞風の事を考えていた。

確かに彼が勝手にいなくなることなどしばしばあったことだが、三日も留守にするのは珍しい。と言うより初めてだ。流石に心配にもなってくる。

迷子やら連れ去られたと言う線は薄い。その身に似合わず強い舞風が誰かに負けることなどないだろうし、この都は何度も訪れた場所道が分からない訳も無い。

もう都を出てしまったのだろうか？ 今まで何も言わずに出て行ったことなどなかったはずだが、気分屋な彼のことだし、ありえないと否定も出来ない。

そういえば、今日のはかぐや姫が月に帰る日だっただろうか？ とふと思いつく。

そんなこともあり、父上である藤原不比等もかぐや姫の元へ馳せ参じてしまい、残されたのは自分だけだった。行きたいと言ったが相手にしてもらえなかった。

この頃心配になってくる。私は本当に父上に愛されているのだろうか？

「……って、なに考えてんだろ」

自分らしくも無い、と私は立ち上がって厨房へ向かった。夜も遅い時間だが、おやつくらいならあるだろう。

と、門の方が騒がしくなり、誰かが入ってくる気配。どうしたんだろう？ と進路を変更して私は入り口へと歩いていった。

ガヤガヤと騒がしながらも開かれる門。そこから顔を覗かせたのは従者の肩を借りて引きずられるように歩いてくる父上だった。何事かと焦り近づこうとしたが、途端に感じた刺激臭に足を止める。

酒の匂いだ。

父上は振られた後も尚かぐや姫に想いを寄せていた。職人達に作らせた蓬莱の玉の枝がかぐや姫に偽者とばれた後にも冷めることなく

求愛を続けていた。

当の本人は前科持ちを信じることも出来ず、偶にかぐや姫に会いに行けば簡単な会話をこなしてお終い。それだけだ。流石にこればかりは仕方ないと私は思った。

酔ったまま従者に介抱された父上はなにやら唸りを上げて何事かを呟いていた。だがそれは何者にも聞き取れない。恐らくかぐや姫への泣き言だろう、と従者達は取り合う様子をあまり見せなかった。

突然従者達の手を払いのけ、ゆらゆらと立ち上がるとそのままこちらへ。正確には私室へと歩いてきた。無言で更に半開きな目を見て私は思わず身を固めた。それでも進行上の邪魔にはならないようにと道の脇に逸れた。

半開きの目がこちらをジロリと見つける。紅潮した頬をキツと吊り上げ、そして

気付けば私は頬への鋭い痛みと共に床に叩きつけられていた。

痛みに顔を歪めながらも父上の顔を見上げる。その顔は今までにないほど怒り狂っているように見えた。

嗚呼、何故気付かなかったのだろう？ あそこまで好きになった女が、恥をかいた後もずっと求愛を続けていた女が、いきなりいなくなっただけなのはなんだ？

怒り、それも矛先がない怒り。私は父を見ると、どんな顔をしていたのだろうか？ いや、父上にはどう見えたのだろうか？ 私にそんな気持ちがないにしろ、鼻で笑うような顔に見えたのかも知れない。

「！！！！」

「！？！？ ツー！！」

「、 ツー！！」

「！！ ツー！！」

浴びせられ罵声、振りかぶられる腕。私は私と言う存在を何処か客観的に見てしまっていることに気付いた。ただ呆然として父になれるがままになっている中、頭の中だけで全く別に感じられた。

止めにかかる従者達。両腕を押さえられて尚も私への罵倒を止めない。

「！！ ツー！！」

その言葉を最後に、私の視界は真っ白になった。

○
○

「ふう、着いた……」

あの後、かぐや姫達と別れた後、俺は都とは逆の方へと進み始めた。今頃は騒ぎでも起きているかもしれないし、ほとぼりが冷める程度までは都を離れよう。そんな拙い考えだった。

数日経ってから妹紅に何も言わず、且つ荷物を置きっぱなしにしてしまったことを思い出した。荷物の方は別に未練は無いが、もしか

したら妹紅が心配しているかもしれない。と思った俺は進路を再び都へ向けた。

そしてたった今、着いた所である。

都の中は思いのほか同様は見られなかった。かぐや姫と言う存在がそれほど民衆と遠い存在だったということもあるだろうが、貴族連中は大騒ぎなはずだ。

さて、妹紅への土産はどうしようとお通りで差し掛かったところである。なにやら大きな人溜まりが出来ていることに気付いた。何事だろう？ とそちらへ歩を進めた。

それはほとんど入り口と言っても過言ではない位置だった。小さな体を利用し、潜り込むように騒ぎの中心に向かう。

そこにいたのは、

明らかかな侮蔑と怒りと嫌悪を混ぜ込み、石を投げつける人々。そしてただそれを蹲って耐える白髪の少女だった。

「は？」

あまりの出来事に最早ポカンと呆けた。状況その物が理解できないが、それ以上に理解できないものがある。

人々の表情は皆、恐怖と嫌悪を無理矢理混ぜ込んだようなものであったことを。

どうしてそこまでの顔を作れるのだろうか？ それだけの事を少女をしたから？ 普段は乱闘が起きようが傍観に徹する人間達がここまでのことをする理由はなんだ？

ただただ人間達は少女を化け物と呼び、消えてなくなれと罵倒する。化け物？ これが化け物？ そんな訳が無いだろう。魔力も妖力も、増してや霊力すらも無いこの少女が化け物な訳が無い。

少女の顔が持ち上がる。額からは血が流れ、怯えが混じったその赤い目は人間達を見回し、そして、俺を見つける。

目を剥いていた。俺と言う存在に対し、まるで助けを懇願するような目をした。

一つの記憶が蘇る。

髪の色は白ではなく白銀で、それでも他に無いほど似ていて。罵倒されていた。石をぶつけられるなんてものではなく、振りかぶられた手をそのまま小さな体で受けた。

その時の彼は助けなど求めていなかった。怯えてなどいなかった。

だが、助けなくてはならないと思った。見てみぬふりをすると言う選択は存在しなかった。背の翼をはためかせ、の元に

「舞風え!!!」

唐突に呼び戻される。少女が俺の名を呼んでいた。俺の助けを求めていた。記憶が叫んでいる。見捨てるな、と。だから俺は更に脚を進めた。

近づいて気付く、少女は薄汚れてはいたが身なりのよい服を着ていた。どこかの貴族の娘だろうか？ だとしたら何故、こんなにも公衆面前で簡単に手を出せるのか。考えるのが面倒だから後回しにした。

羽織っていた衣の上着部分を取り外し、ばさりと広げる。それが人間達の視界から俺と少女を隠し、そして転移魔術の代用媒介を果たす。

気付けばそこは都の外、都へと至る道の途中。つい最近思う場所に下ろしてくれない八雲に対抗する術が始めて人助けに役立った瞬間……と思ったがかぐや姫のときも使用していたか。

少女は少女で突如場所が入れ替わったことに驚き、辺りをキョロキ

ヨロと見回していた。

「さて、事情を聞く前に怪我の治療をするか。さ、脱げ」
「ッ！！？」

セクハラ？ 変態？ なんとでも言え。と言うより寧ろ言われることを想定しての発言だったが、少女は怯えるように後ずさりしながら俺の顔を見た。

見覚えのある顔、確かにそう思った。だがその前に何かを見落とししている気がしている。

そうだ。額の怪我がない。違和感の正体はそれだった。

恐らくそれが少女が化け物と呼ばれる所以なのだろう。寧ろそれ以外に驚く部分も無い。

「ふむ、再生能力、か？」
「ッ！？」 どう、して？」
「どうしても、何も」

少女と目を合わせ、会話をしていると何故かデジャブを感じる。赤い目、白い髪。あったことも無いはずなのだが、視覚的にそれを感じるということはどういうことなのだろう？

結論はすぐに出た。目、髪は確かに変わった。だがその少女の顔を、俺は知っている。何度も面と向かって話したのだから。

そう、その少女の名は

「……妹紅？」

「……！！」

少女は、妹紅は、黙ったまま僅かに頷いた。

○
○

「それで、一体どうしてそんなことになったんだ？」
「……………」

妹紅が落ち着くまでの間、黙って隣にいてやった。荷物が無いので大して気の利いたことは出来ない。さつき剥いだ衣の上着部分をかけてやった。それでも大した反応がなかったが。

一刻は経過したが今もこうしてだんまりが続いている。言いたくない内は無理に聞きださない方がいい。長生きの知恵だ。役立つのは結構稀だが。

「ねえ……………今まで何処に行ってたの？」

質問に答えるでもなく、妹紅は聞いてきた。それになんの意味があるのか分からないが、それとなく伝えるべきだろう。

「ちょっと用事を思い出してな。都を離れてたんだ」

「……………」

「あとかぐや姫の別れ際でも」

話の途中で区切る。妹紅が齒をギリツと食いしばったから。反応したワードは『かぐや姫』。

「かぐや、姫…………ツ!!」

「かぐや姫が、どうかしたかい？」

「あいつの…………あいつのせいで　ツ!!」

今にも怒り狂いそうなほどとてつもない感情の奔流。それは確かに先日別れた少女に向けられたもの。今までに見た事ない表情。何がこの子をそこまでさせるのか。

「なにが、あつた？」

有無を言わせるつもりもなく、問う。長生きの知恵？ 知ったことか。このままでは壊れてしまう。

そして、少女の口から吐き出された言葉。驚愕するしかない内容。

「不老不死の薬を、呑んだ」

「なんてことだよ……」

俺は思わず頭を抱えてしまいそうになった。少なくとも本件はそれに値するものだった。

『蓬莱の薬』、彼のかぐや姫も服用した不老不死になれる薬。かぐや姫がせめてもと老夫婦に渡したその薬が、なんの因果かこの少女の体に収まったのだから。

なるほど、化け物と言う言葉をそれとなく理解する。普通の人間からすれば傷を負おうがすぐに治り、且つ殺しても生き返るような人間は紛れも無い化け物と言ってもいいだろう。あれほどの石を投げられようと傷一つ見当たらないのはそれが原因か。

そして、その本元の理由はなんと言うことか逆恨み。しかも鼻で笑えない、それこそ面と向かって間違つてるともいえない暗く深い内容。

何も考えないまま　いや、もしかしたら何も考えたくなかったのか　浮かんだ復讐心。そしてその結果がこれ。人外への変貌。おそらく、彼女はこれ意向成長することも、そして死ぬこともなく生き続ける。それも永遠に。

それに恐らく未だ気付いていない。今妹紅にあるのは恐怖。化け物と呼び罵倒する人間達への恐れ。

何をどうするべきかも分からず、俺は一つため息をついた。それだけでビクリと妹紅が体を震わせる。

「……舞風は、怖くないの？」

「お前がか？　いや、うん。まあ、怖くは無い、か」

「どうし、て？」

「どうしても何も、妖怪でもなきや刃物振り回すわけでも無い人間の何を怖がればいいのか……」

確かに人間から見れば怖いだろうが、生憎人間は遙か昔に卒業した身、たかが死なないくらいよりならそこらへんの野良妖怪の方がよっぽど怖い。大して変わらないが。

「本当に？　本当に私が怖くないの？」

「全く。らしく無いぞ妹紅。つい先日の怒りは何処に行った？」
「ッ！ あれは、舞風が私の秘蔵の饅頭を取ったから……」
「そうだっけ？ ああそでしたそうでした。だからその恨めしげな目を止めてください」

白けた目でこちらを睨んでいた妹紅はふと真剣な目になり、こちらを見た。

「さっきのは何？ 気付いたらここにいたけれど」

「あれ？ あれは……なんて言うかな、特技？」

「ふざけないで」

「ああはいはい。言うなれば魔法だよ。暇つぶしに覚えた」

「……嘘だ」

「嘘じゃないし。ホントだし」

「……それは舞風の見た目が全く変わらないのとの関係が？」

「それこそ嘘だ。数尺は伸びたる？」

「いや全く」

「そんなバカな……」

伸びて……ない？ 成長がストップしたのか？ そんなの絶対おかしいよ。

「まあ、うん。そうだな。改めて自己紹介くらいしておこうか。蓬莱人、藤原妹紅」

「蓬莱人？」

「蓬莱の薬を呑んだ人間らしいぞ？ それはさておき、俺は舞風。」

「一応大精霊を名乗ってる」

「大、精霊？ 人間じゃなかったんだ」

「おう。びっくりしたか？」

「したけど、そんなでもないかな。妖怪とかじゃない気がしてたから」

「一応世間には妖怪で通してる。言ったところで分かることでもないからな。自称だし」

「自称なんだ」

「うん……」

大精霊の知名度は低い。何故なら俺しか名乗ってないから。売るよ
うな真似もしてないし。

「まあひとまず落ち着いたならそれでいいや。お前はこれからどう
する？」

「私？ そっか……屋敷にはもう帰れないもんね」

「家なし子。大変だニャー。可愛い子は旅をするんだニャー」

「舞風も旅してるんだっけ？」

「根無し草の紳士の心、舞風とは私だ」

「そう。じゃあ連れて行ってよ。私も」

「なん……だと？」

目を見開き、言葉を零す。大して妹紅はニヤニヤと顔を歪ませてい
た。

「やだ」

「紳士なんですよ？」

「だから？」

「こんなか弱い女の子をこんなところに置いていくの？」

「殺しても死なない奴がよくも言う」

「殺しても死ねないの間違いよ。どうせ当ても無いぶらり旅なんですよ？」

「……まあ、否定できないけど」

「それじゃあ決まりね」

「強引な奴は嫌われるって親に聞かなかったか？」

「父上は構ってくれなかった」

「そういう黒い冗談ブラックジョークはいいです」

はたまた、厄介なことになってしまった。そう思いながらも何処か安心する俺。やはりたったの三年程度なれどそれなりに見知った仲を見捨てるようなまねをしたくもなかった。

「でもたまにお仕事で臨時にいらなくなったりするぞ」

「その時は待つてあげるから」

「ダメだコイツ。地獄の果てまで着いてくる気だ」

「ほら、地獄ならまた今度一緒に行つてあげるから」

「そしてコイツ俺を地獄に連れて行く気だ。止める。俺は舞つから舞風なんだ。楔が出来たら舞えんだろう」

「その時は一緒に舞つてあげるよ」

……どうしようもない。女は怖いとは誰の言だったか。

そのどうしようもない趣のまま道連れ一人。それが幸と出るのか不

幸と出るのか。それは分からないが、たまには一人旅も悪くは無いかと妥協した。

-
-

『小娘が!! 構ってやれば付け上がりおって!!』

父上にとって、私はただの小娘だったのだろうか？

『滑稽か!? 無様か!? 腹がよじれんばかりに愉快か!?』

そんなつもりはなかった。ただ、私の中ではかぐや姫なんてどうでもよくなっていた。

『この私があれば物を送り、あだけ声をかけたというのに……月の人間めッ!!』

悪いのは月の人？ 本当にそうなの？

『ええい!! そんな目で見るな!! 小娘……めかけ妾の子があ!!』

お願いだから。それ以上言わないで……ッ!!

『妾の子程度が凶に乗りおつて、出て行け!! 二度と我が藤原家の敷地を跨ぐな!!』

目の前が真っ白になり、気付けば私は一人月だけに照らされた空の下を歩いていた。

私に父上を恨むことなど出来はしないだろう。そして、かぐや姫を恨むことが筋違いであることは常々理解している。そもそも月に帰ってしまった彼女を恨むことに意味など無い。

分かっている、怒りを何処かに向けなければ収まらない。

当てもなく、帰る場所も無い。ただふらふらと、そして奪った蓬萊の薬。

あれを呑んだとき『私』が死に、『私』が生まれた。

今の私は不老不死、蓬萊人の藤原妹紅。父に捨てられ、自棄に走った愚かな女の死んだ後。

さようなら、人間だった妹紅。

お願いだから、かぐや姫へのやりよしの無い怒りを抱いたまま、思い出にいてちょうだい……

舞風と少女と（後書き）

妹紅が黒い。どうしてこうなった。舞風のせいだ。違いない。

暗いような大して暗くないような。藤原家の末娘は名前が不明…

…除籍？

と言う結論に至った。バカジャーネー！！

妹紅同行。俺、女の子を可愛くかくの苦手なんだ。多分そういう成分は少ないぜ？

妹紅を覚えさせないでわざわざ「いもつとこつ」と打ち込み変換する俺。

舞風と二柱（前書き）

一週間の間を空け更新。大学で出来た友達と始めてのカラオケ。曲の60%はボカロ。そして俺は東方率80%。みんなしねばい（r）を熱唱しました。

題通り登場するのはあの二人。

舞風と二柱

「　　ところで妹紅、これは何に見える？」

「蛇」

「犬だよバーロー」

たった今走り書きした犬の絵を丸めてポイツと捨てる。自然破壊？
知ったことか。紙なんだから自然に帰るさ。

今のご時勢非常に高価な紙だが、生憎金は余るほどあるので買った。
どこから得た金か？　ご想像にお任せするが、決して暗いことをし
たわけではないと言っておこう。

「で、お前が言ったた目的地ってまだ？」

「もうすぐ着くさ」

「聞き飽きたよ」

「なら聞くな」

……まったく、口の悪い奴め。

はてさて、二人旅を始めて早四年。妹紅は目に余るほどの速度でグ
レしていった……いや、腹黒さだけで言えば最初と大して変わってな
いかもしれない。

始めおもいつきりお荷物だった妹紅を守るのは正直大変だった。一応これでも女だし、やっぱり辞めと途中で放り出すわけにもいかない。結果、護身術を覚えてもらうような結果に収まった。

たった四年、しかしされどと言うべきか、妹紅はメキメキと力を付けていった……妖術の。はて？ 人間である妹紅に何故？ 考えた結果推測は浮かんでも結論は出ない。妹紅はと言うと不満顔をしながら「舞風のせいだ」などと抜かしやがる。実は俺もそう思う。

ただ死なないだけの人間が力を持ち、いつか俺が追い越されるときもあるのかとしみじみ思う。試しに模擬戦を試してみたら飛ぶ前に寝技で締められた。反則だと思う。

気になるところ、つまり二人旅になったことでの八雲の手伝いだが、大して支障も無い。残念ながら。俺の力を込めた札を渡し、八雲にはそこ目掛けて落としてもらうように頼んでみたらあっさりと承諾された。出来るんだったらもっと早くやれよ。

まあそんなこんな色々ありながらも俺の旅は続いていく。次の目的地はある有名な寺だ。

ぶつちやけ生前、つまり人間だった頃寺には詳しくなかった。地元で真新しい諏訪神社やら八雲神社が立っていたことだけが印象的である。八雲何？ 大明神？

今回の目的地は守矢神社と言う有名な神社……らしい。人づてだから確定とは言えないが、何でも力の強い神が二人も住んでいるらしい。これは珍しいことだ。神の共存、あまり聞かない話。普通神は信仰を巡って争うものだ。互いに不可侵を守ったりするものもいるらしいが、共に生きるといふのは非常に珍しい。

それを聞いた俺は文句を言う妹紅を引きずって守矢神社に向かい始めた。今までも神社を尋ねたりしたことがあったが、大概は追い返される。当然だろう。一応名目上俺は妖怪と言っているのだし、好き好んで妖怪を招く神などいない。今までも神様見たさに進入し、一見したらとんずらしていたが、今回はどちらも見るまでは帰れない。

「お、あつたあつた。多分これだ」

「……うわ。階段長っ」

妹紅の言うとおり、長い長い石階段。おそらく守矢神社はこの上だろう。しかし、俺には階段が長かるうが短かるうが関係なし!! 何故ならば。

「ふはは!! 先に行ってるぞ!!」

「おまつ!! 『はんせいじん反星陣』で空飛ぶなんてせこいぞ!!」

反星陣。それは俺が戦闘、もしくは空を飛ぶ時に展開する五芒星術式である。なんとこれには重力を反転する力と俺の力を増幅する術がこめられているのだ!!

「はっはっはっ!! 吼えている!! では先に行ってるぞ!!」

「待てコラあああああ!!」

怖っ。全力で走ってくる妹紅怖っ。

俺は逃げるように階段を上っていく。背中陣はくるくると回っている。天辺にはすぐにつき、足をつけると同時に消える反星陣。辺りを見回して見たが、夜通し歩いて時刻は早朝だし人なんか……いた。

変な帽子を被った少女……いや幼女が一人蛙と戯れていた。

神社の子だろうか？ と首を傾げながらも俺は神社に視線を移す。やはり有名なだけあり、威風堂々とした姿。正しく神社。それも今まで見た中ではトップに入ると言える。

「ぜえ、ぜえ、舞風、この野郎」

少し遅れて妹紅登場。歩いてくれば良かったのに。とは今更言えない。

「やつ。お疲れ」

「ぶつとばすよ」

「ごめんなさい」

俺は顔も見ずに言うと、辺りの散策を始める。後ろからは妹紅の怒鳴り声が聞こえてくる。神社で暗い静かにしないか。全く最近の若者は。

それにしても、この神社はどうもおかしい。いつもならこうして微量の妖気を散らしておけばいつも神が飛んでくるのに。未だ影すら見えない。

「寝てるのか？ 侵入者に対して余裕綽々だな」

「なに？ 神様いないの？ わざわざここまで上らせておいて？」

文句でも言いたげに妹紅が周りを見回す。二人いるなら一人くらい出てきてもいいはずだが。

「アンタ達、この神社の神様になんの用だい？」

唐突に聞こえた声。それを言ったのは先程まで蛙と戯れていた幼女。その鼻から上は帽子の角度の問題で見えない。ただし、唯一見えた口は笑っていた。

「用も何も、一目会えたらなあ、なんて希望を抱いてきたのさ」

「へえ、その割にはこの撒き散らしてるものはなんだい？ 挑発としか取れないけれど？」

「……ああ。そういうこと」

「？ どういうこと？」

目の前の幼女より強大な圧力が発せられる。大妖怪となんら変わり

の無いほどの。

「貴女がこの神社の祭神。そういうことだろ？」

「いや違っけど」

「えっ」

「カッ」悪……」

「嘘だ。そんなの嘘だ……ッ!!」

「残念ながら本当なのさ」

にやにやと嬉しそうに笑う少女。

「私はこの神社に住まうもう一人の神、洩矢諏訪子さ」

「それはそれはご丁寧に。自分はいがらない少年旅人、名は舞風にございます。ご機嫌麗しゅう？」

「ははは、随分と態度が変わったね」

「いえいえ、いつもならこれぐらい言ったら追い出されています」

「ふーん。そっちは？ 人間にしては変わってるみたいけど？」

「え？ えーと。わ、私は、藤原妹紅です。こいつの道連れです」
「……ふーん。そう。で、本当の目的は？」

幼女、もとい洩矢神は疑い深そうにこちらを見た。その目は笑っていない。嘘ついたら殺すの意思が見て取れた。

「いえいえ、巷で共存する神様と言う話を聞きまして、それは本当かと拝見したく参ったまでです」

「その言葉に偽りは？」

「ない。信じてくれ。と言えはいいですか？」

「……まあいいか。ただし、アンタはそれを解くの禁止だよ」

俺の腕を指差す。そこにあるのは無骨な腕輪。なるほど、一目で封印と見抜いたか。侮れないな。

未だ固まる妹紅の手を引き、俺は洩矢神の後ろを歩き出した。

「あ、ところで洩矢神」

「諏訪子でいいよ」

「では諏訪子」

「様をつけな」

「……手厳しい」

本殿より僅かに離れた言わば別館。諏訪子に案内されたのはそこだった。だが祭神本人が本殿にいないか？ と思ってしまう。

諏訪子を先頭に入り口に立つ。と、なにやらしい匂いがしてくる。そう言えば昨日から何も食べて無い。妹紅もだろう。

ガラリと開く扉。だが決して諏訪子が開けた訳ではない。

「あ、諏訪子。お粥でき」

出てきたのはキッチンミトンを当て鍋を持った女性。なぜこの時代にそんなものがあるのかはおいておき、目に付くのは背中にある巨大な注連縄。なに？ 装飾品？

そんな様子を見て呆れたのかそれとも見飽きたか、諏訪子はため息をつくとこちらを指で指す。

「この神社に祭神に会いたって妖怪と人間が来てるよ。いいのかい？」

「なに！？ それはいかん！！」

鍋を抱えたまま中へ駆け込んでいく女性を見送ると諏訪子は再びこちらを見て肩を竦めた。

「ま、祭神なんて崇めて期待しないほうがいいと思うよ。実際はそんなでもなかったりするのが現実なんだから」

幼女の神様が言うのと妙に説得力があるなと密かに思った俺だった。多分口に出したら殺されたと思う。間違いない。

「と、言う訳で私がこの神社の祭神、八坂神奈子である……！」

「なるほど、あ、お粥おかわりお願いします」

「そうかそうか。私の作った粥は上手いか」

「旅中で食した木の根っこよりは」

「褒めてる気が全くしない」

「木だけに……なんつって」

「……寒っ」

「……」

どういうことか、私は今ついさっき来たばかりの妖怪や人間と共に粥を食している。それもこれも神奈子のせいだ。確かに二人をここに連れてきたのは私だが、いきなりご一緒していいですかなんて言い出した妖怪の言葉を承諾するなんて。

……別に食い物が勿体無いというわけではない。捧げられた食物はまだまだ蓄えもあるし、そのうち信者が持つてくることだろう。そ

れ以外にもこれと上げるほどの問題があるわけでも無い。

「ところでお前ら、名は？」

「俺は舞風。一応妖怪に分類される旅人もとい旅妖怪でございます」

「えっと、藤原妹紅です。妖怪じゃないけど舞風と旅してます」

「ふうん。妖怪と人間が旅なんて、珍しい。して、此度は何の用があつてきた？」

「見聞を広めるため、といたいところを思い出作りのために旅をしております、本日は二人の神が共存する神社があると聞いて参りました」

「そうかそうか。で、感想は？」

「期待以上のものを得ました。特に粥とか粥とか諏訪子様とか注連縄とか」

「おい、私が入って無いぞ。どうして諏訪子が入っていて私が入ってない」

そういう問題か。と言つ言葉を中心に中で呟く。言ったところで耳を貸したりすることも無いだろう。

その後もどうでもいい話をしながら食は進み、あつという間に粥がなくなつてしまつてから神奈子を勢いよく立ち上げる。

「よし！ 腹も膨れたし朝の準備運動でもするか」

「体操でもするんで？」

「まさか。舞風と言つたな、付き合え」

「え？」

「なんだ？ まさか私の粥を食つておいてそのまま帰れると思

っていたのか？」

……なるほど。そういう魂胆か。たとえどんな者だろうと、暇を潰せばいいと思ったのか。確かに神奈子らしい。

食卓を片付けもせず、ずるずると襟を持たれて引きずられていく。哀愁が漂ってくるような気が……しなくもない。

「いやいやいやいやいや。どうして俺ですか？ いるじゃないですか相手。特に諏訪子様とか諏訪子様とか妹紅とか諏訪子様とか」
「たまには違う相手と仕合いたいのだ。ほら、腰の剣抜け。なんならあの娘と二人掛かりでもいいぞ？」
「もーーーーーッ！！ こっちにおいてーーーーッ！！ 一緒に遊ぼうよーーーーッ！！」

そこはいつも私と神奈子が暇つぶしに仕合いをする場所。広いとは言いが、簡単な戦いならば十分だ。

私は白髪の子と縁側に座り叫ぶ少年妖怪を見ている。一方娘は見たくも無いというように目を逸らしている。

「いいのかい？ 呼んでるよ」

「いいんですよ。たまには痛い目見りゃいいんです。アイツも」

「痛い目、ね。それで済むか……」

相も変わらずこちらへ向かって叫んでいる妖怪が流石に煩わしく感じたのか、神奈子は腕を振る。

そして落ちてくる御柱。舞風とやらのすぐそばに着弾し、砂埃を撒き散らす。完全に頬が引きつっていた。

「うわぁー……！！ もーこー……！！ 助けてえー……！！ 挽

肉にされるー……！！」

「……………」

「無視するなぁー……！！ 可愛い旅の道連れがいなくなつて

もいいのかー……！！」

「……………いいのかい？ 泣いてるよあいつ」

「知りません。寧ろ泣け」

「もこ！？ 妹紅さん！？ ごめんなさいいー……！！ 謝る

から……！！ この前勝手に取って置き干し肉食ったの謝るからぁー

ー……！！」

「お前かぁー……！！ 私のとっておき、気付いたら無いと思

つたらぁー……！！」

「キヤー……！！ 火に油注いじゃった……！！」

違う意味で飛び出していきそうになった娘の肩をポンポンと叩いてやる。なんて言うかうん。縮図だね。愉快ではあるけども。

「妹紅————！ いい加減に」

「いい加減に始めていいかい？」

「ってひい————！」

降り注ぐ御柱。必死に逃げ惑う舞風。端から見れば弱いものいじめ以外の何者にも見えない。神奈子もそれを分かっているのかつまらなそうにそれを見ている。私は逃げ惑う姿を見ているだけで十分楽しいけど。

「ほらほら！！ 逃げればっかりだと……ぺちゃんこになっちゃうよ！！」

「そ、そうは言われてもツ……ッ!？」

降り注いだ御柱。直撃するはずだったそれはしかし寸前に逸れ、大地に着弾する。今、何かをした。

「ふむ……空間作用系？ いや、それにしても弱い。壁？ 空気が、もしくは何も無い空間を壁にしたね」

「っこわ。それを調べるためだけにあんだだけの柱落としたの？ 怖いよ」

敬語やらなにやらが色々抜け落ちていく。そしてその目は冷静に状況を分析している。アレが素。だが冷静に見える今でも素を晒せるのはどういうことだ？

「諏訪子はいつも避けてばかり。たまには思い切り受け止めてくれる奴と戦ってみたかったのさ」

「妹紅に頼んでください。生憎俺は脆弱体質なので」

「ふん。その脆弱体質がどこまで私の攻撃を受けるのか、見ものだね！！」

恐らく、それが本当の始まり。今までの気の抜けていた空間が一気に張り詰める。しかし、行動は早い。

再び落とされる御柱。くどいように感じるが、あれが神奈子の主力的攻撃なのだから仕方が無い。

受け止める。なんてそうそうすることでない。落下の力を伴う重量は普通の妖怪さえ押し潰す。先程までも十分避けることはできていたのだ。わざわざ手を晒す必要も無い。恐らく、そう考えた。

そう、先程の十倍の量の御柱を落とされるまでは。

「多いよ！！」

「ははは！！ 捌いてみせな妖怪！！」

「言われなくても……ッ！！」

心の底から如何にも呆れたような顔をしていた。

思わず「へっ？」と言ってしまった。その表情は悲しみなんて欠片どころか微塵も無い。あるのはただ呆れ。終いには「馬鹿なこと言ってるから」なんて零している。それでいいのか道連れ人。

と、その直後私の認識が間違っていたことを理解する。

「!!!!!!」

「!!!!!!」

「あーあ、やっちゃった」

娘の呆れの声、と言うよりは神奈子に対する同情のようにも聞こえる言葉を呟いた。

それは聞こえはしたものの、意味を理解できないまま私の耳を右から左に通過する。

突如膨れ上がった妖力。いや、これは魔力に神力まで混ぜている。こんな馬鹿なことがあるのだろうか？ 土ぼこりが晴れ、一人悠々と立つその姿は服装が似ていることを除けば先程とは何もかもが違っていた。

黒い髪は腰に届くほど。身長は神奈子すら追い抜き、背には星を丸で囲ったような陣。

そして、漆黒の翼が生えていた。

胸元は大きく膨らみ、それが女であることを示す。顔つきは先程までの顔を急成長させたようになり、ヒラヒラした純白の服からは透き通るような姿形が覗いていた。

「あーあ。やだなあ。腕輪が取れちゃったじゃない」

高い声。それも先程まで男女の判別がつかない物とは違う。

感慨深げに見た左の二の腕。そこに先程まであった無骨な腕輪は足元に転がっていた。

「ま、いつか。たまには私も力出して戦わなきゃいけないし。あ、でもダイジョブかな。体錆び付いてそう」

そこに誰もいないと錯覚させるかのように一人淡々と。しかしその目が神奈子を捕え、その口元が僅かに歪んだ。

「じゃ、第二ラウンド行きますか？ 神、奈、子、さ、ま？」

黒い羽が『風』と共に『舞』った。

○
○

私こと、八坂神奈子は『元』軍神である。元をつけるのはもう軍を率いて戦うこともなくなつたから。それでも力その物は昔とほぼ変わらない程度の物を持っている。

嘗てミジャクジの国を 諏訪子を下した力は本物だ。

「
」

だが、目の前のこれはなんだ？

その身に滾る妖力、そして魔力に神力。合計すれば私の今の力さえ越えてくる。こんな馬鹿なことがあるか？

そしてなにより、その動きは早い。背の翼は伊達ではない。見ればそれは確かに烏天狗の翼。だがそれをただの天狗と呼ぶにはあまりにも異質すぎる。

思考に走りながら振りかぶられた剣を御柱で受ける。グシャッと言ふ音。見れば受けた場所は潰れていた。どうみても剣を受けた痕跡ではない。

先程とは打って変わって、防戦一方。いや、かろうじて反撃をしている。大振りで慣れていないように見える動きは隙だらけだ。しかし、一撃が一撃にならない。

御柱で殴ってみれば体はひしゃげる。だがそれはあっという間に元の形を取り戻す。

再生、いや『復元』。欠損し傷ついた部分は瞬く間に消え、その証拠を消していく。嗚呼面倒だ。ここまで面倒な相手は諏訪子以来だ。

「だがッ!!」
「ッ!!?」

一撃の元にその体を打ち上げ、即回避不能の弾幕を放つ。雨霰のように立ち上る一つ一つがその身を抉り、舞風と言う正体不明を壊していく。

「痛いじゃない」

その直後、舞風を中心になんらかの力場が発生し、全ての弾幕を吹き飛ばす。まだ想定内の出来事だ。

「鳴り響け」

と、舞風の背後の陣がとんでもない速度で膨れ上がり、とんでもない速度で分裂していく。

これで決めてくるッ！！

そう理解した瞬間、私は攻撃に転じた。

今のうちに、などと思ったわけではない。ただ目くらまし、そして僅かの隙を作る結果にさえなればそれでいい。

そう思っただけで行動を起こした私を、二つの目が射抜いた。その口元は歪んでいる。

「残念、オーバーキルよ。『摩訶天象砲』」

陣より収束された力は放たれる。避け様の無い、無数の極太の光線。放った弾幕も御柱もすべて飲み込み、そして最後に私までも飲み込んだ。

生き……てるな。

体は非常にだるかった。動かす気にもなれない。油断……確かに最初こそ油断していたが途中からは本気だった。

光線は私を飲み込み、弾幕や御柱を吹き飛ばしておきながらも私の体を五体満足残しておいた。手加減、ではない。元々私の体を壊すほどの威力を持っていなかったのだろう。

うつすら目を開いてみればこちらに剣を突きつけていた。その顔に歪んだ笑みはもうない。

「楽しい『準備体操』でした。またいつか、『私』が気が向いたときにもやりましょう」

ニツと人懐こそうな笑みを浮かべたまま、妖怪、舞風はそう言った。

「で、アンタは一体なんなんだい？」

「だから、しがない妖怪だって言っただじやないですか」

「嘘つけ。ただの妖怪が微力とはいえ神力を持つものか。あんた何処の神様だい？」

「神様じゃないと思うんだけどなあ」

先程までの姿はさっぱり身を潜め、元の子供の体に戻った舞風。『体操』が終わって神奈子は疲れて眠りに着くし、今日はとんでもない日だ。

今までも干し肉がどうだやら二人で勝手に喧嘩していたし、分かったのはこの二人に私達を害する気持ちが欠片も存在しないと。逆に何処か友好的なものを望んでいるようにも感じる。

ただ、一つだけどうしても気になることがあった。

この舞風と言う何者かに課せられた封印は見る限り無骨な腕輪が二つ。そして先程外れたのは片方だけ。

片方だけが外れて、あの力。もしも両方が外れてしまったというのなら、どうなるのだろうか？ 全く底が知れない。それが杞憂に終わってくれるように思うことしか出来なかった。

「今日はこうして神様二人にも会えだし、満足満足。そろそろ行くか？」

「ええー、もう行くのか……」

「いたいのか？」

「いやお前八坂って神様に謝るくらいしろよ」

「また今度な」

「何年後？」

「三、四百年後くらい？」

「長いね。随分……別に急ぐ必要も無いんだよ」

「？ 迷惑じゃないんで？」

「祭神ぶっ倒しといて今更迷惑も何もあると思ってるのかい？」

……ただ、私としてこの得体のしれない奴と仲良くするのは悪くないと思っている。久方ぶりに退屈を紛らわせたやつだ。歓迎くらいしてやるっ。

その日、早めに始めた宴会。遅く起きてきた神奈子も加え、楽しい一時を過ごすことができた。

舞風と二柱（後書き）

はい、本日も閲覧ありがとうございました。

個人的にはもっと絡みが欲しかったなと後悔しています。まあそれはまたにしましょう。

絶叫の舞風。妹紅さんは助けてくれない。

そしてその果ての舞風の第一封印解放。私はまだ三回変身を残し（ry

TS？ いやいや、基本状態は男だから……ギリギリオッケーよね？ タグつけたら初めてみる人のネタバレになりそうぞ。

舞風と半獣（前書き）

一話更新に一週間以上かけてしまつ。更新とろくてすいません。

夏休みは補習漬けです。

舞風と半獣

「 災難な事もあるもんだなあ」

「 本当よ。最悪」

日は落ち、欠けた月のみが照らす獣道。長い長い旅の最中、今夜には野宿ではなく村の宿に泊まれるかと思つた矢先、妖怪共の襲撃を受けた。

それ事態は珍しい事でも無いが、数が多い上に無駄にすばしっこい奴がいたために時間を食ってしまった。

それにより実害は妹紅が傷を負つたくらいだが、流石蓬萊人。瞬く間に治つてしまう。まあ大して自分も変わらないのだが。

今頃は既にたどり着いて温かい風呂や食事をいただいていたはずが、災難だ。

「 ……腹減つたなあ」

「 また木の根でもかじれば？」

「 ……お前が妖怪と一緒に食料を焼かなかつたらなあ」

「 黙つて見てただけなお前も悪い」

妹紅の妖術は火が主である。それは彼女が不死鳥を意識して形作つ

た結果であるが、ともかく火が得意だ。そんな妹紅は取り付かれた場合相手を自分ごと燃やす癖がある。それ自体はまあいいのだが、一緒に持つていてももらった食料が燃えたのが大問題だった。

「……………」

「……………」

「……なんか喋って」

「……死ね」

「……………うん……………また今度ね」

なにはともあれ、俺達のテンションは駄々下がりである。

随分長い間旅を続けてきた。正確な年月は思考するだけ無駄だが、それなりの積み重ねはあっただけは言える。何故いきなりこんなことを言い出したのかと言うと、こうして長く旅をして様々な物を見ることで何度も驚いたり、珍しいものに眼を剥くこともしばしば

である。

しかし……

「……おい。村って確かここであってよな？」

「……多分ね」

「……なにこれ」

そこにはなにもないがあった。おかしい言い回しであることは理解しているが、その通りなのである。

言うなれば、その空間だけ虫に食われてなくなったかのよう。混沌を更に混ぜ合わせたような異質感。正しくあるんだけどないような感覚。明らかな異常。自然的な物ではない。

「……なんか、災難続きだなあ」

「アンタ、なんか呪われてるんじゃないの？」

「否定できない自分が怖い」

さてどうしたものかと途方にくれていたとき、ふと視線を感じる。周りを見回してみると、いた。上方に一人。ぷかぷかと浮かんでいる人影。

「お前達、妖怪だな？」

それは女性だった。腰に届くほど長い髪は青と白が入り混じり、その目は敵対心……いや、疑心に満ちているように見える。

「いきなり妖怪だなんて随分とご挨拶だな。アンタ、なにもん？」

「お前達には関係のないことだ。ここは人間の里。即刻去れ」

「人間の里お？ これの何処が」

「ま、この一件はアンタの仕業ってことだろ？ 美人さん」

「……貴様らには関係のないことだ。妖怪が人の住む里を跨ぐことは叶わない。もう一度言う。去れ」

「おいおい。こんな可愛い二人組みを入れてくれないなんて酷いじゃないか。なあ妹紅」

「吐きそうだ」

「っておい」

「去らぬというならば力づくでも……」

女性は何処からともなく剣を取り出す。まるで日本神話に出てくるような剣。その切っ先をこちらに向け、威圧する。

「ま、ようやくたどり着いた場所だ。去る気は無いな。だいたい去ったところで結果は変わらないだろう？」

「……どういうことだ？」

「だってアンタ、人間じゃないだろう？」

「」

「自分の縄張りを荒らされるのが嫌なのか、それとも他に理由があるのか。どちらにしても今退くという選択肢は無いな」

「なんだ。散々言っついてそっちが妖怪なのか。随分と茶番が好き

なんだな」

「……なんとでも言え。お前達には関係のないことだ」

威圧感が増す。無言のプレッシャーとかくして恐ろしいものである。女性の力が強まっていく。その力は妖力だけではない。恐らく霊力と僅かながら神力。

「なるほど……混血。いや、無理矢理混ざった？ お前、神様でも食ったか？」

「おいおい。それは罰当たりなんてものじゃすまないよ？」

「……否。これは私の力。歴史を作ることにより、そうであったことにしただけだ」

「おいおい……最近の人間はどうなってるんだよ。不老不死だったり歴史の改変が出来たり、妖怪よりよっぽど怪物揃いじゃないか」

「……どうしても引かないというなら、お前達の存在をなかつたことにしてやる！！」

「そんなこと言っていないで、来るよ」

突如切られたスタート。直後に弾幕が飛来する。その場からバツと離れ、様子を見る。見た感じ、確かに力はあるが未だそれに振り回されている印象が見られる。弾幕の威力があっても統一性、そして速度がないのが最たる根拠だ。その手の得物を見る限り、本領は近接にあるのかもしれない。

「じゃ、妹紅。任せた」

「こら！ さつき戦ったのも私じゃないか！！ アンタも戦え！！」
「まあまあ。こついうのは実力が拮抗している同士の方が経験になるんだぜ」

俺は弾幕を避けながらもその戦域を離脱する。そしてその戦いが見渡せる程度の場所で結界を張り、それを見下ろす。妹紅がなにやらギヤーギヤー言ってるが何も聞こえないもん。

「ああもつめんどくさい！！ なんで私がこんなことを……」
「隙あり！！」

「おっととお！ 面倒だけど、痛そうだからそう簡単には当たってやれないよ」

そうして始まる戦い。始まる前から泥沼になりそうなのを予感させた。

と、面倒なのは割合させてもらい、結果から言えば和解には成功した。

戦闘経験は妹紅が劣っているにしても蓬萊人だから死と言う敗北は無い。最初こそ妖怪としての力か傷を治す程度の能力かと錯覚していた女性だったが、流石に首を落とされても復活したことには目を剥いていた。

お互い根気果てるまで戦い、同時にぶっ倒れるまで戦いは続いた。身動きがとれなくなった女性にようやくと話し合いが出来るようになったのだ。向こうは負けを認めての行動だったようだが。

こちらの正体をそれとなく明かした後、女性はなにやら考え込む仕事草をすると唐突に妹紅を見た。

と、すぐにこちらを受け入れてくれた。彼女が言うには妹紅の歴史を見たらしい。全くを持って反則である。プライベートなんて欠片もない。

次に俺の歴史を見ようとしたようだが、それは止めておいた。今から見るには長すぎる歴史だろう。

そうして彼女は隠した村を再び目に晒し、俺たちを招き入れた。

女性の名は上白沢慧音かみしろさわ けいねと言った。

「それにしても、蓬萊人に大精霊か。未だ嘗て見たことのない
種族だ」

○

○

「妹紅の場合は種族って言うより薬のせいなんだけどな。俺はまあともかくとして」

「ふむ、ならばお前の歴史を見せてもらった方が早いのだが」

「だから、それはおススメしないって。気付いたら朝なんてことになりかねないぞ」

招かれたのは慧音の家。もうすでに夜も遅く、更にこの村には宿と
言うものがないらしい。まあ別段珍しいことではないが、ちよつと
がっかりしただけである。それを見た慧音がどうかと聞いてきたの
だ。悩む前に妹紅が即応じた。止める時間はなかった。

その家は集落の隅にあり、迫害を受けているようにも見えたが、そ
れは彼女自身が望んでここにしているらしい。

先程は縄張り云々と妖怪的観点から物を申したが、彼女は例外中の
例外であった。元々人間でありながら妖怪になった彼女は、人間が
好きだった。

ならば何故妖怪になどなったのだろうか？ その問いには答えてもら
えなかったが、複雑な理由があることだけはうかがえた。

「それで、慧音さん？」

「慧音でいい。君は実際私より年上そうだしな」

「……でも俺には敬語とかないんですね」

「どうしたても違和感が沸くからな。しろと言つならするが？」

「……いや、いや」

なんだか遠まわしに年下っぽいと言われていている気がした。何気に傷つく。

「慧音はいつからここに？」

「藪から棒だな……数年前だ。ちょうど訪れたときにこの村は妖怪に襲われていてな。追い払ったら歓迎された」

「へえ、珍しいな。妖怪なのにな」

「……一応秘密なんだ。村の者には私はただの旅人だと言ってある」
「そ。ま、それが無難か」

たとえば妖怪が人間を受け入れようと、人間が妖怪を受け入れることは無い。そこに確かな境界が存在するからだ。食うものと食われるものと言う。

「勘だけど。能力も秘密なんだろう？ 人の能力持ちは稀だからな」
「まあな。今回の一件も村の人には結界の一種だと言って納得してもらった」

「歴史を操る程度の能力、だっけ？」

「いや、歴史を隠す程度の能力だ。相手の記憶を覗くのはおまけ、色々と条件がある」

「そのおまけ。明かさない方がいいよ。人からしたら考えることを知られる方が怖いみたいだし」

「大丈夫だ。使う相手は限定している。今回はあの娘の記憶を見て話しても大丈夫そうだからこうして話してるんだ」

「妹紅、な。となるとあいつがどんな人生歩んでるか大体は見たんだろ？」

「大体は、な」

そう言うと慧音は悩ましげに首を捻っている。今は風呂に浸かっている妹紅への対応を考えているのか。生真面目なものだ。

と、俺は物は提案とばかりに慧音に話を持ちかけてみることにした。

「なあ、頼みがあるんだけど」

「ん？ ああ、なんだ？」

「出来ればいいんだけど、俺と妹紅をここに置いてくれないかな？」

「……は？」

「ようやく妹紅を理解できそうな人に会えたんだ。どうかあいつと仲良くやってくれないかな？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ いきなりすぎて話が」

「別にこの家に置けって言わわけじゃない。ただこの村において、妹紅の理解者になってくれないかと言っているだけさ」

「理解者ならばもうお前がいるじゃないか。お前も不死みたいなものなんだろう？」

「ああ、でも多分。俺はアンタより早く死ぬ」

クツと慧音の顔が引き締まる。俺の顔を見て真剣さを理解してくれただか。

「……それは一体」

「詳しくは話せない。俺の歴史を見ることもさせない。悪い提案し

やないはずだ」

「だから何故お前が」

慧音が何事かを言おうとしたとき、ガタガタと言つ音が聞こえる。妹紅が風呂から上がったようだ。

「この話はまた後でな」

「待て、舞風！」

それに聞く耳持たず、俺は部屋から飛び出した。

出たのは外。なんの意味もなく出たわけではない。

「いるんだらう？ 八雲」

「……気付いていたの」

すぐ傍の空間を裂いて現れたのは八雲紫。今までは問答無用で隙間に落とされていたが、今回は空気を読んできたのか、それともわざわざ出向く用事なのか。

「あれほどの妖気を隠しきれぬわけも無いだろ。俺の探查結果に引っかかってたよ」

「……そう、先ほどの会話についてはひとまず聞かないでおいで上げる。貴方に頼みがあるのよ。舞風」

その目はいつになく真剣で、鬼気迫るようにも感じられた。

○
○

「はあ」

縁側に座り、一つため息を零した。正直にいつて、やりにくい。

今まで、蓬莱人になってから舞風以外とまともに関わったためしかなかった。人間は話すだけ無駄と言う考えが先行したし、妖怪に限ってはそもそも話など無い。

こういった生真面目な妖怪、それも半分人間だという者とどう向き合うべきか悩んでいた。

「お悩みかい!？」

「!?!？」

いきなり上から聞こえた声。屋根の上から舞風が見下ろしていた。それもニヤニヤと笑いながら。

「……そういえば、私を一人で戦わせてくれたお礼をまだしてなかったね」

「ちょ、待つ、も、もちつけ!! 間違えた。落ち着け!!」

「ふうん。ならついであげるよ。アンタの頭をねえ!!」

「ぐあああああ!! 潰れるうういうう!!」

その頭をガツチリと掴み、万力のように締め付ける。なにごとかと慧音が覗いたが、まるでなんだと言わんばかりに戻っていった。

しばらく、舞風の悲鳴が夜空に響いた。

「おま……いくらなんでもやりすぎだとは、思わんのかね」

「いや全く思わない」

「……鬼だ」

地に伏せながら荒い息を繰り返すそれを鼻で笑い、私は夜空を見上げた。今日はあまり星が見えない。

「なあ妹紅」

「なに？」

「俺とお前が出会って何年経ったっけ？」

「……さあ？」

そう言えばもう忘れてしまった。数十、いや数百か。思えば随分長く生きたものである。

「まあ、どちらにしてもそこそこ長いこと旅をしてきたし、そろそろ定住でもしてみないか？」

「……はあ!？」

こいつは何を言っているのだろう。私のような不老不死は人間に化け物扱いされるからと転々と旅を続けてきたと言うのに、今更定住など……

「……まさか、ここに？」

「ピンポーン。大正解。案外悪くない案だと思っただけどなあ」

「そんなの、私は嫌だぞ！」

今更人と関わる道など選べるはずも無い。今でもあの時、舞風に助けられときのことを忘れられない。人間の恐ろしさが忘れられない。

誰も彼もが恐ろしい形相をし、石を投げつけてくるその姿を……

「妹紅」

「ッ！」

舞風の言葉でハツとする。やはり、あれは未だに心の奥に染み付いている。そう簡単には拭えない。

尚も拒否する私に、しかし真っ直ぐとこちらを見つめ返してくる。

「妹紅。お前は不老不死だ。それが完全なもののかと、それとも不完全なのか。俺には分からない。でも、いつか過去と向き合わなければいけないときが来る」

「……それが、今なのだとも？」

舞風は頷いた。それでも、そう簡単に納得できるものではない。

小さい背丈でぐしぐしと乱暴に頭を撫でる。昔はよくされていたのに、そういえば撫でられることなど随分となくなっていた。

「一応これからいつもの手伝いに行くけど、それが帰ってきたらさ。今まで出来なかったこととかやってみようぜ。家作りとか、料理とか、あとは商売とか!」

「……勝手にすれば」

私は真っ直ぐこちらを見つめるそれから目を逸らした。なにやら笑っている舞風。無性に恥ずかしくなった。いつになく楽しそうに見えた。言うなれば明日が待ち遠しくて眠れないような。

「じゃ、行って来る。慧音と仲良くやってるよ!」

バツと空へ飛び立っていく舞風を見送る。闇夜に紛れ、あつという間に見えなくなってしまうた。

なんだかどことない寂しさを感じながらも、私は少しくらいなら話してみようかなと思った。

何を話したらいいだろう? そもそも自分から話しかけるなんて、そんなにもあることではなかったから。そんな事を考えながら笑っ

ている自分がいることに、私はなんとなく気付いていた。

これも、舞風のおかげなんだろう、と私は小さく笑った

翌日、舞風との唯一の繋がりが遮断された。

舞風と半獣（後書き）

けーねさんご登場。きもけーねの意味について初めて知りました。

いまいち曖昧な存在。能力で自身を半白澤してるらしいですが、それが妖怪として捉えられているのか。実際の白澤は聖獣らしいんですけどね。できるだけ忠実に書きたかった自分はその辺を曖昧にしました。

実は相手の歴史を見ることも出来る……なんていう間違いを何処から持ってきて脳内保存したのか。実際人間時は歴史を隠す（食べる）事しかできず、半獣化しても歴史を創れるだけで、相手の記憶を見ることなど出来ない。幻想郷であったことは分かるらしいんですけどね。密かな独自設定ってことで納得してください。あるいは半獣時ならできたのか……

最近は何子にはまっております。とは言っても1000円扇子ですが五日で壊れたので今日新しく三つ買ってきました。友人はなんと幽々子様の弾幕時のあの柄の扇子を学校に持ってきてました。超羨ましい。

そんなこともあってかなにやら一人芸が増えていきます。たまに室内で自分で考えたスペルの語呂を試すために一人口走っています。まるつきり中二病ですね。私は19歳だ。

舞風と死姫（前書き）

最近はいきなり感やグダグダ間が否めない。

閲覧数が思ったように増えないのはやはり序盤が長すぎるのが問題かしら？

つい最近友達に「あと10年ちょっとで魔法使いじゃん。よかったな」といわれました。チエリーボーイで悪かったなと私の右フック炸裂。もうなにも怖くない。

時系列的な大きすぎるミスを発見、これについては二次創作の賜物……でもカバーしきれませんが、其れで何とか……ッ！！（土下座）

舞風と死姫

桜の花びらが舞い散る。それを見て今が春なのだと言つことを思い出す。旅道中桜など見なかったからすっかり忘れていた。

「……………ここは？」

「ここは白玉楼。死霊達のたどり着く場所よ」

隣にいる八雲がそう教えてくれた。その顔は何処かそわそわしている。

真夜中にも関わらず、俺は八雲の頼みを受けてその場にいた。詳しい話しはまだ聞いてないが、友人に会ってもらいたいらしい。

八雲の友人……………さぞ奇特な人物なのだろうと会う前から予想済みである。それも楽しみではあるが、最も気になるのはその意味合い。

「それで、お前の友達とやらに会って俺は一体何をすれば？」

「花見よ」

「……………は？」

間髪もなく。八雲が答えた。その内容は今までのものに比べると、

いや比べることすら出来ないほどのものだ。

言うなれば、俺を娯楽に誘った。と言うことなのだろう。

八雲にしては珍しく気が利くなあ、なんてことを考えながら歩いていると、一つため息を吐かれた。

「貴方、顔に大概の事が出るわよね……まあいいわ。今回のそれは私の友人の頼みなのよ」

「花見するから人を集めてくれーって？ 奇特な妖怪だな」

「違うわ。どちらも違う。ただ彼女に貴方の話をしてみたら会ってみたいと言われたのよ」

「おっ、なんて言っただんだ？」

「『飄々として白々しくて何考えてるか分かるようで分からない妖怪。ついでに死なない』」

「……お前の俺に対する評価がよおく分かったよ」

すたすたと歩いていくと、それなりに大きな門に当たる。そこには一人の男が腕を組みながら立ち尽くしていた。珍しく妹紅を思わせる白い髪。腰の剣を見る限り、門番だろうか？

その鋭い眼光がこちらをギラリと睨む。見る限り客に送る視線ではない。しかし八雲は意に介した様子も無いように近づいていった。

「……やはり貴様か。八雲紫」

「ええ、私よ。庭師さん。その口ぶりからすると誰か来ることは知らせ済みなのよね」

「……………」
「……えっと、あの、出来心ですごめんなさい」

一度言ってみたかった仲裁台詞を口走ってみれば向けられるのは絶対零度の冷たい瞳。めっちゃ怖いです。

「まあいい。お嬢がお待ちだ。入れ」

「貴方と言う人は、庭師よりも監獄に勤めた方がお似合いなんじゃない？」

「黙れ塵芥」

……これはアレだ。見るからに犬猿の仲って感じた。俺にはどうしようもない。

門を潜れば、そこはまるで桜の道と言っても過言で無いほど桜が咲き乱れていた。

奥へ続くように桜の木が道を作り、その花吹雪がまるで奥へ奥へと吸い込まれているようにも見える。

遠い、ずっと遠い場所になにやらの屋敷が立っているのが見える。八雲は一片の迷いも鳴く、やや早歩きで進んでいく。その目は桜を見していない。

「そういえば、貴方さっき間違ったことを言っていたわよね」

「ん？ どれが？」

「これから会う娘のことよ。庭師こそあれだけど、この白玉楼のお姫様は妖怪では無いわ」

「と、言うこと？」

「人間よ」

「……へえ、それまた、ねえ」

最近。人間と関わるが増えてきた気がする。妹紅にせよ慧音にせよ、そして今から会う少女にせよ。

その言葉の気になるところは沢山ある。なんで八雲が人間と友になるのか。そして何故わざわざそれを友と呼ぶのか。どちらかといえは妖怪は人間を見下す傾向があるので非常に珍しい話だ。確かに八雲が例外であることは理解しているが。

「そう言えば、聞いてなかったな」
「なにが、かしら？」

問い返し、その足を止めた。これから質問される内容を理解しているかのように。

そして俺は気にすることもなく、問うた。

「何故、俺だ？」

「貴方が死なないから、よ」

間髪なく返された声。それには先程まで混じっていた感情は潜め、剣呑な物へと変わった。

しかし、それも一瞬。なんてことなかったように八雲は再び歩みを始め、立ち止まる俺からドンドン離れていく。

しかし、それだけで大体は理解した。結局のところ、今までと同じなんだ。

これから会うのは只の人間ではないということ。

まあ、八雲と友人って時点で分かりきっていたことだが。

「そ。じゃ俺はあつたらすぐに忠告をしてやるう」
「あら、なんて？」
「八雲の友達になると疲れますって」
「消えたいの？」
「だが私は謝らない！！」

……その場において、早く行くこうなんて言葉は無粋にしかならなかったのだろう。

八雲に案内されるまま、白玉楼の縁側に回りこむと、そこには一人の少女。少女は桃色の髪で、それを方まで揃えており、年のころは十代後半、もしくは二十代前半？ どちらにしても自分から見れば少女だ。その傍らには団子の串と皿だけが置かれていた。

と、少女がこちらに気付き。その目が八雲に気付いた時、僅かに歪

んだように見えた。それは一瞬でほのかな笑みに変わり、次に俺を見た。

第一印象だけを語ってしまうなら、『儂い』。それが一番しっくり来る。肌も潤っているし、至って健康そうな少女。だが、目を離れた瞬間にポツクリ逝ってしまいそうな、そんな『死の気配』。

「どうもどうも、清く優しく掠め取れ、がモットーの妖怪、舞風です。僭越ながら名乗らせていただきました」

「そう、貴方が舞風……いかがですか？ 我が宅の桜は」

「満開ですね。見事に。花吹雪が目に入って痛いくらいです」

「……ふふ、紫が言っていた通りね。真面目なんだか不真面目なんだか分からない」

……どうしてこうなった。俺の汚名を流すための言葉は更に意味合いを深めてしまったらしい。

少女は立ち上がり、こちらに体ごと向き直るとニコリと笑って小さく会釈した。

「申し送れました。私はこの白玉楼に住まう西行寺幽々子という者ですわ。以後よろしく」

「……なるほど、八雲の友人だけあるか。妖怪を見て物怖じもしないなんて」

「ふふ……貴方よりも口うるさい庭師の方がよっぽど恐ろしいもの」

……ああ、あれか。と門の前に立っていた白髪青年を思い出す。

それにしても、この世の物とは思えない立派な建物だなあ、と辺りを見回していると、なにやら妙に大きな桜が目に入った。その大きさは道中の物と比べても数倍の大きさを誇っている。

「ありがとう。紫。願いを聞いてくれて」

「こんなことでいいならいくらでも連れて来るわ」

「それは悪いわ。ここは冥界だから、この子みたいな正の存在を引き込みすぎるわけにはいかないもの」

「チヨット待テ」

今とても聞き捨てならない言葉を聞いた気がするんだが。

「ここが何処だった？」

「冥界よ。さつき言ったでしょ？ 白玉楼は死霊のたどり着く場所つて。まさか、気付いてなかったの？」

「気付くか！ いつの間にか冥界なんて気付くか！ どんな質悪い状況だよそれ！！」

「……そう」

「冷たい！ なんか冷たくない！？ これ気付いてたら死んでました並にとんでもないことだぞ！？」

「大丈夫よ。貴方なら。多分」

「だったら最後にそんな不穏な言葉を付け足すな！！」

それが八雲の性であることは理解しているが、時々こうして不安になるのも確かである。

「ふふ、貴方達。仲がいいわね」

「そんなバカなことはない」

「冗談にして笑えないわ」

「あ？」

「ほら、いいじゃない」

思わず膝について拳を叩き付けた。信じたくなかった。現実には常に無常である。

「それじゃあ、準備をしましょうか。二人とも、手伝ってくれる？」

「あの庭師を呼ばないの？」

「あら、貴女、彼のこと苦手じゃない」

「自分が働くことと天秤にかけたらそっちの方がマシってだけ」

「そう。でもいいじゃない。たまには」

いきなり連れて来られて花見だとうきうきしていれば本当の用件は雑用だったという新事実。泣ける。

何と言つことを先程口走つたりした気がするが、実際のところ快適である。

この大それた屋敷の主とは思えないほど軽々しく、そして気配りをする西行寺には感服する。

しかし、何故召使等が一人もいないのか、聞いてみたところ一人も居らず、この屋敷には魂魄という庭師と西行寺しかいないらしい。それについての事情は睨む八雲の目が聞かせてくれなかったのだ。

「そう言えば、あの一際目立つ桜はなんなんだ？ 随分と……アレだが」

「アレ？ ああ……西行妖のことね。アレはこの白玉楼にある中で最も恐ろしい妖怪桜。幾人もの生命を惹き、そして殺した魔性の桜よ」

「随分と曰くつきな桜だなオイ。そんなのあつて大丈夫なのかよ」「ふふ。そうは言つけれどね。ここじゃなければダメなのよ。これほどのものを現世に放置するわけにもいかない。言わばこれの管理は白玉楼の主の務めなのよ」

そう言う西行寺は笑っていた。儂げに、そして愛おしそうに桜を見ていた。さながら親愛を持つ友をみるかのように、心底心酔したような目を向けていた。

それを見て、やはり普通ではないのだと俺は理解する。これほどおぞましく、見ているだけで鬱になるようなもの負の塊を見てそんな顔をできるのだから。

能力で直接の接触を断っていないながらもそれがどれほどの物か分かる。一個体には制御すらままならない恐ろしい力。美しく咲き誇るその桜はいつ暴れまわってもおかしくないはずなのに、ただ風に揺れ沈黙を保っている。

「そ。なに、確かに凄い桜だな」

故に、放置する。恐らく、これが暴れないのには彼女の力が関係しているのだ。でなければ、ただの人間がこんなものに近づいて無事にいられるわけも無い。八雲が連れて来た死なないからと言う理由はこれに基づいていたのだろうか。

「さて、俺はそろそろお暇しようかな」

「もう、帰るの？」

「連れを待たせてるんだ。もう何年も面倒見て、ようやく親離れできそうな娘がな」

「……そう」

慧音と交流を持つことで、妹紅はもつと周りに目を向けるべきだ、たとえ人に恐れられようと、それが『人』の総意では無い。出来ればかぐや姫と仲良くなつて欲しいものと思つているが、妹紅のしがらみから考えてそれは難しいだろう。外堀は少しずつ埋めるしかない。

「それじゃあ私もそろそろ行くわ」

「あつ」

「大丈夫よ。また明日も来るわ。また一緒にお茶しましょ」
「……ええ」

西行寺の顔は暗い。友と、八雲と別れるときはいつもこうなのだろうか？

その少女は桃色の髪を揺らし、儂げな笑みを向ける。その様はまるで、無理をしているような、そんな気がした。

「ええ、また、ね。紫、舞風」

「 詳しい説明、してくれるよな」
「……………ええ」

帰り道、先程と同じく無数の桜が道を作っていたが、それには先程までの迎え入れるような感覚が持てなかった。まるで帰す事を拒んでいるような気がした。

「あの娘 幽々子はね。この屋敷に住んでいた主の一人娘。嘗て西行法師と呼ばれたその人はその命をあのか桜 西行妖の下で終えた。それが始まりだったの」

八雲は遠く、何処が見つめるように。暫しその足を止め、それに耳を傾け始める。

○
○

あの娘はね。昔、死霊を操る程度の能力を持っていた。私が興味を持ち始めたのもそれが始まりね。その力を私が作る理想郷のためにどうにかできないか……その考えは会った時に崩れたわ。

あの娘はね、孤独だったのよ。人でありながら人と違うと言うものがどんなものか、あなたなら分かるわよね？

まあ、な。

西行法師が死んだとき、幽々子の力は変わったわ。それは人が持つには強すぎる力。”死を操る程度の能力”。彼女はそれを制御できなかった。

そりゃあ、人間には過ぎた力だ。

ええ、その為にここで軟禁紛いの扱いを受けながら暮らしている。それも庭師とたったの二人で。

あの娘はね。幼い時からそれを仕様が無いことを分かっている。それでも、彼女はやはり人なのよ。繋がりを求めて止まない。そしてそれもまた仕様の無いこと。

だから私は出来うる限りあの娘に会うようにしたわ。妖怪である私にとっては人間の百年程度の生くらい見取るのは簡単なもの。彼女は喜んだわ。でも、それに満足できない。

決して口にはしないけど、あの娘は私に様々な感情を抱きながら接している。喜び、羨み、楽しみ、悲しみ、それらを全て混ぜ込んだような、そんな感情を。

一時期は人と妖怪の境界を曖昧にして妖怪にすることも考えたわ。でも、言えなかった。それ自体が彼女を侮辱するような行為に感じだから。だから、言い出せなかった。

大事な友達なんだな。

……ええ。気付いたらそうなっていたわ。私はあの娘を受け入れる。だってあの娘が教えてくれたんだもの。どんなものでも受け入れる、その美しさと残酷さを。

○
○

話は最中にて区切られる。今までにはなかったざわめく感触。周りの桜が風に揺れ、桜吹雪を散らす。

「これはッ!？」

「一体何が……西行妖が、狂っている……?」

直後、周りの桜達はざわめきを止める。そして、激しく光り始める白玉楼。

「幽々子!!」

「待て! 八雲」

「何があつた妖怪共!!」

白玉楼に向かつて飛んでいく八雲を尻目に門の方角から駆けてきたのは庭師、魂魄。その手は腰の剣に添えられていた。

「分からない。帰ろうとした矢先にいきなり西行妖がおかしくなっちまった。何あつたか分からないのか?」

「未だ嘗てアレがこれほどの妖力を放つたことは無い。まさか、お嬢になにか」

俺と魂魄もまた西行妖に向かって走り始めた。ただ事で無いことを理解し、背に反星陣の術式を刻む。

直後、背から五芒星。この身が空に舞う。

「貴様、それはなんだ!？」

「そんなことは後だ! 今は白玉楼に逃げ!」

焦りが不安を呼び、不安はまさかを思わせる。その輝きを強め、白玉楼に急行する。

そこにあつたのは、激しい猛攻を見せる西行妖とその攻撃を捌く八雲の姿。その木の根元に立っているのは、西行寺だった。

「幽々子! 止めなさい!! 今すぐ西行妖を止めて!!」

「八雲! 前に出すぎだ!」

「うるさい! 幽々子が、あの娘が!!」

ただ一心に西行寺に手を伸ばす。八雲は強い、が今の状態では死角からの弾幕に気付いていない。俺は舌を打つと八雲の死角を結界でカバーする。これではやがて支えきれなくなる。

それでも尚。八雲は西行寺に呼びかけていた。対する少女の顔には愛想笑いのような、作り笑顔のような、そんなまがい物が浮かんで

いた。

何処に仕舞っていたのか、その手には短刀が握られていた。抜き身のそれを掲げる。八雲と魂魄の顔が蒼白になった。

「やめなさい幽々子!!」

「お嬢!! よせ!!」

制止の声は彼女に届いていたのだろうか？ その時には分からなかった。しかし、それを聞いた後に少女が笑いながら涙を浮かべただけは、間違いようの無いことであった。

短刀が、その細く、白く、美しい首を貫いた。

○
○

「どうしてッ……どうしてなのよお！ 幽々子おー！」

その小さな腕の中に抱かれた少女はもう動かない。だって生きていないのだから。

自害した少女を他所に、西行妖は未だ狂ったように破壊を続けている。今は魂魄が一人で対応に当たっているが、あれほどの存在。時間の問題だろう。

八雲が泣くところを見るのは初めてだった。そしてまた、人間

それもこんな少女が自ら刺し殺す場面を見たのも。

だが、俺は後者に対して悲しみを覚えていない。今日一日、それも数時間花見をしただけの少女に対して親愛を抱くことは出来ない。だが、八雲は別だ。

「泣くな。八雲」

「……………」

「『友達』が泣く所を、見たくない」

「……………」

「ちよつと、行って来る。それまでにはどうか」

泣き止んでいて欲しい

俺は黙ったまま左腕の封印を　左腕を？ぐ事によって外す。元来、力を使うことを良しとしないため、この封印を術式で解除しようとするには時間がかかる。それは力を使わないために理由付けであったが、今は関係ない。

重要なのは、力を使う前にこんな結果を生み出してしまったこと。

風が舞う。足元の桜が再び立ち上る。背からは黒い翼が生え、その背には魔法陣。

故に私は戦う。泣かないように。泣かせないように。

飛翔。高速で西行妖の下へ降り立つ。魂魄は腰の剣で弾幕を払いながらこちらを睨んだ。

説明も何もかも、後だ。

「はあっ!!」

迫り来る弾幕を切り払い、術式を手で紡ぐ。

「転硬盾!!」

眼前に出来上がる盾。弾幕を防いでいく私の様子見の技。しかし、それは数発もたっただけで無残に霧散する。見た目こそ普通だが、この一撃は並みの結界では対応出来ない。

致し方、なし。

「
隔絶しなさい」

抜いた剣。それに集まる力。太古に人間の兵器を防いだ力。

これを、一個の生命に使うときが来るなど、思いもしなかった。

「封鎖大結界ッ！！」

それは少しずつ形を成して行き、西行妖を包み込んでいく。今の私の全力の結界。やがて西行妖を包み込み、完全に無効化した。

「恐らく、辛かったのだ」

庭師、魂魄は西行寺の傍に跪き、生気の抜けた顔でその顔を覗き込んだ。後悔、諦め。そんなものがその顔にあった。

「お前が来るようになって、お嬢は笑顔を取り戻した。しかし、同時に人を羨む想いまでも思いだしてしまった。結局、ここから出

られない自分を憎むようになってしまった」

「貴方は……それが分かっていたながら何故!？」

「お嬢は夜一人で泣いていた。毎晩のように。そして次の日、笑うのだ。何事もなかったかのように、それを見てからだ。俺にはどうしようもないと思ったのは」

「……だからって、貴方は」

「八雲……」

亡骸を抱きしめ、どこか放心したように八雲は少女の顔を見ていた。

どうして、こうなってしまったのだろうか？ 人でありながら強い力を持ってしまったから？ 本人が望んだ訳でも無いのに？

「八雲。そろそろ私の結界もまずい。手を貸してくれないかしら」

「……どうする気？」

「西行寺を、封印の要にして結界を作るわ。西行妖にだけ作用する特別な結界を。その娘の、力を持つ娘の体なら」

「幽々子を、楔にするつもり？ ふざけないで。どうしてそこまでこの子がここに縛られなければならないの？ この娘は、なにも」

「

八雲はなにかをいいかけのまま、目を見開いた。その目は西行寺を真っ直ぐ捉えていたが、やがてこちらを向く。

「ええ、分かったわ。ただし、それだけでは終わらせない」

「……どうする気？」

「生き返らせるわ。この娘を、亡霊として」

八雲の選択は私達を驚かせるには十分すぎるものだった。

-
-

恐らく、この選択は自ら死を選んだ彼女の意思と相反するもの。それに気付いていながら、私はこの選択をしようとしている。

死者の亡霊化。一体それがどんなことか、分からない訳ではない。

それでも、私は失いたくないと思っている。無理矢理この世に繋ぎ止め、その存在を求めようとしている。

「八雲……私の準備は出来たわ」

その姿を今は女に変え、その手に剣を握り締めるのは舞風。その間に頷き、幽々子の体そのものに術式を加えることで私もまた準備を終える。西行妖に目を向けると同じく準備を終えた庭師、魂魄妖真うまがこちらを睨んでいた。

私の案を持ち出した時、彼は何も言わなかった。それが少し意外でもあったのだ。きつと、彼ならばこれを否定するのではないかと思っていた。

本人は自分ではお前らを止められないと言いつがましいことを言っていた。彼だって、悔しいのだ。何も出来ぬまま、恩人の娘を死なせてしまったことが。

「舞風……貴女はこんなことを実行しようとしている私を、軽蔑するかしら？」

私は目を合わせられないままそう尋ねた。彼はいい意味でも悪い意味でも人間らしい。それ故に、この選択を最も嫌うと思っていた。

「確かに、人道には反するのかもしれないね。人から見れば命を弄んでいるようにも見えるかもしれない」

「……………」

「でもね、私達は人間じゃないわ。完璧では無いけれど、わざわざ人間の定めた理を、守る必要なんてない。私も貴女の友よ。手伝わせて頂戴。紫^{ゆかり}」

「……………」

私の、名前。

顔を上げれば小さく笑う顔。それには蔑む感情は一切なく、ただこちらを案じているようにも見えた。

「やるからには絶対成功させる。いいわね？」

「……………ふふ、誰に言ってるの？ 私は八雲紫。境界を操る妖怪よ」

そうして私達は笑い合い、配置につく。

魂魄は前、極力背後への攻撃を遮る。次に、舞風。私が西行妖に幽々子の体を封じるサポート。

最後に、私。遠距離から直接干渉し、引き剥がした幽々子の魂を固定する作業と西行妖の封印を同時にこなす。難しい作業だ。

しかし、私達は諦めない。

「それじゃあ、私の結界を解くよ。準備いいわね!!」

「応っ!!」

「こっちもいいわ!!」

そして、舞風が仕掛けた封印が少しずつ解除されていく。直後、再び西行妖は暴走を始めた。

私達が動き出すのもまた同時。あらかじめ作っていた術式に妖力をこめる。

「妖怪！ 抜けたぞ!!」

「大丈夫！ この程度なら問題なし!!」

魂魄その手の刀で弾幕を切り払い、払いきれなかった妖力弾を舞風の力で防いでいく。

それを目の端に捉えながらも私は術式を施していく。しかし、どうも簡単には行きそうに無い。

西行妖の激しい猛攻にあるうことか術式が押され始めている。影響が少ないように地の下から這うように術式を組んでいるのに。

「まさか……地に埋まる西行法師、他にも沢山の人間の怨念が邪魔をしているというの？」

「八雲！ このままじゃ貴女の力が先に尽きるわ！」

「分かってる！ なにかいい方法は……」

「もう……！」

今まで空を飛びながら弾幕を防いでいた舞風が地に足をつき、術式への干渉を始める。それを期に一気に押し始める。

しかし、それまでのカバーが消えたのだ。後衛が無事で済む筈が無い。いくつかのばら撒かれた妖力弾が私の傍に着弾する。しかし私の前にいる舞風の状況はもっと悪い。

猛攻が激しくなり、魂魄だけでは十分なカバーが及ばなくなった中距離地点には雨あられのように弾幕が降り注ぎ、舞風の体を抉っている。その痛みを歯を食いしばりながら舞風は干渉を続ける。

今ここで舞風の干渉が打ち切られては一気に形勢が逆転する。この現状を維持するしかない。

「つくそ、痛いじゃない！！ ただ一本の桜が私を殺す気！？」

その背の術式の光が更に強くなる。それと同時に更に術式は地中を突き進んでいく。

「っち！ もう一つ解放できれば、楽なのにい！！」

舞風がギリツと奥歯を噛む。もう少し、それが分かっているながら押し切ることがままならない。

と、その直後西行妖が強い力を集め始める。私はギョツとしながらそれを見た。だんだんと収束されていく力は弾幕に割く力を奪っているが、もうすぐ来るのは今までとは比べものにならないほど強い力。

「こっ、ざかしい！！」

大地から手を離し、舞風は逆手に剣を握り締める。高まっていくのは妖力、そして魔力に神力。

「たかが桜が、私の友達に何してくれてんのよおおおおおおお！！」

腕の封印が、外れた。

眩い光に何もかもを隠されながら、その光の中心地に立つ者がその手の剣を投擲する。

ありとあらゆる力がこめられた剣が真っ直ぐ西行妖に突き進み、同

時に発射された桜色の眩い力と衝突する。

呆気なく、剣はそれを突きぬけ、西行妖に突き刺さった。

まるでこの世のものとは思えない断末魔が響いたかと思うと西行妖の力が急激に弱まっていく。意図したわけでもなく、術式は一気に進行し、目的の存在に辿り着く。

「封印ッ!!」

掛け声とともに西行妖を縛り付ける結界、苦しげに呻くような声を上げながら、

西行妖は全ての花卉を散らした

「舞風!!」

「あつつ……八雲か。封印は？」

「無事、終わったわ。幽々子にしても出てくるのには時間がかかるかもしれないけど」

「そう……ならいつか。俺の剣、は？」

「ここにある」

いつの間にか傍に立っていた魂魄の手には舞風の剣。西行妖に突き刺さっていたものを抜いてきたのだろう。力を弱めたそれには術式が完成した今刺さっている意味は無い。

舞風の体は少年のものに戻り、地に倒れ伏していた。その力を見るからに弱まっている。今にも消えてしまいたいそうなほど。

「そ……ちょっと疲れた。寝る。だから、その剣は任せた」

「貴方、どうして……」

「……あつはつは。意外とままなら無いね。余力を残すのを忘れるなんてらしくない。特にここは冥界だから、供給できる力が少ないから」

「それが分かっているながら、行動を？」

「別に、死ぬわけじゃないし。あ、でもあいつに、なんか一言くらい、言うっておけばよかった。ま、いいか」

だんだんと舞風の体が薄れていく。その力が弱まっていく。

最後といわんばかりにニヒルな笑みを作り、剣を抱きしめた。

「それじゃ、八雲」

おやすみ。

そう言って、その体は剣へと吸い込まれていった。

「……ええ、おやすみなさい。舞風」

また、会いましょう？

今生ではない別れを告げ、私はその剣を抱き締めた。

舞風と死姫（後書き）

重要報告

白玉楼は幽々子が亡霊になってから冥界に移されましたが、本作では初めから冥界となっております。

仕様？ いいえ、確認ミスです。

読者には多大なる勘違いをもたらしたこと、謝罪申し上げます。

あとがき

プロットどおりに進めるのはやはり難しいと再実感。しかもいつまで経っても消えない無理矢理感。どうしよう。

夏休みはバイトをします。しかし探してない。あと一週間で切った。どうする俺？

昨日、ふと思いついてアマゾンにて鉄扇を注文。中二病？ 男は変態で中二病なのさ。違くない。中学二年生は模造刀を持って町の中を歩き回ったりしましたし。

コミケに行きたい。しかし金と時間がない。泣ける。

幕間（前書き）

昨日から夏休みが始まりました。今はバイトを探しています。もうこのまま休みが終わらなければいいのに。

買ってみた鉄扇も昨日届いたのですが、実は鉄なのは骨組みの端の二本だけ、泣いた。でも殴ったら痛い。

物語がここまで来ると辻褃合わせも難しくなってくる。半分ほど破綻している部分があるのはご愛嬌。

幕間

薄暗い一室。最低限の蝋燭一本の最低限の明かりのみで照らされたその部屋は隅に目を向けたところで闇だけが映り、見えるのはせいぜい手元程度まで。

そんな場所で、私は今日も集めた情報を元に文を書き綴る。その名は幻想郷縁起。この幻想郷の情報を余すことなくかき集めた言わば私の粹の結晶。この部屋はそれを書くための私の個室でもある。

「 こんばんわ。稗田」

そんな薄暗い場所で声一つ。戸が開いたわけでもなく、そしてまた何処かに穴が開いているわけでもない。ただいきなり、正に神出鬼没と言える現れ方をするその存在を、私は知っている。

「 貴女ですか。妖怪の賢者様」

「 ……貴女ねえ。こついうときくらい名で呼びなさい」

「 申し訳ありません。八雲紫様」

なにやらため息でも吐きた気な様子でこちらを半目で見てくる。彼女はこの幻想郷の管理者にして創始者。よって、里の者からは妖怪の賢者として崇められている。実際は人目に触れるようなことが無

いので里の者が見たところで誰か気付かないやもしれないが。

「……まあいいわ。頼んでおいた件はどう？」

「物……ああ、あれですね。少しお待ちを」

私は立ち上がると部屋の隅に重ねておいた巻物を一つ手に取り、中身を確認する……うん。問題ない。

「頼まれていた情報は、『舞風』、と言う妖怪の情報でよろしかったですでしょうか？」

「ええ、どうだったかしら？」

「過去の文献を探してみたところ、舞風という妖怪が存在した記録はありませんでした」

「そう……やっぱり」

「ただ、他に気になった情報があったので、集めておきました」

そう伝え、手の中の巻物を手渡した。少ない時間、更に資料の少なさにより大した情報を集めることは出来なかったが、それでもそれがどんなものが最低限のことは書いておいた。

「……『舞う風物語』？」

「はい。遙か昔の文献をなんとか再生したものを見せていただきました。それには舞う風と言う何者かの物語について書かれています。いえ、正確には舞う風を登場人物においた物語、ですが」

その情報を集めたのは単に名前が似ていたから。だが私はそれが同一な存在ではないかと予測している。それだけではない、そんな気もしたからだ。

「……これ、名前の割りに主人公は舞う風じゃないのね」

「はい。たまたま舞う風が主人公に味方するだけであり、一介の登場人物に過ぎないのです」

「……この作者は何を思ってこれを書いたのかしらね」

「私には分かりかねますが、恐らく書きたかったのは舞う風なのでしょう。似た物語が複数存在するのは異なり、舞う風の立ち位置だけは絶対に変わらないように出来ていましたから。なんらかの意図はあったのだと思います」

「そう……助かったわ。稗田」

「いえ、この程度であるならおやすい御用です」

説明を終え、そろそろお茶でも持って来るべきかと思い始めた頃、私はふと八雲様の様子が変なことに気付く。何と云うか、違和感。本当に気にならない程度だが、雰囲気の前よりも暗い。そんな気がする。

「……どうかなさったのですか？」

「ん？ なんでもないわ。ちょっと、ね」

「そうですか」

はぐらかす、と言う事は聞かれないことなのだろう。それなら

ば私が追求する理由は無い。

しかし、その反応が不満だったのか何故か八雲様は唇を尖らせた。

「貴女、つまらないわね。そういう時はもう少し聞いてみるものよ」
「さて、今の私になる前の私がのこした情報にはむやみに首を突っ込まない、と念押しされていましたが？」

「過去の人物を掘り下げなくていいわ。私は貴女に聞いているの。稗田阿未？」

「……はあ、それでは、お聞かせ願いますか？」

「もう、仕方ないわね。そこまで言うなら教えてあげる」
「……」

まあ、真面目に相手するだけ無駄だろう。今までの経験から言っ
つて。

八雲様は清々しいまでの笑顔だったが、一瞬のうちにそれは冷め切
って、真顔になってしまう。

「言ってしまうなら、友人を看取ってきたばかり、よ」

「そう、ですか。それは大変失礼なことを」

「貴女も先代に似て真面目ね。そこがいいところでもあり悪いところでもあるのだけれど」

「……申し訳ありません」

「怒ってるんじゃないわ。寧ろ褒めてるのよ。幻想郷に貴女を招いておいてよかったわ」

再び怪しい笑みを口元に取り戻す。しかし、心なしか寂しげにも見え
たのは恐らく

-
-

「　　なんで」

なんで、私はあんなことを口にしたのだろうか？

幽々子は亡霊となり、再び現世に戻ってきた。ただ、記憶が失われていたことだけは悔やまれるが、それも悪くないかもしれない。辛い日々の記憶を失ったなら。

なら、何故私は。舞風の事を悔やんでいるとでも言うのだろうか？

思えば、彼との仲も随分となる。私が彼をただの使える存在と思うように、彼もまたただ恩を返すだけの存在と思っていた。

そんなことはない。確かに何を考えているのか分からない時もあったし、その存在を危惧したときもあった。

だが、実際彼は私と敵対する気など微塵もなかった。それどころか笑って手を差し伸べようとした。

私は自らの家　境界の狭間に建てられた屋敷　の壁に立てかけられた剣を見る。彼が唯一置いていったもの。いや、彼自身と言った方がいいのだろうか。

その在り方が未だに理解し切れていない。力を失ったかと思えば剣に吸い込まれていくし、そう言えばいつも手放すことはなかったなと思いつく。

歪んだ光が抜き身の刀身に反射し、光る。それを見て、ふと前のことを思い出す。

あれはどれほど前だったろうか。

いつものように、私は舞風に用件を頼もうとしていた。初めは普通に隙間に落としていたが、同行者が増えたその時から仕方なく控えるようになった。それ以外は仮式神契約に呼びかけるか、隙間を使っ呼ぶくらい。

その時は式に呼びかけていたのだが、生憎と返事がなかった。はて？　と思いつながら私は隙間で所在地を覗いて見た。

見えたのは、古い小さな小屋の外装。山奥に一つポツンと建った寂しい物である。

ここに滞在しているだろうか、私は隙間から抜けると小屋の入り口から出て来たのは……

「あら、八雲じゃない。どうしたの？」

黒く、長い髪をポニーテールにした女性である。何処かで見たような白い衣服と飛び出た胸部、そしてその整った顔を見て私は勿論二つ口を開いた。

「……どちら様？」

向こう側も何故か首を傾げた。その時の驚きは私の妖怪生においてトップ5に入る驚きだった。

「年に一度の封印が弱まる日？」
「そうそう。貴女にだってあるでしょ？」

ないわよ。と即返し、私は再びその容姿をまじまじと見た。正直言
って元々着ていた服以外見分ける要素がない。そもそもずっと男だ
と思っていたので初見で見破れる方がおかしいだろう。

「……なんだか気が抜けちゃったわ」

「そう。なら上がってけば？」

「お言葉に甘えさせてもらおうわ」

開かれた戸を潜り、私は小屋の中に入る。と、中は外装とは全く異
なり生活観溢れる仕様であった。なんだか無性に納得がいかない。

どうにも旅道連れは不在らしく、小屋から気配は感じられない。

「あの娘なら別行動中よ。今日限定で、ね」
「あら、どうして？」

「私がお願ひしたのよ。なんだか嫌じゃない。普段とは違っつて自
分でも理解してるのに、それを見せるのって」

そんなもの、なのだろうか？ 自分には分からないが、持たぬもの
の悩みなのだろう。考えるだけ無駄だ。

「そうね……普段道行く人にガン飛ばしてる奴が雨に濡れた猫を可愛がっていた瞬間を見られるようなものかしら」

もつと分からなくなった。最早説明下手とか言う問題では無い気がする。何故そこでそれが出てくるのか。寧ろ上方修正な気がするが。

「まあもうバレただけけれど」

「ダメじゃない」

「だってあの子ったら、わざわざ近くの山奥まで来た私を追跡していたんだもの。諦めもするわよ」

「……………」

まあ、あの娘は私以上にショックを受けたのどうと推測する。なんせ数年男だと思って旅を共にしていた存在がその時になってようやく女と気付いたのだから。

「それで？ 用件はなにかしら？ 今なら三十五割増しくらいの力な出せそうなのだけれど」

「……………ちょうど良く妖怪とお話よ。主に肉体的な意味合いで」

よし来たと言わんばかりに立ち上がり、舞風は勢いよく立ち上がり、辺りの手荷物をごそごそと漁り始める。

なにやら厄介ごとを持ち込んだはずがその倍にされた気がして、無性にため息がつきたくなった。

そんな、一つの思い出である。

「 実際は封印を解放すると女になるようだったけど」

回想を終え、私は部屋の中の布団にゴロンと寝っ転がる。その際、頭の帽子がポスンと落ちる。

あの時はそのまま妖怪へ交渉、断られることは想定内で即戦闘に纏れ込んだ。その時の舞風の活躍のしようは普段とは比べ物にならず、幻想郷に強制連行した記憶がある。

その時と、今回のことでは相手が違いすぎたが。

そんなことばかり考え、不思議と寝付けずにいた私は稗田にもらった巻物を開いて観始める。

主人公には名前すら与えられず、非常に粗末な扱い。それを見て再び書いた人物の気を疑ったが、次第に進んでいく物語に少しずつ目は横へと動いていく。

それはそう、誰かによる『舞う風』の物語。何故彼が主人公では無いか疑問に思っただけで仕方が無いほどの物語。

意図は分からない。

だが、きっとこれの作者は、彼を、舞う風と言う英雄ヒーローを、愛していたのではないだろうか？

「……やっぱり、彼なのかしら」

姿形不明。性別不明。種族不明。生きた年代すらも不明。何もかもが分からないことばかりだが、この物語の舞う風の在り方は、彼に似ている気がする。

「貴方はいつになったら目覚めるのかしらね」

そう呟き、再び立てかけられた剣を見る。ちよっと疲れた。寝る。

そう言っていた。きっといつかは目が覚める。それがいつかは分らないけれど。

その時は、幽々子も含めて宴会でも開こう。

「……それにしても、手伝いがいなくなっちゃったわね」

そろそろ本格的に式を探すべきかなと、真面目に考え始めた。

その数年後、運よく網にかかった妖狐を式神にするのは、今の話題においては余談である。

○
○

「 本当に、行くんだな」

「うん。世話になったね、慧音」

「忘れ物は無いか？ 路銀は持ったか？ 服の替えは？」

「ちよ、ちよっと。ちゃんと持ってたって」

朝霧によって森は白く塗りつぶされ、上ったばかりの太陽の日が木漏れ日となって差し込む。それは少女、妹紅の白い髪に反射し、光を放った。

彼女の共の護符が力を失い、何十年もの時が流れた。唯一の存在と

言っていていいものを失った妹紅は泣き喚き、私の家に引き籠もるようになってしまった。

長い介護の日々在って今はこうして再び笑みを作ることが出来ているが、当時は本当に酷かった。それがあって、私と妹紅もまた互いを信頼できる存在になったというのは彼女にしてみれば皮肉なことらしい。

「探すのか。八雲紫を」

「ああ、舞風のことは間違はなくアイツが一枚噛んでる筈だからね」

「だが彼の妖怪は神出鬼没だと言う。はたして見つかるか？」

「慧音。私は不老不死だよ？ 時間はたっぷりある」

だから余計心配なのだが、と内心呟いた。死なないから、不老だからと言う理由で妹紅が無理をすることは非常に多い。いくら不老不死だからと言って、痛みはあるだろうに。

恐らく、舞風もこれで大層世話を焼いていたのだろう、となんとか思った。

「近いうちに私もここを引き払う。流石に無理があるようだからな」
「……流れ者達の言などに耳を貸す様な奴ら、ほっとけばいいんだ」

小さな村は時間の流れで大きくなった。それがまた人を呼ぶ。当然私を不振に思う存在だっているだろう

。村の長やご老人は私を守護者と称えるが、それは新参者には縄張りを張っている妖怪として見るものもある。かつて、そう言われたことが懐かしくも頭に浮かんだ。

「……それじゃ慧音。行ってくるよ」

「ああ、また会おう。妹紅」

手を振りながら背を向け、そのまま歩いていく。整備などされておらず、雑草も何もかもがそのままの風景の中に妹紅は消えていった。彼女は不老不死、再び会う日がきつと来る。だからか、それほど寂しさは感じない。

「さて、いるんだろう?」

先程からずっと気配を感じている方を向き、私はそう言い放つ。がさりと草むらが揺れた。

そうして現れたのは一人の大柄な男。その手には一本の短刀が握られており、服装は無駄に値だけはつきそうな羽織。その口元は嫌らしげな笑みが浮かんでいる。

「ふむ、気付いていながら仲間を行かせたか、その意図はなんだ?」

「さて、なんだと思う？　ところで、お前は最近村に来た妖怪の退治屋だな。私に用か？」

「とぼけた事を。お前が人外であることは里のものが証明している。私はお前を退治するために村から頼まれ
「嘘だな」

男の言葉を遮り、私は肩を竦めた。よくもここまで嘘八百を並べられるのか寧ろ感心できる。

そんなもの、つい最近の記憶を見てしまえば明らかである。

「……何をもって私の言葉を嘘と判断したかは知らぬが、お前が妖怪であることには違いない。ここで滅す」

「ふむ。そちらも何を持って私を妖怪と判断したのか。理解しかねるが？」

「老いない。それだけで貴様が人外であることなど決まりきっている。お前は仲間を逃がした気であるらしいが、街道に出たところで私の弟子達が待ち伏せしている。今頃は片もついていることだろう」

「……その言動。聞き覚えが……ああ、そうか。妹紅に聞いたな」

それは妹紅が笑いながら語った思い出の一つ。意味は私もよく分からないが、雰囲気にかまけて言ってしまうおつ。

「それは『死亡フラグ』だよ妖怪の退治屋。そう友人が言っていた」

と、その直後妹紅が去っていたほうから立ち上がる火柱。景気よく行ってる様だ。少しばかり安心する。

「な、なんだアレは！？ 化け物か!？」

「あれで化け物なら過去に存在した安部晴明やら陰陽師も十分化け物さ。さて、本当にやる気か？」

「……ここで退けん。覚悟しろ妖怪!!」

「またそれか……」

短刀片手に飛び掛ってくる人間。懐に忍ばせている符はどうも奥の手らしいが今の時点で看破されては意味が無いだろうに。

さて、先程からこの人間は私を妖怪妖怪と言っているが、私は普段は人間だ。白澤になるのだって満月だけだし、そもそも白澤は妖怪ではなく聖獣だ。それなのに何故身に滾るのが妖気なのか。何度か考えたがそれは完全ではないから、と言う推測しか出来ない。

自分は聖獣だから敬え、なんて言う気は毛頭無いが、流石に妖怪妖怪言われると腹も立ってくる。

「さて、お前のようなペテン師を相手にするのも馬鹿らしい。しかし降りかかる火の粉を無視するわけにもいかない」

少し考え、仕方ないと再び肩を竦めた。

「では少し相手をしてやろう。殺しはしないよ。代わりにその記憶は残させないがな！」

その後、村で上白沢慧音を見かけたものはいない。

只残ったのは記憶が無い妖怪退治屋と黒焦げになってしまったその弟子達。恩人の消失への関連アリと思われ即刻村を追い出されたそうな。

また、それからしばらくして火の術を用いて戦う一人の妖怪退治屋の少女が有名になったが、すぐ様情報の海に沈んでいった。

そうして時は流れる。ゆりかごで目覚めを待つ、一つの存在を残して。

幕間（後書き）

未だに謎。30話とか突破してるのに謎。舞風の秘密が明かされる日はいつ来るのだろうか？

あつきゅん登場。東方のキャラの中で三番目に好きだ。結婚してくれ！！

因みに一番は犬走さん。もみじもみもみ。

二番はゆかりん。BBAなんて言わせない。

四番にモコたんがランクインしてるんだけど……今はいいよね！！

「これは『死亡フラグ』だよ。って舞風が言ってた」

「これは『死亡フラグ』ってけーねが言ってた」

うん、大体あってる。

舞風と覚醒（前書き）

本日夜前半部分を修正して投稿しますが、ぶっちゃけ一部分の二ページを一ページにまとめたくらいの差しかないのであまり気にしないでください。

覚醒、なんてカッコいい言い方しておきながら只起きるだけです。いいじゃない。そういう意味なんだから。無駄に壮大に聞こえるくらい。

目覚めは上々。しかし時間は経過し、周りは変わるでしょう。それでも彼は変わらない。

舞風と覚醒

私は強い。そう思っていた。他の妖怪と比べてしまえば間違いなく上位にはいることは自負している、実際それだけ恐れられていた時期もあった。

私は胎児に憑依する事で身を若返らせる。言ってしまうえば意識の確立していない存在の体だけを奪ってまた力を蓄えるわけだが、その体が17になる頃、国の頂点、帝とやらの目に留まった。

それからは非常に豪勢な暮らしをするようになった。旨い物を食い、好きに遊び、偶に夜の相手を求められるが、それは全て幻術で誤魔化した。何故私が人間などを受け入れねばならん。

初めは中々楽しかったが、慣れてしまえばだんだんとつまらなくもなってくる。帝に称えられた博識も美貌も、私にとっては正直どうでもいい。いつしか墮落に過ごすのが当たり前になっていた。

やがて、私の妖力にでも毒されたのか帝が病に倒れ、解決策が見つからない帝は陰陽師を呼び、原因を調べさせた。

そして、私の存在がバレた。恐らく狂い始めたのはその頃。

たかが人間と侮り、私は何度も逃亡を繰り返した。時に罨を、時に美貌を、時に策略を武器にして。

しかし、いつしか追い詰められる。その身に二つの矢を受け、こちらに向かい刀を振り下ろしてきた男の姿を見、私は己の詰みを悟った。

死にたくないと思った。長い時を生きた。それでもまだ生きたいと思っていた。何故？ そんな物に理由は無い。生存本能とでも言うんだろう。なんであれ、心の底から生きたいと思った私は聞こえた悪魔の言葉に知らずと頷いていた。

気付いた時には既についていた式神。妖気も何もかもが空の状態では寝かされていた。傍に佇んでいたのは口元を扇子で隠す妙に派手な衣装を着た女。私と同じ妖である。

初めは気付いた時既に付けられていた式に抗議の声を上げたが、言質は取ったのこと。死に掛けの状態で迫られれば誰だって頷くだろう。

だがそれに私が応じてしまったのも事実。更には長い時を生きた私よりも、この妖怪は強い。加えて力も何もかもが無い現状。答えは決まっていた。

そして私は妖怪、八雲紫様の式となった

ここまでが過去の話。それほど昔と言っわけでも無いが。

日夜忙しく国を駆け回る紫様のサポートと家の家事が私の主な仕事だ。初めは当然嫌々だったが、今となってはもう慣れた物である。

式神とは聞こえが悪い言い方をすれば『使われる存在』だが、存外悪いものではない。人間に追い回されるうちに薄れた傲慢さも式神となつて加速し、紫様を見る度に自分が弱いように感じてくる。

そして、それに不思議と安心感を覚えたのだ。思えば私は孤独だった。売れた名が他者との交わりを断ち、傲慢を形作った。人間と相対することが馬鹿らしいと思う時だつてあつた。

しかし、今はどうだろう？ 紫様の仕事は何かと面倒ごとが多いが、初めは何かと気を使ってくれていた。彼女の式となることで様々な妖怪と出会い、会話した。

今更ながら、私は助けてもらつてよかつたと、心の底から思っている。

だから私は自分の名を自身を持って名乗ることが出来る。

八雲藍と言う、あの方と同じ姓を。

「この部屋も、これで終わりか」

私は紫様が不在の間、基本的に家事に没頭している。今日は屋敷内の掃除。中々に広いので困るところだ。

水を入れた桶を持ち、雑巾をそれに入れると次の部屋へと移動する。確か次の部屋が最後だったなと思いつく。

この屋敷の部屋数は多い。初めて掃除をした時は始める前から溜め息が止まらなかったものだ。境界で様々な場所と繋がっているため、手間はあれど部屋の増加は思うがまま。しかし大概が空き部屋なのはなんとかしてほしいところだ。

最後の部屋、その掃除も慣れたものである。その部屋が一番異彩を放っていたので記憶するのは容易かった。別に内装が変な訳ではない。誰も暮らしていない割には妙に生活感を保ち、中央に剣が一本突き立っているだけである。

その剣も妙に古しい物で、なにかしらの力が込められた魔剣であるということだけは分かったが、それ以上深いことは分からなかった。

ただ、紫様に尋ねてみると妙に明るくなり、気にするなと言った拳
句、独りになった瞬間に妙に悲しげなご様子で目を伏せると言う見
たことの無い姿を晒した。

見た目や戦闘方法からしてあの方が剣を振るような戦い方を用いて
いないのは明らかだった。と、言うことはそれは元々あの方の物で
はなかったのだろう。

……恐らく、亡くなった友人の形見と推測した。

それもあつて私はより彼女を好ましくも思えた。正に妖怪と言つて
も過言ではない性格の割には、時々妙に人間染みた様子を見せる時
もある。

それにより、親近感が沸いたのかもしれない。

「と、掃除掃除」

回想に浸るのをやめ、私は部屋無いの掃除を始めた。時々目に入る
剣が気になって止まない。

先程それを古しい物と語ったが、実際は錆の一つもなく、年代を感
じさせる一つの芸術品にも思える。

ふとこれを振るつたのはどんな妖怪だったのだろうか？ と思つた。

あの八雲紫の友なのならば最近来る酒吞童子殿のように強く、西行

寺様のよつに飄々とし、また主と張り合えるほどの知識持ちなのだらう。

そう考えるとその剣に積もる埃が申し訳なく思えてきた。紫様には触らないよう何度も念押しされていたが、だからといって汚れを放置するわけにもいくまい。

懐から磨き布を取り出し、剣へと手を伸ばし、それを持ち上げる。

この日、私は今まで生きて生の中で最大とも言える間違いを犯したと、後の世に語り継ぐ。



「ふう」

「あはは。お疲れだね。紫」

「当たり前でしょ。まさか貴女のところの鬼を全て幻想郷で受け入れることになるなんて……またパワーバランスが崩れるわね」

疲労で肩が重い。最近働き詰めだと自分でも思う。幻想郷が完成したら絶対半年くらい寝てやる。

そんなことを思いながらも私自身幻想郷の完成がまだまだ程遠いことを理解している。様々な妖怪の受け入れは忙しいし、その住処の契約も面倒だ。幻想郷の戦力が増えるのはありがたいが、その分ア

クの強い連中ばかりで苦勞ばかりだ。

そんな私の隣で飄々と笑っている少女。名は伊吹萃香。彼女もまた鬼である。それもただの鬼ではない。

嘗て　と言つてもそれほど前でもないが　悪名を馳せた鬼の頭領、酒呑童子その者である。初めて会つた時は（主に見た目的意味で）大層驚いたものだ。何度か会い、時には拳を交わし、今の仲まで至つたのだ。

今日はこれから私の家で宴会だ。とは言つても私と萃香、それに幽々子を呼んで魂魄と藍に酌をさせるくらいだろう。大体そんな感じだ。

隙間を開き、私は境界に存在する我が家を見る

「つて、何よこれ……」

愛しき我が家への道は結界により遮られていた。それが誰のものか妖気を見てみれば我が式の物。主を家に入れないつもりだとも言うのだからか？

「嫌われたんじゃない？　昨日なにかしてないか思い出してごらんよ」

「何もして無いわよ！　あ、でも残してた最後の煎餅食べたっけ。まさかそのせい？」

「煎餅で割れる従者との絆、か」

「不穏な事言わないで頂戴!!」

兎にも角にも今はこれをこじ開けて説教をするべきだ。ご主人様に逆らったらどうなるか、忘れたわけじゃないでしょうね？

結界に干渉、分析、思ったより薄い結界で難なく解除。若干拍子抜けかと感じながらも私は再び歩を進める。

と、

「紫。いつの間に新しい従者を雇ったんだい？」

「はあ？ そんなの何処に」

圧ッ。

私の屋敷から感じる藍以外の存在の力。それに身構える萃香。しかし、私が身構えるにはその感覚は慣れ親しんだ物であった。

「そう。目覚めたの」

中からなにやら争いの音がする。大方勘違いから始まった物であろう。私は玄関の戸を開け

「取ったー！ー！ーッ！！」

「責様！ 尻尾から手を離せ！！ そ、そこは。ふわぁ！」

見えたのは自分の式神の尻尾を抱きしめて離さない子供。そしてそれを掴もうにも尻尾まで手が届かずグルグルと周り続ける式。

………どういう状況？

私も萃香も訳が分からぬまま立ち尽くすまま。

そのうちこちらに気付いた藍が助けを求めてくるまでそれは続いていた。

○
○

「いやいや。久しぶりに目を覚まして少々高ぶってしまった。面目ない」

「それはいいけど……体の方は？」
「バツチリ。ぐっすり眠って全快よう！」

一瞬なような、はたまたとんでもなく長い時間だったような。そんな眠りから覚め、体は動くことを望んでいる。実際長い時間だったろうことは増えた面子を見て何と無く分かる。

ついさつきまでもふもふを楽しんでいた妖獣 恐らく妖孤 にしても並ではない力を持っているし、八雲の隣でからから笑っている鬼少女なんか八雲にも匹敵する力を持っているだろう。

「貴方も相変わらずね。安心したわ」
「たかだか数十年単位で代わっちまう舞風さんじゃないですよ。ところで、紹介してもらえないかい？ そっちの妖狐と鬼さんの」
「貴方、自己紹介もしてない相手の尻尾を掴みにかかったの？」
「いやはや、話せば長いんだけど」

「……ようやく目覚めか」
「な、お前は何者だ！！」
「名を名乗るなら自分から先にしたらどうだ？ 正直どうでもいいが」

「なんだと！？」
「あいや。貴様、中々いい尻尾を持っているな。ちょっと私に触らせろ」

「ふざけるな！ 誰が貴様なんぞに！！！」
「貴様の答えは”はい”か”YES”に限られる。さあ、俺にその大きな物を揉ませて感触を確かめさせる」

（尻尾です）
「く、来るなッ！！！」

「ふふふ。我が前でフリフリとそれを振りおって、誘っているのか」

『?』

「再度言いますが尻尾です」

『つく、何とか外に出させないようにしなくては、紫様。早く帰ってきてください!』

『さあ! 俺にそれを触らせてー!ー!ーッ!ー!』

「なんてことが」

「私の式になんて事してくれてるのよ貴方は!」

「いやはや。封印の解放直後は心が抑えられなくて」

「そう言えばあつたわねその無駄設定」

「無駄とか言うな。しかし悪いな。お前の式を傷物にして」

「全然反省して無いじゃない」

ギョロツと鋭く睨みを利かせてくる。おお怖い怖い。仕方が無いので土下座した。

「紫。アンタも中々奇怪……愉快的な友人を持つてるねえ」

「欲しいならあげるわ」

「遠慮しとくよ……さて、自己紹介だったね。私は伊吹萃香。見れば分かると思うけど鬼さ」

「おおう！ やっぱりか。それだけ立派な角生やして腰の瓢箪と来たらやっぱりそうだよな。俺は舞風ですよ。姓は未定」

胸を張って自己紹介。お互い張る胸もなく、身長も近い。仲良くなれそうな気がする。

「舞風ね。アンタは何の妖怪なんだい？」

「さあ？ 俺も分かんない」

「舞風。知ってると思うけど鬼相手に嘘をつくのはおススメしないわよ？」

知ってるよ、と零す。こちら結構長い間鬼とは触れ合ったりしてきたものだ。今更である。

「嘘じゃないし。実際確かなことは分かんないし」

「それホントかい？ なんか見るからに嘘っぽいねアンタ」

「何処吹く風のように飄々としている男、舞風と人は呼ぶ」

「それ嘘でしょ」

「俺の信頼性の無さに泣いた」

嘘だけど。実際嘘ですけど。

と、未だに八雲の後ろでこちらを睨んでいる妖獣一匹。なんだか気になる。

「もう一回もふっていい？」

「断固拒否する。先ず手つきがいやらしい」

「藍。諦めなさい。こういう奴なのよ。前より酷くなってる気がするけど」

主と従者のダブルでクールアイ。俺は前からこんなはずだと思案する。突発的に思った事を口にしてている気がするので我ながら保障できない。

「類は友を呼ぶって言うけど。紫も随分な奴と友達だね」

「おおうい！ それは俺が貶けなされている様にしか聞こえないんだがその辺どう？」

「まあそういうことだね」

「嘘をつかないって残酷。それを今初めて思い知った」

からからと笑い、悪びれた様子もなく瓢箪を傾ける伊吹。凄いやつだって事は分かるけど見た感じこれだから違和感しか感じない。幼女が酒飲んでるようにしか見えん。

「……八雲藍だ。紫様の式をしている。貴様と紫様の関係は？」

「友ゆうじ」

「奴隷」

「奴隷？ えつ、今八雲奴隷って言った？ なにそれ怖い」

八雲もまた扇子で口を隠しながらくすくす笑う。なんだか取り残された気分。そんなことを思いながらもそういつたやり取りが随分久々に感じて、なんだか楽しくなってきた。

「八雲おゝ。腹減った。飯にしようぜ！」

「何で貴方が決めてるのよ……まあいいわ。藍？ お願いね」

「……はい」

なにやら不満げに、八雲藍とやらが台所へと歩いていく。八雲はそれを見届けると隙間に入り、消えていった。

しかしアレだな。八雲が二人に増えたからこれからどう呼ぶべきか悩むな。やくもん？ それともいつそ名前で呼ぶか。悩む……

しばらくして紫が戻ってくるまで俺は伊吹と雑談しながら待っていた。一度暇つぶしで腕相撲して負けた時はどうなるかと思った。これ真理。

「ご馳走様。旨かったよ八雲」

「そういうことは作った藍に言っておけて頂戴」

「旨かったよ藍」

「名で呼ぶな！ それと呼び捨てするな!!」

結果、そういう固定。やっぱり八雲は八雲である。名で呼ぶのはま
だいい。

では何故藍は八雲と呼ばないから。それは勿論分ける必要はあつた
し、今更普通に紫と呼ぶのもアレだし、藍は紫の式神だからよくよ
く考えると俺の後輩？ と言うことにもなるから。

間違ってる？ いやいや……

「愉快ねえ」

「愉快だねえ」

笑いながらその様を見るもの二人。片方は伊吹、そしてもう片方は、
驚くなかれ、西行寺幽々子である。

若干の不安要素でもあった現世への固定化に成功していたことはそれなりに嬉しいことであったが、どうにも記憶が消えているようである。初めましてと言われた時はつい恐縮して頭を下げてしまったものだ。

しばらく　　と言っても時間間隔が曖昧なのだが　　会わぬうちにその性格も随分変わったものだ。元はちょっと変わり者のお嬢様に思っていたはずが、今となっては人を笑ってからかえる女に。これは八雲のせいだ。間違いない。

「　　そういえば、貴方」

「ん？」

「剣、どうしたの？」

「　　……あれ？　　おっかしいな。どこに投げたっけ？」

投げんなよ、と八雲に心の中で言われた気がする。主に目がそう言っている。目覚めた直後に先ず尻尾が目に入ったのが覚えている。確かその時は

「　　……藍が持つてなかったっけ？」

「私？　　……ああ、そういえば抜いてしまったのは私だったな。剣

……はて？　　何処に置いたか」

「なんだよー知らねーのかよー。使えねーなー」

「無限の地獄が見たいのか？」

「申し訳ありませんでした」

目が、目が本気だった。なにこの子怖い。

それはさておき、藍が剣を持っていたのは確かである。となると追いかけてこの最中で落としたか。今更ながら反省。しかし後悔はしていない。

「ん〜。これじゃない？ 三つほど隣の部屋に違和感があるけど」

「おお。落し物探査の能力？ 貴女いい鬼ね」

「違うよ。私のは”密と疎を操る程度の能力”さ。大まかに言えば私の力でここらを覆って違和感のあるところを探し出したって訳。確かに探し物には向いてるかもね」

「へえ〜。そんな大事なこと言っても良かったの？」

「アンタのも教えてもらえば問題なし」

「ちょ、おまつ」

思いもよらぬ交換条件である。しかしここは紳士的に誠意を持って答えを返すべきである。

俺は胸を張り、腕を組み、精一杯見下ろす姿勢を作りながら言った。

「だがこ」

「知ってるかい？ 私の能力を使えばこんなことも出来るんだ」

「とわるなんて言うわけ無いじゃないですか伊吹さん」

幼女である。まごう事なき幼女である。そして俺は今幼女に見下されている。地に這い蹲っているわけではない。まるで遠近法の逆作用のように伊吹の身長が俺の大きさを越して天井に着くほど大きくなったのである。縮尺がおかしい。

「俺の能力は”封を操る程度の能力”。封印関係なら施工、解放にせよ何でもござれ」

「封印か。居そうで今まで見つからなかった能力だね。しかも防御寄りの万能系。やっぱり類は友を呼ぶってのもあながち間違いないね」

「そう？ でも重要な攻撃能力がなあ。結界に閉じ込めて圧死できるけど」

「私は相手を一撃で死に落とし入れられるけどね」

「何故会話に混じったし西行寺」

桜柄の扇子で口元を隠しながらこちらに歩み寄ってくる。その姿はさながら……って言うか紫に似ている。絶対なんか吹き込んだら。

「アンタの能力は別格だからね。指一本で人間を死に誘えるなんてとんでもない能力だよ」

「貴女だって指先一本もあれば人間相手に無双できるでしょう？

それと同じよ」

「もうやだ。混じりたくないこの会話。ちょっと剣拾ってくるわ」

いそいそと廊下に出て三つ隣の部屋に行くと我が剣は無残にも転が

っていた。泣ける。

「　　そう言えば八雲」

「何かしら？」

食事を終え、縁側で涼んでいる頃。ふと気になったことを八雲に尋ねることにした。縁側と言っても空は見えない。なにやら固定されていない空間が陽炎のように揺らめき、視界いっぱい広がるだけである。

俺は屋敷内で酒を飲む伊吹と西行寺に酌をしている藍を見る。

「随分あの二人は強いみたいだけど、何者なんだ？」

「藍は玉藻前^{たまものまえ}。萃香は酒吞童子^{しゅてんどうじ}よ」

「……ちよつと耳が遠くなつたみたいだな。もう一回言ってくれな

い？」

「玉藻前と酒吞童子よ」

「……いやいやいやいやいやいや。お前も随分と凄まじい友人と式を持つてるんだな」

玉藻前に酒吞童子。それは日本では非常に有名な妖怪だ。妖怪やらの知識に疎い俺にもこの妖怪は知っていた。

『日本三大悪妖怪』。その名のとおりに日本を代表とする三体の悪妖怪である。普通妖怪と聞かれれば河童か天狗辺りしか浮かばないだろうが、これは特に力の強い者の証である。

玉藻前、そして酒吞童子。どちらも日本最強の妖怪では無いだろうか？ その片方が友人。もう片方を式神にするって、八雲って本当に何者なんだろう？

……しかし、実際に会ってみるとこんなものかと若干の落胆があるような気もする。史実が嘘なのか、それとも何か別な理由があるのか。藍はともかく萃香に対しては愕然である。

「見た目で判断するなって言葉は貴方だけの言葉じゃないって事よ」「いや、それもそうだけどアレはなあ……」

「実際萃香は鬼達の頂点に立つほどの実力者よ。貴方でも勝つのは難しいんじゃないかしら」

「……本当に酒吞童子ならほぼ絶対勝てないな。少なくとも今のままじゃ」

「そう……」

それだけ話すとなにやら考え込むようになってしまふ八雲。聞いた
い事も聞いたし、俺からはひとまず離すことはない。

「…………妹紅。何してるかなあ」

何も言わず別れた少女。封印の弊害で恐らく護符の力は失われただ
ろうし、もしかしたら死んだと勘違いしているかもしれない。

まあ、それならそれでもいいのだが。そのうちまた会うだろう。
妹紅は不老不死だし。旅でもすれば会える。

ふと上を見上げる。ここからは空も見えないが、恐らく外の夜空は
星でいっぱいなんだろう。

なんとなく、そんな気がすると思いつつ、静かに目を閉じた。

○
○

「 寝たみたいだね」

「 …… なにかしら？ 萃香」

「 分かってるだろ？ 八雲紫なら、ね」

「 舞風の正体、かしら？」

「 嘘は言っつて無い。でも本当の事も言っつてない。そんな妙な違和感があるんだ」

「 でしょうね。彼は正体を知られるのを嫌っているもの」

「 その言い方だとアンタは知っつてるみたいだね」

その目はキラキラとしたまま、私の目をまた射抜いている。

萃香がこんなにも他者に、それも大した力を持たない者に興味を持つなど珍しい。

「言つとくけど、私はそいつがただの弱小妖怪だとはまったく思っちゃいないよ。能力があるくらいでただの妖怪があんなにも図々しくなれるわけが無いからね」

「聞きたいなら本人から聞けばいいじゃない。力づくでも、ね」

「それも考えた。でもね、違うんだよ。そいつは『話術』で私に勝負を仕掛けている。本人は無意識かもしれないけどね。まるで鬼と話し慣れてるみたいだ。だからそれ以外で水を差すわけにはいかない。でも俄然正体は気になる。言いたくないならいいよ。自分でなんとかするから」

そう言つと萃香は掌に拳を叩きつけ、野性的な笑みを浮かべた。

明日は泣いて喚く事になりそうね、と早くも舞風に同情した。

舞風と覚醒（後書き）

最初の玉藻の前のくだりがやや長いところが気になるところ。知らぬ間に会ってみたかった妖怪のうち二体と邂逅。感想は予想外。そりゃそうだ。

まだまだ原作スタートまで大層時間があります、が。

あまり長引かせるのもまだるっこしい。

次話もまた一場面飛ぶかもしれませんが、ご容赦を。

舞風と妖山（前書き）

タイトルは”あやかしのやま”と呼んで（くれるといいなあと言っ
勝手な注文）

今回も題通り（？）です。今回も多分誤字あるんだろうなあ、と思
います。一応三回くらいは見直しました。

微量の厨二要素があります。ご注意ください。

舞風と妖山

「　　なあなあ」

「んー？　なんだい？」

「なんで鬼って豆に弱いのか？」

「知らない。でも痛いものは痛いよ」

「なんでなんだろうなー？」

「さあ？　って言うかなんでいきなりそんな事を？」

「暇だから」

本日は晴天である。まごう事なき晴天である。そんな空の下、俺は伊吹とともに森の中を歩いている。

さて、何がどうして俺がこの酔いどれ鬼幼女と歩いているか、説明せねばなるまい。いや、むしろ聞け。でないと針千本飲ます。

あれは、前日の事である。最近だとか言うな。

「頼み？ 昨日起きたばかりの俺に？」

「ええ、本当なら私が行きたいけど、今日は藍と行かなければならないところがあるのよ」

「因みに何処へ？」

「妖怪の山よ」

「却下」

「却下は認めないわ」

目覚め、藍の作った朝ごはんを食べていればこれである。八雲の人の荒さは今に始まったことではないと理解しているが、まさかここで俺を使ってくるとは思わなかった。普通だったら「後一週間くらい安静にしてなさい」、とか言わない？

……八雲に期待するだけダメか。

「大丈夫よ。それほど難しい用件じゃないもの。詳しい話は萃香に話しておいたから」

「……ん？ 伊吹も？ なんで？」

「本人の希望よ。同行させてほしいって」

「チェンジで」

「却下よ」

どうして俺の意見はこんなにも通りにくいのだろうか？ なんらかの事象が働いているようにしか感じられない。

「ま、そういうことだから頼むよ。舞風」
「……………」

どうしてこうなった。その言葉を口に出したくも歯噛みした瞬間である。

「ま、簡単な挨拶回りでも思いなさい。妖怪の山は幻想郷の中でも巨大な組織よ」

「挨拶、かあ。嫌な予感しかしないんだけど」

基本的に妖怪とは実力主義である。そりゃ人権もなんもまだない社会。人間の格差のように妖怪にも実力の格差はある。結果、強い物がトップになる。

それではそのトップに挨拶する。それは大体どういうことであろう？ わざわざトップになるなんて相当好戦的である。そんな奴に挨拶。そうなるん？

「……………そういえば貴方。姓を持ってないのよね」

「なんだ？ 藪から棒に」

「そうでもないわよ。姓もないような妖怪を使いに行かせたと思われたら問題が起きそうだし……………仕方ないわね。今限定でこう名乗りなさい」

「 八雲姓、ねえ」

「何ぶつぶつ言ってるんだい？ 妖怪の山はもうすぐだよ」

「ああはいはい。今行きますよ。ったく」

こっちとしてはこれから八雲をなんと呼ぶべきか試行錯誤を繰り返しているというのに、暢気な物である。豆のくだり？ さて、なんのことが。

やや憂鬱なまま顔を上げる。聳え立つ大きな山。辺りが基本的森だけなこと比べ、やはり圧巻である。しかし、それはそれ、である。それにしても、最近友人に自分の姓を与えられるのか？ その辺り非常に悩ましいが、自分の式神に八雲姓を与えている辺り、まあ俺もその枠組みに当てはまらない訳ではない、のかもしれない。

なにはともあれ、無茶苦茶なことは確かだが、今は頼まれたことをパツパツと終わらせてしまおう。

「 　ここから先が妖怪の山だよ」

伊吹が立ち止まる。より一層自然が茂り、辺り一体靈気が満ちている。靈山のような物なのだろう。

では先に進もう、と一歩踏み出した時、伊吹がふと思いついたように手をポンッと叩いた。

「そうそう。私は先に行ってるからね」

「へ？」

「だから一人で頑張ってるよ。舞風」

「ちよ、おまつ」

突然である。とんでもないことにそのまま伊吹は霧状になり、消えてしまった。恐らく能力なのだろうが、そんな事は些細なことだ。

「ふざけんなー！ーッ！！　こんなところに放り出されたら迷子になるわー！ーッ！！」

叫びは悲しくも山に反響し、後に残ったのは風にまぎれて聞こえた伊吹の笑いを抑えた声である。

そして始めてきた山に一人置いていかれ、寂しくも上っていくことになる俺である。

「……うわー。帰りてえ」

会話なく 静けさ虚し 山の中。一句である。なんか妙に馬鹿馬鹿しくなってきた。茶番に付き合わされている様だ。

それでも行かない訳にもいくまいと歩みを進めていく。空を飛んで楽をしたかったが、これから会いに行くと言うのにそれはなんだか失礼だろう。人様の土地を勝手に飛び回るなんて。

歩くのはいいのか、なんて聞かないでほしい。

「全く、いい森だよチキショー」

妖怪の山、人が聞けば灼熱焦土の地獄でも想像しそうだが、実態はこんなにも穏やかな森である。流石にそんな場所は妖怪だって嫌だ。種族によるやもしれないが、少なくとも天狗は好まないだろう。

空気も澄んでるし、靈気も満ちてるし、果てには瑞々しく茂った自然。

思わず結界山と比較してみたくなる。そう言えば随分帰っていない。どうなっているだろう？

……随分と遠い。山の天辺がかすんで見える。歩けば一刻はかかりそうである。どうして伊吹だけ一人で行ったのか……

「……うわー、嫌な予感しかしねえ」

ぶつくさ言っても早くは着かない。現実には常に非情なのだ。泣く泣く歩を進めていく。

今日は帰ったら藍の尻尾もふもふしてやる。

「止まりなさい」

「お？」

半刻は歩き、ようやく山の住民達に会うことが出来た。天狗。それもただの天狗ではない。白狼天狗である。

通常、天狗は翼を生やし、鼻が長い物だと書物には書かれているが、実際は鼻が長い方が稀である。少なくとも大天狗くらいだ。

白狼天狗は名の通り、白い狼をそのまま人型にしたような妖怪である。その力は天狗の中では弱く、基本使えばしりである。

いつの間にやらこちらを囲むように展開しており、一人の白狼天狗
恐らくリーダー　　が一步前が出る。

「なんだなんだ？　ようやくお迎えか？」

「迎え？　なんのことか分からぬが、ここは妖怪の山。無関係な者は今すぐ立ち去れ。これは警告である」

「……？」

驚きである。伊吹、なんのために先に行ったんだ？　俺が思いつき
り侵入者扱いなんですが？

しかもこいつら、哨戒天狗だ。厄介な奴等に出くわしてしまった。

「あゝ、聞いてない？　伊吹からなんも聞いてないの？」

「伊吹、萃香様のことか？　先程そのうち山に侵入者が来る、と言
っていたが、貴様か？」

お前が元凶か。謎は全て解けた。後で絶対ボコす。

「僕悪い妖怪じゃないよー。ちょっと挨拶にいきただけよー」

「忠告を無視するならば攻撃を仕掛けるが、いいのか？」

ちよ、酷い。この白狼天狗のお姉さん酷い。

その白狼天狗の言葉を境に辺りから問答無用と言う空気が流れ始める。見ればその場の全員が臨戦態勢に入っていた。

先程の様付けを見る限り、伊吹はそれなりの地位の鬼なのだろうか？
そんな者の注意で警戒し、そして敵を見かけたりしたらどう思われるだろうか？

伊吹萃香が警戒するような妖怪、と思われたりしないだろうか？
故の一度だけの警告。元々逃げないことを前提にしていたのかもしれない。

だとしたら、これは伊吹の悪戯。帰って後日、なんてことは簡単だが、このまま帰るのも……癪だ。

「……俺ってば病み上がりなのに……どうしてこうなるんだか」

はあっ、と一つため息をつく。本当ならこのまま形振り構わず突っ込んで蹴散らしたいが、白狼天狗は悪くない。上司の言つとおり警戒しただけなのだから。

「ま、なんとわれようと。舞風一匹通りまーす」
「かかれー!!」

号令と共に飛んでくる妖力弾の弾幕。避ける隙間などまるでないそれを
見て、やっぱりため息をついた。

「やっぱり、帰ればよかったかな……」

ボソツと一言。時既に遅し。

弾幕が着弾。そして轟音。山が揺れた。

○
○

「ん。やっと着いたんだ」
「やっとだよ伊吹コノヤロー」

眼前には見た目やや疲労感の見える舞風。その周りには恐らく山のほとんどの白狼天狗が集結していた。

「まさか白狼天狗全ての攻撃を全て防ぎきるとはねえ。予想以上に根性がある」

「……そりゃどうも。こいつらはただ上司に命令されただけ、なら攻撃するわけにはいくまいよ」

そう、舞風は攻撃することなく、この山の、私のいるところまでたどり着いた。数十の白狼天狗の攻撃全てをいなし、ここまで辿り着いたのだ。ただの名も無い妖怪が出来る芸当ではない。

「で、お前はどついう魂胆だ？ 伊吹」

「……自己紹介がまだだったね。改めて名乗ってやるよ」

上等な椅子から降り、地に足をつけ、笑みを作る。

辺りの鬼たちがざわめく。烏天狗も、白狼天狗も。

「妖怪の山、鬼神代理、『酒吞童子』伊吹萃香。この山の今の頭領
さ」

「なるほど……最初からお前の企みの上って訳か」

だからこそ最初のうちに山に登り、待ち焦がれるような時間を過ごしたのだ。全ては舞風の力を見たいがために。

紫にも感謝しておこう。どうなっても知らないとは言われたけど。

「私も名乗ったんだ。アンタも名乗りな。名と与えられた姓を」

「ませてるガキです」

「ぶっ潰すよ？」

「ユーモアが足りないぞ。伊吹」

舞風は先程までの僅かな怒りを納め、腕を組むとため息をついた。

「これ、八雲……紫も関わってるのか？」

「妖怪の山に行けてその口で言った奴を忘れたのかい？」

「ああはいはい。全て理解した。そして俺の中で結論」

舞風は組んでいた腕を解いたかと思うとこちらを指差す。その額には青筋が浮かんでいる。

「紫をボコそうにも絶対逃げられる。だからお前をボコす!!」

「安易だね。それも動機がカッコ悪い」

「今更だよ。俺はそんな妖怪だ。鬼みたいに嘘をつかないわけじゃないし、お前みたいにごそ頭の頭領やつてるわけでもない。どこまでも、そしていつまでも自由」

「他人の在り方に口を出すわけじゃないけど、アンタ、何処となく紫に似てるよ」

「それは勘弁して!!」

「間髪無いね」

自由とは、人によって様々な意味を持っている。何かが出来るとか、縛られていないとか、その在り方自体に要因する。舞風はそのどれかに想定し、それを貫いている。それがどれだけ難しく、辛いことか。

「いいのさ。俺はそれで。誰かと同じである必要なんて何処にも無い。縛られて無いのだから」

「なら、その気概。この私にも貫いてみな!!」

「当然だ! 俺は舞風。八雲の縁者、八雲、舞風だ!!」

野生的な笑みを浮かべ、一つの生命が、吼えた。

大地が揺れる。



先手を取ったのはこちらである。

「伊吹iiiiiiiiiiii!!!」
「ッ!!!」

突撃。策など何も無く激情に任せて剣を振る。そのまま振り下ろした場所には既に伊吹はいない。一テンポ速いタイミングで退き、カウンターを繰り出そうとする姿が横目に映る。

関係ない。

そのままは剣は振り下ろされ、大地が割れた。

「な、にiiiiっ!!!」
「逃がすかああああ!!!」

衝撃で吹き飛んだ伊吹をまるでばねの様に追う。剣を振りかぶり、叩きつける。ことは出来ない。

振り下ろす直前に柄に添えた俺の手を殴り、骨を砕いた。指が思うように動かず、剣は手から零れる。直後に蹴りが腹に決まり、後ろへと吹き飛ぶ。

背中から地面に叩きつけられるがその衝撃を利用して体勢を直す。

「いきなりだね。それもしつこく追撃なんて」
「しつこい奴は嫌われるってか？ 俄然承知さ。俺は好かれるため

に戦うんじゃないんでね!!」
「それはこっちも、さ!!」

伊吹が構える。磨きぬかれた純粹な近接戦闘術が今こちらを向いている。さきほどは不意打ちだからこそあんな上手く言ったが、次はそうもいかないだろう。剣も伊吹の傍に落ちてている。

刹那、同時に大地を蹴り、直後激突。手と手を合わせ、まるで力比べのような体力の削り合い。先に後退したのはこちらである。伊吹の力に逆らわぬよう^うのけぞり、伊吹の体を蹴り上げる。

「ッ!!」

「破あッ!!」

がら空きの腹に妖力を込めた掌底を叩きつける。延長線のように延びていく妖力弾は確かに入った。

しかし伊吹はなんら堪えた様子もなく、体勢を直すところを睨んだ。

「まるほどね。やっぱり見かけじゃない。それっぽっちの力で私とこれだけ戦えるなんて。でも、それだけなら私には勝てないよ」
「こちらら三文芝居の相手をしてやったんだ。このぐらいで終わらせるわけ無いだろう」

「はっ、言ったね。じゃあ、少しだけ本気、出してやるよ!!」

伊吹の妖気が急激に高まる。セーブしていた、と言うよりばらけていた力を幾分か自分に戻したんだらう。

直後、脳髓が揺れた。

何故か気づく間もなく、目を横に向けると握り拳を振り下ろした伊吹の姿。全く見えなかった。目元が霞む。

眩む頭のまま、妖力を手に集め、放つ

直後、それは空気に霧散する。伊吹がにやりと笑う。こいつの能力か。迂闊であった。

拳はまたこちらの頭を的確に捉え、視界が揺れる。

「ぐっ、うっ」

「まだまだああああ!!」

伊吹の殴打は止まらない。的確に、こちらにダメージを与えてくる。全て急所だけは外しているのは恐らく狙ってだらう。俺はこの期に及んでまだ手加減されている。

まったく、腹が立つ。

一定量のダメージを越え、俺は私へと変化する。

伊吹の目が一瞬剥かれ、殴打が止まった隙に後退。すぐに冷静さを取り戻す。驚いたのは女性化か、それとも背の翼にか。

「なるほど……それがアンタの本性ってことかい」

「……そんなこと、どうでもいいでしょう」

「そうさね。重要なのはアンタがさっきより強くなっただって事くらいさ……」

再び、正面衝突。拮抗はするが、さきほどより体格差が出てしまい、後退の間なく伊吹が懐に入り込んでくる。その拳を私の腹に、今度は手加減すらなく。

「ぐうっ……」

痛みに呻いたのは、伊吹だった。私は手の一本も動かしてなければ反撃をしたわけではない。伊吹の拳は私の腹に確実に決まっている。

「 ”能力は魂に内包される” 」

「 !? なにを 」

「なら、もしも二つの魂が重なったらどうなるのか……」

根底に存在する舞風の魂。そこに重ねられた　　と言う魂。封印が解放され、混じり合い、それでも魂が元の形として内包されているのだとしたら、それは二つ分の魂の力を持っていることに他ならない。

故に

「譲渡と譲受を操る程度の能力」。それが今の私の能力。ペイン・リフレクト。私の痛みをプレゼントするわ、伊吹萃香」

「　　なんて性質の悪い能力だよそれ!!」

「私の痛みは貴女の物。貴女の痛みも貴女の物よ!!」

何度陰湿な能力と言われたことか。この身の痛みは全て相手に返る。痛覚のない相手には意味をなさず、相手が人型でなくとも意味はない。そして痛みは返せど、壊れるのは私の体。メリットだけがある訳ではない。

しかし、再生ができ、”封を操る程度の能力”まで備えたこの体に普通の攻撃はほぼ無意味である。

「これから一気に挽回させてもらおう!!」
「ッ!!　ちいっ!!」

迫る拳。それを肘で受けられ、私の拳が砕けた。しかし顔をしかめ

るのは向うだ。

その隙にもう片腕に集めていた妖力を至近距離で爆発させ、自分もろとも自爆する。

「つつうー！ やってくれるじゃないかー！」

私の体と伊吹の体の痛みを同時に与える。中々に答えたようで、彼女の体にもようやくやくそれらしいダメージが見えてきた。

と、今まで黙って観戦を決め込んでいた鬼達がざわめき始める。鬼だけではない、烏天狗も白狼天狗も。

「お前達ー！！ 絶対に手を出すなよー！！ これは私の戦いだー！！」

そう周りに吼え、今にも飛び出しそうになった鬼達を見て、やはり本当に頭なんだと感心する。僅かに口元が歪んだ。

ほんの少し気を抜いた隙に伊吹がこちらに肉薄する。こいつの能力は体重やらの物も霧散できるのかもしれない。それゆえの高速移動か。

「つつうー！！ やりにくいね！ 全くー！！」

「皆そう言っわ。でもね、私だってこれだけで生きてきたんじゃないー！！」

拳を流す。しかし完全には消しきれず、わき腹を掠める。やや冷や汗が出たが、僅かに空いた隙間に針を通す勢いで掌底を放つ。込めた妖力は先程の比では無い。

「じうれつてん剛烈掌！！」

「グツ！！」

手応えあり。今のは確実に入った。それを期に一気に攻め上げる。

それからはお互いの削り合い。いや、伊吹だけは痛みで精神の方も削られているだろう。だが私も無傷ではない。痛みを返すには当然ロスタイムが存在する。僅かな一瞬だが、それでも痛みは焼けるような痛みは精神を蝕む。

こんな痛いだけの戦いはもう終わりでいい。

「……お互い消耗戦。長引かせるのは私あんまり好きじゃないの、だから」

「……次で決まり、ってことかい？ いいよ。自分だけ痛い思いする戦いってのも腹が立つ。その嫌な力もやめてくれるんだろ？」

「勿論。一発勝負ならこれは無粋なだけ。本気で、行くわ」

妖力を集中し始める。面倒ごとが嫌いな私がここまでやったのだ、もう終わり。

後方に出現する反星陣。それによって力は増幅され、反星陣はその数を増やしていく。合計数は、六。

対する伊吹もその全身に力を込め、こちらに構えている。私の一撃を受け止めるつもりだ。確かに一発勝負には違いないし、それならそれでこちらは最大まで力を込めさせてもらうだけだ。

「行くよ伊吹。これが私の」

「来な！ ミッシング」

同時に、そしてお互い目が合い、口元に笑みが浮かぶ。

「摩訶、天象砲っ！！」

「パワーーーーーッ！！」

収束された妖力と魔力。両方を練り合わせ、反星陣と言う砲台から一気に発射される六本の光線は伊吹の正面にて交わり、一撃の力を六倍にのし上げる。

対する伊吹は能力か、巨大化し、真正面からそれを受け止める。一瞬目を剥いたが、同時複数展開した反星陣の制御が離れたりしないように一層集中する。

こちらの魔力のほとんどと妖力の大半を注ぎこんだ甲斐あったか、だんだんと伊吹の体を押していく。しかし、力がまだ足りない。

もう一押し　その力がもう残されていない。

まったく、大した鬼だ。流石酒吞童子である。

まあ、アイツには、遠く及ばないが。

○
○

「なによ、これ……」

眼前で起きていた出来事に知らずと言葉は零れていた。

今の今まで山の警護にあたっていたが、侵入者が鬼神様のところに進入したとの情報あつて高速で戻ってみれば、途中凄まじい力を感じた。

それが今山に侵入者だと気付いた時、足が竦んだ。自分も烏天狗としてそれなりの生を生きてきた。烏天狗の中では飛びぬけた才能を持っており、自分はそれなりに強いと自信を持って言える。

だが違う。それは何か違う物だ。そう、感じる。

気付けばそれは消え、まるで掘削するような破壊音が山に響いた。気配が消えて尚躊躇する。それでも興味が勝り、鬼神の元へ行くと。

相対しているのは小柄な、萃香様と差して変わらない程小さな妖怪だった。お互いが真正面からぶつかり合い、力の削り合いをしていた。正直、正気を疑った。体の作りからして普通の妖怪と異なる鬼と、正面から衝突するなんて愚かな事である。

しかし、驚いたことに負けず劣らず、戦うことが出来ていたのだ。そして、ある時を経て状況は一変する。

名も知らぬ妖怪が黒い翼を持つ女性。烏天狗に姿を変えた。自分よりも年上、とは言っても見た目は当てにならない。その身の力は恐らく私より上だが、大天狗様と拮抗する程度。鬼に、鬼神様には叶うまい実力。

しかし、果敢に前に出る。私はそれを上から見ていることしか出来なかった。

相対する二人が何事かを口にしたかと思うと距離を取り、力を溜め始めた。その時、その力は確かに大天狗様を越えていた。

収束する力、放たれる光線は眩く、迂闊にも目を閉じそうになった。応戦する萃香様と光線とが拮抗し、その時間はとてつもなく長く感じた。それが終わる頃には私も気が抜け、ひゆるひゆると大地に降り立っていた。

「　　ったく。なるほど。妖怪の山の頭領も伊達じゃない……わよね。当然」

「そうさ。私は伊吹萃香。鬼神代理。そう簡単に皆の間で跪く前にもいかないよ」

「それもそっか……ま、気も晴れたし、よしとするよ」

「そうするんだね。舞風……私の勝ちだ」

烏天狗の女性が、膝を折った。

それと同時に歓声が沸く。伊吹萃香を讃える声。しかし当の本人はそれに耳を貸す様子もなく、膝を折った舞風と言う烏天狗に歩み寄る。小さな体で見下ろすかと思いきや、手を差し伸べたことでは騒然とした。

侵入者に対してすることでもないはずであろう。そんなことを平然と、当たり前のように。

「
「
「
「

何事かを口にし、談話していた。この距離からは聞こえない。私は能力を使い、風を操ってその音を自分の耳元まで届ける。盗み聞き、とは言わないだろう。隠している様子も無いようだし。

「ま、流石八雲の縁者だけあるね。まさか力を萃めないと止められないなんて」

「でも、貴女本気じゃないでしょう？　なら私の負けよ。妖力もほとんど使い切ってしまったしね」

「楽しかったよ。またやろう」

「ごめん。それは嫌。次は紫でも誘って頂戴」

話の大半は意味も分からず、半ば聞き流すようだったが、一番初め、八雲の縁者と言う部分は抜け出せない。

『八雲 紫』、幻想郷の管理者。その縁者と言つことは烏天狗の身でありながら普通の存在ではないのだらう。思わず身が震えた。こんなにも強い、鬼神様と拮抗するような烏天狗が存在したのか。興味は尽きなかった。周りの者はもっと別のことに捕らわれているようだったが、

それから萃香様の命で宴会が始まった。侵入者、と言つよりは力の試し合いであったことを皆に知らせ、騒ぎは収束した。

○ ○

「私は飲まない。そんなの絶対飲まない」

「そんな事言わないで、諦めな。鬼の宴会つてのはこういうことだよ」

「それが身に染みてるからこそ嫌なのよ」

夜、もう夜である。宴会を始めたときはまだ日が出ていたはずなのに。止まず酒を勧めてくる伊吹をなんとか避けながら私はちびちびと飲んでいく。元々酒はあまり飲めたもので無いのだ。

「お、いたいた」

「ん？ 貴女は？」

こちらに声をかけてきたのは一本角の鬼。なにやら体操着のような物を上にまとい、下はスカートを着ている。私に言わせれば違和感の塊である。

その鬼が杯片手にけらけらと笑いながらこちらを見てくる。

「星熊勇儀。萃香とは昔からの付き合いだよ」

「そう。ならもう少しやることを自重してくれるよう言ってくれないかしら」

「あれが萃香なりの付き合いなのさ。諦めな」

「……ままならないわねえ」

ため息をつく。何かある度にこんな陥れがあるのは正直勘弁願いたいのだが。

気付けば周りの鬼や大天狗の視線を集めていることに気付く。まるで様子をうかがっているようだが、気にする必要も無いだろう。

「そうそう。アンタ私と戦わな」

「遠慮しとくわ」

「連れないねえ。確かに今すぐは無理かもしれないけど」

鬼と言うのは基本的に好戦的だから困る。その力が自慢の一つだからと言って付き合わされるこちらはたまった物ではない。正々堂々過ぎて断るのも気が引ける場合があるし。

酒をちびりと飲み、一息つく。

「アンタって烏天狗なのかい？」

「貴女にはどう見える？」

「烏天狗」

「でしようね……別になんだっていいでしよう？」

自らの正体ほど、明かしてメリットがないものも無い。恐らく、八雲は気付いたか。でもそれ以外で名だけ知っているのは妹紅か永琳達、それと慧音くらいだろう。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「ん？」

「……烏天狗かい。何か用か？」

話しかけてきたのは烏天狗の少女。年はまだ若そうで、その顔は見るからに作った笑顔が張り付いている。星熊はやや水を差されたことが気に入らないのか睨んでいる。それにややびくびくしながらも、私を見た。

「貴女を気高き烏天狗とお見受けて、聞きたいことがあります」

「……ま、質問によるわ。なに？」

実際は烏天狗と言うわけでもないのだけど、と内心苦笑いしながら安受け合います。

すると目を輝かせながら少女は顔を寄せ、尋ねてきた。

「どうしてそんなにもお強いのですか？」

「ん。それを聞いてどうするんだい？」

少女の顔に歪みは無い。先程の作り笑顔でもない。至極自然に、それは興味があつて尋ねてきている、と言うことがまるで顔に出ている。

何故か。その姿が と被った。

「え えつと、今後の参考にさせていただこうかな、と」

「別に、無駄に歳だけは食つてるだけよ。当然修行はしたけどね」

「修行！？ どんなですか!？」

「それは秘密よ。歳もね。貴女、名前は？」

「あ、あややや。失礼しました。目上の方に名も名乗らないなんて」

少女は姿勢を正し、笑顔のままに口を開く。

「射命丸文と申します。まだまだ未熟者の烏天狗です」

「そう、文。貴女は、私の若い頃に似ている。強く、誇り高い烏天狗に育つことでしょう」

「あ、ありがとうございます」

「しかし、同時にその力の業を背負うことになる。それに負けぬよう、頑張りなさい」

「は、はい!!」

少女、射命丸文を名で呼んだことに深い理由はない。気付いた時には癖である姓ではなくそう呼んでいた。単に射命丸と言うことが長

く感じたのか、それとも

「ま、いつか」

考えるのも長々しい。どうせ休息が終わればまた旅に出るのだ。深く考えるのは、また今度でいい。

遠くで聞こえる伊吹の自分を呼ぶ声にため息をつき、また酒に口をつけた。

舞風と妖山（後書き）

今回は萃香メインの物語でした。勘違いしないでください。俺の中の萃香は現舞風にてこずる様な子ではございません。

あくまで、そうあくまで、力を分散させていたために全力でなかっただけです。ペイン・リフレクト（笑）のせいで全力を出し切れなかったという理由もあります。

それと、そろそろ登場人物を妖怪として訳すことを諦めました。妖怪を他人と言ったり、何人とか言ったりしてますが、他の人はどうなんだろう？　そう言えば意識して見ていなかった。

あと、これはこちらからの勝手なお願いなのですが、どなたか本主人公を絵にしてくださいさる絵師さんはいらっしやらないでしょうか？　ないならなくて諦めますが、募集しています。

次回、恐らくシリアス多めになると思います。では

魔女と二人（前書き）

くそ、遅れた一時間以上遅れた。

今回は外伝章のようなもの、とってお読みください。未だ課題が残る状態での投稿。

最早時系列が曖昧になって自分でも今何年くらいか分からない。

さて、どうするか……

今回は非常にシリアス、と言うより淡泊？

魔女と二人

随分と長い生を生きた物だ、と俺はしみじみと思っていた。

ただ、もう地面にはいつくばって動くことも出来ないが。

「は、ははは。流石に、あの数はやばかったかなあ……」

ようやく、念願の日本に来たと言っのに、こつもあつさり妖怪なんぞにやられてしまうとは。最初はよかった。問題はその後。バカス力撃って魔力はなくなりかけ、それでも残りでなんとか撃破したかと思えばもう動くこともままならない。

お気に入りの服が台無しだ。それに杖も。これじゃ魔女なんて名乗れやしない。それでも折れた杖は抱きしめるようにして手に握られている。

まだ、百年も生きてはいないけど、随分長かった。志半ばなことが非常に悔やまれる。

朦朧とした視界の中、獣のような妖怪が茂みから姿を現したのが見えた。恐らく周りの妖怪の血の匂いに誘われてきたのだろう。

魔力も尽き、体は動かない。ここで終わりだ。俺は。

「……死にたくねえな」

ぼそりと呟けど誰にも届かない。届いたところで誰が助けしてくれるわけでもなかるうに。

せめて　　せめて幻想郷を見るだけでも、俺は

瞬間、辺りに閃光が走る。

何が起きたか分からないまま、最後に誰かの小さな背中を見た後、気を失った。

目が覚めた時、一番初めに考えたのはここが死後の世界なのか、と
言うことだった。

見えたのは、まるで優しげな、そう。天使のような女性。

「目が覚めた？」

「……ここは？」

「ただの山の中の小屋よ。あの子が貴女を運び込んできたときはビツクリしたもの」

「山の、小屋？」

なるほど、よく見ればそこは古めかしい小屋の内装である。それも随分と。

重い体を起こし、礼を言おうとするが、鋭い痛みが体の至る所から走る。普段運動していないだけに筋肉痛まで相まっている。

572

「無理なさらず。ここは安全よ」

「本当、か？」

「ええ、なんたってあの子と私がいるんだから」

女性がニコリと笑う。その美しさに思わず見惚れる。和服を纏い、それを含め、大和撫子と言っ言葉がまるで似合い、髪こそ白いが、それもまた透き通るように美しい。

「ところで貴女、この地域の人じゃないわよね？ 何処から？」

「ッ！？ ……異国から。こっちの国に興味があつて」

これを言うと大概いい反応をもらえない。この時期はまだ日本人は異国の存在を快く思っておらず、それがまともになるのはどれだけ先の出来事だったか。

しかし、その女性はやや驚いた様子を見せると、あらあらとまるで子供を見るような優しい目でこちらを見た。

「それではさぞ大変な目にあっただしょうね。よく妖怪に狙われたんじゃない？」

「どうしてそれを？」

確かにこちらで妖怪に襲われる事は非常に多かった。向こうでだってここまで襲われたことはなかった。何か理由があったとでも言うのだろうか？

「皆貴女の持つ魔力に誘われているのよ。こっちの妖怪達は魔力や霊力を持った存在に敏感なもの」

「そ、そうだったのか……ってどうして私が魔力を持つてることが？」

驚いて半ば咄嗟にたずねていた。その質問に疑問を持ったのか女性が首を傾げる。

「どうしてって、私も魔力を持つてるからだけど、分からない？」
「え、じゃ、じゃあ、貴女も魔女？」
「魔女じゃないわ。それは西洋の魔法使いを指すものでしょ？ 私
はそれだけじゃないもの」

やや不思議そうに返答したが、なにやら俺の頭の中はこんがらがっ
ている。

と、小屋の戸が唐突に開き、小さな影が日の光に照らされる。それ
は少年だった。

「おかえりなさい。どうだった？」

「ただいま！ 取れたのは魚ぐらいだったぜ。残念。その子は目
を覚ましたみたいだな」

「……お前は？」

その少年は白いヒラヒラとした衣を纏っていた。しかし裾が二の腕
辺りで終わり、無骨な腕輪が両腕から覗いている。腰には不恰好な
年代物の剣一本。その顔立ちは見ただけでは男女の見分けがつか
ないが、恐らく男だろうと思う。

その口元には不敵な笑みが浮かんでおり、何処か胡散臭さを滲ませ
ている。

「通りすがりの旅人さ。詳しい話は飯の途中聞くとして、これ頼ん
でいいか？」

「ええ、さつと炙るくらいでいいですよね？」

「ああ、焦がすなよ？」

「もう、貴方じゃなんですから」

何かなんだか分からないうちに二人はテキパキと動き出し、自ずと話は後に回される事になった。

部屋の中央に火が起こされ、そこには魚が串に刺さって置かれている。しかしそれが刺してあるのは焼くためでなく、保温である。

「ふふ、これが私の魔法です」

「……………」

魚は既に女性が起こした魔法でなんともいい感じにこんがりと焼け

た状態。よくもまあ魔法をこのようなことに使おうと思った物だと感心する。正に微量の火調整。職人技である。

「さて、それじゃまずは自己紹介といきますか。俺は」

「私の事はアキ、と呼んでください。未だ修行中の魔法使いです」

「おいこら」

「なんですか？ 貴女、この前私に自分がやられて嫌なことは他人にしないっていいましたよね？ ならいいじゃないですか」

「……ごめんなさい」

お前が先にやったのかよ！！ って言うか謝るのかよ！！ と内心でツッコミが飛ぶ。女性、アキさんもなにやら雪辱を晴らしたかのように清らしい顔をしている。

「改めて。俺は舞風。妖怪だ。とあ」

「妖怪!？」

「待て待て待て待て。俺は悪い妖怪じゃないよー。いい妖怪よー。人なんか食べないよー」

舞風、と名乗った妖怪は冷や汗を浮かべながら手をブンブンと振るう。確かにアキさんと一緒にいる時点で悪い妖怪、と言うわけでもないことは推測できる。

警戒を解き、つい咄嗟で探った懐に杖が無い事に気付く。

「そういえば俺の杖は……」

「あれ？ 無視？ 無視ですか？」

「残念だけど、あれの修復は難しいと思うわよ。かなり使い込まれてきたようだから」

「そう、でしたか」

残念だと思いながらため息をつく。それなりに愛着があったのだけども。壊れたなら仕方が無い。近いうちに代用品でも捜そう。

ひとまずその話を切り、二人に向き直る。

「俺はベリーウエル。ベリーウエル・ガラーン。魔女だ」

「魔女だ。なんつー割には一人称『俺』なんだな」

「ほっとけ。癖だ」

「そう。ベリーウエルちゃん。長いからベリーちゃんって呼ぶわね」

「え、あの。出来ればちゃんは止めて欲しいんですけど。アキさん？」

「私の事はアキ、でいいのよ？ ベリーちゃん」

「諦める。俺も時々舞ちゃんなんて言われるくらいだからな。自分含め名の半分だけな愛称が好きらしい」

舞風はやれやれというように肩を竦めていた。こいつはこいつなりに妥協してきたんだろう、と思った。同情はしないが。

「自己紹介云々もともかく、魚でも食え。取れたて新鮮だぜ？」

「……これ、どうやって取ったんだ？」

「妖怪を餌にして」

「え？」

「え？」

なにそれ怖い、と言いつうになつたが。その前にアキさんが舞風の頭を叩いたので言わず終いとなつてしまった。

……それにしても、妖怪を餌にした魚は食つても大丈夫なのだろうか？

「なるほど、異国の魔女か。通りで見ない服だと思った」

「すごい物ね。向こうでは皆そついつの着てるの？」

「え、いや、これは自作なんだけど」

食後、俺は出来る限りの質問に答えていた。多分向こうからすれば

雑談なんだろうが、文化が違う今何処に地雷があるのかも分からず、ついつい尻込んでしまう。

それにしても、俺の服はそんなに変だろうか？ 確かに派手だという意識はある。色は赤と黒のやや毒々しく、模様はベリーの果実等をを参考にしたウィッチドレスなのだが。

「お前、派手だから狙われたんじゃないか？」

「え？ 嘘、そんなバカな……」

「でも、確かに目立つわよねえ」

「そ、そんな……自慢の一張羅なのに」

それも妖怪の襲撃でボロボロなのだが。今はアキさんの着物を借りて重ねている状態だ。

「それはそれとして、わざわざこんな辺境の島国まで何の用だ？」

「……ちよつと興味があつて」

「魔女が興味を示すほどの物がこの国にあるとは思えないけどな」

舞風が口元を歪めながらこちらを見返す。明らかにこちらを疑つて、と言つよりは目的を引き出そうとしている。

恐らく言つまで確実な安全が保証されることは無いだろう。アキさんはどうか分からないが。俺は諦め、本当の目的を口にする。

「俺が見たいのは”幻想郷”。とある妖怪が作り出したという理想郷。それを見てみたいだけだ」

それを聞いた瞬間、明らかに警戒が緩んだ。と言うよりまるであ？ と言う言葉を口にしそうなほど眉をひそめている。

「幻想郷って、あの隙間妖怪が作ったって言う？」

「！ 知ってるんですか！？」

アキさんの口から零れた言葉。それに思わず聞き返す。これは思わぬ情報を得る事が出来そうだ。正直に言ってみる物だと自分を褒めた。

「私の最終目的地も幻想郷よ。彼が幻想郷に行ったことがあるらしいからって」

「おいおい、アキ。簡単にはらすなよ」

「本当か！？ 幻想郷に行った事があるのか！？」

「うおうおうおうおう！！ 落ち着け！ とりあえず俺の襟を離せ！！！」

つい興奮して気付けば舞風の襟を掴んだがぐくぐと揺さぶっていた。しかし、それほど俺にとっては重要なことなのである。

「まったく。幻想郷に何の用があるのか知らないけど、別に大した

物なんて無いぞ？ 人里に妖怪の山、それに迷いの森くらい」

「そんなんじゃない！！ 会ってみたいんだ！！ 八雲紫に！！」

「アレにい？ 気でも狂ったか？ 魔女とは言えあんなのに勝負挑んだら一瞬で隙間送りだぞ？」

「何で勝負挑むこと前提なんだよ！？ 俺はただ会って話が見たいだけだ！！」

八雲紫。それは俺にとって畏怖の象徴。そして尊敬できる存在である。

「妖怪でありながら”境界を操る程度の能力”と言う世界に干渉できる能力ちからを持ち、幻想郷と言う世界を作り上げた存在。一度は会うことを夢見た存在。」

しかし、俺の力説も舞風は悩ましげな顔をするだけである

「話が見たいって、アイツがそう簡単に応じるかね？」

「……お前、八雲紫と面識があるのか？」

「ん？ 一応な。近いうちに幻想郷には引越すつもりだったし」

「紹介してくださいっ！！」

舞風に対し土下座をする。先程まではずいぶん偉そうな子供だと思っていたが、もしかしたら凄い奴なのかもしれない。

でも、”原作”にはいなかったよな。舞風なんて。

「無茶言つな。あの気まぐれ妖怪を呼び出すだけでどれだけ大変なことか。最近は式に任せっぱなしで随分だらけてるみたいだし」

「ら……式神がいるのか」

「ああ。あいつ、玉藻前なんて式神にしてどうするんだろうな」

「玉藻前っ」

日本三大悪妖怪に認定される一体、玉藻前の悪名は有名だ。出来れば彼女にも会ってみたい。

「ま、今更俺はお払い箱だろう。旅を始めて随分長い間会ってないしな」

「……そんな」

「ま、幻想郷に行きたきゃ日本を回るんだな」

「二人も幻想郷目指してるんじゃない」

「それが舞風ちゃんったら何処にあるか忘れちゃったんだって。だから旅ついでに捜してるのよ」

期待が脆く崩れ去った。それなりに舞い上がっていたから落ちっぶりも半端じゃない。

「ま、見たところそっちも年取らないみたいだし、気長に捜しなつて。その内見つかるさ。幻想郷はなんだって受け入れるからな」

「……それって……」

「あいつが口癖みたいに言ってたよ。なんでも受け入れるって。その代わり害なすものには、ってな」

幻想郷は全てを受け入れる、か。

「……なあ、俺もお前たちの旅に着いて行ってもいいかな？」

「どっという心境の」

「いいわよ、歓迎するわ」

「……おい」

「いいじゃない。旅は人が多いほど楽しいわ」

「……ま、いいけどよ。ただし！一緒に行動する以上は勝手な行動は許さないからな！」

「ああ！ありがとうー！」

そうして、俺ことベリーウェルは舞風たちと旅をすることになった。

○
○

時間の経過とはさぞ早い物である。たったの一週間だが、今までに無いほど早く、濃い一週間を送った。

「ベリーちゃん。火お願いね」
「分かりました。アキさん」

いつもと同じ、ボロ小屋にて俺は中央に火を起こす。それはいつもと同じ小屋だが、移動していないわけではない。備え付けられた小屋を転移結界を用いて呼び出す、舞風の能力である。

初めはそれに随分と驚いて、その正体を問い詰めようとした。その返答はにこつと笑って「自分で考えろ」の一言。数秒後にアキさん

のネタばらしがあるのは毎度の事となっている。

”封を操る程度の能力”、それが舞風の持つ能力である。主に結界に関わることに万能に作用し、防御等はござれだそうだ。恐らく八雲紫と面識があるのはこの能力のおかげなのだろうと思う。

この一週間の結論、舞風は俺より”弱い”。妖怪にしては魔力を持っているが、妖力と合計しても俺の総合量には至らないだろう。アキさんはいまいちその力量が把握できないが、多分俺と同じ、もしくはそれ以上と見た。

「魚、今日も大量だぜ」

「おかえりなさい。舞風ちゃん」

「ちゃんは止めるって。少なくとも”今”は」

「……？」

まあ、対して意味のあることでも無いだろう。網に入った大量の魚を見て、能力を羨ましいと思う。舞風は能力を使って魚を掬い上げている。

俺に能力は”無い”。そもそも能力持ちは稀である。ただ、魔法を使えることだけを考えれば俺は”魔法を扱える程度の能力”を所持していることになるが、それは自分の手で身につけたものだ。生来のものとは意味合いが違う。

正直、なんでコイツが、という気にもなってくる。

「それにしても、いくら近くが川とは言え、このところ魚ばかりだな」

「文句を言っってはダメよ？ 魚だって皆生きてたのだから。感謝していただかなきゃ」

「今更誰に言ってるんだっての。分かってるよそのくらい」

アキさんもどうしてそこまで実力が下の相手に好意的感情が持てるのか。

いや、確かに俺の場合は助けしてくれた恩などがあるが、アキさんは何故？

「舞風ちゃんと出会った時の事？ どうしてそんなことを？」

気になった俺は舞風が外に散歩に出かけた合間に尋ねてみることにした。流石に腹が立たないかなんて聞けないので、外堀を埋めるように聞いていく。

「どういう経緯で幻想郷に案内してもらったことになったのか」

「……ふふ。それじゃ私は舞風ちゃんと出会う前から幻想郷に行くうとしたみたいね」

「違うんですか？」

アキさんはこくりと小さく頷いた。その表情は曇ることなく、俺の質問に答えてくれる。

「あの子と会ったのは数年前ね。その時の私にはどうしても決着をつけなきゃならない相手がいたの。それを手伝ってくれたのが舞風ちゃん。彼女がいなかったらどうなっていたことが」

「決着を……うん？」

「どうかしたの？ ベリーちゃん」

あれ？ と思つた。何かおかしかった気がする。今の会話の中に何か違和感を感じた。

呆けているのも失礼だと思い、なんでもないと首を振る。なるほど、なんらかのきっかけがあつたならあれだけの信頼を寄せる理由も分かる。あいつの能力はサポートに非常に適している。

「それで決着を果たして行き場の無くした私を誘ってくれたのもあの子。たまに変な事言うけど、いい子よ」

「そう……ですか」

「そろそろ夜も遅いわね……危険だろうし、舞風ちゃんを呼んできてくれないかしら」

「はい。それじゃ行つて来ます」

その言葉を聞いて、俺は小屋を出た。舞風は基本開けた場所で空を見上げているときが多い。恐らく近くで夜空でも見上げているだろう。

予想は当たり。小屋を出て少しのところの原っぱに舞風は腰掛けていた。その目はやはり上を向いている。こちらの接近に気付いたのか、一瞥すると再び視線を上に戻し、手招きをした。

訝しみながらも俺は近寄り、舞風の傍に立った。

「旅には慣れたか？」

「おかげ様で、と言いたいところだけど旅自体は前からしてるんだとつくに慣れたよ」

「そっか。ま、それならいいけどな」

舞風はこちらを見ることなく、その口だけを開いた。その視線はやはり夜空　　と言つより欠けた月に釘付けになっている。

「　　なあ、聞いていいか？」

「？ なんだよ」

態度を今までとまるで改めて舞風は口を開いた。いつの間にか俺も空に釘付けになっていたが、ふと舞風を見るとその目はこちらを向いていた。

「お前、異国の人間の割にこの国の言葉に詳しいみたいだけど、何処で習ったんだ？」

「……独学だよ。書物で」

「会った日にした土下座も、書物か？」

「……それがどうしたって言うんだ」

舞風の目はぶれることなくこちらを捉えている。それが普段の無駄に活発な様子と差がありすぎて、何処か不気味に感じて仕方がなかった。

「おかしいんだよ。それらはまだいい、けどどうしてお前が八雲紫を知っている？ 式神の玉藻前を知っている？」

「人に聞いたから……」

「嘘だな。なによりお前、俺が式神のことを言い出したときに言い掛けた言葉、忘れて無いぞ？ ら、ってな」

「……何が言いたい」

「お前、八雲の式の名前を知ってるんだろ？」

核心を突かれた……そんな些細なミスが、この場で命取りになるな

んで。顔の感情が隠せない。驚きが出る。

「玉藻前の名こそ知っていて不自然じゃないけど。式神になって名を変えてからあいつの本名を知るものはほとんどいないはずなんだよ」

「じゃあ、幻想郷に連れて行ってくれないのか？」

「それは知っていると取っても？ ……ま、いいんだよ。お前が何しようが八雲紫には傷を負わせることも出来ないだろうし、式神に至っても勝つことは出来ないだろう。それを聞きだしたかっただけだ。不可思議なことが大概能力で解決できるのがこの世界だからな」

「……怒らないのか？」

「何に？ どう？ 別にいきなり襲われた訳でもあるまいに、怒る理由も無いだろう」

「……………」

変な奴だ。飄々として掴みどころが無い。そもそも目的が分からな
い、がこちらを害する様子も見られない。しかし、もしも幻想郷の
出身者ならば、他の者を無駄に襲わない奴がいてもおかしくは無い
んじゃないだろうか？

ふと唐突に、そう思った。

「 それに、今は他のお相手がいるみたいだな」
「 なに？」

それを合図にするかのように辺りの草むらが揺れ始める。風ではな

い。あまりにも不自然、そしてその動きは全方位。
何者かに囲まれている。

「めんどくさいことすな。そこまで臆病な種族じゃないだろうが、
お前は」

「 気付いているならば仕方が無い」

舞風の一言で風の揺れは収まり。急激に一点に集中する力。姿を現したそれは頭に巨大な角を持っている。

「まさか、お、鬼？」

「こんなところに一人、野良鬼か？」

「おま、そんなはずないだろう！！」

鬼、それは日本の中でも上位、と言うよりほぼトップを独走する恐怖の象徴。何故こんなところにいるのか。それを思考する前に、その口から目的が飛び出した。

「その人間を寄越せ。貴様にはもったいない物だ」

「

「ん？ ベリーの何か？ そりゃなんで？」

「食らじ」

地の底から聞こえるような、そんな風に錯覚するような声。すぐ近くに鬼が、俺を食らおうとして立っている。今までに無い危機に、いや絶望に、足が震える。

魔女の肉は妖怪にとってその格を上げるほどの極上なエサである。と言う事をアキさんは言っていた。霊力、魔力が人体に好影響を及ぼし、結果非常によい糧になるのだろうという考察も。

相手は鬼。あの鬼だ。見て分かる相手と自分の力の差。すぐ傍に死を感じている。

「ん〜？ そんなことしたら俺がアキに殺されちまうよ。お引取り願えない？」

「ならば俺に勝ってみせる。俺が勝てばそいつはもらっ
「うげえ。ダメだこりゃ。これだから鬼ってやなのよ」

鬼から視線を逸らせない。故に舞風がどのような形相で、その言葉を口に出しているか理解できない。

だが、今この場においてこれは舞風において都合の良いことなのでは無いだろうか？ 怪しい、俺と言う存在を消すことが出来る選択肢があるのだ。それが怖くてならない。

まだ一週間しか共に過ごしておらず、舞風のことを何も知らない。我ながら自身の保身ばかりを考えることを嫌になるが、それでも怖いものは怖い。

「そもそも、俺みたいな弱い存在に交渉を持ちかける意味って、なんがある？ ほしいなら奪い取ればいいんじゃないの？」

「……強者たる物、弱者に哀れみをもってやるのも当然だ」

「うわ、やな感じ。お前絶対『鬼の頂点になる』とかほざくタイプだろ」

「……黙って聞いてやれば小生意気な口を、ガキが！！」

凄まじい形相で拳を振りかぶるその姿は正に鬼。喉の奥から飛び出しそうになる悲鳴を抑えられなかった。

しかし、それはなんなく止められる。その空間には何も無い。何も無いのに。停止する。

「血の気が多いぞ子鬼さん。個人的には鬼とやりあうのは色々嫌いなんだけど」

舞風が腰の剣に手を当てる。胡散臭げな笑みを、そして溢れんばかりの苛立ちをその目に込めて。

「柄の悪い子供を更正するのも大人の役目。俺は伊吹鬼みたいに同族に優しくくないぞ？」

小柄な体なのに、まるで鬼よりも巨大に錯覚するほどの圧力。舞風は一步踏み出した。

圧倒的である。

圧倒されているのは鬼、圧倒しているのは舞風。まるで鬼が子供のようにいなされ、舞風は全ての攻撃を捌いている。

よくよく見れば鬼の攻撃は非常に単調だ。妖力とガタイの大きさは騙されたが、まるで素人の力任せの戦い方。それは硬い物を砕けど、素早い物に触れることが出来ない。

「ふっ!!」

「!!」

また一太刀、鬼の体に斬撃が繰り出される。そのどれも鬼の強靱な体を断つには至らないが、確実にダメージを与えている。正に蝶の様に舞い、蜂の様に刺すを体現したような攻撃法。

そして、この場唯一の足手まといとも言える俺は舞風の結界によって守られている。その攻防に俺は目を奪われていた。

「ちょこまかとおつ、貴様ああ!!」

「はいはい子鬼子鬼。口ほどにもねえとは正にこのことだ」

「つく、当たりさえ。当たりさえすれば」

「そう？ 試してみる？」

舞風が動きを止め、地に足をつく。声を聞いたか。それとも反射か。鬼の拳が真つ直ぐに舞風を捉え、その顔に炸裂……はしない。

軽々しく、舞風の腕で止められた。あの強靱な鬼の拳がだ。

「なんだ。本当に口ほどにないな。こんなんで弱者を哀れむとか言ってるんだから笑いしか出てこないよな」

「な、何故。まさか貴様、鬼だとも言うのか!？」

「俺に角が生えてるように見えるのか？ だとしたら相当お前の目は腐ってるな」

舞風は余裕に溢れている。相手が鬼にも関わらず、圧倒している。力ではない、技を以って。

「今退くなら見逃してもいいけど、返答は如何に？」

「……誰がお前のような雑魚に」

「わああ。こんなにも頭がファンタジーな鬼も久々に見たぜ。じゃ、後悔してろ?」

舞風が掌をそれに向ける。鬼は圧倒的に不利なのに畏怖も後悔も抱いていない。それは自らの命をベットにして己の敗北を悟ったなら、まだ俺はそいつを誇り高い鬼と認識できたはずだ。

しかし、その口元は歪んだ。狂笑が浮かんでいた。

「っむう!?!」

突如、背後からの衝撃。組み伏せられるように大地に顔を埋める。なんとか首を捻り、押し倒した当人を見る。

それもまた、鬼であった。

「……おいおい。もう一人いたのかよ」

「貴様のような奴に対してあるまじき行為だが、敗北こそ耐え難い。故に貴様らはここで死ね」

「分かってるならやるなよっ」と

舞風がその手の剣を捨てた。武装を解除した。そのまま手を上げた舞風の顔に叩き込まれる鬼の拳。その体が飛んだ。

ぐるんぐるんと何回転かした後、うつ伏せに落ちる。

「おい、そいつは抑えているよ」

「分かった。さっさと終わらせろよ」

「まあ待て。これまでのお礼をたっぷりしてやらなきゃ気がすまん」

「」

何と言うことだろうか。自分のせいでこうまで戦況が反転してしま
うなんて。不甲斐なかった。こんなにも無力を呪ったことも無い。

「あいたたた……いきなり顔って、一生門の傷でもついたらどうし
て」

「舞風!？」

のっそりと立ち上がろうとした舞風の顔面に、顔面だけに拳を叩き
こんでいる。口元から声が零れた。

殴打の音。延々と。目の前でなぶり続けられる。そしてその様をた
だ見続けさせられる。自責に駆られて心が壊れそうだ。

「あいだ〜……お前言ったことがまるで違うな」

「口の減らない奴め……その余裕の顔が歪むのが楽しみだ」

「何を」

鬼が舞風の腕を掴む。両手で掴む。端から見ればまるで万力で締め

付けるようなメキメキと言う嫌な音が鳴る。今にも耳を塞ぎたくないような音が聞こえる。

もげた。いや、捻じ切れた。

「
」

不甲斐ない。不甲斐なさ過ぎる。どうしてこうなった？ どうしてこんなことになってしまった？

俺だ。俺が何も出来ずまんまと捕まってしまったから。舞風が俺より弱いなんてどの口が言った？ そんな考えはもう頭の中には存在しない。

腕が切れようがその顔から余裕の笑みが消えることは無い。しかし心なしかその顔は苦痛に歪んでいるように見えてくる。

俺は何をしている？

「
」

ドレスのポケットに入れておいたソレを取る。それは俺が残してお

いた唯一の切り札。

触ればそれでいい。トリガーは自分の^{おれ}言霊^{せりふ}。

「 『魔符』 」

それはまだこの世に無いはずの、俺の唯一の試作品。

『東方project』と言う二次作品の、スペルカード。

「 『アウター・ウィッチ』 」

衝撃。

それが俺を抑える鬼の体を弾き飛ばし、更なる遠くへと吹き飛ばす。スペルカード、魔符『アウター・ウィッチ』。今現在、俺の唯一の切り札。

それは俺の周りをくるくると停滞しながら魔力の砲弾を鬼に浴びせる自立式魔法砲台。

その数、たったの三つ。それが俺の限界である。

何が起きたか分かっていない鬼を尻目に俺は舞風を見る。その顔は暗くて見えなかったが、それでも届くように心の底から声を出す。

「
」

出す、ことも出来ず魔力切れ。発動の時点で大半の魔力を持っていかれるこれは所謂失敗作。これを使ってはもう打つ手がないからこそ使いたくは無かった。

鬼はゆっくりと立ち上がり、こちらへと歩み寄ってくる。今度こそ、動けない。

死を覚悟した。その時である。

「あらあら、そこの方。その子をどうするつもりかしら？」

声は背後。舞風が翩られていた方から聞こえてきた。聞こえてくるはずの無い女性の声。しかし、それはアキの声とは少し違う。

振り向く力は残っていた。だから振り向いた。そこにいたのは見たことのない女性。でも、既視感を感じさせる女性。

「聞いているの？ その子をどうするつもりかしら？」

既視感の正体に気付く。彼女が着ている服は似ているのだ。舞風が着ていた服に。その手に持つ剣も、黒い髪も。

視線は僅かに逸れ、それより更に奥へ。そこにあっただのは、何者かを閉じ込めるように存在する透明の箱。

「まあ、いいわ。私は貴方を、そしてあの鬼を責めないわ。だって妖怪ってそういうものだから。だから 相手が悪かったと、思いなさい」

そこから先の記憶は無い。

既視感^{デジャブ}である。また俺は古臭い小屋の天井を、そして天使の如く美しい女性を見上げていた。

「大丈夫？ ベリーちゃん。一応怪我はないらしいけど」

「怪我……？ 俺って、どうして」

「鬼に襲われたのよ。覚えてない？」

そこでハツとし、半覚醒の頭は無理矢理に目を覚ます。起き上がったみれば僅かに痛む節々に顔をしかめる。そこはやはり一週間ながら見慣れた小屋の中。

いつものもう一人の姿は、ない。

「アキさん！！ 舞風は!？」

「？ 舞ちゃんなら外よ？」

痛む体など気にも留めず、俺は布団から這い上がり、小屋の外へと飛び出す。背後から制止の声が聞こえていたような気がする。

そこに一人、立ち尽くしていたのは、一人の美しい。黒い翼を生やした女性。荒々しい音に気付いたのか、こちらを振り向いてニコリと笑う。

「目が覚めたの。随分早かったわね」

「貴女は？」

「舞風よ」

「……………へ？」

あろう事か。目の前の美しい女性はあのちんちくりんなガキの名を名乗るのである。こんな恐ろしいことは無い。

俺の疑わしげな視線に気付いたのか、疑わしげな表情からぶすつとした表情に一変し、こちらをじとめで睨んだ。そうして腕を組む。胸の大きなものが自己主張するかのように持ち上げられる。

「どうしてそこまで疑うのか……………着てる服だっで一緒でしょう？」

「それは……………そうだけど」

「どんな虚言であろうとそれを嘘であると判別するまでの頭は持ちなさい。ベリー」

「……………」

この言い方、間違いない。舞風だ。腕を組み鼻を鳴らすその様も何処か面影がうかがえる。

僅かな間呆けている後ろから抱擁される感触。首の後ろの辺りに何か柔らかな物が

「もうっ、病人なんだから勝手に出ちゃダメよ」

「あ、あ、アキさん!？」

「舞ちゃんも、早く中に入りなさい」

「アキ、舞ちゃんはやめてといつも言ってるでしょう? 全く……」

ぶつぶつと文句を言いながら舞風、さんは小屋へと入っていった。

それを見たアキはおかしげに笑い、俺の手を引いて小屋へと歩いていく。

この日を経て、俺の中で舞風と言う存在の認識は格段に上方修正が為された。

魔女と二人（後書き）

なんだか無理矢理感every day・私はどうすればいいんだろ？

舞風無双。ただの「鬼世界の神になる」なんていう夢想家には負けられないとです。

オリキャラかける2登場です。若干反省していますが、いずれ出すつもりだったので後悔はしていません。

簡易紹介みたいな

・アキ（本名未登場）

見た目は綺麗なお嬢様。大和撫子。でも髪は白い。おっぱい大きい人。包容力がある。ポジションは優しい、でも怒ると怖いお姉さん。着物を着てる。戦闘方法はまた今度。

本名はいつか……多分、きっといつか、登場する、はず。

・ベリーウエル・ガラン（通称ベリーちゃん）

魔法の少女。魔法少女では決して無い。でも幻想郷にいるのは魔法使いだけって言う。捨虫と捨食は習得済み。でも飯は食う。

来ているのは赤と黒の色彩のウィッチドレス。髪の色は……印象的には金。

ポジションは次女、もしくは三女くらい。少なくとも長女っぽくはない。そもそも娘じゃないけど。

実は日本に来た理由は幻想郷のためだけじゃない。それについては曖昧な時系列と共に考察なさってください。

とんでもないくらいバレバレですが、彼女は舞風と似たようなものである。

おまけ

・舞風（八雲 舞風）

今現在は八雲姓の舞風さん。でもこれはあくまで応急処置。そのうち自分で考える。でももしかしたらのらりくらりと利用するかもしれない。

ポジションは通常状態が背伸びのお父さん。天狗状態が母、もしくは長女。

見た目はやや女っぽい顔に首下まで隠す程度に伸びた髪、しかし仕事草はいちいち男っぽいと言う。服は無駄にひらひらした白い服。喪服とはまた違う。言うなれば一枚の服に無駄に布を貼り付けたようなデザイン。背中まるでマントを何十にも重ねたようにとにかくパタパタとすごい。腕の拘束腕輪を強調するために半袖。妙に合っ

ていない。

下も細部が無駄にヒラヒラしたズボンを採用。ダボダボ。でも丈は一応あわせている。腰の剣は特に設定がないが、強いて言うなればけーね先生が持つてるあれなんかを小さくした感じ。あと無骨に。

ここまで書けばいいだろう、誰か絵を書いてくれないだろうかと言う勘定がダダ漏れである。

魔女と仲間（前書き）

本日も前回に引き続き、三人にて旅模様。個人的には戦闘シーンかほのぼのとした空気が一番好きなんだがなあ。

ちょっと舞風を信頼し始めたベリーウエル。舞風はいつも通り、のほほんとして生きていくのでしょうか。

それでは、本編です。

魔女と仲間

私は、きつと何処かで間違えたんだ。

だから私は、こんな地の、泥沼のような場所に横たわっているんだ。

体に力が入らない。心から漏れてゆく何か。とてつもない虚脱感。全てを無駄だと、意味の無いことだと悟ってしまったような。

立ち上がるという言葉が馬鹿らしくも感じた。

歩くという事すらも無意味と思った。

考えるとと言う言葉自体に目を背けたくもなった。

落ちて、落ちて、落ち続けて

地の底にいた私の手を引き上げてくれた彼の名は

「
」
見慣れた天井。見慣れた壁。見慣れた一室。

そこはいつもの小屋。私達三人の過ごす場所。同行人である二人は未だ眠っているようだった。

どちらも酷い寝相で、片や部屋の隅まで転がり、片や何があったのか机の上で丸くなっている。

思わず零れた笑み。それからすぐに朝の食事に取り掛かる。毎日の食事は当番制にはしているが二人とも朝が弱いのでほとんどが私の役目のようになっている。

「簡単に、昨日の残り物でいいかしら」

まだまだ目を覚ましそうに無い二人を横目に見て、それにしようとは決める。

それが私こと、アキの朝の日課になっている。

「いただきます」

○
○

「いただきます〜」

「いただきます……ねむっ」

食卓に並んだ干し肉とおにぎり。眠り足りない頭をなんとか起こしながらも俺はおにぎりにぎりに手を伸ばす。横から舞風の手が搔っ攫っていった。

「……………」

「怖い目するなよ。早い者勝ちだぜ」

毎朝の風景である、舞風の掠め取り。少しでも寝坊したら朝の食事はなくなるといっても過言ではない。それがそれなりの間旅をして、俺が気付いたことの一つでもある。

舞風たちに出会い、恐らく一ヶ月は経過しただろうか？

その旅は一人だった頃より熾烈な気がしてならない。一週間目で鬼が出たと思いきや、二週間目には妖怪の群れ、その次には妖怪の退治屋。これは舞風が一人で撃退したが、とさて次はなになか、なんて楽しみにしている節もあるくらいだ。

「もう少し落ち着いて食べた方がいいですよ。舞ちゃん」

「……………だから舞ちゃんはやめろって」

「隙あり!?!」

「俺の干し肉に何をするっ!!」

兎にも角にも、今日もまた騒がしく、飽きない一日が始まった。

「お前つて『魔女狩り』から逃げてきたのか?」

「ああ、放浪の旅の途中いきなり襲われたからな。大した準備も出
来ずこつちに来たんだ」

「他所の国ではそんな物騒な事もやってるのね」

舞風はやや驚いたように、アキさんはまたいつものようにぼんやり
して何を思っているのか。

下手に身の上を話して同情されるのも嫌だったので、この反応はそ
れでありがたいが。

「ま、一人で余計な荷物がなかったのが幸いして逃げ延びることが出来たわけだけど」

「でも魔女狩りって、大概無関係な人が魔女呼ばわりされて殺されるんだろ？」

「そうだろうな。何百年も生きてきたような賢い魔女がそうそう殺されることも無いだろうし、狩られたのはは成りたてくらいだろ」

「？ どうして分かったの？」

「どこぞの霊能力者はともかく、普通の人間は魔力を感じる事ができないし、せいぜい疎ましい隣人を殺すためにでも活用されたんだろ」

舞風が言ったこともなかった訳で無い。村一番の美人を妬んだ女がそれを魔女呼ばわりするところを見たことがあるし、後は大概教養がなかったり友人が少ない。言うなれば死んでも困る者がいない者が対象になっていた。

「どいつもこいつも魔女は一人ひっそり暮らしていると勘違いしてやがる。普通魔女は群れて暮らすんだけどな」

「そうなのか？」

「ああ、森の中で一人静かにとかは寧ろ童話の話だな。実際は群れるんだ。一人に異常があれば全員に伝わるようにな」

「それじゃ魔女ってみんな仲良しなのね」

「仲良しって言うより互いを利用しあってるって感じだよ。そんな綺麗な物じゃない」

当時のことをひっそりと思い出す。たまたま行った村で魔女狩りの

最中で、誤解を解けぬまま罪のない者が殺されている風景。

「胸糞悪い話さ。一部の過激な奴のせいで俺みたいな無害な魔女まで場所を追われるんだから」

「いつか誰かが間違いに気付くだろ。そうすれば魔女狩りはなくなる。それにこの国には妖怪は居ても魔女狩りなんて法は無いんだ。冷めるまでここでひっそりと暮らせばいいさ」

「そう、だな。この際幻想郷に移り住むって言うのもありかもしれ
ないし」

「ははっ、その時は俺の山にでも住むか？」

「考えとくよ」

俺の記憶が確かなら魔女狩りは18世紀まで続くはず。先はまだまだ長そうだと憂鬱気味にため息をついた。

「おっ！！見えた見えた！！」

「……なにが？」

舞風がいきなり声を上げたかと思うと、唐突に前方を指差した。ここから見えるのはややぼっこりと聳える山が一つくらいなのだが。

「結界山だよ！俺の山！！」

「へえ」

「そつなの」

「リアクションちっさー！！」

そうは言われても内心だからどうしたとしか言えない。あの程度の大きさの山ならいくつも見たし、今更と言う気にもなる。

「まあまあ。早く行こうぜっ！」

「あっ、ちよつと……」

一人パタパタと走っていつてしまい。俺は嘆息するとやや早歩きで歩き出す。アキさんはなんだかおかしい物でも見るようにクスクス笑いながらも同じくその歩みを速めた。

近づき、やはりその山がそれほど大きなものでは無いと再認識したとき、舞風はなにやら立てられた小さな看板を見上げていた。

俺も近づき、その看板を覗いてみると、以下のことが書いていた。

『この山は聖なる山であり、妖怪が入ること叶わず』

「……………」

「……………」

「……………」

「……ねえ舞風ちゃん。貴方って」

「言っな！ 分かってるから!!」

なんと言うことか。妖怪である舞風の所有する山に妖怪立ち入り禁止の看板。思わず絶句してしまう。

自分は山の主だと言い張っておきながらこうではなんとも締まらない。

「ふん！ 勝手に入るから構わないよ!! ここをちよいちよいつと弄って……………」

「何やってるんだ？」

「結界を適当に弄る」

そう言えば舞風はそれのエキスパートなのだった。恐らく結界の物と思われる術式が舞風の目前に浮かび上がり、それを手で本当に適

当に弄くっている。

「よし、これで大丈夫だろ」

術式が電源の落ちたウィンドウのように消え、山の空気がなにやら変わる。先程まではただの山に思えていたそれが今はとてつもない力の塊に感じた。

「さて、ようこそ。我が結界山へ」

「……これ入って大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。なんせ俺の山だぜ？」

自信満々にそう答える舞風に「だから余計心配なんだ」なんて言葉を浴びせることがなんだか出来なかつたので黙って入った。

そこは一步踏み入るだけで穢れのない大地であることに気付く。確かに聖なる山を関するだけはあるのかもしれない。

「基本的にこの山には一定以下の力の妖怪は入れない結界が張つてあるからな。妖怪によって荒らされる事はなく、辺境だから人の手もほとんど入ってない」

「……ん？ それじゃあ俺達が入れてるのは？」

「俺がそういう風に弄つたからに決まってるだろ？ ま、約一名これを突破してきた妖怪がいたけどな」

「それって……」

「八雲紫だよ。ま、それがきっかけであいつの手伝いをする事になったんだ」

と言う事は八雲紫がここに訪れたことがあるのか。それだけでその山は特別な物に感じた。山中が靈力に満ちている。

「舞風ちゃん。ここに訪れた理由って？」

「それについては後ほど。山の天辺に小屋を転移させるから手伝ってくれよ」

そう会話を区切り、舞風はまた道無き道を通り、山を登っていく。俺もアキさんもそれについていくことしか出来ず、山頂に着く頃にはもう足ががくがく震えて動けそうになかった。

結界の影響で空を飛ぶことが出来ないらしい。この時ばかりは舞風死ねって よくよく考えたらこの時だけじゃない。ひとまず死ねばいいと思った。

それなりの高さを誇るその山の天辺に存在した大樹。それが外見に一つの異質を放つ元になっているが、ここまで壮大に聳える大樹を見たのも初めてかもしれない。ただ一本、樹齡は想像もつかないほど長い。

小屋を転移し終えたかと思うと、舞風は大樹の傍に座り込みその樹を撫で始めた。優しく、慈しむかのように。

「……どうかしたのか？」

「ン？ いやなにも？」

その表情はやはりいつもと変わらない胡散臭げで飄々とした物で悲しみなど欠片も無いように見えた。

「ま、そうだな。俺は元々この辺りの生まれなんだ。だからちよつと、懐かしいなって……」

「？」

やはり、変わっていないが……その目には、確かに悲しみと言う感情が見て取れた。

「それはいいや。まず、二人に聞きたいことがあったんだ」

「聞きたいこと？」

「ああ、幻想郷のことだ」

その言葉には思わず首を傾げた。それはアキさんも同じようで、同様な反応をしていた。

幻想郷のことを、わざわざ俺達に聞く必要などあるのだろうか？

そんな俺らの反応を見て頭をかきながら「ちよつと間違えた」と言い、俺たちに向き直った。

「幻想郷に行きたいって気持ちに、変わりはないんだよなって事」

「？俺はその為に旅に着いてきてたようなもんだぜ？」

「私も舞風ちゃんにそうお願いしたはずだけどね」

ま、随分先のことだとばかり思っていたから。思ったより早いのかもしれないな、と頭の隅で考え、舞風の返答を待つ。

その答えに納得したのか、ニツと笑い、虚空に緯線を向ける。

「だ、そうだ。紫」

「そう、それじゃ誘いましょう。幻想の里へ」

何処からともなく聞こえた声。その透き通りようには若々しさを感じるが、なんだろう。言うなれば何処か舞風に似た感触があると言
うべきか。

俺の疑問を解決する前に、舞風が見つめる空間にリボンが現れ空間を裂いていく。その避けた空間に見えたのは光源色が混ざり合ったような禍々しさすら感じさせるようななにか。

その何かから、揺らめくように現れてくる一人の女性。派手な紫のドレスと特徴的な帽子、金の髪に扇子で隠す口元。俺はその名を知っている。

「初めまして。私は八雲紫。幻想郷の管理者ですわ」

ニコリ、と笑う。背筋がぶるつとした。中途半端とはいえ、強くなつたからこそ分かる。八雲紫の強さ、が。まるで空間が歪まんばかりの妖気、圧倒的なまでの存在感、その顔は何を考えているか分
らず、ただ笑みを浮かべていた。

「そう……貴女が八雲紫なんですか」

「初めまして。ご高名は聞いているけど、今はアキ、と呼んだ方がよろしいかしら？」

「ええ、それでお願いするわ。この状況で現れるって事は今すぐ私達を幻想郷へと誘ってくれると考えてよろしいのかしら？」

物怖じなど欠片もなく、アキさんは八雲紫と会話している。会話で

きている。それがどれだけ凄いいことか。自分はあの目を見ているだけで口を開くのも恐ろしくなると言うのに。

にしても、彼女が現れた理由は、やはりソレなのだろうか。

「ええ、そうよ。正しくはこの山その物を移動させるため。だけれどね」

「ま、後の楽しみって事で秘密にしてたけど、元々の目的地はここだったのさ。俺と八雲が共同でこの山を幻想郷に持っていくための転移結界を作成し、完成に至るまでの間ちよつとした旅をするつもりでな。道中幻想郷に行きたい者が居たら連れてこうって」

「だから私を誘ったの？ ベリーちゃんも？」

「強制する気はなかったからな。そっちの判断に委ねる様にはしたけど、そういうことになるか」

初めから山ごと移住するつもりだったのか。目指していたのは幻想郷ではなくこの山と言うことが分かったけど、こうして幻想郷に行けるなら満足だ。

当初の目的である八雲紫に会うということはこうして叶っているはずなのに、声が出せない。そして何処かそれをホツとしている俺が居る。

「ところで舞風。この二人はなんの意図があつて連れて来たの？」

「意図？ いや？ 別に行きたいって言う奴だけを連れてきた」

「嘘、でしょ？ どちらも貴方はなんらかの意図を持って連れて来

た。道中で会った他の妖怪を誘わなかった理由は何？」

「ま、大体が血の気の多い奴ばかりでこられても迷惑だったてくらいだな。アキを誘ったのはいい友人になれそうだったからベリーを連れて来たのは」

俺を見る。その目が静かに、そして無感情に、俺の目を射抜く。

「……ま、もしかしたら同類かと思って思ったから」

「……同類？」

「根拠もあつたし、連れてくるには十分な理由だったのさ」

何を言っているんだ？ 何のことなんだ？

考えは纏まらない。存在するはずの共通点。では何を持って同類と指すのか？ そもそも特異性のないただの一介の魔女である俺の何処に

「」

……いや、ある。俺にだけ存在する特異性。

それは”前世の記憶を持っている”こと。そしてこの世界のことを知っていること。

元々俺は冴えない学生に過ぎなかった。人並みに人付き合いもあり、人並みに家庭に恵まれ、人並みに楽しい。そんな生活をこの日本で送っていた。

そんな俺が友人に勧められてはまってしまったのが『東方project』と言うゲーム。元々弾幕ゲーが好きで始めたつもりが、いつの間にか別の意味でどっほに嵌り、いつかはオタク、言うなれば東方オタクと呼ばれるものになっていた。

唐突に、そして気付かぬうちに、この世界に生まれ変わりを果たしたのはやはり大層驚いた物だった。自分が死んだのか、直前の気持ちがないにもかも曖昧なまま、俺は魔女の娘として物心をつけた。

初めは辛いことばかりだった。言葉は通じないし、体は子供で不便。突然の家族との別れもあるし、戸惑いだって当然あった。そんな俺がそれでも生きていけたのは死の恐怖から。

生きながらえていれば色々なことが耳に入ってくる。他の魔女の話も。その中に『ノーレツジ』の名を聞いたときは驚いた物だ。

その姓は俺にとって聞き慣れた、『東方project』に登場する魔女、パチエリー・ノーレツジの姓である。その時初めて疑問を持ち、ようやく魔術に精を出し始めた。

自分の家、ガラーン家は僅かながらノーレツジ家と交流が存在した。しかしこちらは一般、向こうはエリートだったらしく、ほんの僅かな関係だったので目通りが叶うことはなかった。

東方を知っていた俺が幻想郷の存在を考えるのはすぐのことだった。そして、俺が日本に、幻想郷に行くことを決意したのは母が死んだ時。魔女狩りに追われ、最中で妖怪に襲われ逝ったその時、決めた。ここが本当に予想通りの世界ならば、八雲紫は存在するのだろう。彼女は特別好きなキャラであった。関連動画を見ても分かる幻想郷への愛。ある意味妖怪らしく、そしてある意味妖怪らしくない、そんな彼女が好きだった。いや、憧れていた。

「 そうなんだろ？ ベリー」
「 ツー！！ …… 分かんねえよ。でもそれじゃ」

舞風も、前世を覚えているのか。知って、八雲紫に関わっているのか？

だとしたらなら

「 お前は どうして 日本語を話せる？ どうして スムーズに 土下座ができた？ どうして 玉藻前を知っている？ そして、 どうして 俺を知らない？」

「 ツー！！？ じゃあ …… やっぱり ……」

「 ああ、お前と同じだよ。ベリーウェル・ガラン」
「 」

そう、そういうことだ。

こいつもまた、俺と同じ世界から来たもの。そういうことだったのだ。何故か気が抜けるような、そんな失望感のような物が心の底から沸いてくるのを感じた。俺が舞風を知らないのもまた、元々そんな奴が存在しなかったから。

「……ま、紫の式の名をどこで聞いたのかは知らんけど、それはまあ目を瞑ろっ」

ん？

何故それを気にしない？ 寧ろそれこそ証明するための一番手では無いのか？

……まさか、こいつは。

「……おい、東方projectって知ってるか？」
「東方？ 知らんけど、なんかのグループの名前か？ そんなの知るわけ無いだろ」

やっぱり。確かにこいつは俺と同じところから来たのかも知れない。でも、知らないのだ。知らずに、こうして八雲紫に関わっているのだ。

どっと、荷が下りたような、気が削がれたような。失望感は霧のようになんか失せた。嘘を言っている様子もなかった。あれは本心から知ら

ないといっている顔だ。ポーカーフェイスの可能性も捨てきれないが。

改めて、こいつを疑う理由もなくなった。何も知らず、ただ人生の延長戦として舞風は生きていただけなのだ。目論見など、なく。

「それは後で話を聞くとして、間違いは？」

「……ああ、間違いないよ。多分ね」

「なんの話かしら？」

「二人して、除け者は面白く無いわ」

「なに、ちょっとしたとき。気にすんなって」

舞風は悩みが晴れたような顔で笑っていた。思えば、そういった人物は自分以外に存在しないと思いついていた。子供の俺に浴してくれる人はいたけど、恐怖や望郷の想いを誰にも打ち明ける事が出来ず、寂しいと思っただ事だっただけであった。

舞風は妖怪だ。人間だったのに、人間からは忌み嫌われる存在になり、また俺と同じだったんじゃないだろうか？

「……よし、やろう。紫。結界山を幻想郷へ」

「ええ、準備は出来てるわ。後は貴方の手で操作できる」

そう言った八雲紫が手を振ると舞風の目前になんらかの、恐らく山ごと転移するための術式が現れた。そして、それに手を翳すと発光を始める。

そして、立ち上る光。拡散し、山周辺を覆う。眩い光に目を閉じて
しまいそうになりながらも俺はその光景から目を離さないように。

……気のせいだろうか。舞風の頭に、角が

「 ようこそ、幻想郷へ。我が縁者、舞風。歓迎するわ」

「着いたの？」

私は空を見上げた。何一つ変わらない、青い空。違って感じるのは多分気のせいではない。

周りを見れば立ち尽くし、目を閉じて何かを探るような仕草を見せる舞風と地に腰を落ち着けたベリーちゃん。

「……ああ、間違いない。転移は無事完了したみたいだな」

「八雲紫は？」

「アイツもあれで忙しいみたいだし、次に行ったんだろ……あつ、くそ。結界がダメになってるな。直ぐに直さないと」

「ここはどの辺りなの？」

「幻想郷の端の端だ。妖怪の山が近くにあると思うけど、人里は随分遠いな」

そう、と短く返し、未だに感じるその力に過敏に反応しながらも舞風を見る。

「……ベリー、手伝え。アキ、暇なら行ってもいいぞ？」

何処へ？ とは言わない。何故？ との理由も言わない。その目は真っ直ぐ、ただ私の何かに答えるように。

「ええ、そうするわね。頑張って」

「散歩？ 一人じゃ危くないか？ 俺も」

「大丈夫。だからベリーちゃんは結界の修繕頑張って」

ちえ、とつまらなそうに立ち上がると舞風のほうへと歩いていく。それを見送り、私は空に浮かび上がって山を離れる。

少し離れ、二人の姿が見えなくなるところまで来てから辺りを見る。力はそこら中から感じられる。

「いますよね。出てきたらどうですか？」

「……言われなくとも、誘ったのは私ですもの」

再び先程のように隙間から這い出てくる八雲紫。転移をする前から

私に対する視線は厳しい物だった。終わってからも私に集中した意識、間違いなく私に用が在るのは明白だった。

「用件は、なんですか？」

「……用件なんて程では無いわ。貴女がこの幻想郷にて何を為すのか、聞いておきたかっただけ」

「なんだ、そんなことですか。私は元々静かに暮らせる場所を求めてここに来たのだから、そうして暮らしますよ」

「その言葉に、偽りは？」

「ありません。それに、何を為すにしてもそれが幻想郷に仇名すことなら貴女が黙っていないでしょう？ 私は自殺に来たんじゃないもの」

私の言葉を聞き、それなりに満足したのか。一つ小さく頷くとニコリと笑った。

「そう、ごめんなさいね。貴女ほどの者が来るとなるとどうしても警戒してしまつて」

「警戒するほど私は強くは無いはずですが？」

「それは今の時点では、よ。そのうち貴女は幻想郷で上位を争うほどの実力者になるでしょう」

「買いかぶりすぎです」

まだ数百年しか生きていない私は目の前の間違いなく数千の時を生きる八雲紫にしてみればちっばけな存在に過ぎないはずだ。それでも、ここまで危惧される理由は？

「確かに、妖怪としてはまだまだ若いかもしれませんが貴女は違っ
なんせ、人間から妖怪になっ たんですものね」
「……………」

もう用も無いようだし、と私は背を向けた。本当ならこうして話す
ことすらあまり好まない無いようなのだから。

「一つだけ、言っておきますね。幻想郷は全てを受け入れる」
「そう……それは残酷な事です」

全てを。それは喜びも悲しみも、楽しみも苦しみも、再生も破壊も、
敵も味方も、ありとあらゆる物を受け入れると言っこと。

知らず知らずのうちに様々な物を内に溜め込めばいつかは破裂する。
ではどうするのか？

誘われた、余計な物を切り捨てる。それを実行するのが管理者、な
のだとしたら……

「八雲紫。いえ、妖怪の賢者。私からも一つ」
「なにかしら？」
「私は、貴女に、そして幻想郷に受け入れてもらったと言っ意識は
全くありません。」

私は彼を受け入れ、また彼も私を受け入れた。ただそれだけの
ことです」

背後から息を呑む音が聞こえた。それを無視し、私は結界山へ降り
ていく。引き止めるように後ろからかけられる声はもうなかった。

○
○

「……大分心酔しているようね。舞風に」

私は三人仲良く結界をあーだこーだと言いつつ三人を見下ろしながら、少し舞風を羨んだ。

簡単に、とは言わないが数年で彼をあそこまで信用するような友を得ているのだから。

「貴女が、この幻想郷を蹂躪するようにならないことを祈ってるわ。大精霊」

踵を返し、隙間へと入る。まだまだやらねばならないことは山済みなのだから

こうして、16世紀初め。大精霊とその一行。そして彼の者の山は幻想の里へと至った。

人が気付かぬほど、奥地に……

魔女と仲間（後書き）

これで君も幻想入りさっ！

ベリーウエルは前世は未来の東方オタさん。あくまで気付いたら魔女。なにそれ怖い。

よく言えば俺っ娘、悪く言えば元男。前者のが断然いい。皆後者を頭から削除してくれーッ！！

彼の親、まあ母親ですが、既に他界しております。即ちガラーンの名は彼女で最後。実力は未だ二面ボスくらい。ぱっちえさんとは出来が違うんです（悪い意味で）いつか出会うときは超年上でしょう。おばはん（笑）

アキの謎。これは多分分かる人は分かるんじゃないかとよんでいます。万が一分かった、もしくはこれかっ！と思っただ方、書き込まないでください。実は自分嘘が苦手なんで。って言うか良心の呵責に響くと言うか……ともかく自分からネタバレして今後つまらなくなる危険性があります。

今の時代はだいたい1520年くらいを予想してます。これより少し後か、まあそのくらい誤差でしょう。実はこの頃に幻想入りの仕組みが誕生したそうです。まだ博霊大結界もないから勝手に出放題なんでしょう。呼び寄せる意味なくね？

次話ですが、これから補習等あるのでやや遅れる予定です。お盆も挟みますしね。

舞風と地底（前書き）

今日で夏休みが終わり。絶望した。明後日はテスト。

更新がままならない。案が出ても繋ぎ方に悩む。やっぱり自分複線とか苦手です。

題名どおり、舞風があるとところに向かいます。地霊殿をやったのが三日前って言うそれなんて急ピッチ。

舞風と地底

「　　と言つ訳で、旧地獄に行つてもらつわ」

「　　どついうわけだよ!!」

久しぶりに頼み事かと思いきや、いきなり地獄に落ちると言われた。なにそれ怖い。

わざわざ隙間で呼ばれてまで話しているというのに、あんまりすぎる。

「話はよく聞きなさい。別に貴方が思うほど地獄って酷い場所じゃないし、そもそも旧地獄よ」

「新旧関係なく地獄だろ。間違いなく溶岩とかだくだくだ言ってるだろ?」

「　　否定はしないわ」

「　　しよげ!!?」

隣に何故かいる伊吹が徳利片手にケラケラと笑いながら寝つ転がっている。一体どついうわけだ。つて言うかいて大丈夫か鬼神代理。

「旧地獄つて言うのは元々地獄の繁華街だった部分を切り離し、スリム化を図ろうとしているところよ。私達は今それを地底と呼んで

いるわ」

「何故地獄をスリム化するのか、そして呼び名からしてそれ絶対地下にあるだろ」

「地底には今鬼の移住が始まっているわ。それと同時に忌み嫌われる力を持つ妖怪の受け入れもね」

「おいこら無視すんな。一体いつの間にそんなこと……まさか俺が行くのって」

八雲の口が嫌らしげに歪む。もうやだこの人。

「察しがついたみたいね。今回貴方を推薦したのは貴方が数少ない能力の影響を受けない存在だから。次に八雲の縁者として今地底の管理を任せている者に会ってきてもらいたいから」

「そうだろうと思ったよ！！　なんで八雲の姓なんか受けたかなあ」

「そんな事言わないの。藍が睨んでるわよ？」

「ん？　……うげっ」

確かに襖の陰からこちらを睨んでいる。尻尾が思いつきりはみ出し
てるので寧ろ微笑ましい物に見えそうだが、その目は呪殺されそう
なほど怨念が籠っていてそれで洒落にならない。

「なんでお前が何でお前がなんでお前が何でお前がなんでお前が何
でお前がなんでお前が何でお前がなんでお前が何でお前が……」

「……なあ？　俺ってあそこまで恨まれるような事したっけ？」

「あの娘は貴方まで八雲の姓を使っていることが気に食わないらしいわよ」

「いやあれ気に食わないってレベルじゃないから。隙あらば殺そうって魂胆まで見えてくるから」

「ま、自業自得だね」

「くそ、酔いどれ鬼幼女め。山へ帰ればいいのに」

今すぐ姓を返してやりたい。それはいずれ来るペットにでも取って置いてやれよ。もしくは子供とか。

ああ、結界山に置いてきたあの二人は何をしているだろうか？ ベリーは独立のために自分で家作り始めるし、アキは幻想郷を楽しむに飛び回っているし、帰って来た時には孤立してそうだな。

「で、俺にそこで何をしてこいと？ まさか挨拶回りだけって訳じゃないだろ？」

「勿論。貴方には少しの間面倒ごとの処理をお願いするわ」

「……それって面倒ごと起きること前提？」

「忌み嫌われる妖怪や鬼たちをまとめようってのよ？ なんらかの事が起きない方がおかしいわ」

おい、すぐ傍に当事者いますけど、言っていないんですか？ どう聞いても貶してるようにしか聞こえない。って笑ってる！！ そりゃそうだって感じに笑ってるよこの鬼。どういうことだよ。

「今回は萃香にも同行してもらおうわ。あと大半の鬼ね」

「ま、そういうことだからよろしく頼むよ」

「絶対なんか起きる。俺はそう確信している。間違いない。ところ

でそろそろ藍アシを何とかしてくれ。殺気で禿げる」

毛根が目に見えない重みで潰されそうである。割と本気で。

○
○

「　　おいおい、真っ暗じゃねえか」

八雲の隙間で送られたそこは日の光が届かない暗黒の世界。隙間の
中もそれなりに暗く感じたが、こちらも随分だ。

「そりゃあ地底だからね。暗いのは当然さ」

「一言言ってくれたら前もって準備が出来たのに、っと」

背後の反星陣が辺りを照らす。元々の使用法でないにしろ、これを
使うのが一番手っ取り早い。

いつの間にか目前には伊吹と星熊が立っていた。

「久しぶりだね。舞風」

「久しぶりって程でも無い気がするけど、いるなら明かりくらい点
けておいてほしかったな」

「ははは。生憎こっちじゃ燃やす物も貴重だね。なるだけ使わない
ようにしてるのさ」

酒は湯水の如く飲むくせに、と内心悪態をつきながら星熊の案内で先へと進む。術式の光が自分で思うより随分明るい。先を大分照らしてくれている。

と

「あぐう」

頭に突如衝撃。上げたくも無い悲鳴を上げて何者かの落下を堪える。弾力からして木製の何かである。掴んでみればそれは桶。なんの変哲も無い桶である。

と、思いきや、中になにやら入っている。それは少女であった。ふるふると信じられないような目でこちら　　と言っより目線の進行上の鬼二人　　を見、がたがたぶるぶるしている。

645

「…………お、お、お、鬼？」

「鬼じゃねーよ。鬼はあの二人だけだよ」

「そいつは…………釣瓶つるべ落としかい？　こんなところで何してるんだ」

「あ、あう…………」

「釣瓶？　桶じゃなくて？」

「取っ手があるだろう？　釣瓶さ。ご丁寧に縄までかけて、上から落っこちてきたのか」

それを地に下ろし、見てみる。なるほど、確かに見れば取っ手もあるし。ふと中にある少女と目が合う。少女は緑色の髪を左右二つに

括り、やや怯えながらもこちらを上目遣いで見上げている。

「……鬼じゃない？」

「角はなければ怪力じゃないし、そもそも酒はあんまり飲めない」

「……弱い？」

「答える前にその質問の真意を問いたいんだけど、どうか？」

「……いや」

ふるふる震えながらも少女は伊吹や星熊と目を合わせないように勤めていた。それほどまで鬼が怖いのか。まあ分からないでも無いが。

その視線はしばらく落ち着かなかったが、俺の背後を見て定まる。何を見てるのかと思いきや、背の反星陣に向けられていた。確かに珍しい物だとは思うが。

「……きれい」

「そりゃどうも」

「……ほしいな」

「それは翼をください並に難解な願いだな」

「……むう」

少女の手が伸ばされ、光を掴む……訳もなく、その手は術式を貫通して向こう側へ。

「そろそろ行くよ。アンタも着いてきな。釣瓶落とし」

「……ッ!？」

「目的地は一緒ってことか。名前は？」

「……キスメ」

「俺は何故かこいつらにこき使われる妖怪、舞風だ」

「……奴隷？」

「……それはやだな」

鬼の奴隷なんて本気で何をされるかわかったものではない。少なくとも戦いと酒の日々だろう。

そんな考えをめぐらせていると、つんつんと肩を突つつかれる。キスメがなにやらこちらに手を伸ばした状態で震えていた。

「……抱っこ」

「……」

俺の荷物が増えた瞬間である。

端から見れば俺は何故か少女の入った桶、もとい釣瓶を抱えた妖怪である。解せぬ。

即座に星熊にでも変わってもらおうと思っただが、服を掴まれて涙目ながら首をブンブンと振られれば流石に諦めもした。

「……………旧地獄、ね」

それを地獄と言われたなら信じられなかったろう。旧地獄と言われても半信半疑である。

それは都。沢山の光に照らされた。一つの世界。見上げればそこは確かに闇なのに、世界は明るく彩られている。

「ま、実際はこんなもんさ。鬼の建築技術も伊達じゃないだろう？」
「ま、大体は元々こんなだったけどね。紫も言っただろう？ 地獄の繁華街だったって」
「そう言えば、そうだったけ」

地獄に繁華街ってこと自体が信じられなくて思わず聞き流した気がする。手の中の釣瓶の中のキスメは慣れたものなのか、特に気にした様子もなく辺りを見回している。

尚も歩みを進めてみるとなにやら人ごみ、じゃなくて妖怪ごみ。鬼を中心に様々な妖怪が集まっていた。

「そつだ。一つ言い忘れてた」

「なんだ？ すっげえ重要なことじゃないよな？」

「重要さ。そこそこ重要。舞風、アンタの姓はここで名乗らない方がいいよ」

「そりやまたなんで？」

「……妖怪の賢者はね。地底の、嫌われ者の妖怪たちに嫌われているのさ。人妖のバランスを保つためと言え、外から自動的に妖怪が幻想郷に入ってくる仕組みを作り、害があるものをこうして地底にやるつとしてるんだから」

「……なるほどね」

いつになく真面目な伊吹の言葉に耳を傾け、俺は頷く。キスメが不思議そうにこちらを見上げていたが、それには気付かないふりをする。

「これで全員かい？」

「鬼神代理ツ！！ それが、前鬼神様と橋姫が全く動こうともせず……」

それを聞いた伊吹はやや呆れたようになる。さしずめ、だらしの無い上司のことを考えているようである。

「鬼神は寝てるだろうし、橋姫はこっちの話を聞かない、か。仕方ない、舞風。ちょっと行って」

「だが断る」

「来ないんなら、勇儀、力づくで連れていきな」

「ごめんなさい」

「……弱いね」

「うるせい」

なにやら未だに引きづられるようだ。俺は何処に行くんだろう。いつまで釣瓶を抱えていればいいんだろう？

「全く、あの橋姫にも困ったもんだね」

「顔見知り？」

「ま、そんなところだね。私を前にしても物怖じしない珍しい奴、とも言っか」

「へえ、橋姫ね。妖怪についてはそれなりに知識を得たと思っただが、橋姫については全く聞き覚えが無いな」

「妖怪らしからぬ事を言うね。橋姫ってのは名前どおり橋に住む女神さ。悪い奴じゃないんだけど、めっちゃくちゃ嫉妬深くてね」

「へえ、珍しい性格」

寧ろ妬まれるなんて新鮮である。周りにいる妖怪が大抵紫なり伊吹なりアキなり藍なり、こちらが嫉妬してしまいそんな実力者ばかりなのだから。

「……見えた。あの橋だよ」

星熊の指差す先には大きな川。そしてそれにかけられたまた大きな橋。見ればその中心辺りに一人、手すりに肘を置いて立つ存在がいる。

遠目から見た限り、それもまた少女である。しかし伊吹やキスメなど、幼女とは違う。普通に少女である。こちらの接近に気付き、如何にも気だるげな目でこちらを睨む。緑の髪、そして尖った耳と珍しい存在である。

「……なんのよう？ 勝手に私の家に入ってこないでほしいのだけ
ど」

「……………？ ああ、橋。橋い！？」

どうも橋が家らしい。確かに橋に奉られた神なのだから、彼女にとつては橋が寄り代のような物なのかもしれないが、様々な者が通る橋に入るなど言われても反応に困る。

「えっと、土足ですいません？」

「……そう思うなら、さっさと出て行きなさい。地上の妖怪」

「あれ？ 分かる？ そうしたいのは山々んだけど、なあ？」

俺が視線を後方に向けるように促すと、僅かに視線をずらした橋姫がやや呆れた様子で理解したことを汲み取る。今頃俺の背後では星

熊がストレッチでもしながら俺の顔でも狙っている頃だろう。主に物理的な意味で。

「私には関係ないわ。あなた達の都合も、あなたがどうなるうと」「いやまあそうだろうけど、んじやとりあえず集まりくらいには来てくれないか?」

「嫌よ」

「即答かいつ!! なんでさっ!!」

「わざわざ忌み嫌われた妖怪を集める理由が分からないからよ。どんな魂胆があつたものか、分かつたものじゃない」

「……そういえばなんでだっけ?」

そこで詳しい事情にまで耳を傾けていなかったことに気付く。まあ、鬼達の事だし、それほど深い理由も無いと思うが。

652

「まあ、流石にとって食われるわけじゃないだろうし、少しくらいならいいじゃんか」

「とって食われるかもしれないから行かないのよ」

「……………平行線だな」

「そもそも私達のように封印された妖怪を纏める事に意味があるとしても? 憎まれ、蔑まれ、追いやられ、果てにここにゴミのように送られた私達をなんとかできるとでも? 大層頭がお花畑なようね、ホント、妬ましいわ」

睨む。緑の、宝石のような目は厳しくこちらを睨んでいた。今の会話だけでも思わぬ内容が出ていた。

『封印され、送られた妖怪』、誰が封印し、誰がここに彼女を放り込んだのか。幻想郷の仕組みで送られたと思えば彼女はそれより前からここにいるような節のことを口にする。

何も知りはしなかった。それがまた彼女の心を引っかいたのではないのだろうか？ 今手の中の、キスメもまた、憎まれ、追いやられた妖怪なのだろうか？

そうだとしたら、鬼の行動に意図はなく、鬼達は都合よくここにいることを選び、結果元々いた妖怪たちと仲良くすることを選んだだけではないのだろうか？

「……ま、頭が春のお花畑ってことを、今は否定しないでおいてやる。一応聞くけど、来る気は無いんだな？」

「言ったでしょう？ ぼかぼかした地上の空気に当てられて全身春なのかしら。妬ましい」

「そっか。じゃ、仕方ない。行くか」

くるりと反転し、背を向ける。そこには星熊がムツとした表情のまま立ちふさがっていたが、こちらの意図を読み取ったのか、それともなにか考えがあるとも思ったのか 恐らく後者 退いた。

「……いいの？」

「仕方ないだろ？ 本人が来たく無いって言うんだからさ」

「……」

「ま、でもこれくらいは言うっておかなきゃな」

「？」

再び向き直り、その緑の目を睨む。あくまで笑顔は崩さずに。

「自分だけ不幸みたいな事言ってんじゃないよバーカ。なんだかんだ言って集まったら嫌われるかもしれないのが怖いってだけじゃねーか臆病者。いつまでも橋に引き籠もってんならそのうち解体作業して粉碎するから覚悟しとけ」

「……………」

「……………」

「……………」

脅迫である。まじごとく脅迫である。因みに前文は挑発である。

一気に言葉を並べすぎたか、怒り心頭の模様。恐らく中途半端に聞き取ったのか。それとも挑発だけ聞いたのか。

「何も知らないくせに、よくもそこまで言えるわね。妬ましい」

「分かるわけ無いだろ。俺は心なんか読めないんだよ。それに、お前だって俺のこと何も知らねーじゃねーか」

「知りたくもないわ」

「一々言うことがきつつい。ま、さっきは臆病者なんていったけど、多分皆そうなんだよ。嫌われていたからまた嫌われるのが怖い。心

の痛みに慣れはあっても無傷はないからな」

「……………どうでもいいわ。でも、橋を壊すと言つなら仕方が無い」
「よし、作戦成功ッ！！」

しかし周りの視線は冷たい。俺が一体何をした。色々やったな。ごめんさい。

「それならこのまま地霊殿に向かうとしようか」

「チレイデン？ なにそれ？」

「最近地底の管理を任された妖怪がいるのさ。元々話し合いはそこでする予定だったから。多分他のやつらも向かってるよ」

「ふーん……………ところでキスメ。そろそろ降りてくれないか？」

「釣瓶じゃ歩けない」

「いや取れよ」

「……………釣瓶なのに釣瓶に入ってるない。それって何妖怪？」

「……………いや知らんけど」

子犬のような目で見られては流石に拒否できない。星熊は笑うが橋の視線が冷たい。

「そついえば、名前何？」

「……………水橋。パルスィよ。貴方は名乗らなくてもいいわ」

「まあ聞けよ。俺の名前は舞風って言ってだな。風のように舞うって意味合いがあるんだぜ」

「明るい名前ね妬ましい。言いやすそうね妬ましい。ああ妬ましい妬ましい」

「……………」

改めて変な奴だなあ、と思いながら俺は星熊に着いて行った。

「　　そういえば地霊殿？　だっけにいる妖怪ってどんな妖怪だっけ？」

「アンタ、よく知らずにここまで来たね」

「……地霊殿の主は覚妖怪よ。名は古明地さとり」

「さとり妖怪……ってなに？」

周りの三人の視線が呆れたもの変わる。それになんとか居心地の悪さを感じながらも俺は追及した。

「覚妖怪ってのは、心の声が聞こえる妖怪のことさ。だから地底の

奴らには特に恐れられてるんだ」

「心の声……テレパシー？ そんな妖怪もいるんだなあ」

「力は強くないかもしれないけど、敵にしたら厄介なことは確かだね。悪い奴じゃないんだけど、先入観があるんだらうね」

何も嫌われる妖怪が皆悪い妖怪では無いということ。水橋だってそう。存在自体が厄介と思われるような存在なのだらう。例えば本人の意思が正しいものであるらうと。

しばらく歩いていると遠目に大きな屋敷が見えてくる。そしてその辺りにちらほらと妖怪の姿。水橋がやや星熊の影に隠れるように歩幅を狭めた。

「あれ？ 伊吹の奴何処に行ったんだろ？ その鬼さん。伊吹知らない？」

「鬼神代理なら地霊殿の主のところだ」

「あいよ。あんがとさん。じゃ行ってくるから、キスメ降りろ」

「……ええー」

「星熊、パス」

「断る」

「……水橋。パス」

「嫌よ」

「……降りろ」

「……うん」

なんだか背に哀愁の視線を受けながらも真っ直ぐと、地霊殿とやらへの道を進みだした。それは近づけば近づくほど大きく見え、そう、

800年くらい前に見た都の屋敷を髣髴とさせる。ほとんど忘れたけど。

門のような物を潜り、出迎えたのは無数の妖精……かと思いきや何故か肌が黒かったり、と言っよりどう見ても血色が悪いただけだった。そんな妖精が無数に迎えたのだ。

「うわ。俺は一体どうすればいいんだ」

ここまで反応に困る対応は初めてである。と、奥からのそのそと歩いてくるのは一匹の黒猫。それも二股である。それを訝し気に見ていると、いきなりなにやらの黒い球体に包まれる。それが明けた頃に立っていたのは一人の少女。赤毛に猫耳、加えて二股の尻尾。今の猫で間違いなさそうである。

「いらっしゃーい。地霊殿によろこそ。今さとり様は地上の鬼と話しているので少しお待ちください」

「伊吹と？ 現在進行形で？ あらまあ、仕方ない。まったりと待たせてもらおうかね」

「はいはい。お客様一名ごあんなーい。お名前をどうぞ」

「聞いて驚け知って慄け！！ 俺の名前は舞風。地上からきた妖怪である……」

「へー、すごいですねー」

「……棒読みで。もう少しリアクションがほしいと思うのは傲慢なのだろうか？」

「それでは、こちらの部屋にてお待ちください」

すぐに一室に案内される。割と普通の和室である。真ん中の小さなテーブルの上にはポツンと置かれたお茶一つ。いつからあったのか、しかし俺宛であることは間違いなさそうである。

手を伸ばし、喉に流す。ややぬるいが中々上手いお茶である。

「あー、ホツとする。ホツトなだけに……」

……我ながら寒い冗談である。しかも独り言。誰かに聞かれていようものなら軽く死ねる。あ、でもホツトの意味が分からないか。

と、なにやら襖の開く音。伊吹か先程の少女が来たのかと思いきや、そこにいたのは先程会った少女とはまた違う少女である。

黒い帽子に銀の髪。やたらとフリルの多い服に胸の前の紐の生えた球体。それは見ようによつては閉じた大きな目にも見えるかもしれない。その少女はなにやらこちらを注視していた。視線の先を辿ると、そこは俺の持っている茶飲みに注がれている。

……もしか、これはこの少女の物だったのであるのか？ ふむ。

「……ズズズズズズ」

「あーッ！ 飲んだーッ！！」

「……茶が旨い。身に染みる」

「ちよつと！ どうして飲んだの！ う〜」

ちよつぴり罪悪感。でもそれを振り払って茶を飲む。俺はこんなところで立ち止まってられないんだ!!

「も〜！ 返せ！」

「ふぼほー!!」

後頭部に衝撃、走る。勢いのままテーブルに叩きつけられる顔。お茶は飲み干していたので零れなかったが、それなりに痛い。どうにも背中に、と言うより頭に飛び掛られたようである。お茶の恨みが重い。

「……………痛いので退いていただけると助かるでござる」

「やだ。私のお茶返せ」

「吐き出せと？ そりゃ無理な注文だ。大丈夫、あれは旨かった。

俺が保障するよ」

「保障されて？ 私はどうすればいいの!？」

「新しいのでも持ってくればいいじゃないか」

「それが出来たら苦労しない！ 大体見えないようにしたはずなのにどうし…………て？」

「ん？」

少女が背から降りる。こちらの想いをようやく分かってくれたのかと向き直ると、少女はなにやら信じられなさそうに俺を見ていた。

「う、そ。どうして見えてるの？」

「どうしてもこうしても見えているのだから仕方ない。そうは思わんかね？」

「……ふーん。よく分かんないけど、私が見える妖怪を見たのは初めて。貴方名前は？」

「舞う風と書き、舞風。いい名前だろ？」

「私は古明地こいし。貴方、能力が聞かないようにする能力を持ってるんでしょ？」

「スルーされた。なんで皆スルーするし。確かに自分には能力の影響が届かないようにしてるけど、それが？」

それを聞いた少女、こいしがはしゃぎだした。しかし、古明地。何処かで聞いた名なような……

「貴方地上の妖怪よね。どうして地底に来たの？」

「パシられて」

「ここにはなににしに？」

「覚に会うため？」

「貴方なんて妖怪？」

「舞風妖怪……嘘。俺も知らない」

矢継ぎ早に質問され、考える合間がない。最近よく子供に好かれていたような気がする。でもこういう腹に黒い物を持ってそうな子供はご遠慮したいのだが。

「もしも〜し。さとり様がお会いになられるそうです」

「あ、お燐」

「お燐？」

「あれ？ どうしてあたしの名前を？」

それは初めにここまで案内した猫少女。こいしが彼女をお燐と呼んだが、その視線は俺にだけ注がれている。まるでこいしがいないかのように。

「お燐には私が見えてないよ。見える方が異質だからね」

「へえー、そう。とりあえずさとり様とやらのところに案内してもらおうか」

「??？ う、うん。分かった」

まるでおかしいものを見るような目で見られてしまった。本当にこいしが見えてないのだとしたら、確かに虚空に話しかける不振人物にしか見えないのだろうか。

「分かっているとと思うけど、さとり様は覚妖怪。なにかしら注意しろとは言わないけど、責任は自分持ちで頼むよ」

「それはたとえ機密が漏れても自己責任ってことか？」

「まあそういうことだね」

「……ふむ」

とりあえずは能力遮断の結界がある限り、心を読まれたりはしないだろうし、そもそも聞かれて困ることはない。あって、八雲のこと

か。だがそれは広まらない限り大丈夫だろうし。

後ろで手を振るこいしを一度だけ振り返り、ウィンクすると俺は踵を返して部屋を出た。

こいしのやや冷たい瞳がやたらと印象に残った。

続く（笑）

舞風と地底（後書き）

最後はなんとなくやった。ちょっと反省している。いいジャマイカ。結構原作キャラ登場。ヤマメ様がいらつしやらないことはやや反省。キスメの喋り方は他二次創作より。釣瓶落とし可愛いよ釣瓶落とし。語呂悪し。

当初の事情はすいかがパルスィを引っ張るつもりだったけど、地霊殿をやってみると面識がないらしい二人。解せぬ。

お燐とこいしちゃんはちょっとだけ出ました。なにやら性格が違うような……気のせい気のせい

前後編、もしくは中を入れるか。それで地底辺は終わる予定ですが、さて一名不可思議な存在にお気づきでしょうか？ それについては、また次話。

舞風と鬼神

あらすじ

紫「地獄に落ちろ」

キスメ「地獄だけど落ちてきました」

スイカ「橋姫さっさと連れてこんど、どうなるか分かってる？」

パルパル「その春な頭が妬ましい」

勇儀「地霊殿に行くZ E!!」

おりりん「こちらでお待ちください。永遠に」

こいし「お茶と私の時間と尊厳を返せ。倍にして」

今ここ。

うん、大体あつてる。

「初めまして。私がこの地霊殿の主。古明地さとりです」

なんだかなあ、と思いながら。俺は相對する者の顔を見た。ん、似ている。先程会った少女、こいしと。今改めて名乗られ、ようやく古明地の姓を思い出した。

目の前の少女は先程会った者と違い、やや大人びているように感じる。悪く言えば暗そうにも見える、とも言いが、どちらにしても未だ一屋敷の主としての貫禄は欠けている様にも見える。

「……………」

「……………あの、聞いてます?」

「ん? ああ。悪い悪い。ちょっと考え事があったね」

「そう、ですか。どうも心の見えない妖怪の相手はやりにくいですね」

「あ、やっぱり見えないんだ。皆それが普通なんだよ。因みに俺は舞風」

さとの顔は目に見えて曇る。やはり、能力については己が一番コ

ンプレックスを持っているのだろう。

「……ま、そうだね。俺もなにか特別な用があって立ち寄ったわけじゃないけど、ちよいと試してみるか」

「……え？」

直後、俺は自分を守る最後の、“干渉を遮る結界”を霧散させる。これがないと俺はただのちっぽけな妖怪である。大して力の持たない妖怪に完全消滅させられるデメリットまで浮き上がる。

「……！ そんな重要な結界を解いて、大丈夫ですか」

「あん？ なんで……ああ、読んだのか」

大した問題ではない。それこそ、八雲紫や伊吹鬼のような能力ちからを持つ妖怪でない限りは。もしもここにいるようなら大問題だが。

「……いえ、そうだった妖怪はいません。いるのは私が飼っている動物か妖精くらいです」

「動物？」

動物好きなのだろうか？ と頭の中で頷くとさとりははにかんだ笑みを見せた。

「ええ、いつの間にか増えていつているんですけど。あの子達は、私を恐れませんか」

「そりゃ動物だからな。寧ろ読んでほしいと思うくらいか」

確かに。喋れない物の言葉を聞けると言うことはそれだけ見ればとても素晴らしい事かもしれない。しかし、その能力の程度は如何ほどなのか。

「私の能力では表面意識を読み取る程度しかできません。しかし、問われれば考える物です。それがどんな秘密だろうと、それが心です」

「真理だな。でもそれくらいなら会話が楽って程度だろ。妖怪ともあるのが秘密の一つや二つばれるくらい、どうってこともないだろうに」

「……本気で言ってるんですね。そんな言葉を聞いたのは初めてです」

しかし、実際に話してみると何と無く話がかみ合わないような感覚。こちらの言いたい事は簡単に伝わるが相手との会話に困るのが難点か。

「……すみません。相手の考えることを読み、会話することが癖になっっていますので」

「謝る必要もないよ。わざわざ結界解いてまで俺が望んだことだし」

「そうですね。初めてです。そう言われたのは」

「初めて？ 伊吹辺りなら気にしなそうだけだな」

「自分は好きに見られているのに相手は晒さない。それが鬼にとつては嫌悪対象なんでしょう」

「ふん。相変わらず鬼は気がいいんだか頭が固いんだか」

嘘など、己らに課した何かに対して異常に厳しく、それでありながら人間との絆を取り戻したがると言つのに。

「……おつと。頼むから今考えたことは伊吹達に言わないでくれよ。また殴られちまうよ」

「……ふふつ。貴方、よく分からない方ですね。確かに心を読めると言つのに、まるで雲のように浮き足立っている」

「それを言つなら風と言いな。俺は舞風なんだから。お前さんも、せっかく可愛い顔してるんだから、そんな暗い顔ばかりしなさんな」

「そう、でしょうか。いつも私は恐れられてばかりの私が笑つたところで、どうせ気味悪がられるだけでは無いでしょうか？」

「はははっ。んなことある訳ないだろう。だって……」

だって、もっともっと、最低最悪な妖怪を、知っているから。

そこから先は考えない。秘密にするでもなく、それを頭の隅に追いやる。

「……ま、長生きしてれば色々、嫌な奴にでも会うもんだ」

「……それについては聞かない方が？」

「聞かない方がいいよ。聞いても、嫌な後味が残るだけだから」

あれはその名と共に念入りに封印したから、早々出てきたりはしないはずだ。そう考えるとさとの表情が安堵した物へと変わる。

「そうですか。少し気になりますが、辞めておきます。でも、こうしているとはやはり私の能力は嫌な物でしょう？」

「それに関しては断固としてノーだ。少なくとも俺は忌々しいとは思わないし、勿論さとりを嫌いになるなんて事も無い。それは君の生まれ持つての力だろう？」

「それも、そうですか……」

「達の悪さで言えば紫のがよっぽど酷いよ。境界を曖昧にすれば心の声と実際の声をどちらも出す事だってできるだろうし」

それだけ、彼女の境界を操る程度の能力は万能なのだ。境界を曖昧にすると言うことはその世界に解けて消すことも可能。創造と破壊すら思いのまま。俺だって結界がなかったら指一本で消滅しているだろう。

「……貴方は八雲紫と知り合いなんですか？」

「知り合いつて言うか……やべ」

「……！ 八雲紫の縁者にして協力者。それがここに立ち寄った理由なんですね」

「お願いだから誰にも言わんでね。紫にしても伊吹にしても絶対怒

られるから」

まあ、この少女にばれてしまってもそれほど問題じゃないだろう。話し方からしても嫌っている訳でも無いようだし。

「ええ、まあ。どちらかと言えば私は静かな場所が好きでしたから。そもそも私自身、追いやられたわけでもなく、自分の意思でここにいますので」

「そりゃ助かった。それはそうと、心を読み取られるってなんか新鮮な気分」

「……貴方が考えているような意味ではないと思いますが。私にか伝わりませんし」

「むむむ、ダメか。以心伝心」

「ダメですね」

上方修正。堅っ苦しい話ばかりもつまらないし、この際読めるだけ読んでもらおう。

「ではその幽々子さんという方は？」

「ああ、八雲紫の嫌なところばかり引き継いで、更には独特の冷たさ。アレは怒らせたなら絶対やばいタイプだね」

「では、先程言っていた藍さんは？」

「ああ、やたらと俺を嫌ってるみたいでな。あの鋭い視線は毛根が死滅すると思つたね」

「でも、確か白面金毛はくめんこんもつ九尾の狐つて大層な齡ですよ。それを下すほどの力を持つ八雲紫つて」

「……そう言えば、歳を聞いた事がなかったな」

一応女性の年齢は聞かないべきと考えていたから。聞いたのは人間くらいだ。

さて、大層長生きのはずの藍を下すほどの紫は何歳なのか。聞いただけで怒られそうだな。私は永遠のじゅっきゆうさいッ！ キリッ！ とかわれそうだし。

「え、永遠の19歳……プッ」

「ま、実際は大層歳食ってるんだろつなあ。俺が言えた事じゃないけど」

「……貴方は一体……ああ、自分でも分からないんですね」
「なんせ長生きなもんで」

歳を数えるのを辞めたのはいつだったか。この際だから俺も永遠の14歳でも名乗ってみようか……辞めよう。鼻で笑う奴らの顔が目に浮かぶ。

「おっと、つい話し込んでしまったな。そろそろ行かないと怒られそうだな」

「……そう言えば、貴方はここに何をしに来たんですか？」

「八雲から頼まれたのは面倒ごとの処理。挨拶は当然だし、まあそのくらいか」

「そうですね」

「ああ。あ、でも個人的用件がもう一つ」

「？……ッ！ 本気ですか？」

本気も本気。個人的な興味はこれが一番大きかったともいえる。

「それで、先代鬼神とやらは何処にいるかな？」

今の鬼神は伊吹。しかしそれは代理でしかない。では何故代理なのか？ 隠居するならまだしも、それなら代理を立てるのもおかしい。伊吹は寝ていると言っていたし。

「……鬼神はこの地霊殿から少し離れた小さな屋敷に居を構えています。知っている通り、鬼神は基本寝ています。どれほどの歳月を経ても、あれほどの物になったのかは、定かではありません」
「やっぱり強いのか？」

「強い……そんな次元で表せる存在ではないと、私は思います。半端な力しか持たない妖怪は彼女に近寄っただけで消滅します。彼女も恐らく、例外なく地底の妖怪と言えるでしょう」

そこまで言わせるほど強大な存在。期待は高まる。

「嫌われ者の鬼、か。それだけ聞けばらしい、けど鬼達は代理を立ててる辺り復帰を諦めて無いんだろうな」

「強い者が頭領です。何者かに下される時、鬼は代替わりします。しかし彼女はおよそ800年前、唐突に位を譲って放浪を始めたそうです。そしてその500年後、ここに行き着き眠るようになったそうです」

800年前、それに500年後か……偶然にしては出来てるな。

そんなことを思っているとさとりが訝し気にこちらを見た。

「出来すぎている、とは？」

「それはこつちの話だよ。とりあえず俺はそこに行ってみる。結果さえあれば消滅なんてしないさ」

「……そう。また、来てくれるかしら」

最後の最後だが、口にする必要は無いと思った。それが彼女の力なのだから。

勿論。また来る。たったそれだけを思い、俺はその場を後にした。

「意外と近いな」

それは地霊殿からそれほど離れていないところにあった。見れば分かる。目に見えてしまうほど、余剰揚力が辺りに漂ってしまう。当の本人は抑えてしまっているのだとしても、ちょっとしたことでそれに綻びが出来ることはある。

そんな、僅かな綻びですら、まるで陽炎のように世界を歪ませていた。

「星熊達は……どっか行ったかな随分長時間話し込んだし」

地霊殿の目前で別れた彼女達は皆どこかへ行ってしまった。それが何処かは分からないが、分からない以上鬼神のところへ行くのも悪くない。

屋敷の前に立ち、それを見上げる。規模で言えばそれは家と言った方がいいだろう。民家の、少し大きいか同じくらいしかない。しかし、その造りは値段の張りそうな物ばかりを使用している。金が余っているか、それともあまり執着が無いのか。

引き戸を開き、中を覗く。誰かがいる気配はしない。ように感じる。眠りながらも上手く気配を消しているのか、不在なのか。

「
」

何も言う気になれず、中へずんずん入っていく。一番近い戸を開けばそこにいたのは鬼一人。

鬼神、で間違いないんだろう。睡眠での気の抜けが原因か。彼女を覆うように禍々しいまでの妖気が存在している。心が、期待に膨らむ。

「……やっぱり、か」

躊躇いもなく、その傍に腰を身を寄せる。妖気はまるで拒絶するかのように俺から離れていく。何も変わらない。

最後に別れたあの時と、なにも。

「　　おい、起きろ」

肩を揺する。静かに声をかけながら。身じろぎし、薄目を開いてこちらを見る。未だ寝惚け眼のそれは確かにこちらを捉えた。

「……舞風？」

「ああ　おはよう。蓮姫」

そして鬼神　否、敬愛すべき最強の鬼、八斗蓮姫は目を見開いた。

「ツ……！　舞風えツ……！」

「おうふ……！」

盛大に抱きつかれ、顔をその胸に埋める。相変わらず胸は大きいし、抱きしめる力は強い。いや、強すぎる。

「ちょ、痛い。痛いって」

「舞風！ 夢じゃないわよね！！ 絶対に夢じゃないわよね」

「夢じゃない。夢じゃないから離しゃああああああ！！」

手が回された背と頭からメキメキと言う音が止まらない。再生力を持って尚現在進行形で壊れていくマイボデー！

「ああ！ ごめんなさい。でも、本当に本当よね？」

「本当に本当に舞風です。蓮姫が自分で俺だけ妖気の対象外になるように術式を組んだんじゃないか」

「会いたかった！ 舞風。何千。いえ何万年ぶり？」

「さてね。俺もずっと封印で時を過ごしてたし、正確なのは分からないな」

最後に会ったのはいつだったか。しかし彼女は俺の記憶に残るままの姿でそこに存在していた。何一つ欠けることなく。また強くなっただよっただが。

「そうね……そんなこと考えても仕方ないわ。話をしましょ！ 確か800年位前に貴方の封印が解けたのを感じて旅を見つけたんだ

けど、確か300年位前にまた貴方の気配が世界から消えて。貴方がまた眠りに着いたことが分かってから私」

「やることがなくなつたからここで寝てた、と」

「ここで待ってた、と言つてほしいわ。たったの数百年で眠るなんておかしいと思つて私、地獄の奴らに聞きに来たのよ。でもどいつもこいつも頭が固いから全員潰して聞き出そうとしたのよ」

なんだか知らないうちにこのお方はとんでもないことをしている。今回の地獄のスリム化つて蓮姫追い出すためなんじゃない？

「聞いたよ。伊吹に鬼神の位押し付けたんだつて？ いいのか本当に」

「伊吹、萃香のこと。いいのよ。元々興味なかったし。三千年くらい前にいきなり勝負挑まれて勢いで叩き潰したら勝手に祭り上げられたんだもの。一発で瀕死になるような奴に鬼の頭領が勤まるわけ無いでしょ」

「いやいやいや、どう考えてもアンタが強すぎるせいだから」

「貴方のせいよ。責任取りなさい」

「いやそりゃそうかもしれないけど」

一端。というよりは元凶に俺が存在するのは間違いないが、ここまでするとは俺も思わなかつたわけで。

「寂しかったんだから」

「」

ただ、その言葉だけは染み入るように心の中に解けた。彼女は封印され眠るように時間を越えた俺と違い、その身で数万の時を孤独で過ごしたのだ。

それでも、こうして何一つ変わらない対応をしてくれる。

「ところで舞風、聞いていい？」

「？ 何を？」

蓮姫の目は入り口へと向いた。そこには誰もいない。誰もいないはずだ。しかし、違和感。誰もいないのに、何かがいるように充満した妖気は移動していた。

まさかと思い、自分に結界を張りなおす。そこにいた存在を見る。

「そこにいるのは」

「こいし！ どうしてここに？」

「あっ！ やつと気付いてくれた！」

なにやらぼわぼわとしたように、少女、古明地こいしはあっけらかんとするようにそこで笑っていた。

「と、言う訳で、無意識に舞風の後を着けて来たの」
「どういうわけだよ！ 色々と過程が抜けてるぞっ！！」

そこにいるのは三人。俺に蓮姫にこいしに。暖炉を囲んで座り込んでいる。

こいしは諸事情で普通の姿が人に見えないそうなので、わざわざ彼女の周りに結界を張って蓮姫にも見えるようにしてある。流石の蓮姫もいきなり追い出すようなことはせず、不機嫌そうに睨みながらもどっしりと腰を落ち着かせている。

「で、誰？」

「あれだ、地霊殿の当主？ だかの妹。ん？ 姉か？」

「妹だよ」

「だそうだ。さっき知り合った」

まあ大して深い仲で無いのは確かである。しかしわざわざ着いてく

るとはどういうことか。

「そう。ならさっさと出て行きなさい」

「ええー。私もいいでしょ?」

「嫌よ。何が嬉しくて舞風との再会に水を刺されないといけないのかしら?」

「いいでしょ? 舞風?」

ここで振られても非常に困る。本当なら俺も断りたいところ、のだが、こうして俺達に突っかかってくる以上、彼女を見ることが出来る存在は本当に稀なのだろう。そう考えると無下に断るのも可哀想な気になってくる。

と、なると俺もまた蓮姫に困った視線しか遅れないのである。

「~~~~ッ! 分かった! 分かったわよ!!! 好きになさい!!!」

「うん! 好きにする!!!」

蓮姫から敵意が消え、僅かながら漏れ出していた妖力は姿を潜める。ややむくれながらそれでも、僅かばかりに漏れ出している妖気は可愛嬌としかいいようが無い。

ニコニコと笑いながらここにいることを決めたこいしは何かを切り出す様子も無い。こちらの話を知りたいだけなのか。多分蓮姫が気付かなかつたら黙って聞いていたのだろう。

「じゃ、改めて。語りますか。俺の800年を」

観客は増えた。せいぜい、おもしろおかしく話すとしよう。

「ま、こんなところかな」

目覚め、八雲に会った時のこと。月の人間に会ったこと。不老不死の娘と旅をして、変な神様に出会ったこと。能力に悩む、一人の少女のこと。それをなんとかするために、再び眠りに着いたこと。伊吹との出会いのこと。それからまた旅をして、仲間が二人増えたこと。そして、八雲に頼まれこうして地底に来ていること。

全てを話すならば一時間そこらで終わるはずの無いそれを、秘密にするべき場所と面白おかしくして簡略的に語った。蓮姫はそれに相

槌をうち、こいしは興味深そうに聞き、時に質問などを投げかけていた。それに返すのもまた面白いところだろう。

「そう、いろんなことがあったのね。とりあえず、その八雲紫つてのとはしっかりお話ししないとね」

「お手柔らかに、頼むよ」

蓮姫のお話では騒ぎごとになりかねない。それは身に染みていることだが、それにもまあ慣れたものだ。

「そう？ それはともかく、貴方はこの幻想郷に協力しているのよね」

「ああ、それが？」

「……本気なの。あの時と何一つ変わらないそれを認めるの」

「」

あの時とは俺と蓮姫が別れた日。希望を願った。しかし悲劇の結果。

こいしがあの時？ と聞き返す。だがそれに答えを返せない。

「あの時とは違うよ。蓮姫も強くなったし、地上の妖怪も随分強くなった。力はある」

「力だけではどうしようもない相手ってことは分かってるでしょ？」

正論。力だけでは勝敗は決まらない。それが現実だ。だから、更なる力で障害をぶち抜くしかない。

「だから、頼む。俺の余剰封印を、解除してくれないか？」

蓮姫が絶句する。そしてこちらを睨む。封印の解放が何を意味するのか。分かっているからだ。

「また戻る気？ あの時の、あの時の力を求めるの？」

「さつき、言ったよな。亡霊姫の話」

西行寺幽々子の、西行妖の封印の際。左手の封印だけで戦った。その時に初めて気付いた。雑魚ならそれで構わない。だが、伊吹レベルの強大な力を持つ妖怪には、このままでは敵わない。

「自分の力量不足を棚に上げるわけじゃない。でも、どんな力だつて、あつたらもつと上手くできたって思うときが止まらないんだ。最悪の場面でしか両方は外さないって誓う。だから」

「……舞風」

頭に温かさが灯る。くしゃくしゃと少し乱暴に、しかし優しく。

自分にとって、蓮姫の存在は唯一の心の支えだった。今では母のよ

うに想っているほど。だから、彼女がない間、寂しかった。一人でするたびは辛かった。

蓮姫がいたから、今こうして自分は前を向いていられるのだ。

「貴方は、少し周りを見なさ過ぎよ。貴方の隣にはいつだって貴方を助けてくれる存在がいたはずよ」

「……ああ」

「貴方が守りたいと想う者に。守られなさい。それで初めて形になる。守るだけでも、守られるだけでも意味が無い。共に守りあうことで、ようやく形を成す。貴方は、一人じゃないわ」

「……ああ、そうだな」

自分で自分を見失って廃人になりかけたとき、唯一手を差し伸べてくれたのは彼女だけだった。

それすらも払い、放浪し、帰ってきた自分を抱きしめてくれたのも彼女だった。

「貴方の力は危険よ。それを三均等にしてようやくバランスを保てる力。この世の理不尽そのもの。全てを開放するのは、貴方の存在に関わるわ」

「大丈夫。絶対無茶なんてしない、約束する」

「……そう。ならもう言わないわ。『天破』、『真撃』」

彼女の言霊で現れたのは二振りの剣。彼女が愛用していた物。それ

にそのまま途方も無い力を込め、封印の要とした。

「ねえねえ、何をするの？」

「ちよっと離れててくれ。すぐに終わるから」

そう言っただけで俺はこいしの頭をポンポン叩くと、腰の剣を抜く。

封印は蓮姫の持つ二本と俺の持つ一本で組まれている。剣の銘は分からない。だから勝手に名をつけた。

鬼の力を封印した剣が『天破』。烏天狗の力を封印した剣が『真撃』。そして、俺が持つ剣は『神風』と。どれも封印されし力に因んだ名ばかりを。

決して忘れることなどないように。

「外が騒がしくなってきた。急ぐよ。覚悟はいいね」

「当然だろ！ 術式解除！！」

部屋の中が光で埋め尽くされた。

光の中で見えたのは、大きな影。懐かしい。俺を助けてくれた大きな背中。

○
○

「 ああもう！！ 舞風は何処に行ったんだい！！」
「ぶつくさ言っていないで。さっさと止めるよ」

突如起きた嫌われる妖怪達の暴動。戦闘に立った妖怪は土蜘蛛。数

百年前にこの地底に封印された、特に強い力を持つ妖怪。その力は下位の鬼にも勝る。その上厄介な能力を持つ者も多数いるので、やりにくい。

「ったく。こんな時のためにアイツは着いてきたはずだろ？」

「地霊殿にも騒ぎは行ってるだろうし、気付くのは時間の問題さ」

舌を打ちながらも構える。手には釣瓶。キスメは戦う気など欠片も無いけど、放っておけば大事に至るからと保護したが、些かやりにくい。

「うるさい奴らね。妬ましいわ」

「そうは言っても、手は貸してくれるんだね」

「鬼に敵対したところで勝てるわけも無いでしょ。ならこちらに着くのが一番のはず」

「そういつことじゃなくてね。まあいいさ。ありがとね」

パルスイもまた共に戦っている。しかし、限界が近いのか。肩で息をしている状態だ。

負けはしないだろうが、このままでは争いが広まるだけである。早期になんとかしなければならぬ。

と、直後。立ち上がる光の線。それは遠い場所からである。しかも良く行く場所だけにそこはよく覚えている。

「萃香！！ あそこつて鬼神の家じゃないかい！？」
「んな馬鹿な！ 誰が鬼神に襲撃なんかかけるのさ」

鬼神の力を知らないものはいない。同時にあれが滅多に動かないことを知らないものも。しかし、彼女とて降りかかる火の粉くらいは払うのだ。手を出せばどうなるか分からないくらい、地底の妖怪も馬鹿ではない。

そして、その考えはある意味で当たったと言える。

「おやおや、随分派手にやってるわね」

「その声ッ」

「鬼神様！？」

気付けば頭上にはぶかぶかと飛んでいる者。誰も彼女の名を知らない。誰にも名を教えたがらないからだ。故に、彼女は鬼神、もしくは鬼姫と呼ばれ畏怖されている。

「萃香！ 勇義！ だらしないわね。それでも鬼？」

「アンタと一緒にしないでほしいわね！ 全力で山を動かそうとする私達を尻目に、片手で動かすような化け物と！！」

ずば抜けていると言うレベルではない。私は鬼神以上の妖怪を見た覚えが無い。大妖を一撃で粉碎し、退治に来た陰陽師は一割どころか一分にも満たない力で加減する。正真正銘の怪物とは正にこれだ。しかし、自発的に屋敷から出るなんて珍しい。いや、あの屋敷から出たところを見たのは初めてだ。

「まあいいわ。下がちなさい。後は私とあの子がやるわ」
「あの子……？」

直後、更に飛来する影。それは青年である。頭からは萃香よりも立派な白い角が二本生え、反って今にも両端が付きそつだ。髪の色は角と同じく真っ白だ。背に背負ったのは剣。

その鬼は鬼神の隣にふわりと止まり、涼しげな笑みを浮かべている。筋骨隆々と言えない。男の鬼にしては非常に細い。しかし、何故だろう。勝てないような気がしてならない。

「無意味に戦うのも面倒ね。一気に吹き飛ばすのは容易いけど……」
「このくらいなら僕の能力だけで十分だよ。下がってて」
「そう、怪我しちゃダメよ。晩御飯は久々に奮発するから、後で一緒に食べましょ。仕方ないからあの子も一緒にね」
「ああ、母さん」
「母さん!？」

青年がなにやら悪戯気にそう笑い、鬼神もまた笑ってそれを受け入

れる。

そして、妖怪達に向き直り、その手を掲げた。

「力を、奪え」

それは目には見えない何かの現象。辺りで戦いを続けていた妖怪達から何かが溢れ出し、青年に向かって飛来する。鬼達にまでそれが起きてるのが見え、無差別かと思いきや私や萃香、キスメにパルスイだけにはそれが及んでいないようだ。

力を奪えといった。そして今その手には莫大な妖力が存在している。あれが妖力を奪うと言うことなのだろうか。何故それが自分達には訪れないのか。

「……だ」

「え？　なんか言ったかい、キスメ」

キスメは七色に光る妖力を集めるそれを見上げ、呆然としたように呟いていた。

「あれ、舞風だ」

「……はあ！？　あれの何処が舞風だって言うんだよー！！」

「……あの、剣」

青年が腰に背負った剣。ここからでは少し見えないが、それは確かに舞風の剣だった。特徴的な年代物の剣。そう言えば服装も、左だけの腕輪も、そのままある。

と、そこで右の腕輪が無い事に気付く。だからどうと言うわけではないが、何も関係が無いようには思えなかった。

「……一体なんだって言うのさ」

「舞風、綺麗」

「……鬼神の隠し子？ まさか、ね」

「……どうでもいいけど、妬ましい」

かくして、その暴動は私達を除く、地底の妖怪、全ての鬼の妖力を奪うことで終わりを告げた。

そして、再び鬼神が表舞台に立った時でもある。

舞風と鬼神（後書き）

蓮 姫 推 参 ！

ついでに『僕』登場！（少しだけ）

何人かは疑問に思っていたやもしれませんが、前鬼神とは八斗蓮姫
その方です。ティーレの小説で文句なしのチートの存在。

題で分かると思いますが、実は今回はこれがメインでした。

個人的にはさとりとんといしちゃんをもっと書きたかった。地霊殿
一家は基本的に大好きです。ただ、都合上一名が名前すら登場でき
ていません。それについてはまた今度。

前後半に分けようかとも思いましたが、それだと前半が短くなつて
しまう恐れがあったので、分けずに投稿しました。

舞風の空白の過去がほのめかされる内容が僅かに。一行程度ですが、
次話は恐らくそれが主軸になる？ ってけーねが言ってた（焦）

今回は特に話の流れ方がいきなりすぎるかと思いますが、それが作
者のクオリティー。特に戦闘描写が苦手。

P・S

しかし誰もこの始め方にツッコミをくれない。

幕間（前書き）

投稿がままならない。というより少し詰め込みすぎて文字数が多くなった。

一週間ぶりの投稿とか、いくらテスト週間だからって……でもやばい。主に二教科くらいやばい。

と、これはあくまで、ほんの気まぐれで、「仕方ないから入れてやるか」程度の感じでいいのですが、評価をつけていただけるとより励みになります。

と、言うことで、幕間スタート！

幕間

朝である。

そう告げたのは俺の体内時計。毎日朝ごはんの時間とおやつ時間にだけは敏感である。

「…………んあ？」

周りを見回してみればそこら中に横たわる酒瓶。酒の匂いがまるで染み付くかのように匂っている。周りには見慣れた鬼。それに昨日出会った妖怪。それを見てようやく前日に起きたことを思い出し、ため息をついた。

「…………俺の体内時計が、狂った」

これが封印解除の弊害だと考えてみるとちよつとなんとも言えない気持ちになった。

「結局、アンタって一体なんなんだい？」

「秘密。絶対守秘義務」

「そんな事言つて大丈夫？」

「……ぼ、暴力には屈しないっ」

一昔前の恐喝　この場合は未来と言うべきか　のようはこちらに攻め寄る伊吹と星熊。流石に正体については完全に信用できる存在にしか話せない。

よって俺が首をふるふると振りながらじりじりと足を戻す。背中に壁がぶつかった時、思わずはうっ！と漏れた声。しめしめと歪む二人の顔。

その顔の間からニコニコと笑いながら腕をバキバキと鳴らす蓮姫。

「アンタ達？　舞風に何してるのかしら？」

びくつと体を震わせて恐る恐る振り返る鬼二人。

「い、いやっ、これはだね」

「いつもの、いつものことだって」

「へえ、いつもこんなことやってるの……歯あ食いしばりなさい」

有無を言わせず振り下ろされる鉄拳。伊吹と星熊終了のお知らせ。

「ふー、助かった」

「でも、実際貴方何者？ あの鬼神に親類なんて聞いた事が無いのだけだ」

そう尋ねて来たのはやや気分が悪そうな水橋。疲労に酒が混ざったか。その後ろではキスメが大の字ではたんきゅーしている。

「ま、それに関しては流石に実際の母って訳じゃないよ。会ったときから俺が子供で蓮姫が大人だったから自然とそういうのに似た関係になっただけ」

「……それだけでも随分規格外なんだけどね」

それもそうだろう、と無意識に頷く。誰が俺のように力の弱い妖怪と最強の鬼神が家族のような関係だと考えるか。

「……ん？　そういえば……」

寝る前までいた一名がいないことに気付く。俺は周りを見回してみる。確かに自分に結界は張ってあるのに、姿はみえないのはどういふことか。

おもむろに転がっていた釣瓶を掴み、中を覗いてみる。案の定、こいしがまるくなって眠っていた。無意識にでも入り込んだのだろうか？　不思議である。

そんな、朝　　正確には昼　　の出来事である。

「　　で、この妖怪が今回の首謀者なのか？」

伊吹はこくりと頷いた。そうしてすぐに瓢箪を傾ける。あれだけ飲んだのにまだ足りないと言うのか。この酔いどれ幼女は。

そんな事を思いながらも俺は小さな独房の中で両手足を縄で縛られ、転がされた妖怪を見る。やはりと言うかなんと言うか。今更な事は既に理解しているが、少女である。

金髪の髪を雑に下ろし、その顔はやや泥で汚れている。纏っていたのは茶と黒の服、大きく膨らんだスカート。見ようによっては、蜘蛛、を模しているようにも見えるのだろうか？

少女は土蜘蛛。数百年前に地底に封印された妖怪の中で、その性質は好戦的である。とは鬼達の談。

そんな少女は親の敵でも見るかのようにこちらを睨みつけ、その目を逸らさない。ただし、向けているのは俺でなく伊吹である。単に俺の顔がワれていないことが理由なのか。

「さて、そんなじゃ聞くけど。なんで暴動を？」

一応名目は尋問と言うことで今ここにいる。しかもわざわざ独房の中に入ってまで。それを何故、俺がやらせられているのはいまいち分らないが、一応八雲に面倒ごとの対応を頼まれている以上はやることやらにゃならんのだろう。

……まあ、大体の予想はついているのだが。

「……アンタは？」

「舞風。一応鬼の引越し担当者、とでもいうところかな？」

正しくは鬼の引越し”の際の面倒ごと”担当者、である訳だが。それをどう受け取ったかは分からないが、血走った目は伊吹から俺へと向けられた。人の怨を受けるのはあまり慣れていないのだけだ。

「……アンタ達の目的はなんだ？」

「いや、今聞いてんのかさだから。出来れば先に答えてほしいかな、なんて思ったりする」

「答えるっ！！」

鬼蜘蛛の目は鋭い。昨日奪いつくしたはずの力は一夜である程度戻ったのか、その身に妖気を纏う。ブチン、とその両手足を縛っていた縄は切れ、こちらに臨戦態勢を向ける。意味無いとは思ったけど、もうちゃっと働け縄。

「理由は、そうね。多人数の方が楽しいから、かしらね」

俺の背後から現れたのはそれはそれはとてつもない妖気を滾らせていた蓮姫様でした。普通から大妖まで、彼女を見れば大半が戦意を喪失してもおかしくはないだろう。それだけの力を彼女は有している。

それは目前の鬼蜘蛛も例外ではなく、漏れなくフリーズしている。その顔はそう、顔面蒼白である。結局、彼女のいま持っている力は蓮姫に見れば非常に微々たる物である。言っては悪いが、それこそミジンコと象と言っていいほど。

じゃあお前はどうかと聞かれたら俺もそうですとしか言えない。泣ける

まあ、実際はそういうことなのである。

鬼と言うのは、非常に強力な種族である。単体で雑魚妖怪など軽く葬れるほどに。そんな鬼が、わざわざ疚しい事を考え、地底の妖怪を利用する理由も無い。嫌われているのだから一般常識的な範囲であり、その枠に鬼は収まっていない。

結局は、そういうことだ。

「もしもお前が、自分達の存在を危惧して暴徒を起こしたって言うなら、それは勘違いだよ」

「……？」

「基本、鬼なんてのは道楽なのさ。嘘を許さないところだって妙に堅気だし、それでも細かいことは気にしないやつばかりさ」

「鬼であるアンタがそれを語るかい？」

「いいんだよ、俺は。暫定的には鬼じゃないんだから。なんなら聞いてみればどうだ？ 鬼は嘘つかないんだぜ？」

鬼蜘蛛の目は蓮姫へと向かう。しかしそれに首を横に振ると親指で伊吹を指した。現鬼神は伊吹だからな。

「……鬼神様言ったことを否定したらそれこそ嘘をついたようなものじゃないかい。勿論、アンタ達はもうこの地底の、繁華街の住人さ。悪いことしたらしょっぴかれて、いい事したらそれなりには感謝されるような。寧ろ、そっちが先住民みたいなもんだし、よろしくするのは寧ろこっちさ」

「その言葉、信じてもいいんだね」

「当然。鬼に二言はないよ」

実に男前な伊吹。カツコいいとは思いながらもそのなりのお前が言ったらアウトだろ的な物が心中から消えない。

「それじゃ、さっさと罰でも決めるかい？」

「ば、罰って……」

「言つたる？ 悪いことしたらしょっぴかれる。今回も事が事だ」

やや色が戻ってきていた鬼蜘蛛の顔色が再び真っ青になったということはすぐに分かった。それどころか差し伸べられた手が実は幻でした、並みの感情を抱いているのではないだろうか？

「よし！ それじゃ、今日は私の酌でもしてもらおうかしら」

「って鬼神！ 何横から勝手な事言ってるんだよ！」

「いいじゃない。鬼の宴会に参加するってことがどれだけの物か。」

それだけでもずいぶんな罰になるだろう?」

それを否定できない俺である。実際、飲んで飲まされの絶望的ループは軽く死ねる。

「っと、そう言えばまだ名前も聞いてなかったね。なんて言うんだい?」

「黒谷、ヤマメだよ。鬼神」

結局、今回のことはちょっとしたいざござとして処理され、特に不遇な扱いを受ける物もいずに収束したことになる。

と、まあそんな事があつたわけだが。

「……昨日の今日だと言うのに、随分状況が変わっているんですね」
心の中でそう語る。それがまあ彼女に対する応対である訳だが。ためしにこちらは口を一度開かず会話をしてみようなんて考えが浮かんで、こんなことになっている。

「……鬼神に余計なことをして消されたりしてないか少し心配ですが、まさか顔見知りとは思いませんでしたよ」

あれ？ 俺そんなこと考えたっけ？

「いえ、お隣が教えてくれました。あの娘はあれで情報収集は得意ですので」

「ふーん。やべ、喋っちゃった」

「……違和感があるのなら実際に話した方がよろしいですよ」

そういうわけにもいかない。男に一言はない。さっきの伊吹の真似だけ。

「……貴方も大層変な妖怪ですね。いきなり押しかけたかと思えば、まさか事後報告ついでの雑談のためとは」

違う。雑談がついでなんじゃない。事後報告がついでなんだ。

「そうですか……」

なんだか目が冷たくなった気がする。やめてっ！ そんな目で見ないで！ 僕悪い妖怪じゃないよっ！

「その在り方はともかくとして、大多数の妖怪は悪と認識されているはずですが」

だけど、それは人間の偏見だ。まあ人間からしてみれば悪戯や捕食の対象だったりするし、いい印象は持たれないかもしれないが、それこそこっちから知ったことじゃないはずだし、弱肉強食って言うか、まあ仕方ないことなんじゃないだろうか？

「……意外ですね。八雲紫の計画に協力している以上、貴方も人間が好きなのかと思いましたが」

勘違いしてもらっては困るが、俺は人間は好きだよ？ 食ったことも無いし。これはあくまで一般論、誰かを納得させる詭弁に過ぎない。食われる側からしたらいちいち理由言われても困るだけだろう。

……ま、色々在るのだ。長生きしてれば、ね。

「貴方と言う妖怪は、本当によく分からないですね。ぼんぼんと言葉が浮かぶのに、それは言っていることと矛盾がありますし、結局本音はなんですか？」

「笑えよ。古明地さとり。何を持っているにしてもさ。多分、何にも無いよりはいいはずなんだ。沢山失つて、嫌になつても、お前は結局お前なんだからさ」

やや呆けたような様子でさとりが眉を潜めた。蓮姫に会つたからか、昔のことばかり気にしてしまう。

「貴方はいったい何を」

「失つた者の、ただの懸念さ。幸せは、逃げていくからな」

少なくとも、自分はそうだった。分不相応を望んだ結果がそれだったのか、今となつては考える気もおきないが。

「さて、説教おしまい。さとりも今日の晩の宴会に来ないか？」

「……私が、行っていいんでしょうか？」

「いいんだよ。俺が許可する」

その時のさとりの笑みは見た目相応の、柔らかい笑みであった。

○
○

鬼神。

小さな屋敷の中心に佇み、静かに目を閉じているその姿には欠片のざわめきも存在していない。他の者は皆出払っているようで、室内は非常に静かだ。

と、

「いるんでしょう？ 出て来たらどうかしら？」

「……気付かれない自信はあったのだけれど」

そして、僅かな亀裂を更に広げ、私一人が通れるほどの隙間を作り上げる。それを潜って未だ目を瞑ったまま佇む鬼の前に下りた。

「初めまして。私は」

「隙間妖怪の八雲紫。でしょ？ 有名よ。舞風が随分と世話になっ
たみたいね」

その身に警戒と言う様子は欠片も見られず、至って自然体のまま、その目を開いた。金の髪は手入れを怠っていないのか、流れるように肩まで下ろし、星熊勇儀のように一本だけ角が顔を覗かせている。

「そう、自己紹介は不要のようね。出来れば貴方にも名乗ってもらいたかったのだけれど」

「私に名は必要ない。ただの前鬼神で十分。私はあの子以外に私の名を呼ばせるつもりはないわ」

……これはまた随分な熱の入りようである。結界山の、アキより酷いのではないだろうか？

それにしても、違和感が起きるほど場が澄んでいる。音が聞こえない。声と声だけが場に響く。

「そう、では今は鬼神と呼ばせてもらいましょう。貴方は舞風とどういった関係なの？」

「本当なら一言で言えるほど簡単な関係では無いけれど、強いて言うなれば親と子、かしらね。あの子はそう思ってくれてるみたいだし、私も同様に思っているわ」

「……随分と絆が深いのですわね」

「ええ、なんてったって。数万年以上の付き合いだからね」

自身あり気な笑みを浮かべた。

……なるほど。ならばそこまで仲がいいのもうかがえる。同時に、沸いた問題もあるが。

「して、何用かしら？ 貴方ほどの者が私に気に留めるほど暇とは思えないけれど」

「その暇をなんとかやりくりして、ここに参ったのです。どうか無下になさらないでいただけますか？」

「……聞こうかしら。その件、私達に關係あることなのでしょう？」

鬼神はやや表情を歪めるとやや不機嫌そうにこちらを睨んだ。

本当なら今すぐ立ち去りたいが、懸念を残したくは無い。私は恐る、それを口にした。

「遙か昔に存在した『希望の里』。これに聞き覚えは」

直後、私は考えられないほど濃密な妖気に囲まれていた。思わず悲鳴をあげそうになったのを必死に堪えた。

目前の鬼神は不機嫌を通り越し、射殺されそうなほど敵意を含んだ鋭い目でこちらを睨んでいた。そう、それだけ。しかし気付けば体の至るところより冷や汗が流れ、己の死を幻視するほど。

「答えなさい。どうして、貴女がそれを知っているの？」

今にも掴みかかってきそうな勢い。理由を口にしようにもそれすら

震え、発言が儘ならない。それでも時間を少しかけ、私はなんとか言葉を口にしようとする。

「し、知り合いの、残した資料の中に、残ってたのよ……ッ！」
「ッ！……そう」

風船がしばむ様にその敵意や妖気は姿を潜めた。それだけでその空間が天国に感じてしまうほど。いや、アレが地獄だったのだ。

とんだ規格外だ。萃香との差が大きすぎる。いや、そもそも強すぎるほどの妖気。何故今までこれほどの妖怪が姿を潜めていたというのか。

「……わざわざ聞きに来るということは、それに私か舞風の事でも書いてあったのでしょうか？」

「正確には、それらしき存在。あなた達に似ている妖怪、ですが」

鬼神はやや放心した様子で虚空を見つめていた。過去を懐かしんでいるようにも見えたが、すぐにそれは消え、こちらを睨む。

「存在した年号は不明。場所も不明。そもそもあったことすらも分からない。しかし、貴女の反応を見る限りは存在したのですね。『

希望の里』は」

「……ええ、確かに存在していた。今はもう、ないけれど」

「文献の著者は生死すら不明。故に、書いた者に聞くことは出来ま

せん。そもそも死んでいる可能性もある。教えていただけませんか。どうして、『希望の里』は滅びたのか」

それは舞風物語という物語よりもっと古い文献。それに名は無い。文献の再生もほぼ不可能で、唯一残っていた文末だけが読み取れた。

そこに残されていたのは、過去、『希望の里』と言う妖怪の隠れ里が存在していたこと。そこには多数の妖怪があり、強大な二匹の妖怪に守られ、管理されていたこと。片方は鬼、しかもう片方には詳細なことは分からず、姿は人間の子供であったこと。

そして、著者が僅か一日離れている間に、『希望の里』が滅ぼされていたこと。

「……本当ならそれは、私一人で進めていい話じゃない。でも、今のあの子には聞かせられない、か」

目を伏せ、悲しげに。いや、何者かを哀れむように。そんな目をしていた。

「約束しなさい。決してあの子を裏切らないことを。そして時が来るまでこれから話すことを内密にすること。今の世界に、私の次に信じられるのは恐らく貴女。もし反故にしたなら、私は全力を以って貴女に敵対する」

「分かりました。誓いましょう。聞かせていただけますか？」

鬼神の目に覇気は失われていた。その目に残されていたのはこの世の闇を敷き詰めたかのような、濁りきった黒。

「希望の里を作ったのは彼。妖怪を集め、認識を阻害する結果を張り、それが妖怪なら来る物を拒まず、去る物は追わない世界の仕組みを作り出した」

「人間がない、妖怪だけの世界を、本当に？」

「妖怪を一箇所に集めてしまおうと、その頃の妖怪は強い力を持っていたから、外で恐れが失われることはなかった。全員が全員、里に集まった訳でも無いし。舞風によって妖怪たちは一致団結したわ。それだけ聞くと夢物語が妄想にしか聞こえないだろうけど、確かにあの時はそうだったの。今思えば穴だらけなプランだったけれども」

それは、自分の常識を真つ向から否定する言葉だった。妖怪とは利己的で、自分勝手に、人を食らう。それが今の妖怪だ。

「一致団結が出来た理由の一つに、皆それほど大妖と呼ばれるほど強い力を持つてはいなかった。でも数は千を越えるほど。皆、舞風を信じ、彼をリーダーとして認めた。希望の里は私達から見ても順調なスタートを迎えたわ。妖怪は人を食う、など言っても人を食わねば生きれないわけではない。食料等は肉や魚、果物で遣り繰りし、襲う必要も襲われる心配もなにもなく、まるで人間染みた、穏やかな生活を送ることができた、はずだった」

「はず、だった？」

鬼神の瞳が閉じられた。その手は小さく震えている。こうして傍にいて分かる。抑えきった、故にどれほどか知りたくも無いほどの怒り。

「想定外の事態……いえ、想定はしていたのよ。でも、その対策が完全に出来上がる前に、時は来てしまった。

結論だけ言っわ」

蓮姫の目は歪んだ。苦しげに、憎憎しげに、悲しげに。搾り出すような声と共に、それを言った。

「『希望の里』を滅ぼしたのは 最低最悪な性質の、一匹の妖怪なのよ」

「……………え？」

今、なんと言っただろうか？

たった一匹の妖怪が？ 『希望の里』を？ 千もの妖怪の世界を、壊したと？

「詳しいことを今語ることは出来ないわ。少なくとも、今すぐ危機が訪れる問題でもない。また、あの子の気持ちの整理がつくまで、待って頂戴」

「……………一つだけ聞かせて頂戴。その妖怪は、まだいるの？」

そんな、存在その物を危惧するような妖怪が、まだこの世に存在し

ていると言つならば……

「ええ、まだ生きていますわ。舞風によって封印された状態ですけど、舞風の目覚めと同期し、それもいつかは目覚める。でも、心配は必要は無い」

「……その根拠は何処に？」

「私が戦うから、よ。それでは不服かしら」

見れば不敵な笑みを浮かべてはいた。しかしそれは見かけだけであることはすぐに分かった。そんな余裕が、その目にうかがえなかったからだ。

「数百年の内には目覚めるはずよ。そして舞風もそれには気付いている。あの子が完全に心の整理をつけるまで待つて頂戴。もし、それまでに間に合わない場合は私だけの手で決着をつける」

「……貴女を心配することなんて、私にはおこがましいだけじゃないの」

圧倒的に自分より格上の相手の勝利を心配する必要は無い。増して、彼女ほどの妖怪を未だ嘗て見たことが無い。それほどまでの妖怪が大丈夫だと豪語するのだ。信じる他あるまい。

「そういうことよ。八雲紫。これからも舞風をよろしく頼むわ」

「……ええ。あの子には恩もあるもの」

まだ返しきれしていないような。大きな恩が……

○

○

「 灼熱地獄？ なにそれこわい」

実は地霊殿は灼熱地獄の上に建てられたとの事。足元が妙にほっこりするような気がしたのは気のせいではなかったと言っのか。

「いえ、それは気のせいです。いくら灼熱地獄と言えどそこまで酷くはありません」

「で、では俺の足元がほっこりするの？」

「知りません。地底が身に合っているのでは？」

うむむ。より星の深域に近いから活性化しているのだろうか？ いやしかし、それにしたって……

「？ 星の深域やらなにやらと何を考えているのです？」

「いやね、まあそれなりに俺は星に縁のある存在だから。深いところではより力が出せるかな、なんて」

なんせ、元は妖精だからね。俺。なんてちょっと重要なことを暴露してみる。さとの表情が目に見えて驚く。

「妖精！？ 貴方がですか！？」

「元よ元。昔は大妖精とか名乗ってたりしてたもんよ」

「……一体どうすれば一介の妖精がそれほどまで強くなれると言っ

のですか」

ハハーン。一日三食10時間の睡眠を欠かさねば楽勝よ。

「……まあ、いいでしょう。灼熱地獄は私の飼っている子が管理しています」

「スルーされたことをどうでもいいと思うほど凄いこと聞いた。灼熱地獄をペット任せって一体どういうこつたい！」

「大丈夫ですよ。あの娘は自分の仕事を忘れることだけはしませんから」

「……へえ」

いるんだねえ。そんな仕事に対して真面目な妖怪なんて。見るからに真面目そうな形なりをしてるんだろうな。エリートキリッ！ みたいに眼鏡とかかけてそう。

「……そういう意味で言った訳ではないのですけど、いいでしょう。地底の名所とも言える灼熱地獄ですが、見学なさりますか？」

「灼熱地獄……暑そうだから行きたくないような、でも一度は見てみたいような……」

「ただ、そこでは人間の死体が焼かれていますので、貴方にとっては嫌な物かもしれませぬ」

「なにそれこわい」

一体それを何処から持ってきてきているのか、非常に疑問なところであ

る。

しかしまあ、珍しい物であることも変わりない。一度見てしまえばそれで観光になるし、いいことだろう。

「じゃ、行ってみようかね」

「そうですか。燐。お燐？ いませんか？」

「はい、ただいま」

まるでそこにスタンバイしていたかのように、扉を開いて入ってくる猫耳少女。始めてここに来たとき出迎えてくれた子だ。確かこいしもお燐って呼んでたな。

「……え？ 貴方、こいしに会ったんですか？」

「あれ？ 言わなかったっけ？」

そう言えば、騒動以外の話は割りと簡単に話したからなあ。抜けていたかもしれない。それほど意外そうな顔されても困るのだが。

「……まあ、覚りの能力を無効にできるくらいですし、あの子の”

無意識”も消せてもおかしくは無いですね。次に会った時は顔を見せるようにと言っておいてくれませんか？」

「あいあいさ」

まあ、多分宴会に来ると思うけどな。こいしも。

まるで捨て台詞の如く、それだけ考えると俺はドアをバタンと閉じた。

「……さて、連れて行ってもらおうかね。灼熱地獄」

「あいよ。案内は任せな」

そうして歩く。地霊殿の未だ踏み入れない奥へと更に進んでいく。心なしか、気温が高くなってきたような気がしなくも無い。

「アンタ、舞風って言ったよね」

「ん？ まあ、そう名乗ってるけど？」

「アンタはさとり様を、その、怖いとは思わないのかい？」

お隣はやや恐る恐る尋ねた。少しだけこちらを振り返っており、片目だけが見える。やはり不安に揺れているようにも見える。

「まあ、多分本来なら忌避されてもおかしく無いんだろうな。俺にはちょっと分からんけど」

「どうして？」

「そうだな、深くは考えて無いけど。俺、才能とか生まれ持った物や考えで人の見方を変えるのが嫌いなんじゃねえかな？ どんな親の下に生まれようと、どんな才能を持って生まれようと、それがどんな考えを抱こうと、それはそいつのせいじゃないだろ？ 悪用

してるんならともかく、普段通りに生活するような奴を嫌うって、なんか間違ってる気がするじゃん」

元の方がどれだけ違おうと。
仲間とは違う考えを抱くのだとしても。

それが否定される理由にはならないはずだ。だって望んでそうなた訳じゃない。それを正しいと信じて、信じたくて、生きてきたはずなのだから。

そんな考えに、『』と『』は救われたのだから。

「ま、これからも仲良くしたいと思ってるよ、さとりとは。こいしは、そうでなくても輪には入ってくるだろ。拒否はしないさ」
「……そう。アンタがここに来てくれて、本当に良かったよ。さとり様も喜んでる」
「そりゃ嬉しいことで」

お燐が安心したように笑った。いつの間にか道は一本道になっていったが、それを進めば進むほど気温は増しているような気になってくる。どうしてお燐は涼しい顔を出来るのか。

やがて、そこがトンネルの中であったかのように錯覚するような光が道の先から零れだしていた。

「うはーっ！　これが灼熱……地獄？」

灼熱地獄。個人的な印象を膨らませておいて非常にアレなのだが、正直言つてそんなもの見当たらない。

巨大な部屋の中心に、なにやら轟々と熱気を上げる穴が存在しているだけである。だけ、と言つ言い方も酷いか。気温が想像していたよりも低いのは正直助かつたと思う。

「これが灼熱地獄さ。正確には、あの穴の下が、だけどね」

「なるほど。まあそんな地獄と言つほどの暑い場所でどんな管理方法をしているのかは疑問に思つてたけど、そういうことが」

それに寄つていくと熱気に隠れて見えなかつたか、反対側にいる一つの影に気付く。遠目では大きな翼を持った者である事くらいしか分からないが。

「あつ。お空ーッ！ー！！」

「……お空？」

お隣に声に気づいたのか、影は翼を広げるとこちらに向かって飛んでくる。その姿形は少女である。最初はやや笑みを浮かべているようだったが、こちらの姿を認識した途端、なにやらムスツとした表情になる。

お燐と言い、お空と言い、なんだか時代を感じる呼び方だなあ、なんて思いながらこちら側に降り立った少女に歩み寄るお燐の後を着いた。

「……お燐。そいつは？」

「さとり様に来た客の一人だよ。あたい言ったよ？」

「そうだったけ？」

「そうだよ！！」

そんな一通りの会話をするとやはり怪訝そうに見る少女。それには無表情でこそないが、こちらに対する興味が無いように見えた。お空と言う名らしいが……

「舞風だ。本日は灼熱地獄を見学に参加した故」

「そう」

「……返答短え！アレ？なんで？ここまで嫌われること私なんかしました!？」

相も変わらず、どうでもよさげな少女だったが、なにやら俺の言葉を聞くと豆鉄砲を食らったような顔になり、お燐へと目を向けた。それはなにやら助けを請うているようにも見えたが。

「……れい うじ かつほ霊鳥路空。見学は勝手にやって」

「う、うむむ。ガイド無しの個人観光って……」

「ま、まあ、分からないところはあたいが教えてあげるから」

そう言ってお燐が苦笑いを向けてきた。それを聞いてなんとか立て直した俺は更に穴に近づき、膝をつくとそれを覗き込んだ。

穴の底は何メートルあるか検討もつかない。ただ、果てに何か点滅しているようにも見える。ややからくりを利用しているのか、穴は何処か機械的である。

「うおー。こえー。灼熱地獄こえー」

熱気だけで顔が溶けそうである。手でも出したらどうなることか……

727

「あじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃっ!」

本気で燃えた。じゅ、とか言いながら俺の手が燃える。真っ赤にじやない。ただもう、やけどである。再生するけどやけどである。

「こいつ馬鹿なの？ お燐」

「お空。これでもお客だから」

お燐、これでもとか言っつな。あとお空。お前はストレート過ぎだ。ちよっと自重しろ。

もう、灼熱地獄の上に手を翳したりするもんかと心に誓いながらもふと気になったことを尋ねてみることにした。

「お前ら二人ともさとのペット……もとい飼われてるんだよな」

「そりゃあね。さとり様とはここが地底になる前から一緒にいるよ」「ほほう……じゃ、親も同然か。いいな。なんかそういつの」

「そうかな？ そう言ってもらえると嬉しいけど……」

本当に、羨ましいと思う。本来ならそんなこと思わないのかもしれないが

「ああ、羨ましいな。ずっと、大事な人と一緒にいられるなんて」

零してしまった言葉を自分で嘲笑う。沸いたそれは羨望じゃない感情だった。ただ、言わずにいられず、溢れてしまった。それだけの一言……

「さて、そろそろ行こっかな」

「……アンタって、とびつきり変な奴だね」

「そういう感じの言葉は褒め言葉として受け取るようにしてる」

「褒め言葉だよ。アンタみたいな奴だからこそ、さとり様も気兼ねなく話せるのかもしれないね」

それでも、まだ完全にそうだった訳ではない。まだ距離はある。主に向こうの抜け出せない想いがあるのだろうが、それでもこれから距離は縮めれば言い。

「じゃな。お空とやら。見字させてくれてありがとうとさん」
「……うん」

その感情は読み取れなかったが、初めのように無関心の無表情では無い気がした。ひらひらと少女に手を振り、その場を後にする。

「……賑やかだねえ」

確かに宴会をするとは言っていたが、場所を選んだ方が良かったのではないだろうか？ 蓮姫の屋敷では元々多人数での生活が考えられていないので、正直足場が無い。

「……これなら地霊殿に呼んだ方が良かったのではないですか？」
「いや、うん。それは俺も思うけど、言うな」

誘っておいたさとりを初め、その場には蓮姫は元より伊吹と星熊。キスメに水橋。それと鬼達にせつせと酌をしている黒谷がいる。姿が見えないこいしは……まあどこかに隠れてるんだろう。

ためしに結界を張って探してみると、何故かキスメと共に釣瓶に入って顔を覗かせていた。キスメは気付いていないようだが。

「あの子はいましたか？」

「ん？ ああ。キス 釣瓶落として一緒に釣瓶の中」

指を指して教えると目が合う。なにやらムツとして釣瓶から抜け出すとこちらへ駆け寄ってくる。

「ちょっと、教えないでよ！」

「今は俺の目前辺り」

「ねえ！ 聞いているの!？」

「そうですか……」

手をいっぱい振り上げてこちらに講義するこいしをとりあえず無視してそれとなく、場所を教えてやる。姿を晒してやるうかとも考えたが、それには及ばないと言つようにさとりはこいしがいるであろうところを見る。

「こいし……聞こえてますね」

「聞こえない」

「まあそんなことは関係ありません。聞きなさい」

なんでか酷いねさとりさん。そうは思つても今この場で自分が余計なことを言つのも悪いだらうと黙って見守ることにする。

「貴女が覚りの力で人に嫌われ、恐れられることを拒んで、第三の瞳を閉じた事は知っています。でも、それについて今まで一度も咎めたことはありません。それが何故か知っていますか？」

「……………」

「それはですね。私もまた、覚りの力が恐れられ、嫌われることを知っていたからです。この瞳を閉じたら、そう思っていたこともあります」

「……………?」
「ですが」

さとりは柔らかい笑みを浮かべていた。その目は確かに見えないはずの、こいしの姉を見返す目を見つめていた。

「私達の能力を嫌わなideいてくれる妖怪だって、います。お隣やお空だって本心で貴女を心配していますし、私だって勿論そうです。舞風だって、少しおかしな方ですが、きっといい友達になれると思います。だから 次に顔を見せてくれる時は、笑顔を見せて」

「ッ！」

言葉を聞くことに耐えれなくなったか、それとも終わったことを見越してか。こいしは俺の傍を通り抜けて蓮姫の屋敷を飛び出していた。

「頑張ったな。さとり」

「……………ええ、あの子にも届いてくれればいいのですが。能力を嫌うということは自分を嫌うことと同じ。そんなことに、ようやく気付けた私のように」

「届くか届かないか、ね。ま、アフターサービスくらいは受け持つてやるよ」

皆が宴会で騒ぐ声を背に、俺もまた蓮姫の屋敷を出た。さて探そう

と思う前に、その姿は見つかった。

こいしは屋敷のすぐそこ、川のほとりに座り込んでいた。それがまた子供にしか見えず、思わず笑みを浮かべた。

「見事に黄昏てるな。そんなにさとりに言われたことが効いたか？」

「……………うん」

「能力、嫌いか？」

「……………うん」

「そつか……………」

ゴロリとそのそばに転がり、空を　　と言っても地底だから見えな
いが　　見上げる。

俺には覚りの気持ちは分からない。故に知った口を聞くのはきつと
彼女には失礼なことなんだろう。

「そつだな……………俺もさ。嫌いだったんだ。能力。」

「……………え？」

思い浮かぶ、あの時のこと。後悔しないためにした行動の結果が後
悔に繋がってしまった、俺が今の俺になった時のこと。

「とある事情で、とんでもない能力を手に入れてさ。でも素直に喜
ぶことが出来なかった。それさ、友達を犠牲に得た力だったんだ」

「……………」
「そうまでして得た力。本当はそんな力欲しくなかった。友達と一緒に笑って暮らせればそれでよかった。でもどうしてかそうなっちまった。虚しかった……でも、捨てる訳にもいかなかった。否定して、なかったことにすれば、それがまるで二人を否定することになっってしまうような気がしたから」

目を閉じて、記憶を掘り返す。今では臆気にしか思い出せない、楽しかった日々。今が楽しくないと言う訳ではない。でも、あの頃は何よりも輝いて見えた。

「その友達は、どうしてそんなことをしたの？」

「……………俺を助けるため。消えかけていた俺に、その全てを擲ってくれた。嬉しかった。でも悲しかった。いろんなのに怒りをぶつけて、それでもそばにいてくれたのが、鬼神だった。きつとそういうこと……………」

「自分を嫌うな。それは自分を好きでいてくれる人物を否定することに繋がる。なんて、ちよっとした名言だ。こいしは、そうなるなよ」

今の状態も、”二人”を拒否しているように見えるのかもしれない。でも、根本的な部分で繋がっているから。だから、俺は寂しくない。そう思えるのだ。

……………なんて、詭弁で偽善で言い訳にしか聞こえないか。

小さく笑う。自嘲の笑みを浮かべる。心配げな顔をするこいしを見て今度こそ笑う。嗤うではなく笑う。

今度は、今度こそは……

「舞風！ 貴方も飲みなさい！！」
「どわっ！ なんでわざわざ屋敷の外まで出てくるんだよ！！」
「いいからいいから。中に入って飲みまくりな」

何故か背後から現れた蓮姫にのしかかられ、そのまま屋敷まで持っていかれる。そこで待っていたのは釣瓶いっぱい酒を入れたキスメであった。当の本人は流石には入っておらず、顔を赤くしてむくれている。

「ちよ、待て。押すな。押すなよ？ 絶対押すなよ！？ これは変なぶりじゃないから絶対押すな あばばばばばばばばばばばばばばばば」

それに顔ごと突っ込み、目すら開ける事も出来なくなってしまうた
り。泣ける。

○
○

「ふう」

屋敷の中へと運ばれていった舞風を見てフツと安堵の息をもらす。そして彼が今まで寝転がっていた辺りを見る。

誰もいない、ように見える。昨日のようにそこまで自分の妖気が分散しているわけでは無いし、分からない。

「……聞こえるかい？ さとりの妹……こいし、だっけ？」

返事はなかった。いないのか、それとも姿を現さないだけか。どちらでも構わない。これから言うのはひとりごとのつもりなのだから。

「貴女が第三の瞳を閉じたって事は聞いてたわ。能力が嫌いって事も推測ながら分かった。貴女を励ますような言葉を言えるほど私は誰かに関わって生きてきたわけじゃないから何も言えないけれど、これだけは言わせてね。」

あの子の話を聞いてくれてありがとう」

彼は、何処まで言っても孤独だ。周りに誰が居ようと、その根本の想いだけは消えない。本人は気付いていないふりをしているが、いつも気丈に振舞っている。そして、誰もその影に気付けない。

力も、想いも、意味をなさない。彼がもつと必要としているものは、そんな物じゃない。

「出来れば、あの子と友達になつてあげて。何年一緒にいようと、あの子は私のたった一人の家族だから。心配なの」

言いたい事は言った。背を向け、屋敷へと戻る。姿を現さないということは、元々いなかったのかもしれない。

「 頑張ってみる」

そう思った直後、聞こえた声。それに安心するともう速度を緩めることなく、私は足を進めた。

幕間（後書き）

今回は少ししんみりした話が多くなりました。少しばかり過去を覗かせる断片的なものを。

未だ色々なことが明らかになっていない本作でしたが、やや胡散臭い物が現れました。

まあ、それについてもまたそのうちって感じですね。未だときは千五百年代。原作にはまだまだ遠い遠い。

最近は東方のV o c a lばかりを聞いています。作者です。

車の中で熱唱したら音漏れてました。通行人の目がイタイ。

舞風と人里（前書き）

時間の流れが妬ましい。

今単位を落としそうなのは4つ。それも漏れなく。心が折れる。勉強の合間におもむろに始めたニアレプリカント。2週目初っ端から泣ける。どうして始めた俺よ。

最近すっかり週一投稿。でも執筆はやるう。最早生き甲斐。賞なんてもらえないけど確かに生き甲斐。

地底はひどいほどに終了し、場面は再び幻想郷へ。区分的には地底や天界などは幻想郷とは別らしいね。いつか妖怪が地底に入れなくなるときどうしよう・・・

外伝章、”天狗と妖精”及び”鬼と妖精”を今夜中に合併してページ数減らします。ページ削減です。

では、本編どうぞ

舞風と人里

「人里に行きたい？」

結界山の天辺。大樹のすぐ傍に存在する一軒家。ささやかながら、一応多人数が入れるように設計をしたそれは、我が家である。新築である。自慢の一軒であるっ！

そんな我が家に唐突に押しかけてきた魔女、ベリーウエル・ガラーンが開口一番そんなことを口にした。その目はわくわくと言うか、何はともあれ輝いている。

「ああ！ 一度行ってみたかったんだ。甘味処とか、よろず屋とかさ」

「お前は子供か。しかしまあ、そうだな。人里か……」

思えば、この幻想郷に来て結構時が流れたが、未だに足の運ぶ先は八雲の家か地底くらいである。そう言えば前にベリーが地底に連れて行けとせがんでいた事も思い出す。

「……別に一人で行けばいいんでない？」

「うー、それもそうんだけど……ほら、俺って魔女だから妖怪に狙われやすいじゃん？ だからさ」

「怖くて一人じゃ出歩けもしない、と？ お前は一体何歳児だ」
「う、うるさいな！ 怖い物は怖いんだよ！！」

今まで外出の際アキが付き添っていたのはこの為か。事あることにアキを探すかと思えば……

「だったらアキに頼んだらどうだ？ いつもそうしてるんだろ？」

「今日に限っていないんだよ。いそうな場所は全部探したけど、何処にもいない」

「お前の探す範囲は結界山の中だけだし、と言う事は外に出たか？」

まあ、アキの実力なら外に出てもいきなり襲い掛かってくる妖怪程度なら退けられるだろう。ならばそれほど気にとめることでも無い
か。

しかし、俺が”仕方なく”な上に最終手段つてのが気に食わない。
そんなに俺に頼みごとをするのが嫌なのか。

「……そうだな。一度くらいは見ておくか。人里」

「よし！ そうと決まればすぐ行くこうさっさと行くこう止まらず行く
う」

「そうは言っても、お前俺より飛行速度遅いだろ？」

そんな言葉を聞いてはくれないか。見た目年相応の笑顔で俺の手を引きながら我が家から飛び出す。

因みに、ただいまの時刻は卯の刻。要するに朝の6時くらいである。もっと寝かせるとというのが正直な言葉。

人里への至る道は歩いてなぞれば半日ではすまない。結界山は幻想郷の隅に立っている。人里から見ればちょうど妖怪の山と被ってみることもできないであろう場所だ。

故に、通る際には致し方ないと言う言い方になるが、妖怪の山を横切る。

「おや？ 舞風様。このようなところで会うとは。奇遇ですね」
「お前は……射命丸か」

そこで出会った烏天狗。なにやらメモ帳のようなものを片手にこちらへと近寄って来たので何事かと思えば顔見知りであった。とは言っても二、三度会って顔を合わせたくらいだが。

「射命丸って……まさか射名丸文!？」

「あやや。私の名をご存知な貴女。舞風様の背で何をしておられるので」

「なに。こいつが一人で飛行するより俺が引つ張った方が早いからこうなっただけだ。それにしても、お前は何処でこいつの名前を聞いたのか……」

射名丸文。それが眼前に舞う烏天狗の名。もう片手には葉の扇を持っている。

基本、結界山から出ないベリーが誰かに関わることはほとんどなさそうであるのだが……まあ、アキと一緒に誰かに聞いたと考えるならありえないことではない。

「……もしや貴女は舞風様のお山に住まわれている魔女ですか？」

「そ、そうだけど。どうして」

「有名ですよ。山ごと幻想郷に越してきた舞風様は元より、そこに住まう者なら。割とご近所でもありますし」

まあ、確かにいきなり山ごと越してくれば有名にはなるか。最も、妖怪の山にとっては『警戒』と言う言葉の方が合っているだろうが。

「時に舞風様。これからどこかへお出かけになるのですか？」

「ああ、人里にな。未だ一度も行つてないし、一度くらい挨拶に行かなきゃ。行けば転移結界で移動の手間も省けるようになる訳だし」

因みに八雲宅と地底にはいつもそれで行っている。おかげで最近運動不足になりはしないかと心配になっている。

「人里ですか。それだと私は行けませんね。残念です」

「行けないって？　なんでまた」

「それが妖怪の山の基本的な方針なんですよ。あまり外の者と関係を作るのも組織としてまずいですからね。残念です。色々と話したいこともあったのですが……」

「ふむ……」

思ったより妖怪の山は面倒な場所なようだ。何度も行つて、一応組織としての形が出来ているという印象だったが、鬼がいなくなつてから本格的な統治を始めたか。

「それじゃ、とりあえず道中くらいは供してくれないか？　こちらとしては幻想郷を良く知るものがいてくれた方が助かるからな。無論、迷惑じゃなかったらだけど」

「いえいえ！　この射名丸文。喜んで同行させていただきます！」

そついうと嬉々としてこちらの傍につく。大概、コイツが俺と話す

ときはこんな顔である。

一応、懐いてはくれているんだろうが、どうもこいつは俺を”力を隠した烏天狗”と誤解している節もあり、何と無く話しづらいのである。それに気付いたのも百年程度前なのだが、今更自分烏天狗じゃないんですよ、なんて言えばどうなることか……

「改めて。射名丸文です。よろしくお願いします。結界山の魔女」
「べ、ベリーウェル・ガラーンだ。よろしく頼む」

背中 of ベリーに挨拶。どちらかといえば高圧的なはずの烏天狗である射名丸がこうして自身より劣るベリーに礼儀正しい挨拶をする。ことには違和感も感じたが、それも結界山の、というより俺の立ち位置上か。

望む望まぬ関係無しに、俺には八雲の縁者と言う名がついて来る。それがどういうことか、分からぬ訳が無い。幻想郷の創者に縁のある存在。妖怪にしてみれば警戒する存在の一つであるだろうし、人間にしてみればまた恐れるか、それとも敬うものもあるか。

それが嫌で。俺は常に八雲の姓を名乗らない。名乗るのはさとりのような、一つを任される身分の者にのみ。しかし、妖怪の山には既に知れ渡っている。当然だ。あんなに目があるところで名を名乗ったのだから。その件にしては伊吹に恨み言を申した。

「貴女も羨ましい方ですね。舞風様と同じ山に住むことができるなんて、是非変わっていただきたいほどですよ」

「移り住みたいのは妖怪の山が嫌だからなんじゃないのか？」

「あややや。それも一つありますが、やはり私としては先駆けた存在の傍らに居れる事で師事を仰ぎたいと言うこともあるのです」

まあ、確かに生きてきた年月は伊達だけでは無いし、教えてやれることもそれなりにはあるのだろうが。こいつほどの存在なら師事をなくとも妖怪の山のトップに立つのはそう遠い話では無いだろう。才能もあり、努力もするときはきたものだ。

「……なあ、舞風ってそんなに有名なのか？」

唐突に俺の背のベリーがそんなことを口にする。それについては俺も疑問である。確かに少し力が強いことがあれど、大妖が目をつけるほどではないし、地底の一件は射名丸の様子を見る限り届いていないようだ。

そんな俺の感覚とは程遠く、射名丸は目を向いた。まるでそんな事も知らないのかと言うように。

「勿論ですよ！ 確かに幻想郷全域には広まっていけないとはいえ、妖怪の山近辺の者達にとって舞風様の名は大きく轟く物です。あの鬼神伊吹萃香と引き分けるほどの力を持った妖怪であり、八雲紫の縁者ともある存在ともくれば当然です」

「あー、そっか。それもそうだったな。迂闊」

「へっ？ 伊吹萃香ってまさか……酒吞童子の!？」

「……よく知ってるな。そんなこと。まあ名だけで言ったらそっち

のが有名か」

日本三大悪妖怪、酒吞童子。妖怪の山で始めて戦ったときに聞いたが、後々考えると衝撃は凄まじい物である。考えてもみてほしい、それほどの悪名を轟かせるほどの鬼がなんと見た目幼女なのである。おおこわいこわい。

「……有名かどうかは別にして、お前の交友関係が凄まじく気になつてきた」

「失礼だな。失礼だぞお前」

まるで紫のような、胡散臭さマックスの奴を見るような目で見るなと言ってやりたい。

「思ったより賑わってるんだな。人里って」

空からそれを見下ろし、ボソツと感想を零したのはベリーである。俺も少し意外には思った。その規模はそれこそ外の世界の村なんぞよりは随分大きいし、見るからに活気があるように見える。

「……結構当然のように妖怪もいるみたいだな」

「私もここまで近づいたのは初めてですが、ここまで妖怪の数が多いのも驚きですね」

あちこちからチラホラと感じられる妖気。どれも大きい訳ではないが、特に混乱が起きている様子も無い。眼下の一匹の妖怪が人里の者の視線に晒されているのを見て、やはり珍しくはあるのだな、と密かに思う。

「さて、助かったよ射名丸」

「いえいえ。こちらにも興味深い話を聞かせていただきましたし、為になる時間となりました。私はこれにて失礼しますね」

手を振りながら去っていく。それを名残惜しそうに見つめるベリーを離し、そこに浮かべる。流石にこれ以上引つ張る必要もないだろう。

「……ふむ。入り口はあるみたいだな」

木で拵えた門を見つげ、そこに降りていく。まさか空を飛んで移動するのはいただけないだろうし、郷に入れば、というものだろう。

門の前にふわりと降り立ち、それを潜る。

「ま、待てっ！」

「……ん？」

見れば一人の青年が竹槍をこちらに向けていた。その先端は体から伝わった震えでプルプルと振動している。いくら妖怪と言ってもこんな子供の風体にそこまで怯えることは無いだろうに。

751

「なにか用か人間。咎められる事は無いつもりだが？」

「……背の剣は、何に使うんだ？」

と、その言葉でようやく背中中の剣を思い出す。何処に行くにしても基本持ち歩くのですっかり忘れていた。紫やさとりもほとんど気にしないので、俺も当然のように持ち歩いていたが、よくよく考えれば人間にとっては脅威となってしまうのだろうか。

ため息一つ、俺はそれを背から取り外すとすぐその地面にズンツ、と突き立てる。青年の体がビクツと揺れる。

「……ここに置いていくから、触るなよ。もし汚したりしたら」

首をクイツと搔つ切る動作。青年の体が更に震え始める。こちらとしてはこれでもかなり譲歩したものだ。

この封じる剣『神風』は俺が丹念に力を込めた、人間には過ぎた武器である。俺自身の元々の力の弱さを考え、使用の際の副作用は皆無。つまり、内に秘めた力の割りに誰にでも使えると言う特性を持っている。

故に、間違っても誰かの手に渡っては困る物なのだ。しかし、ここと結界山の転移結界の術式を刻むにはどうしても必要だ。

「……念のため結界でも張っておくか」

本当に簡単な。弱小妖怪にでも破られそうな結界一枚。それだけを張って俺は里に入る。そこではベリーがまるで待ちくたびれたと言わんばかりの顔をして待っていた。

なんでベリーは何も言われないし……

「うおおおお！ 見ろよ舞風！ 甘味甘味！！」

「はいはい」

「よろずよろずー！！」

「はいはい」

「人間人間！！」

「……はいはい」

「妖怪妖怪!!」

「はいはいはい」

「お前絶対適當だろおおおお!!」

「バカめ。今更気付いたか」

こちらとしては何のために人里に来たのか分からないほどののだ。人外の身となつてまで今更人と関わる気になどなれないし、正直ベリーのたれについて来た様なものだ。だからといってベリーを責めるつもりは無いが、正直楽しむ気にはなれない。

……周りの目も気になることだし。

その視線は僅かな興味が混じつた物がほとんどであったが、偶にいのだ。憎しみか怒りか、負の感情をぶつけてくる人間が。相手が俺だったからよかつたものを。そこらにまぎれている妖怪ならばどうなるか分かつた物ではない。

それでも、基本的な平和が保たれているのは単に八雲紫の影響力の大きさか。どちらにせよ、妖怪には未だ居辛い場所であることには変わらないだろう。

まあ、四の五の考えるのも馬鹿馬鹿しいか。

一応付き添いと言う形で来ているのである。ベリーに嫌な想いをさせるわけにもいかないだろう。

見た目相応の少女の笑みであちこちを指差し、はしゃぐベリー。思えば魔女としての生が長いために人とかかわりを持ったのが短かったのかもしれない。

それならば、このはしゃぎ様も理解できる。もしかしたら彼女も妖怪に対する視線に気付いているのかもしれない。それを考えると、こうしてはしゃぐベリーを少し見直せた。

「あっ、舞風。俺金無いから奢って」

「少しでもっ、少しでもお前を見直した俺の気持ちを返せっ!!」

台無しである。

「……………団子……割と高いな」

「胡麻が無いのか。まあ、餡と御手洗でいいか」

高い。団子が高い。紫から前もってもらっておいた資金がこんなところで消耗されることになるとは。なんだか申し訳ない。しかし他に使い道が無いのも確かである。アキは欲しい物は現地調達の何気アウトドアだし、俺自身服や食料を必要としない。と、なるとベリーくらいか。金の使用者は。

「へい、餡に御手洗でさ」

「おつ、来た来た。甘い物って久しぶりに食うな」

まあ、確かにそうだ。旅の途中だって妖怪がそんなところによる訳にいかないし、食い物は狩りで足りていた。

……………はて、最後に団子を食べたのはいつだったろう？

そんなことを考えながら俺は団子を食う。柔らかい弾力ある食感である。

「あつ！ それは俺の団子だぞ！ 食うなよお前！！」

『舞風。それは私の団子だよっ！！』

「あ」

なんと言っか、とんでもない思い出し方である。全然似ている訳で無いのに、何処か被った。いつぞやか、共に旅をしていた少女に。

すっかり忘れていた。というよりそういった過去の記憶はよほど重要で無い限り思い出さないので、当然の帰結である。結果として放置した事になってしまふのだろうが、別に一人取り残した訳でも無いから、というのが思い出さなかった一つの理由でもある。

会わなくなつて随分だが、元気にやっているだろうか？

「おい、聞いたか？ 迷いの竹林の話」

「ああ？ もしかして、あの噂のことか？ 所詮眉唾物だろうよ。」

迷いの竹林の妖怪退治屋なんて」

ん？

店内で聞こえた話し声。聞きたくも無いのに大きな声で喋っていたが、それを聞いた途端ベリーのほうがピクンと跳ね、そちらを凝視し始めた。

その様子の真剣さと言ったら珍しいことこの上ないが、話題その物は珍しいことだろうか？

別に幻想郷の何処に妖怪退治屋が隠れ住んでいようと、有り得ない話でもない。と、言うか何が起こっても基本ありえないと言えないのが幻想郷と言ってもいい。

まあ普通ならそんなことを考える奴はいないだろう。なんせ、霊力持ちは妖怪にとって最高の糧になる。自らの位を上げるための妖怪退治と言え、そんなことをする奴は命いらずくらいだろう。

「……で、お前はいつまで聞き耳立ててるんだ？」

「とりあえず、団子食うまでは」

「なら俺が早く終わらせてやる。ありがたく思え」

「触るな」

拝啓 母さん。最近友達が冷たいんだ。どうすればいいかな？

答えは返ってこなかった。

甘味処、よろず屋、ついでに書物やらなにやらの専門店まで。色々な場所を回っているのだが、未だにベリーが満足する様子は無い。これ以上何を求めるといふのか。俺はため息をつきながららんと歩くベリーの後ろを付いて歩く。

と、なにやら顔を上げれば見えたのは人里の中でも極めて大きい屋敷であった。人里の権力者がいるのかもしれないと思いつた俺は先を歩く少女を呼び止める。

「ベリー。俺は寄るところあるから適当に回ってる。変な奴について行くなよ?」

「りょうか。金はたんまりあるし、せいぜい楽しませてもらうよ」

だからそれは紫から……と言つのも面倒なので俺は息を一つもらし、そちらへと歩を進めた。

「……にしても、随分でかいな」

あくまで他の家と比べれば、であるが。それでも規格違いの規模であることは間違いない。敷地は一般の数倍あり、見上げるほどの門。

番はいなかったが、それを潜ればただっ広い庭。

その辺りにいた召使と思われる女性を捕まえ、話を聞いてみる。

「失礼。この家主は在宅しているか？」

「どうしたの？ お父さんのお使い？ 偉いですね」

「いやそうじゃなくて家主は……」

「稗田様ならご在宅よ。 あの方は滅多に外には出ないから。 今呼んで来て上げますね」

そう言つて手の放棄をそこらへんに立てかけると屋敷の中に小走りで走つていった。 思わずポカンとする。 どんだけ話を聞かないんだ。 人は見た目じゃないつてことが分からないのか。 俺は妖怪だった。 泣ける。

しかしながら、そこまで言われてしまつては勝手に中に入るのにも抵抗が出来る。 ある意味面倒を増やしてくれたものである。 今日何度目かのため息をつき、さてどうするかと門に寄りかかる。

門の外から道行く人が一度はこちらをちら見して通り過ぎていく。 いる場所がダメなのか。 それとも服装が珍しいのかと僅かに疑問に思いながらも空を見上げた。 憎らしい位いい天気である。

「……………ふう」

眼下の親子の家族連れを視界にいれ、 平和な事だと思わずため息を

つく。ここまで平和だと逆に落ち着かない。そもそもこんなところにいる方が場違いな気がしてくる。

あれだ。一家の大黒柱がようやく取れた一日の休日が何らかの理由で潰されたときの気持ちってこんななのだろうか。

そうなるとあれか。ベリーは手のかかる娘でアキは……姉？　蓮姫が母さんで……

『　　そんでもって、　　がお父さんで　　がお姉さん兼妹、俺は
やんちゃな末っ子だ』

「お待たせー。稗田様がお会いになってくれるって。よかったね！」

「……ああ、ありがとう」

戻ってきた女性に礼を言い、俺は屋敷の中に足を踏み入れる。

……昔の楽しかった記憶を思い出すのは、歳をとった証拠なのだろうか？

先導してこちらを導いている女性は俺が緊張してるのでも思ったのか、肩に手を置いて「気さくな方だから大丈夫」とだけ言うて笑う。

違う。そんなことじゃない。そんなことじゃないんだ。

早く済ませて帰ろう。それが一番だ。

気付けば襖の前に案内されていた。手を振りながら去っていく女性を見送るとそれを開き、中にいる者に無造作に一礼した。いたのは少女。人妖の境を乗り越え、治めるものはいつも少女のようだ。驚いたようにこちらへ向けている。

「突然の訪問失礼する。俺は舞風。幻想郷の辺境にある山の主だ。今日は挨拶のため参った」

「……そ、そうですか。どうぞ、座ってください」

少女は慌てて場所を整える。辺りには本やら何やらが散らかっていて正直汚い。とは言ってもゴミが散らかっているようではない。あくまで書物だけが、足の踏み場も無いほどに散乱している。

「辺境から遠路はるばるとご足労いただきありがとうございます。私は稗田阿悟。五代目阿礼乙女です」

「阿礼乙女？ それは当主という事なんだよな？」

「はい、初代より私の一族は人里に住み、与えられた任をこなしています」

「任、とは？」

「？ それを知って参った訳ではないのですか？」

ますます意味が分からない。こちらとしてはあくまで義務的に挨拶に来たつもりだったのだが……

「……阿礼乙女は代々、幻想郷縁起なるものを作成しています。それはこの幻想郷の全てを書き記した書物です」

「そんなものを……なるほど。だから人々に重宝されているのか」

「そう……ということになるのでしょうか。てっきりそのことかと思っただけですが」

「俺のは個人的な挨拶回りさ。八雲紫にもやっておけと言われてね。同じ世界に住むものでもあるわけだし、最低限の付き合いは必要だ

るう?」

「そ、そうなんですか。八雲紫。妖怪の賢者に、言われるほどの者」
「妖怪の賢者、ねえ」

それは聞く限り紫の事を指しているのだろう。まあ確かにこの世界に住むものにとっては創始者である訳だし、それなりに有名であってもおかしくはないか。

「……ま、聞きたいことがあるなら聞けばいいさ。どうせ人間に敵対する気も襲う気も侵略する予定も無いからな」

「はい、ではまず種族を教えてくださいませんか?」

「……そこからののか」

これから随分と長引きそうである。ひとまず今日何度目かのため息をついた。

つけばつくほど幸せは逃げると言っが、もう逃げるほどの幸せも無いんじゃないかと密かに思った。

○
○

「いやゝ。いい場所だな人里」

予想以上の収穫。このご時世仕方ないからと半ば諦めていた塗料や繊維まで手に入るとは思わなかった。アキにもお土産買ったし、上々だ。

一度は来てみたいと思っていた。これからは何度も利用するだろう。その時はいつも舞風に送ってもらえばいい。便利なものである。

「……ん？」

と、ふと見れば小さな人ばかり。それに何事かと思いつながら近づき、輪の中に潜り込んでみると……

「この糞ガキが！」

「離せっ！ 離せよ！！！」

小さな男の子が首根っこを掴まれ、持ち上げられていた。持ち上げているのは一目では人間だが、よく見ると牙やら尻尾やら。

妖怪。それも妖怪である。それを取り巻き見ているにも限らず、誰も止めに入ることはいらない。臆病な連中である。

と、言う自分も前に足を踏み出さない。一見すれば確かに妖怪が加害者に見えるが、実際は八雲紫の影響力で妖怪が手を出すなど通常ありえないはずである。

「離せ妖怪っ！ 父ちゃんを殺した妖怪が里に入ってくんなよ！！！」

ああ、そういうことか。

先に手を出したのは少年なのだ。見れば妖怪の背後には鉄の塊
よくよく見れば錆びた剣に見えなくも無い 　　のような物が落ちて

いるのが見えた。

結果としてこのまま少年が殺されてしまっても、もしかしたら正当防衛として処理されてしまうのかもしれない。人里においてはお互いが不可侵でなければならぬ。それでようやく幻想郷は成り立っている。しかし、そう都合よくいくわけが無い。心があるのだから、目の前に親の敵でもいようものなら黙っていられないだろう。

「それは俺じゃねえ！ 勝手な濡れ衣を着せるなガキが！」

「うるさいっ！！！」

しかも人違い、ならぬ妖怪違い。ここまで揃うとどうしようもないだろう。

助ける義理は無い……が。

「……見殺しにするのも後見が悪いよなあ」

懐に忍ばせたカードを手に取る。もしこのまま放置して、あの子供が妖怪に殺されてしまうような事になれば再び人妖の間の溝は深まるだろう。それはこちらにしても望んだことではない。

前に歩き、輪からはみ出す。その手のカードを向けながら。

「その」

「その妖怪！ やめないか！！」

……なにやらちよつと反対側から姿を現したのは女性。腰まで伸びた髪は青と白とが混じり合っており、髪と同じ彩色のゆつたりとした服を着ている。

「なんだ。まさか離せとでも言う気か？」

「そうだ。ここでは人妖が争うのは禁止されているはずだ。知らないとは言わせないぞ」

「先に手を出してきたのはこの小僧だ」

「長い時を生きる妖怪たる物が子供一人の行いすら許せないのかっ
！」

二人の間に一触即発の空気が流れる。周りの人間が一步退く。こちらとしては珍しく人前で発言しようと言うのに、とんだことである。妙に苛立つ。妖怪に。自分を遮って入った女性に。

「あもう！ 規則くらい守れよ！ ここは人里なんだぞ！

妖怪が好き勝手やっていい場所じゃないんだ！！」

思わずそう声を荒げた。視線が一気にこちらを向いて思わずしり込みそうになったが、それに耐えて妖怪を睨む。向こうは向こうで鼻で笑うような顔をしている。

「なんだ小娘。貴様のような人間によろなどないわ！」
「うつせえ！ こちら百年近く生きてる魔女だ！ 元人間として物申すけど、幻想郷には幻想郷の規則があるだろ！ お前みたいな一介の妖怪が好き勝手すんなボケ！！」

周りの人間はどうも俺が人間で無い事に目を剥いているようだった。妖怪も、女性も同じく。

相手が人間で無いことを不利と判断したか、妖怪は憎憎しげに顔を歪めるとその手の子供を放り投げ、ずんずんと大股で歩いていった。人ごみは道を作るかのようにの避けていた。

「……はた迷惑な妖怪もいるもんだ」
「そつだな……君。大丈夫か？」

女性は俺の言葉に望んでもいない相槌をうつと尻餅をついている子供に手を差し伸べた。と、事もあるつか少年も憎憎しげに顔を歪めその手をはたいた。

「余計なことすんな！」
「余計なことつて……ガキだねえ」
「なんだとっ！」

こちらを睨みつける。その目は先程の妖怪と向ける目とさほど変わり無かった。しかしすぐにそれを逸らし、踵を返して走る。

俺も、人から見ればただの人食い妖怪と変わらないように見られてるって事かね。

感慨深く、走り去っていくその子供の後姿を見送る。今更気にする訳でもないが、まだ自分を人間と思っている、と言う表れなのだろう。

女性もまた、それを見送るところらに向き直った。人間が魔女に向けるとは思えない笑顔を浮かべながら。

「ありがとう。助かった」

「……今後人間との関係を悪くするかもしれないきっかけを見逃すのが嫌なだけだよ。そっちも、人間なのによく割ってはいる勇気があったな」

「ははは。よく言われるが、実は私も人間では無いんだ」

周りの人間が完全に散ってしまった頃、女性はそう口にした。思わず首を傾げる。とても人外には見えないが……

と、徐に浮かび上がってくる一つの人物像。青と白の髪、それと同じ彩色の服。頭の上が寂しいような気がしながらも、それは結果的に一つの予想を作り上げた。

「え、えっと。お名前をお聞きしても？」

舞風と人里（後書き）

けーねせんせエエ

ッ！！

稗田アア

ッ！！

Wikiつた阿悟がどうやって読むか分からない。あご？ いやいや、まさか年頃の乙女が顎^{あご}なんて。でもそうとしか読めない。字の当て方からしても。

ベリーは基本いい奴。困ってやる奴は助けられる範囲なら助けます。舞風は、まあ場合によるかな。

「つらい時に……楽しかった頃の夢を見てしまうと更につらくなるものだな……」

自分が好きな漫画に登場する王様の台詞です。全く以ってその通りだと思います。

舞風にとって今が不幸と言う訳じゃ無いにしろ、楽しかった頃の思い出を、更にそれが戻らない物だと分かっている思い出したなら、どんな気持ちなんでしょう？

そんな心情が少し揺さぶられるような。

多数の評価、お気に入り登録ありがとうございます。非常に励みになります。

これからも東方大精霊。よろしく願いいたします。

魔女と人里（前書き）

慌ててでかしました。しかし遅刻。前書きすらも簡略化。

ここに来て何故かベリーの髪色の設定が執筆されていなかったことに気付いた。あばばに陥り、急遽元ネタの『金髪』を入力。できればアリス、魔理沙と被るから使いたくなかったんだけど、やっぱり印象が金。

急いででかしたので誤字とか微妙にあると思います。あつたらご指摘お願いいたします。

今回はややシリアス中心です。

魔女と人里

「　　そうか。君も最近ここに来たのか」

「君も。と言う事は慧音さんも？」

「慧音でいい。私も外で放浪の旅をしていたが、それに限界を感じてな。ここに至ったんだ」

慧音さん　　もとい慧音はやや苦笑いをしながら頭をさすっていた。会った時は正直驚いたが、話してるとやはり常識人。落ち着いた会話ができる。アキとはまた違った感覚だ。

こうして会ったのもなにかの縁。近くにあった甘味屋に再び入り、団子を頼む。またとかは言わないで欲しい。さっきとは別の店だから大丈夫。

「さて、君はウェリーベルだったか？」

「……ベリーウエルだよ。覚えにくいならベリーとでも呼んでくれればいい」

「そ、そうか。すまない。ベリーは人里に住んでいるのか？」

「いや、知り合いと山に暮らしているよ。流石に人外の身でここに住むのは風当たりが悪そうだからな」

実際、万が一にでも人間に攻め込まれようものなら俺は勝てないだろう。自分の未熟は承知だし、身体的な能力は人間と変わらないの

でナイフを心臓辺りに突き立てられれば死ぬ。そんな俺が、人間と共に生きるなんて不安でしかない。

そついった意味では今回の訪問も危険ではあったのだが……

「まあ、見た目は人間だからなんてことなく溶け込めるかなって思っただけど、自分で明かしちゃ意味無いよなあ」

「……計算あつてのことじゃなかったのか？」

「いや……実はついカツとなつて」

慧音の呆れた目が突き刺さる。地味に痛い。それを苦笑いでやり過ごし、手元の団子に手を伸ばす。

それにしても、帽子一つ無いだけで分からない物である。もし見かけたら見分けられないことは無いと思いついていたのだが。

「ベリー。尋ねたことがあるのだが、いいだろうか？」

「聞きたいこと？ まあ俺が答えられることなら」

慧音が突然笑みを消し、見るからに真面目な表情となる。それによや驚きながらも出来るだけ自然に受ける。

幻想郷の歴史が分かるはずの慧音がわざわざ質問などをする真意が分からなかったが、もしかしたらまだそれほどまでの力をつけていないのかもしれないと無理矢理納得し、耳を傾けた。

「なに、二人ほど探している者がいてな。見覚えか聞き覚えが無い
か知りたいたけだ」

「探し人？ どんな奴なんだ？」

「片方は白髪 of 妖怪退治屋の少女なんだが。見たことは無いか？」

「白髪 of 妖怪退治屋……」

知ってるかと聞かれたなら知っていると答えられるが、見たことがあるかと聞かれたなら俺は無い。会ったことが無いのだから。予想があつてゐるならば、その少女は迷いの竹林にゐるのではないだろうか。

先程、舞風と共に甘味処にいた時、里の人間が言つてゐた妖怪退治屋の噂。正体が不明、と言う事は人里の者では無い。つまり人里にはゐられない妖怪退治屋なのか、それとも噂に過ぎないのか。

「……白髪で少女なのか分からないけど、迷いの竹林に妖怪退治屋が現れるって噂はあるな。それもついさっき聞いたことだから信憑性に欠けるが……」

「いや、それだけでも十分だ。ありがとう。それで二人目なんだが……」

はて、俺の記憶に違いがなければ上白沢慧音に二人目の知り合いなどゐない筈なのだが……

そんな事を思いながら、先程よりは随分朗らかにその口を開いた。

「君は、『大精霊』の名前に聞き覚えは？」
「『大精霊』？ なんだそれ？」

それは今までに聞いた事のない名。大妖精ならば知っていなくも無いが、大『精霊』と来たものか。

「大妖精じゃなくて？」

「いや、大精霊だ。もしもまだ生きているなら幻想郷にいると思うのだが……すまない。忘れてくれ」

尻つぼみになるようにその声は小さくなる。それには何処か諦めを感じさせられた。彼女にとってはもしくは重要なことであったことなのかもしれない。

自分が知っているのはあくまで『東方project』。上白沢慧音と言う存在の過去を全て知っている訳ではないのだから。

「悪いな。力になれなくて」

「いや、十分だよ。大精霊については半ば諦めてもいたからな。妖怪退治屋の情報だけでも得られたならそれで」

「……そうか。会えたらいいな」

その言葉に顔を俯かせ、その目を閉じる。一体何を思っているのか。それを知ること叶わないが、やがて再び顔を持ち上げたときはそ

の目から曇りは消えていた。

「ああ。そうだな。ありがとう。ベリ―」

○

○

「 ありがとうございます。八雲舞風様」

「様、なんてくすぐったいだけだ。さんでいいよ」

「そう、ですか？ では、舞風さん」

種族、能力、住処、考え方、その他諸々。聞くだけ聞かれ、ようやくお暇できる。種族や能力については多少暈したが、その方がいいだろう。住処だって名だけ。辺境だから人間が足を踏み入れることも無いだろう。

「 ふう」

「大変そうだな。それらを一人で編集するのか」

「ええ、まあ。生まれたその時からやっていますから、もう慣れたものですが。しかし、そうですね。もう一人博識な方の手を借りたとは思いません。ですが……」

「……ああ。人間は通常寿命が短いからな。手伝いもまた数十年で死んでしまうか」

こちらのことを教えるついでに阿礼乙女の事も僅かながら教えてもらった。彼女の一族は短い寿命と言う代償の変わりに同じ魂での転生が閻魔によって許可されているらしい。それはつまり、同じ魂に刻まれた力。つまり能力を継いで生まれることができると言うことだ。それが何かは聞かないで置いたが、通常通り寿命を迎える辺り過去に出会った人間ほどの力ではないのだろう。

立て続けに出会ったとんでもない力を持った人間達。やはりあれらは例外と言うことだろう。

「はい。私自身言えた口ではありませんが人間の寿命は短いですから。寿命の長い、貴方の様に無害な存在がいてくれたなら……」
「無害な妖怪か……それは難しいかもしれないな。危険もある」

妖怪にとって、いや幻想郷に住む人外にとって幻想郷縁起はその詳細を書き記した物。つまり、行動範囲や対処法もそれにまた記されている。それが公になると言うことは妖怪が人間を襲うことが困難になることを意味している。

その作者の傍に妖怪を持ってきて、襲う理由を尋ねるのも馬鹿馬鹿しいだろう。

そもそも、この幻想郷はいくら人妖が共存していると言っても、結局は人が妖怪を恐れる構図が出来てしまっている。妖怪にとっては恐れられてこそなので当然だ。故に、里の外ならば人が襲われるのもまた仕方ないと言うことになるだろう。

それをわざわざ、対処法を教えるなど。妖怪の反気を高める理由にはならないだろうか？

と、これは自分の勝手な言葉であるが、いつしか綻びが出来るだろう。間違はなく。

それを分かった上でやっているのか。確かに昔もこうだったのだから。妖怪の対処法を書物に記し。それを今尚続けるのか。

……まあ、自分には関係ないが。

「ところで、ご迷惑でなければこれから共に昼食でもどうですか？
舞風さん」

「ん？ ああ、別にいいが……どうしてだ？」

「いえ、深い理由は無いのですが……すぐに用意させますね」

……なんだと言うのだろうか。どういう訳か嬉しそうに女中を呼びあれやこれやと注文を言っている。別に俺は食わなくても問題ないからそんなに注文いらぬ。食後のデザートもいらぬ。

「はい。それでお願いしますね。準備が出来たら教えてください」
「い」

「かしこまりました」

そう言つて扉の奥に消えてゆく。その何が嬉しいのか。再び元の場所に腰を下ろし、ニコニコと笑う。

「……なにがそんなにおかしいんだ？」

「いえっ、そんなおかしいだなんてっ！ 私自身、実は八雲様以外

の妖怪の方と接するのは初めてなんです。なので、その……」

「ふーん。そうか」

それにしてはなんと言うか、妙に嬉しそうと言うか。逆に不自然に見えてしまうほど。

少女はクスリと笑う。何を想っているのか、悪戯っぽく。

「それに、こうして会えた妖怪がこんなにも優しいお方でとても嬉しいんです」

「おい。お前妖怪をなんかいろいろと勘違いして無いか？」

「そんなことはありません。古今東西、可愛いは正義と言う言葉があります」

「……要するに？」

「貴方のような可愛い妖怪が悪い妖怪な訳ありません」

……喜ぶべきやら、悲しむべきやら。そもそもそんな言葉初めて聞いたのだが。そうか、俺はカッコいいではなく可愛いにカテゴリアれるのか。へこむ。まあいいさ。封印さえ解けば俺だって……

「そろそろ準備も出来たはずですし、行きましょう」

「偉く早いなって」

腰を持ち上げ、大きく伸びをする。ずっと同じ体勢だから固まってしまったようだ。

「……で、この手はなに？」

気付けばこちらに伸ばされた少女の手。並んで気付いたが僅かに少女の方が身長が高いようだ。そんなことより、この手はなんなのか。

少女はなにやら疑問そうに首を傾げる。それはそっちの顔だろ、と思わず零す。

「だから、行きましょう？」

「お前は俺の母ちゃんか？ いや寧ろ俺は子供か？」

自信満々にはいと返事する。そこはかたなく傷ついた。まるで姉が弟に接するかのように対応してくる。

いや、待てよ。

少女が言うに、稗田という一族は代々転生を繰り返す者であるらしい。では、転生とは？ そもそも短い寿命とは？ そんな例外的存在がまともに死に、まともに生まれることが出来ているのか？

答えは、否。そもそも幻想郷縁起と言う、人里の者全ての為の書物を書くためだけに存在しているような少女に、人並み以上の生活が出来ると？ 否である。特異な力を持って生まれた少女が、得意な再生を繰り返す。すでに五代も続いているサイクル。

では、家族は？ 母は？ 父は？ 兄弟は？ 祖父母は？

いない。いる訳が無い。彼女以下、全ての阿礼乙女は皆彼女自身なのだから。

友人は？ 知人は？ 遊び相手や話し相手は？

いない。何故なら彼女は幻想郷縁起の為にいるのだから。

気にかけていてくれたものもいただろう。友人になつてくれた者も、過去にはいたのかもしれない。しかし、時間の流れが違う。妖怪とは逆、寿命が短いからこそ、本当の意味で彼女は心を開くことが出来ない。嫉妬すらあるのかもしれない。

本来なら、俺も嫉妬される対象になるのかもしれない。羨み、泣き言を言われる立場なのかもしれない。

だが、こうして話した事で分かったのだろう。恐らくそれは安心感。紫にでも抱くであろう。人で無いからこそ出来る安堵が。

しかし、これではまるで。

「 ああ。行こうか」

考えを捨てる。待たせるのも失礼。己は手を出し、引かれるだけでいいのだから。少女の笑顔が輝いた。まるで壊れ物を扱うかのよう

に丁寧に、その手を握り締めた。

○

○

「マジでか？」

「ああ。どちらにせよ、未だ妖怪が人里に住むことは許容されていないようだし」

「だからってなあ……」

慧音が突然。しばらくの間住まわせて欲しい、と頼んできた。それについては驚きながらも納得があった。未来の幻想郷がどうなのかは知らないが、この里に住むのは本当に人間だけなのだ。妖怪は皆外から来た物。

一人住んでも居心地が悪かろう。それどころか刃を突きつけられて追い出される危険性もあるのかもしれない。

「……無理か？」

「いや、無理じゃないと、家だって一応スペースはあるし……」

つい最近出来たマイホーム。舞風の協力の下、こちらの要望どおりに魔術で組んだのだ。材料こそ手間はかかったが、作るのは数分ですんだ。

結界山の中だから一応舞風の許可が必要だろうけど、アイツがそんな事を断る奴とも思えない。

「まあ、どうしてもダメならなんとか野宿をするが」

「お、おいおい。幻想郷で野宿なんてしたらそれこそどうなるか分からないぞ。今は人間なんだろ？ 別に迷惑じゃないし、一応世帯

主の許可はもらうけど。」

「世帯主？」

「俺が住んでる山ってそいつのなんだよ。結界を張って妖怪が入って来れないようにしてるんだと」

「それは凄いな。山一つ覆う結界を張るのか」

「本人が言うには朝飯前らしいよ」

まあ、封を操る程度の能力だしな。と心の中で呟く。舞風は八雲紫の能力を反則とか言ったりするが、正直言っても随分反則である。

攻撃能力こそ確かに高くないが、防衛能力は遥かに高い。やろうと思えば一人で要塞化とか出来るんじゃないだろうか？

「……ふむ。それほどの大妖ならば一度会ってみたいな」

「大妖って言うか、本人はそんな自覚無いみたいだけどな」

基本、妖怪と言うのは歳をとればとるほど行動範囲は狭まるもの。そのはずが、気付けば家にはいないし、数年前までは外で放浪までしていたほどだ。カリスマとか威厳とか、そんな物も無い。

ただ、時折見せるその表情は、確かに長い時間を生きていることを気付かせる。

「た、大変だ!!!」

と、思考に意識を埋めていると唐突に響いた大きな声。ふとそちらへ意識を向けるとまだ若い男が肩で息をしながら人々の視線を集めていた。

何かあったのだろうか？

「も、門の前で遊んでいた子供達がつ、妖怪たちに攫われて」

辺りからはどよめき。合間には悲鳴。慧音の目が微かに鋭くなった。そう言えば、男は門の前で番兵をやっていた奴だと思いつく。何処か気の弱そうな、頼りにならなそうな。

「……慧音」

「このタイミングだ。恐らく、さっきの奴だろうな」

先程、追い払った妖怪。その顔が浮かんだ。もしその予測が当たっているのなら、よほどアイツは短気なのか、無駄にプライドが高いのか。どちらにせよ、人里の者に手を出した。

恐らく、『門の外だから』などと言いつ言い訳を重ねるのだろう。確かに、それに関しては正しいだろうが、少なくともただではすまないだろう。

「すまないが。その妖怪はどちらに逃げた」

視線が集まったのは慧音。その目は真っ直ぐ、男を見る。睨むと言っても過言ではなかったかもしれない。

「ま、魔法の森の方に」

「……魔法の森か」

人里からはそれほど離れていない位置にあるはずだ。一度だけアキと共にその上空を飛んだ記憶がある。

こちらを見た慧音に一度頷き、慧音と共に里の出口へと向かう。

「あ、あんたら。何処に行こうってんだ」

「無論。子供達の下へ」

男の言葉に間髪入れずに答え、歩みを進める。今はそれに構うほどの余裕も無いだろう。

ただ黙って、こちらを見送る人間達は気悪そうに俯き、目が合った傍から反らされる。とんでもなく気概がないものである。

本来なら、助ける義務も義理も無い。

人妖の關係の悪化を防ぐため、と言うのも確かにあった。だが、自分を動かすのはそうではないのだ。

多分、人が妖怪に食われると聞いても、今なら未だ納得できるだろう。人間を捨て、魔女になってしまったからこそ、摂理と知るだろう。だが、これは違うだろう。

門の前で遊んでいた子供を攫うような、卑劣な行為なんて、幻想郷には似合わない。自分勝手な意見は承知。妖怪の心持など無視していることも承知。

だが、ここは幻想郷なのだ。自分が憧れた幻想郷なのだ。

納得できないなら捻じ曲げる。それくらい、いいだろう。俺だって、魔女の端くれなのだから。

「慧音。分かるか？」

「……ああ。微かだが妖気の跡がある。追跡は可能だ。だが……」
「少し、違和感を感じるな。畏なのか？」

本来なら妖気の疎い俺でさえ言われれば分かるほど残された妖気。慧音は微かと言ったが、常に微量の妖気しか発しない舞風がわざと散らすよりも多い。

正直、畏か、それとも誘っているかにしか思えない。

「危険……だけど」

「行かねばな。君は後ろについていてくれ。私が前に立つ」

深い森を慧音が先導し、それについて進んでいく。感じられた妖気は一つではない。恐らく複数体の仕業。しかし、もたもたしていは結果は見えてくる。

いや、そもそも今既に希望に縋っている状態なのだ。攫われた子供たちが既に妖怪の腹の中であるということはどうして否定できる？

「……最悪の場合は、これしかないか」

懐に仕込んだ三枚のカードを確認し、そのうちの一枚を握り締めしていく。指に当たる硬さが僅かながらに体に現実味を与えてくれる。

数分、歩き続けて唐突に慧音が足を止める。それと同時に聞こえた微かな声。それは子供のもの。身長に歩みを進めていく。先程よりも更に姿勢を低くし、近づいていく。

「 離せ！ 妖怪っ！」

「 けっ、威勢だけはいいいガキだ。そんなに焦らずともあの女共が来たら一人残さず食ってやるよ」

聞こえた二つの声はどちらも聞き覚えがあるか。やはり、と言う思いが頭に巡った。低い姿勢のまま、草むらからそちらをつかかった。紐で足を縛られ、転がされている子供が五人。その傍らに居るのは村で見かけた妖獣。腕には何も拘束が無いのは余裕の表れなのか。

慧音と目を合わせる。一応最低限の作戦としては俺が魔法で援護をしているうちに子供達を確保、後に殲滅と言う物が上げられていた。互いが互いを知らないのだから仕方ない。

「 まあ、もう来てるみたいだけどなあ」

「 !!!」

妖獣がこちらを睨む。目こそ合わなかったが、確かにこちらの茂みを見る。直後、頭上で激しい金属音。

「くっ、気付かれていたか！」

慧音が、頭上から突如現れた妖怪の凶刃を防いでくれた。その主もまた妖怪。慧音の剣と妖怪の爪とがしのぎを削るように交差し、やがてそれを弾く。

直後、俺は懐に手を伸ばしていた。それは使い慣れた。いつもの手札。

「魔符『アウターウィッチ』！！」

宣言と同時にカードに埋め込まれた魔法媒体が機動。偽・スペルカードは今や魔力を使ってしか発動の出来ない言わば劣化版。それでも、舞風の力あって様々な問題は解消できた。

その一に、魔力の消費を大きく抑えることが出来るようになった。一日ならば三度まで使える。

その二に、砲弾の数は三つではない。五つだ。

「ぶちかませっ!!」

魔力砲台から放たれた魔力弾は妖怪の体を穿ち、削る。断末魔を上げることも出来ぬまま、妖怪は息絶えた。

もう一方、子供達の傍にいる妖獣に二つ砲台を送る。自動では敵味方を認識できないがために、どうしても操作に余裕が無い。

「慧音!」

「分かった!!」

同時に走り始める慧音。足の向く先は子供達へ。それを妨害しようとして立つ妖怪を砲台が狙う。小さく舌を打つ音が聞こえ、その場を弾かれたように退いた。

俺もまた、慧音の背を追うように走る。俺を囲うように回転する砲台があくまで妖怪を狙う。そして、子供達の元に到達した慧音がそれらを守るように背に庇う。形勢逆転である。

と言うのに、その顔から苦渋のものは感じられなかった。それどころか何処か小ばかにした風もある。

「……………結局、畏かよ」

今の今まで隠れていたのか、まるで何かに誘われるかのように妖怪たちが現れる。風体は様々。どれもが異形。知能など欠片も感じられそうに無い怪物共。

無論、狙われているのは妖獣ではない。人間である子供達や人の因子を持った自分達。ふと見れば、子供達は皆小さく分かりにくい傷を負っていることに気付く。この妖怪たちはこの微かな血の匂いに誘われてきたのだろう。

「ぎゃははは！！ バーカ。まんまと引っかかりやがって。お前ら揃って餌になっちまいな。余ったら俺も食ってやるよ」

その妖獣の言葉に耳を貸す余裕も無い。じりじりと迫ってくる。飛んで逃げる、と言う案が浮かんだが、手が足りない。子供達を置き去りにすることになってしまう。

ふと、慧音を見る。その足元にしがみつく子供達は皆震えていた。あの、妙に威勢のいい小僧もまた。

慧音もまた、難しい顔をしていた。必死に策を見つけ出そうとしていた。

そして、唐突にハツとする。真っ直ぐにこちらを見る。

「ベリー。ほんの少しでいい。時間を稼いでくれないか？」

「策があるのか？」

「策なんてものじゃないただの博打だ。しかし、頼る背がこれしか

ない。私達ではこの数を相手にするのは不可能だ」

慧音がそういうのなら。信じるしか無いだろう。彼女はこんなところで死ぬ存在ではない。ならばこそ、彼女の最後の手段に賭ける。

刹那、血に餓えた妖怪妖怪たちが一斉に動き出す。考える余裕すらも無い。俺は懐に手を伸ばし、二枚目のカードを掴み取る。

「『魔風』つ！ー！」

それはあくまでスペルカードルールという物のためにのみ作り上げたカード。その真意は撃破ではなく、防衛。カードを掲げ、強く宣言する。

「『ミラクルタービュランス』ッ！ー！」

引き金は引かれ、カードの術式が具現、発現を起こす。瞬間、自分達を囲むように現れる数え切れない程の妖力弾。それは絶え間なく増え続け、そして。

「発動ッ！ー！」

直後、回転を始める。ゆつくりと、しかし段々と早くなる。僅かに存在する隙間は妖怪が通れるほど大きくない。飛び掛ってきた妖怪は瞬く間に体を削られ、または弾かれて大地に落ちる。

自分が作り上げた二枚目のカード、魔風『ミラクルタービュランス』。目的は防衛。自らに迫る敵から己を守ること。発案は舞風。封を操る能力があるからこそ浮かんだ守るためのスペル。

「しかし、結構魔力を食われたな」

消費量は普段ならこれ一つでバテるほど。既に一枚使っていた事もあり、かなり来ている。

集中を途切れさせないように慧音を見れば、彼女はその手に何かを握り締めながら目を閉じていた。額を滲ませながらも彼女は一心に何かをしている。

「つく、そ。あっさりばれやがった」

思わず額に汗を滲ませる。それらが知能のほとんどない妖怪だからこそもう少し気付かれるのは遅れてほしかった。ついさっきまでガンガンとぶつかっては跳ね返されを繰り返していた妖怪たちは今は黙ってこちらを見ている。

この魔法はあくまで防衛目的。攻めに転じることが出来ない。故に、

刻まれたパターンはただ延々と回り続けるだけ。俺が動けば別だが、基本同じところしか回れないのだ。故に、時間が経ってこちらの体力が切れれば、こちらの負け。本当の意味で未だ時間稼ぎにしか使えない。未完成のスペルなのだ。

「……っ！ まだなのか慧音っ！！」

振り向く。その時の俺の顔は焦りに満ちていただろう。しかし、彼女の顔は凜として、何かを、もしくは誰かを信じて疑わなかった。

そして

「来る」

直後、天に昇るほどの巨大な火柱が立ち上がる。

「……は？」

あまりの出来事に、思わず呆けた。今の今までそこに鎮座していた

妖怪共が空を飛び、焼かれ、一瞬で墨となって落ちてきた。

集中が切れてスペル、ミラクルタービュランスは終わる。しかし、何も動かない。誰も動けない。その場における絶対強者は突如舞い降りた。

「おーおー。雑魚妖怪がうじゃうじゃと徒党を組んで。女子供を襲ってるの？」

それは白い、綺麗な髪をしていた。

「本当なら無視するところだけど、手を出した相手が悪かったわね」

背から生えるは焰の双翼。

「ま、なるべく苦しまずに殺してあげる。早いところ切り上げて友人と再会の祝杯を上げたいもの」

舞い降りて、圧倒的威圧感を撒き散らす少女。

「さあ、不死の炎に焼かれないのは、前にな」

蓬萊の人の形。

それからの戦いは圧倒的過ぎた。突如現れた少女に指一本触れることも俛ならないまま、妖怪達は焼かれていく。灰すらも残されるところとなく。

呆けて見ていた事を責められることもないだろう。強いだけではなく、その炎は純粹に美しい。強く燃え、川の流れのように時に静かに、時に激しく燃え盛る。

「そ、んなばかな」

気付けば残りはあの妖獣だけになっていた。全てが燃やされたかその前に逃げた。ただ唯一、勝利を確信して止まなかったそれだけが取り残された。

「後はアンタだけみたいね。時間が勿体無いから。もう殺すけど、遺言とかある？」

「ま、待ってくれ！ もう人里の子供を攫ったりしないから、見逃してくれよー！」

少女は首を傾げる。事情を知らないのだ。彼女は慧音のSOSに答えただけなのだろうか。

「ふうん。通りで。私は別に人里を襲うとか襲ったとか。そういうのは割りとどうでもいいのよ」

「じゃ、じゃあ」

「うん。そうだね」

ニコリともせず、少女は妖怪に向き直ると、その口を開いた。

「めんどくさいからもう殺すわ」

「へっ……っ？」

直後、特大の火焰が妖怪を飲み込んだ。悲鳴も断末魔も上げず、ま

るで他の妖怪と同じように、それもまた灰となって消えた。

「さて、と」

少女はこちらを振り向き。第一に俺を睨んだ。冷や汗が頬を伝う。

「で、アンタは何？ 人間じゃないみたいだけど」

「俺は、魔女、だ」

「魔女？ 魔力の専門ね。慧音、知り合い？」

「ああ、彼女がいなかったらお前が来る前に死ぬところだったよ」

「いきなり慧音の気配がこの辺りにあふれ出すから飛んできたわよ。久しぶり」

少女が笑顔をその表情かおに灯す。まるで人形のように無表情な少女が初めて人間らしさを見せたので、微かに安堵した。

「ああ。私もだ。彼女は魔女のベリーウエル。人里で出会って一緒に子供達を助けに来たんだ」

「そう。藤原妹紅よ。慧音が助けてもらったみたいだね。ありがとう」

「そんなこと……」

ない、と心中で呟いた。実際、彼女が間に合わなければ自分達はやられていた。

「積もる話もあるが、まずはこの子達を人里に届けるのが先だ」

慧音が視線を下に下ろす。一人残らず気絶していた。いつの間にと
思ったが、それも些細なことであろう。

「そうか。ではお前も大精霊には会ってないのか」

「ええ。八雲紫に問いたただそうにも神出鬼没だからね。聞くことも
できやしない。今は迷いの竹林の中の小屋に住んでいる状態よ」

「……大精霊、ね」

やはり聞き覚えの無い名を復唱しながらも人里への帰路へついでい
た。俺の手には子供。攫われたうちの一人を抱えて飛んでいる。筋
力は普通の少女レベルなので、俺は重いものを持たないのだ。だか
ら慧音達には二人ずつ持つてもらっている。

「なあ、その大精霊ってどんなやつなんだ？」

「そうだな……よく場を引つ掻き回す煩い奴、か？」

「見た目は子供、やることも子供。一緒に旅をしてたけど、いきなりいなくなったのよ。アイツ」

不満げに、しかし何処か嬉しそうにそんな事を口にした。

……なんだか、一人それっぽいのが身近にいるが、まさかそんな偶然は無いだろうと思いを払った。

ようやく人里の近くに降りるも、妹紅はそれから一步も進まなかった。

「どうかしたのか？」

「いや……人里には入りたくなくてね。私はここで待ってるから代わりに連れて行ってくれないかい？」

「そう、か。分かった」

慧音は肩に子供を二人ずつ担ぎなおす。辛そうだが、人里までならば行けそうだと振り返り、妹紅に頭を下げると人里に向かって歩き出した。

慧音は悲しげに、それを見ていたがやがて諦めるように人里へと歩を向けた。

「……聞かないのだな」

「？ 何を？」

「妹紅のことだ」

それに少し考えて、気付く。確かに、彼女の存在は疑問の対象になってもおかしくはないだろう。彼女の体は確かに人間である。見た目も、筋力も。故に、その身から発せられる妖力は違和感にしか感じられないだろう。人が人の身で妖術を扱うのは本来不可能なのだ。

そう、それが人で無い限りは。

「……ま、幻想郷なんだから色々いるだろ。今更妖力を扱う人間がいたとして驚いてもおかしいとは思えないもんな」

「そうか……ならよかった」

「よかったって、なにが？」

確かに、事情を知っていると言う理由もあってそれほど驚くことは無いが、それを安堵される理由なんてものも無いはずだ。

首を傾げると慧音はフツと笑った。

「彼女を恐れないでいてくれた者は多くない。私が知っているのは大精霊だけだ」

「ふん……」

人里の門の前に立つ。待ち構えていた人里の人間達が駆け寄り、まるで奪い取るかのように子供達の体を持っていく。それに対し、若干怒りが沸いたが攻撃しようとも思えなかった。

「……佯ならないな」

「仕方あるまい。私達は人外。人と共に在ることなど出来はしないよ」

そうなのだろうか？ そんな思いが頭に過ぎったが、そんな事はな
いと言うことを知っている。だからそれを脳内で否定するのは簡単
だった。だが、実際はそうではない。

気絶した子供を抱えた親の俺達に向ける視線は感謝ではなく、疑心
であった。寧ろ感謝など欠片もなかったのだ。共存とは、ほんの一
時なのではないだろうか？

それは幻想郷の在り方そのものを否定しているような気がして、慌
てて頭を振った。

「慧音。お前は、どうするんだ？」

「そうだな……友人も見つかったことだし、こちらに泊まることに
するよ。すまないな」

「いや、いいよ……慧音？」

ふと、人も立ち去り自分達しかいなくなったその場で慧音は一つの

ものに目を奪われていた。

それは剣。一本の剣。こちらとしては見慣れた一本。舞風が里に入れないからと渋々置いていった封剣『神風』。

「あの剣がどうかしたのか？」

「いや、何処かで、見たことがあるような気が……気のせい、か？」

慧音がそれに手を伸ばす。そして、俺が思い出して声を上げたときは既に遅く、バチツと言う音と共にその手が弾かれた。

「あゝ、悪い悪い。それ俺の知り合いのなんだけど。多分アイツのことだから自分の知らない奴が触ったら反応する結界を張ってるんだよ」

「いや……そうか。知らない者が、な。勘違いだったようだ。すまないべりー。妹紅を待たせているから私は行くよ」

少し気落ちするように、慧音は笑顔を作り、手を振りながら去っていった。

……あつという間の事であった。こうして出会えたのは凄い偶然だ。少し、いやかなり嬉しい。死にかけたけど。

「……舞風の奴。いくら持ち込めないからってここに刺しておく必

要は無いだろっに」

そう思って、それに手を伸ばす。わざわざこんな目立つ場所に置いておく必要は無いだ。

と、

「イタッ！」

バチッと、再び発動する結果。ひりひりする手には最大限の手加減がみてとれるが、これはまさか……

「……もしかして、誰が触ってもこうなるのか？」

そうだとしたら……

考えることをやめ、人里に入る。その予想が当たっていることを否定したかったからである。

「で、どうしてそうなったんだ」
「……俺に聞くな」

視界に映るは両手いっぱいには袋やら装飾品やらを身につけた舞風。しかし欠片も嬉しそうではなく、げんなりとした顔をしている。

はあ、とため息をつく。頭の上のガラス球が零れ落ち、慌ててそれを受け止めた。

「いやな。俺も挨拶だけのつもりだったんだよ。稗田の家にな。一応結界山の頭目だから。しかたなく。それでな、いきなり飯に誘われてな。まるで子ども扱いだ。この俺が。分かるか？ この気持ち」

「知るかボケ」

自分が命がけで戦っていた合いだコイツは暢気に食事やらでお楽しみと来たものだ。そりゃあ怒りも沸く。

が、

「飯を食い終わったと思ったらな、何をどう思ったのか衣裳部屋に案内されて、着せ替えごっここの始まりだよ。女装までさせられた。見るか？」

袋から数枚の紙を取り出す。上手い。めちゃくちゃ上手い。舞風が描かれていた。様々な衣装で。別にお前女装とか必要ないだろ。

「ともかくな、あいつは妖怪を弟かなにかと勘違いしてやがる。お前も気をつける」

多分、それはこいつだけなんじゃないだろうか。なんてことを口には出さず、少しだけ目の前の子供を不憫に思った。ほんの少しであるが。

○ ○

「すまない。待たせたな」

こちらに駆け寄ってくる友人。長い髪を大きく揺らし、こちらに手を振りながら。

「それほどでもないよ。子供達は？」

「ちゃんと親元に返したよ。心配せずともな」

「心配なんてしてないよ。信じてるからね」

「そうか。ありがとう」

百年ほど前に、旅の途中にたまたま会ったぶりか。まったく変わっていない様子に安心した。

と、ふと先程まで共にいた魔女の姿が無い事に気付く。

「あの魔女は？」

「ベリーとは人里の前で別れた。里の中に知り合いを残していたらしいよ」

「そう……」

思い出す。あの魔女の姿を。

妙に特徴的な、目に痛いような色彩のドレス。光に反射する金の髪。と、いう特異な姿の割には腕が立つというわけではない。

しかし、あの慧音たちを庇い、立つ姿が、

何故か、舞風の姿と重なった。

二百年もの月日で特徴的な顔と服装以外思い出せなくなりそうだが、それでも何処か似ていると思うほど、それを連想した。似ているところの方が無いだろうに。

「……ま、そのうちまた会えるか」

「どうかしたか？ あ、それと今日から私もお前のところに泊めてくれ。場所が無い」

「……はいはい。分かったよ」

そうして、その歩みを迷いの竹林へと向けた。今は今でやることがある。

会えるだろう。またきつと。アイツがそんな簡単に消える訳が無いのだから。

魔女と人里（後書き）

もこたん登場。しかし道は重ならず。

慧音と舞風が会ったのは実質一度だけ。それも二百年前。顔すら忘れていても不自然では無い気がします。

ベリーウエル第二スペル『ミラクルタービュランス』。最後に（笑）
がきてもおかしくなさげなネーミング。でも個人的に語呂が好き。
ミラクルが。

えっ？ 阿悟さん？ 寂しがり屋なんですよ。いいじゃない。一人
くらいはっちャけててもいいじゃない！！

舞風と妖精（前書き）

単位を二教科落とした。あと二つで留年である。

最近の金曜日夜八時の更新が定期的。自分でもこの時間まででかせばいいやという粋のようなモノが出来てなんとも言えない気分になっております。

テストがね、もうね。100点取れるのもあれば30点しか取れないものもあると言う展開。100いかないから不可を可にして欲しい。

神霊廟買いました。しかしやる時間はあまり無い。新キャラをこの小説に出すかどうか……そもそも星蓮船の方も出てきてないが。これはちよっとしたミスです。

舞風と妖精

「 そうだ。妖精がない」

徐に、しかし突発的に、頭が狂ったかと思うほど瞬間的に。結界山の主、舞風はそんなことを口走った。それに目を向けることもなく。

「バカじゃねーの」

と言い放つ。するとその顔は愕然とした。言い表すならば梅干が入っていると思っていたおにぎりの中に入っていたのは実は乾燥させた蔓だったみたいな顔である。

816

「な、なん……だと？ ダ、ダメ？」

「そもそも妖精がないのはお前がそういう風に結界を張ったから
だろ？」

張った本人曰く、この結界山に張られた結界は魂の力に大きな影響を及ぼすもののだそう。それはどんな生物にでも魂はあると言う当然の事を建前に、その影響はありとあらゆる存在の侵入を防ぎ、妨害する力を持った。

故に、この結界山はある意味隔離された空間になっている。それほど大きくない山。しかし人の手が絶対に入らないとなれば当然小動物が馬鹿馬鹿しいほど多数生息してもおかしくはない。

しかし、逆を言えばどんな生物もこの山を出ることは出来ても入れるのは極少数、出た物だけに限定される訳で、ここで生まれた生物でも無い限り、結界山の出入りが不可能なのだ。この前他所で嫁さん見つけてきた山猫が結界の際で鳴き合っている所を見てこっちが泣きそうになったものである。

当然、妖精も入ってこないし、新たな妖精が生まれるにはこの山はまだ未熟なのである。

「うぐぐ……そうだった。なにか言い案は無いだろうか？」

「結界を解けばいいんじゃないか？」

「そうなたら外の妖怪が入ってくるから却下」

「ならせめて魂じゃなくて妖怪を入れないようにすればいいじゃないか？」

「ぶっちゃけると今更結界を作り変えられない」

「お前……」

ここまで来ると流石に呆れも沸いてくる。何も考えずに張ったんじや無いだろうかコイツ。あの時の猫に謝れ。

「くそ、妖精がないんじや自然って感じがしないじゃないか。どうすればいい」

「そんなに妖精が見たいんだつたら外に行けばいいじゃないか。霧

の湖ならいるだろ?」

「何処そこ?」

「知らんのかい」

うんうんと首を捻り続ける舞風。それを無視して手元の本に視線を落とそうとすると入り口のドアが開く。

「あら? 私達の家で何をやっているのかしら?」

アキである。その手には蔓で編んだ籠を持っている。中身は山菜のようだ。一部毒々しい茸が見えたが

首を傾げ、普段ならいはずの舞風そんざいに問う。重たげな頭を持ち上げて、舞風はアキを見た。

「ああ……妖精が、欲しいんだ?」

「飼うの?」

「いやそうじゃなくて」

「監禁するの?」

「いや違うって」

「食べるの?」

「お前の中で俺はどんなカテゴリに属す生物なんだ?」

舞風がじつとりとした視線をアキに向けた。しかしそれも数秒。再びため息をつき、天井を見上げた。

「……はあ、どっかから攫ってこようかな。それで餌付けして境界山に置けば……ってダメだ。おもいっきりさっきの飼うと監禁に当てはまってるじゃないか。むう……」

「そうねえ……確かにいても悪戯してくるだけだけれど、いなくなると寂しいものねえ」

「そうそう。風流って言うの？　なんていうか自然って感じがしないんだよな。妖精がいないと」

それは確かに頷くことがある。旅をしている最中もしつこく悪戯をしてきたりする場面はあったが、今はそもそも誰も入ってこないのでもそんな事がない。全く無い。本を読むなら静かな方が助かるが、それでも三日に一度くらいなら騒がしくてもいい。でも本をビリビリに破くのは勘弁して欲しい。

「……自然発生しないのは予想してた通りだけど、ふむ。そこら辺は実際に妖精に会いに行つてからでも考えるか」

舞風の視線が窓の外へと向いた。鋭く、非常に暑そうな日差しが照りつける空。

今更であるが、今季は夏である。気温は30　を軽く越えている。

○
○

「ベリー。格好のピクニック日和だとは思わんかね？」
「こんなクソ暑い日が格好の日和なのは運動会だけで十分だっつーの」

人里近くに轉移し、徒歩一時間程度。そこに霧の湖はあった。

非常に規模の大きな湖である。対岸は遠く、目を凝らさなければ見ることが出来ないくらいに。上空では何匹かの妖精が戯れている姿が目に入った。

「でも、霧の湖って言う割には霧が無いのね」

ぼろっと零したアキ。確かにそうなのである、確かに湖としては凄
いと思うが、これの何処が霧の湖かと疑いたくなるほど、その湖は
晴れている。

それについて聞いてみようかとベリーの方を見れば本人も意外そう
に頭を掻いていた。

「……おつかしいな。いつもなら真昼も霧が出るはずなんだけど」
「何かあったのかもな。そもそもどうして霧が出るのかも分かって
無いんだろ？」

「……いや、多分氷の妖精のせいだと思うけど」
「氷の妖精？ そんなものもいるのか？」

だとするならば、興味深いことである。単体でこの湖全体を覆うほ
どの霧を作り出す妖精。さぞ力を持った妖精なのである。本当な
らそういった存在は極稀であるが、幻想郷なのだからいてもおかし
くは無い。

「まあ、妖精に話でも聞いてみればいいさ。ちょっと弁当持ってて片手の、今回のピクニックのために持ってきた昼飯の籠をアキに手渡す。」

そうすると軽くふわりと空を飛び、戯れている妖精に近づいていく。ちょうどよく、緑色の髪をサイドポニーにした、平均よりは賢そうな妖精を見つけたので話しかける。

「もし、ちよいと氷の妖精の話を」

「わっ！ 人間だ！！」

「人間が来たよ」

「やっつける！」

……予想はしていたが、こつもその通りだと流石妖精という気にもなってくる。

小さな妖力弾をつくり、こちらに投げつけてくる無数の妖精達。もう少し見てくれを見て欲しいものである。こんな子供が危害を加えるように見えるのか？

まあ、そんな事は向こうには関係ないのか。そんな事を心中でぼやき、反星陣を展開する。流石に何もなしでこれほどの弾幕は避けきれない。

「どいつもこいつも可愛い顔してやるのが怖い。これだから妖精つてのは……」

普通に人間がもらつても間違ひなく骨折以上は免れない攻撃。そんなものが顔の真横を通り過ぎていくのだから若干ひやりともする。

しかし、所詮数だけ。速度もなく、十分に避ける事は可能である。

「でも、このままじゃ話も聞いてもらえなそうだな」

見た瞬間に攻撃を仕掛けてくるのだからよっぽどだろう。そうなる
とただ説得するのは難しい。

ならば……

「 捕獲結界」

それはブロック上の箱をイメージし、作成した結界。それはどこからともなく現れ、少女を囲ってゆく。それに大仰に驚きながら少女は壁に激突する。

簡単なものだが、相手は妖精だから抜け出せないだろう。

そう思った瞬間、妖精は結界の中から唐突に消えた。

「……はい？」

そこに存在した要素を一つも残すことなく、妖精の少女は消えた。目前から消えた。

目の端に映った妖精達を正面に移し、その妖精がその輪の中に当然のように存在することに愕然とする。

「……おいおい。瞬間移動かよ。最近の妖精はレベルたけーなオイ」

それしか浮かばない。少女は箱の中から消え、そこにいるのだから。これを瞬間移動、もしくは転移と言わずなんと評するべきか。孫悟空もビックリである。ただし西遊記ではないが。

妖精達の攻撃は続く。こちらとしては傷つける気にはなれない。わざわざ妖精と戯れるためにここまで来たのだ。何が嬉しくてスケジュールを妖精狩りに変えねばならない。

「捕獲、が無理となると……」

やはり、対話か？ 一度捕獲しようとしておいて？ しかしそれ以外はない、か。

「こーんーにーちはー。俺は悪い人間じゃないからお話しませんかー？」

返答は妖力弾の弾幕によって返された。ため息をつきたい気持ちになりながらも、くるくると空を回りながら避けていく。一度きりではめげずに説得を試みる。

「あたいの友達に何してるんだー！」

「はえ？ ぶふっー！」

上空よりとび蹴り。俺の頭に突き刺さって多大なる衝撃を食らわせてくる。視界の端に見えていたのは一瞬の出来事。青い服と小さな足。そしてそれが俺に当たる瞬間、なにやらひんやりとした空気が身に当たる。

体勢を立て直してみれば、そこにいたのは腕を組んだ妖精。しかしその風体は既存の妖精と大きく異なっていた。背にはガラス細工のような三対の羽、青い髪、青い服。そしてその身から滲み出るような、寒気かんき。

「あたいが相手になってやる。かかって来い人間！」

一際強い妖力。これは、今の俺より多くね？

ただの妖精の域を越えた力。それが、この氷精か。

「いや、参ったね。本気で、どうも」

流石に想定外だ。たかが妖精と括っただけにこれほどの力を持つ妖精は初めて見た。

故に、血が滾る。

今の自分とどちらが強いのか？ ただそれだけ。当然封印を解いてしまえば楽に勝てるがそれでは意味が無い。

『元』妖精である俺と、現時点で最強の妖精と。どちらが強いのか。

「おい、氷の妖精！」

「なによ！」

「俺と勝負しろ!!」

「ふんっ！ 上等よ！ アンタなんか氷づけにして椅子に使ってやるわ」

いくらなんでもそれは酷いんじゃないだろうか？ 一瞬そんなことを考えたがすぐに振り切り、真正面から相対する。氷精の後ろにいる妖精達は黙ってその事態を見ている。

緊迫した空気が漂い始める。そして……

「 あだっ!?!? 」

「 いてっ!?! 」

「 はいはい。喧嘩はそこまでにしておきましょうね。 」

その姿に見合わず、俺と氷精の脳天に拳骨を食らわせたのはアキであった。ニツコリと笑ったまま、しかし俺にはそれが『次はない』と言っているように思わず身震いする。

「 別に喧嘩って訳じゃ…… 」

「 舞風ちゃん? 」

「 ひいつ 」

怒ったアキは、怖い。経験談である。故に渋々と俺は引き下がってため息をついた。

「 アンタ! 痛いじゃないの! あたいを誰だと思ってるの!?!? 」

「 氷の妖精ちゃん、かしら? お名前なんて言うの? 」

「 どうしてあたいが 」

「 妖精ちゃん? 」

「 あ……う……チルノ 」

氷精もまた、アキの眼力に押さえ込まれたようである。

しかし、一応俺ってば結界山の主であるはずなのに、どうしてこども女達に頭が上がらないのか。現代の草食系男子の気持ちを今なら理解できそうな気もしなくもない。

「で、何がどうなって妖精と昼食を食べることになった訳？」「ベリー。これだけは言っておく……俺にも分からない」

大量に。そう、それこそ三人では食べきれないような量を持ってきたのは理由は、正直言っておアキの進言である。別に余ったら夜食べればいいじゃない、と特に考えずに了承。全てはこの時のためだったのか。アキってば策士である。

「……いや、でも妖精を餌付けする奴は初めて見た気がするな」

数え切れぬほど無数の妖精達におにぎりを渡していく。そんなにほいほい渡しても大丈夫なのか。主にうちの蓄えとか。

もしかして、こいつ餌付けして山まで連れて帰るつもりか？ いやまあ確かにこの氷精とか傍にいただけで涼しいし夏とか便利かも知れんけど冬とかきつくね？ って言うかさつきは監禁とか飼うとか危ない言葉を投げかけてきていたのに？ いやまさか、大体ここから結界山までかなり距離あるし湖の妖精は力がもたないはずだし

「 ちょっと。舞風？ 聞いているの？」

「 え？」

「 まったく、ぼけつとして、チルノちゃんが言いたいことがあるそうですねですよ」

しまったしまった。すっかり思考の海に浸かっていた。咳払いをして、氷精、チルノに向き直る。少女は高飛車な笑みを見上げ、見下ろすようにこちらを見ている。身長は大体同じくらいなのだが。

「さて、チルノちゃんとやら。俺になにか
「アキに免じてアンタをあたいの手下に加えてやるわ。感謝しなさい」

えーっと。はて、どうしてこうなったのだろう。さっぱり見当がつかないのだが。

「ベリー。俺こういう時どんな顔したらいいか分からないの」

「笑えばいいんじゃない？」

「それが出来れば苦労しねえよドカス」

顔面殴られた。痛い。骨に響く。

さて、そんなことはひとまず置き、アキを見てニコリと笑った。

「お前いったい何言った？」

「あなたが妖精を集めていることと霧がない理由についてですけど？」

「それがどうしてこうなった？」

「さあ？」

入力、出力の間でどんな文字化け起こしたらこんな言葉が出てくるんだろう。全くを以って訳が分からない。

しかし、ここで「あ、アンタなんかの部下なんてごめんなんだから！」と返すのは簡単であるが、それではあまりにも子供っぽいでは無いだろうか？ 俺は万年を越えた、言わば永遠の妖精とも言うべき超長寿なのである。それが子供の言葉をポイなんて、大人気ないとは思わないだろうか？

「いよかるう。ただし、お前の方が強いと認めただけでは無いぞ？」

「ふふん。アンタなんかあたいに勝てる訳ないじゃない。氷づけ

にされたいの？」

「ほほう。言ったな？ この俺に言ったな？ いいだろう。その喧嘩買った」

「喧嘩を売ってるのは貴方じゃない」

頭殴られた。痛い。躊躇がない。一体どういふことだ。

「お前らも霧がない理由は知らないのかよ。なんなんねん」

「だって、いつもならあるのに今日だけないんだもん」

それを聞いて俺達三人はふむ、と首をかしげた。そうなる原因がまるで俺達にあるようにも聞こえてくるが直接不法投棄やら湖を汚す真似をした覚えは無いし、なにより霧がある方が涼しいだろうに、わざわざ消す理由だって無い。

「……おいベリー。霧は氷精の仕業なんじゃなかったのか？」

「そう、だったと思うんだけど……発生理由は別にあってチルノは操るだけだったのかな……」

「何処情報だそれ。その情報屋を御鼻屑しつこにするのは今日でやめなさい」

はためく服とカタカタと揺れる剣を押さえつけ、俺はクルクルと回りながら後ろのベリーに視線を向けた。結局、ピクニツクの名目は何処へやら。妖精達と平行飛行なんて珍しい体験をしているが一行に霧の消失の原因は不明である。

もしも本当に氷精が霧の発生を促しているので無いならば、元々湖が一带を覆うほどの霧を出せるという事だ。つまり、問題は湖にあると言うこと。

そうは言っても、原因などそう分かる訳が無い。こうも広大な湖を全て回ることも難しいし、よほど運がよくなければ原因の究明は今日中には不可能だろう。

「しっかし、あのチルノつてのも随分だな。能力や妖力に力を持っていかれてる割には普通の妖精並みの知性。まあ、人間から見れば随分頭は悪いほうだろうけど」

「そうね。でも妖精はあのくらいが可愛いじゃない」

「あの生意気さがなくなってくればどんな妖精でも可愛く見えるよ。まったく、一介の妖精が妖怪を手下、だなんて聞いた事ないぜ」

「ふふ。でも、満更じゃないんでしょ？」

「……まあ、な」

こういった存在と触れ合うと、よく昔を思い出す。敵も、身の危険も、今後のことなども、なにも考えずに遊んだ。あの時のこと。

アキとじゃれ付いているチルノは、正に境遇が似ているような気がしている。

基本、妖精は自然に宿る結晶体。大概は花や湖、山などにも存在する。これらは年中存在している。

しかし、チルノ。氷精は寒さに関連する妖精。傍にいただけで寒さを感じるこれの存在は、普通の妖精との相性はおそらく最悪。

現に、自分達について来る妖精は少数いたが、自分達に 否、チルノに近づく妖精はいなかった。夏のこの暑さに少女の寒気は気持ちよい。しかし順応した妖精にとっては結局は近寄りがたいものなのだ。

「……一人、ね」

思えば、自分が妖怪と仲良くなったときも妖精達には嫌われたものである。その時はまだ自分が妖精だという自覚がなく、近寄ろうと思わなかったことが原因でもあるだろうが。

結局、自分もまた孤立した存在であった。そんな自分が今存在していることすらも……

「……今はいいか。さて、チルノ親分。私達は何処へ向かっているのかね？」

「当然！　なんか黒くてもやもやしたところよ！」

「……黒くて？」

「もやもや？」

はて、そんな物はさっぱり見えないのだが。一体どういつことであるろう？　せいぜい魔法の森と湖の端が見えるくらいであるのだが。

「いや、待てよ？　黒くてもやもや？」

「心当たりでもあるのか？」

「……霧が消えた原因元、かもしれないな。もしかしたらこの湖の妖精だからそう見えているのかもしれない」

それは例えば、穢れとか？

いくら妖精が妖力を扱うとは言っても元の力は自然に起因する。即ち、自然はプラスの存在である。それに裏返し、マイナスに位置するものは『穢れ』と言われるものである。生物が纏ったところでそれほど害がある訳ではないが、起因するプラスとマイナスが混ざるとようなことになれば話は別である。

「……それっばいな。よし、行こうかチルノ親分」

「お前、何気に楽しんでるだろ？」

「バレたか」

まあ、滅多にない体験だと考えれば何でも意外と楽しい物である。

「　　ビンゴ、だな」

「うえ。妖怪かよ」

湖の端の端。そこにあつたもの。それは妖怪の死骸であつた。それも一つや二つどころではない。山と呼んでもおかしくないほど妖怪の死骸は重なり合っていた。

なるほど。妖怪は穢れを纏つて存在する。更に死と言う概念には穢れが付き物であり、元々穢れを持った妖怪が更に死んで湖に放り込まれたから湖の機能が狂つたと。

それにしても、いくら見慣れているといっても流石に顔はしかめた

くなる。ベリーやアキも同じようだ。

「いったい誰がこんなところにな法投棄したのか……性質たむが悪いな」
「……でも、これほどの妖怪を相手取れるってことは並大抵の妖怪ではないはずよ」

「躊躇もないみたいだし、これは説得とか無理そうだよなあ」

更に言うなら、死骸の外傷に斬られた傷や妖力で穿った傷も無い。恐らく、単純な筋力のみでこれらの妖怪を潰したのだ。そんな妖怪、鬼くらいしか浮かばないものだが……

「なあ？ こつちのほうには何があるんだ？」

「この先？ この先にあるのは黄色い花がいつぱいの花畑くらいよ？」

「黄色い花？」

黄色い花、と言うと真っ先に浮かぶのはたんぼぼくらいだが、それが何者かの正体に関係するとも思えなかった。

が、ふとベリーを見てみると額に汗を滲ませて固まっていた。その様子に皆首を傾げる。

「黄色い花って……まさか太陽の畑か！？」

「太陽……向日葵か。知ってるのか？」

「し、知ってるとか以前に、もし予想があたってるなら幻想郷で最

も会いたくない妖怪だぞ!？」

「…………お前がそこまで言うのか」

普段、幻想郷の情報を仕入れてくるベリーであるが、ここまで妖怪のことで焦っているところも見たことが無い。と、なるとその妖怪を悪い意味で知っているのか。

「フラワーマスターだよ。太陽の畑には近寄るなって人里では当然だぞ?」

「ふらわーますたー…………ね。えっ? ダメなの?」

それだけ聞くと普通に花好きな妖怪としか聞こえないのだが、そんなにやばい存在なのだろうか?

「…………花が好きだからこそ、それを傷つける奴らには一切躊躇が無いんだ。分かるだろ?」

「へえー、なら花に手を出さなきゃいいだけじゃん。よし、チルノ親分。太陽の畑に行ってみないかい?」

「いいわね。行くわよ手下一号!」

「あれ? 俺一号? せめて名前前で呼んで欲しいのだけど?」

「待つ、やばいんだって! 別にこれで妖怪達が花を荒らすこともないだろうし、行く必要なんて無いって!」

チルノが楽しそうに飛んでいく背後でベリーが心底嫌そうに声を荒げる。

まあ、正直そんなことはどうでもいいのである。

「甘いな。俺はただ、向日葵が見ただけだ!!」

「胸張って言うことじゃねえ! お前は死なないだろうけど俺とアキは死ぬんだよ! そこんとこ分かってるのか」

「大丈夫。アキなら、アキならきつとなんとかしてくれるっ!!」

「人任せ!? お前が頑張れよ! アキはそれでいいのかよ!？」

「ふふふ。私はふらわーますたーにも興味があるし、ひまわりも見たいもの」

「もうやだこいつら! 命知らずってレベルじゃない!!」

そんなことを言いながらも、結局着いて来るのである。

チルノの言う、黄色い花畑はそこからそう遠くない場所に存在

していた。

「おおう！」

それは思わず声を漏らしてしまうほどの絶景。一面黄色によって満たされた花畑。自然の結晶。

今まで見たことも無いほど広大で美しい世界がそこに存在していた。

「なんだなんだなんですかあ！？ フラワーマスターってのがこれを作ったのか！？ だとしたらすすげえじゃん！ いやあ、最高の花見だぞこれは。なあチルノ？」

「そうね。満開ね！！！」

「何言ってるかわかんねーけどいや。うお、これはいい向日葵。やっぱ夏に映えるよな」

まあ何処も彼処も向日葵だらけなのだが。よくもまあ一妖怪がこれほどのモノを作り上げたものである。それを含め、俺の中で未だ出会わぬフラワーマスターの株はぐんぐん上昇中だ。

「……はあ。留守なのか？ いや、そうだったらそれで安心できるんだけど……」

「ベリーちゃん。今はこの綺麗な花を見なさいな。これほどのものは滅多に見られないわよ」

「でももしもフラワーマスターに気付かれたりしたら……」

「もしも何も無いの。そうだったらその時に考えましょう。大丈夫よ。これほどの花畑を作り上げる人に悪い人はいないわ」

正確には妖怪だけだな。アキの言葉に心中でそう付け足し再び視線を向日葵に移す。アキの言葉もあながち間違っている訳でも無いだろう。何であれ、何かに愛情を向けられる存在なれば何も考えず暴虐を尽くす者とは似ても似つかない。

「ふむふむ。しかし、今生で向日葵を見るのは久しぶり……いや初めてか？」

旅の最中に向日葵を見かけることなど一度もなかった。それ故に、また新鮮に見えるのだが……

「まあいいか。ピクニックするならここにすればよかったな」

この花畑を見ながら食べる弁当は最高だろうに。そう考えると少し惜しくなった。

「……おい。舞風。ここに来た理由を忘れてないか？」

「えっ？ いやだから向日葵を」

「そうじゃなくて！ 湖に捨てられた妖怪のことだよ！」

「……ああ！ そうだったそうだった。向日葵に夢中で忘れてた。

そうだな。これほどの花畑を作る妖怪に会ってみたい」

「だ、か、らっ！… そうじゃなくて、さっさと逃げようぜ！…」

逃げる？ 何故？

そう口にも出さず表情と首を傾げることで表現するとベリーが頭を抱えながら悶絶した。こいつ昼間に悪い門でも食べたんじゃないだろうか？

「やめろ！ その哀れんだ目をやめろ！！ 分かれよ！ どうしてこんなに綺麗なのに人間どころか妖怪一匹もないのかくらい！！」
「なんだ。まだフラワーマスターが怖いのか？ 大丈夫だって。大抵の妖怪は紳士な態度で対応すればなせるもんだぜ？」

「今回は規格外なんだよ！ フLOWERマスターはな。八雲紫と肩を並べるほどの大妖怪で、ホントの怪物で戦闘狂なんだよ！ こんなところにいたら命がいくつ在っても足りないぞ！！」

「へえ。『怪物』で『戦闘狂』、ね」

ビクリ、とベリーの体が震えた。声はすぐ近くから聞こえた。気配など何も無い、いや、ほとんどない。

まるで道を作るかのように向日葵たちは分かれ、礼をするかのよう

に首を折った。現れたのは、緑髪の女性。赤のチェックと言うシンプルながら品のある服、その手の日傘をクルクルと回し、何処か寒気がする笑みを浮かべている。隣のベリーの顔が目に見えるほどに蒼白になっていた。

「さて、聞こうかしら。貴方達は迷い込んだ人間？ それとも昨日の妖怪のようにこの畑を荒らそうとするお馬鹿さんかしら？」

瞬間、女性の体から噴出したのは威圧感、妖気、殺気に敵意。ありとあらゆる敵対感情が同時に発せられた。

その凄まじきこと。単純な力だけでは紫と同等。さて、まさかこれほどのものとは思ひもしなかった。隣のベリーは完全に圧倒されて今にも膝をつきそうである。

「……………これはこれは申し送れた。俺は舞風。辺境の山の主だ。立派な向日葵畑があると聞いて是非見てみたくてな。そちらの機嫌を害したなら謝ろう」

「……………へえ。あなたが主。てっきりその女かと思ったのだけど」
そう言っただけで睨んだのは俺とベリーの背後で穏やかな笑みを浮かべていたアキであった。

それをどう思ったか、クスリと笑って女性を見返す。

「とんでもないですわ。私は舞風と共にあるだけの妖怪ですもの。彼あつての私ですわ」

「そう……自分より力の弱い存在につく。酔狂な妖怪もいたものね」

そう言うと再びこちらに視線を戻す。いつの間にかベリーが俺の裾を握り締めている。もう少しで泣きそうである。

「それで、本当の用件はなにかしら？ 辺境の山の主さん？」

「……一応。嘘でも無いんだが、まあ話が早くていいか。湖に妖怪の死骸を捨てたのは、お前か？」

それを聞くとなにやら驚いたように僅かに目を剥いた。しかしそれも一瞬のこと。先程までのような笑みを浮かべ、こちらを見下ろした。

「ええ、確かにそれは私よ。でも、それが貴方達に何の関係があるのかしら？」

「妖怪の穢れが湖に移って不調をきたしたんだ。おかげで霧の湖は只の湖だよ」

「そう……そういうことなら仕方ないわね」

そう言うとニツコリと満面の笑みを浮かべた。敵意や殺気も水が引くように消えていく。

やはり、話せば分かるのだ。こういう存在だからこそまともに話せ

ば活路が開けるのだ。紫や伊吹に比べれば数倍マシ

「ちょっと舞風。手下の分際で何勝手に言ってるのよ！」

今まで会話に混じることなかったチルノの声。しかしその姿は見当たらない。辺りを見回してみると、空。向日葵の畑の上にぶかぶかと浮かんでいた。

「そうそう。聞き忘れてたわ。あのうるさいな氷精を連れて来たのは、貴方？」

「妖精はいつだって気まぐれに、思ったままに行動するもの。きっかけはあったかもしれないけどね」

「へえ、まあいいわ。それで、他に用は無いかしら？」

「後はのんびり向日葵眺めるだけさ。それ以外にすることは無い」

「そう。それじゃあ、散々そちらの言葉を聞いたのだから、一つくらい私の頼みを聞いてくれても、いいわよね？」

背筋が冷えた。まるで穴を覗いたら、そこにおぞましくて言葉に出来ないような怪物がいたような、そんな感覚が。

その赤い目が、楽しげに、しかし興味は別に、俺の目を捉えていた。

「……用件による、ね」

「簡単よ。少しだけ、その妖怪を借してもらえないかしら？」

視線はずれ、真っ直ぐアキへと注がれる。その目には喜び、なるほど。ベリーが言っていた戦闘狂はこれか。

「本人に聞いてくれ。アキが俺に着いて来ているのだとしても、俺の所有物って訳じゃないんだ」

「そう。それじゃあ、少しお相手願えるかしら？ 私の名は風見幽香。この辺り一帯の主」

女性、風見幽香は口元をゆがめアキを見る。その視線はまるで楽しそうである。対するアキも涼しげな笑みを崩してはいない。今にも背景的にゴゴゴゴゴゴゴツ、なんて音が聞こえてきそうである。

そして

「お断りしますわ」

見事に、その空気が崩壊した。

流石アキと言うべきか。風見の方も表情こそ笑みを浮かべているが何処かポカンとしているようにも見える。それも仕方の無いことか。

「どうしてかしら？ 貴女ほどの力の持ち主が逃げたとは思いたくないのだけれど？」

「理由なんて、舞風と同じですわ。この花を、貴女の作った世界が綺麗だから、見ていたい。ただそれだけ」

「そう。仕方が無いわね。今回は諦めるわ」

幽香は残念そうに、しかし何処か嬉しそうに目を閉じた。個人的にはどっちに転んでも面白そうだったのだが、やはり平和が一番か。

「ホント。綺麗だ。皆に見せてやりたいくらい」

「さて、そろそろお暇しようかな」

「そうね。チルノちゃんを送り届けなきゃいけないし」

日は西の空に浮かび、幻想郷を照らす。向日葵もまた、それを追いかける。

向日葵を満喫しきって気付けば風見の姿はなかった。無害と感じて興味をなくしたか、それもまあいいだろう。どうせまた来るつもりだし。

ベリーが聞いたなら悲鳴を上げそうなことを心中で呟き、氷精の姿を探す。太陽の畑の上でぶかぶかと。少女はまるで子供のように丸まって眠りについていた。遊び疲れたのだろう、こういうところは普通の子供のようだと思うが笑みが零れた。

「おーい。チルノ親分？ ほれほれ」

頬つぺたをつんつんと突つつく。ひんやりと冷たく、柔らかくて気持ちいい。まるで子供の肌である。

しかしうーん、と身じろぎはしようとする気配はなく、背中におぶる。流石氷精。背中一面が冷えるかのようだ。非常によい氷嚢になりそうである。

「……ま、たまにはこんな子供の相手も悪くはないか」

眠りこけるその顔を見て、何処か懐かしいような気持ちになる。それがなんなのかは分からなかったが、俺にはこういった存在と馬鹿

騒ぎする方が合っているのかもしれない。

アキが口元に指を当てる。見ればベリーもまた子供のよう眠りに
ついていた。風見との遭遇が心を抉ったのか、何処かうんうんと悪
夢を見ているようである。悪戯気な笑みを浮かべながらアキはそれ
を背負った。

「 あったかい」

声は後ろから聞こえてきた。チルノはくすぐったそうに俺の肩に頭
を乗せる。その冷たい髪が俺の頬を撫でた。

それにアキと顔を合わせ、苦笑いをする。霧の湖へと飛んだ。

まあ、たまにはこうやって手下ごっこに付き合ってるのも悪
くは無いだろつ。

○
○

「ねえ、聞いてもいい？」

「何をだ？」

「結界を解けない理由。ベリーちゃんに本当の事を言わなかったのは何故？」

「……言う必要は無いと思った。その時が来たらベリーには山から出してもらってから」

「そう。それじゃあ、内緒にするの？ 結界山の『本当』の封印の意味を」

「時が来れば、自ずとほれるぞ。よしせ……」

世界は巡る。

幻想の世界であるごと。楽園であるごと。

希望の里が、そうであったように

舞風と妖精（後書き）

どうしてこうなった。

作成当初はチルノと舞風が盛大に馬鹿ぶりを起こす予定だったのに、いつの間にかゆうかりん登場。そうになるとチルノが発端で舞風VSゆうかりんが起こるはずが

どうしてこうなった。

そもそもチルノは向日葵に近づいても大丈夫なのだろうか？ と言う設定が気になった。触れるだけで凍傷なんだから傍にいられるだけでゆうかりん怒りそうなのだが。

あと、口が滑ったベリーさん。お仕置きされなかったのは子供だと思われたから。舞風も同義。彼女にとってはアキが格好の標的に見えた。しかし紳士。断られたならば仕方なく。しかも自分の鼻まで引き合いに出されたから引くしかなかった。

さてさて、次週。作者は留年しないでいられているのか！？

どうでもいい？ あ、そうですね……

まあ、頑張って書きましよう。

舞風と信貴（前書き）

ただでさえ少なかったクラスメート（17人）は今日気付けば10人になっていました。なにそれこわい。

さて、つい一昨日ごろにこれの最初の部分を読み直してみました。凄まじいまでの変わりよう。最初はギャグを重視してましたから、どうしても舞風の心の声的なものが文中に紛れるんですね。

皆さんはどうですか？ 最初の方が読みやすかったか、今のほうがいいか。よければ意見を寄せていただけると助かります。

今回は信貴。信貴山。と、くれば分かりますね？

では、ごんごん

舞風と信貴

幻想郷を訪れ、時は流れた。

そこに在る事が退屈をもたらすことは無い。しかし、いつまでもそこに居続ける、と言うことも無いのだ。

「外もまだ変わらないか」

見上げた日の光は幻想郷とさほど変わる様子も無い。そこは幻想郷から見た外の世界。俺にとってつい数十年前までは未だ現実だった世界。

幻想郷を出て、そんなところを歩いていることにはとある理由がある。八雲紫の頼みでもあるのだ。

「妖怪が足りない？」

珍しく暇を持って余していた紫が俺の家を訪れ、口にしたのはそんなことであつた。俺にしてみればなんだそんなことかと思うようなことは眼前の女にしてみれば俄然重要なことらしい。

「舞風。幻想郷は妖怪と人間両方が共存することで成り立っているの。分かるでしょう？」

「そりゃあね。妖怪は人間の恐怖と血肉を糧とし、人間はまた自らより弱い生命を糧にする。それが今の在り方だ」

「そう。でも最近妖怪は減少傾向にあるわ。何故か分かる？」

そう言うと手元のお茶に手をつける。持て成す、なんては言えないが、これくらい出来ねば主は務まらない。

さて、それよりも妖怪の減少である。理由はそれぞれ色々挙げられるだろうが、最たる物と言われると少し分からない。

「答えは割と簡単。人間が力をつけたから。又は弱い妖怪が多かつた、と言つのもあるわね。それらを妖怪として頭数に区分したおかげで予想が若干狂つたわ」

「なるほど。最近人里に行かないからベリーの話ばかり聞いていた

けど、強い妖怪退治屋もいるらしいな。となると弱いものが次々に狩られてもおかしくはないか……」

「貴女の事だから人里に通い続けると思ったものだけど、それほどまでに稗田の事がショックだったかしら？」

稗田乙女。阿悟は、初めて会ってたったの十年ほどで逝った。それが稗田乙女の運命さだめなのだと最後まで破天荒に笑っていた。

別に、死別など何度も繰り返してきた。だから特別気に病むことなどない。しかし、あの少女はまた出会う。一度見たものを忘れない能力を持ちながら、俺を忘れた状態で。

それに、なんだか思うところがあった。

「百年すればあの魂にはまた会える。それより、そんな話を俺にするってことは何か頼みたいことがあるんだろ？」

「ええ。貴女にはもう一度外の世界で妖怪を集めてきてもらっわ。断られたら無理せず、勧誘だけでもいい。急を要することでないと言え、何か手を打つ必要があるわ」

「外か。確かに幻想郷で外を自由に歩け回れる存在も少ないからな……分かった。ただし、俺が気が向いた時だけな」

それで構わないと了承を得た後、しばらく留守にする旨を知り合い全員に伝え、旅立った。

さて、いくら俺が数えるのが面倒になるほど長い時を生きているにしても、時間の感覚だけはまだ人間の時のものを忘れないでいる。しかし、頭の中だけであるが。ふと思いついたように、旅に出てもう何年か。なんて考えると即座にやべえやべえと焦るのである。

長旅をする必要は無い。短い旅を何度も繰り返せばいい。急ぐ話ではない。

「……目的地もあるわけだしな」

そもそも、普通なら紫が言うような事にはならないはずであった。彼女が作りあげた『幻と実体の境界』は外の世界の妖怪を自動的に呼び込む力を持っていた。故に、こうして俺が旅に出て妖怪を探す必要など無いはずだったのだ。

そう、その境界に当てはまらないほどの存在でなければ

八雲紫と言う大妖怪が張ったこの結界はかなり強力である。その影響はこの国だけに縛られず、外の国々にまで及ぶほどに。

しかし、その対象が彼女並の力を持っている場合、どうしてもその強制力が動かなくなる。これも仕方の無いことである。どれだけ凄かろうと一妖怪。限界は勿論ある。

この結界は力が弱まった妖怪、元々力が無い妖怪を対象とする。力を持つ者までは、どうしても及ばない。

つまり、今や外の世界にいるのは名を馳せた妖怪、と言うことになる。

「まあ、だからこそ見つからないんだけど……」

大妖怪足るものが道端を徘徊する訳も無い。長い時を生きた妖怪は人の恐ろしさを知っている。いや、一部の人間と言うべきか。大抵は自らの領域テリトリーを持ち、そこに住まうものである。

なればこそ、俺は名の知れた怪奇スポットでも巡るくらいしかできないのである。お化け怖い。

さて、そういうことで今回来たのは地元の方に噂の錆びれたお寺があるらしき場所である。らしき、といまいち不確定なのは実際に目撃した者も少ないからだ。それはなんと山奥の自然が茂る場所にひっそりと建っているらしく、気味悪がって近づく者もいないら

しい。

「はてさて、当たりかな？　はずれかな？」

先程までは日差しが差し込んでいたと言うのに、今ではすっかり木に隠されてしまった。薄気味が悪い一本道。何かの足跡がある様子も無いし、特別妖気も感じない。

はずれ、だとは思いたくないのだが……せめて妖怪に詳しい奴でも連れて来ればよかった。はて、この山の名は何と言ったか。

……ああそうだ、『信貴山』だ。

はて、待てよ？　なんだか思い出しそうである。確か割りと有名な話にそんな山が出てきていたような。

そんな事を思い出そうにも出来るはずも無く、なんだか胸にしこりのような物を残したまま、再び登山を始める。なんにせよ、やはり期待できそうである。

「これ、か？ これだよな？」

予想とは大いに外れた。頭の中のその寺は、小さな。そして寂れた見るのも虚しいものを想像していたのだ。

しかし、どういうことであろう。確かに人の気配もなく、寂れてはいるがそれは驚くほど規模の大きいものである。どうして寂れたのか、不思議になるほどに。

山門を潜り、真正面の本道に進む。柱はボロボロだ。時代を感じてしまうほどに。踏むたびに軋む音がする段差を登り、本殿の入り口を押し開ける。

乾いた空気が頬をなで、通り過ぎていった。中は暗くいまいち見えぬ。すたすたと歩き、正面に何か人型のものが存在することに気付く。

「……反星陣」

明かり代わりに術式を展開。眩い光が本殿を照らした。

「これはっ！」

それは像であった。それだけは本殿とは合わず、手入れがされてお
り、未だ光沢を放っていた。それに、見覚えがあった。

「まさか……毘沙門天王？」

遙か、遙か遠い記憶。誘われて訪れた一つの寺。なんと言う名前か
忘れてしまった。しかし、不思議と印象に残っていた像。それがこ
れ、だった気がする。

だとしても、何故こんなところに……

「ここは、元々毘沙門天様を奉るお寺だったので」

「ッ!!」

「もつとも、ほとんど廃れてしまいましたが、ね」

声に驚き、振り向いたそこに立っていたのはおおらかな笑みを浮か
べた、一人の女性。

その人は虎模様の着物を纏い、更にその髪も虎を連想させる黒と黄
であった。その手には一本の棒と、掌サイズの宝塔を載せていた。

まったく気付かなかった。元々ここにいたのか。それとも迂闊にも俺が思考に沈んでいたのか。

「さて、貴方はどうしてここに来たのですか？」

「……俺は、幻想郷の者だ。外の世界の妖怪を幻想郷に誘うよう、言われている」

「 幻想郷？」

女性は首を傾げる。その様はまるで分かっていないようである。そういえば、毘沙門天の使いの片方は虎であったか。となると、彼女は毘沙門天に関連のある存在なのだろう。

警戒を緩めない。しかし、どうも向こうにはその様子が全く見られないのだ。頭の耳を見れば、女性が妖獣の類だと言うのはすぐに理解できると言うのに。

「……ところで、貴女は？」

「私は、寅丸星。毘沙門天の代理です。今はこうして、人も来ないここで信仰を続けていますが」

「代理？ こんなところで？」

こんな、山奥で人などまるで入ってこないような場所で、ただそのために。ここにいるというのだろうか。だとするならば、それはなんと、辛いことだろうか？

こちらの思案を解することもなく、柔らかく微笑んだ。その姿はま

るで妖怪とはかけ離れており、非常に優しげだ。

「貴方のことを、聞かせていただいても構いませんか？」

「……ああ」

だが、何処かそれが、もの悲しく見えたのだ。まるで、感情を失ってしまったかのように。

「そうですか。時代は知らぬ間に大きく動いていたのですね」

本殿の傍にあった、小さなお堂。そこに腰を下ろし、寅丸は興味深そうに頷いていた。そこは本殿とは違って丁寧に掃除がされており、暮らすことには難もなさそうであった。

俺もまたそこに座り、辺りを見回してた。とても一人で生活しているようには見えず、もしかしたら同居人がいるのかもしれないと思いを始めていた。

「それで、舞風、でしたか？ 貴方は妖怪なのですか？」

「藪から棒だな。確かに種族的には妖怪に区分されるけど、それが？」

「いえ、それにしても貴方からは様々な力が感じられたので。それに、その名に聞き覚えのある気がして……」

「？ 名を売るような真似を下覚えは無いし、気のせいだろう。それより聞いていいだろうか？」

話を区切り、思案する寅丸に声をかける。虚空を見つめ、思い出そうとしていたが声でこちらを見、なにかと首を傾げた。

「どうしてこんなところにお寺が？ 毘沙門天と言えば仏教の大層偉い神のはずだろう？」

「ええ、確かに毘沙門天様は強く信仰されてきました。それが変わったのは今から五百年も昔の事。その時、一つの悲しい事件が起きました。発端になったのは、一人の心優しい僧」

「僧？」

僧。とは当然神に仕える僧なのだろうが。毘沙門天に仕えていたのだろうか？

「彼女は実に立派な尼僧でした。他者を幾つしみ、悲しみを理解し、そう、ありとあらゆる人の目標となれる人物でした。しかし、彼女には一つだけ、人間達への隠し事がありました」

「……それは？」

「それは、彼女が寺に妖怪を擁護していたこと、です」

その言葉に思わず目を剥いた。ただ人の身で妖怪を想い、守ることができたと言うことに。

「彼女は人と妖怪とのいざこざに常に心を痛めていました。妖怪の中にも心優しい者がいることを知っていたからです。そして、彼女は人と妖怪の中間の立場となり、表では人間からは頼りにされながらも裏では妖怪を助けていました」

「しかし、それも長くは続かなかった、か」

「はい……彼女の行いは人間に知られ、たちまち逃げ場を失いました。そして、抵抗もせず、彼女は封印され、それからこのお寺は急速に廃れ始めました」

人妖との間は谷のように深い。恐らく、それらを埋めようと己を捨てたものは実際には数え切れないほどいるのだろう。しかし、その全ては同じ存在の手により、もしくは守りたかった存在に消されていったのだ。

「仕方ない、としか言えないな。恐らく、本人も覚悟の上だからこそ最後は抵抗しなかつたんだろう。志半ばな事を、構わないと思うほどに」

「ええ、彼女は最後まで私達を案じてくれました。彼女の残したこの寺も時間が経ち、こうして茂って埋れてしまいました。結局、私は何にも返せないまま」

「寅丸……アンタは憎いのか？」

「……どうして、そう想われるのですか？」

だって、その目は先程のような温和なものでは無い。虎のように、野生的な目だ。秘めた心の内を出さずにはいられない目だ。

「……憎い、ですよ。あの方を、人の道を外れた愚か者だどっ、裏切り者だと罵った人間達が、憎かった。でも、怒りのまま暴れることを彼女は望んだのではない。だからっ、だから私はっ」

恐らく、彼女はこういった言葉をずっと吐けずにいたのだ。

恐らくいるであろう同居人に迷惑をかけたくないがために、積みり積もるほどの想いを全て溜め込み、せめて彼女が悲しまないようにと尽力したのだ。

「……正直、俺は部外者だ。その尼僧がどれほどの人格者だったのか知らないし、どれほどの想いを貴女が重ねたのかは知らない。だが、今ここにいるのは俺と貴女だけ。言いたいことは吐き出してもらって構わない」

「ッ！ 私ほっ、私は、臆病なんです。いざとなれば、毘沙門天として人間を止める事が出来たかもしれません。でも、私はこの地位を与えてくれた御方を、見捨ててしまった……ッ！ 仕方な

いんだと、自分に言い聞かせるほど惨めになって、でも誰かに当り散らすことも出来なくて……お寺に来て、ただ彼女を罵倒して去っていく者を見るたびに、どうしようもなくなつて

背を丸め、嗚咽を漏らす寅丸の頭に手を伸ばす。抵抗もなく受け入れられ、まるで子を撫でるかのように出来るだけ優しく。

確かに、今日初めて会つたばかりだ。しかし他人と思えなかつた。俺もまた、妖怪と人間を別にし、それぞれを残そうとした者である。その樂園は、一人の妖怪によって壊されてしまった。死んでいく妖怪たちを見て、目前の状況を信じたくなくて、信じられなくて。

だから、自分で自分を封印までした俺だから。

夢が形になった瞬間、俺の世界は輝いた。まるで道端の石まで宝石になつたかのように、全てが光つて見えた。

それが形を失つた瞬間、全てがもうどうしようもないほど壊れてしまった気がした。

だから、何と無く分かる。寅丸の気持ち。全てとは言わないが。ほんの僅かに。

それからもしばらくの間、俺は彼女の頭を撫で続けていた。

「す、すいません。みっともないところを見せてしまいましたね」

「なに、こつこつのは慣れてるよ。それだけが長生きの知恵みたいなものだし」

目元の雫を拭い、寅丸は笑った。顔はやや紅潮している。見た目子供に慰められて、恥ずかしいのか。

「そうですか。ふふ、まるで聖ひじりと話しているかのようでした。話し方などは全然違つと言つのに」

「聖、と言つのは先程の話の尼僧のことかい？」

「はい。今は魔界、と言つところに封ぜられているそうです。今でこそ力が足りませんがいつかは助けに行きたい。そう考えているんです」

魔界。俺も聞き覚えの無いところだ。疎まれた存在が封印されるの

は皆地底だと思っていたのだが。恐らくそれ以上に過酷な地である事は想像できた。

「きつと、出来るさ。封印されているならば老いもしないだろうし、余生を笑顔で染めてやればいい」

「あ、いえ。確かに彼女は人間でしたが半分妖怪でもあるんです？」

「？ 半妖？」

「いえ、それとも違います。彼女は妖怪の力を分けてもらう事で若返り、永らえたのです」

「うん？ もしかしなくても、それって……」

「はい。人の道を外す。禁忌です。外法と言うべきですか」

それを聞くとその聖人君子の想像が随分異なってくる。結局、それは妖怪ではなく自分のために体よく起こした行動なのではないか。

俺の顔を見て考えを悟ったのか、寅丸は苦笑いをする。とああ、と言葉を漏らした。

「私も初めは貴方と同じく、あの人を疑いました。私達はただ利用されているだけなのではないか、と。しかし、共に過ごしていれば例え種族が違おうと気付きます。聖は確かに妖力を吸って生き永らえていました。ですが妖怪を守る事とは事情が別です」

「お前さんにそこまで言わせるって事は大層な奴だったんだろうな。その聖って奴は」

その言葉に微笑む。自らが尊敬している存在を褒めてもらって嬉し

いのであろう。

俺だって、そんな時もあった。今だってそうだろう。自慢の家族が、友人が、褒めてもらったならきつと心を良くする。

「勿論。私は彼女ほど馬鹿みたいに笑っていた人間を知りません。どんな逆境にも笑って立ち向かい、傷ついた者達にその聖母のような笑みで語りかけていました。だから、このお寺にいた妖怪は皆聖を好いていました」

「となると、ここには寅丸以外にも妖怪が？」

「はい。とは言うものの、今残っているのは私を慕ってくれる者一人。その子も諸事情で今はいません」

ふむ、いないのは一人だけ、か。会ってみたい様な気もするが、話を聞く限り直ぐにはいかなさうである。

「ふふ。ここまで思いの内を話したのは、貴方が初めてです。ありがとうございます」

「何々。今は気ままに旅をする妖怪だからな。畏まって礼を言わずともいいよ。こちらとしても、こんなところで妖怪に会えて嬉しい限りさ」

「そうですね。よろしければ貴方のことを聞かせていただけませんか？」

「別にいいが、いきなりどうした？」

「単純に貴方が知りたいから、それではダメですか？」

寅丸がやや心配げな目でこちらを見る、元が虎なだけにその姿はまるで雨に濡れた子猫を連想させるかのようで

「いいよいいよ。でも、聞いてからつまらなかった、なんてのはなしで頼むよ」

「そんなことありませんよ。貴方は私の話を親身になって聞いてくれたと言うのに」

「寅丸。お前は生真面目でいい奴だけど、たまにすっかりとか言われないか？」

「えっ？ どうして分かるんですか？」

どうしてもこうしても、こんな天然っぽい空気を纏ってる奴が違う訳も無いだろうに。

まあ、向こうの事情を聞くだけ聞いて、と言うのも失礼なのは確かである。悪い方向へ行かない程度に話してやるとしよう。

○
○

「ふう。やっと帰ってこれた」

両手にある手提げ籠とロッドを再び強く握り締め、私は帰りの道を飛行していた。空からは一面緑しか見えないが、何度も出入りすれば目印は自然と自分の中で出来る。

今回は面倒なことに、魔界に至る方法についての調べ物の為になんざわざ都にまで出向いていた。ようやくで戻ってきたのもうすぐたかたである。

そんなことより、今の自分には心配して止まないことがある。

「ご主人。大丈夫かな……」

それはお寺に一人置いてきた情けない我が主の事。置いてくることが初めてとは言わないが、あの主を一人残していくのも非常に不安である。

物はなくすわ、調味料を間違え、尚且つ料理はぶちまけるわ、終いには、一人で悲しむときたものだ

どれほど悲しくとも、どれほど苦しくとも、弱みを吐かれたことは一度もなかった。本人は心配をかけまいとやっていることだろうが、逆にそれがこちらを心配させるのだと気付きもしない。

……心配が寧ろ怒りに変わってきた。今日こそはたとえどんなことがあるうが追求してやろうと心に決めた。

お寺の近くの目印を見つけ、その元に降り立つ。がさがさと葉を掻き分け、降り立ったのは見慣れたお寺。ものの見事にシーンとしている。流石に一人でギャーギャー言われるようなことあらば流石にどうしようもないと思ってしまうが。

まずは本堂に入り、中の様子を見る。見る限り目立った汚れもなく、本堂は綺麗であった。

「……ちゃんと頼んでおいた掃除はやってくれたようですね」

と、言うよりは本人が留守中変わりに、と率先して口にしたのだが、それはとりあえず割り合いしよう。私にとってはしたかしくないか、別なのだ。

本堂の脇を通り、お堂へ。いくら代理と言えど、最近はめつきり人が来ない。その上黙っていると言うのが苦手なご主人は普段瞑想しているはずである。

締められた戸をがらりと開き、そこで見たものは

「う……うむむむむ」

「……むう、ナズーリン……貴女は、柔らかい？」

布団の上に寝そべり、子供を抱き枕にする主人、寅丸星と、それに押し倒され 否、押し潰され、ご主人の胸に顔を埋めた子供、であつた。

何かを口にする前に猛烈に頭が痛くなつた。

「ご主人っ！！」

「うわっ、わわわ！ ナ、ナズーリン？」

「こんな朝っぱらから何をしているんだ！ いや、そもそもその子供は何処から連れて来たんだ！ 攫ってきたのか？ それとも迷子をずっと置いてるのか！？」

「ちよ、ナズーリン。ちよつと落ち着いてください！」

それこそ無理である。ようやくの思いで帰ってきてみれば、お堂に料理がぶちまけられていたり、大事な宝塔をなくしていることより性質の悪い面倒ごとを置いているなんて。

「と、寅丸。ど、どいて……死ぬ」

「わっ、わっ！ 舞風！？ 貴方どうして私の下に？」

「その子をご主人の下にいるんじゃないかってご主人がその子の上にいるんだよー！」

慌ててご主人が退くと、ぶはつとまるで呼吸困難のように荒い息をする。いや、実際にそうだったんだろうが。

「はっ、はあ、はあ。こ、こんなところで死んでなるものか。おのれ。お、俺は舞風だぞ……ッ！」

「死の淵で悪いけど、この子は誰だい？」

最初は随分いきなりで普通の子供と思っただが、普通の人間とは色々異なる部分が存在している。まず、服がおかしい。白を基調とした服なんて、そもそもこんなひらひらとした物では動きが取り辛いだろう。

二の腕のやたらごつい腕輪が目につく。

と、僅かに思考しているとようやくとそれが人外の存在である

ことに気付く。

「君は 妖怪だったのか」

「ふう……え？ なに？ なんか言った？」

その姿はまるで子供である。力もそれほど強くは無い。その素行だって、まるで子供である。偶然現れたこの妖怪をご主人が保護したのか……いやそれにしただって。

「ご主人。いくら子供とはいえ、いい年の女性が男にそうして肌を晒すのは感心できないよ」

「大丈夫です。舞風はそういうことしませんから」

「そういう意味じゃないんだけどなあ……」

はだけた寝巻きを直そうともせず、困ったように頭を掻く。その際また胸元まで落ちてくるが、少年がそれに反応する様子も無い。無邪気なのか。

大人なのだから、そういうだらしない様子を子供に見せない方がいい、と遠まわしに というかほぼ直接 言っていると言つのに、それに気づく様子はなくいつものように笑って

心なしかその笑みは普段と比べて少し いや随分、輝いて見えた。ここまで心のままの笑みを見せるのはあの人封印されて以来……

「ってそうじゃない！　ひとまず、頼まれたものは一通り集めてきた。もう朝なんだから起きるんだ」

「……おい。寅丸う？」

「どうしましたか？」

「お前、朝ごはん作るって言わなかったっけ？」

「あ」

「え？」

再び、頭を抱えた。幾分か気が和んでいるとは言え、うっかりは倍増しているではないか。

朝帰ってきて早速であるが、早くも忙しくなりそうである。

「
で、詳しい話を聞かせてもらっかな。まず最初に、君は誰だ

い？」

「ナ、ナズーリン。そういった会話は食事の後でも」

「その食事を、へとへとで帰ってきた私とこの少年にまかせっきりだったのは誰だ！！」

「うう、ごめんなさい……」

「……うむ。鮭が旨い！」

肩身を小さく、しょぼくれたように飯を突つつくご主人から視線を外し、正面で黙々と食を進める子供に目を向ける。確かに害こそないように見えるが、人外である。多少の警戒は当然では無いだろうか？

だと言うのに、会って間もない男女が隣合わせで布団に転がり眠るなど、無警戒過ぎる。

「と、まあまあ、そんなに寅丸を怒らないで。俺が頼み込んでここに居させてもらってるんだから。多少のことは目を瞑ってくれないかな？」

「……それで、君はなんなんだい？」

子供と言えど、人の子などよりは随分生きたであろう妖怪。流石に話し慣れているか。

しかし、諫めるようではやはりその箸がおかずに伸びるのは、やはり子供か。

「俺は舞風。ここらにお寺があるって聞いて来てみて、こうなつたと」

「……割り合いし過ぎだよ。もう少し事細やかに話せないのか？」

「ぐーぜんだよぐーぜん。で、世話になるのは今日で三日目かな」

「……三日あ！？」

それはつまり、私がこの寺を朝早く出た日にこの妖怪がお寺に来たということになる。偶然。と言うより三日間もご主人と寝食を共にしたと言うのか。妙に仲がいいのも頷ける。

「……ご主人んんッ！！」

「ひいっ！ ゆ、許してください！ いたっ、ロッドで叩かないでくださいっ」

「大体！ 仮にも毘沙門天とあるうものがっ、そんなおどおどしていてどうするんだ！」

「ナズーリン！」

「！！」

突然、声を上げる。その目は真っ直ぐとこちらを見る。その表情は先程までと比べ物にならないほど真面目であった。

そして、その表情のまま、その口が開かれ、

「とりあえずご飯を食べましょう」

「食べられるかあああああああああ！！」

と、やっぱり大して変化のない主人に脱力ばかりである。

「あ、寅丸。今日も本堂の掃除手伝った方がいいの？」

「なに手伝わせてるんだ！ 一人でやれよ！！」

「そ、そんな、あんな広い場所を……」

「言い出したのは御主人アンタだろうがああああ！！」

少しでも見直したと思えばこれである。恐らく食事だってこいつに作ってもらったに違いない。

こちらは早く休みたいと言つのに、休む糸口が無いではないか。

「すまないな。随分御主人が迷惑をかけてしまったようだ」

「一応泊めてもらってる身だからね。それに、見るとハラハラするからさ。気が気じゃないんだよ」

「……ああ、分かる」

数百年ぶりにこの共感を得る事が出来た気がする、と何処か嬉しいような悲しいような気持ちになった。

その話の当人は向こうで毘沙門天の像を念入りに磨いている。本堂は一般的なお寺なんぞより随分大きいがために、雑巾がけすら容易くは無い。結局、早く終わらせるためと自ら進言までしてくれた舞風と今はこうして共に掃除に勤しんでいる訳だ。

「……君も存外妖怪らしくない妖怪だね」

「そう……なのか？ まあ最近是人に紛れて過ごすようになっていたからな。その影響かな」

「ほう。まだそんな妖怪もいたのか。皆既に山にでも隠れてしまっているかと思っただが」

「ま、よくも悪くも見た目が人寄りなもんで。割と気付かれないもんさ。ま、気付かれたらどうって訳でも無いし」

「？」

下手に長生きをしている妖怪などよりも随分世渡りが上手そうに見える。こちらが基本山に籠ってばかりなことも関係しているのだろうが、そもそもこうして寺に妖怪の来客があることなど何百年ぶりか。

「それで、奈頭雨林、だっけ？ 珍しい名前だな」

「……ん？ 確かに私はナズーリンだが……」

「なずー、りん？ なずー……りん？ ああ！ ナズーリン！ いやいやはやはやあっはっは。聞きなれない体系だな。そうか。伸ばすのか」

この妖怪も対外変である。いや確かに私の名を珍しいと思う者もいたがそれくらい。名の呼び方を誤る者と言うのは初めて会った。

「……うん。苦勞してそうだな。なんて言うか、上司に苦勞してまですって空気が垣間見えるよ」

「見える、と言うか分かるものなのかい？」

「一時的はちよつと妖怪な妖怪の式紛いなこともさせられてな。酷いもんだったよ。用事があればこっちの都合は構いなし。能力使って呼び寄せて、荒事やらの面倒ごとを頼むときたまんさ。ああなんかムカついてきた。帰ったら一発殴ってやろうか。でも絶対藍に妨害されるな……」

なにやら疲れたように肩がガクンと落ちた。まるで重い荷物でも背負ったかのようである。

しかし、そうか。子供とばかり思っていたが自分が思っているより歳月は重ねているのかもしれない。長生きなら強いと決まった訳でも無いし。主にその過去に悪い意味で積み重ねがありそうである。

いや、待てよ。まいかぜ……舞風……どこかで聞き覚えがあっ

たかのような。

「あーっ！！ 寅丸！ それ以上磨いたら毘沙門天が美肌になつちまうぞ！ せめて筋骨隆々でいさせてあげて！！」
「えっ？ あ！ しまった！ つい楽しくなつて」
「その心がけはいいけど相手にもっと目を向けるーッ！！」

……… 変わらないと言うかなんと言うか。三日にしては随分の仲のよくなり様だ。最も、元々御主人が人懐っこい性格だとは分かっているが。

しかし、これでは、少し嫉妬してしまうな。

「おーい。ナズーリン。ちょっと助けてくれよ。ちよっ、これどうすればいいんだ」
「あわわわ、私に造型技術はないのですが」
「俺もねえっス。ナズーリン。金属弄れる？」
「……ふう、まったく」

ある意味、手のかかる者が増えてしまったかのようにも感じる。まあ、それを悪くはないとも思うのだが。

「あれ、一応ご神体ってか大切な像なんだよな。あんな誤魔化しで大丈夫か？」

「問題はないんだよ。悲しいことに。本来ならある方が一番なはずなのに」

掃除を終えてお堂で一時をまったりと過ごす。多彩なことに、お茶を淹れてくれたのは舞風。こういったところは本当に見習って欲しいものだと思う。

「あの像は確かに大切なものだけど、肝心の毘沙門天がこのお寺に下りないのさ。朽ちた寺には用が無いとでも言うように、ね」

「でも、寅丸が代理までしてるってことは忙しくて来れないだけじゃないのか」

「それもそうですが、それだけじゃありません。元々この寺が妖怪を匿っていたって話はしましたよね。毘沙門天は有名な神様でしたから、妖怪たちが退治されるかもとお寺を恐れるようになったのです。そして、その為に一介の妖怪に過ぎなかった私が選ばれた、と言っています」

「……ああ、寅丸は元々虎の妖怪じゃなくて毘沙門天の代理だから

虎の仮装をしてるのか」

「正確には代理になつたからこそ虎の妖怪になつた、ですが」

割かし重要なことを舞風に話してるな。うっかり重要なことを言うてなければいいけど……

まあ、それは過去の事。それが憚られた過去であることは舞風も理解しているように見えるし、特に心配することも無いか。

「そついえば寅丸。幻想郷の話。考えた？」

「幻想郷……え、ええ。勿論考えてましたよ。忘れてなんかいません勿論！！」

「……へえー」

「幻想郷、とは巷の妖怪連中で有名なあれか？ 人と妖怪が共に生きる世界とやら。眉唾物じゃないのか？」

じつとりとした目で御主人を睨む舞風に尋ねた。いや、そもそもどうしてそんなことを彼が聞くのだ？

「眉唾じゃないよ。ま、未だに人と妖怪は不仲だがね。かろうじて世界として成り立っている状態かな」

「そう言えばナズーリンには言つてませんでしたっけ？ 舞風はその幻想郷から来たらしいですよ」

「幻想郷、か。聞こえはいいが、やはり私は人妖の共存がそう簡単に行くはず無いと思うがな」

「そりゃ勿論。上手く言つてないよ。里では人を襲つてはいけない

って言う最低限のルールがあるくらいさ」

「それは……」

ほとんどダメなんじゃないだろうか？　つまり、人の里から一步出れば人間は食われても文句が言えないと言うことだ。そもそも、妖怪がわざわざルールに従うものばかりとは限らない。むしろ簡単に破綻するだろう。

「ま、確かに無謀かもしれないけど人里での殺し合いにはならないよ。こわあい管理人がいるからね」

舞風はやや不気味な、しかし悪びれた笑みを浮かべた。

それでも、いやそれだけで、妖怪は自制出来るものなのか。それに、妖怪にとってそれは自由な理想郷なりえているのか。不可解である。

「ひとまず、保留と言うことにさせていただきます。離れるにもここは気に入っていますから」

「そう。まあ早々に決めることでも無いからね。」

「何の話したい？」

「幻想郷への移住についてですよ。舞風は妖怪を勧誘してくるよう命令されて妖怪のいそうなところを回っているそうです」

「でも途中でだるくなったらからしばらくここに置いてもらおうかなって魂胆」

「聞いてない！」

どうして今の今までそれを言わなかったと言うのか。舞風もである。どうして教えてくれなかったのか。

「どうしてそんな重要な話を黙っていたんだ御主人！」

「どうしてって、保留のつもりでしたから。さほど重要ではないかな、と」

「……はあ」

「そんな落ち込むなって。ほら、寅丸のせいでナズーリンが泣いちゃったじゃないか」

「ええっ!?! 泣いてるんですか!?!」

「泣くかつ!?!」

てつきり舞風は真面目な妖怪だとばかり思っていたが、そういうわけではないと 恐らく今更 知る。その顔は悪戯気であった。

「ま、なに。これもいい主従関係って奴かね」

「締めるな!」

「よし、ご飯を準備しよう。寅丸」

「何か手伝いますか?」

「何もしないで寝てる。その方が早く終わる」

「……それって」

「遠まわしに言うとお前がいない方がはやく終わるから、って言うかぶっっちゃけ邪魔だから寝てくださいって事さ」

「遠まわしどころか直通!?! 酷いですよ!」

その妖怪は笑っていた。

妖怪らしからぬ、人染みた いや、聖人染みた気を漂わせる彼は
妖怪であるはずなのに。力など小さく、微小であるはずなのに。

不思議と、その背が大きく見えた。

舞風と信貴（後書き）

星ちゃん可愛いよ。ナズーリンも可愛いよ。ミッオーとか言っな。

とは言っておいて、実はわたくし、未だ星蓮船には手を出しておりません。地霊殿まででございます。故に、最もキャラ崩壊的なものが起きていそうですが、近いうちにプレイして台詞を編集する予定です。

wikiを見ると星ちゃんは虎の妖怪ではなかったという話。シヨツクでした。

本作のナズーリンは苦勞人。真面目な奴は苦勞するものである。

やや星が豆腐メンタルっぽいですが、おおよそ600年近く、後悔を続ければ誰でも（人間そんなに生きねえよ）こつなるんじゃないでしょうか？

舞風と聖の共通点。それは人と妖怪をどちらも平等に見れること。お互いが元人間。故に、お互いが似たような結論を出しました。

しかし、舞風が出した結はあくまで妖怪の郷を作ること。人間には何もしていません。それもまあ、色々ありますが、後ほど。

さて、次話ですが、もしかしたら遅くなるかもしれませぬ。

事情はいろいろ。研修的なものもあるので。

では、また来週

舞風と災厄（前書き）

まず初めに、謝罪を。

いつもより遅くなるとか抜かしておいていつもと全く同じ時間に投稿してすみませんでしたーッ！！

それと、謝りたい理由がもう一つありますが、それは後書きにのせさせていただきます。

どうも作者、単位六つ落として後がなくなってしまったようで。両親に言う事すら怖い臆病な作者なので、若干ストレスのようなモノが溜まっております。だからどうしたと言われたらそれまでですが

ww

さてさて、それではどうぞ〜

舞風と災厄

遙か昔の物語。魔王と呼ばれし存在。

それは憚られる存在の代名詞。

『魔』を束ねるモノでは決してなく、『魔』すらも食らう悪意そのもの。

それは千の妖魔を喰らい、その力を己の糧とした。悪逆の存在。

その恐ろしさは力だけではない。形相も、それほどではない。

ただ、躊躇もなく、是非もなく、妖怪を喰らい、大地を妖魔の血で染めたモノ。

その名は

○
○

気まずい。非常に気まずい。

そこは山の中の一軒家。それほど大きくはなくとも、人並みな生活
が出来る家。ここにお客が来ることは山の主を除けば極めて珍しい。

の、はずだが……

俺はチラリと向かい側に悠然と腰を下ろす者に目を向ける。それは真っ直ぐと、何処か意地悪げにこちらを見つめている。それを見るとまた悪寒のようなものが走り、瞬時に視線を反らした。

今までにこれほどまでの気まずさを感じたことはあっただろうか？

「ふふふ。別にとって食べようと言う訳ではないのだから、もう少し落ち着いたらどうかしら？」

「は、はいっ！ す、すいません……」

そう、八雲紫は口を開き、また俺を見つめるのだ。

これほどまでに、誰かの存在を求めたことは未だ無い。もうアキでも舞風でも、慧音でも妹紅でも、最悪チルノでもいいから、傍にいてほしい……風見幽香は勘弁してほしいけど。

「あらあら、待たせてしまったみたいですね」

「……アキッ！！」

祈りは届き、戸を開いて顔を覗かせたのは同居人。アキである。思わず飛びつきたいまでの衝動に駆られるが、足が震えて上手く動きもしない。

「ごめんなさいね紫さん。お客様がいらっしやっただみだから、先にそっちに対応してしまって」

「お客様？」

八雲紫が首をかしげた。俺も声には出さずとも同じ反応を示す。先程も言ったがここに来客なんて珍しい話である。結界で囲われているから舞風の許可を得ているもの以外は入れないはずなのだが……

アキは困ったような笑みを浮かべながら室内に入り、未だ外にいるであろう誰かを手招きした。

「やはり、貴女も来ていたのね。八雲紫」

「貴女は　！！」

その姿形は女性。不敵な笑みを浮かべ、腕を組む。頭には一本の角が生えていた。既に幻想郷からは姿を消したはずの存在、鬼である。その姿を確認した瞬間、不思議と舞風に似ていると思った。服装も、何もかも、同じところなど無いはずなのに。

「……貴女もとは？」

「察知しているのでしょう？　この山の異常。いや、結界の異常を」

「最も舞風に関係している貴女ならまさかとは思ったけれど、鬼神」

「貴女達も把握しているのですか。それはよかった」

八雲紫が、入ってきた鬼が、そしてアキまでもがその口を開く。

……頭に情報が入りきらない。結界の異常？　鬼神？　把握？　—

体何のことなのだ？

「……あら？ どうやらこの子は気付いていないみたいだけど、教えていないのかしら？」

「はい、教えたところで状況が動くところでもなし、舞風が戻ってくるまでは放っておくつもりでしたわ」

やや無感情にアキはそう口を開いた。それに対して僅かに腹が立ったが、それも仕方無いことだろうと諦める。彼女と自分の力の差くらい分かっている。それを踏まえ、説明しなかったのだろう。悔しいことに変わりは無いのだが。

と、そこで鬼の視線がこちらに向いていることに気づき、思わず背を伸ばす。その目はやや色を帯びていたが、やがてまるで興味を失ったかのように色を失う。

「そう。では、最低限の説明と自己紹介くらいはしておきましょうか。私は鬼神。地底の鬼の管理約、と言うことにしてもらってるわ」「私はアキ。この山に住まわせてもらっている一人ですわ。こっちはベリーちゃん。見習い魔女ちゃんです」

「み、見習いじゃない！ えと、ベリーウェルです。鬼神様」

「ふふ。舞風が集める子はいつも面白いわ。よろしくね」

鬼神は、ニコリと笑う。だが、何処かその工程には感情を感じられないような気がした。意味が無いと言うことを把握しきって、それでいて最低限の社交辞令で済ませてしまうような感覚。

自分と言う、小さな存在とは裏腹にあまりにも強すぎる存在達。どうしてこうなってしまったのだろうか。考える余裕すら沸かなかった。

「さて、異変と言っても起きているのは本来なら些細な出来事。結界の変質よ。この結界に刻まれた術式の一部が、僅かながら減ってきている。いえ、まるでなかったことにされている」

「そう。いまのところ山では大した問題は起きていませんわ。魂の封印結界には何も変化が起きていませんもの。異変が起きているのは、私でも閲覧不可の結界の深部。結界山の封印の非常に深い位置にある。彼は、その説明はしませんでした」

結界山の封印。その異常。本来なら俺にとっては大事件な話。しかし、深部の術式とは？ 一体、何に作用している結界なのか。

舞風は何一つ詳しいことを言わなかった。勿論、聞かなかったからでもあるが、そもそも言う必要が無いと判断していたのかもしれない。

「それを知っているから貴女はここに来た。そうじゃなくて？ 鬼神」
「……仰る通りよ。八雲紫。この結界山の封印は、舞風の剣と私の剣、二つを媒介にして構成を組み立てた。だから、異常が起きれば直ぐに分かる。直に舞風も帰ってくるはずよ。結界の歪みを知つて、ね」

「結界の歪み？」

鬼神は深く頷いた。その顔に感情はなく、まるで、押し殺しているかのようにも感じられた。

八雲紫が目を伏せる。一つ、息を漏らして。

「……それは、貴女が言っていた、封印された最低最悪の性質の妖怪の仕業？」

「ええ、残念ながら、ね」

『最低最悪』の性質の妖怪。それは、どんなものなのだろうか？
そもそもどうしてそんなものが、結界山の封印に関係するのか。

「そう。やっぱり、この山は妖怪を封印していたの」

「気付いていたのかしら？」

「薄々ですよ。ただ魂の力を封じるためとはいえ、山一つに結界を張る理由なんてそれしか思いつかなかったもの」

「おい、おいおい。まさか、結界山にその妖怪が封印されて……」

「その通り、よ。遙か昔に彼が封印した、妖怪」

場の空気が沈んだ。それほどまでに信じられない事でもあった。

そんなものが、ここに？ この山に？

身震いする。鬼神に、八雲紫までが忌避する存在がこの足の下に尙も眠り続けて

「 ちょっと待てよ。封印の異常って、まさか、もう目覚めてるのか? 」

「 ……その可能性は高い。まだ半覚醒状態でしょうけど、ね。恐らく本能的に結界を解こうとしているのよ 」

背筋がゾツとした。でも、何処か現実離れしているようにも感じてよく分からない様な感情に囚われる。

もう、数十という年月をここで過ごしたのだ。なのに、今更封印された妖怪なんて言われても、いまいち浮世離れしたように思ってしまう。

「 それで、舞風はどう思っているの? 因縁の相手、なんででしょう? 私としてもそれを優先してあげたいところだけど、もしも幻想郷に危険が及ぶほどの被害が出るなら…… 」

アキの疑問も最もと言える。それほどの悪名を持つ物ならば戦いは激戦になるであろう。ならばこそ、大丈夫なのか。

それを口にする前に、鬼神は言葉を遮った。

「 大丈夫よ。最悪、私自身の手でけりをつけることも出来るから。アレの力は、あって貴女と同等か、それ未満。私なら軽く終わらせられる 」

「……その言い方では私も簡単に止められるというように聞こえるけれど、まず置いておきましょう。なら、貴女はどうしてそれを最低最悪と言っの？」

八雲紫が鬼神を睨む。確かに、それも妙な話だ。

何故そんな簡単に消せるはずの存在を封印したのか。どうしてそれをそこまで忌避するのか。

「決まっているでしょう？ 性質が悪いのはその能力なのよ。ほぼ確実に、周りへの被害は避けられない。酷い能力ちから」

「……能力？ それほどまでに貴女が恐れる能力とは一体何？」

「そうね……時に、八雲紫。生命が最も恐れることは何かしら？」

「それは、勿論『死』、でしょう？」

間髪もいれず口にしたその答えに鬼神は大きく頷いた。

死。それはありとあらゆる生物が恐れるもの。何者もいずれ来るそれから逃れることは出来ない。故に恐ろしい。生物の真理。

「では、『死』を恐れない者が恐れることは何かしら？」

「『死』を恐れない者が？」

死を恐れない生物、なんて本当はいないはずだ。でも何かとかけて己の生命を捨てる存在はいる。大事な物を守るため。譲れない何か

を守るため。

つまり、答えは

「失うこと。命に代えがたい、何かを失うこと」

「……そう、よ。貴女が答えることは予想外だったけど、まさしくそれ。命を捨ててもいいと思えるほどの存在。それを失うことは命を失うことより、もっと酷い。では続けて、どうしてそれは命に代えがたいほど大切なのかしら？」

「鬼神。私達は言葉遊びをしている場合じゃ」

「……『思い出』」

「え？」

憤慨するように立ち上がった八雲紫の傍で、唯一顔を俯かせていたアキがそう口にした。まるで気付いてしまったたでも言うかのように、その顔は真っ青で。何処か、心が騒いだ。

鬼神が頷いた。その目には、怒り いや、そんなモノでは証明できないほど濁った感情は存在した。

「己の『死』よりも重い、大切な者との『思い出』がその人を大切ににする。そう、なんででしょう？」

「……貴女は気付いたみたいね。これは死と同じ、全ての生物が逃れられない事。即ち、『忘れる』こと。それを自在に操れる存在がもしいたとしたら、どう思っかしら？」

「忘れる事を、操る？」

だとすれば、それは、とても残酷なことだ。

命に代えがたい大事な者を、全てを捨ててもよいと思った物を忘れさせられ、ただ、ただ思い出そうと、思い出そうと、もがくはずだ。苦しむはずだ。

命を捧げた誰かがいるとする。もしも、その人物を忘れさせられたりしたら、一体どうなってしまうのだろうか？

ああ。嗚呼。そうだ。それは、よっぽど、性質が悪い話ではないか。

「それは”忘却を操る程度の能力”。忘却妖怪『かるま禍屢魔』。それが最低最悪の性質の妖怪よ」

世界から音が消えた気がした。そう思うほど、場は沈黙していた。

”忘却妖怪”。まるで聞き覚えの無い恐らく一人一種族の新しいいや、この場合は古い妖怪、と言うべきか。そんなものは勿論原作において登場はしていない。その姿形は想像だにつかない。

しかし、仮にそうだとして、その妖怪が千の妖怪を皆殺しに出来るのは、何故だ？

そう考えあぐねていると徐にアキがその口を開いた。

「同士討ち。不意討ち。騙まし討ち。そんな能力があればなんでもござれ、ね」

「そういうことよ。分かるかしら？ 見たことの無い場所。名も知らぬ隣人。自分にすら理解できない自分。それがどれだけ恐ろしく不安なことか。結果的に疑心暗鬼は膨れ上がり、名も知らぬ隣人に凶刃を向けることになった。隙を突かれればあつという間。悪魔のささやきにすら耳を傾ける。それが悪魔と知らないから」

「なんで、そいつは。なんでそんなことを？」
「それは……今はどうでもいいわ」

歯切れが悪く、言葉を濁す。しかし、確かに優先すべきことがあるのも確かなのだろう。

だが、未だ理解が及ばない。いや、話の順序が繋がらない。その言葉は俺を無視し、八雲紫やアキにだけ向けられているようである。

「……なるほど。もしそんな妖怪が本当にいるのだとしたら、幻想郷、いえ、世界そのものを危険に晒しかねない。多分だけど、そいつは能力をばら撒くんでしょう？ いえ、制御をしないと云うべきかしら」

「ええ。あちこちに忘却を振り撒き、ありとあらゆるものに恐怖と不安を与えるもの。確かに在り方は妖怪らしいが、その牙が妖怪に向けられた結果が、希望の里」

また、聞き覚えのない名称。希望の里、とは一体なんなのだ？

こればかりはアキも知らないのか、戸惑った表情を見せた。それに気付いた鬼神があら、と声を漏らした。

「流石に教えていなかったのね。いいわ、これも話してしまいましょ」

そう言い、一つの物語を語り始める。

一人の妖怪の、世界を作り、そして壊れるまでの物語

「　そうして、希望の里は滅び、千の妖怪の血に沈んだ。そして舞風は、忘却妖怪を封印した」

「……………」

百年程度しか生きていない自分にはまるで、到底、想像もつかない次元の話。まるで神話のような出来事。そんな事が実際に起き、その当事者は長らく隣に存在していた、と言うのだ。

正直、スケールが違いすぎるような気がしてならない。

「不幸にも、その時私は里の外に出ていたわ。それを突かれ、帰っ

てきたときにはほぼ全員が血の海に沈み、空では舞風とあいつが戦っていた。涙を流しながら、ね」

「……それは、相当無念だったでしょうね。ようやく作り上げた世界と、集めた妖怪を同時に失ったのだから」

そう、八雲紫は目を伏せる。いや、俺だってそうだ。舞風が、そんな想いをしていたことなど、知りもしていなかったのだから。

と

「貴女。本気でそう言っているの？ だとしたら、貴女は全然分かっていないのね」

顔を上げる。鬼神が八雲紫を睨んでいた。それは呆れたような、軽く失望したような、そんな目で。

「……それは、一体どういうことかしら」

「貴女は舞風のことを全然分かっていない。そう言ったのよ。どうしてあの子が希望の里なんて物を作ったか、貴方には理解できないはずよ」

希望の里を作った理由。確かに未だに拳がらない事。何故。何故？

世界を作るなんて、そんなとんでもないことをするにはそれ相応の理由があるはずだ。そうでなければ、それは成り立ちその物に矛盾をきたす。ではその理由とは？

舞風は、そもそも世界の成り立ちなどを深く考える妖怪か？

「まさか……彼は妖怪と自分の生きる世界が欲しいがために？」

「妖怪が、じゃないわ。あの子はね。希望の里が作られる以前。旅をしていた。長い、長い。途方もなくなるような長い時間を。妖怪達は数千、数万と言う時をかけて築上げた絆そのモノ。あの子は夢を、そして絆までを殺されたのよ。錯乱による同士討ちと言う最も見たくない光景と共にね」

「ッ！！」

殺された千の妖怪が、全て親友のような存在だったとして。

それが目の前で、殺し合い、そしてそれを止める事もできないその時の感覚は、どんなものなのだろうか？

俺には想像も出来ないことであった。だって、あいつがそんな過去を持っていたなんて、想像もつかなかった。

憎み、怒ったのか。それとも、この上ないほどの無力感を感じたのか。恐らく両方だったのだろう。

耐えられる訳が、無い。自分の立場に置き換えるなんて出来ない。だって、俺には千人も友達だっていないし、そんな長い間連れ添った存在だっていない。その両方を、夢と共に壊される。

ああ。嗚呼

それはどれだけ

どれだけ辛いことだったのだろうか

○
○

「相当、時間がかかったか」

転移結界でその山に降り立つ。いつものように、高く聳える木が出迎える。生憎の曇天が空を覆っていた。

封剣『神風』に届いた結界の不調。その兆しは随分と前から出てはいた。しかし、それを考えることもまた怖くて、何処か自分を誤魔化している節もあったかもしれない。

「お帰りなさい。舞風」

「来てたんだな。やっぱり……」

背後から聞こえた声に振り返り、そこにいる者の顔を見る。

何万と言う、気が遠くなるほどの遠い時間を共に生きた存在。八斗蓮姫。そこで何処か悲しげに、こちらを見つめていた。

「……封印が、解けるわ」

「ああ……本当ならこの封印は俺の復活の千年後に解けるはずだった。早まったのは、大地から結界の記憶を忘れさせたからか。このままじゃあ不定期に干渉されて結界が不安定になる。だから」

樹を、見上げる。高く、高く。聳える一本の樹を。

「忘却妖怪との因縁を、今日、断つ」

強い雨が、降り出した。

気付けば蓮姫の背後にはいくつかの人影。見知った顔があった。

紫に、アキに、ベリーに。この数百年で得た。新しい仲間。

「……話したんだな。ここに封印されている妖怪のこと」

「ええ、事情くらい説明してあげなきゃ可哀想でしょう？ 本当なら、戦うにはこの山は狭すぎるかもしれないけど」

「この山じゃなきゃダメなんだ。希望の里の、唯一のシンボルだったこの山じゃなきゃ」

春か昔の記憶。みんなが笑っていた世界の記憶。一度失った絆が恋しくて、それでまるで穴を埋めるように欲しかった。一度手に入れたら貪欲に、もっと欲しいと子供のように。

そして、夢が出来た。人と妖怪とを完全に分け、自分達による自分達の世界を作り上げたいと願った。

夢は、叶って、一ヶ月で崩れた。砂場に作った砂のお城のように。

それがいつか、遠いいつか、人間たちが妖怪への恐れを失い、破綻してしまうのには心では気付いていた。でも、それでも、今はそうしていたいから、俺は今を大切にしようと思いを描いた。そんな希望を持って、希望の里と名付けた。

納得がいかない。納得ができる訳が無い。

「結界山の封印は、元々中に閉じ込めたものの力を奪うための結界。その為に、全ての力を注いでまでこの結界を強めたんだ」

「舞風……貴方は」

「ずっと、思っていた。今の俺にどれだけの意味があるのか、とか、そもそも意味なんかあるのか、とかさ。正直、分からなかった。分かるうとする前に、逃げた。千の親友を見殺しにして、今更何をほざくんだって。だから、これだけは自分で断ち切らなきゃ、意味が無いんだ」

雨は強かった。口に流れこんで来た。

しょっぱかった。それが雨が、気付かず流れた涙か自分で把握できないほどに。

「蓮姫。封印を、解くぞ」

返事は聞こえなかった。顔を合わせるのが気まずくて、背を向けていたから頷いたのかも分からなかった。

「舞風」

「……どうした？ 紫」

「貴方は、どうして私を友と呼んだの？」

そう、彼女は言った。何処か戸惑いを含めた目で。

蓮姫は全てを語ったのだろう。とは言っても、希望の里の経緯を、
だろうが。それを踏まえてこんなことを尋ねてくるのはどうしてか。

「逆に、それを聞く理由は？」

「無神経を承知で聞くけど、貴女は関係を作ることを怖いと思わなかったの？ 一瞬で全てを失えば、誰だってそれを恐れるはずだもの」

「……そう、かな。そうなのかもしれないな」

皆が互いに傷つけ合い、死んでいく姿を見て、頭が真っ白になったことを覚えている。そしてそのまま、あいつに突撃して行った事も。

失う事を怖いと思った事は、いくらでもある。だって、それらは大事なものだ。掛け替えの無いものだ。

だからこそ、失うことを恐れはすれど、得ることに俺は恐れは抱かない。否、抱く訳にはいかない。それが俺にとって全て。重要な他こそ俺の存在意義。誰かのためにあるからこそその『大精霊』なのだ。

「俺は、逃げられないよ。生きることから逃げられない。なにより蓮姫が逃げなかったんだ。俺が逃げる訳にはいかないんだ。目を逸らした分だけなくなっていく物が在る。だからこそ……」

「……ふう。貴方のことは分かっていたつもりだったけれど、私の思い違いだったみたいね」

「紫……」

「全部終わったら、宴会でもやりましょう？ 希望の里は確かに滅びてしまったのかもしれないけど、幻想郷はこれから。貴方はまだまだ幻想郷に必要な存在なのだから、しっかり片をつけてきなさい」

「ああッ！！」

小さく頷いた。それを見て満足そうに頷き、笑みを浮かべた。

次に、変わるように顔を出したのはこの山に住む二人であった。

「舞風……どうして、今まで教えてくれなかったんだ？」

「それは……」

責めるようで、しかし何処か悲しそうに、ベリーはこちらを見た。こうして悲しみのような感情で歪んだベリーの顔を見るのは初めてな気がする。

その隣のアキもまた、目を伏せてこちらを見つめていた。事情を聞いたならばこそ、か。

「……話さずに済むならそれが一番だと思った。当初の予定じゃここにいるのは俺と蓮姫と、紫だけのつもりだった。それだけ、過去じゃなくて、今の俺を見てほしいから」

「……舞風。貴方は」

「『最低最悪』の妖怪を見せたくなかった。ただ、それだけ」

そう、俺は結界を閉じた。二人を隔離する結界。絶対に壊されたりしないように、二重三重、幾重にも重ねた。

そしてそれに背を向けた。もう振り返りたくはなかった。今見たら、俺は多分酷い顔をしている。

「馬鹿っ！ 封印された妖怪とかっ！ お前の過去とかっ！ 俺には分からないことだらけだけど。だけど！ 俺は覚悟は出来てるから！！ だからっ、終わったら、全部終わったらっ」

声は、切れた。これでこの結界の外からの干渉は完全に不可。内側にも物理的な干渉は完全にシャットされている。逆を言えばそれ以外は生きているのだが。

「……縛、封、戒。『禍屢魔の結界』。完全解放」

囚われているのは妖怪か。それとも己の心か。

……いや、両方なのだろう。だから今、こうして自分でも良く分からない、緊張に似た感覚を覚えている。

一つ一つ。まるで糸を引くように優しく、繊細に引き抜くように、結界を解く。

今だから、分かる。俺は

「 嗚呼。懐かしき世界。夢にまで見た緑。蒼が見えないのが、本当に、心の底から残念ですの」

俺は、俺には、こいつを

義務と理由と、責任がある。

妖艶に、されど無垢に、しかし残酷に、故に恐ろしく、それでいて美しく、まるで泥の海に浮かぶ黒い宝石のように混沌と。

忘却妖怪『禍屢魔』は、そこに存在していた。あの時と、何一つ変わらぬ姿で

舞風と災厄（後書き）

皆さんは忘れることを怖いと思った事はありますか？

ぶっちゃけ自分はいんまりないです。作者ですが。テストに出てきた問題やら、もしくはスピーチの内容やらを忘れたときには焦ったりしますが、まあそのくらいです。

でも、それは自分にとって。どうしても忘れたくないものがある者にとってはどうなのか……

さて、前書きに書いた謝りたいこと二つ目は、急展開過ぎること、ですね。自分でも焦るほどでした。しかし、これ以上長引かせるのは蛇足。故に、ここで決行しました。

さて、作者は諸事情で金、土はパソコンに触れることが出来ないの
で、感想等は返せないかもしれませんが、どうかご了承ください。

因みに、これ二部、三部を想定して作成しています。

舞風と忘却（前書き）

一ページが少ない。8000文字くらいだ。前回もそう。

さて、ティールです。作者です。おはにちばんは。

中古のノートPCを買ってみました。これさえあれば外でも更新が可能に

ハードディスク破損ってどういうこと？

ブルースクリーンなんて初めて見たよ。どうすればいい。返品……考えようか。

さて、そんな作者の最近（って言うか今日）の出来事ですが、時空の彼方にポイして。

さあ、始まり始まり……

舞風と忘却

忘却。つまるところ忘れることは大抵の人間に起き得る事態である。

昨日の食事を忘れる者もいれば一週間前に出会った人の顔を忘れる事だって、当然ある。

そんな事は些細なことである。

最も大切なのは、それが例え大切な事だとしても時と共に風化し、消えていってしまうこと。何十年も連れ添った大事な人を忘れ、自分たちが生きた場所を忘れ、

そして、いつか忘れられると言つこと。

それは妖怪と言えど例外ではない。いや、長い時を生きるからこそ、妖怪もまた忘却を恐れる。生まれた頃の大切なものを忘れたくないと思つ。

誰にでもある、最も大切なものを、忘れたくないと思つ。

故に、忘却妖怪はありとあらゆる存在の敵。ありとあらゆる者から

忌避される存在になりかねるのだ

○ ○

「何も。何一つ変わりませんわね。この世界は。空も、空気も、私を見上げる顔さえも」
わたくし

空を仰いでいたそれはそう言葉を漏らし、やがてこちらを見た。べたつくような、非常に嫌悪感を感じる目。

血のように紅い髪は腰に届くほど長く、また目の上辺りで前分けがなされて耳の下辺りで両方を束ねられている。体の線が浮き出るようにぴっちりとした黒い服には白い線が入り、大きめな双丘を際立てる。上に白い花の刺繍がなされた黒いマントが重ねられ、紐で止められていた。

「さて、今更私を目覚めさせるなんて、どういった見かお教えいただけますの？」

「……自分で結界を解こうとしておいて、よく言っよ」

妖艶な、と言う表現が一番しつくり来るであろう。そんな表情で明らかかな皮肉を口にするそれに嘆息する。

そんな事を流し、睨む。何処吹く風のように飄々と、その紅い髪を撫でた。

「さて、何のことやら。お仲間をぞろぞろ引き連れて、友情ごっこで私と戦うつもりですか？」

「違うな。皆は見ているだけだ。戦うのは俺一人だけさ。よかつたな？」

「へえ。貴方が。一人で？ この私と？ それはそれは

」

笑みを潜め、しかし何処か挑発的に歪んだ目。敵意ではなく、呆れか。それともこちらの真意を探っているのか。

それさえも数秒で姿を潜め、現れたのは快樂に歪んだ表情^{かお}。その目は虚空を映し、愉悦に浸っている。

「楽しそうですね。またあの時のように、私に翳られる時間を過ごすと言うの？ いいですね。構いませんの。今の貴方をぐちゃぐちゃにして首だけにして飾り物にして、何もかもを思い出せない、忘却の海に、今度こそ落として差し上げますの」

「ふんっ。相変わらずとんだ趣味を持つてるな。だが、そう簡単に行くとも？」

「行きますわ。相手が貴方だからこそ」

確信めいたその言葉にやや違和感を感じたが、それを振り払い腰のその手の神風を構えた。一つの封印を解放したその剣は、前に比べ少し軽くなつたような気もした。

集中。背に現れる反星陣。煌びやかなそれはくると回り、時に一筋の光となつて五芒星をなぞつた。その足が地を離れる。

「さあ、決着をつけよう 禍屢魔」

「ええ。ええ。何度でも引き裂いてあげますわ 妖精さん？」

そうして、ぶつかると。

互いが一筋の光となつて。幸せも、不幸さえも、全てかき消してしまつその絶望の光に、飛び込んだ。

○ ○

その姿はまるで妖怪であつた。感覚は随分昔、鬼に捕まつたときに

少し似ていた。

絶望感。有体に言うならそれだ。どうしようもないと言う虚無感。結果的に舞風に助けられた訳だが、確かに自分はある時絶望した。あまりの力の差に。

一瞬。ほんの一瞬、目が合った。それだけで、背筋は凍った。まるで世界が動くことを忘れてしまったのではないかと言うほど。

確かに間を遮る結界が存在していたはずなのに。まるでそれを紙切れのようにこちらへと干渉してきた。結界に不調は無い。声は聞こえるものの、向こうの妖気を欠片も感じることはできない。この結界は正常に作動しているのだ。

つまり、あれはただ俺を見ただけである。それだけで、まるで違うのだ。力の差、などを具体的に説明するのは苦手だ。どれだけ強いのか分からないほどに強い、としか言えない。もしも、アキや舞風を直剣としたならば、あれはギザギザとした刃を持った、拷問器具のような刃物。しっくり来ないが、少なくとも自分にはそう感じた。

「あれもまた、太古に生きた妖怪の一角、と言うことね」

背後から声。そこに立っていたのは八雲紫だった。先程からいたのか、今入ってきたのか。恐らく前者。彼女は空を、舞風と禍屢魔を見上げ、冷や汗を流していた。

あの八雲紫でさえもここまでの反応を示す存在。一気に事態が現実味を帯びた気がした。

「アキ、貴女はアレをどう思うかしら」

「……見た限り、封印の副作用で力は半減。おまけにこちらの状態は好調。舞風が負ける要素はない、と思いますわ」

「そう、私もね。そう思ったのよ。一目見て、なんだこの程度かって、思ったのよ」

確かに。妖力を感じ取れないこともあって、最初見たときは普通の妖怪と変わりないように見えた。いや、もしかしたら感じ取れないだけで凄まじい妖力を持っていたのかもしれないが、少なくともその時は。

それが失せたのは、やはりあの眼を見た時。

「アレは、ダメよ。あの眼はダメ。幻想郷が如何に受け入れようと、内で暴れ、やがて全てを壊す種火になる。アレを受け入れる事はどんな世界にも出来ない。だってアレは」

底が見えない。いや、底のない狂気と憎しみに埋め尽くされていたのだから。

○
○

「摩訶 天象砲ッ！！」

閃光が空を白く染める。何本もの光の光線は空間を焼き、世界を焼き、只進む。

しかし、それを微笑を浮かべたまま軽がると避けていく。気付けばその姿はすぐ傍まで迫っていた。

「遅いのです」

振り下ろされる足。瞬時に結界を構築、それとの間に壁を生み出す。その瞬間、笑みを浮かべるその姿を確認し

「
がっ」

背後より、衝撃。自ずと近づくような形になり、結界は消えた。頭

上に振り下ろされた踵。

その痛みを感じる間もないまま、数秒、視線が真っ白に変わったかと思うと大地へ向けて高速で落下を始めていた。恐らく頭蓋が砕けたか。修復は完了。体勢を立て直し、空を見上げる。そこで禍屢魔は愉悦を浮かべ、頬を抑えていた。

「もつと。もつとですわ。貴方はこんなものではないでしょう？ 貴方は出来る子でしょう？ その力を見せてみなさいな。さあ。さあ！ さあっ！！」
「一人でやってろ！！」

剣の切っ先を向け、その一点に力を集める。神風は光を帯び、粒子を纏う。

「月下っ！！」

剣を腰だめに構え、特攻。憎らしい笑みを浮かべた禍屢魔へと向かって行く。そして、直前にてそれを高く、掲げるように持ち上げる。

「咆哮ッ！！」

真っ向からの渾身の振り下ろし。直後にその刃は妖力の刃となって何十倍にも巨大化し、世界を切り裂いた。

しかし、切れたものは世界だけ。禍屢魔と言う個体に対してのみ、空を切った。

「 甘いすわ。ただ大振りなだけの一直線な一撃で、私を捕らえられるわけないですの」

何処から、と言うわけでもないが、声は聞こえた。直後、背後より再び衝撃。目を向ける。しかしそこには何も無いのだ。勿論、それの正体など前回の戦いで理解している。

『世界』から『妖力弾』を忘れさせているのだ。当然、世界から忘れられると言うことはその存在を無いものと認識することと同じである。つまり、禍屢魔の攻撃は不可視、見えないのだ。

「 っち」

だからと言って、禍屢魔が己を世界から己を消すことができる訳ではない。それはつまり、妖怪としての基点、存在そのものの死を意味するからだ。

故に、忘却妖怪禍屢魔は自身に対して能力の行使が出来ない。

「 そこっ！！」

気配を読み、剣を振るう。その先は自らの背後。その刃はその頬をかすめ、止められた。

腕を掴まれていた。まるでビクともせず、うめき声を漏らす。

「……綺麗な手ですわね。まるで可憐な娘子の様。ああ、どうしてかしら。これほどまで綺麗だと」

両手で掴む、押さえつけるように。その眼が、そして口が、狂気に歪んだ。

「こんなにも壊したくなる」

そのまま、俺の腕を『捻じ切った』。断面はひしゃげ、神風は？げた手から零れていく。光の粒子と化し、二の腕から腕輪が零れた。

「じゃあ君も壊してあげようか？」

その顔に一撃。拳を繰り出す。瞬時に手を配置され、防御された。

それでも、その体軀を遙か後方へと吹き飛ばす。

体は成人男性以上のモノと化し、力が漲る。当然だ。今のこの身は鬼なのだから。

「あら。今回は天狗を飛ばしましたの？ それも一興ではありますけれど」

「……随分と、余裕だね」

しかし、その身にダメージを与えることは出来ない。吹き飛ばしたはずが気付けば背後で楽しそうに笑っていた。

正確に言えば、ダメージはある。それを決定的なものに出来ないのは二つ理由が存在する。

一つは、こいつが『自身の痛み』を忘れること。僕が痛みを封じることが出来るように。自分でも使っているから分かるが、こいつの輩は基本厄介である。どれほどダメージを与えようと向かってくる。普通とは一線を敷いた戦闘法。戦い慣れないのは当然だ。心情では対策を考えたとつもりだったが、どうにも上手くいかない。

二つ目に、こいつが『忘却』への恐怖を糧に存在する妖怪だと言う事。結界で仕切られているため、結界山の外からの力の供給は出来ないが、それでも脅威。

何故ならば、その対象は僕含め、この山の動植物全てに渡るからである。生物には意識は付き物だ。そして勿論恐怖はある。その中に忘却の恐怖は、僅かながら存在する。その量は微量なれど、山も積

もれば、と言うやつである。

「それで、貴方はその姿で私に何を見せてくれますの？ 私の力を奪って、それでどうしますの？」

「……………」

”力を奪う程度の能力”。それが今この身にある能力の名。その名前の通り、これはその他からありとあらゆる力を対象に奪い、自らのモノに出来る。聞こえがよければ素晴らしい能力のように思えるが、当然デメリットと条件は存在する。

前者は慣れない力、例えば能力を奪ったとして、それを自由に扱える訳ではない、と言うこと。暴発する確立が十二分にある。今この状況でそんなことが起きれば、最悪自分で自分を消すことになりかねない。

後者は奪える質量に限界があること。単純に自分以上の力は勿論不可能だし、一個から奪える量は自分の力の一割程度と、条件は厳しい。地底の時は一体一体が強い妖力を持っていたわけではないから可能であったが、これは明らかに許容オーバー。

「その減らず口も、すぐに叩けないようにしてあげるさ」

「あらあら。その言葉、まるで悪党のよう。お似合いですわよ」

「ほぞけっ！！」

別段。小細工は必要ない。正面から叩き潰す。

あの頃のように、怒りに狂っていたときとは違う。

俺は、俺は、焦ってなど、いない

○
○

「 どういうことだよ。これ」

舞風は、強い。

それはこんな自分にも分かることであつたのだ。昔見た、烏天狗の強さだつて相当なものだ。一個で百の妖怪を蹴散らせるような。

今の姿は、見たことこそないが、鬼の姿を象っている事など分かる。鬼は既存の全ての妖怪と一線を引く存在。なら、かなり強いはずなのだ。

それが、どうしてあそこまで、追い詰められると言つのか……

「形態三。『優鬼天正』。その身は鬼。友の為に己を捨てた愚者」

「えっ？」

いつの間にか、黙って戦いを見上げていた俺達の傍に鬼神が立っていた。同じく、その戦いを見届けながら。その姿は、何かの感情を押し殺しているように見えた。

「貴女は、いえ、貴女達はどうして舞風が別の姿に変身できるか、聞いたかしら？」

鬼神は顔をこちらに向けず、無表情でそう尋ねた。

聞いたことは、実のところある。その時は変身ヒーローだと真面目に答えてくれなかった記憶があるが。妖怪としては己の正体がばれることが致命的に繋がるのやもしれないと断念し、いつか話してくれることを待ったが、結局その日は訪れなかった。

「鬼と烏天狗に変身できることは知っていたけど、彼がその理由を話してくれることはありませんでした」

「……ええ。私も、あの子を不思議な能力を持った存在としてしか見ていなかったわ」

アキと八雲紫がそう答え、俺もまた小さく頷いた。それを見ていた

かは分からなかったが、蓮姫はクツと笑った。いや、そう聞こえただけかもしれない。

その眼はやはり上空の舞風を捉えたまま離さなかったが、やがてそれを瞑り、俯いた。

「昔、昔。あるところに、一つの湖から一人の妖精が生まれました」

まるで子供に聞かせる昔話のように、唐突にそう言葉を紡いだ。勿論出てきた言葉は予想外で、三人揃って呆けてしまうほど。

「いきなりなん」

「妖精は生まれたばかりなのに様々な事を知っていました。それはとてもおかしいこと。それ故に、同種の妖精の中でも浮いた存在でした。ある時、妖精は烏天狗の少女に出会います。初めこそお互いいきり立っていました、やがては意気投合しました。天狗の名前は『真可』。天狗の中でも才能を持ち、また同族の中では浮いた存在でした」

こちらに構うことなく、その言葉は続いていく。らしくない口調の言葉にやはり驚きながらもそれに耳を傾け始めた。

「結果的に、その妖精は妖怪と交友を初め、同じ妖精達には嫌われるようになりました。その頃、妖精と妖怪は互いに嫌い合っていた

からです。本来なら馬が合うはずのない二人。それに興味を持った山の主は二人に会いに行きました。その名は天正。戦い好きな鬼にとっては異端な、戦いが嫌いな鬼でした」

「……天正？」

それは、先程鬼神が呟いた者の名前に似ている。

戦いが嫌いな鬼。才能を持つ烏天狗。そして、知恵を持った妖精。まるで、どこかで本当に在った物語のような話。

「鬼もまた、妖精に惹かれました。鬼は、戦いを強いられる己を嫌っていました。自分に恐れを抱くものを嫌っていました。しかし、知恵を持ってど妖精は妖精。鬼を恐れません。鬼と、天狗と、妖精と。不思議な不思議な、三人は、仲良く暮らしました。しかし」

そこで終われば、終わってくればよかったのに、とまるでその想いが読み取れるほどに、その顔は歪んだ。

「三人が出会って僅か。人間が、月へと移住を始めたのです。それだけなら何も問題なかった。人間が妖怪を毛嫌いしていなかったなら」

「……何があったというの？」

「人間は、今まで生きた世界を消し去ってしまおうといくつもの炎を落としました。自然を、星を、大地に住まう、生あるものを。そして、妖精は何処まで言っても妖精。存在するためには生まれた自然、湖が重要不可欠でした。故に、烏天狗と鬼は守るといつて聞き

「ません。妖精は、覚悟を決めました」

その言葉を吐いた時の姿が、まるで怪談をするかのように暗く、沈んだ空気へと変える。

「妖精は、守られるのではなく、己の手で守ることを決めました。落ち行く炎から友を守ろうと。全ての力を出し尽くしました。結果的に、山を、そして二人を守ることは成功しました。しかし、悲しきかな。その身は妖精。全ての力を出し尽くし、二人を守ろうとした妖精は全ての力を出し尽くし、風前の灯でした。どうしても助かりません。彼は山を、二人を守り、消える。そのはずでした」

「……はずでした？」

「最後の最後で消えかけた妖精を見て、二人は決めました。己の存在そのものを捧げ、妖精を救うと言う、彼の気持ちおもいの全てを無視した方法を」

「ッ……!」

どうして……どうして、そこまでできると言うのだろうか？

その妖精は、己の全てを投げ出しても価値があると思えるほど、大事な存在だったとも言うのだろうか？

「……それは、成功。二人の全てを得た妖精は、気付きます。己が最早、己だけではないと言うことに。泣きます。怒鳴ります。悲鳴を上げます。それでも、もう二人は戻っては来ないのです……そこにいたのは、妖精でも、烏天狗でも、鬼でもない。全く別の存在。」

やがて、彼はこう呼ばれることとなるのです」

蓮姫は見上げる。そこで戦う者を見上げる。

悲しげで、しかしそれを堪えるかのように。ただ、舞風を見つめるのだ。

「 『大精霊』 舞風。そして
」

瞬間、空を光が埋め尽くし、その言葉の先を聞くことは叶わなかった。

○
○

「ッ」

「貴方と言う妖怪は。まだ分からないのです?」

禍屢魔が見下ろす。その身に傷は在れど、ほとんどがかすり傷のよ
うな物。更に余裕がある。

対してこちらは傷が修復するため怪我の一つも無いが、明らかに攻
撃をもらい続けている。傷が治るから全く問題ないと言うわけでは
ないのだ。蝕まれるのは精神。こればかりはどうあっても慣れきれ
るものではない。

このまま戦闘を続けようと、僕の肉体が死滅することは無い。しか
し、なんとか維持している体全体を覆う結界に、亀裂が入り始めて
いる。そちらに割く余裕が少なくなっているのだ。

万が一、これが破られでもしたら、能力から保護されず、あつとい
う間に記憶を失うだろう。長い、長い年月が消えるのにどれほどの
時間がかかるのかは分かったものでも無いが。それだけは避ける必
要があるのだ。

しかし、結界を気にすればするほど、おのずと余裕はなくなってい
く。結界山の封印。自分への保護結界。それだけでも相当な妖力が
奪われる。

「今の貴方は昔よりも酷いですわ。あの時は錯乱してどんどん
と打ち込んできたからよかったものを。今の貴方は戦いに集中が出
来ていない。そんな状態で私に勝つと? 笑わせないでほしいです

の

「どれだけの月日が経とうと貴方は変わらない。変われない。気付いていながら変える気が無い。分からないとでも思いますの？ 貴方がほとんどの攻撃を加減していること。そんな貴方が、私に勝てるわけが無いでしょう？」

「君がそう言うなら、そうなのかもな」

分かって、いる。

本当は分かっていたのだ。

僕は一つの例外を除き、常に相手を殺さない戦いを心がけてきた。それは、その戦いの後にきつと、友達になれると信じたから。いや、それだけでは詭弁だ。自分が死なないから、と言う理由もあった。

その戦い方が今こうして、自分と力量が拮抗するような相手との戦いに不利な理由を作り出す。

「蓮姫」

遙か下。結界の中。心配げにこちらを見つめる目。

恐らく、彼女も分かっているのだ。

分かりたくなくとも、分かってしまうのだ。

「……今度は余所見ですの？ いいですわ。貴方がそれでいいならば、全力で叩き潰させてもらいますの。覚悟はよろしくて？」

声。声が聞こえる。禍屢魔の声。

見ればその手に妖力を溜めていた。収束する力。不愉快そうにこちらを見つめる目。

ああ、分かっている。

怖…
怖かったのだ。ずっと。ずっと。昔から。封印が解けて、この世界に舞い戻ったその時から、やがて来るその時を、ずっと恐れていたのだ。

だから、蓮姫に託した。封印を。封印される前に、鬼の封印までも。

その時から、妖怪舞風は烏天狗に変身できるだけの、されど特異な妖怪へと変わった。封印を取り戻し、鬼にも変身できる妖怪に変わった。

「消えなさい」

収束された力が、はじけた。直線的にこちらに向かってくる光線。

眩く、高速で迫ってくるそれを、避けない。

光の奔流に飲み込まれるその瞬間。小さく口ずさむ。
僕に、私に、俺に残された。最後の封印の詞。

「
具現、ぐげん
結晶、けっしょう
」

温かい、光がはじけた

○
○

遙か昔の物語。魔王と呼ばれし存在。

それは憚られる存在の代名詞。

『魔』を束ねるモノでは決してなく、『魔』すらも食らう悪意そのもの。

それは千の妖魔を喰らい、その力を己の糧とした。悪逆の存在。

その恐ろしさは力だけではない。形相も、それほどではない。

ただ、躊躇もなく、是非もなく、妖怪を喰らい、大地を妖魔の血で染めたモノ。

その名は

魔王、舞風

『最低最悪の妖怪』と呼ばれたモノ

舞風と忘却（後書き）

ちよつと後悔している。

反省もしている。

質問は受け付ける。

さて、次で収束してくれるだろうか……

舞風と忘却の異変（前書き）

学校祭が間近となっておりまして。今回はそれや後期によって増えたレポートを処理することが忙しく、30分前に予約投稿しました。

学校祭……15分の1の確率でカラオケ当たりました。ばるばる歌おうか考え中。みんなうしねばいゝのに〜（笑）

さて、これにて禍屢魔の乱。終局となります。

その果てに、舞風はどういった選択をするのか……

舞風と忘却の異変

夢を見た。

「　　ッ！！」

悲鳴を上げる。怨嗟を叫ぶ。

泣きながら、我武者羅に突撃する。

アレが笑いながら、自分の仲間達だったものの頭上を飛び回り、笑う。妖艶に笑う。

何も考えられなかった。考える気にもなれなかった。

ただ、目の前のそれを壊すことに、命を使った。

封印など知らない。力が、力がただ振り回されるためだけに存在しているのだとしたら、それは使う側と使われる側が反転してしまっているだけだ。

だから、使った。

最終封印。具現結晶の解を

○ ○

「 ああ。嗚呼。嗚呼ッ！！」

その声を上げる。頬を吊り上げ、口元を歪め、うつとりとするように目を垂らす。

不思議とクリアな頭で、うるさいと思った。

「そっつ、それですよ！ 私は貴方のその姿が見たかったですの！」

その目にあるのは底知れぬ狂気。不快だった。しかし、何処か清らしさすらも感じる矛盾。

自分の手を見た。白く、細く、それほど大きくも無い手だ。

安心。否、これが普通。まるで今までがこうであったかのように感じる。

「さあ、さあ！ さあっ！！ 踊りましょう？ 死ぬまで、壊れるまでー！！」

「先程も言った気がするけれど」

手を握る。結界は全て正常に作動中。保護結界を強化。何も問題ない。

「一人でやってる」

「ッ!？」

瞬間、殴打する。止まらず拳を振り下ろす。

加減は、している。最も、加減が加減にならない力ではあるが。

ただ、無為に、何も考えず、その拳を振り下ろす。その顔はさぞ冷め切っているので在ろうと思う。確認する気になれない。

「ガッ　　ううううっ!!！」

呻きのようなモノをあげながら、しかしその顔のゆがみは消さぬまま、手をこちらに向ける。発光。そして発射。光弾と化した妖力が弾幕となって襲い掛かる。

「法陣」

自分の周りの術式をいじくり、壁を作り出す。何重にもわたる、馬鹿馬鹿しいほど強固な壁。

弾幕の全てを弾き、辺りへと散らした。それに混じって突撃してきた光は一つの槍となって障壁に突き刺さる。

「貫く忘却、タルタロスッ!!」

それは白と黒とが混ざり合った混沌の色をした二又の槍であった。それがいくつもの障壁を貫き、こちらに近づいてくる。

だが

「無駄だ。禍屢魔。今の俺をお前は殺せない」

背の翼をはためかせ、反星陣は輝く。背に張り付くそれは空を踊り、やがて反転する。

風が吹く。反星陣から放たれた衝撃波は容易く禍屢魔の体を吹き飛ばし、距離を生み出す。

反星陣は、基本飛行にのみ使われている術式である。

しかし、一度反転すればその効果も反転。無重力を生み出す術式は相手を押し出す一撃へと変化する。

奥の手の奥の手。その更に奥の手。

本来ならここまで手を切る事はない。万が一にも在りえない事であった。

ただ、今回がそれ未満の可能性で発生してしまった事態であるというだけ。

背後からの衝撃を結界が吸収する。否、吸収するのは衝撃だけではない。妖力も、また。

「ふ、うふふ。あはは、あはははっ！！」

禍屢魔が笑う。愉快そうに笑う。心の底から。腹の底から。

それを煩わしいと思った。その目を見た。

相変わらず、狂気しか見えない。不思議なことに、それ以外が見えないのだ。

「ああ。それでこそ、それでこそ舞風。それでこそ『無慈悲な暴君』
。会いたかった。ずっとお会いしたっかですの」

「……『無慈悲』、それに『暴君』か」

否定しない。否定できない。

暴君が、愚かな王であると言つのならば、俺はそれを否定できない。

故に、言葉には力を以って返す。

『無慈悲』で『残酷』で、『最低最悪』な能力ちからなのだとしても。

○
○

「アレ……が。舞風？」

ようやく出た声が、それだけであった。

一瞬、空が光に埋め尽くされたと思った次の瞬間、そこにいたのは、
そう妖精でも、烏天狗でも、鬼でもない、全く新しい何か。

白い、ヒラヒラとした服は相変わらずながら、その胸元は大きく膨
らんでおり、背から生えた烏天狗の黒い翼。そして、頭から生えた
鬼の象徴。白い、双角。

今までに見た舞風の姿をそのまま足して割ったような姿。それが舞
風であると分かっていた。分かっていたはずなのに。

一目見た。その時俺は怖いと思った。

目が合ったわけでもない。ただ禍屢魔を見ていたのに、俺は舞風を
怖いと思った。そして、それに愕然とした。

「……鬼神。今言った言葉の意味、説明なさい」

「八雲紫。分かるでしょう？ 貴女なら。三つの魂が不安定に交じ
り合い、アレに至った理由が」

「いいから言いなさい！ どういうことなの？ 魔王って、どうい
うことなの！！」

魔王。それは、ある意味ではそれなりに聞いていた。いろんな物語
には最後に強い敵が勇者を待ち受けていて、その名前が敵、魔の
王。すなわち魔王であるということ。

言ってしまうえば、正義と悪が存在するとして、圧倒的悪であるのが

魔王。それが　　どうして繋がる。

「　　三人の魂の融合は、完全なモノには至らなかった。長い年月をかけても、それが変わらなかつた。だから、一つ一つの魂に封印をかけた。烏天狗の封印。鬼の封印。そして、それらの間の壁を作り出す最終封印。具現結晶を。それを成したのは他でもない、あの子が自らの力を制御できなかったから」

「それは　　」

「　　封を操る程度の能力”。　　譲渡と譲受を操る程度の能力”。そして、”力を奪う程度能力”。魂に内包された能力が互いに交じり合うことにより、一つに変わった。皮肉にも、彼が最も嫌った理不尽をそのまま具現したような能力に」

舞風が持っていたのであろう、三つの力は。元はあいつのものではなく、誰かであった名残であつて。

では、それが一つになれば？　それほどの能力が、一つになれば、どうなるのだ？

「　　力を奪う程度の能力”を基盤に”譲渡と譲受を操る程度の能力”から拒否を”封を操る程度の能力”で封じてしまったのならば、どうなってしまうか。分かるかしら？」

それは、そう、記憶だけを消してしまう忘却妖怪よりも、ずっとずっと強大で恐ろしい能力になりかねるのではないだろうか？

「ありとあらゆるものを奪い、押し付ける程度の能力」。それが、あの子の封印された力。封印することを望んだ力」

ふと、思い出す。

『『最低最悪』の妖怪を見せなくなかった。ただ、それだけ』

舞風は、一度として、忘却妖怪が『最低最悪』だと、言ったのだろうか？

「考えなかった？ 妖怪は恐怖さえあればいくらでも蘇ることができる。でも、その妖怪が蘇ったと言う話を私が一度もしていないということ」

「……記憶を失って、形を失えば妖怪とて無事ではいられない、そうではないのですか？」

「そんなことない。妖怪は複雑に見えて単純。例え記憶を失ったとしてもその状態のまま復活を遂げる。でも、あの千の妖怪が再び蘇

り、私の前に姿を現したことは無い。どうしてもか、分かるかしら？」
鬼神はそう聞いた。いや、違う。言ったただけだ。俺たちがその答えに既に気付いている事を前提として、ただ、言っただけ。

それに気付いたのは、また自分が気付いてしまったから。自分が気付いて、博識な二人が気づけないはずが無いという当然の帰結から。

「ありとあらゆるものを奪い、押し付ける程度の能力」が、制御できなかつたんだな……」

妖怪たちは、蘇らないのではない。蘇れないのだ

とても悲しい現実として、舞風が、その存在か、もしくは重要な何かを、奪ってしまっただけなのではないだろうか？

認めたくないにしろ、それなら合う、忘却妖怪にも完全に消すことが出来ないはずなのに、それでも尚消えてしまった存在達。

恐らく、舞風も気付いていたのだ。だから、言わなかった。願わくばバレない様にと。願わくば、俺たちが知らずうちに禍々魔を消すことができるようにと。

それが叶わなくなつて、断念した。諦めて、晒したくない姿を晒す

ことになった。恐らく、こうなるだろうことに、初めから気付いていて。

あの、最後に背を向けたとき、舞風は、本当は泣いていたのではないだろうか？ 涙は流していなかったかもしれない。嗚咽は漏らさなかったのかもしれない。しかし、その後姿が、とても、とても悲しげに、今なら見える。

気付けば空を見上げていた。相も変わらず禍屢魔に目を向け、こちらに背を向け。初めて見たとき、背に感じた悪寒はもうなかった。いや、本当は在ったのかもしれない。しかし、感じる気にもなれなかったのか。

その後姿が、最早泣いているようにしか見えなくなっていた。小さな背中が被って見えた。

○ ○

「月下、狂笑」
ツ！？」

全方位に渡る衝撃の刃。その手に神風はないのだとしても。先程までの単調すぎる攻撃と変わり、世界を引き裂く。そして、禍屢魔の体をも。

「う、ふふふ。あは、あはは」

「……しっ」

狂った目は、消えない。大きく挟られた肩を手で抑え、それでも尚愉悦の笑みを浮かべていた。

別段不快は感じなくなっていた。いや、何処か虚無に近い、無感情のようなモノが浮き出ていることを他人後のように感じた。

その手の槍を、こちらに向ける。タルタロス。神話の神。もしくは奈落を意味する言葉。どちらを意識した名なのか。恐らく後者。いや、こいつが封印される頃は神話はまだそれほど知られていなかったから全く関係ない可能性もあるか。

対して、俺も手を掲げる。目下より飛来する剣。神風は俺の手に填まるかのように収まる。これは俺の半身のような物なのだから、何処にあるうとこの手に戻ってくる。

「……满身創痕だな」

「ふふ、そう見えますの？ だとしたら とんだ勘違いですよ！
！」

その槍が白と黒を無理矢理混ぜ合わせたよう妖力を纏い、渦巻いた。アレは、少しまずいかもしれない。アレは禍屢魔の本質そのものを槍に纏わせている。掠りでもしようものなら、記憶は全て喰らい尽くされることになるだろう。

「封刃ふうじん」

「タルタロス ソレイドッ」

「縛風ばくふうッ！！」

僅かなモーションで放られたそれは、しかし威力は凄まじく、障壁を次々とぶち抜いてくる。

心の中で舌を打ち、平行になるように切っ先を向けた。そこから放たれたものは、神速の風。

背の反星陣が一際大きな輝きを見せる。数瞬、均衡を保ったように見えたが、それは難なくその槍を弾き、禍屢魔の隙だらけな体へと突き刺さる。

「あ あっ」

「天滅てんけんの結界。施工」

風は、突き刺さりはしたものの貫かず、ただ禍屢魔の周囲を周期的に回転する。高速で。

それだけやって、やはり見る。狂った目で俺を見る。その、底にある感情は

「 やっぱり、か」

「 ふ、ふふ。何が、ですの?」

虚勢。ととられかねないその言葉。その顔。確かに。痛みを堪える分は虚勢と言えるのであろう。だが、絶えずその目に映るモノは

「 お前 死にたいんだろ?」

「 どうしたら、そんな言葉が出てくるんですの?」

その笑みは消えない。表情も目の狂気も、何も変わらない。

故に、一際目立った一瞬間の間。

思えば、おかしいのだ。どうしてこいつは希望の里に攻撃を仕掛けたりしてきたのか。

妖怪が妖怪を滅することに、際立ったメリットはない。縄張り争いか、鬼のように好戦的か。妖怪が妖怪を喰らうなんて普通なら考えられないことであるし、なににせよ、疑問が伴う。

忘却妖怪　それは、妖怪にすら忌避されかねない能力を持つ存在。全ての存在が持ちうる恐怖を喰らい、孤高の大妖怪ともなつて。

それを、寂しいと思うことがあつたのではないだろうか？

それを、辛いと思うことがあつたのではないだろうか？

それに、絶望することがあつたのではないだろうか？

「　お前は、狂気に汚染されているように見える」

「私自身が望んでそうだったので。貴方にどうこう言われる筋合いはないですの」

そう、その目には狂気しかないのだ。愉悦しかないのだ。恐怖がないのだ。底の底は隠れていて、欠片を見つけることすら出来ない。

まるで、死ぬことを欠片も恐れていないように。まるで、傷つけられることを求め　否。死んでしまうことを求めているかのような。

妖怪は、簡単には存在を殺せない。その世界から存在を消し去り、その恐れを忘れ去られたとき、本当の意味で死を迎える。では、忘却が、忘れることが、恐れられなくなることがあるだろうか？

恐らく、ない。忘却妖怪は死なない。死ねない。生きたくもない世界に存在し、ただ他から忌避される生など、誰が望むか。

だが、俺は妖怪と言う存在に欠かせない、形を奪うことが出来る。妖怪は形を失った瞬間、崩壊を起こす。存在そのものを非常に不安定にし、蘇ることすらも出来ずに。

「どうして戦う。どうして笑える。どうして、死を恐れない」

「生と死に意味などない。ただ今、こうして在ることが全てですの。さあ、聞きたい事は無いのです？ なら、さっさと再開しませんこと？」

その手に槍を呼び、強く握り締める。尚も周りを回り続ける風の境界にまるで見向きもせず。

こちらもまた、剣を握った。脳裏に過ぎったのは、希望の里を作る前。仲間達と夢を語り合った、その瞬間。

争わないでただ笑えるだけでいい。

優しい毎日を過ごしたい。

こんな自分でも存在が許されたい。

貴方と共にいたい。

ありとあらゆる妖怪が、苦しまずにいられる世界を、作り
たい。

「 禍屢魔ッ！！」
「 あ、これで 」

迷いを振り切るように。強く、強く握り締めた剣を、思い切り、振
り下ろした。

「？」

その目を開く。直後、その目は怒りに歪む。狂気をも含めた怒りを作り上げる。

「どうして殺さないッ!！」

先端が砕けた槍を手放し、その首に当てた神風を強く引いた。しかし、微動だにしない。それ以上刃が進めばその喉元を突き破るのが目に見えていた。

「……結局。お前はただの死にたがり、って訳か」

「ッ！それで結構ですよ！殺しなさい。殺してみなさいよ？ 憎いでしょう？ 殺したいでしょう？ 腸はらわたが煮えくり返るような想いでしょう？ だったら殺しなさい」

異常なまでに死を求めるその目に、恐れが浮かぶ。殺される恐怖ではない。言つなれば、殺ころされない恐怖とでも呼ぶべきものが。

「馬鹿馬鹿しい」

怒りは、あった。夢を壊され、絆を壊され、そして、千の友を失った。だが、さんだんと冷めていくような感覚を覚えた。癪なのだ。

ここで殺してしまえば、結局自分はいいつの思つままに踊る道化に過ぎなくなる。

それに、例えどれほど恨みたい存在であろうと、その存在に同情してしまふ。そんな能力を持ってしまったために忌避される。恐らく、地底の妖怪とて彼女ほど闇は深くあるまい。

「三度目だよ。一人でやってると。死にたければ、自分でどうにでもなるだろう?」

「それは 私は」

初めて苦痛とでも呼ぶべき感情が浮かぶ。

こいつは、己と言う存在を忘れさせることさえ出来れば自決など容易なはずなのである。

しかし、それでも尚希望の里を巻き込み、怒りを買ひ、果てに封印され、今こうして剣を突きつけられるだけで、殺せと渴望する。死ぬなら、迷惑をかけぬまま、逝つてしまえばいいであろうに。

それこそ誰にも気付かれぬままに

「嫌。一人で、誰にも知られぬまま……」

「

か細い、小さな声は。俺にその理由を知らせた。

自分を殺すには、自分と言う存在に能力を行使すること。つまり、自分を世界から忘れさせること。だが、それはあまりにも、心を持ってしまったものが実行するにはあまりにも……

そうだったのか。こいつは、ありとあらゆる存在に忘れられたまま、一人で消えていくのが怖かったのか。

孤独に生まれ、孤独に育ち。そして、孤独に死んでいくことが、なによりも怖かったのに過ぎなかったのか。

「バカか？」

「なん、ですって？」

俯いた顔は見えなかった。しかし、そう思えて仕方なかったのだ。

哀れだとは思う。同情だって出来る。だが、そこまで。

能力の制御が出来ぬまま、忘却を撒き散らし、そして誰にも気付かれぬまま世界を生きて、誰にも頼ることができず、知られれば忌避されて、近づこうとすれば逃げられる。とんだ生だったに違いない。

しかし いつか能力が制御できるようになるのかも知れない。その考えを捨て、自殺に走るようならそこまでの奴だろう。

「あなたにつ、あなたに、何が分かつ!? 私がどれだけの時間を苦しみ、何百何千何万死にたいと思つたかなんてっ、分かる訳が無い。嫌われ者の能力を持ちながら人に好まれるような私と貴方は違つッ!! あなたを知つたその時、私は初めて殺意を覚えましたわ。初めて誰かを手にかけていたいと思つた。いい様ですわ! 里の妖怪は殺し合い、死んでいき、歪むあなたの顔は爽快。歡喜するほどの喜び。向かつてくるあなたを叩き潰して殺したいとっ!!」

憤怒と悲哀と狂気を全部ごちゃませにしたような形相で咆哮する。

思いの丈を吐き出し、息を荒く、額に汗を滲ませた。結局、何処まで行つても妖怪。歪みを持っている存在なのだ。

しかし、それでも尚

「それでも、私は、あなたの力さえあれば、もうこんな想いはしなくて済むかもしれないと、幻想を、抱いて だからっ、だから私はっ!!」

それでも、やはり生きたいと思つてしまうのかも知れない。

いや、彼女は生きたいなんて高望みはしていない。せめて、せめて忘れないでほしいと、それだけの想いで。俺に縋ったのではないだろうか？

もしかしたら、希望の里の住民を皆殺しにする気など、なかったのかも知れない。ただ、俺の力を借りたくて、俺の能力遮断の結果を頼って、その為に、希望の里を訪れ、結果的にあなっつてしまったのではないだろうか？

その結果を知った上で、耐え切れない孤独を消したくて、消しきれない感情を狂気に落とし、それでも尚求めたのではないだろうか？

自分に非はない、と思っていた。そちらの都合で攻め込まれ、その犠牲は甚大で、この怒りは当然のものと認識していた。

他人事であることに変わりはない。しかし、まるで自分にも非があるかのような、そんな気がしてくるのだ。それも錯覚と消し去るには無視できないほどに。

「 やっぱり、バカだ 」

そして、言葉になったのはそんな一言。今更自分を否定できない。間違いだったと口には出来ない。だが、禍屢魔を否定することも、また出来なくなったのだ。

一人で孤独に、全ての存在から忘れられて死ぬ、なんて、俺には口に出せない。それがどれだけ恐ろしいことか知っているから、尚更。

「 来いよ。まだ終わっていないだろう? 」

故に、俺に出来ることは許すことでも、許されることでも、増してやトドメを刺してやることでもない。ただ、その想いの丈を全力で受けるだけ。

その意図を理解したか。否、していないだろう。その手には砕けた槍が握られ、白い手は血管が浮き上がるほどに強く握り締められる。

「 お前の絶望と、悲哀。希望と願い。怒りと狂気。全てまとめて、受け止めてやる。この大精霊がつ! 」

「 舞風ええええええええええええええええッ! 」

その身を封じていた風の結界が霧散する。驚くほど、容易く吹き飛ばされた。

しかし、無傷とはいかない、体のいたるところに風の刃によって裂傷を負い、それでも尚その顔は歪んでいた。狂気と、怒りと、しかし僅かな安心と。

槍を振るう。白と黒とが混じり合った、異端の槍。

「 オブリヴィオン ヴィブレーションッ! 」

その手を離れ、高速で周囲を回転。縦横無尽に飛び回る。否、槍は見えない。ただ風を切る音と感覚だけが存在するのみ。

不可視で、且つ高威力の魔槍。それだけではすまない。その手から生み出された妖力の輝きがその周回軌道に乗り、俺を囲う。逃げ場はなかった。

「
烈震天翔」

否、逃げる気など、毛頭無い。口にしてまで決めたのだ。受け止めるよ。

見えないからなんだ？ 強力だからなんだ？ 危険だからなんだ？

どれもこれも戦闘を回避するような理由になれど、約束を反故にする理由になどなりはしないはずだ。

「
神風三神、
舞踏連破」

神風を基点に、風が覆う。妖力を纏った大いなる風。それに僅かな神力と魔力をのせて。

こいつがありとあらゆるものを貫く槍となるならば、俺はありとあらゆるものを守る盾となる。

出来る出来ないなどでは無い。やるかやらないかが重要。いつだって、心は強く持てば、答えてくれるのが己だ。誰よりも自分を信じ、そして他を信じる。

間違いなどは、言わせない。それだけでは守れないものもあった。だからこそ、今はッ！！

「沈みなさい！！」

「開ッ！！」

禍屢魔の槍が収束し、結界に突き刺さった瞬間、身を守る風が爆散する。

急激にまで圧縮された風が凄まじいエネルギーをもって炸裂する。空を真っ白に染め、諸刃となって俺の体に裂傷を作り出す。しかし、禍屢魔の槍は爆発によって吹き飛ぶ。

それは、勢いを失わないまま、結界山の結界を突き破った。

「ッ！ 結界がッ！！」

その言葉を上げたのは現状最も敵に近かった禍屢魔であった。まるでガラスかなにかのように結界を割り、彼方へと飛んでいく槍を驚愕と焦りを含めた目で見た。

やはり、初めからこいつは他を巻き込むつもりなどなかったのだ。優しさでなく、臆病だから。

しかし、臆病だから優しくなれるのも確かなのである。こいつをここで、無にしてしまうには惜しい。そして、それだけで一人はい終わりといなくなってもらっても困るのだ。

「……陣の形成。妖力の合成。楔は剣。三本の剣は……蓮姫ッ!!」
「大丈夫。傍にいるわ」

いつ、そして何故の問答を交わす前に、蓮姫は事態を察知し、俺の傍に立つ。その手に二本の剣を持って。その二本を以って、結界山の封印はなされるのだから。

忘却の力が幻想郷に及ぶ前に結界山の結界を再構築する。元が存在する術式に直接干渉し、手探りで操作する。

封鎖大結界二号破損。事故修復は不可。

『大精霊』の妖力を確認。

楔、『神風』、『真撃』、『天破』の三振りを確認。

世界の境界線から力の吸引を開始。

結界の修復を開始……再生率80……89……96……100。

封鎖大結界二号再生完了。続いて禍屢魔の結界を修復。

エラー。エラー。再接続……修復かい……エラー。エラー。

禍屢魔の結界修復不可。現状にて固定。

新たな入力を感じ。登録名「禍屢魔の結界二号」。

接続。起動。演算開始。構築開始。

構築完了。以後、腕輪式限定結界「禍屢魔の結界二号」は境界線から力を用いて動作します。

「殺さないの？ そいつを」

「甘いと思うか？」

「……そうね。ここまでくると優しいとは言えないわ」

そう、眼下で息を荒くする禍屢魔を見下ろす。その瞳は冷たかった。

一応、自分でも分かっているのだ。これが優しさなんて綺麗なものでない事くらい。

だが、疎まれる力を持って、嫌われたのだとしても。

それが否定される理由にはならないはずだ。だって望んでそうなった訳じゃない。それを正しいと信じて、信じたくて、生きてきたはずなのだから。

そんな考えに、『僕』と『私』は救われたのだから。

だから、いいじゃないか。もう一度くらい、やり直す機会があったも。

「禍屢魔。お前は能力の制御ができない存在だ。俺にもお前の能力を無理矢理制御させる方法なんて一つも思いつかない。だから、お前がとれる選択はこれ一つ」

そうして、一つの首飾りを取り出す。先程構築した新しい封印結界。禍屢魔と言う世界に一人しか存在しない妖怪を弱体化させる結界。

「これをつければ、お前は急激に弱体化し、並みの妖怪ほどの力に落ちるだろう。だから、問う。お前は、これをつける覚悟があるか？」

返事は、なかった。気付けば荒い息は身を潜め、浮遊から静かに落下を始めようとしていた。

気を失ってしまったのだろう。仕方なくそれを抱きとめる。思った以上に、その体は軽かった。今の自分と比べてしまえば小さなものである。

答えがないとしても、同じく猶予も無いのだ。俺はその首飾りを小さな首にかけた。

「……後になって、恨むなよ」

そう、だんだんと小さくなっていく禍屢魔の妖力を感じながらため息をついた。

辺りの妖力も霧散していく。噎せ返りそうな妖力の霧の中で、ただ俺と蓮姫は立ち続けた。

○ ○

「では、どうあってもそれを殺すつもりはないの？」
「ああ。これが、俺なりの決着だからな」

そう、と八雲紫は目を静かに瞑った。どうしてそんなに簡単に納得できるのか。

舞風はその腕の中のそれを抱えたまま、苦笑いをした。自分の選択の厳しさを理解し、それでも尚彼女に納得してほしいと頼み込んだようなもの。禍屢魔と言う爆弾を幻想郷に抱え込む選択は、本来の彼女なら間違っても了承しなかっただろう。

「……でも、それは貴方に一任するわよ。文句は無いのでしょうか？」
「当たり前だ。掴んだ直後にポイなんて真似、そうそう出来ない」

それはその空気の中も小さな寝息を立てて眠りについていて、それを図太いとも思いつながら、最早それが恐怖の対象を外れたことを理解したためか、苦もなく舞風に近づくことが出来ていた。

「へりー」

「……どんな風の吹き回し、だなんて言わないぞ。それを言えるほどお前と俺は知った者じゃなかったみたいだし」

それにやはり苦笑いした。いつもと同じような顔なのに、いつもより低いはずの背は頭二つ分も大きく、口調とは裏腹に女性を象徴する胸部。頭の高さがそれくらいなので結局そこを見ているかのよう
な気になってしまう。

「今度はちゃんと話せよ。聞いてやるから」

過去を知ったとしても。裏を知ったのだとしても。

今更こいつを嫌いになれない。避けようとも思えない。だって、こいつは自分を偽ったりしていた訳ではない。過去があって、今がある。極めて当然の存在だ。

今更能力で嫌いになるなら、そもそもこうして出会い、共に山に暮らすような事になりはしなかったはずだ。

「そうね。舞風ちゃん。秘密については後でおしおきするとして、今はおかえりなさい」

「アキ……うん。ただいま」

穏やかな、まるで母のような温かさを感じる笑みで、彼女もまた舞風を迎える。

舞風に近づき、その腕の中の禍屢魔に目を向ける。悪戯気な笑みが零れた。

「ふふ。可愛い寝顔ね」

「……本人が聞いたら怒り出しそうな言葉だな。まともな会話もしてないから分からないけど」

「でも、貴方はこの子を生かした。それはこの子を殺さない方がいいと理解したからでしょう?」

そう、柔らかな笑みのまま紅い髪を撫でた。そしてまた悪戯気に笑う。

「それにしても、貴方。怒られても知らないわよ? その前に驚いちゃうでしょうけどね」

「……だよなあ。俺としてはこんなことするつもりはなかったんだけど」

そう言い、腕の中の少女を見下ろす。首から銀色のネックレスをかけた禍屢魔の体は三周りほど小さくなり、俺よりも小さくなってしまっている。

「弱体化の副作用かな。まあ。こっちの方が可愛げがある分いいさ」
「そうね。こんな子なら私も大歓迎ですもの」

そう、あどけない顔で眠る禍屢魔を二人で見下ろす。その様がまるで父親と母親にも見え、僅かに笑みが漏れた。

あの忘却妖怪、禍屢魔もこれでは形無しである。と心の中で呟いた。

「……楽しそうね。貴方達は」

「それが舞風のいいところでもあるのは貴女も知っているでしょう」

そう、呆れたようにこちらを睨む八雲紫と僅かな笑みを零しながらこちらを見る鬼神と。

それを言われてやはり舞風は笑うが、何処か悲しげでもあった。

雨は晴れていた。ずっと、ずっと、前に。

○ ○

こうして、幻想郷はまた一つの危機を乗り越えた。

事実を知る者によってそれらは『忘却異変』と呼ばれ、しかし当事者以外には誰にも知られることもなく、再び幻想郷は回り始める。

いつか、この事さえも、笑って話せるような日が、訪れるのだらう。

舞風と忘却の異変（後書き）

悪気はあった。勿論あった。

禍屢魔は忘却を撒き散らすことしか出来ず、己の存在を疎ましいとまで思っていた。

そんな彼女の力をどうにかするためには弱体化しかない。

つまり、よ　少女化。反論は受け付けよう。ぶっちゃけ大人の女性は一アキと蓮姫でゆかりんで足りてるんだ！　たまに誰がなに言ってるかわからなくなるし。

そう言う訳で、禍屢魔にはやや特徴的な、言うなればお嬢様的な？を意識して台詞を構築しました。頭のねじが数本飛んでましたが。

（ジャツジメントです（ry））

当然、この終わりが気に入らない肩もいらっしやるでしょう。しかし、救われると言う意味ではハッピーエンドが大好きな作者ですので、こうなるのです。鬱とか書けない。本当ダヨ？

さて、そろそろ誰かとコラボしてみたりするのもいいかもなあ……とか思う作者でした。

東方大精霊はまだまだ続くぞい。

幕間（前書き）

文字数が最近一萬文字をきるように（下回る意味で）なってきた。これは悪い傾向だ。早く何とかしないと。

とは言うものの、後期になって二倍に増えた実習＋レポート。べ、別に勉強時間削ってニコ動なんか見てまへん。

幕間

誰にも理解されず。誰にも知られず。

目を開いたその時、広がったのは泥沼のように穢れた世界だった。

己の足で立つことも俣ならず、ただ自らさえ理解できない赤子その物。

それでも、それでも立ち、歩く。世界に色はなかった。あつたように思ったが、なかった。

誰にも気付かれず。誰にも思われず。

拙い足取りで辿り着いた人間の集落は、その門を通る前に殺し合いが始まっていた。目前で起きている出来事の意味が理解できず、ただ煩いと、感覚で思った。

自分が何者か、未だ気付かない。

誰にも聞けず。誰にも言えず。

言葉を解すことは難しくなかった。人間の書物で独学で覚え、知識を得た。

しかし、言葉を交わす存在がいなかったのは、全くの誤算だったと言えるだろう。

誰にも撫でてもらえず。誰にも触れず。

人間には親というものがいる、と知った。自分には親はいない。だって生まれたその時から一人だったから。

もしも、自分にも親がいたとしたら、いろんなことを話したり、頭を撫でてもらったりできたのだろうか？

誰にも想われず。誰にも思われず。

気付けば一人が当たり前。当然だ。生まれたその時から一人だったのだから。それが当然。それが普通。

そのはずなのに、虚しく思うときがあった。

誰にも縋れず。誰にも届かず。

近づけば人は全てを忘れた。なにがなんだか分からないまま私と会

話し、途方にくれたままやがて狂気に走り、首に手を添えられた事は両手の二進ですら数え切れない。

その度にただひたすら、たんたんとその首を？ぐ。折る。砕く。会話は意味を成さないなら、殺すことしか出来ない。

誰にも笑えず。誰にも泣けず。

いつだって一人。どんな時だって一人。

生きる　意味はあったのだろうか？　生きる理由はあったのだろうか？

生きたいと、私は思ったのだろうか？

誰も知らず。誰も近付かず。

この世界が狂っていると、生まれて数千年。ようやく気付く。

狂っていなければ、私もまた狂わない。純粹過ぎる愛も、正義も、夢も希望も、それは歪み。狂い。

否　狂っているから、また私も狂うのだ。

誰にも　触れられぬまま　ただ、枯れてゆく。

永遠に咲く呪いの花。 枯れぬ事を知らない毒の花。

枯れたのは 心。 壊れ、狂うのも、また心。

誰にも覚えられず。 誰にも、手を握ってもらえず。

死ぬときは二人で死のう。

名も、声も、顔も、何も知らなくていい。

ただ、私の名を、声を、顔を、そして存在を忘れず、ただ手を握って私を送ってくれるなら それでいい。

意識が覚醒する。見えたのは夕日のように赤ずんだ小屋の天井。木造であるそれは火の明かりに照らされ、陽炎のように揺らめいていた。

何処だろう。そう考える前に途方も無いほど心が空虚になっていることに気付いた。大部分を占めていた何かを失ってしまったかのような、そこにあつた大切な何かは自分でも分からなかった。

半ばぼやけていた頭は完全に覚醒し、辺りの気配を探ることに全力を注いでいた。いる。すぐ近く。すぐそこに。

「おっ。起きたみたいだな」

天井だけが映っていたはずの視界の中にひょっこりと一つの顔が映る。子供。それも忘れられないような顔。

その顔はどうにも感情が見えなかった。とは言っても無表情と言うわけではない。長年生きて、その類の表情を見たことがなかっただけである。

「……嫌な夢。閻魔様は私がお嫌いの方ですよ」

「夢じゃねーし。って言うかそもそもお前が綺麗な花畑のような夢を見れると思ったのか？ だとしたら閻魔もビックリだよ」

「そんなことないですわ。私、こう見えて命には気を使っています」

の。人と妖怪以外」

「……いやダメだろ。少し納得しかけたけどダメだろ」

皮肉の受け答えもいつも通りに。あの変身は解けたのか。角も無い。その背の翼も無い。

ああ、私、負けたんですの。

そう、頭は理解した。初め戦いを挑んだときはさて置き、二度目
今回の戦いは勝てるとは思っていなかった。それでも、挑んだの
は私が私であることを嫌うから。

「それで、私の処遇はどうなりましたの？」

そう、尋ねる。我ながらなんと冷たい声で、笑う。

まあ、まず命の損失は免れないだろう。私はそれだけの事をしたの
だ。自覚くらいある。

命を奪うことが罪なら、世界の全ては罪を背負う。それが世界の歪
み。責のない生命など存在しない。人間然り、妖怪然り。

でも、私は意味も理由もなく、千の妖怪を意図的に殺した。追いや
った、と言うのが正しいのか。結局自分がしたことに変わりはない。

そして、そんな存在を生かしておく理由など、ない。

「 そうだな。一応希望はあるかい？」

「 そうですわね。ここは貴方の胸の中で死にたい、とでも言う場面
ですか？」

「 ナンセンスだよ。お前はいつの時代の乙女だ。……あれ？ いつ
の時代だっけ？」

「 ふふ。なら そうですわね。手を、握っていただけますの？」

そう、差し出す。見えぬところでその手に熱が灯った。

嗚呼　これが温もりか。これが温かいと言うことなのか。

長年見つからなかった答えがようやく見つかった気がした。いや、
正確には人肌の温度が分かったただけだ。しかし、なぜか……嬉しい
と思うのだ。

「
」

悔いなど初めから無い。未練の置き忘れもない。

だから、もういい。死んでしまってもいい。いなくなってしまうて
もいい。

間違はなく、自分は舞風にとって忘れられない存在となったのだから。
だから寂しくない。

私の心は冷たくない……

「　　バーカ」

「……………」

雰囲気もなにもない。全てぶち壊しである。

ただ、それを期待することも馬鹿らしいことであつたと再確認し、私はその手を払う。重い頭を抱えた。

と、どうにもその手には違和感を感じた。はてそれは？ と疑問を抱かれてもおかしく無いであろう事なのだが、何か変なのである。なんとというか、真新しいものを得て間もないようなものを見るような感覚を覚える。

そして、両手を視線の高さに持つてくる。やはり、違和感がある。既視感は勿論あるのに、まるで自分n物で無いような違和感

悪寒。重い体を瞬時に持ち上げる。毛布によって隠されていた体から素肌が除く。

「なっ、なっ、なっ　　っ！！」

ぶにぶにとした小さな手。

虚しくも短い足。

首程度までに短くなった髪。

そして

「胸が縮んでますのー！ー！っ！！！？」

「ってそっちかよー！っ！！」

小さい？ 否、真っ平らな胸部が、私にこんにちはを告げた。

「ど、どろしてこんなこと……」

容姿は、自分の数少ない自信の元であった。他には強さ。それくらい。

努力をした、という訳ではない。しかし、アレはアレで気に入っていたと言つのに、目覚めていればこんなことになっているなんて……

「も、もう、お嫁に行けないのです……」

「元々行く予定なんて無いだろ」

「シャラップおちび！！ 私の許可なくこんなことをしでかしてくれて、覚悟は出来てるんですの!？」

「はっ。今じゃおちびはお前だおまえ。ざまあみる」

「キーーーーーッ！！ 何処の悪ガキですの貴方は!！」

よくよく体を探ってみれば、妖力も格段に小さくなってしまっている。大妖怪もこれでは形無し。いや、もう大妖怪と認識されることも無いだろう。

そうか。先程の虚無感はこれだったのか。道理で胸がすつとすると思った。

「……はあ。負けた結果がこれでは救われませんわ。本当に」

「まあまあ、小さい体つてのも存外悪くないぜ。身動きは楽だしな」

「機能性なんて二の次ですわ。美しく無い私って一体なんですか」

「そうだな。今度からかるちゃんって呼んでやるよ」

「その舌引き抜きますわよ」

「やれるもんならやってみる」

ほあちゃーと見た目だけ臨戦態勢に入る。どう見てもヤル気の欠片が見て取れないその姿に嘆息し、目を下に落とした。

本当に、忘却妖怪たる私が、本当にちっぽけになつたものだ。

今身に存在する妖力はそこにいる舞風と差ほど代わりは無い。舞風の元々だつて並の妖怪に毛が生えた程度の妖力しかないのだから私も随分弱い類に入るだろう。

「……………どうして、生かすんですの？」

そして、この体になつた元凶が、この胸で光り続ける小さな宝石細工だと言う事は考える間もなく分かつた。”封を操る程度の能力”によつて生み出された、言わば特注品。用途が力を封じるため、と言つのは癪であるが、自分が元々このような施しを受けられるような立場でないようなことくらい理解している。

「……………だつてお前、死にたがりだろ。だつたら生かした方が罰になるじゃないか」

「それだけ、な訳ないでしょう？」

「さてね、ひとまずはそれだけさ。そういうことだから、その体で頑張つて生きていくんだな」

分かっている。その言葉がそれだけではないことくらい。

『生かす』だけなら、どうにもできる。舞風なら。

妖力を全て奪い、抵抗する力全てを奪い、身動きできないようにして、それで何処か密室に閉じ込めても、私は生きながらえる。この世から忘却への恐れが消えない限り。

だが、それをせず、こうして妖力を奪う”だけ”。これが施しでなければなんだと言うのか。

「生きる　本当に今更ですの」

「生きるに今更もないだろうよ。なににせよ、お前は死なない。もう自分の力では死ね無い。忘却の力も大層弱まったからな」

「本当に。これではほんの一時記憶を消す事が精一杯ですの」

「”忘却を操る程度の能力”改め、”ど忘れを誘発する程度の能力”ってところか」

”ど忘れを誘発する程度の能力”か……まさに程度と言っ言葉が似合う能力だ。

だが、そのおかげで、私は制御を諦めた能力を手放すことになったのだ。

これで私は　もう、何者も傷つけずに済むのだろう。

道を歩けば殺し合い、皆殺しを引き起こすようなことに、もうなつたりはしないのだろう。

「ま、不本意ではあるが、お前は今日からこの山の一員だ。幻想郷は全てを受け入れる。災厄だろう。暴君だろうと。それが牙を剥かない限り」

「あら。私が牙を向かない保障はないですよ？」

「その時は紫にきつついお灸をすえてもらえばいいんだ。そこまで面倒見きれるか」

ふんっ、とそっぽを向いて鼻を鳴らす。

その様は先程から友を殺した相手に向けるものでも、殺し合いをしていた者に向けるような態度ではない。

そうと分かって、その中毒的なまでの光に私は沈むことを選択する。

反抗する選択肢もあった。しかし、それをしようと思えなかった。怒りはなかった。諦めが希望に変わっただけ。生きる理由とか、生きた意味とか、そんなのはやはり分からぬが。

ただ、思うのだ。

生きること理由なんてない。生きること意味なんてない。

その理由を、その意味を探すために生きるのだ。

それが理由と意味。なんとなく、遠目に見た過去の私の問いへの答え。

これから探せばいい。私は、昔ほど強くない。

「 私はアキ。この山に住む者の一人ですわ」

「 同じくベリーウエル・ガラインだ」

「 禍屢魔、ですの。最も、今となってはその名も形無しに聞こえてしまうでしょうが」

そう、名乗った二人の妖怪に返す。どちらも何処か似た風貌をしてはいたが、大小で判断が出来そうな存在。

強い方がアキで、それほどでもないのがベリーウエル。印象はそう定まる。どちらも全盛期の自分だったら勝てそうではある。最も、アキと言う方はやや面倒そうではあるが。

そんな事を考えていると、ふと唐突にアキが頭の上にポン、と手を置いた。腕の高さは胸辺り。まるでちょうどよい場所に在るとも言いたげにニッコリと笑う。

「ふふ。これからよろしくね。禍屢魔ちゃん」

「……生憎。私は禍屢魔”ちゃん”などと呼ばれるほど生は短く無いですの」

「そうは言われても、その姿じゃ嫌でもそう呼んでしまっわ」

さいですか。

と、私は心にどんよりと曇りが見えた気がした。勿論文句はあるが、今更そんなことで怒るほど子供ではないのだ。と言うか、この女ちゃっかり自分より長生きだったりしないだろうか。人徳とかそんなものが見え隠れしているんだが。

結局、それ以上反論することもなく、されるがままになっているとやがてベリーウエルとか言う娘が自分の顔を見ていることに気付く。まるで観察するかのようにはこちらを見ている。それは自分にしてもやはりいい物ではない。何か言おうかと口を開こうと思った瞬間、その視線がやや下にいく。

「……うん。よかった。俺より小さい」

「おいちよっとコラそれなんのことがキリキリ吐きやがれですの」

普段自分が纏っている物はどちらかと言えばぴっちりと体のラインが浮き出るものである。前はそれで体の線が強調されていたが、今となってはただただ虚しいだけ。

そう、手も足も、胸も、小さい。小さいのである。

それに詰め寄り、襟を掴んで持ち上げる。弱つても妖怪。小娘一人を持ち上げるくらい朝飯前だ。

「おいちよつと舞風！？このお方強暴だぞ！？」

「オラ知らん。オラ女じゃないから知らん」

「お前だつて半分女みたいなもの　まつ、ちよ。く、首が……しまつ……qw hぐじょk f t g」

「……おい、死ぬぞ」

「知ったこつちありませんわ。胸が小さいくらいでなんですの。優れてるでも言い張るつもりですの？」

「言ってることとやってることが真逆だろ。気にしてないなら放してやれよ」

勿論、気にはしていない。ただ、ちよつとイラツと来ただけである。数刻前までは大人の体であったというのに、今となってはこの小娘にすらあんなことを言われる自分に。

「そもそも。元凶はあなたですの。どう責任とつてくれるんですの？」

「後悔も反省もしていない。これは幻想郷を守る当然の措置である」「貴方こそ言ってることと顔が真逆ですの。なんですの。そのにや

け面は」

腹立たしいほどの笑み。否、悪戯気な笑み。

怒りをそそられる事に今回は耐えながらも掴んでいた襟を離し、アキとやらに渡す。あらあらと嬉しそうにそれを受け取り、ぎゅっと抱きしめた。子供好きなのか。その様は遠い昔に見た人間の母子に姿を連想させる。

「……それで、まさかこれで全員ですの？」

「山に住んでるのは俺達だけだな。特別親しいのはこの管理者の八雲紫と鬼神の八斗蓮姫」

「前者はともかく、後者は知っていますわ。貴方とセットで有名でしたもの」

『八斗蓮姫』。それは畏怖の代名詞。遙か長い時を生き、最強の力を持った鬼と謳われていた存在。その一撃は大地を砕き、天地を割る、天蓋のものと言つ話。どこまでが真なのかは知らないが。

それに、鬼神という名については初めて聞いた。

恐らく、先程舞風の隣に立ち、結界の修復を手伝っていた者。

「……そう言えば、どうしてその鬼神は、私の妖気に晒されても大丈夫でしたの？」

「蓮姫の妖気もまた膨大だからな。大抵の能力は受け付けないんだ

よ。お前のせいで、妖力だけが勝負を分ける訳でもないってことも知ったし、それに……あいつも能力を持ってるからな」

「そう、ですの。鬼神ともあるうものなら大層強力な能力をお持ちでしょうね」

世辞でもなく。心からそう思った。元来鬼とは強力な種族。強固な肉体。順応性。莫大な妖力。鬼とはまた、一種の恐怖の象徴。であるからこそ、その能力は強力なものなり得る。

「まあ、そうでもあるけど……それほどでもないんじゃないかな」

「？ 歯切れが悪いですね。言えませんの？」

「いや、言わないからどうって事もないな」

そう言うと指を三本、こちらに見せるように立てた。

それに首をかしげながらも、次の言葉を待つ。

「第一に、” 忘れない程度の能力” 。

第二に、” 老いない程度の能力” 。

そして、第三に” 成長が止まらない程度の能力” 。

蓮姫はこの三つを身につけている」

「み、三つ、ですの？」

戦慄。鬼神と謳われるほどの力を持ちながらも、それでも尚天蓋の能力。特に一つ目と三つ目。なんだこれは。一つ目だけで自分の能

力はほぼ無効化されてしまっし、ただでさえ恐ろしいのに成長が止まらないなんてとんだ冗談。

二つ目だつて、殺されたり病にかからない限りは死なないという事ではないか。そんな存在が、許されていいというのだろうか？

「……言葉にしないで蓮姫の凄さ。というより恐ろしさ、は分かっただな。本人もそれが分かっているから自分から戦闘に介入することは少ない。なんせ、幻想郷、ひいてはこの星上で、最強の存在は間違いなく蓮姫だからな。生半可な攻撃じゃ傷つけることも俚なら無いし、一撃あれば大妖ですら砕く。天蓋の存在って言うのはああいうのを言うんだらうよ」

とんでもない存在と言うことは、とりあえず分かった。

しかし、老いないのに成長が止まらないというのは、如何な物なのか。

「へえ……確かに、それはとんでもない力をお持ちなのね。鬼神様は」

そう、頭を抱えた小娘を支えるようにして立っていたアキが言った。

小娘のほうはまだ回復しないのか頭をぐらぐらと揺らしている。

「ま、蓮姫が生き残ってこれたのは元々の力量だな。能力は後付だし、蓮姫がいたからこそ、俺もこうして生きてる訳だし」
「殺しても死ななそうなくせによくもぬけぬけと、ですよ」
「羨ましいわね」。私は特筆するほど特別な能力を持っている訳でも無いし」
「そうなんですの？」

眼前のこの女妖怪の力量は大したものであるし、能力の一つでもあってもおかしくないと思ったのだが……

「ええ、”魔術を扱う程度の能力”、だもの」
「正確には、”妖力と魔力を扱う程度の能力”、だろ？」
「あら、こつちのほうがかッコいいと思わない？」

それもそれで、今の私に比べれば随分強いだろう。今の私にあるのは戦闘の記憶だけ。力押しであろうと押し込まれる。一泡吹かせるのが精一杯だろう。

それでは、と今度は頭を抱える小娘に目を向ける。まるで師弟にも見えなくは無いが、小娘からは妖気を感じない。正確には妖気とも霊気とも違う。魔力だけを感じる。

「その小娘の能力は？」
「……」魔法を扱う程度の能力”だよ。生憎、未だ精進の身だ」
「はっ」
「鼻で笑いやがった!!」

ムキーン、と地団太を踏むその姿はまるで猿である。

しかし、並みの人間に比べれば優れているのは確かなのだろう。最も、魔法と言う物に何処まで出来たものか、把握できないが。

「まあそう言うなよ。」ど忘れを誘発する程度の能力”さん」

「能力を名前みたいに呼ばないでほしいですの！！ まったく、いいんですのよ私は。封印さえ解ければ元に戻るんですの」

「ま、解く気はそうそう無いけどな」

「シット！ どうして私はこんな奴に負けたんですの」

今となつては非常に後悔できる。恐らく未来永劫変わらないだろう。小娘のにやけ顔もアキのほっこりとした顔も何処か腹が立つ。

露骨に口元を押さえやがって。後で絶対しばくですの。

「ま、まあ、頑張れ。ど忘れ妖怪。くひひ」

「……いつか絶対その記憶を消して見せますの」

ど忘れを操ることが出来ない今ではは実行したところで思い出されるだけだろう。

それで、思い出されればそれを元にまた馬鹿にされるだけであろうし、今は黙って身を焦がすしかない。

「……そう言えば、先程言っていた八雲紫やらと鬼神はどこですか？」
「ん？ ああ、あの二人は」

○
○

今は霧散し、何者にも影響を及ぼさないほど薄まっている。

「……いえ、違うわね。本当は怖いものよ」

「怖い？ 一体何が？」

虚ろな目は恐怖を帯びる。その体に似合わぬ感情を灯らせる。その腕が、自らの体を抱きしめる。

「あの子にとって、千の友はその程度でしかなかったのかと思って仕方ない。いつか、私が逝ってしまうその時に、あの子が私の死を、割り切ってしまうかもしれないことが怖いものよ」

「……貴女は」

鬼神は、舞風がいてこそ成り立つ。それが恐らく、本人にとっての誇りであり、そして願い。

では、その逆はどうなのか？ 舞風は、鬼神がいなくては存在できないと言えるだろうか？

それはそう、己の思いが一方通行かもしれないと言う事に対する恐怖。

「……全く。思春期の女の子じゃあるまいし。逆に問うけど、だからといって貴女は舞風を嫌いになれるのかしら？」

「そんな訳無いでしょう。あの子は今の私の全て。あの子がいて、

私の世界はようやく成り立つのよ」

「なら、それでいいでしょう。覚り妖怪でもなければ舞風の心情など分かりはしないし、考えても仕方の無いことじゃない。貴女は貴女の想う舞風の為に命をかければそれでいいじゃない」

ただ、少し妄信的過ぎる気もするが……

そう、心の中で言う。だが、少しくらい心酔している方が、妖怪としてはちょうどいいのかもしれない。

その話はそこで切れる。そして、当初の目的について、まとめる。

「……被害は妖怪の山全域。それに人里の一部のようね。普通に見れば甚大な被害だけれど」

忘却妖怪の力はそこまで及んでいた。まるで汚染するかのようにその力は遠く広がり、妖怪の山を飲み込む。人里のほうは間に合わないものこそあれど、被害は少なかった。

本来であれば、そう、とんでもない被害。幻想郷の中でも極めて大きい組織の一つが直撃を喰らったのだ。本来ならば、見逃せない事態。

だが、今回は大した被害は起きなかった。確かに妖怪の山と人里に忘却妖怪の力は及んだ。

しかし、全てを忘れるようなことにはならなかったのだ。

「……不幸中の幸い。いいえ、私にしてみればただ幸いでしか無いわ。形だけ言えば何の被害もなかったのだから」

「ええ、本来なら奇跡と喜ぶべき幸運。でも、あの子には言い辛いわね」

そう、妖怪の山を見る。視界の端で先程事情を聞いた烏天狗の姿が見えた。名は確か、射名丸とでも言ったか。

全てを忘れ、殺し合いになるような最悪な事態を避けることは出来た。

しかし、被害を被った者達に、唯一共通した事柄が存在した。

「まさか、舞風の存在を忘れてしまっているだなんてね」

この幻想郷に、結界山を残し、舞風を知るものはいなくなったとも言えるだろう。

忘却の異変は誰に知られることもなく、また異変の当事者も、解決

した主すらも分からぬまま、終わりを告げることになった。

幕間（後書き）

今回は忘却異変終了直後の出来事でした。

幼女化した禍屢魔は体にコンプレックスを抱くようになりました。でもなあ……これ以上！！大人の女性キャラはいいんだよッ！！

ベリーも流石に女に染まってきた今日この頃。しかし一人称は俺。いいじゃない。

妖怪の山の方々の頭から舞風が忘却の彼方。人里にはそれほど親しい人物はいない。山にもそんないないか。

さて、目測では人里、妖怪の山にしか被害が行ってないらしいですが、他の場所はどうなのか。はてさて。

参考ばかりに登場オリキャラの能力を表示してみる。

舞風（通常）

”封を操る程度の能力”

舞風（烏天狗）

”封を操る程度の能力”

”譲渡と譲受を操る程度の能力”

舞風（鬼）

”封を操る程度の能力”

”力を奪う程度の能力”

舞風（EX（仮称））

”ありとあらゆるものを奪い、押し付ける程度の能力”

”??????程度の能力”

八斗蓮姫

”忘れない程度の能力”

”老いない程度の能力”

”成長が止まらない程度の能力”

ベリーウエル・ガラーン

”魔法を扱う程度の能力”

アキ（????）

”魔術を扱う程度の能力”（魔力と妖力を操る程度の能力）

禍屢魔

”忘却を操る程度の能力”

”ど忘れを誘発する程度の能力”

プチ設定集

・タルタロス

禍屢魔の槍の名前ですね。最初は忘却に関する神話が無いかと検索し、見つけたのは忘却の椅子、と言うものでした。

そして、この忘却の椅子があると言われてるのが奈落、すなわちタルタロスな訳です。ぶつちやけwiki知識。間違いだったらご

めんなさい。

とりあえずは一覧ですね。今話と前話でたものですし、まあまとめて見れるように、ということ。

ただ、普通一つの魂が複数の能力をありえない、と言っのが本作品の持論であります。じゃあなんで蓮姫三つあんだ、と言っことに關しては悩めとしか言えない。

次回からはまたにぎやかかわいわいとやりたい……な？

舞風と天狗（前書き）

一日と二時間近い遅れ。頭が痛い……

次回は頑張って金曜の投稿を目差します故。恐らく皆こっして更新が停滞したりするのもなと密かに思ったり。

舞風と天狗

眩い光が目を差した。

「 晴れ、か」

一言漏らす。 結界山の天辺に聳える大樹の更に天辺に座り、空を見上げていた。

妖怪の山の標高には届かぬものの、それでも幻想郷の大部分を見下ろすことができる。この景色を見るのが好きだった。

「 ……少しだけ伸びてるな」

それはほんの微量の差。しかしたった一日ながら確かな成長。剣と己と、この大樹を楔とした結界の一つが解除され、負担が減ったためであろう。最も、そのうちこの成長も止まってしまうだろうが。

一年は365日。そして、自分が生きた時代まで後400年程度。先はまだまだ長い。

だが、気が遠くなるほどではない。気が遠くなるような日々は、今

まで歩んできたのだ。

遠い、遠い、あの青い空に薄く月が光っていた。

「行ってみるか」

……妖怪の山に。

「それで、どうして私まで駆り出されなきゃならないんですの？」

「そう言うなよ。お前、山に閉じこもってたじゃん。たまには外に出るくらいがちょうどいいのさ」

「私は好きでそこに留まっているんですの。それに昨日の今日ですの」

ぶつくさと、禍屢魔の文句を後ろに捉えながら山へ向かって飛んでいた。勿論、背には反星陣が浮かんでおり、俺の飛行をサポートし

ている。

しかし、如何にも気だるげそうに腕をだらんと放り投げたまま後を着いてくる。じっとりとした目は恨みがましそうに睨んでいたが、やがて諦めたようにため息をつく。

「……それで、山に行つて誰に会うというんですの？」

「いや、別に特定の誰を探してる訳じゃないけど、一回くらい顔出した方がいいかなあって」

「だったら一人で来ればよかったですの」

「一人は寂しいの」

「死んで」

「即答かい」

こいつは専ら口から毒を撒き散らすばかりである。しかも、俺の家の空いた部屋を使っているのだから、それを今後毎日聞かねばならないのも中々耐え難い。でも少し慣れてきた。ちよつと気持ちよくなんかなつたりしていいない。

先に言つたように、禍屢魔は基本山から出る気が無い。

「 気配が少ないな」

「……と言うより、天辺の方に集結しているようですの」

「ふむ。辺りにチラホラといるのは哨戒天狗かな」

いつもなら烏天狗も飛び回る妖怪の山。だが見えるのは緑一色と、

あつて鳥くらいか。

邪魔があつた方がおもしろ……印象に残りやすいとは思うのだが、
そうなる今回は初めのような期待できないかもしれない。そもそ
もあの時は伊吹の奴が余計なことを言ったから

「 ああ。なんかだんだん腹が立ってきたな」

「 帰りますの？」

「 いや帰らないけど。てかお前はなんで行きたがらないんだよ」

「 私、無益な殺生は嫌いですの」

「 お前は一体何を殺す気だよ。っていうかどうしてそうなったんだ
よ」

俺は只、挨拶に来ただけであるというのに。そう肩を竦めて、妖怪
の山の中腹辺りに足をつける。

変わらない、と言つのは良い事なのか悪い事なのか。この場合は前
者なのだろうな。

道はない。獣道すら見当たらない。まあ、元々当てが在った訳でも
ないのだし、気儘に登山をさせてもらつとしよう。

「 ……どうして歩くんですの？」

「 自然を見ながら歩く」

「 どうしてそんなことを……」

「 登山の醍醐味だろ？」

「 帰って良いのですの？」

「ダメ。帰ったら今晚の夕食は山菜尽くし」
「……はあ」

禍屢魔は肉食系女子である。

「止まれ」
「ん？」

その声が聞こえたのは自分が見ているよりやや上に修正した場所。山の中、随分と茂った自然。またその中に立つ一本の木の幹。そこにいた二つの影。

白い毛並みを思わせる柔らかそうな白い髪。そこからひょっこりはみ出た獣の耳。もふもふとさわり心地のよさそうな尻尾。妖怪の山

の、主に哨戒を担当している者。白狼天狗である。

「おお、やっと来たか。今の今まで一つも歓迎無しだから気付いて無いかと思っただぜ」

「……ここは貴様達の様な下等な妖怪の立ち入ってよい場所では無い。速やかに立ち去るがいい」

その手の剣の切っ先をこちらに向け、威圧する。その身に纏う物は一層白を強調するように、白装束を着込み、剣とは反対の手にはシンプルな丸い盾。

毎度ながら、白狼天狗の言動が上からなのはあまり好ましくないことである。力の差云々を語るつもりは無いが、万が一相手が重要な人物だったりしたらどうするのか。まあ、それより侵入者であると決定付けた方が警戒としては意味があるのか。

「せ、先輩。お、お待ちを……」

「遅い！ 椀もみじ。貴様それでも天狗かッ！！」

その白狼天狗の背後から現れた少女。これまたひ弱そうな白狼天狗いや、未だ若いと言うべきか。偉そうで大人なほうはまだしも、これではまともに戦うことも出来まい。

椀と呼ばれた白狼天狗は先輩天狗からの怒鳴り声にひっ、と肩を震わせる。その後、主の気持ちを表すかのようにしゅんと垂れる尻尾。狼と言うより子犬の域である。それを見た禍屢魔の頬が紅潮する。

「……可愛いですわね。舞風、あの子を山で飼いませんの？」

「そうだねえ……まあ可愛いと言うことには同意するとしても、面倒を見る気にはなれないかな。ペットなんて、数千年飼ってないぜ」

「あら、何か飼ってましたの？」

「兎を一羽。運気が上がるかと思って癒し系ラッキーアイテムにした」

「兎ですよ。それはさぞおいしかったですの」

「食ってねーよ阿呆。ああ、なんで逃げたんだろう。うさたん一号」

懐かしい記憶。森の中の一匹はぐれていた兎を連れ帰り、夜は抱きしめて眠った。首から『うさたん一号』と板をかけておいたから間違われるはずは無いんだけどなあ。

閑話休題。

木の幹の上に立つ、白狼天狗の先輩とやらと後輩の椀とやらはこちらを見下した。後者の場合はどちらかという見下ろすが正解か
まま、こちらの反応を待っていた。

このまま睨みあいをして時間を食うのはこちらとしても勘弁願いたいところである。しかし、意味もなく哨戒天狗とぶつかるような事も避けたい。（昔のは例外である）

「……さて、どうしたら通してくれるんだろう」

「通す気など、ない。得体の知れない妖怪をこの山に入れなことが私達の使命だ」

「あー、ほら、あれよ。俺、あつちの山に住んでる妖怪」

「それを証明する手立ては？ また、だからとってこの山に入る理由になるか？」

「あー、そつか」

「何やってるんですの。舞風」

うるせいやい、と禍屢魔を睨む。本来なら禍屢魔の能力で妖怪の山の奴らの記憶がどぼんしたりしなかつたらこんなことにはなっていなかつたのだ。

しかし、中々白狼天狗もしつこい。”見かけ上の”力が自分より下の妖怪にさえこんなに冷たく当たるなんて。もう少し年寄りを労わってくれないものか。全く、最近の若者は……と、愚痴になってしまった。

仕方なく、案でも聞こうと禍屢魔に振り向く いない。一体いつの間に消えたのか。その姿はまるで元々なかつたかのように消え失せていた。

「わひゃあっ!!」

そして聞こえてきたのは少女の悲鳴。そちらへ向き直つてみると、なんと言うことか禍屢魔がその少女の尻尾に抱きついていて。なにやら気持ちよさ気である。

「ふふ。暖かくて、もふもふしてて、柔らかい……寒いときに最もほしい物ですわ」

「せ、せせせ先輩！！ た、たしゆけてください〜」

「くっ、いつの間に。その手を離せ妖怪！！」

そう、その手の剣を向ける頃にはそこから姿は失せていた。”ど忘れを誘発する程度の能力”。その記憶から一定時間自分を消すことができる。ある意味こいしの能力の弱体化、つぼくも感じることもできる。

ただ、その動きはたまに俺も察知できない。それは本人の経験的なものである。

「うん。いい子いい子ですの。怖がらなくてもいいんですの」

「ひっ！ せんぱい」

「何やってるんだよ……」

気付かぬうちに白狼天狗の少女を抱いたまますぐそばまで戻ってきた。確かに、妖怪を見た目だけで判断するのは愚の骨頂であるが、抱きつくわ。やりたい放題である。

どうして禍屢魔相手にここまで怯えているのかや不思議にも思える。確かに、妖怪を見た目だけで判断するのは愚の骨頂であるが、

「ま、いいか。俺も俺も〜」

「ダメですの。この子は私のですの」

「わわわ私は貴方の物では ひいつ！」

「そんな事言っちゃダメですの」

そんな様を見ながら、頭上に振り下ろされた剣を手で受け止める。素手では間違いなく無理なので薄い結界を掌だけに展開している。

その事に目を剥きながらも力を込め、切りかかってきた無茶な体勢から再び間合いを取る。いきなり攻撃してくるところもまた相変わらずである。

「 っち」

「俺はまだなんもしてないでしょーが。狙うならこっちだろこっち
！」

「はっ！！」

そんな言葉には耳も傾けず斬りかかって来る。並みの白狼天狗より出来るようだが、純正の剣士とは比べるまでも無い。見切ることもなく、反射だけでその剣をかわしていく。

最後、もっとも大振りの一撃を手で止め。剣を握り締める。

「ふふん。どうだ。参った」

「せいっ！！」

「どうふっ！」

油断してきたところを腹に正拳突き　ではない。獣の爪が腹部を抉っていた。普通の生物なら死んでいるところである。

どうだと言わんばかりに犬歯を覗かせるその顔を、またにやりと笑って見返す。その笑みが凍った。

「舞風さんの肉体は　完全無敵iiiiiii!!」

致命的なダメージを受けたことで体が二段階に移行。腕輪の封印が解放され、砕け散る。

背に、漆黒の翼が生え、頭に小さなノイズが走る。

「　ふっふっふっ。この姿の私は甘くは無いぜ!!」

……ん？　違和感が……何かがおかしい。

普通の”私”はこんな言葉を使わない……はずだが……

封印解除の弊害がこんなところで出てしまったのだろうか。

「か、烏天狗……ッ!？」

「そういうこと。それで、私達を通す？ それとも通さない？ いくら気の長い私でもそこまでは待てないぜ」

この妖怪の山において烏天狗と白狼天狗は書くとおりの上司と部下の関係に当たる。同じ天狗の名を持つにしても実力にどうしても差があり、組織の中で末端に所属するのがほとんどだ。極稀に哨戒だけでなく、烏天狗付きの白狼天狗もいると聞いた覚えがある。

故に、今の私の姿を見て、白狼天狗がうるたえない訳がないのである。

「貴女が、この山の物ではないのなら、通せない」

「……真面目と言うか、なんというか。実力は先ほどのやり取りだけで分かったんじゃないの？」

「貴女が力を抑え、なおかつ油断していた時に一撃をいれたことから、把握している。しかし、退く事は許されない」

「組織の一員として、か……」

力の差を理解した上でその刃を向け続けるというのは、どんな気持ちか。遠い昔にあった気がするが、その時の気持ちなど忘れてしまった。

だが、きっとそれは今の俺には想像もつかないことであるに違いな

い。

「そうか……でもそうなるとな」

個人的には真面目に仕事をしているだけの白狼天狗に剣を向けるようなことは好きではない。不可抗力やらの言葉があるにしても、極力戦うことは避けたいのだ。

そうなるよ

「よし、それじゃ一緒に登山しないか？」

「……………は？」

呆けたように口を開き、訝しげにこちらを睨んだ。いきなり何を、とでも思っていることであろう。しかし、こちらに言わせてみればこの先に行きたい。でも戦いたくない。そんな状況である。

しかし、こちらが怪しい者として捉えられ、道が阻まれるのならばずっと監視できるような状況を作ってやればいい。

と、簡単には言えるものの、実際それは白狼天狗達の規則に反することになるだろう。任務を放棄するも当然なのだから。その辺りは自分が脅した、とかそう言えばこの白狼天狗の罪は無いだろう。俺の印象は最悪になるが。

「……何が狙いだ」

「いざこざなく山に入ればそれでよし。ほら、俺って平和主義者だから」

「そんなこと初めて聞きましたの」

「ちよ、おま。そこで何故口挟んだし」

禍屢魔の腕の中では白狼天狗の少女が諦めたように頂垂れ、されるがまま。それだけ見ればまるでこちらが人質をとっているように見えてしまうから少し困った。いらんこと言っし。

断られるなら仕方ない。封印結界にでも閉じ込めて先に進めばいい。いくら私だってここまで来て渋々帰るなんて冗談じゃない。

「……いいでしょう。しかし。万が一にも大天狗様方に手を出そうと言うならばこの山の天狗全てが貴方の敵となる」

「相手が出さない限りもこっちも不用意に出さないよ。長生きしてらんだからそれくらい分かる」

逆を言えば相手が出してくるならこちらも出す、ということであるが。もう鬼はいないのだ。今更妖怪の山と敵対するようなことにはなるまい。

それでなんとか納得したか。その白狼天狗もまた諦めたように首を縦に振った。

「 椛ちゃん。もふもふですよ〜」

「 うううううう〜」

「」

後ろから聞こえてくる陽気な声と唸り声には振り向かず、妖怪の山を登り続ける。途中天狗達に怪訝な顔をされながらも共にいる白狼天狗の女性のおかげで難なく登ることが出来ている。烏天狗の姿は目立つ、というより面倒なことになりそうなので元の姿に戻っている。

白狼天狗の少女 姓も含むと犬走椛と言う名らしい は先程から先輩とやらに助けてほしそうに目を向けてくるが、どうも助けてやる気は無いらしい。ただ、無視しているわけではない。意識はしっかりと向けていた。ただ、俺や禍屢魔を警戒しているようで下手に口すら開かないのである。

「 にしても、随分烏天狗の姿が見えないな。何かあったのか？」

この山に立ち入り、不思議なことに未だ烏天狗の姿を見ない。

基本、烏天狗はいつも妖怪の山を飛び回っている。その姿は結界山の天辺からも確認できるほどだ。しかし、今日は朝から一度も見かけない。まるで皆隠れてしまったかのようである。

「……今この山の烏天狗の重鎮達は一箇所に集まり、情報の共有を行っている。また、他の烏天狗にも話を伺っているらしい」

「ほぐれほぐれ。ここはどうですの〜」

「重鎮が集まらなきゃならんほどの異常が起きたのか？ 道理で、こんな半人前まで哨戒に駆り出す訳だ」

「きゃんっ!!」

「その子には特別才があるからだ。状況が状況と言っても子供を無理に働かすような真似はしない」

才、と言っても特別強い揚力は感じない。とするとこの幼さで能力でも持つのか。それは確かに将来有望である。

まあ、その将来有望の白狼天狗は今も妖怪の手によって抱きしめられたままであるが。あいつはこのまま一生離さないつもりでは無いだろうか。してもあれだ、おもいっきり子犬だし。

さて、基本的に組織として機能しているこの妖怪の山において、重鎮が集まってまでする必要のある話とはなんなのか。まあ、大体の予想はついているが。

それにしても

「……禍屢魔。そろそろ離してやれよ。抵抗する事も諦めてひたすら我慢してるぞ。そいつ」

「だって、可愛いんですもの」

「限度があるよ。流石に哀れに見えて居た堪れなくなるわ」

「……こんなにもふもふですのに」

渋々とその体を離し、直後先輩天狗の影に隠れる椀。そこまで嫌だったのか。俺に向けられる目に感謝が籠っているような気がしなくも無い。

それからたまに俺が口を開き、会話をする程度で、妖怪の山の遙か上に辿り着くのにそれほど長い時間はかからなかったような気がする。

「ふむう」

「……舞風。帰りませんか？」

「いやそう言う訳にもいかないだろ」

山の天辺では、なんと言うか、乱闘騒ぎである。

それはもう凄まじいほどに。辺りには多数の烏天狗の姿。皆目を回し、地に伏せている。大多数の天狗すらくなってしまうほどの、一体何が起きたと言うのか。

内輪揉めである、とそれを聞いたときは「え？　なんて？」と思わず聞き返した。組織だろお前らすっかりしろよと心の中で呟いた。

しかし、これでは挨拶どころの話ではない。ちわつす。隣の山の舞風です。お歳暮持って来ました、なんて口が裂けても言える状況ではない。

と、そこで再び一際強い風が吹き、遠くで天狗が飛ぶ。これほどの力を持つ者など、大天狗くらいではないのか。そうでないのならどうして鎮庄にこれほど時間がかかるのか。

当事者の姿は天狗達のに隠れ、見えなかった。

やがて見えたのは　唯一親交のあった烏天狗。

○

○

乾く。意味もなく、心が乾く。

尊敬できる、『誰か』がいた。

目標となった『誰か』がいた。

いや、いたはずだった。そんな確信があった。曖昧な中でもそれだけは何と無く分かった。

絶え間なく続く焦燥感。それは、とても大切なモノであった筈なのに。それが思い出せない。

腹が立った。見えない答えを探し、妖怪の山を回った。烏天狗である自分の目指す存在が烏天狗でない筈が無い。

そう思つて。しかし間違える。勘違いの根源に気付く。

妖怪の山の者では無い、と知る。縛られるのが嫌いだった。古い考えが嫌いだった。妖怪の山という小さな世界ではなく、幻想郷と言う世界に目を向けたかった。

そんな私が、この山の天狗共に憧れなど抱くものか。

答えは見えない。それを出すことには重要なものが欠落している。

でもそれは見つからない。焦燥感は強くなる。

私を今の私に至らせた何者かが。何故顔すら、名すら浮かばないと
言うのか。

心は乾く。心は乾く。ぽつかりと抜け落ちた何かは見つからない。

気付けば私は押し込めた激情を爆発させていた。心が壊れそうなほ

どっ。

”風を操る程度の能力”は大地を刻み、天狗を吹き飛ばす。

激情に抵抗する。答えはここにはない。一度押さえつけられた体に巻きつく物を振りほどき、妖怪の山を出て、そして見つけなければならぬ。

しかし、それを天狗が邪魔をして、焦燥感は一層強くなる。

巻き上がる風は相手を寄せ付けない。だが、同時にこの身の籠と化す。

大天狗が相手でも劣らず、雑魚は風で吹き飛ばす。しかし、やがては劣勢を作り出す。

負けられない。見つけなければ、探しに行かなければ。あの自由な風の名を

やがて、それは目に留まる。白狼天狗に連れられた少年。枯れた心が、疼いた。

「
」

迷わず、私はそれに飛び掛る。何故かと己に問う。その答えもまた無い。

妖怪の山で最速とも謳われる翼のばねはコンマ数秒でその間を埋める。隣の白狼天狗が目を向く。それに縋りつく子供が小さく悲鳴を上げる。一瞬と違わぬその瞬間。

その妖怪は、確かに笑っていたのだ。

「危ないじゃないか。射命丸」

風は強固な壁によって防がれ、その身を貫こうと伸ばした腕は掴まれていた。そして、頭の上から聞こえたその声。

顔も、声も、種族も、そして何を言われたのかも思い出せない誰か。ただ覚えていたのは、それが自分にとって重要であったと言っ焦燥感だけ。

だが、確かに　そう、確かに。

「　あなたが」

心が、それと捉えて離さなかったのだ。確かに。

体から力が消える。焦燥感が失せていく。未だぼやけたままではあるが、確かに答えはそこにあった。そう、確信させる何かがあった。

「それにしても、随分派手に荒らしちまったなあ。お前」

「……え？」

そう言われ、辺りを見回してみれば確かに地獄絵図。立っている者の方が少ない。

未だ警戒を強める大天狗様や天狗達。戸惑う様子もいくらか存在している。しかし、やがて大天狗様が一步踏み出し、少年を威圧する。

「貴様 何者だ」

「何者だ、か。酷く今更な事を言わせるな。大天狗」

「……何？」

その威圧をものともせず、真っ向から受け止めるどころか威圧し返す小さな体。その目には明らかに不愉快だと言っていた。何をそこまで怒っているのか。そんな事を思う。

その妖怪は確かに小さく、妖力も少なく、子供にしか見えない。だが、それをそうとは見せない『何か』があった。

「八雲 舞風。結界山の主。前にそういったのは2000年近く前だったか？」

「八雲 ツ!？」

人間に妖怪の賢者とも呼ばれる八雲紫の姓。その意味は、幻想郷の管理者の関係者。

烏天狗達の少年を見る目に様々な感情が沸いた。

「こほん。此度の事、射命丸文に罪は無い。これは歪みによってもたらされた事象だ」

「歪み……だと？」

「そうだ。ここと人里との間に出来た大地の傷を既に知っているだろう?」

それは、昨日起きた出来事。突如出来たもの。まるで凄まじい威力を持ったものがぶつかって抉れたかのような穴。それは未だにそのままの形で残されている。

私もまた、それが出来た瞬間を目撃したの一人であった。

「アレによって正気を失う者もいくらかいた。よって今こうしてあちこちを回っているところだ」

「待て。この件に八雲紫が関係しているのか？」

「事情を知っているだけで直接の関連は無い。これは異変であり、既に解決されている」

「異変……?」

異変と呼ばれるほどの出来事が起きたのは未だ量の指で数えることができるほどしか無い。それほどの出来事が起きていた。誰にも気付かれないまま。

「出鱈目を言うな!!」

「出鱈目ではない。特殊な結界の内に対処したため誰も知らぬだけだ。現に、影響は出ている」

烏天狗の一人が上げた声に間髪いれず答えた。その姿は堂々としているが、それを異変と言い切るには何分証拠が無い。

いや、そもそもここにいる烏天狗達にとって見れば本当に八雲紫の関係者なのかも怪しいところだ。比較するまでもなく分かる力の差。しかし、

「……では、射命丸文にもう異常は無いのかな?」

「大天狗様!! こんな者を信用するのですか」

驚いたことに、それを口にしたのは山で二、三を争うほどの大天狗。取り巻きの天狗達が驚愕を声で表すが、当の本人は神妙な顔をして

いるが。

「信用している訳ではない。しかし、二百年前、ここを訪れ、鬼と戦った妖怪。それに似ている気がする。不思議と記憶から抜け落ちているがな」

「……見事記憶に残しているとはな。流石大天狗と言える存在か」

舞風さんが小さく呟く。それが聞こえたのは傍にいた私と白狼天狗くらいか。やがて、その顔を笑みに染め、威圧を消した。

「では、異常が無いか少しの間この者をお借りします。調べるだけなのですぐ終わります故」

そして、背に何らかの文様が浮かんだかと思うとその身が大地を離れる。

私も慌ててそれを追いかけた。その場から動こうとしない大天狗様の姿はドンドン小さくなっていく。何か一言くらい残した方がよかったのかもしれない。

○
○

「……ふー」

何とかその場を後にする。結構適当な事を並べまくったが、無事な
んとなかってよかった。正直ダメだと思った。

禍屢魔の槍の跡が重鎮を集めた理由の一つだと言つことは大体予想
がついていた。最近でなくともアレは脅威に値する内容だ。正直あ
れが妖怪の山に直撃しなくてよかった気がする。

まあ、肝心の射命丸の様子についてはさっぱりであるが。こちらに昇ってくるその姿を見てそんなことを思う。

「久しぶり。と言う言い方も、ダメか？」

「あややや……申し訳ありません。どうしても思い出せないのです」「なに、それは仕方ないさ」

そもそもどうして俺を見つけて収まったのかも分からないのだ。いきなり攻撃してくるし。

俺は久しぶりにあつて「腕は衰えていないようだな」なんて言う知り合いを持った覚えは無いのだ。いや、鬼とか言いそうで怖い。

「一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、いいよ」

思いつめた顔をしてこちらを見つめる。その姿は何処か初めて会ったときを思い浮かばせた。

「貴方は、私にとってどんな存在だったのでしょうか」

「……うん。友人？ いや気のいい知り合い？ それとも……」

一番しつくり来るのは友人、なのだが。何故か敬われていたし、人生の先輩とでも言うべきなのだろうか？

「ま、なんにせよ。こうして異常の後には様子を身に来るくらいの関係さ」

「そう、ですか」

目に見えてしよげる姿がいつもの気さくな様子と全く合致しないが、どうしたことが。もしかしたら、中途半端に俺を覚えているのかもしれない。

「さて、山に登るだけで随分時間食っちゃったし、そろそろ帰るかな」

「もうですか？」

「うん。と言う訳だから、大天狗とやらに説明頼むよ」

そう言っつて。下を見下ろす。椀に手を振りながらこちらに向かってくる禍屢魔が見えた。

その姿にやはり肩を竦めながらも結界山に方に

「あ、あのっ！」

向かおうとして、射命丸が呼び止める。聞き返すこともなく、その顔を見つめ返す。その顔は何を言うべきか迷っているように見える。

「そ、その、向こうの山に住んでるんですね？」

「ああ、暇なら遊びに来るといいさ。ま、結構忙しいから外出しているかもしれないけどな」

「必ず行きます。だから、その時教えてください。貴方が私に教えてくれたことを」

「あいよ」

短く了承し、手を振りながらその場から離れていく。禍屢魔が俺に追いつき、並んで飛んでいる間も、その姿が見えなくなるまで射命丸は手を振っていた。

「舞風。聞いてもいいのですか？」

「何を？」

帰り道、唐突に禍屢魔がそう切り出した。速度を緩めることなく、俺は体の向きをそちらへと向け、首を傾げる。

その表情はらしくもなく沈んでいた、まさか椀を飼おうとか言い出すつもりでは無いだろうか？

「今回の、幻想郷の妖怪達から貴方と言う記憶だけが抜け落ちた件について、貴方はどう思いますの？」

「ああ、それか……ま、ちょっと寂しいかな」

違った事に少し安心しつつ、そう返す。それが本音だ。

当たり前が当たり前でなくなると言うことに、何処か寂しさを覚える。それが結構な頻度で出会う射命丸なら尚更であった。忘れられたと言うことにショックだってあるし、正直イラつきもある。

が……

「まあ、それくらいかな」

「どうしてですか？」

「だって、死んじまった訳じゃないからな」

記憶が消えると言うのは、言ってしまうえばゼロになると言う事だ。全て初めから。それならまだ取り返しはつく。

でも死は、終わりだ。死者は何も喋らない。幽々子のような亡霊で

ない限り。だから、死んでしまふよりずっといい。

少なくとも、射命丸の場合は、であるが。

「お前だって、こればかりは故意じゃないもんなあ。そうになると怒るに怒れないだろうが。気にするなどは言わんけど、気にしすぎるなよ。運がいいことに、あの穴近辺で友人はもういないはずだからな」

地底には届かないだろうし、チルノは霧の湖。稗田は生まれ変わって無いし、そもそも忘れられてるか。

「そう、ですの」

その顔は僅かに緩む。それはよかった、しかし、とでも言わんばかりに。結局、記憶云々の罪悪感が残っている訳だ。怒ってはいないのだが。

まあ、いつか晴れるだろう。

またいつか、射命丸と笑い合う姿さえ見ることができたなら。その時は

舞風と天狗（後書き）

今回は忘却異変も終わり、その後の処理の一番初めです。

・ 本当ならもう少し時間を置いたように話を進めたかったのですが・
射命丸にとって舞風は数少ない友人です。尊敬もしてました。同じ
烏天狗ながら鬼と対等に戦える云々とやら。その記憶が消えました
が。

椛。 ようやく出せた椛。 本作の椛はどちらかと言ったら二次過多で
しょう。 だって本編喋らないもん。 一作品だけ喋るのがある、と風
の噂で聞きましたが、あるのですか？

あ、それと椛の先輩の白狼天狗。 あれぶつちやけ一発キャラです。
男か女かすら暈しているという超手抜きぶり。 一様女性。

正直、時間がなくいろいろと無茶な部分が多いですが、そのうち修
正加えたいと思います。 それでは

舞風と竹林（前書き）

速さが足りない！！

そう、一週間くらい前の自分に言ってやりたい。

予定投稿時間がドンドンずれて行くなんで、こんなバカなと叫びたい。

まあなんもかんも自分のせいか……

舞風と竹林

「なあ、俺の友達に慧音と妹紅って奴がいるんだけど、知らない？」

忘却異変より数日、割と意外な人物から懐かしい名を聞いた。

意外な人物とはベリー。人里以外には絶対一人では行きたがらない奴である。そんなベリーが何故二人を知っているのか。

「ああ、いるのか」

この幻想郷に。その口から答えを聞く前にそれを悟った。

確かに、この幻想郷にいる妖怪はこの国にいる全てではない。未だ外で山の大将をするものもいれば人を驚かす事を生業とする妖怪もいるし、恐れられる妖怪もまたいる。

しかし、妹紅は蓬莱人。元人間である。故にしようとするれば人として己を誤魔化すこともできるし、妖怪のように恐れを必要とするとも無い。しかし、やがてはばれてしまえば追いやられる。一箇所に留まることが出来なくなる。

「そうか。あの二人が、ねえ」

「あの二人が言ってた大精霊ってどっかで聞いた覚えあるなあって思ったら、やっぱりそれか」

どうもあの二人が俺を探しているらしい。忘れていたが、俺とあの二人の別れは俺の失踪と言う形で訪れた。多分、恐らく、いや間違いない、妹紅は怒っていることであろう。想像がついた。

まあ、それでも行かない訳にはいかないのだろうが。

「とうちやく」

「相変わらず便利だな。転移結界って」

そう俺の隣で白けた視線を向けるベリーを無視し、目前に存在する

人里の門を見る。自分の背丈の数倍はあるが見上げるほどでもなく、時代を感じる竹作り。

それでも、前回来たときに比べれば随分発展しているようである。前来たのは……稗田の事か。

「それで？ 二人は何処にいるんだ？」

「……来る前に言っただろ。二人とも竹林に暮らしているから正確な場所は把握して無いつて」

「でも人里にいるんだろ？」

「八割のくらいの確率でな」

残りの二割がなんなのか気になるところだが、どうせ個人主観だろう。それでも八割と高確率であるので、まあ恐らくいるだろう。

そんな感じに気楽に考えながら門の前に神風を突き刺す。前はこの剣を持ち込もうとするたび一々止められるので大概山に置いていく様になっていた。今回持ってきたのは、まあ念の為である。

「……そういえばお前、その剣に結界を張ってるんだよな？」

「そりゃ勿論。剣をここに置いていくならどうぞ持って行ってくださいって言ってるようなもんだろ」

「どんな結界を張ってるんだ？」

「とりあえず頑丈に、俺以外が触ったら反応」

「ああ……道理で」

いきなりぶつぶつとよくわからない奴である。うっかりを俺の剣に触ったりでもした事があったのだろうか？ それでも弾かれるくらいのはずだが。

どうでもいいことである。俺は門に向き直り、それを通る。

「やあやあお勤めどうも。一人通りまゝす」

「……おい、頼むからお前変なことだけはするなよ？」

失礼な奴である。俺が一体お前の何千倍生きているか考えてほしいと言っものだ。

しかし、今の言葉だけで警護の兵が怪しい者を見る目で見てきたので、やはり自重は必要かもしれないと思った。

「……にしても」

中はほとんど変わっていない様子である。幻想郷の外に比べて二世代くらい遅れているのではないかと思ってしまうほどに。

まあ、基本的に人間が入ってくることも無いのでそれも当たり前である。この幻想郷は隠れ里であって初めて成立する、歪いびつな世界なのだから。

外に出たいなどと言う人間がいた場合は万が一情報が漏れても困るので、それなりの処理をしているらしい。最も、その処理がどうい

ったものか、聞いてはいないが。

「そうなるよ、やはり外と内とを区切る結界を設けた方が効率的……いやでもそれじゃ入ってくる妖怪が激減するか。いつその事世界の幻想をまとめて持ってこれれば……」

「？ さっきから何ぶつぶつ言ってるんだ？」

おっと、珍しく集中しすぎて自分の世界に入ってしまった。

まあ、それを考えるのは俺ではなく、八雲だろう。結界云々の主流は俺でも考えるのはあいつの担当である訳だし。なにか頼まれればそれをこなせば、とりあえずはいいだろう。

「さて……それで？ 慧音の出没するところは何処だ？」

「よく市場の方を回っているよ。最近は迷惑な妖怪退治とかを受け持つてるから人間から信頼され始めたって」

ふむ……人好きなあの半獣なら在りえそうな事である。人外ではあるが器量もいいし美人。人に好かれる理由も納得できると言うものである。

対する俺は、妖怪とすら認識されていないようであるが。偶にベリ―を見かけ、数秒こちらを見るものがあったりするが、別段恐怖の目で見られることも無い。こいつはよく人里に通っているし、慣れられたのだらう。

まあ、それもいい傾向か……

「あ」

「あら、貴方達は……」

それと遭遇したのは市場に向かう途中。前見たとおり、チエツクの洋服と日傘。それに大きな袋を軽々と持った女性。

言わずもがな、風見幽香である。

「へえ、人里にいることもあるんだな。アンタ」

「それは勿論。必要なものを調達するくらいには。貴方は舞風、だつたかしら？」

「なんだ。とつくに忘れられてると思ったけど」

肩を竦めながらそう言った。実際その通り。こいつが非常にやばい奴だと紫に聞いてからは一応不用意にあの向日葵畑には近寄らないようにしたから。遠くからは見るのだけだ。

そんな事もあって、風見幽香と顔を合わせるのはこれで二度目。それも前が数十年前と言っ域。正直覚えていないと思っていた。

しかし、それを聞くと如何にもおかしそうに笑った。その僅かに歪んだ目がこちらを見据える。

「だって貴方。とある筋では有名ですもの。なんでも、『神隠しの共犯者』、とか？」

「……なにそれ？」

”神隠しの共犯者”なんて、じゃあ主犯は誰　って紫か……外の世界の妖怪やらを説明なく幻想郷に落とすからそんな名前をつけられ……たのは俺か。傍迷惑すぎる。

「人違い……じゃなくて妖怪違いじゃない？」

「そうかしら？　年季の入った無骨な剣とそれに子供。それだけ見れば貴方と同一だと思っのだけど？」

「探せばいるさ。剣を持った子供くらい」

「それと、両腕に腕輪をつけてるらしいわ」

成る程。それは俺しかいないわ。アッハッハ。

さて、どうしよう……

それにしてもコイツ、絶対分かった上で言ってた。間違いない。サドだこいつ。

「まあ、なんでもいいんだけどさ……『四季のフลาวーマスター』に比べたらそれほどでもないし？」

「あら、ご存知だったかしら？」

「嫌でも知るよ。俺なんぞよりずっと有名じゃないか」

『四季のフลาวーマスター』。風見幽香の別称、“花を操る程度の能力”という凡そ戦闘向きとは言えない能力持ちでありながら、その身は正に妖怪と言うほど強靱で強大な妖力を秘めている。

それを聞くだけで並みの妖怪は身を竦めるほどの意味を持つ。幻想郷において頂点の近くに存在するモノ。

今俺の前で不敵な笑みを浮かべているのはそんな化け物。

「そう……でも、そういう割には貴方、動揺しないのね」

「……生憎と、八雲紫級の怪物と接する事も多くてね。慣れちまつたのさ」

なんて、本人が聞けばどう思っのやら。勿論いいことを前提に話しているが。

さて、そろそろ後ろのベリーが限界そうなのでお暇させてもらうことにしよう。

「じゃあな。風見幽香。またいつか四季の花を見せてもらうよ」

「ふふ。その時は貴方の力も見せてもらえると嬉しいわね。舞風？」

結局最後の最後まで笑みを崩さないまま、風見幽香は俺達を横切っていた。当然のように彼女が向かう先の人だかりは割れ、道を為していた。

周りの俺を見る目に少しばかり畏怖が混じってしまった気がするが、この際仕方ない。荒事にならなかつただけ儲けものだろうと頭を掻いた。

「おいベリー。ベリーさん？」

「……そうだった、元を正せばこいつも八雲紫や風見幽香級の人外だつて事を忘れてた。毎日の行動がアレなだけに」

「オイコラ。それってどういう意味だよ」

アレとはなんぞや？ しかし聞くのも面倒且つ仕方がないことなのでため息をついて再び歩き始める。後を慌ててベリーが歩き始めた。

それで、それほど進んだ訳でもないうちにベリーはその足を止め、キョロキョロと周りを見回しはじめる。この辺りなのかと、便乗して俺もまた回りを見回し始める。

「いつもならこちらへんにいるんだけど」

「慧音も妹紅も目立つから簡単に見つかるだろ」

主に髪の色とか服装とか。辺りの人間は純日本人なのかほとんどが黒であるが。

と、ようやく黒以外の色を発見する。なにやら宝塔のような帽子を被った蒼交じりの銀色の髪である。その女性は買い物籠のような物を持ち、肉屋の店主と何事かを話していた。

「おっ、いたいた。ほら行くぞ舞風」

「ちょ、ちよつと待て！ まだ心の準備が　ッ！」

ここでもしも妹紅とエンカウトしようものなら間違いなく腕一本くらい残して焼き尽くされると思う。あいつは俺がそう簡単に死なないって事を知っているし、正直本気でそう思っている。

しかしそんな俺の思いを嘲笑うかのように、女性がこちらに気付く。買い物を終え、たった今こちらを向いたと言う感じである。

初めはベリーの姿を見つけ、こちらに向かって笑顔で手を振るだけであったが、俺の顔を見た瞬間顔が引き締まり、こちらへ向かう方法が『歩む』から『走る』に変化する。

「大精霊ツ！ 大精霊じゃないか！！」

「ああもつはいはいそうです！ でも大精霊って名で呼ばれるのは困るから舞風で頼むよ」

「す、すまない……ってそうじゃない！ どうしてベリーと共にいるんだ？」

鬼気迫ったように俺の肩を掴む慧音。その勢いで思わず口からあうあうと声が漏れる。話を振られたベリーは困ったように頬を書きながら目を逸らした。

「いや、な。実は最近になって俺の山の主、こいつなんだけど、こいつが大精霊だって事が分かってな。こうして連れて来たんだ」

「そうだったのか。おい舞風。お前どうしていきなりいなくなったりしたんだ。あれから暫くの間妹紅の奴がシヨックで動かなくなっただぞツ！！」

「あははは。それはそれは。あいつにも可愛いところがあったのか」「天罰ッ！」

「ぎよへんっ」

肩を掴まれながら振り下ろされた頭。所謂頭突きであるが、詰め過ぎた知識が最早質量とでも化しているのか、凄まじい威力である。俺の頭凹んで無いだろうか？

ベリーもベリーでうわ……、とか言っている。端から見ても凄いのなのだろう。そりゃやられた本人も凄いなと思うほどのだから凄

「……痛いじゃないか」

「むっ。初めは妹紅でさえ気絶したと言うのに、初発で意識を保つとは、流石だな」

「なにがどんな風に流石なのか小一時間問い詰めたいよ」

妹紅の奴、頭が平べったくなくなっていたりしないだろうか？ それはそれで見たく無いんだが、大丈夫……だよな？

「それで、妹紅はどうしたんだ？」

「ああ、最近なにやら趣味でも見つけたのか、よく竹林の奥に行っている。どういふことか服がボロボロになって帰ってくるが……」

妖術の練習でもしているんだろう、と言う慧音に適当に相槌をし、思い出す。そうか。初めて会ってもう900年近く経つのか。

あの頃は、普通の人間だった妹紅は可愛かったのに、どうしてああなってしまったのか。俺のせいかな。南無。

「で、当の本人はやはりいない、と」

人里の視線を振り切り、忘れず突き刺した剣を抜き、竹林の入り口近くに存在する一軒家。それでも二人で暮らす分には十分な広さを持つているその家には、やはり妹紅の姿はなかった。

「そのようだ。今日は遅くならないようにとっておいたのだが……」

「ふむ……それでもいいと。それはそれで妙だな」

今の時間はそう、言うなれば昼時。蓬萊人だつて腹は減るのだから、普通は帰ってくるだろう。

まあ、だからと言って過剰な心配をする訳でもない。飯に遅れる理由なんぞ数えるのが馬鹿らしくなるほど拳がる。

「……なあ、妹紅は竹林の奥に行ってるんだよな？ 他に竹林に住んでる奴はいるのか？」

「少なくとも私は聞いた事が無い。いるのは兎か、妖精くらいのものだ」

「兎……竹林に兎……」

珍しいとは思わないが、あまり聞かないなと思う。ラッキーアイテムうさたん二号の事もあるし、兎への思い入れはそれなりにはあると思っっている。

しかし、何故いきなりベリーはそんな事を言い出したのか。まあ一人で趣味に興じるような奴ではなかったはずだし、誰かと一緒にいると考える方が自然なのかもしれない。場所がここでなければ、だが。

「なんか心当たりでもあるのか？」

「いや……心当たりって言うか、なんて言うか……う、噂なんだけども」

「噂？」

そういった類たぐいに俺は疎い。何故なら俺は基本的に山で過ごすからだ。情報が入ってこないのだから噂なども当然耳に入ることもない。最近聞いた中でも一番新しい噂は『妖怪の山近くの穴』絡みばかりだ。当事者じゃん。

「それがだな、この迷いの竹林の奥地、誰にも知られない場所にさぞ綺麗なお姫様と薬師が兎と一緒に暮らしてるんだと」

「お姫様……薬師……兎？」

なんだかよく分からない組み合わせである。そもそも竹林にお姫様

とか。御伽噺かつ。その噂の元はいつかのチルノ情報並みに当てにならないに違いない。

だが、火のないところに煙が立たないのもまた事実である。その美しい女とやらが魔性の類でないとは言い切れない。まさか女の身で女に引つかかる様な事はないと思うが……

「ま、待ってても仕方ないし、その秘密特訓やらを覗きに行つて鼻で笑おう。いやもうその場で全力で笑おう」

「性質悪いなお前」

「昔からだよ」

「それは知ってる」

「うぐつ、何故貴様らそこで声を揃える」

全くとんでもない奴だ。それを口にするると再び揃つてお前に言われなく無いとされた。鬱だ死のう。

「それで、本当にこっちにいるのかあ？」
「この竹林の奥地がこちらであるだけで妹紅がこちらにいるとは限らない」
「じゃあなんでこっちに來たんだ」
「他に当てが無いからだろう」

男一人に女二人とは思えない会話風景。俺は男だし、ベリーの口調も男勝り。慧音は癖なのかどうなのか、やや硬い言葉を使うから男言葉に聞こえなくも無い。どっちが何を喋っているか偶に分からなくなる。今とか。

結局、当ても無いままに竹林を歩く。空を見上げど深い自然は光で照らす事もなく、かろうじて今がまだ日はあると言うことが分かる程度。時々兎を見かけることはあれど、それ以上の収穫はなし。

「いないなあ……そもそも竹林にいるのか分かったもんじゃないし」
「お前が行こうって言い出したんだろ……」
「アーキコエナイキコエナイ」
「慧音」
「ん。教育的指導っ！」
「もこっ！？」

本日二発目の頭突きは背後から繰り出された。後頭部がずきずきする。勘弁してほしいものである。

あと、慧音の傍で笑っているベリーには後で俺流教育的指導が必要だと確信した。

「つててて……あー、災難だ。普段は痛覚遮断してないから普通に痛いんだぞ？」

「いいことだろ。生物としては」

「そうか？ いやまあそれも真理だけど……痛いものは嫌だろ」

「私達にはそんなものないんだ。人は痛みを受けることで学習することもある。余程の事が無い限りそうしていた方がいい」

「お前は学校の先生かよ……ふおうっ！」

突如足は空を踏むかのように下へと落ちる。いきなりのことに何かなんだか分からないまま視界がぐるぐると回転し、やがて止まると緑の風景が遠ざかっていることに気付く。落とし穴である。

「ちつきしょー！ 誰だこんなところにこんなもん掘りやがった奴は！！ 妹紅か？ 妹紅なのか！？ あの悪ガキがあああああ！！」

「妹紅の生が永遠といえどこんなつまらない物作るわけ無いだろ……」

上から覗いてくるベリーと慧音が呆れたようにこちらを見下ろした。まるで俺が悪いかのような顔だ。

だってまさか落とし穴があるなんて誰も思わないだろ。獣道だぞ？

いや獣道だから掘ったのか？ 狩り？ 俺獲物？

腹を立てながらも反星陣で浮かび上がり、穴から上がる。服が土だらけである。まあすぐに取れるが。

「だったら誰だよ。こんなところに落とし穴なんか作る暇人はさあ……」

「それは私の作った落とし穴だよ」

背後から聞こえた声。体をそちらへ向けてみれば竹やぶの中から何者かが現れる。その姿形は少女のそれ。しかし頭に生えたそれは畳まれてはいたが兎のものであった。

長い時を経て、妖怪化した兎。そう理解する。その子兎はうさうさと意地の悪そうな（？）笑い声をあげながらこちらを見ている。落とし穴に引っかけた俺がそんなに面白いと言うか。

「よし、いい度胸だウサ公。ちょっと俺とオハナシしないか？」

「お断りよ。そんな言葉に騙されるほど兎だって馬鹿じゃない」

「よし。今夜の食事は兎鍋だ。それに決定。やがて来る冬のためにその皮も剥いでやる」

「いたいけな少女から剥ぐなんて、そういう趣味うさ？」

「……おい」

「加えて今夜の食事なんて……いやん」

頬を押さえ、くねくねと体を捻る姿がこれまた小ばかにしているようにしか見えない。

「よしぶっ潰す絶対ぶっ潰すそこ動くな首輪とうさたん二号の板かけて人里のさらし者にしてやる」

「落ち着け！ 相手は兎だぞ！？」

「違う。あれは兎だけど兎じゃない。兎詐欺とかやってる悪徳兎に違いない。俺はそう判断した」

「だから落ち着けと言ってるんだ！ ……ベリー！」

「はいはい……『アウターウィッチ』」

「そヴあつ」

慧音の気だるげな声とベリーの言葉の後、飛び掛かった瞬間に横から吹き飛ばされました。犯人はベリー。間違いない。

地面に叩きつけられる前にふわりと体勢を立て直し、睨む。この場に味方はいなかった。

「くっ、不意打ちなんて汚い。汚すぎるぞ！」

「……なんだろう？ 正論のはずなのに正論に聞こえないなんて」

「舞風だからだろう」

「納得いかねえ……俺の味方は何処いどこに」

俺とベリー達、そして兎とで三角形を作り出す。しかしどちらも向いている方向は俺。どう考えてもおかしい。俺が一体何をしようんだ……

「おや」

と、兎が唐突に別の方向へと気を向ける。しめた！ とその隙を逃さず、俺は大地を踏みしめ、向かって行く。

「ふおおおおおっ！！」

毎度毎度。落とし穴である。穴に恨まれているじゃないかと思うほどの落とし穴の遭遇っぷり。しかも踏み出した大一步なので避ける事等不可。ズゴゴーツ、と真つ逆様に落ちた。

「悪いね。もう少し遊んでたかったけど、時間みたいだから帰るよ。またね」

「ってオイコラ兎！！ ってめ、ちょ、どんだけ落とし穴量産してんだよ！！」

しかし遠ざかっていく声。無理な体勢ながらも反星陣で浮かび上がり、穴の外へと脱出する。上下逆様のままに。

すぐそこで二人が冷めた目で俺を見ていた。正直、辛いです……

「ありゃ慧音。こんなところまで来てたの？」

「っ」

声がした。慧音とベリーの背後。ちょうど俺の死角となる場所に。

その声を忘れるには時間が足りなすぎた。誰かなど、聞くまでもなく理解できる。

故に、理解したその瞬間、俺は頭に結界の力を集めた。なんのためか？ 言うまでも無いだろう。

「ん？ そっちにいるのはだ」

目が合う。直線上でぎりぎり隠れていた顔と顔とが向かい合う。どうも顔が引きつる感覚が抑えられない。体が逆さなのを修正する気にもならない。

ポカン、と呆けた顔をした。そして、その顔のままこちらへ小走りで迫ってくる。

「舞風」

その顔から声が漏れた。しかし走る速度は留まらない。

「や、やあもこ」

「この馬鹿野郎おおおおつ!!」
「うぶんつ!?!」

とび蹴りが腹へと突き刺さった。頭の障壁が全く意味をなさないまま、吹き飛び、顔が地面に擦れたかと思うと運悪くその先にあつた落とし穴に再び真つ逆様に落ちた。

嗚呼、うん。今日は厄日だと思つんだ。俺。

暗い視界の中、引つ張られる足。落とし穴からずぽつ、と抜かれ、視界が反転する。

「今まで何処に行つてたのよっ!! いきなり失踪しやがって!!」
「ああ、うん、はい。ごめん?」
「ごめん? ごめん!? はあ!? いなくなつて何年か分かつてんの!? 400年! 400年だぞコラ!! もう少して顔も忘れるとこだつたわ!!」
「あうあうあう」

だから嫌だつたんだ、と襟を掴まれがくがくとされながら茂つた竹林の下で思う。

如何にも鬼気迫る顔でこちらを睨む。これはどうあつても事情を説明しない限り許されないパターンだと気付いたので、とりあえず言つておくべき事は言つておこうと思つた。

「時に妹紅や」

「何よ!!」

「服が妙にボロボロだが、大丈夫か？」

そう、まるで今まで一戦こなしていたかのように彼女の服はボロボロであった。傷が無いのは蓬萊人だからとして、それはそれにしても乙女として見せてはいけなはずの部分まで見えている。

まあ、それを堂々と見ている俺も俺なのだろうが、別に万年以上生きていく俺にはそういったものに対する興味が薄い。老けたな、と思う要因のひとつでもある。

「~~~~ツ!! この変態っ!!」

「なんでっ!?!」

最後の最後で顔を赤くして胸やらを手で隠した妹紅。いきなり離され対策のないまま再び真下の落とし穴に落ちた。

「なあ、機嫌治せよ」

「嫌よ！ 400年音沙汰無いと思ったらひょっこり現れて、なんで今まで姿を現さなかったのよ」

「いや、だってまさかお前らがここにいるとは思わなかったし……」

妹紅達の家の中。大体の事情は帰り道で説明したが、その怒りは収まらない模様。

よく考えれば偶然が多い擦れ違いだ。ベリーが二人に会ったのも俺と二人で、初めて人里へ来た時だと言うし。あの時は稗田の屋敷に浸っていたからまさか妖怪騒ぎがあったことなど気付きもしなかったが。

「……実際、数百年幻想郷で暮らしておいてようやく会えたんだからなあ。偶然つてのは恐ろしいね」

「俺としては、お前が妹紅と一緒に数百年旅をした仲つてのが一番ビックリだよ」

「あれは成り行きだよ。ああ、あの時の妹紅は素直で可愛かったのに、どうしてこうなってしまったのか」

「アンタのせいよ」

「お前のせいだろ」

「舞風のせいだろ」

「満場一致です。本当にありがとうございます。畜生」

囲炉裏を囲む妹紅とベリー。割りと遠くで夕食の鍋の準備をしている三人から言われる、俺もそう思う。なんだかデジャブ。

「まあ、こうしてまた会えたのも縁だ。今日くらいはゆっくりしていくといい」

やれやれと肩を竦めながら鍋を片手にこちらへ歩いてくる慧音がそれを囲炉裏の自在鉤じざいかぎに掛け、俺達同様に腰を下ろした。

確かに、妹紅が不老不死と言えどこうして同じ幻想郷にいるなんて面白い偶然である。今はこの再会を喜ばしいだろう。

思えばいきなり失踪なんぞして、妹紅には随分と寂しい想いをさせてしまったのかもしれない。あの時点では慧音だって会ったばかりの存在、こうして今も妹紅に付き添ってくれるのだから、妹紅も本当によい友人を得たものだと思う。

「ま、何。居場所さえ分かれば会いにこれるさ。互いに」

「そうだな。今度はお前の山とやらにお邪魔させてもらおう。一瞬なんだろう？ 転移結界とやらは」

「うぐ、そこで俺を頼るか。」

これは後々面倒なことになりそうだ、とため息をつきたくなった。

しかし、変わらぬ友人がいてくれると言うのは、なんともいいものである。そうも思った。

-
-

「ただいま帰ったよ」

そこは屋敷。竹林の中に建つ、静かな楽園。

そこに大手を符って戻ったのは先程の兎の耳を付けた少女。その背には黒い髪的美女がおぶられていた。

その声に反応し、屋敷の各所から現れたのは少女に似た沢山の兎。重い荷物を渡すかのようにそれらに背の美女を渡す。纏っていた美しかったであろう着物は所々に焼け跡のようなモノが残っており、それでも尚その体に傷はなかった。

「お帰りなさい。てゐ。いつもご苦労様」

そんな少女達を出迎えた者達の中で一風強い存在感を放つ女性。赤と青を半々にしたような特徴的な服を着込み、頭にも同じ模様の帽子を被っていた。

「なになに。私は面白いものさえ見ればそれでいいよ。今日だって姫様とあの女が戦ってるところを見張ってたら愉快なやつらが網にかかってくれてね。特別楽しかったから」

「そう……つけられたりはしていない？」

「大丈夫大丈夫。連中も然程こつちを重要視してないみたいだし、秘密にしてるんですよ」

そう言い笑う少女　てゐは悪戯気な笑みを浮かべながら女性を見上げる。それに少しばかり考える様子を見せた後、まあいいかと言わんばかりの顔をした。

「その子の仲間だとすると後々対立することになりそうね。そういった特徴は分かる？」

「そうだね。一人は少し影が薄そうな女。見る限りそれほどでもなさそうだったね。あと一人は最近人里で噂になってる女だと思うよ。兎達の話聞く限りはだけど。最後の一人は、こいつが一番面白くてね、私より少し大きいくらいの男んだけど罾に引っかかる引っかかる。あそこまで引っかかってくれと罾の掛け買いがあるうさ。名前は……まい……まい……」

「ひよとして、舞風かしら？」

「そうそれ！　舞風！　お知り合いだった？」

てゐが首を傾げている事には気を向けず、ただ女性の中に合ったのは『ようやくか』と言つ想いのみ。

知らず知らず、笑みを浮かべる女性。てゐはそれを不思議そうに見た。

竹林の中。屋敷の名は永遠亭。

そこに住まう者の名は

舞風と竹林（後書き）

今回の回は色々な、過去に登場した者達をごちゃ混ぜで登場させた感じですね。初期では幽香の登場の予定はありませんでしたが、ちよんごいって事で。

登校期間が七日から八日変わった。大変だ。どうにか修正したいけどなあ……

明日から金曜まで企業実習、ということまで忙しくなりそうです。そういう意味でも投稿がどうなるのか……結局自分が寝ずに頑張るかどうかですよね。

さて、頑張るか……

舞風と釣り（前書き）

投稿は遅れるばかり。レポートの提出も遅れるばかり。

さて、企業実習無事に終わりました。とある『さ』のつく宅急便です。皆まで言いません。

今日も考えてみると八日で一話投稿になってますね。流石にそろそろ修正したいと思っではいるのですが・・・

舞風と釣り

俺は忙しい。

と言っても責務がある訳でも、特別やらなければならぬことがある訳ではない。では何故忙しいのか？

言ってしまうならば、『遊ぶのに忙しい』。

と、ベリーや紫辺りに聞かれたらまた白けた視線でも送られそうな言葉でもあるが、割と本当の話であつたりする。

先も言ったとおり、俺には特別やるべき事が無い。では普段どうやって過ごしているのか？

答えは簡単。俺は毎日を友人と会うことに費やしている。ただし、友人と言つても毎日同じ奴に会っているわけではない。会うのは毎日違う妖怪。妹紅達、妖精達、地底の皆、射命丸、あと偶に星とナズに。ナズとはナズーリンの愛称である。

一番最近が射命丸だから、間隔的には次はまた妹紅達と、ある意味規則的な生活をしている。

そんな俺であるが、流石にいつも通りに動けるわけではない。結界

山の皆と共にいる時間だつて設けている。最近、特に禍屢魔が我がままで煩い。あいつはウチの周りをペットランドに改築するつもりじゃないだろうか？

そして、今日は珍しく、滅多に頼みごとなどしない彼女が言つものだから……

俺は、妖怪の山の中腹から流れる川に、訪れていた。

「ほう。これは中々……」

大きな、美しい滝があつた。

人の手の入っていない自然、と言うものは今の時代であればそれこそ無数にあるものの、未来においては非常に貴重である。

人は自然を我が物顔で汚し、利用し、自らの行いにも構わず『汚い』などと言う。なんて、元そうであった自分が偉そうな顔で言える事で無いのも確かなのだが。

「そうですね。こんな綺麗な水は霧の湖以外では初めて、かしら？」
「そうだな……結界山の湧き水もここまでじゃないし……」

そう、俺の隣に立つ女性、アキに目を向ける。

今ここにいるのは俺とアキだけ。これはそれなりに珍しいことだ。アキはベリーと一緒にいることが多い。それはベリーが魔法関連でアキに師事を受けていると言う理由がある。故に、二人が時間を違えることは少ない。

しかし、ベリーだって妹紅や慧音と言う友人もいるし、そっちと共に過ごす時間もあつたりする。そんなときはアキが一人で何かしている場合が多い。『何を』かまでは流石に分からないが。

そんなこともあつて、アキがこうして俺に頼みごとをすることは珍しい。まあ、頼んできた内容が……

「……釣り、だっけ？」
「ええ、一度やってみたかったの」

とまあ、そんな理由なのである。アキは数百年を生きてはいるが、

割と常識を知らなかったりする。一緒に旅を始めた頃は突然『塩と砂糖の違い』を尋ねられたのはいい思い出である。返答は一言、舐めれば分かる。」

そんなことを言い出す彼女に初めは料理を任せることが非常に心配だったりしたものの、今となっては完璧である。器用なので初めは不得手でも練習すれば大概の事は上手くなるのだからちょっと嫉妬する。

「……………それじゃ、まずは餌と竿の方をどうにかするか」

「貴方が持つてるんじゃないんですか？」

「え？」

「え？」

いきなりそんな事を真顔で言われるものだからつい返答に困ってしまった。確かに、あるにはある。しかしそれは俺専用の一本。こうすればいいんじゃない？ と言う試行錯誤でいろんなものを付けまくったので最早釣竿の原型を残していない曰く物である。

そんなものを初めて釣りを体験する者に使われては間違いなく釣りが誤解されてしまう。故に持ってこなかったのだが…………

「あ、ああ。悪いな。ついこの前使った時壊れてな。新しいのを作ろうと思ったのさ」

「……………そう」

少しばかり残念そうにアキの顔が歪んだ。しかし何処か疑っているように見えて仕方ない。

まあ無いものは無いのだ。それに、凝ったりしない限り作るのは簡単であるし、我慢してもらおうとしよう。

「じゃ、早速材料集めだな。ちょうどいい枝があればいい
舞風」

と、言葉を言いかけた状態でアキに声をかけられる。その声色がやや真剣みを帯びていたこともあり、すぐにその顔を見る。彼女の目は俺の背後を向いていた。

俺も習ってそちらを向いてみたが、特に変なところは無い。茂った草があるくらいで。

いや、あった。不自然に倒れた草。一部分だけがそう、何かに押しつぶされているようである。まるで透明な何かがあるかのようである。

ふむ、と首を捻らせる。まあ何かがいるとしてもそこに何かの気配を感じることは勿論、妖気の残痕もない。別段危惧する存在でも無いだろう。

そんなことよりも、と俺はアキに向き直って　　いない。なんだかデジャブを感じるのだが。

「　　こんなところで何してるのかしら？」

「　　ひゅいつー!!」

やはりか、と再び不自然な方へと向き直る。そこでは頭を抱えたままがくがくぶるぶる少女とその背後に立つアキがいた。

アキも可愛いものが好きである。禍屢魔ほど病的ではないが、それでも見かけたら頭を撫でる位には好きだ。そんな彼女だからこういった者には敏感なのだろ。最も、姿は見えないはずなのだから、霧囲気で察したとか。

「あ、あわわわーっ!!」

「おい、アキ。怖がられてるぞ」

「どうしてでしょう？　私何かしました？」

そりゃあ後ろから突然声をかけられたらびびる。しかもたった数秒前まで監視していた存在が、だ。それを知ってか知らずか、当然のように首を傾げるのだから困ったものだろう。

ただでさえアキの力は大妖の域なのだ。そんなモノは普通見かけただけで恐れる。

そんな訳で、必死にこちらへと後ずさってくる少女にはなにやら同情のようなモノを禁じえない訳だ。

「あんまり怖がらせるなよ。ここら一帯は一応妖怪の山って扱いになってるんだからさ」

「ひっ！ に、人間!？」

「あん？」

俺の方へ振り向くとそう言っただけで今度はアキの方に後ずさっていく。ほほう、俺が人間に見えるか。そうか。

確かに姿形は人間そのものだし、妖力は体外に感知が難しい程しか漏れていない。故に勘違いされるのは慣れていいる。あくまで人里では、だが。

この少女、妖怪ではあるが未だ生まれて浅いのだろう。妙にポケットの多い、レインコートのような衣服。種族はいまいち分かりにくい……

「お前、河童か？」

「!?!」

その反応でやはりか、と嘆息する。

『河童』と言えば日本の中で天狗に並ぶほど知名度のある妖怪である。頭に皿があり、その体は緑色。水かきがあつて、人を川に引きずり込む妖怪、と伝えられている。

が、実際はその真逆と言っても変わり無い。頭に皿なんぞないし、

体だつて一見人と違わぬ肌の色。水かきなんてなければ川に引きずり込めそうなほどの筋力があるようには見えない。尻子玉云々の話については分からないが、それだつてどうだか。

「河童つて、頭にお皿があるんじゃないの？」

「俺の知ってる河童に皿はなかったよ」

自ら河童を自称する友人はいた。そいつだつて俺と何一つ変わらぬ人型で、何故か無駄に臆病であつた。懐かしい記憶である。

まあ単に身につけている帽子とリュックで皿と甲羅が見えないだけなのかもしれないが。

「さて……どうするべきか……」

「あ、あのっ!!」

「え?」

少女はいきなり地べたに正座をし、アキを真つ直ぐに見つめる。真面目な、しかし赤い顔で少女は叫んだ。

「弟子にしてくださいっ!!」

「……はあっ」

言葉が見つからなくなったのは仕方のないことである。

「 え？ 人間じゃなかったの！？ 」

「 ああ、残念ながらな 」

そんなあ、と河童少女 名は河城にとりと言つらしい は目に
見えて落胆した。

確かに、妖怪に人間と勘違いされるのは今に始まったことではない
が、それに僅かながらも罪悪感が沸いたりしたのは初めてである。

「 俺が人間じゃ無いと不都合でもあるのか？ 」

「 いやあ、出来ればその方に人間と仲良くなる方法を教えてもら
おうかなあ、なんて思ったり 」

照れ隠しのように頭を掻いたまま、その目はアキを向いていた。流石の彼女もそれには困ったように笑った。

河童は臆病であるが、他の妖怪に比べ好奇心が強く、また他者と関わりを持ちたがる。加えてやけに人の発明品に手を出したがったりする。それは全体的に手が器用な河童の数少ない趣味なのかもしれないが。

「ふうん……別に人里に行つたところで避けられるようなことにはならないと思うがなあ」

「へえ、人里に行つたことあるの?」

「まあ、割と最近」

ほんの数日前だ。自分にしてみれば珍しくも無いことなのだが。

まあそれも目の前の河童にしてみればそうでもないらしく、その目は先程の輝きを取り戻し、膝を折っているにも関わらずしゃしゃかとかと驚くべきスピードでこちらに迫ってきた。

「人里ってどんなところ!? 人里ってどのくらい人がいるの!?

人里ってどれくらい広いの!？」

「おい、少しは落ち着け」

「人里ってどんなもの売ってるの!？ 人里って何が美味しいの!

? 人里って」

ダメだこいつ。はやくなんとかしないと……

そう思つて俺はその肩をがしつとつかみ、少女を真つ向から見る。その俺の様子に何かを感じ取ったか、いきなり顔を赤くしてはたばたとし始めた。しかし、逃がさない。目と目が合ったのでにっこりと笑つてみる。

「慧音直伝『教育的指導』っ!!」
「ひゅっ!!」

そのまま頭を振り下ろす。流石に慧音ほどで無い上に自分にもダメージが来るが、この河童にも大層効いたらしい。流石慧音。歴史の詰まった頭は伊達ではなかった訳だな。俺にもいるんなものが詰まつてるはずなんだけど……

ぐるぐると目を回す少女をアキに任せ、とりあえず釣り竿の道具を探し始めた。

「あたたた……酷いじゃないか師匠」

「誰が師匠かと」

そこらへんの丈夫そうな枝を拾い終え、削っている頃にようやく目を覚ました河童は開口一番そんなことを口にした。お前が弟子入りしたのはアキであって俺では無いだろうが。

「そんなこと言わないでさ。なんか師匠って人間っぽいよね」

「話を聞けよ。そしてどこがと聞き返したいね」

「うん？ そりゃ言動とか雰囲気とか」

前者は全く当てになら無いだろうが。俺以上に人間っぽい喋り方を
する妖怪なんて腐るほどいる。まあ、後者に関しては少し首を傾げ
たが。

「それは私も思いますよ」

「ですよね？ ですよね？」

「なんでそこで混じってくるんだ……」

両手を合わせながらにこやかにそつ口にするアキ。

そこまで俺は人間っぽいだろうか？ はるか昔に比べれば随分人外
に染まっていると思うているのだが……

「それで、河童。お前さつきはなんで隠れてたんだ？」

「河城にとり！一度名乗ったじゃないか。それに隠れてたんじゃなくて見えなくなっただけさ」

「……見えなくなっただけ？」

はて、それはどういうことか。そんな能力を持った河童なのか。しかし能力持ちの河童か……

そんなことを考えていると河城はなにやらヒラヒラとした一枚の布を取り出した。非常に薄い、しかしそれ一枚で少女の体を覆える大きな布である。色が服と同じ色なのはどういうことか。

怪訝そうにそれを見る俺に自慢げに掲げると、徐にそれを被った。そんなことをしても水色の丸い何かにはしか見えない。

「……よし、それでこれをこう、それをこうしてっ」と

「？」

何事かをぶつぶつ呟いている少女に声をかけようと思ったが、それは止まる。眼前では少しずつ少女の体が消えていた。やがて、声をかけることも忘れたまま、少女の姿は消えていた。

「ふふふ、どうだい？これが河童の発明品。透明布さ。試作品だけだね」

「あらあら……」

「！　おいおい……ここは幻想郷だぞ」

何も無いはずの場所から聞こえた声は確かにあの河童の声だった。ためにそこに手を伸ばしてみると、なるほど、布生地 of 柔らかい感触が手に当たる。加えて触れた部分が妙に変色する。これでは体を動かせば色が浮き出してしまうだろう。

まあそれでも何も無い場所に何かがあると云うのはとても妙な感覚であって、思わずそれを手でなぞって見る。

「　　うわわっ！　ど、何処触ってるのさ……！」

「ん、何処触ったんだ？」

焦るような声が聞こえたが、何分見えないのでそんな事を言われても困る。

あわあわと声を漏らしながら目前で妙な色に発光する。やがてそれを取り払ったときは顔を真っ赤にして詰め寄ってきた。

「何するんだよ！　それでも妖怪か！」

「いや妖怪ですけども」

「そよ舞風ちゃん」

「そうだそうだ」

「あたかも当然のように便乗してくるんじゃない」

それに、寧ろ妖怪って言葉だけで聞けば非常に悪いように聞こえるのは、人間としての先入観だろう。

河城だけならまだしもアキも混ざって女の子の扱いは云々かんぬんなどと言われては流石に折れるしかなく、素直に謝ると二人はハイタッチした。どういうことだ。

「時に河城」

「にとりでいって。何？」

「なんで俺はそんな口調なのにアキに対しては敬語なんだ？」

何を当たり前のことを、とでも言うかのように首を傾げた。何と無くそんな感じの勘違いをされている事は想定していたが、ここまでいつも通りだのため息でもつきたくなる。

「いや、だってどう見てもこの人は大妖怪じゃん。でも師匠はどうみても妖精レベルだし」

「……さいですか」

結局ため息を漏らす。

半ば自分のせいな為、怒るに怒れないのが現状なのである。

「ふうん。釣り、ね」

「そういうことだから、人間の事を教えるのはまた今度な」

「いやいや。釣りをしながらでも話は出来るでしょ？」

「……はあ」

枝を削って、人里で買った糸を括りつけ、適当な団子でも括りつければまあ簡単。非常に簡易的な釣竿を作り上げてみればどういうわけか並んで釣りをするようなことになってしまった。俺も太公望を自称するほど釣りが好きでもない為、正直片手間である。

そんな片手間の更に片手間に少女の相手をする事になってしまった。釣りに行きたいと言いだした本人も釣りよりこっちに興味があるらしい。最も、すぐに離れていったが。アキは人と友好的ではあるが人里に行くことが稀ならしい。理由は知らない。

「じゃあ、人里ってどれくらいの人がいるの？」

「そうだな。ざっと三、四百人くらいじゃないか？ 数えたことないけど」

「へえ〜。思つてたより多いんだ」

「幻想郷の妖怪に比べれば少ないほうだろう。森だけでも数百はいらるだろうし、妖怪の山だつて天狗全部でどれほどになるか……」

妖怪の山、いるのは主に烏天狗に白狼天狗であるが、この少女、河童も一応はこの妖怪の山の一員と考えるべきか。この川も妖怪の山に入るのか定かでないが。

白狼天狗はともかく、妖怪の山の上層を束ねる烏天狗の数はそう多くない。その中で更に力を持つ者となると数人しかいないだろう。若輩ながら、射命丸もその一人であつたはずだ。

「まあ、人は何もせずとも増えていくだろうよ。そんな生き物だ」

「そうかなあ？」

「そうだよ。ただでさえ紫、妖怪の賢者が外の方から誘いざなつてるからな」

主に霊力のない人間を、であるが。

力を持った人間を呼び込んだりして、最悪人里で争うなんて事になつても困るからな。

「ふうん。それはそれとしてさ、人間つてどう？ 話してて面白い？」

「……あのなあ。人間つて言つても一人一人違うんだし、面白いのもいれば面白くないのもいるのは当然だろうが」

「じゃあいたんだ。どんな人？」

「さて、妙に天真爛漫だったことは覚えてるよ」

そう、稗田を思い出しながら言う。その含みの言い方で気付いたのか、河童は声を漏らしながら気まずそうに目を逸らした。

人間とはなんとも寿命の短いものだから。なんて、今こうして妖怪やって言えることなんだろうと目を閉じる。思えば妙な因果である。考えるのも面倒になるほど昔に生まれ、今こうして隣の少女と話しているなどと。確率だけで言えば奇跡に近いのではないだろうか？

「ま、人間に近付きたい理由も分からなくは無いけどよ。付き合える時間も、いざって時の覚悟を決める時間までも決めるのが短いから困る」

そう言って、話を切り上げる。なんとも気まずい空気となってしまう。視界の端ではアキが嬉しそうに魚をフィッシングしている。どういふことだ。

今日は楽しく釣りをしに来た訳であって、こういふのはまた別でいいのだ。そんなことを思いながら、とりあえず気にするなとか言いながら頭でも撫でようかと手を伸ばす。

と、

「にとりに手を出すなあああっ!!」
「どぶっ!!」

聞こえた雄たけびのような声。横っ腹に突き刺さる鋭い蹴り。すぐそばの川へと吹き飛ぶ俺。その瞬間がまるで走馬灯のように短くも感じたが、結局俺はあたかも日常の一コマであるかのように大きな音を立てて落下したのであった。

最近の俺って、運悪いよな？

しみじみとそう思った。

「
すいませんでしたあああああっ!!」

そんな言葉を体の水を払いながら聞く。眼下には土下座する白狼天狗がいた。川から上がってみれば既にそんな状況であった訳で、やや困惑したがその隣で引きつった笑みをする川城を見て納得した。

と言っても、どうもその白狼天狗見覚えがある。しかし顔が見えないので完全に思い出せない。誰だっけ？ と思いながら首をかしげていると恐る恐る顔を上げた。目と目が合う。

「……おお！ 犬走か！」

「えっ？ どうして私の名前……ああっ……！」

突然奇声を上げて俺の顔を指差す。とりあえずその頭をごとと叩いてそれを辞めさせる。いきなり人を指差すのは失礼である。

その少女は先日、俺と禍屢魔で妖怪の山に行った際出会った白狼天狗の犬走であった。流石に印象に残っており、容易に思い出せた。

「なになに？ 椀って師匠の知り合い？」

「知り合いつて言うより、この前いきなり妖怪の山に来て烏天狗様達に会っていったんだよ。この人と……もう……一人……」

そこまで言うと犬走は顔をさっと青く染め、拳動不審に周りを見回し始めた。

川城はそれを不思議そうにみているが、俺には分かる。これは半人前ながらに必死に警戒している。身近な危険に対して。

「舞風ちゃん。糸が切れ」

「うわああああああああん!!」

「え？」

現れたのはアキ。しかしその場所が犬走立ちの背後と言つ最悪のポジション。その小さな尻尾を丸めたまま、俺の背中へと張り付いた。お前が隠れる場所はそこじゃないだろう。

声をかけたらいきなりビクリされたアキはあらあらと口に手を当てたままおかしそうに笑った。

「ほらほら落ち着けて。あいつは来てないよ」

「うう、本当に？」

「本当にっ。白狼天狗だったらもつとしゃきつとしろしゃきつと」

「で、でも……」

子供である。と言うことも加えて考えても大分臆病な気がする。まあ、事情の一端が自分にあると考えると見捨てられないのが悲しいところである。

「あら。可愛い子ですね。子犬ちゃん？」

「白狼天狗だって。禍屢魔が容赦なく弄り回したせいちょっとトラ

ウマ抱えたっばい」

「大変ね」

「……ああ、本当に」

そう、未だに離れてくれない犬走を見ながら思う。川に落とされたことはすっかり有耶無耶になってしまった。

「そう言えば川城。こいつお前の友達なのか？」

「そうだよ。私の数少ない遊び友達」

「ふうん。人を川に蹴り落とすのはどうかと思うけど、中々良い奴なんじゃない？」

「あはは、まあね。悪気があった訳じゃないから許してあげると助かるんだけど」

「ん、別に怒ることでも無いさ」

前なんか悪戯兎に落とし穴蓮落ちさせられたが、あれくらい悪意が無い限りは怒っても仕方が無いだろう。それに、友達を助けるための勘違いとか言われたら正直怒るに怒れない。

「それで、アキはどうかしたのか？」

「釣竿の糸が食いちぎられちゃったみたいで。どうにかありません？」

「あいよ。すぐ直す」

困ったように笑うアキから竿を受け取ってみると確かに糸が切れて

いた。竿のすぐそこで。どう見ても食いちぎられたようには見えな
いのだが……まあよしとしよう。

「……釣り？ 釣りやってるの？」

「まあな。俺としては魚取るだけだったら水の底に結界でも張って
そのまま持ち上げたいくらいだが……」

「舞風ちゃん？」

「とか言う人が気分を害すらしいので、仕方なくこうしている
訳だ」

まあ面倒も何も、獲れなければ獲れないで俺は構わないのだ。無理
して食わねばならない体ではないし

。一応同居人や友人に習って食っているだけだ。

そんなことを言ってやったわけだが、どういうわけか犬走の縮こま
っていた尻尾が小さく揺れていた。そして、その視線は真っ直ぐに
こちら 釣竿を向いていた。

「……なんだ？」

「ふえ？ い、いやっ、なんでもないです、よっ？」

「なんだそりゃ……」

釣りをやってみたいと言っならそうといえは言い。もしくは腹が減
っているのか。どちらにしたって口に出さなければ分からないでは
ないか。

糸の先端に団子をつければはい完成。それをアキに手渡す。視線がそっちへ着いて行く。思わずため息をついて、地面に転がした釣竿を犬走に差し出してみた。尻尾の動きが激しくなる。

はて、犬が喜ぶと尻尾を振る話は常識だが、狼もそうだったのか……まあ似てるし同じなのか。

「ほら、やりたきゃやれ。やり方分かるか？」

「……！ うん……！」

やはり、子供は無邪気なうちが一番可愛いものである。尻尾をパタパタと振るわせる犬走を見ながらそう再確認した。

成果は上々。アキにしても犬走にしても飽きることなく釣り続け、いつのまにか日は西へと下り始めていた。

やはり子供か。川城は水遊びするし、犬走は釣れかかった魚を獲るために川に飛び込むし、久々に子供と戯れるような事をした気がする。やはり自分は何かと考えるよりその場で考えて遊ぶ方があっていいのかもしれない。

結局、疲れて眠ってしまった二人はアキの膝の上で眠っている。そんな姿を見ると、俺は背を向けてせつせと焚き火の準備を始めた。釣った内のいくらかは子供達のものだし、勝手に持ち帰るわけにもいくまい。

「…………ふう、こんなもんか」

適当に枝を重ね、それに火をつける。微量ながら存在する魔力では指先からちろつと火を出すくらいしか出来ないが、種火としては上等だ。

と思ったのだが湿った枝に中々火はついてくれない。なるべく乾いた奴を持ってきたつもりだったのだが、となんとか火であぶり続けていた。

と、アキのほうからどう聞いても呆れたため息にしか聞こえないものの届き、ムツとして振り向くと俺の頬を火の玉が掠めていた。それはポトリと枝の上に落ち、静かに、しかし強く燃やし始める。

「…………最初からそうしてくれればよかったのにさ」

「生憎ですけど、今の私は動けないのよ」

そりゃあ二人も膝枕してればそうなるだろうが。そんなことを心中で思いながらその顔を見てみると、優しげに微笑みながら二人の寝顔を見つめていた。

その様はまるで母のような、もしくは聖女か何かか。そう錯覚するほどに安らかな表情。だが、それも僅かに疲れているように見える。しばらく、ぱちぱちと炎が燃える音だけが響いていた。

「舞風ちゃん」

「なんだ？」

串に魚を刺しながら見もせず聞き返した。日は先程よりも少し落ちた。

「私、今幸せよ」

「そうか」

つい手が止まったが、それだけ言って再び手を動かした。

背後からはクスクスと笑い声が聞こえた。

「多分、こうなることをあの時の私は思ってもなかった。今でも不

思議な感覚に囚われる事があるんです。まるで今この時が夢であるかのように」

「現実さ。それじゃ俺までお前の夢って事になるだろう？」

「それもそうですね。だからこれは現実。幻想郷と言う不思議な世界で、幸せに暮らす。そんな現実」

現実と言う部分を夢に変換しているかのような物言い。思わずそちらを向いてみたが、そこには子供達の髪を優しく撫でるアキがいるだけだった。

「貴方がいるから、今の私がある。だから、怖くなるの。もしも貴方がいなくなったら私はどうなっていたのかって、考えると怖くなるの」

「それが全て。もしもはない。それは過去だ。だから、俺はここにいるんだ。違うか？」

「そうですね。分かってはいるのです。分かっては、でも、夢に見るの」

アキの表情が強張った。救いを求めるかのようにこちらを見た。

「落ちて、落ちて、ひたすら落ちて。そこにいるあの子が言うの。苦しい。助けて。なんでお前だけ、って」

「悪い夢だ」

「ええ、分かってはいるの。所詮夢だった。でも、思っの。ただ苦しくともあの子の傍にいたべきじゃなかったのかって」

「そんなこと、ない」

そう、否定する。真っ直ぐ否定する。これは肯定してはいけない。曖昧に濁して良い場所でもない。

ただ、アキの目を真っ直ぐに見て、そう言い切ってみせる。

「……そうね。弱気になっちゃったみたい。ごめんなさいね舞風ちゃん」

「分かったならいいさ。昔を思い出したのか？」

「この子達を見て、ね。でももう大丈夫」

そう、アキは先程までの笑みを取り戻して言う。

それを見て、俺は再び作業へと戻った。串を焚き火の傍に突き刺し、焼けるのを待つ。

アキは、アキは

「なあ、アキ？」

「なあに？」

「いや、なんでもない」

背を向けたままそうして言葉を濁して会話を終わらせる。聞くような内容でもなかった。

と、今の会話で目を覚ましたか、呻き声のようなものが耳に届いた。
まあちよつとよいくらいである。

俺は炎に枝を投げながらそう思った。

空には薄く、満月が浮かんでいる。

舞風と釣り（後書き）

にとりと椋って子供って印象があります。まあ二次の影響でしょうが。

そういうこともあって、一応二人の子供時代、馴れ初めは1700年近い頃。と言うことにしました。三百歳って妖怪だとまだ子供、ですよ？

俺は19歳ですが。どうでもいい？ さいですか・・・

アキの正体は未だはつきりとしなймаま。この際もう出さなくてもいいかな？ なんて思い始めたり。それもまずいか。

それなりに予測を立て、実際は云々なんて考えてもらえれば良いな。一応言っておきますが、実際にいて実際にいない存在です。訳分からんな。

さて、次の更新は火曜日になってしまうのか。やだなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360s/>

東方大精霊

2011年11月21日20時10分発行